

ラブライブ！サンシャイン！！～陽光に寄り添う二等星～

マーケン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そんな大それた悩みではない。誰にだって青春時代の取り返しのつかない後悔の一つくらいあるだろう？それと同じ。

そんな私の逃げた先に居たのは果たして罪を白日の下にさらす灼熱の陽光か、はたまた包み込むあたかな陽光か。

(ラブライブ！サンシャイン!!劇場版含む範囲の物語)

目次

第一話	1
第二話	7
第三話	13
第四話	18
第五話	20
第六話	24
第七話	27
第八話	31
第九話	35
第十話	38
第十一話	42
第十二話	45
第十三話	49
第十四話	53
第十五話	55
第十六話	58
第十七話	62
第十八話	67
第十九話	70
第二十話	74
第二十一話	80
第二十二話	84
第二十三話	87
第二十四話	91

第四十八話	195
第四十七話	191
第四十六話	186
第四十五話	182
第四十四話	178
第四十三話	173
第四十二話	170
第四十一話	166
第四十話	162
番外編くそれは仄かなバレンタインく	157
第三十九話	154
第三十八話	151
第三十七話	147
第三十六話	144
第三十五話	139
第三十四話	135
第三十三話	133
第三十二話	128
第三十一話	121
第三十話	117
第二十九話	113
第二十八話	109
第二十七話	104
第二十六話	99
第二十五話	96

第七十三話	285
第七十二話	282
第七十一話	279
第七十話	275
第六十九話	271
第六十八話	268
第六十七話	264
第六十六話	261
第六十五話	258
第六十四話	254
第六十三話	250
第六十二話	246
第六十一話	243
第六十話	239
第五十九話	236
第五十八話	232
第五十七話	229
第五十六話	225
第五十五話	222
第五十四話	218
第五十三話	214
第五十二話	210
第五十一話	206
第五十話	203
第四十九話	199

第九十八話	379
第九十七話	374
第九十六話	371
第九十五話	367
第九十四話	363
第九十三話	359
第九十二話	356
第九十一話	351
第九十話	348
第八十九話	345
第八十八話	341
第八十七話	337
第八十六話	333
第八十五話	329
第八十四話	326
第八十三話	321
第八十二話	318
第八十一話	314
第八十話	311
第七十九話	307
第七十八話	304
第七十七話	301
第七十六話	297
第七十五話	293
第七十四話	289

第九十九話	383
第一百話	387
第一百一話	390
第一百二話	395
第一百三話	398
第一百四話	402
第一百五話	406
第一百六話	410
第一百七話	413
第一百八話	417
第一百九話	421
第一百十話	426
第一百十一話	431
第一百十二話	435
第一百十三話	439
第一百十四話	442
第一百十五話	446
第一百十六話	450
第一百十七話	453
第一百十八話	457
第一百十九話	465
第一百二十話	472
第一百二十一話	477
第一百二十二話	481
第一百二十三話	484

第四百四十八話	第四百四十七話	第四百四十六話	第四百四十五話	第四百四十四話	第四百四十三話	第四百四十二話	第四百四十一話	第四百四十話	第三百三十九話	第三百三十八話	第三百三十七話	第三百三十六話	第三百三十五話	第三百三十四話	第三百三十三話	第三百三十二話	第三百三十一話	第三百三十話	第三百二十九話	第三百二十八話	第三百二十七話	第三百二十六話	第三百二十五話	第三百二十四話
602	597	593	588	583	579	575	571	566	561	554	550	547	543	540	534	529	523	516	513	508	503	499	495	488

第七十三話	第七十二話	第七十一話	第七十話	第六十九話	第六十八話	第六十七話	第六十六話	第六十五話	第六十四話	第六十三話	第六十二話	第六十一話	第六十話	第五十九話	第五十八話	第五十七話	第五十六話	第五十五話	第五十四話	第五十三話	第五十二話	第五十一話	第五十話	第四十九話
724	720	715	708	702	697	691	684	681	677	672	668	662	657	653	649	645	642	636	631	627	623	617	611	606

第七百七十四話
第七百七十五話
第七百七十六話
第七百七十七話
第七百七十八話
第七百七十九話
第八百八十話
第八百八十一話
第八百八十二話
第八百八十三話
第八百八十四話
第八百八十五話
第八百八十六話
第八百八十七話
第八百八十八話
第八百八十九話
第八百九十話
第八百九十一話
第八百九十二話
第八百九十三話
第八百九十四話
第八百九十五話
第八百九十六話
第八百九十七話
第八百九十八話

825 821 817 814 810 806 802 797 791 787 783 779 775 771 767 763 759 754 750 746 742 738 734 731 728

あとがき	859
第二百四話	855
第二百三話	850
第二百二話	846
第二百一話	841
第二百話	838
第一百九十九話	830

第一話

唐突だが運命という言葉はどう思う？意味の説明をするならば定められた事柄、決まり事、とも言い換えられる。

響きは非常に格好いいと思う。私も言葉の響きは好きだ。だけでも、その言葉の意味を考えると私はいつも考えてしまうのだ。定められた事柄、決まり事、ならばそこに自由は無いのではないか？

例えばだがこの感覚を数式的に考えてみると、

$$X \parallel Y + a \times 0$$

X（結果）へ導くY（定められた事柄）があり、a（その他のこと）が幾らあろうとも意味を成さないのではないかと私は考えてしまうのだ。

この事を人に言ったら思春期特有の病と笑うかもしれない。それでも私はそう思うからこそ本当に大切な事柄と出会った時は運命という言葉を使わない。では何なのかと問われれば私はこう答える。偶然だと。

だから私が彼女達と関わることとなったのも偶然、と私は言う。

長い坂道を履き慣れないローファーで踏破する頃には背中にはじんわりと汗が染み出していた。

四月といってもこの町は暖かい。先月引越してきてからこのかた、私は寒いと感じたことが無い。

静岡県沼津市。その中の小さな町、内浦。それが私、黒松こくしょう 星あかりの住むこととなった町の名だ。

それ程メジャーな街ではない。分類するならば田舎だろうが、埼玉県北部から引越してきた私にはそれ程のイメージギャップは無かった。

だが坂の上に学校があるなど流石にたまったものではない。坂の

上にあるのは雲だけで十分だ。そうであれば坂を上る理由が無くなってありがたいというものだ。

とにかくそんな苦勞をしなければ登校できないこの場所。入試のために初めて来校した時には疲れもあったし、今後三年間の学生生活に対し絶望感しか抱けずマークシートにボールペンで解答してしまったほどだ。我ながらなぜ合格出来たのか不思議でしょうがない。

とにかく私は本日、此処、浦の星女学院へと入学することと相成ったのである。

校門の程近くに植えられている桜の下を潜ると私と同じく新入生らしき人がちらほらと見える。ちらほらなのは入学生が少ないことが理由だ。この高校は全校生徒合わせても100人に満たない数しかない。だから人はどう足掻いてもちらほらという形容が合う程度の人数にしかない。

ただ、少ないことに新入生が嘆かないようにするためなのか、入学式の前なのに在校生が部活勧誘を元気良く行っており、人数の少なさを補う活気がそこにはあった。

引越してきた時から思っていたが、この町の人は皆とても人当たりが良く、温かい。田舎特有の閉鎖的、排他的な感じはしないのは魅力である。

新入生の中には部活勧誘の先輩と「久し振り」などと楽しそうに話している人も居る。きっと中学時代の知り合いなのだろう。そんな姿を見ると引越してきた私にはちよつとした寂しさと、誰も知り合いが居ないことにほんの少しの安心感を感じている。

「スクールアイドルやりませんかー」

賑わいを避けるよう、真っ直ぐ下駄箱に向かおうとした私は、ふと耳に入った声に惹かれ、その声の主を探した。

校門の横にはミカンが入れられていたであろう段ボールで作った

演台の上で一人の活発そうな女子生徒が頭に鉢巻きをして元気に勧誘をしていた。

この学校は首のリボンの色で学年が識別できるようになっており、その人のリボンはピンク色だったから2年生なのだろう。

その2年生の先輩は恥じることや躊躇いもなく元気に勧誘しているが、残念なことに見向きもされないのが現状である。

その鉢巻きの先輩と一緒にになってビラを配っている子も一人いるが、成果のほどは芳しくないようだ。

「スクールアイドル、か……」

私は思わず呻くように呟いた。

スクールアイドルとは主に歌とダンスをメインとした女子高生パフォーマンスの総称として世間に浸透し、今では“ラブライブ”と呼ばれる全国大会まで開催される一大コンテンツだ。

まさかこの100名にも満たない生徒数の浦の星女学院でその名を聴くことになるとは思いもよらなかった。

まあ今の私とはもう無縁の世界。気にしたら負けだ。そう思い校舎へと向かおうとしたところ、いつの間にかやらスクールアイドルの勧誘をしていた鉢巻きの先輩が目の前に来ていた。

「スクールアイドルやらない？」

豪腕快速ド直球。その女子生徒は真っ直ぐな気持ちで真っ直ぐな視線に乗せて訴えかけてきた。

やると決めたらやる。この先輩はきつとそんな人なんだろう。その大きな瞳の奥にある輝きが一瞬にしてこちらに伝わってくるような、そんな瞬間だった。

だから私は思わず、

「やりません」

と明確に拒絶してしまった。

「だよー。でも私達のこと気にしてるみたいだから声掛けさせてもらったんだ」

先輩は頭をポリポリと掻きながら苦笑いし、私の素っ気ない態度に立腹した様子を見せなかった。

断られるのも初めてではないのだろう。けれど、それにめげない程にスクールアイドルに入れ込んでいるのが、鉢巻きに滲む汗の量から伝わってくる。

「他の部活勧誘と同じです。一生懸命やってるなって、ただそう思っただけです」

それは本当のことではあるが全部ではない。ただこの先輩に私の内心を全て語る必要はない。

「そっか。そう思ってくれてる人もいるって分かっただけでも十分だよ」

先輩は晴れやかな笑顔で「応援してね」と告げると私にビラを渡して次なる勧誘に勤しんだ。

次のターゲットは私と同じく新入生。背の低い可愛いビジュアルの二人組がターゲットのようだ。

「貰っちゃった」

私はつい流れで貰ったビラを半分に折りたたむとポケットにしまい、先輩に勧誘されている未来の同級生を尻目に校内へと入っていった。

最終的に、先輩は最上級生からお説教されているようだったが同情はしない。だが、先輩から直に言われたからこれだけは心の中で思った。がんばれ、と。

朝のホームルームや入学式、帰りのホームルームが滞りなく終わった。

クラスメートは各自席の近隣の者や、前々からの知り合いと雑談して放課後の予定について話し合っていた。

特段過度なコミュ障ではない私もまた話しに混ざり、2、3の部活を冷やかした後でクラスメートと解散した。

クラスメートと分かれた後、私はこっそりと音楽室を覗いたのだ

が、音楽室には案の定、吹奏楽部が練習をしていた。

「ラツキー。開いてる」

そこで、音楽室を諦めてダメ元で屋上に上がったところ、屋上には素通りで出られた。屋上の扉が施錠されていないところは流石は田舎である。

私は屋上に出て壁に背を預けて座ると、鞆からハーモニカを取り出し演奏を始めた。

馬鹿は高いところが好きと言うが、屋上での演奏は気持ちが良い。きつと天空の城を夢見る少年^ズだつて同じ気持ちでトランペットを演奏していたはずだ。

「—————」

基本的に私が一人で演奏するときはその時の気分次第で曲を選ぶ。今日はスガシカオの「夕立ち」だ。かつてアニメ「ブギーポップは笑わない Boogiepop Phantom」のタイアップ曲でその筋の人には話題になった曲だ。

残念ながらアニメそのものは原作から離れたオリジナルストーリーとなり、原作のアニメ化を望んでいた人からすれば意表を突いた癖のある作品という扱いになってしまったけれど、この曲を使用したオープニングは評判が高い。

作品に漂うちよつと退廃的な雰囲気マッチしていることもさることながら、曲単体として聴いてもギターとベースのどことなくjazzyなコードでお洒落だ。

「その日 午後から日暮れにかけて

かるい夕立ちが通り過ぎた

そしてぼくらは海の近く

ぬれたアスファルトを走った」

埼玉にいる頃には縁遠い景色がここにはある。

随分と遠くまで来ちゃったなあと朱に染まる富士山や海を見ながら私は演奏を続けた。

「ふいに君がくちずさむ ぼくは聴いてる

ききおぼえないメロディー」

「……………」

音楽は好きだ。聴けば自然と体が動き、奏できれば体が熱くなる。そしてなにより人と人を惹き合わせる。

だけど今、私の隣にはメロディーを聴く人はいない。

“一緒に音楽やらない？”

「……………ふう」

不意に思い出した言葉に私は演奏を中断した。

まただ。最近は演奏しても余計なことを考えてしまい没頭出来ない。引越して来てからはそれがより顕著だ。

原因は分かっているが今更どうにもできない。後悔したって時は戻らないのだから。

私はハーモニカを鞆にしまうと屋上を後にした。

下駄箱に向かう際、どこからか元気に1、2、1、2、とステップを踏むリズムを刻む声が聞こえた。私と違い前向きな声だ。それが私を励ましているかのように感じられ、私は一人「よし」と気持ち切り替えて下校した。

第二話

入学式から早数日。住めば都というが、坂の上にある学校への登校という名の登山も些か馴れてきた。

クラスメートとも順当に打ち解けて来たが、気がかりなのが一人、早くもドロップアウトコースに入りかけている者がいるのだ。

理由は多分入学式の日に行われた自己紹介で思春期特有の病^{中病}を発露した発言（墮天使ヨハネだとか、リトルデーモンだとかだ）をしてしまったことだろう。彼女風に言うならば、まさしく墮天したのだ。

黙っていれば黒髪ロングストレートのどエライ美人だったのに、発言が残念過ぎた。

まあ、幸いにも彼女には幼馴染みがクラスメートに在るとのことだから、その子が働き掛ければ程なく学校に復帰できるだろうとも樂觀視している。

そうこう考えているうちに自分の教室に到着するのだから我ながら思考と肉体の動きを切り離すことが上手いものである。

「おはよ」

顔を合わせたクラスメートに軽く挨拶をしてさりげなく例の墮天使の席を見やるが、やはり彼女は来ていなかった。

「クロマツさんも心配ですか?」

そんな私の様子に目敏く気付いたのか、ちんちくりんという言葉の似合う赤毛のあざといツインテールをしたちんちくりんが私と非常に似た名前の人物に声を掛けていた。

はて、誰のことを言っているのだろうか、すつとぼけた態度で私はこう返した。

「紅玉さんも?」

「ルビィはルビィです」

ちんちくりんこと黒澤ルビィちゃんは頬を態とらしく膨らませて怒ったふりをする。私はその頬を突つくと、女子高生が口から出していけない音を立てながら口から空気が抜け、二人して笑ってしまった。

この子とも随分打ち解けられたものだ。最初は預けられた飼い猫のような人見知りっぷりを発揮していたけれど、冗談ばかり言っていたら1周回ってどうでもよくなったのかルビイちゃんの方から冗談を言ってくるようになった。

今思い返して見れば、切っ掛けはあのスクールアイドルの勧誘をしていた先輩方だった。

ルビイちゃんも私と同様にやらないか、と誘われたらしく、その話をしたからか妙な同族意識が芽生えたのだ。というか、やらないかと誘われてホイホイ着いていく人はそうそうはいない。私にはそんな男気はない。

なんにせよ、その切っ掛けとなった点についてはあの二人のスクールアイドルに感謝だ。

「そろそろ新しいパターンを考えないとね」

「うん。でも私芸人は目指してないんだけど」

「芸人でなくても芸は人を助けるものだよ」

「でも、滑ったら大変なことに」

「それこそ墮天しちゃうね」

「そのネタはブラックです。流石はブラックマツさんです」

と、そんなたわいないやり取りをしてしまうが、墮天使ちゃんを気にしている子が幼馴染みの子以外にもこうして居るのだ。

人との関わりを避けることが人を傷付けることもある。そうなる前にどうか墮天使ちゃんには復帰してもらいたい。そう思いながら私は今日もまた学校生活を滞りなく送るのだった。

昼休み、私は購買部に足を運んでいた。今日はお弁当に入れるおかずが無かったため、ここで補充しなければ私のお昼は白米をおかずにおかずを食べる、所謂ご飯丼になってしまう。

「めんなさい」

購買のレジに列んでいると唐突に私は後ろから謝罪を受けた。

謝罪を受けるような覚えはないのだが、ここは大人の対応をするべきだろうと後ろを振り向くと、腰まで届く程の髪の毛の綺麗な女子生徒の後頭部が見えた。

「あれ？」

何故私の後ろに並んでいる人が後ろを向いているのだと思ったら、その椿オイル配合のシャンプーを使っていそうな女子生徒を挟んだ向こう側に、見覚えのある顔があった。

「また勧誘しているんですか先輩？」

入学式に鉢巻きをしてスカウトしていた元気印のオレンジ先輩だ。なぜオレンジかって？それは彼女の髪の毛は陽光に照らされると反射してオレンジ色に見えるからだ。

そんなオレンジ先輩は私に気がつく嬉しそうに顔を綻ばせて手を振った。

「久しぶりー。どう？スクールアイドルやらない？」

「久しぶりってほどじゃないとも思いますが、相変わらずですね。あまりしつこいと嫌われますよ。」

ねえ、と私は冗談めかせて椿オイルの女子生徒（よく見れば先輩だった）に話を振った。

椿オイル先輩は困ったように苦笑いしていた。

「立ち話をなんだし、このまま中庭に行って食べない？」

そう提案したのはオレンジ先輩の後ろから顔を出したまた別の先輩だ。たしか、こないだの勧誘ではビラ配りに専念していた薄い顔立ちながらもきつちりと整っていて、可愛いと美人の中間くらいの顔立ちをしたグレーの髪色の先輩だ。形容するのならば薄可愛美いともいえるのだろうか？

「それもそうですね」

私は先輩方と会話しつつもちやつかりおかずに焼きそばパンをゲットした。ご飯にパンに焼きそば、我ながら炭水化物至上主義のチヨイスである。

「そういえば今更ですけど、先輩方の名前とか知らないですよね。」

せつかくですからアイドルらしい自己紹介してください」

中庭のベンチに座ると私はおもむろに無茶ぶりをかました。理由は台詞の通りだ。

「うええっ、それはハードル高いよ。というわけで、千歌ちゃん」

一番早く反応した薄可愛美しい先輩は早々にオレンジ先輩にぶん投げた。

どうでもいいことだが、この人はきつとダチヨウ的なクラブ活動の芸をやっても、絶対に最後に俺やるとは言わない人種だと確信した。

「え、曜ちゃん!? えーと、じゃあ・・・スクールアイドルやつてます高海千歌たかみちかです。好きな食べ物のみかんで、好きなスクールアイドルはμミューズ☒sで、それから、えーと・・・桜内さん」

元気印のオレンジ、改めみかん色の先輩は高海千歌という固有名詞であることが判明した瞬間だった。いい加減人の特徴から渾名を付けるのは飽きてきた、というかめんどくさくなってきた頃だったので、これですつきりだ。

しかし高海先輩はなかなかエグい。あろう事かおそらくスクールアイドルの勧誘を断っている桜内さんと呼ばれた椿オイル先輩にジャイロボールを投げ込むのだから。

ちなみにこういう展開は私の大好物だったりする。

「え、私はスクールアイドルやらないって」

「ええー、こんな可愛い後輩のささやかなお願いも聴いてくれないんですかあー?」

私はわざとらしくぶりっ子スタイルでそう煽ると桜内先輩はうう、と呻き声を上げた。おそらく自分の中で今頃葛藤しているのだろう。ちなみに私は自分が可愛いと自惚れる程の顔をしていないのは自覚している。

「桜内先輩が自己紹介してくれないと私はいつまで経っても名前が分からないですよ」

「今名前呼んでたよね?」

「気のせいですよ。ほら、先輩がやってくれたら私も曜先輩もしますから」

「まさかのブーメランっ」

もちろん曜先輩も逃がさない。いや、逃がさないとかいう問題ではなくこれは優しさだ。スクールアイドルをやるのだから自己紹介くらしいはやれなければならぬ。そう、これは先輩方の練習なのだ。

「なんか凄く悪い顔をしているけど」

「ああつ、不細工だなんて酷いですう。私傷つきました。だからお詫びに自己紹介を要求しまーす」

我ながら最高のウザさに吐き気を覚えそうになる。

桜内先輩は私の悪びれない言い草にうんざりした様子で溜息を吐くと、その貝のように固かった口を開いた。

「私は桜内梨子。ライフワークはピアノ」

「それだけですか?」

「それだけです」

ピシヤリ、と桜内先輩は締めるので今度は私が諦めた。本人的には頑張った方なのだろうと思っただからだ。

「次は私だね。私は渡辺曜。特技は水泳。でも水着のグラビア撮影はNGでよろしく」

うって替わって曜先輩あらため渡辺先輩は即興にも関わらずノリノリで一言述べると、誰が見ても分かるように話の締めめに敬礼ポーズをした。いやに様になっているため、どの角度から写真を撮っても映りが良さそうだ。

「ありがとうございます。ようやく名前で呼べますよ」

「で、こっちがやっただから貴方もやるのよね?」

「わ、分かっていますって」

根に持ったのか桜内先輩が非常に良い笑顔を見せるものだから逃げ切り作戦は封じられてしまった。だが、なんちゃら流は隙を生じぬ二段構え。このパターンも想定の内である。

さあ、今こそ聴くが良い。私の生い立ちだからこそ出来る究極の自己紹介を。

「埼玉から来ました黒松屋です」

私の究極奥義に三人は数秒の沈黙の後にこう言った。

「だっし」
「ですよねー」

第三話

そんなこんなで昼休みは続く。私は白米と焼きそばパンを交互に食べながら先輩方と雑談を続けた。

「黒松さんも引越して来たんですね。埼玉からはいつ頃？」

「私は三月になってからです。黒松さん、もってことは、桜内先輩もここ出身じゃないんですね」

「ええ。私は丁度貴方達が入学した日に東京からこつちにね。もう引越しいはいかな、結構体力使うし」

「無駄に気合いが入るのと、当たり前ですけど忙しいですからね。因みに桜内先輩はこの学校に通ってたんですか？ライブワークって言うくらいだからやっぱピアノが有名なところですか？」

「ううん。確かに音楽に力は注いでいたけど、専門の学校じゃないの」
そこで高海先輩がずいつ、と身を乗り出すと目を輝かせて憧れが抑えきれない口調でこう言った。

「音ノ木坂学院だよ音ノ木坂学院。μ^{ミュージズ}sのいた音ノ木坂学院！」

「…………へえ。私も良く知ってますよ」

音ノ木坂学院は近年の高校知名度でいえば最メジャーな学校だ。

理由としては高海先輩が度々口にするμsだ。

スクールアイドルグループμsはその圧倒的な行動力とカリスマ性でもってスクールアイドルというコンテンツに灯り始めていた火を一気に広げた。その際の活躍で経営難に陥っていた母校である音ノ木坂学院の入学希望者が増えて晴れて母校を救ったといわれているほどだ。

μsが凄いのは結果的にそうだったのでなく、元々の活動の動機が母校救済だったからだ。更に言えばスクールアイドルの全国大会とも言えるライブというイベントで優勝、そしてスクールアイドルという文化発信のためNYでライブをしたというのだから今では伝説のスクールアイドルとして謳われている。

だからスクールアイドルに関心のある学生は音ノ木坂学院に憧れを持っている者も多い。

「音ノ木坂に入って音楽やろう。」

「っ！……た、高海先輩は本当にμ☒sが好きなんですわ」
不意に蘇る罪悪感に思わず私は音ノ木坂学院からそれとなく話題を逸らした。

「こないだ桜内さんにも同じこと言われた」

えへへ、と高海先輩は語る。それはもう子供のように純真でキラキラと目を輝かせながら。

μ☒sは普通の女子高生が協力することで人を笑顔にする輝きを生み出せる、そう思わせる力があるのだと高海先輩は言う。自分達が楽しみ、人を楽しませ、その笑顔の輪が人に広がっていく。それが凄いのだと。

ああ、その自分の素直な好きという気持ちを真っ直ぐに突き付けられると、益々私の中の思い出が蘇っていく。引越す前のあの日々が。

「だから一緒にスクールアイドルやらない？桜内さん、黒松ちゃん」

高海先輩の自分の好きを相手に伝えるように喋れるのはとても素敵な才能だと思うが、今の私にはあまりにも毒である。だから私はこう答えるのだ。

「やりません」

あ、桜内先輩とシンクロした。

放課後、私はルビイちゃんとクラスメートの国木田花丸ちゃんと共に沼津の都心部へと向かうこととなった。絶賛不登校をかましてる墮天使ヨハネちゃんこと津島善子さんにノートとプリントを届けに行くのだ。とは言っても、直接やりとりするのは津島さんの幼馴染みの花丸ちゃんですとルビイちゃんは単なるお供だ。つまり助さん格さんである。

人生樂ありや苦もあるさ。なるほど、この精神こそ今の津島さんには必要なのかもしれない。

「ごめんね、付き合わせちゃって」

ただでさえ小柄な花丸ちゃんは遠慮がちに詫びの言葉を口にするものだから余計に小さく感じてしまう。まったくもって卑怯というものだ。

栗色の髪の毛を自然に肩まで流しながら、若干の癖っ毛により毛先にウェーブが掛かっている様はどこからどう見ても深窓の美少女。そんな花丸ちゃんが伏し目がちに言うのだ。例え同性でも断る方が罪だ。

これだから顔の良い女は、と決まり文句のように私は内心で愚痴りながらも、実は大して気にしていなかったりする。沼津の都心部に同級生と行くのは初めてだし、花丸ちゃんは物知りで話していて面白いからだ。

「気にしてないズラ」

「うう、星ちゃん意地悪ずら」

何より面白いのが、花丸ちゃんは油断すると祖父母譲りの方言が出るように語尾にズラ、と付けたり一人称がオラになったりすることズラ。

「ブラック松降臨」

「こら、ぼそりと言うなルビイちゃん。」

そんなこんなで私達はバスに乗り込むと、そこで我らがスクールアイドルこと高海先輩と渡辺先輩に乗り合わせた。

「あ、花丸ちゃん、ルビイちゃん、黒松ちゃん」

やつほー、と手を振る高海先輩に会釈し、先輩方がいる一番後ろの広めの席に相席させて頂いた。

因みに高海先輩が花丸ちゃんを知っているのもルビイちゃん同様スクールアイドルにスカウトしているからだ。

「皆でお出かけ？」

「沼津まで届け物を」

「届け物？」

「はい。入学式の日桜の木に登ってた子覚えてます?」

花丸ちゃんの話しぶりからするとあの墮天使もまた高海先輩と面識があるようだ。と言うか高海先輩は手当たり次第声を掛けているようだ。なんと見境のない。

「あの子凄いですよ。クラスの自己紹介の時」

「ブラック松さんストップ。それ以上傷痕を広げたら駄目」

確かに厨二病疾患時の発言はボディブローのように後からジワジワと効いてくるものがある。危うく私は津島さんの知らぬところで別学年の人にまで黒歴史を広めるところだった。ありがとうルビィちゃん。君の純真な心が私の無自覚な悪意を食い止めてくれたよ。

「~~~~~と言うことがあります」

「.....花丸ちゃん全部喋ってるズラ」

「ずらっ!」

花丸ちゃんや。今更口を押さえても後のフェスティバルですよ。

ま、本人にはバレないよね。バレンヌ逃亡事件ぐらいバレないよね。あれ、これってバレたんだけ?

「じゃあ私はここで」

そうこう姦しく駄弁っているとフェリー乗り場近くのバス停で高海先輩は降りていった。

窓から高海先輩を見送ると、ふと見覚えのあるサラサラヘアが海辺に見えた。

「渡辺先輩、あれって桜内先輩じゃないですか?」

「ホントだ」

「どうですか?桜内先輩はスクールアイドルやってくれそうですか?」

「うーん、今はちよつと難しいかな」

「今は?」

「うん。だって誘ってるのが千歌ちゃんだからね」

時間の問題だよ、と渡辺先輩は当たり前のように言った。

「随分と信頼してますね」

「幼馴染みだから」

渡辺先輩は照れたようにハニカんだ。

どうにも幼稚園時代からの親友であるらしく、田舎あるあるだけれど、小中高とずっと一緒に歳を重ねてきたらしい。

私には渡辺先輩が高海先輩に向ける信頼が眩しい。それはかつて私が持っていたもので、私が置き去りにしたものだからだ。

「じゃあ私もここで」

渡辺先輩も途中下車すると残ったのは私達1年生だけもなった。

「ねえ花丸ちゃん」

「どうしたの？」

「津島さんに待ってるって、伝えて貰っていい？」

私はもう人がすれ違うのを見たくない。だから津島さんには是非とも登校して欲しい。我ながら相手を想っての行動ではないのが残念なところだが、こればかりは性分だ。

花丸ちゃんは私の言葉に柔和に微笑みでもって了解ずらと返答してくれた。

第四話

週末は生憎の曇り空だったが、私は暇つぶしにハーモニカを持って近所を散策した。あわよくば演奏スポットを新たに開拓するのだ。

やはり川か山か海の三択だろう。因みに埼玉に居たときは川沿いだった。埼玉には海がないし、自称川の国らしかったからだ。

基本的に邪魔が入ることはなかったが、天気の良い日には川の水位が上がるため近所のお祖父ちゃんがちよいちよい川の様子を見に来たものだ。

私の演奏に気をとられてお祖父ちゃんが川に落下したときは流石に焦ったものだ。

そんなことを考えながら海沿いをぶらぶらと歩いていた私は淡島に程近い海上に浮かぶ小型船に気が付いた。

どうやらダイビングをしているらしい。そういえば内浦の面する駿河湾は水深が深い場所もあり、さらに栄養源が豊富であることから多様な生態系が確立されているため、コアなダイバーや海洋研究家には垂涎の場所だという。

「これも何かの縁、かな」

私は今日の演奏場所をこの淡島を望める海岸線に決めた。

海上の船とは距離があるから音は多分届かないし、演奏するにしても景色に絵がある方がいい。手で四角いフレームを作って船と淡島をその中に収めると、なるほど、実に写真映えしそうだった。

「—————」

曲については今日もシェフの気紛れだ。基本的にミーハーな私が吹くのは知名度の高い曲だ。今日で言えば海雪。黒人演歌歌手の代表曲だ。だが、今は凍える季節でもなければここは日本海でもないし出雲崎でもない。そしてダイビングしてる人達は身を投げた訳でもない。

些か選曲を間違えた気がするが取りあえず一曲を吹き流す。そして次の曲は海の声だ。某ケータイキャリアのCMでお馴染みのあれだ。ダイビングしている人達に海の声が聞こえたらロマンチックだ。

ロマンチックが止まらない。おっと、これはまた別の曲か。

だかよくよく考えると、海の声は大切な誰かの声を想う歌であって自然の神秘を歌ったものではない。まあ、ダイバー達が何を思っ潜っているかは分からないが。

そうこうしてる内に雲間からお日様が顔を出した。青い空と海に差し色の白い船が良く栄える。

これなら海も明るくなるだろう。次の曲はハレ晴レユカイだ。

ハレ晴レユカイは底抜けに明るい。日常に楽しみがあるという希望に詰まった曲だ。出だしのキャッチーなメロディーで一気に曲に没頭でき終わりがあっさり締まりが良いのが好きだ。

この曲が終わった頃にはダイバーが海面に出て三人で円陣を組んでいる。遠目ではつきりしないが、どこことなく見覚えのある髪の毛が三人。

あれって高海先輩達？まあ、誰にしてもこの距離で私のことに気付くことはないだろう。それにしてもなんとという偶然だろう。

今日はあと一曲吹いたら帰ろう。

最後の曲は雨上がりに見た幻だ。 the pillow's の曲だ。

この曲は自分の足跡を肯定する力強いものだ。私はこの曲を聴いたとき正に今みたいな曇天に僅かに光が射すこんな光景を視た。これに地平線まで見える荒野があれば私のイメージにピッタリなのだが、水平線はそれはそれでいいものである。

さて、ひとしきり演奏もしたし、帰宅するのでしょうか。久し振りに雑念なく演奏が出来たものだ。

第五話

週が明けてからも津島さんは学校に来ていない。私の他のクラスメートはそう思っている。だが、私は知っている。私だけが知っている。彼女は登校自体はしていると。ただ単にそれを認知されていないだけなのだ。

「またここにいたんだ、天使ちゃん」

「墮^ツ天使よ」

彼女は登校しては屋上に来て学校の様子を窺っているらしい。クラスに顔を出さない時点で登校というのもし様子を窺うというののも何か違う気がするが、とにかく彼女はこうして屋上に居るのだ。

どうでもいいがこんな遮るものがない屋上にずっといて暑くないのだろうか？私など教室にいても汗ばむくらいなのだが。

「その我慢強さがあれば教室来ようよ」

「余計なお世話よ」

そんなものだから放課後になって私と屋上で鉢合わせることになったのは言うまでもないことだ。

最初こそ私の姿を見た瞬間に姿を隠そうとしていたが、あえて無視しハーモニカを吹いていると彼女は普通に私に姿を晒すようになった。多少素っ気ない態度なのはこの際気にしていない。

とにかく、そうなるからは私は津島さんが居ない間のクラスの様子を教えている。今日でそれも三日目だ。

「そろそろクラスに来ないの？花丸ちゃんや他の人も心配してるよ」
「でも」

「いいじゃない。好きなものは好きなんですよ？」

なかなか踏ん切りのつかない彼女の背中を必要以上には押さない。乗り越えるのは最終的には自分なのだから。とか過去のことを引き摺ってばかりで全然乗り越えられていない私がどの口で言うのだから。

「—————」

今日は久々に間近にオーディエンスが居る。

たった一人でも客は客。私は彼女から連想できる曲を今日も奏で

る。

ミッドナイト・シャッフル。近藤真彦の曲だ。もつとも、私達がいるのは屋上の隅っこではなくど真ん中だが。

さて、天使のような悪魔の声は彼女にとって、自分自身のどこから生まれているのか？なんて考えてみるけれど、きっとこの曲の歌詞を津島さんは知らない。それでも私は奏でる。彼女の心に響くように。

空がオレンジ色に染まった黄昏時、私達は何時も通り別々に帰る。きつとそれが彼女なりの何らかのけじめなのだろう。

私は一人下駄箱に向かう際に生徒会室の前を通りかかった。その際に私は生徒会長が一人、電気も付けずにぼんやりと校庭を眺めているのに気付いてしまった。だって扉開きっぱなしだったし。

普段ならば素通りなのだが、その日本人形のような横顔に少し憂いがあったことが気になってしまった。ついでに言えばこの生徒会長はルビイちゃんのお姉さんらしい。挨拶するくらいするのが筋だろう。

「こんにちは生徒会長」

私は開け放たれた扉をノックすると生徒会長は即座に凜とした仕草になりこちらに向き直る。

気の強そうなつり目が印象の、ルビイちゃんとは毛色の違う方向性で整った造詣をした人だ。けれど、瞳の色だけはルビイちゃんと同じで、やっぱり姉妹なんだなあと思った。

「こんにちは。こんな時間にどうしました？」

「たまたま通りかかったので挨拶をしようと思ひまして。ルビイちゃんとは仲良くさせていただけます黒松屋です」

「これはご丁寧に。ルビイの姉の黒澤ダイヤですルビイがいつもお世話になっております」

生徒会長は背筋をぴんと伸ばすと綺麗に腰を折ってお辞儀した。
この姿からはとてもこないだ起きた珍事を中心人物だとは思えない。

こないだ起きた珍事とは先週、高海先輩と渡辺先輩が部活申請を出しに行つた時のことだ。

昼休み中に突然校内放送が大音量で流れたと思ったら、生徒会長がμsについて蕩々と語り出し、最終的には高海先輩らの部活申請をバツサリと却下したことが全校に流れてしまったのだ。

スクールアイドル活動を認めないと言いつつスクールアイドルは大好きなことが知れ渡ってしまったわけだが、本人はそれを頑なに否定しているとのことだ。

どれ、試してみますか。カメラを準備しまして、と

「矢澤にこの決め台詞は？」

「にっこにっこにー・・・はっ!？」

ポーズ付きでやって頂きありがとうございます。いい動画が撮れました。

ちなみに矢澤にことはμsのメンバーである。アイドルにはキャラクター性は必須であると公言する矢澤にこは独特な、曰く言いがたい「矢澤にこ」というキャラクターを作り上げたのだ。一部では「最後にして最初のアイドル」という謎のフレーズが流行つたりもした。

とにかくそれが先程生徒会長にやっていただいた一発芸だ。

「あなた馬鹿にしに来たのですか」

生徒会長は羞恥に顔を赤くして私に詰め寄る。

「やっぱりルビィちゃんのお姉さんですね。ルビィちゃんもスクールアイドルが大好きみたいでいつも私に教えてくれるんですよ」

ルビィちゃんは人見知りで引つ込み思案なところがあるが、一度スクールアイドルについて語り出すとかなり饒舌になる。その時は本当に楽しそうに話すものだから

私も対抗して昭和のアイドルの魅力をプレゼンしたりするものだ。
ルビィちゃんと中学時代からの親友である花丸ちゃんも温かい目

で話を聞いている。

「そう。ルビイは楽しくやれているのですね」

生徒会長は私の言葉に毒気を抜かれたのか少し複雑そうな表情をした。

「なんか色々ありそうですね」

他人様の家庭事情に口は挟む主義ではないのでこの話題はもうおしまい。

「今日は会えて良かったです会長」

さようなら、と私は生徒会室を後にする。

高海先輩も渡辺先輩も桜内先輩も、津島さんやルビイちゃん、生徒会長も皆心に何かを抱えている。中には歪みが出来ているところもあるはずだ。

ブギーポップという作品の歪曲王の言葉を借りるなら、その歪みが黄金になればいいと願うばかりである。

ふと、私は思った。何故私はこんなにも彼女達に肩入れしているのかと。まさか私にも歪みか？

「まさか」

私は一人ごちると口笛を吹いた。曲は「ニユルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲への第一幕。ワグナーの曲だ。本来は華々しい幕開けのような曲だが、口笛だとどこかもの悲しい曲になる。先に述べたブギーポップが終わりを知らせるようにこの曲を口笛を吹くのだ。

何故この選曲かって？それは私も津島さん同様拗らせているからだ。

第六話

私が放課後に花丸ちゃんとルビイちゃんと共に沼津都心部に行った時のことだ。

私は高海先輩ら“三人”と沼津駅前であった。

どうやら桜内先輩も無事にメンバー入り（仮）したらしい。

これでスクールアイドル活動の最初の壁である作曲も無事に越えられるだろう。なんとと言っても桜内先輩はライフワークがピアノだと公言してるのだからそれなりに造詣はあるだろう。

そういえば私は桜内先輩のピアノを聴いたことがない。今度是非とも聴かせて頂きたいものだ。

さて、先輩ら二人が何をしていたかと言えばビラ配りだ。どうやら週末に浦女の体育館でライブをやるようで、その案内をしているのだ。

“私達もいつか皆の前でライブしたいね”

私の中から沸き上がる声に蓋をして私は高海先輩らに声を掛けた。

「順調ですね」

「黒松ちゃん。それに花丸ちゃんにルビイちゃんも」

「遂にライブをやるんですね」

ルビイちゃんがスクールアイドル大好きスイッチが入った。鼻息荒くライブの案内チラシを食い入るように見ている。

どうでもいいがルビイちゃんや。その鼻息の荒さは華の女子高生がやっていいものではないよ。

「うん。新しい理事長がやっていいって言ってくれたんだ。よかったら見に来てね」

最近臨時全校集会が行われ、新しい理事長が就任したと通知された。驚くべきことに新しい理事長は現役女子高生。 HALFでパツキンのチャンネーで女子高生だ。もはや意味不明だが、どうやらその理事長は浦女の出資者の娘らしい。金持ちの道楽は実にぶっ飛んでいると驚いたものだ。

「いいライブにするからね」

理事長の話は置いていてライブはもう絶対に行く。彼女たちの曲がどんなものか気になるし、隠す必要の無い真実として私は音楽が好きだからだ。

「あの、グループ名は？」

ルビイちゃんが頂いたビラを見てそう呟くと、高海先輩は数秒の沈黙の後一言。

「あ」

まさしく一言であった。

私は帰りの方向が同じだという理由で花丸ちゃんとルビイちゃんに分かれた後、高海先輩達と海沿いまで来ていた。

三人は砂浜に文字を列挙し、グループ名を何にするか考えていた。流石に部外者の私は意見を求められても直接単語を口にするこはしない。精々がみんなの共通のものがいいんじゃないですか、と意見を述べただけだ。

それからは意見を求められても困るのでハーモニカを吹くことにした。

音楽をしていることに先輩方は驚いていた。

「今度一緒に演奏しましょう」

と桜内先輩からセッションのお誘いがあったのはいい収穫だった。

さて、今日の曲は『誕生日には真っ白な百合を』。福山雅治の楽曲だ。

この曲は生まれたこと、見守ってくれたことへの感謝が表現されている。

この曲を選んだのは私なりの願いと祝福だ。

これから生まれる彼女たちを示す名が彼女たちを支え、人々から支持されるようにと。

ってあれ？みんな手も口も止まってる？

「どうしたんですか？」

「いやーあの」

「千歌ちゃんじゃないけど、スクールアイドルやらない？」

「驚いた。思わず聞き惚れちゃった。ハーモニカってこんなに良い音がでるのね」

好評なのは実に結構だが、グループ名はどうしたグループ名は。

「はいはい。次いきますから」

何時までも思いつかないのならば初心を思い返させるだけだ。

「—————」

次の曲は「START:DASH!!」。言うまでも無くμ'sの曲だ。この曲は踏み出す決意と勇氣。それ以上に無駄な裝飾語など先輩方には不要だろう。いや、これらの言葉すら蛇足だろう。

先輩方は頭を悩ませながら砂浜をうろうろと歩き出す。少しでもインスピレーションを得ようとしているのだろう。

だが、曲が終わるまでに先輩方から名前が出ることは無かった。いや、出す必要が無くなったと言うべきか。

先輩方は出会ったのだ。砂浜に記された一つの言葉に。

「Aquars」

誰が書いたのかも分からない。だがその言葉がストーンと心に入り込んだのだ。三人ともそうだと言っていた。因みにだが私もそうだった。

「これからよろしく、Aquarsさん」

メンバーが集まり、曲が生まれ、そして名前が付いた。

おめでとう。そしてどうか頑張ってください。

「今日から私達は—————」

そして、どうか消えないでください。

第七話

今日も今日とて屋上で私はハーモニカを吹いていた。

今日は津島さんは早めに帰ったので今は私の一人舞台だ。

今日の曲はボレロ。クラシックに造詣の深くない私にはこの曲がどういった理念のもと創られたのか分からないが、よく耳にするのは勝敗が絡むときだ。その静から動に徐々に高まる重厚な響きは自然と戦意を高めるからだろう。私が知っているクラシックでは数少ないものの一つだ。

何故この選曲にしたかと言えばA q o u r sのライブの成功を祈ってだ。

後から聞いた話だが、どうも体育館を満員にしたら人数が足りなくても部として認める(部活動申請は五人から)と新理事長から言われたらしい。だが、全校生徒合わせて100人に満たないこの学校でその条件は鬼畜の所業だ。

おそらくは満員にならない。だが、それでも諦めずにA q o u r sとして進み続けるか理事長は見極めるつもりなのだろう。とんだ食わせ者だ。

「ハーイ、時々素敵な音が聞こえるから探して見ればここにいたのね」その食わせ者がこんなタイムリーにやってきたのも偶然だろう。私は一曲吹き終わると理事長に挨拶した。理事長は私の二つ上だから先輩に当たるのだ。

「こんにちは理事長」

「ノー、鞠莉って読んで」

理事長はハーフだからなのか日本語をそれなりに覚えた外国人のような喋り方をする。

ファーストネームで呼べと言うのもそういった文化で育ったからだろう。

「分かりました、鞠莉さん」

「イエス、よろしい。ところで貴方は一人で活動しているの？」

はて活動とはなんの事だろう？

「貴方もスクールアイドル目指しているんじゃないの？」

「違います。私のは単なる趣味です」

音楽を嗜む生徒が少ないからかどうやら鞠莉さんは私もまたスクールアイドルをしたいと勘違いしているらしい。

「それより理事長は何故スクールアイドルに関心が？確かにこの地域では珍しいですが」

「好きだからよ」

私の話題変更に対して鞠莉さんはこれまたシンプルに答えた。

高海先輩同様この人もまた好きなことに好きと言える人のようだ。

「そ・れ・に、私は理事長。生徒の活動を応援するのが勤めですから」
本当にスクールアイドルが好きでそれを育てたい。だから壁も用意したというところだろう。今週末のライブは。

食わせ者ではあっても悪い人ではなさそうなので何よりだ。

「そうですね。ところで鞠莉さん、普通のイントネーションで喋れるんですね」

鞠莉さんはにこり、と笑うと屋上から立ち去る。私はその後ろ姿に再びハーモニカを吹いた。

曲は「ツバサ」。アンダーグラフの曲だ。

この曲は夢を追うことでの別れと再会への希望の曲だ。今は多分、高海先輩達は鞠莉さんの事を掴みきれていないと思うが、その歌詞のようにつか高海先輩方が夢を叶え、鞠莉さんと共に笑える日が来ることを願う。

家は基本的に家事全般は私が担当している。

母親は海外で働いているから家には居ない。父親は外ではしっかり者で通しているらしいが家ではぐうたら。何かさせると余計な仕事を増やすので家事をさせないようにしている。

だから私は学校帰りにスーパーで買い物をする人が多いのだが、家に近づくときよく近所のおばちゃん達が井戸端会議をしているのに遭遇するのだ。

「あら星ちゃん、お帰りなさい」

「こんにちは。また韓国ドラマの話ですか？」

おばちゃん達は私にも気安く話しかけてくる。最初は戸惑ったがミーハーなおばちゃん達の話題が同年代の連中と通ずるものがあるため話に混ぜても意外と話せるものなのだ。

「違う違う。星ちゃんの学校のスクールアイドルの話。こないだの町内放送面白かったわよねって」

「あはは」

Aquorsがライブを成功させるために案内告知をしていたのだが、町内放送をしたときのぐだぐだ感が意外にウケが良かったらしい。

「今週末でしょ？どうしようかしら」

「じゃあライブを見てそのあとお茶しません」

「折角だし久し振りに皆で集まってみましょうよ」

引越してから実感したがこの地域の人達は人付き合いが本当に好きだ。暇があればこうして顔を合わせくつちやべり、買い物先でもくつちやべり、遊びに出かけてくつちやべり、いや言い草はあれだが悪意はない。

とにかくコミュニケーションを大切にしている。年の功もあるだろうが私にも良くしてくれる。

本当に温かい。

「そういえば星ちゃんもスクールアイドルなの？楽器とか弾けるんでしょ？」

「私は趣味ですから」

「あら？でもピアノとかギターとかハーモニカとか色々出来るじゃない」

「先輩達とは方向性が違いますよ」

「方向性とかミュージシャンみたい」

近所の人達は私が家で楽器を演奏する音を聞かれているので音楽が好きなのは知られているのだ。

私の拙い演奏を耳にして怒鳴り込んでこないのは非常にありがたいことである。

「是非ライブに来て下さい。きっと先輩達も喜びますから」

それでは、と私はお節介で、でも親切的な隣人に別れを告げた。

第八話

問題の週末がやってきた。天候はあいにくの豪雨。嵐と言っても差し支えない。だが、今日に向けてビラ配りや町内放送をするなどAoursは精力的に活動してきた。あわよくばと思わせる位一生懸命やっていたのだ。だから私は当日の手伝いを申し出た。

流石に生演奏とかはないが、放送器具の点検と音響効果を考えたスピーカーの音量設定程度なら多少は手伝える。千歌先輩のクラスメートの有志とえつちらおつちら作業を終わらせて、後は時間がくるのを待つだけとなった。

ライブに行くといつも私はわくわくする。

好きな音楽を奏でる人達がどんな演奏をするのか、どんな風に魅せてくれるのか？それを思うとドキドキが止まらなくなるのだ。

私はAoursの曲をきっちり聴いたことはない。ダンスも部分練習しか見たことはない。衣装に限っては今日が初見だ。楽しみじゃないはずがない。

だが来場者は数は疎らだ。身内しか来ていない。

これを見てどう思うのか、それだけが心配だが、これ乗り越えなければ始まらないのだ。

「観客が居なくても増やしていけばいいんだよ」

ふいに沸き上がる思い出の声に私はそうだね、と同意した。

今はまだ始まったばかり。本気でやるならばこの後にどう続けるのかが大事なのだから。

「始まる」

誰かがそう言うのと静かに幕はあがる。

満員には程遠いこの光景にAoursは一瞬怯んだ様子を見せたが、高海先輩が気張りグループ紹介をした。それに感化され渡辺先輩や桜内先輩も気持ち切り替えられたようだ。

「聴いてください」

理想と現実が違う。だが、それが夢を諦める理由にはならない。

彼女達は、Aoursはこの瞬間を輝くため第一歩を踏み出し

た。

「キラリ、ときめきが生まれたんだと」

散々練習したステツプは上手い。繋ぎがまだ甘いかもしれないが見栄えはする。歌も息切れを感じさせずに上手く歌えている。

紡がれていく歌は正しく彼女達の始まりの曲だ。μ×sに光を見て、踊る心に従って始めて、そして仲間と出会って。

彼女達の歌詞から彼女達がどのように歩み始めたのかが良く伝わってくる。

理想は満員。現実には観客が身内しか居ないけれど彼女達は今を楽しんでいる。そして私達を楽しませようとしている。その証拠に彼女達は今輝いている。今ステツジでパフォーマンスする彼女達は誰が見てもスクールアイドルだった。

ここに来ている十数人は皆目を逸らさずに夢中になって見ている。新たに生まれたスクールアイドルの姿をこの目に焼き付けようと。

私も気付けばサイリウムを掲げてリズムに合わせて飛び跳ねていた。

楽しい。皆で一つの音楽を共有し、皆で夢中になれるのはやっぱり楽しい。

「音楽って楽しいね」

私の心に残る親友の言葉に私はうん、と頷きかえした。

だが、そんな夢のような一時も文字通りの意味で暗転した。停電だ。

外は雷雨の嵐。雷の影響か、倒木で電線が切れたのかは分からないが、少なくとも数分は復電しないだろう。ミュージシャンにとって数分とは致命的に長い。一曲あたり五分前後しかないのだから。

光が消え、音が消え、熱気が戸惑いに替わるのにそう時間は掛からなかった。

どうすればいい？皆きつと分からずに動けなかった。だってそうだろう？停電なんてどうすることも出来ない。

だが、高海先輩はなけなしの勇気を振り絞って継続した。バックミュージックの無いアカペラで。高海先輩に続き渡辺先輩も桜内先

輩もまた歌う。消え入りそうになりながら、涙を浮かべながら。

言うまでも無く光の消えたステージは先程までの輝きはなかった。言うなれば灯台の光も届かぬ夜の海だ。

だが、彼女達はその海を必死に泳ぐ。終わらせない、終わりたいくないと藻掻いて、藻掻いて、苦しさに涙を滲ませながら言葉を繋ぐ。

ならば私はどうする？彼女達を見てきた私はどうするのだ？

震える手で私は胸ポケットからハーモニカを取り出す。

これは彼女達のライブだ。だから部外者の私とその本番に介入するわけにはいかない。それは分かっている。何より私の介入で寧ろこのライブを台無しにしかねない。

だが時は歩みを止めない。私が逡巡する間に遂に彼女達の歌が止まってしまった。

諦めたら駄目だ、と半ば反射的にハーモニカに口を付けた時、体育館の扉が大きく開くと、大勢の人が集まっていた。

「バカ千歌。開演時間間違えたでしょ」

一番に乗り込んできた女性（後で知ったことだが高海先輩の姉らしい）の言葉からすると、どっかで開演時間を間違えて案内していたらしい。

お客さまが続々と来場し気付いた時には体育館は満員と言っても言い過ぎではない人数を収容していた。

そして奇跡は終わらない。

停電はどうする、と思った矢先に復電したのだ。こんな都合良く復電するかとも思ったが、この学校には確か停電時用の発電設備があったため、電源が切り替わったのだろう。あるいは誰かが発電機を回したのかもしれない。

何にしても舞台は整った。そしてAqoursに笑顔が戻った。

ならばもう心配はない。私は一観客としてライブを全力で楽しむだけだ。

「行けー、Aqours」

これくらいの声援は許されるだろう。

私の声援に感化されたのか会場はいつの間にか手拍子が始まって

いた。
この瞬間に私は確信した。やっぱり今日のライブは最高だったと。

第九話

Aqoursの渾身の一曲はあっという間に終わった。楽しい時間が早く進むのはインシユタインも証明している。

Aqoursとしての初パフォーマンスの反応は上々。観客も歓声をあげているし、Aqours自身やりきった笑顔があった。

だが、そこにただ一人、難しい顔をしているのは生徒会長だ。

彼女はそうすることが私の使命だともいうように堂々とした佇まいで壇上の前まで来ると、衆人環視の中臆することなくAqoursに警告した。

「これは今までのスクールアイドルの努力と町の人達の善意があつての成功ですわ。勘違いしないように」

生徒会長の言うことは間違いない。ファーストライブでこんなに人が集まる事などメジャーデビューしたてのアイドルでもそうはない。シヨッピングモールなどに知らないアイドルがミニライブをしていても観客がまばらだったりすることなんてざらにあることだ。

そもそも彼女達の実力はここに来るまで未知数なのだ。評価されて集まった訳ではない。それを勘違いしないように釘を刺したのだ。

何故生徒会長はそんなことを口にするのだろうか？彼女だつて本当はスクールアイドルが好きはずなのに。このライブを通して彼女達の熱を感じて、何故敢えて今それを口にするのだろうか？

疑問は尽きないが、私はあることに気がついた。

生徒会長のスカートの裾にほんの少し油汚れが付いていることにもしかしたら生徒会長が発電機を回したのか？だとしたらなんて

「ツンデレ」

ステレオタイプな例えだが、彼女の行いを称するにそれ程相応しい例えを私は知らない。

そして、私は暖かな気持ちになった。

だとすれば生徒会長はきつとAqoursの壁として彼女達を支える方針なのだろう。

本当に生徒会長もライブの手伝いをした生徒達も来てくれた近隣

なからずギャラリーが出来ていた。立ち止まってくれた人達は私にも暖かな拍手送ってくれた。

「あはは、またのお越しお待ちしてます」

私はきつと不細工極まりなかったであろう笑顔を顔に張り付けて感謝の言葉を告げると、その場を切り上げて駆け足で体育館から出た。

私はなんてことをしていたのだろうか。他人様のライブに来た客を搔つ攫うような行為をするとは。

私は罪悪感で体育館にはいられなかった。

私は夢中で走る。人目を避けて、誰も寄り付かない所へ。

気付いた時には私は屋上に居た。

ライブ中まで土砂降りだった雨はいつの間にか止み、嫌味にも雲間から光が差し込んでいたんでいた。

だが私の心は雨模様。大舞台や、ましてや人前なんて私にそんな資格は無い。私にはここで気ままにハーモニカを吹いているくらいが丁度いい。それが私の身の丈に合った生き方だ。

第十話

Aqoursのライブの翌週。彼女らは遂に部活動の申請が通ったらしく部室を手に入れたようだった。

何故私がそんなことを知っているかと言えば、放課後に花丸ちゃんと図書室に入り浸っていた時にアイドルパラッチこと黒澤ルビィちゃんがスクールアイドル部を偵察し、頼んでもいないのに報告に来たのだ。

それはそれとして、何故私が図書室にいたかと言えば、ちよつと気持ちが悪く不安定で屋上に上がる気分にならなかったからだ。

今日の私が語るとすれば曲ではなく本だ。

今日読んでいるのは「ハーモニー」。故伊藤計劃の描いたディストピア系SF小説だ。

洗練された世界には、だが、目を背けた問題がある。それを実感として苦しんでいる主人公の内面を追いながら進む物語だ。SFとは言っても基本、焦点が当てられているのは人の心であるため読みやすい作品に仕上がっている。

崖っぷちにしがみつく主人公が何を思い、どう感じて結論を出したのか。その生き様が格好いいのだ。

「はあ、またライブ見れるんだ」

ルビィちゃんは夢見心地にスクールアイドル部が承認されたことを喜んでいた。

そう言えばだが、

「そもそもルビィちゃんはスクールアイドルやらないの?」

そんなに好きならばやればいい。ルビィちゃんは見ただ目も良いし(背が低くてちんちくりんではあるが)ダンスだって趣味の範囲内の話だがやっていると聴いたことがある。

「でもお姉ちゃんが」

私は花丸ちゃんと顔を見合わせる。

私にはあの珍妙な一発芸「につこにつこにー」をガチでやる生徒会長が本当にスクールアイドルを否定しているようには思えないのだ。

「ちゃんとお姉ちゃんと話したらいいと思うよ」

私は自分の言葉に反吐が出そうになるが正論を振りかざした。ちゃんと話さないで拗らせたのはどこの誰だと心が叫びたがってるが、それは今は置いておく。

「こんにちは」

そこに来客があり一度話は打ち切られる。私達も大概だが図書室なのだから静かに入りましょうよ高海先輩。

「あれ、花丸ちゃんにルビイちゃんに黒松ちゃん」

「こんにちは先輩。なんか似合わないもの持ってますね」

そう。入ってきたA q o u r sの三人はそれぞれ十冊近い本を抱えているのだ。

「失礼だよ黒松ちゃん。まあ、その通りだと思うけど」

「曜ちゃんも酷いよ」

悪戯つぼく笑う渡辺先輩に高海先輩は頬を膨らませて抗議する。その二人だけの戦争をしている間に桜内先輩は受付台に持ってきた本を置いて花丸ちゃんに事情を説明した。

どうやらスクールアイドル部に宛がわれた部室を整理していたら借りパクされていた図書室の本が見つかったとのことだった。

「こないだは手伝ってくれてありがとう、黒松ちゃん」

「いえいえお安い御用ですよ。お祭りは好きなんです」

「ところで相談なんだけど」

唐突に私達の手を取ると高海先輩はまたあの台詞を言った。もはやライフワークになっているのではないだろうか？

「スクールアイドルやりませんか？」

何時もならば即答して一刀両断なのだが今は一人迷える子羊がいる。

私は花丸ちゃんとアイコンタクトすると手を挙げて一言。

「私やりませう」

そんな私に驚いたのかルビイちゃんは目を見開き、先輩達は期待の眼差しをした。

「私もやりませう」

次に手を挙げたのは花丸ちゃん。その行動に一番驚いていたのはルビイちゃんだ。口をあぐりと開けている。逆に先輩達は首を傾げだした。はて、どこかで見たことがある流れだ、と思っっているのだろう。敢えて言おう、その通りであると。

「ルビイもやります」

「どうぞどうぞ」

怖ず怖ずと手を挙げるルビイちゃんに私と花丸ちゃんは華麗に掌返しした。これぞ伝統芸能。日本が世界に誇る鉄板ネタだ。

ルビイちゃんは鳥の断末魔みたいな声を上げると、アワアワと固まってしまった。

「どうぞ、連れてっつていいですよ」

「いや、駄目ですよ」

桜内先輩はぴしやりと遮断するとルビイちゃんの目の前で手をぱんつ、と打ち鳴らし、ルビイちゃんを復旧させた。猫だました。

「酷いです」

ルビイちゃんはどう、と唸りながら抗議の声を上げる。しょうがないから私は自分の非を認めることとした。

「ごめん、私が悪かった」

「違うよ、オラが悪かったぞら」

「え、急に謝られても、その、私もごめん」

「どうぞどうぞ」

ムキー、とモンキーボイスでルビイちゃんは怒り出す。やっぱルビイちゃん弄りは面白い。そんな私達を見て先輩達は呆れていた。

機嫌を戻したルビイちゃんによるとお姉さんの黒澤ダイヤさんも元々スクールアイドルが大好きだったようだ。よくお玉をマイク代わりにルビイちゃんとアイドルごっこしていたらしい。

あの生徒会長がお玉をマイク代わりとかシユール過ぎて是非とも見てみたいと思ったが取り敢えずそれは置いておく。話にはまだ続きがあるのだ

ダイヤさんが高校に入学してしばらくすると突然スクールアイドルに対し厳しい視線を送るようになったのだ。自宅では目に付くところにはスクールアイドル関連のものは置けず、話題も出せない始末だとのこと。

「ある日何かの切っ掛けで趣味が変わることもあるかも知れないけど、それはそれじゃない？」

自分の主義主張はあると思うが人の趣味は人の趣味。とやかく言われる必要はない。

「でもお姉ちゃんが好きじゃないもの、私が好きになっちゃ駄目だよ」
ルビイちゃんはとてもお姉さんが好きなのだろう。だから自分というものをお姉さんと合わせようとしてしまうのだ。

「それに」

ルビイちゃんは花丸ちゃんを見やる。付き合いの短い私にはその視線に籠められた意味は判らない。結局この日は一旦これで解散となった。

第十一話

図書室から出て私は屋上に上がった。だが、津島さんは今日は来ていないようだったので、私も帰ることにした。

図書室を出るときにまだ図書委員の雑務をこなしていた花丸ちゃんはまだいるかと思いい図書室に寄ると案の定、花丸ちゃんは本を読み耽っていた。

花丸ちゃんはルビィちゃんとは違い活字の本が好きだ。アイドルにはそれ程の関心が無いようである。強いて言えばルビィちゃんが好きだから知っているくらいなものだ。

何故花丸ちゃんとルビィちゃんは仲良くなったのだろうか？

「星ちゃん戻ってきたの？」

「うん。野暮用があったんだけどすぐ終わったから戻ってきた」

「そっか。あと三十分は図書室開けてなくちやいけなから先帰ってでもいいよ」

「ううん。本読んで待ってるよ」

私は椅子に腰掛けるとハーモニーの続きを読む。

この本は既に二回読んだが、やはり飽きる事は無い。その優しすぎる世界観で主人公が感じている息苦しさはいつ読んでも感じる事ができる。物語に没頭できる。そうだったら三十分などあつという間だった。

「星ちゃん。時間だから図書室閉めるよ」

花丸ちゃんが声を掛けてくれなかつたら読み終わるまで読み続けていただろう。

図書室を閉鎖して鍵を職員室に返すと私達はバスに乗った。どうやら花丸ちゃんは今日は本を買いに行くらしい。

「花丸ちゃんってみんなで居るときあまり本の話しないよね」

「マル、ルビィちゃんや高海先輩みたいに自分の好きを上手く伝えられないから」

だから自分の好きは好きとして自分の内にしまったおくのだという。

「確かにルビイちゃん達はスクールアイドルの話をするると本当に楽しそうに聞こえるもんね」

「だからルビイちゃんにはその好きをもっと出して欲しい。人に合わせるんじゃないで、人を引き込むくらいに」

そう語る花丸ちゃんは夢を語るかのように輝いていた。なんだ、自分の好きを上手く伝えられないなんて嘘じゃないか。こんなにルビイちゃんを語るところこっちも力を貸したくなるような話し方をするのだから。

「花丸ちゃんはルビイちゃんが本当に好きなんだね」

「親友すら。人付き合いの下手なオラとずっと一緒に居てくれた大切な親友」

だからか、と私は先のルビイちゃんの視線の意味を知った。ルビイちゃんはきつとお姉さんだけでなく花丸ちゃんとも合わせている。

「そこで、今日のやりとりで思いついたすら」

「ダチヨウ的な倶楽部活動？」

「それすら。オラ明日ルビイちゃんにスクールアイドル部に一緒に体験入部しようって誘うすら」

「一緒に入ってルビイちゃんを本入部させると」

「すら」

「じゃあ私は余計なことしないようにしなくちゃ。昨日の今日で私と花丸ちゃんがスクールアイドル部入ろうなんて胡散臭すぎるしね。明日は別行動しよう」

言ってしまうえば罠に嵌める行為に少し気が引けるが親友の花丸ちゃんがそうすると言うのだから、これくらいの荒治療が必要なのだろう。

「私も音ノ木坂合格したよ」

私の時とは違う。そんな酷い結末にはならない。だが、これだけは言わせてもらおう。

「本当の事を伝えるタイミングを見誤らないでね」

頷く花丸ちゃんはとても嬉しそうだった。それを見て私の不安は少し和らいだ。きつと二人なら大丈夫だろう。だってこんなにもお

互いに相手のことを想っているのだから。

第十二話

ドツキリ、ルビイちゃんのスクールアイドル体験永続編。

オラずらペテン師花丸ちゃんはダークサイドに墮天した。

親友のルビイちゃんの純粋な心を利用して、未知の領域スクールアイドル部へと彼女を投獄する。

ホワイトかブラックかはたまたグレーか。暗中模索のなかをルビイちゃんが行く。

花丸ちゃんの罠をかくぐりルビイちゃんは望む未来を掴むことが出来るのか？

頑張れルビイ。頑張れルビイ。はじまるよ。

とまあ冗談はさておき今日はルビイちゃんをスクールアイドル部にぶち込むための作戦が決行される日だ。

花丸ちゃんは上手いこと自らを出汗にルビイちゃんをスクールアイドル部に誘い出すことに成功した。

私はと言えばこの作戦の成功率を上げるために放課後は別行動と決め込んでいた。

今頃スクールアイドル部の活動に参加しているだろうと想いをはせながら私は屋上で読書だ。

ハーモニカはどうしたって？それは言わないお約束だ。

あのA q o u r sのライブ以降、どうにも演奏する気が起きない。

私は音楽をしていていいのか？その命題に蓋をしたまま私はこの町に来た。だが、一度疑念が湧くとどうしてもそう問わずにはいられない。

私はどうすればいいのだろうか。本の中にはその答えはない。

“困った時はとにかく奏でよう。そこにきつと答えがあるよ”
兎に角前向きな明るい声が私の中に響き渡る。

こちらの気も知らないでいけしやあしやあと言ってくれる。

私はそんな風には考えられない。片割れに過ぎない私には。

「あれ、黒松ちゃん？」

悶々と膝を抱えていると来るはずのない高海先輩の声が聞こえた。

その声のする方を見ると、A q o u r s の三人と花丸ちゃんとルビィちゃんもまた屋上に上がってきたところだった。

「黒松ちゃん大丈夫？泣いているの？」

「やだな先輩。人の昼寝の邪魔をするなんて」

私はわざとらしく欠伸をするとお茶を濁すような発言でやり過ぐす。

「どうしたんですか？屋上なんか来ても何もないですよ？」

「その発言はそのまま返せるんだけど」

渡辺先輩は疑いの視線を私に送るがどこ吹く風である。この程度のことを誤魔化せなくて半年も嘘を吐き続けるなんて出来なかっただろう。

「練習場所を探してたの。校庭も体育館もスペースなくて」

「ははあ、だから屋上。μsみたいに」

かのスクールアイドルは屋上で練習していたのだと聞いたことがある。みんながここを選んだのはその影響だろう。

「邪魔じゃないかな？」

「寧ろお邪魔虫は私ですよ。帰りますんでお気遣いなく」

私を気遣ってくれる桜内先輩に苦笑いしつつ、私はバッグを持ち上げて肩に掛けた。今日はもう撤収だ。

「あ、星ちゃん」

「どうしたのルビィちゃん？」

「練習、見ていかない？」

その申し出を受けた私はそれとなく花丸ちゃんを見ると花丸ちゃんも頷いた。

「それじゃ折角なんで少しだけ」

こうして私はスクールアイドル部の体験入部に巻き込まれる事となった。

「ワン、ツー、スリー、フォー、ワン、ツー・・・」

ダンスの基礎動作の反復練習。リズムに合わせて動くのでリズム感の調整も兼ねた練習だ。

高海先輩は流石に練習してきただけあつて動きが滑らかだ。

ルビイちゃんもまたドルヲタを公言するだけあり初めてにしては動きに恥じらいがない。

「やっぱり好きなんだね」

「分かるずら？」

「うん。伝わってくるよ」

ルビイちゃんは私が彼女と出会ってから一番活き活きとしていた。全身から溢れ出す楽しいがこちらに伝わってくる。

汗だくになりながら、息を切らせながら、それでも顔は苦痛に歪まない。百点満点の笑顔だ。

「オラずつとこうなつて欲しかった」

花丸ちゃんは言っていた。ルビイちゃんは周りを気にしすぎている。気にしすぎるあまり自分の好きを抑えてしまっている。だからいつかそれを解き放つて、ルビイちゃんの中にある沢山の好きを、熱を、輝きを何処までも羽ばたかせたい。それが今なのだ。と花丸ちゃんは夢を語るかのように話してくれた。

だが、それは花丸ちゃんの気持ちだ。相手を思いやる気持ちが必ずしも良い結果に繋がるとは限らない。花丸ちゃんの思い描くのはあくまでも花丸ちゃんの中のルビイちゃんの願いだからだ。

ルビイちゃんの持つ願いと花丸ちゃんの思い描くのはルビイちゃんの願いにどれ程の差があるのか分からないが、その差は必ず摩擦となり擦れ違う要因となる。

それだけは絶対にさせない。仲の良い者同士が擦れ違うなどあつてはならない。そんなものは私だけで十分だ。

「折角だから花丸ちゃんも楽しまないとね」

「うん」

ルビイちゃんから花丸ちゃんに練習の順番が回ってきた。

花丸ちゃんは運動は苦手らしく、動きがとても拙かった。だが、リズム感がいいのかタイミングそのものを外す事は無く、馴れてしまえば動きも良くなるだろうと思わせるような伸びしろがあることを垣間見ることができた。

運動は苦手かもしれないが嫌いではないのだろう、楽しそうに踊っている。

「よかった」

ルビイちゃんはそんな花丸ちゃんの様子を見て安心していた。

「ルビイね、花丸ちゃんが無理して私に合わせてるんじゃないかって心配だった」

流石のルビイちゃんでも急にスクールアイドル部に体験入部しようなんて言葉を頭から信じていなかったらしい。花丸ちゃんの思惑はなんとなくは気付いているようだ。

「でも、花丸ちゃん楽しそう」

ルビイちゃんの御墨付きがあるならば間違いない。ならば話は早い。二人が擦れ違う事の無い道筋は見えた。というより、私に変に構えていただけでそれは杞憂だったのだ。二人ならば自然とその結論に至っていただろう。なら私はただ見ているだけでいい。

「次黒松ちゃんやる？」

「やりません」

そう。私は見ているだけでいい。運動が苦手とか断じてそういう理由ではないのであしからず。

第十三話

オラずらペテン師、国木田花丸の弱点を遂に突き止めたルビイちゃん。だが、その弱点を突くには特定の条件を満たさなければならなかった。

だが、ルビイちゃんは信じてる。二人なら乗り越えられない壁はないと。

今日も元気に頑張ルビイ、はじまるよ。

とまあ、適当な導入はさておき山に来た。理由はそこに山があるからだ、嘘だ。

いや、全面的には嘘ではない。スクールアイドルにはダンスをしなから息切れすることなく歌い上げる体力が必要なのだ。だからこそ山ダツシユ。かのμsも階段ダツシユしていたらしく、ならば山ダツシユしようというのが高海先輩の談だ。実にシンプルな答えだ。

そんなこんなでスクールアイドル部一同は学校の近所にある山まで来ていた。標高はせいぜいが数十メートル。山というより小高い丘だ。

だが納得いかない。何故私も連れて来られなければならないのか？

「乗りかかった船だよ」

「私は乗ってないんですけど」

「大丈夫。牽引するから」

「それは拉致というのでは？」

とはいえのこのこと付いてきてしまったのは私だ。どうにも高海先輩の誘いは抗いがたい。断りにくいのではなく、誘いに乗りたくなるような楽しそうな響きがあるのだ。流石にスクールアイドルやろうだとか譲れないものの誘いには乗らないが。

「どう？黒松ちゃん運動不足解消にやってみない？」

「桜内先輩まで。私をインドア派と決めつけるのはやめてください」

「違うの？」

「変わらないですけど」

「じゃあ、よーいどん」

「あ、ちよつと」

この先輩方は確信犯だ。そう確信した私は渋々先を走る先輩とルビイちゃん達の背中を追い掛けて歩いた。

先輩方はこれまでの積み重ねがある分ペースが良い。それに比べルビイちゃんは少し遅れているがガッツで食いつこうとしている。

花丸ちゃんと言えばルビイちゃんからすら出遅れてへ口へ口だ。

この分ならば歩いていても追い付けるだろう。

私は山道の階段を歩きながらスクールアイドルについて考える。

煌びやかなイメージに反してその活動内容は非常に地味で世知辛い。

とにかく基礎が大切で練習の大半がひたすらの反復練習と体作りだ。

だからその活動の壁の一つとしていかにその地味な練習を乗り越えられるかが関わってくる。

地味な割にキツイ。ニワカが中途半端な覚悟でやるとこの二重苦に挫折するのだ。

かくゆう私もその壁を味わったことがある。その時支えになったのが活動を一緒にする仲間の存在だ。お互いに支え合い、苦しみを共有し、喜びを分かち合う。そうやって壁を乗り越えて輝きを増していくのだ。

だが、私はその輝きを嘘で曇らせた。

「あれ、花丸ちゃんに追い付いちやっつた」

気付けば全身で呼吸する花丸ちゃんの背中が見えるところまで来ていた。

「やっぱリマルには無理ずら」

花丸ちゃんは私に気付いていない。だからそのつぶやきは彼女の本心に他ならない。

彼女の口調からするとスクールアイドルに対して少なからず挑戦してみようという意思があったのだろう。

きつと花丸ちゃんはルビイちゃんに知らず知らずの内に感化され

て、ルビイちゃんの為と言いつつ自分もスクールアイドルをやってみたかったのだ。

花丸ちゃんがルビイちゃん共々スクールアイドル部に、Aquoursに入ればきつと素敵だ。

なら私は花丸ちゃんにどう声を掛ける？

頑張れ、負けるな、なんて誰でも言えることしか私には口にすることが出来ない。きつと私の言葉じゃ彼女には届かない。

「ルビイちゃん」

「おおとつと」

どうやらルビイちゃんは花丸ちゃんを待っていたらしく、悶々と後をつける間に追いついてしまったようだ。思わず私は隠れてしまった。いや、寧ろこれで良いだろう。

花丸ちゃんがルビイちゃんを長年の躊躇いから突き動かすことが出来たように、花丸ちゃんを突き動かすことが出来るのはずっと一緒にいたルビイちゃんしかいない。

私に出来るのことは言葉を伝えることじゃない。今までだつてそうだった。いつだつて私は伝えたいことは言葉じゃない。

私は山道を引き返すと胸ポケットからハーモニカを取り出した。

「自分勝手にごめんね。でも、私にはこれしかないなんだ」

私自身の悩みは消えない。だが、この衝動は止められない。誰かに力をあげたいというこの気持ちは。

「—————」

私は山道を下りながらハーモニカを吹き始めた。曲はbrave heart。宮崎歩の曲だ。

この曲に難しい言葉はない。小学生低学年で習い終える言葉しか使われていない。それだけに真つ直ぐで熱く、長きに渡り支持され続けている。もちろんメロディーも非常に格好良く、ギターやピアノのサウンドは耳に非常によく残る。

ハーモニカだけでは残念ながらその原曲の素晴らしさの全ては表現しきれない。だが、これ以上の応援歌を私は知らない。

どうかルビイちゃんと花丸ちゃんがよりより未来に進めますよう

にと私は願いを込めてハーモニカを奏で続けた。

第十四話

山道を降りていくと途中で休憩スポットが設けられていたため、そこに設置されている落下防止柵に腰を落ち着かせて私は演奏を続けた。

夕日が穏やかな海を茜色に染め上げ、輝きに私は思わず目を細めた。きつと頂上からこの景色を見られたならばより綺麗に映るだろう。

音楽が好き、演奏が好き、それを誰かに聴いて貰うことが大好き。誰にも話していない私の本音だ。誰にも本音を話さない私が、ルビイにはその本音をもっと素直に出して欲しいと願うのは傲慢なのかもしれない。でもそれは私だけの願いではないのだ。だから今日は開き直りともなんとかわれようとも届けたかった、この想いを。伝えたい、勇気を。だからこそ奏でているのは brave heart なのだ。

「なんですの？こんな所に呼び出して」

一心不乱に演奏すること数分。曲が終わる頃を見計らっていたのだろう。いつの間にかやられていた生徒会長こと黒澤ルビイの姉、黒澤ダイヤさんが声を掛けてきた。

呼んだのは他でもない私だ。とは言っても私にそうするよう以来したのは花丸ちゃんだが。まさか私がダイヤさんと対峙することになろうとは思ってもみなかった。

「生徒会長は、ダイヤさんは頑張る人、好きですか？」

「なんですの？藪から棒に」

「私は好きです。今の私にはもう無くなってしまったけれど、そうやって輝く人が好きです」

「何か悩みでも？相談ならいくらでものりますよ」

突然語り出す私に戸惑いながらもダイヤさんは私に手を差し伸べてくれる。

一見するとややつり目がちで口調もつつけんどんな印象だが、その言葉は相手を思いやる気持ちを感じる。A q o u r s のファースト

ライブの時だってそうだ。何もその時に言わなくてもいいことを敢えて言ったのはそれが A q o u r s の事を本当に思っていたからこそだと私は思っている。

そんな人の良いダイヤさんに私は微笑みを返して続ける。

「ダイヤさん呼び出したのは私ですけど、本当に話したい人が後から来ます。だからもう少し待っていていただけますか？」

花丸ちゃんとルビィちゃんがどのような結末を迎えているのか分からない。だけど私は後を花丸ちゃんに託すことにした。

私はダイヤさんに頭を下げると再び山を下る。

高海先輩達に挨拶もなしになってしまいが、それはまた明日謝れば良い。屋上に居れば彼女達はまた来るだろうから。

私は山道を降りながらハーモニカを再び構える。

かつて大切な人と共に踊りながらハーモニカを演奏していた私には歩いての演奏など造作もない。

曲は流星。熊木杏里の曲だ。

この曲は非常に緩い。もちろん良い意味でだ。とにかく力まないのだ。まあいいからとにかくやっついていこう、みたいな適度ないい加減さが心地良い曲だ。

花丸ちゃんが到着するまでの間、ダイヤさんを飽きさせないよう
に、それでいて気張り過ぎないようにと私なりの配慮だ。

さて、朗報を期待して帰宅するのでしょうか。

第十五話

今日も今日とて私は屋上にいた。

朝登校した時、ルビイちゃんからスクールアイドル部に正式に入部することを聴いた。どうやらダイヤさんの説得にも成功し、晴れて何の憂いもなくスクールアイドル部に入る運びとなったそうなの。

それと同時に花丸ちゃんはスクールアイドル部に入らないことを聴かされ私ばかりした。勝手な話だが私は期待していたのだ。花丸ちゃんがスクールアイドルになりルビイちゃんと並んで歌い、躍る姿を夢想していた。

だが、ルビイちゃんは言った。花丸ちゃんにはスクールアイドルへの憧れがあつたのだと。やってみないと本心から思う心があつたのだと。だから今日の放課後、花丸ちゃんをスクールアイドル部に誘うのだと。昨日貰った勇気を振り絞ると。

そう言われたら信じるしかない。だから私は約束をした。上手くいったら私が屋上でお祝いの演奏会をすると。だから絶対に上手くやるようにと。

「まさか、ルビイちゃんをスクールアイドル部に入れるつもりが、いつの間にか花丸ちゃんを入れようとする事になるとはね」

気付けば立場が逆転していたのだから面白い。それにルビイちゃんは私や花丸ちゃんの想像を超えた。花丸ちゃんは自分が足手まといであると思つて身を引くつもりだったのだろうが、ルビイちゃんはそれを見事に引き上げた。ルビイちゃんは花丸ちゃんが考えている以上に花丸ちゃんを想っていたのだ。

「ね、花丸ちゃん、ルビイちゃん」

そして約束は果たされた。

ルビイちゃんが居るから目立たないかもしれないが花丸ちゃんもまた引つ込み思案なのだ。だから自分が気持ちすら自分に気付かれないように隠してしまう。それによく正面から向き合いスクールアイドル部へと入ることとなつたのだ。

屋上に二人で駆け込んできたときには屋上から思いっきり叫んで

しまったものだ。よくよく考えたら女子が出してはいけない種類の声だった気がするがそれは気のせいにしておくことにする。

「ところで、先輩達。お三方は誘ったつもりはないのですが」

そして晴れてメンバーが増えたスクールアイドル部の初期メンバー三人もまた屋上に上がってきたいた。

「連れなないこといわないでよ、黒松ちゃん」

「しょうが無いですね」

半ばこうなることは判りきっていたので私から口うるさく言うつもりは無かった。

「じゃあ今日という日を祝って、全てのスクールアイドルに贈られた曲を吹きます。踊れる人は踊ってください。では聴いて下さい、Sunny day song」

これはμ'sとライブ第一回大会を優勝したA-RISEがスクールアイドルというコンテンツを不動のものとするために開催したスクールアイドルイベント、言わばスクールアイドルフェスティバルでの全体曲として参加したスクールアイドルと共に作り披露した曲だ。

夢と希望と、なにより楽しいが沢山詰まった元気いっぱい曲だ。

この曲はその製作理念からスクールアイドルイベントが開催されると合唱されたりしている。μ'sから全てのスクールアイドルに向けての贈り物。スクールアイドルのスクールアイドルによるスクールアイドルのための曲だ。

ハーモニカを吹き初めて一小節終わる前には高海先輩とルビィちゃんは立ち上がり踊り始め、それで何の曲か気付いた渡辺先輩と桜内先輩も踊り始めた。花丸ちゃんは知らないみたいだったけど、そんなみんなに触発されて見よう見まねで踊る。拙い踊りになっているけれど、でもみんな楽しそうに笑っている。

演奏しながら私も踊る。楽しい。

沼津に来てからこんな風に音楽を楽しめる日が来るなんてもうないと思っていた。自分が心の底から楽しんでいることに満足感を得るとともに、離れ離れになってしまったかつての仲間を想う。彼女は

今、音楽を楽しんでいるのだろうか。

「黒松ちゃん次はユメノトビラ吹いて」

「だけど今は楽しもう。こんな風に私と音楽を共有してくれる人達と出会えたのだから。」

第十六話

海。 そうだ、海だ。 断じて園田海未ではない。 園田海未とは誰だつて？ 馬鹿野郎、 μ ♂sのブルー担当だ。

ん？ 何を言っているかって？ 海だ。 私は海に来ている。 何故こんなことになったのか？ それは学園長だ。

あのハイテンション学園長は何をとち狂ったのかシャイニーと雄叫びを上げながら私にパシリを頼ん、いや強制した。

どうにも書類と添え状を届けて欲しいとのことだったのだが、どうやら休学している生徒の元に復学届を持って行かせようというのだ。 不安過ぎる。

休学とか訳あり感がプンプンするので是非とも避けたいのだが、行かなければペナルティー、行けば特典があるとのことだった。 因みにペナルティーも特典も何かは秘密とのことだ。 胡散臭い事この上ない。 しかもあの学園長、私を送り出す時にデンジャーとか抜かしていたから余計に不安だ。

「ここか」

小さな船着場に程近いダイビングショップ。 そのの娘が件の人物とのことだ。 学年は三年生。 先輩だ。 きつとダイビングをやっているくらいだからギャルに違いない。 きつと色黒でパツキンのチャンネーでパーティーピーポーに違いない。 偏見だろうが、そうに違いないったら違いないのだ。

「ごめんくださいーい」

私は気合いを入れてガラガラと引き戸を開く。

店内は平日だけあり閑古鳥。 客はいなかった。 その代わりにすりりとした色白のポニーテールの美人なお姉さんが店番をしていた。

「すみません。 浦の星女学院の黒松と申しますが、学園長からのお使いで参りました。 松浦果南さんは居られますか？」

「お使い？ ご苦労さま。 どうせ鞠莉のことだから人を振り回してるんでしょ？」

「ええ。 その通りです」

どうやらポニーさんは学園長と知り合いらしい。話が早くて助かる。

「鞠莉なんか伝言とか言ってなかった?」

「伝言はありませんが、添え状なら頂きましたよ」

「見せて」

「え、でも松浦さん宛てですよ?」

ポニーさんは「ん?」と首を傾げると、思い至ったように手を叩いた。

「ああ、まだ自己紹介がまだだったね。私が松浦果南だよ」

「え? パツキンのチャンネルでデンジャラスなパーティーピーポーでは?」

「どんなイメージよそれ。沼津にそんな子いないよ」

ポニーテールさんこと松浦果南さんは呆れ顔で私から添え状と書類を受け取ると、添え状に目を通す。

「千歌達頑張ってるのね」

「千歌先輩ともお知り合いなんですわね」

「幼馴染みなの。ご近所さんだしね」

ほらあそこ、と外に出て指さすと数十メートル先に老舗旅館があった。

「あれ千歌ん家ね」

「近っ」

千歌先輩だけにね。因みにこないだの屋上での演奏会以来先輩方を下の名前で呼ぶこととなった。どうにも苗字は他人行儀で嫌なのだ。

「世間って狭いですね」

「この辺は特にね」

片田舎であるここはほぼ隣人〓知り合いらしい。

深い人間関係が構築される反面、新しい住人はなかなか定着しないのだという。ある程度完成されてしまった地域感は新たな変化に乏しい事が理由の一つだ。

「それにしても鞠莉の奴、余計なことを」

「どうかしました?」

「あー、いやこつちの話。それよりハーモニカ吹けるって書いてあったけど、折角だし聴かせてよ」

「鞠莉さんの奴、余計なことを」

まあ特別隠している訳でも無いし別にいいのだが。というか、私のことまで書いてあるとはあの添え状には何が書かれているのだろう。「了解です」

いつも通り曲のチョイスはこちらでやる。今日の曲は A P e r f e c t S k y。B O N N I E P I N Kの曲だ。C Mで起用されていたイメージが強い。エビちゃんが出ていたあれだ。

松浦先輩はスラリと引き締まったプロポーションは正にモデルと言っても過言では無い。それに加えあの大人っぽさは同性でも見惚れてしまう。そのためこの曲をチョイスした訳だ。

こないだ屋上で皆で歌い踊った時も楽しかったが、こうやってのんびりと誰か一人の為に演奏するのも悪くない。

松浦先輩は目を閉じて私の奏でる音に耳を傾けてくれる。それもまたいやに様になるので美人はずるい。

「ありがとう。生演奏なんて久し振りに聴いたよ」

「やっぱ生に限りますよ」

「そんな親父くさい言い方だとビールみたいだよ」

演奏後、松浦先輩は素直な感想をくれた。よかった。やはり音楽が嫌いな人はそうはいない。

「松浦先輩は音楽は好きですか?」

「果南でいいよ。もちろん好きだよ。楽器は出来ないけどね」

「なら復学したらスクールアイドルやってみたらどうですか? 千歌先輩とも幼馴染みといえますし、きつと凄く素敵だと思います」

果南先輩は私の言葉に顔を曇らせた。ただ嫌いだとか、そんな顔じゃない。一つの感情では表すことが出来ない、曰く言いがたい表情だ。

「やらないよ。私三年生だよ? そんな余裕ないの」

だが、そんな表情をしたのも束の間、すぐに苦笑いしてそう切り返

した。

「そう、ですか」

「星だっけ？鞠莉からホントに何にも言われてないの？」

「はい。特には」

ふーん、と果南先輩は顎に手を当てて考え込む。

そんな様も絵になると思いながら私は果南先輩に別れを告げた。

第十七話

果南先輩への届け物が完了した事を学園長に報告しに戻ると、学園長室には学園長こと鞠莉さんとダイヤさんが何やら話している様子だった。

「果南さんに黒松さんをけしかけたのは何故です?」

「もう知ってるんだ。でも、けしかけたつてのは心外ね」

ダイヤさんは強い口調で詰め寄るも鞠莉さんは飄々としていた。だが、鞠莉さんの口調がエセ外国かぶれの喋り方ではないためシリアスな会話であることが窺えた。

「何かが変わるかもしれない。そう思つて」

「らしくないですね。鞠莉さんなら自分でいつも動いていたのに」

「それだけ私が本氣つてこと」

どうにもダイヤさんと鞠莉さんはお互いの人となりを理解しあっている仲らしい。話しぶりからはそんな様子が窺える。また、どうやら鞠莉さんの狙いは果南先輩であることも。復学以上の狙いがあるのだろうかそれと私にどう関係があるのか?

「でも何故黒松さんを?」

「あの子も迷いがありそうだから、お互いに良い方向に転べばいいなつてね」

「黒松さんが迷う? ルビィ達と楽しそうにしていますけど。いや、でも」

なにやら話が私の面白くない方向になりつつあるため私は学園長室をノックして返事も待たずに入室した。

「ちわーす、三河屋でーす」

「あら、お帰りなさい黒松ちゃん」

私が立ち聞きしているのを気付いていたのか分からないが、鞠莉さんはシリアスモードのまま応対する。空気を読んで帰れとでも言いたいのかもしれないがそうは行かない。

「騙しましたね鞠莉さん。果南先輩のどこがデンジャーなんですか」

「デンジャラスビューティーの方よ。それより果南はなんか言つてた

？」

「鞠莉は何も言っていなかったの？って言ってましたよ。お互いに腹の探り合いをするくらいなら、腹割って話したらどうですか？」

なんて自分のことを棚上げにして言ってみる。だが、実際に彼女達の関係性はどうかあれお互いになにがしかの関心があるのだから話をする以外に溝を埋めることは出来ない。それが出来なくて手遅れになった私が言うのだから間違いない。

「参考にさせてもらおうわ。ところでお駄賃なんだけど」

「ああ、いいですよそんなの。その代わりに約束してください」

私が態々二人の会話に介入した理由を片付けなければならぬ。そのため私は鞠莉さんの言葉を遮って忠告させてもらった。

「私のことをあまり詮索しないでください」

不本意ながらも来てしまったことは私のことを誰も知らない、ある種の楽園だった。だから私のことを掘り返そうなんてことを認められる訳が無いのだ。

「私を利用するのは勝手ですが、私のことに深入りするなら私は鞠莉さんとは仲良く出来ませんよ」

そんなことにさせないでくださいね、と私は普段人にあまり見せない微笑みでもって威圧し学園長室から立ち去った。

変な時間の帰宅となってしまったが、バス停に行くと曜先輩が一人でバスを待っていた。

「珍しいですね、お一人なんて」

「水泳部に顔出してたからね。変な時間になっちゃったよ。そっちは？」

そう。曜先輩はスクールアイドル部と水泳部を兼任しているのだ。何でも高飛び込みでは相当な実力なんだとか。

「学園長からのパシリです」

「うわ、面倒くさそう」

全くです、と言うと二人して笑ってしまった。学園長が人を振り回すのが得意な事は就任してから間もないのにもう周知の事実となっているのだ。

「曜先輩こそ兼任なんて大変じゃないですか」

「私は二つとも好きでやってるの」

曜先輩は本当に今を楽しんでいるのだろう。スッキリとした顔で宣った。

「曜先輩って高飛び込みの優秀な選手だと聞きますけどいいんですか兼任で」

「いいの。私ね、今まで千歌ちゃんと一緒に何かをしたことってなかったから、今一緒にスクールアイドルをやれて本当に楽しんだ」

「私は楽しいよ。星と音楽をやれて」

曜先輩の言葉がかつての親友の言葉と重なる。

学園長室での出来事もあり動揺のあまり動悸がしそうになるのをぐっと堪える。

「曜先輩は千歌先輩が本当に好きなんですわね」

曜先輩は私の言葉に珍しく動揺し赤面した。

「今の顔可愛いですよ」

いつもは飄々とした余裕のある雰囲気があるため中々こんな顔は見れない。

「じゃあ、私からも質問」

曜先輩は顔を赤くしたまま誤魔化しに入った。

「星ちゃんは音楽も好きで人前で演奏するのも好きなのに何でスクールアイドルやらないの？」

学生の音楽人は路上で気ままに演奏するよりもスクールアイドルとして売り出した方が人の関心を引きやすい。そのためガールズバンドでグループを組んだりしている人なんかはスクールアイドルのコンテンツに乗っかって活動しているところも少なからずあるという話だ。

かくいう私もかつては相方と共に音ノ木坂に入り、スクールアイドルのバックミュージックをしたり場合によつてはスクールアイドルとして表にでようとも考えていたことがあった。今は昔の話になつてしまつたが。

そう、昔の話なのだ。私にとつてスクールアイドルとはもう消えてしまつた流れ星のようなものだ。かつて見た夢も、頑張つたことも、全て私の嘘が塗り潰して消えてしまつたのだから。

「今の私は気儘な吟遊詩人つてところですから。何かを目標につてよりもその時その時を楽しみたいつて感じなんです」

私の現状を表すならこんな感じになるのだろう。嘘ではないが、本当にそうなのか最近は自分自身でも判断がつかないところだから悩みは尽きない。

「星ちゃんが入ってくれたら素敵だと思ふんだけどな」

「私なんてヴィジュアルが良くないですよ」

実際、A q o u r s の面々はそれぞれ違うジャンルだが容姿は整つている。そこに私が加わつてみる。公開処刑と人は呼ぶ。

「そうかな？星ちゃん大人っぽい雰囲気あるし、A q o u r s に足りない部分だと思ふんだけどな」

「私は髪型と化粧で誤魔化してるだけです」

容姿だけが全てではないとはいえ、容姿が良い方が見栄えがいは事実だ。

私は顔の造形に関しては若干バランスが悪い。ただ極端に悪い訳でも無いのでキモいとか言われないが可愛いとも言われない、素の状態だとそんな容姿だ。

この容姿問題は私が音ノ木坂を目指していた時にぶち当たり、髪型を試行錯誤したり先生にバレないメイク術を磨いたりでなんとか人前に出ても恥ずかしくない程度には誤魔化せるようになった。

よくμsを普通の女子高生と表現するのを聴くが、それはプロのアイドルに比べてガチメイクをしていないだけだ。素の素材は寧ろ全員が一級品だから勘違いしてはいけない。

「謙遜して」

「そんなことないですが、まあ皆さんにはメイクなんて最低限で平気ですよ」

先にも言ったが皆容姿は整っているのだ。彼女達らしきを出すには寧ろメイクは最低限で十分。そこにカモフラージュしてバレにくくしているとは言えガチでメイクしている私が入ったらバランスが悪い。それに男の目はメイクをカモフラージュ出来ても女は目敏い。似たテクニックを持つ相手にはメイクしていることなどすぐ分かる。「とにかく私はAqoursには入れません」

Aqoursに私は異物だ。リングの木に腐った実が付いていた他のリングも駄目になってしまうようにきつと私は良い影響を与えない。

私は太陽を見上げるだけのイカロス。高望みはしてはいけないのだ。

第十八話

太陽の日射しも厳しくなり遮蔽物のない屋上はいい加減暑い。特に放課後は日中に熱せられたコンクリートが容赦なく輻射熱を放ち上と下から両面こんがりターンオーバーだ。

そんな環境でもここに来る物好きはいる。私とスクールアイドル部とそして

「あれ、善子ちゃん？」

墮天使ヨハネこと津島善子だ。

今日も今日とて教室に顔を出さずに屋上に来ていた彼女は、物好きの一人、国木田花丸に見つかったのだ。

津島さんは花丸ちゃんに姿を見られた瞬間に逃亡を図り屋上から姿を消した。

「あー、花丸ちゃん。任せた」

「うん。了解ずら」

私はこれまでちよくちよく関わっていたが津島さんはついぞ教室には来なかった。勿論普通に登校するようにそれとなく勧めたりもしたが、効果は無かった。

ならばきつと誰か別の適任者がいるということだ。私には届かない言葉や想いも幼馴染みである花丸ちゃんなら或いは届くかもしれない。

「じゃ、花丸ちゃんが戻ってくるまで場は繋ぎますよ」

けしかけた手前穴埋めは必要だ。私は今日もまたハーモニカを取り出すと、気の向いた曲を奏で始めた。

曲はHOT LIMIT。T.M. Revolutionの曲だ。子気味良いテンポの夏の代表曲。

歌詞に非常に遊び心があり、夏の楽しさ、陽気さを跳ねるように表現している。

私個人としてはその羽目を外したくなるような陽気さは夏の到来時にこそ相応しいと思っている。

もちろん皆は世代では無いが、サビまで行けば聴いたことある程度

には認知しているので、サビになると予想通り盛り上がった。余談だがこの曲に現れるのは堕天使ではなく妖精であるのであからず。

翌朝、私は堂々と学校前の坂を上る津島善子の姿を目撃した。いけしやあしやあと登校するその姿に花丸ちゃんの説得が実を結んだことを確信した。

「おはよ、ヨハネスブルグの天使」

「なによそれ、ヨハネよ、ヨ・ハ・ネ。はっ、違う。善子です。お間違いないように」

津島さんは独自の堕天使というキャラクターを心の内に秘めている。秘めている？表に頻繁に出てる気がするが、まあ秘めているのだ。そのため彼女と会話をするとコロコロとキャラクターが行ったり来たり忙しいのだが、今日も朝から絶好調のようだ。

「いい？ズラ丸にも言ったけど、私が堕天使になりそうになったら止めなさいよ」

「あ、そういう方向性なのね」

「どうやら彼女は自分の趣味を隠していくようだ。」

「だけど私は確信している。無理だと。だって津島さんと話していると唐突に、そして頻繁に堕天使が顔を出すのだ。その時の没入ぶりとはもはや第二人格と言っても過言では無い。沼津のビリー・ミリガンだ。」

「いいの？自分の趣味を隠して辛くない？」

「誰しもが自分の全てを晒している訳ではないが、少なからず隠している部分も知って欲しい、分かって欲しいという願いを持つ。乙女の秘密の花園とでもいうものだ。」

「だから津島さんはきつと隠せない。彼女はまだ堕天使を卒業出来

ていない。

「いいの。普通に学校行つて、私はリア充になるんだから」

リア充＝彼氏持ちとは限らないが、男子のいない浦の星女学院、沼津も内浦という田舎町、この環境でリア充になるとか無理ではなからうか？

「あ、がんばって」

「今流したでしょ。絶対流したよね？」

「そんなことないよ、善子ちゃん」

「ヨハネよ、はっ」

うん。直ぐにバレるだろうけど、きつと皆に迫害されることはないだろう。彼女は気付いていないだろうが、彼女は面白い。特に墮天使から元に戻った瞬間が非常に。つつい墮天使を誘発させたくなる面白さだ。人の悩みを面白がるのは些か不謹慎かもしれないが、微笑ましいのだから仕方が無い。

「じゃあ折角だしクラスメートに挨拶しよ。ほら、前歩いてるあの三人組」

「え、ちよつと待って」

「おはよー」

無理矢理先行するクラスメートに声を掛けて振り向かせると、あわあわとしていた津島さんは一瞬で澄ました顔に切り替わっていた。

「おはよう。ちよつと休んでたけど心配掛けて御免ね」

なんて品行方正な女学生ぶつた言い方をしている、なにこれどこの深窓の令嬢。

入学式の自己紹介の時とのギャップが激しすぎて三人とも目を丸くしている。

さて、どこまで続けられるか実に見物である。

第十九話

津島善子がどこまでキャラバレせずに済んだか気になる結果発表。

昼休みまで？それとも帰りまで粘りきれた？それぞれオツズをしていたと思うが私はある一点賭けだった。それは朝のホームルームまで。そしてその予想は的中だった。

クラスメートの皆がやっと登校した津島さんに興味津々で話し掛けていたときのことだ。彼女が占いが趣味だと話したところまでは良かった。まだ普通だった。だが、そこからがいけなかった。

誰が想像出来ただろうか。学校に魔方陣の描かれたクロスや黒装束を持ち込んでいるなどと。ロウソクまで準備しているなどと。

彼女はその魔方陣のクロスを広げると黒装束を纏い、ロウソクに火を付けて占いを始めたのだ。

止める間もなかった。いや、嘘だ。だが、皆あつけにとられてしまったのだ。

私も正直その時まで彼女のことを侮っていた。だがそれは大きな間違いだった。こいつはガチな奴だったのだ。伊達や酔狂で墮天使を語っている訳ではなかったのだ。

いち早く再起動したのは花丸ちゃんだった。花丸ちゃんはロウソクの火を吹き消してその占いという名の黒魔術お披露目会は終わった。

幸いにしてクラスメートはその件について苦笑いする程度で特に津島さんを避けたりするような事は無かった。

それはそれで私は納得出来た。津島さんのあまりにも堂に入った様は有無を言わさぬ力があつた。下手に弄ってはいけない本気さが皆に認められたのだ。もつとも本人はそのことに気付いていないだろうが。

「どうしよう。なんとかしてよ」

そんな事があつた日の放課後、私は屋上に行こうとしたところを津島さんに連行され、気付けばスクールアイドル部の部室に来ていた。何故だ。

「そもそもなんでそんなものを学校に」

梨子先輩の言うことはもつともである。だがハーモニカを学校に持ち込んでいる私にも分からない気持ちではない。

「それは、ヨハネのアイデンティティっていうか、はっ」

「なんか心が複雑になっていいことは良く分かった」

相変わらず墮天使が顔を覗かせる様を見て梨子先輩は非常に面倒くさそうな顔をした。

人の癖などなんとかしろと言われてもそうそうなんとか出来ないのだから当然の反応である。

「というか私個人的にはなんとかする必要はないと思うんだけど。」

「私は津島さんのヨハネの時の感じ結構好きなんだけど」

え、とスクールアイドル部一同が私を見る。いや、マジでそのウーパールーパーを初めて見た人みたいな顔するのやめてくれない？

「可愛い」

いや、ただ1名違う反応の者が居た。千歌先輩だ。

千歌先輩はルビイちゃんが開いたインターネット上の善子ちゃんの占い動画のページを見ていたのだが、どうやら惚れ込んだようだ。これはあの流れが来る。そう思ったのは私だけではないだろう。

「津島善子ちゃん。いや、墮天使ヨハネちゃん。スクールアイドルやりませんか？」

「はっ。」

案の定、津島さんの頭にはクエスチョンマークが浮かび上がっていた。

話も一段落したところで解散、とは問屋が卸さず、乗りかかったタイタニック号とでも言わんばかりに私はスクールアイドル部から解

放されることはなかった。

屋上での練習ではスマホで練習動画の撮影や、メトロノーム代わりにリズムをとり、筋トレではストップウォッチャーをやったりとマネージャー活動をする羽目になった。

腹いせに練習の最後に私の演奏のもと、μ'sのこれからのsomedayを踊らせたのでそれなりに満足だった。

「あんた鬼ね」

律儀にもそれに付き合っていた部外者は私だけではない。津島さんもまた最後まで見学していたのだが、ジト目で私を見てそんなことを言うのだから甚だ心外だ。

「何言ってるの。スクールアイドルやるならμ'sの代表曲は振り付けくらいは覚えてないと」

「だからって覚えるまでやり直しか鬼以外のなんと云えば」

「堕天使とか?」

「堕天使なめんな」

もし他に例えるとしたら、魔法少女でも魔女でも無いし、悪魔とも言うしかない。なんてね。

「人はそれをブラック松と言うのです」

「ルビィちゃんはもう一曲、踊りたいの?」

そういうとルビィちゃんは小さく悲鳴を上げて花丸ちゃんの背中に隠れた。

「星ちゃんはよく覚えてるね」

「一般常識です」

「それどっかで聴いたことがある」

「でもあながち間違いないですよ。スクールアイドルが好きな人は結構覚えちゃうんですよ」

だって私がそうだったから、とは続けない。というか私は音楽全般が好きでどれか一つのジャンルに傾注はしてないつもりだ。ただ、スクールアイドルは相方と音ノ木坂を目指していた時の影響で覚えているものが多い。その中でもμ'sはやはり特別だ。

楽曲そのものの良さについては古今東西のスクールアイドルの中

でもトップクラスだが、歌やダンスの技術的な面で言えば、実はμ∩sよりも上手いスクールアイドルは大勢居る。それでも彼女達が特別であり続けるのは理屈では語りきれないものがある。理由を述べようと思えば幾らでも出てくるが、そのどれもが正しく、それらだけでは足りない。千歌先輩なんかは輝きと表現するし、私なんかは最初の頃は熱と表現していた。

「好きなものってさ、そんなつもりがなくても自然と覚えちゃうよね。私もそうだったし」

「千歌ちゃんはじめの頃は毎日μ∩s、μ∩sって大騒ぎだったもんね」「もう、曜ちゃんそれは言わないでよ」

千歌先輩と曜先輩はクスクスと笑っている。ちなみに言うがμ∩s、μ∩s言っているのは今も変わらない。

「ねえ、皆はμ∩sみたいなスクールアイドル目指してるんでしょ？なら墮天使キャラなんて方向性が違うくない？」

津島さんは練習の見学をしながらずっと考えていたようだ。なぜ自分を墮天使ヨハネとしてスカウトするのかと。

第三者から見ればなんとなくだが誘った理由は分かる。しかし、それを千歌先輩は上手く理解しているだろうか？千歌先輩は感覚派だから直感的にスカウトした可能性は否めない。

「他のスクールアイドル調べてみても墮天使アイドルってなかったからいいと思うんだよね」

ほらやっぱり。多分誘った時はそんな事知らなかったのだからもつと根本的な理由があるはずだ。

「想像してみて。皆が墮天使っぽい衣装を着てステージで踊ればきつと可愛いよ」

「確かに」

千歌先輩の言うようにステージに立つ姿を、ついでに言えば自分がセンターに立つ姿を想像したのだろう。にへら、という擬音が似合うやっつてはいけない類いの笑い方を津島さんはしていた。

「任せなさい。皆を素敵な墮天使にしてあげるんだから」

何故だか津島さんがやる気を出すことに凄く不安を感じた。

第二十話

墮天使の衣装が完成し紹介用PVを撮影することになった。

白と黒のコントラストがはつきりした衣装はA q o u r sのファーストライブの時の、いかにもアイドルというカラフルな衣装とは方向性が全く違ったものとなった。スカートはより短くなり梨子先輩なんて戦々恐々としていたが、衣装そのものはファーストライブのものより落ち着きのあるデザインとなっている。その洗練された可愛らしさに思わず溜息が漏れてしまう。

「いい衣装が出来て良かったですね」

「これ踊ったら絶対見えちゃうよね」

「見えても平気なやつを履くんですよ。ほら、プロの女子テニス選手が履くような」

「いや、下着のデザインが恥ずかしいとかじゃなくて、見えるという事実が」

「梨子先輩。甲子園で応援しているチアリーダーは足上げしても恥ずかしがらないですよ。だからここは慣れないと」

うーむ、と梨子先輩は難しそうな顔をしているが、こればかりは慣れて貰わなければならぬ。

「これは絵になりますね」

「でもまだ新曲も出来てないのに紹介用PVだけ撮るっていいのかな？」

「避けては通れない道ですよ」

またもや呻く梨子先輩だった。

墮天使アイドルのPVは墮天使ヨハネの紹介と各メンバーの紹介。そして決めポーズをするという流れなのだが、その台詞まわしやポーズはガチな人でなければ羞恥心に殺される類のものなのだ。

梨子先輩が躊躇いを覚えるのも頷ける。更に一言添えるなら、私ならやらない。

スクールアイドルとしての在り方を試行錯誤しているとはいえ、メンバー全員が納得しているとは言えない今回の試みはもしかしたら

不味いのではないか、とも思わなくもない。でも止めはしなき。見てるこっちは面白いからね。

「取り合えずPVを撮ったら気分転換しましょう」

「気分転換？」

「セッションの約束、守ってもらいますよ」

梨子先輩の得意なピアノは基本的にソロでの演奏だという。だから梨子先輩が演奏して一つの音楽を創るのは学校の合唱やこのスクールアイドル活動以外にはやったことがないという。

いずれの演奏も歌い手と合わせる形であるため楽器で誰かと音を合わせることはしたことがないと以前話していた。

「喜んで。でもどこでする？」

「家に招待しますよ。ピアノもありますし」

「星ちゃんピアノ出来るの？」

「専門ではないので曲の旋律をなぞるくらいしかできませんが」

ピアノでは歌って躍る相方に並び立ってパフォーマンス出来ない。そういう理由で私はハーモニカに重点を置いたのだ。もつともそれを態々口には出さないが。

「そうなの。私とはアプローチのしかたが違うのね。じゃあ撮影の後で」

梨子先輩には不思議な事なのだろう。一つを極めようとする人には私のようにあれこれ手を出すのは非効率に映るだろう。だが、私に言わせれば梨子先輩だってスクールアイドルをやっているのだから私とさして変わらない。それに全ての道はローマに通ず。音楽はどこで何が接点を持つのか分からない。携わっている限り完全に無駄になることはない。

「PV撮影頑張ってください」

梨子先輩は諦めたように苦笑いして千歌先輩に連れて行かれた。

部屋の照明を付けると所狭しと楽器が列んでいる。ピアノ、ドラム、ギター等の弦楽器にトランペット等の管楽器。アナログなものも電子楽器も合わせて揃っている。それを揃えてなお部屋はそれ程の狭さを感じない。

個人の邸宅でこれだけの広いスペースを確保出来たのも地方に越してきたからこそだ。だが、流石に防音壁とまではいかなかった。

「星ちゃん家広いな」

「それに楽器も沢山」

PVの撮影が終わりスクールアイドル部一同と津島さんは私の自宅に来ていた。皆そこに列ぶ楽器の数々に目を丸くしていた。

実は種類は充実しているが、その殆どをハードオフでジャンク品手前のものを購入して修繕したポンコツ品だ。だが、しっかり音はずれずに出るよう調整しているし、練習程度には問題ない。

「これ全部出来るの？」

「取り合えずは」

皆は各々楽器を構えてポーズをとったり、音を出したりしている。ついでにそれぞれ記念撮影したりと楽しんでるようだなによりだ。

「ピアノもちゃんと調律出来ているのね」

梨子先輩は鍵盤を一つずつ音を鳴らして確かめると満足そうに頷いた。

「じゃあ何からやりましょうか？」

「私と梨子先輩ってあまり音楽の趣味は合わないですよ。共通で知ってる曲ってありますか？」

私はミーハーなため大衆音楽を好んで聴いている。逆に梨子先輩は音楽の教科書に載るような、由緒正しい音楽を好んでいる。共通の曲などあまりない。

「二人が共通して知ってる曲なんてスクールアイドルの曲で決まりでしょ」

「ならユメノトビラがいい」

二人して頭を捻っていると、千歌先輩ははいと挙手してリクエスト

してきた。案のμ×sの曲だ。

「その曲ならバイオリンを弾きましようかね」

μ×sのユメノトビラ。旅の歌。夢という名の果てしない旅の途中の歌だ。

夢の果てへと至る方法は分からない。それでも夢は叶うと信じて歩み続ける。そんな力強さを、願いを込められている。

「じゃあ、せーので行きましょう」

せーの、と梨子先輩と私は二人で声を掛け合って演奏を始めた。

バイオリンは持ち運び可能でかつ、口と足が開くため演奏しながらパフォーマンスを同時にこなせる可能性があったためそれなりに練習した楽器だ。

「ほらほら、みんなも折角なんだから歌ってよ」

音楽はみんな楽しんでむというのが私の持論だ。

折角リクエストに応えているのだから一緒に参加して欲しい。

「ユメノトビラ 誰もが探してるよ 出会いの意味を見つけないと願ってる」

歌い出しに困るのならば切っ掛けを作ればいい。私は弾き語りをはじめると梨子先輩もまた歌い出した。

通常、バイオリンでの弾き語りは難しく、声の大きさや音域の広がりには普通に歌うことに比べて制限されてしまうが、相方と試行錯誤していた当時は弾き語りしつつ更に躍ろうとしていたのだから今思えば無茶な話だ。だがその甲斐もあり、ちよつとした弾き語りは出来るようになった。

「ユメノトビラ ずっと探し続けて 君と僕とで 旅立ったあの季節」

私達が歌うことで他の皆も最初は遠慮がちに、だが、次第にはつきりと歌い出した。

津島さんはスマホで歌詞を見ているが、他の皆は流石スクールアイドルだけあって覚えているようだ。

この曲はμ×sの代表曲の一つとしてかなり支持されている。というのも目標に向けてひた走る彼女達の姿が重なるというのだろうか。

この曲にはμ☒sらしきがありありと表現されている。

梨子先輩も私も知っているとは言え主旋律のみだ。だが、お互いここはと思う部分は分かっている。主旋律でも音の強弱でアレンジを効かせ、その力強さを、希望を表現した。

ユメノトビラの後もμ☒sの曲やA q o u r sの曲まで演奏した。本人達の前でするのは気が引けたが、本人達の希望だったからそれに答えることにした。おおよその主旋律は耳コピしていたため問題なく演奏しきれた。

演奏はバイオリンだけでなく、ギター、フルート、ドラムなど様々なものを試した。中にはまだまだ未熟な腕前で音を外すこともあったけど楽しかった。

「即席にしてはよかったんじゃないですか？」

「そうね。でも」

一通りの楽器を楽しんだ私は梨子先輩に同意を求めたが、どうやら梨子先輩は違う感想らしい。いや、梨子先輩だけでなく、他のメンバーもまた梨子先輩の言葉に頷いていた。

「星ちゃんはハーモニカが一番いいと思うよ」

「やっぱりそう思うよね。私もハーモニカを吹いてる星ちゃんが一番キラキラしてると思う」

曜先輩や千歌先輩、それに他のみんなもまた口々にそう言う。

それは本当ならいけないことなのだが、私は不謹慎にも嬉しかった。私が一番好きで、一番練習して、かつて相方と共に過ごした楽器を演奏している時が一番キラキラしてると言われたことに。

「じゃあ、最後にもう一曲」

「はい。ハーモニカで」

曲は翼になりたい。小中高でよく合唱で使われら曲だ。

この曲もまた希望を信じる人のための応援歌だ。とてもメロディーラインが綺麗な伸びやかな曲。飛び立ちたくなるような、そつと背中を押してくれる優しさがある。

明日からはまた私はまた一人でハーモニカを吹く日々が続くだろう。このように誰かと並び立って演奏することなんて無い。それは

本当はやってはいけないことだから。やる資格がないから。だから私は今を楽しむ。駄目だと分かりながらも辞められない自分を卑下しながら。

第二十一話

PVをアップした翌日。津島さんと私はスクールアイドル部の部屋にてその評判が如何ほどのものなのかAqoursと共にスクールアイドルランキングを確認した。

それまではAqoursのランキング順位は4700位前後だったが果たして如何ほどの成果があるろうか。

「見てこれ」

「凄い。一気に上がってる」

結果は900位台までジャンプアップしている。凄まじいまでの成果だ。まあここまで全員美形で固めれば話題にもなろう。だが、一番はこれからだ。一瞬とは言え話題になったのだからその熱の冷めぬ内に新曲を発表しなければ顔だけのスクールアイドルになってしまう。

「因みに墮天使っぽい新曲ってあるの？」

「ないよ」

「え？」

「ないよ」

津島さんの質問に即答する千歌先輩は順位が上がっていることにご満悦な様子である。これはあかん。何も考えてない。まだ新曲も出来ていないのに行ける気になっちゃってる。

「えースクールアイドル部、スクールアイドル部。至急生徒会室に出頭しなさい。繰り返します。至急生徒会室に出頭しなさい」

津島さん風に言うならば、ラグナロクを知らせるラツパの様に校内放送が流れたのはそんな時だ。その声は言葉遣いを聞くまでもなく怒髪天を突くというやつだった。

「何があっただらろう？」

「さあ」

まるで状況を読めてない千歌先輩に私は頭を抱えなくなった。

あのPVをアップした翌日なのだからそれに問題があると考えるのが普通だ。

何故こんなに楽天的なのだこの人は。学校から承認されなければスクールアイドルとしてランキング登録は出来ないのに。

「あと黒松星さん。あなたも出頭です」

「何故私まで」

よくスクールアイドル部の面々とはつるんでいるため関連性を疑われるのは仕方ないとしても呼び出しまで食らうのは心外だ。

「撮影協力に名前入ってるすら」

「はっ」

自分の失策に気付いた時には時既に遅し。早くくるよう催促する放送が再度流れるまでそう時間は掛からなかった。

相変わらず会長一人しかいない生徒会室に出頭した私達は怒り心頭の生徒会長に破廉恥の烙印を押されてしまった。

「そうは言ってもダイヤさん。あの位のスカート丈は他のスクールアイドルもやってますし、それ程でもないと思います」

「私は性的な表現のみに言及したつもりはありません。その可愛らしさを前面に押し出して人気を狙おうとする姿勢があざといと申しているのですわ」

それを言われてしまつてはぐうの音も出ない。確かに正直に言うてしまうと実に中身の無いPVだ。

「そもそも、ルビィにスクールアイドル活動を認めたのも節度を持ってやると約束したからですわ」

やるからには本気で。そう窘められているのだ。

中途半端な気持ちで墮天使アイドルなんて喧伝して人気でなそうだから方向性を変えますなんて、プライドがなさ過ぎる。

「順位だって一時的なものですわ。見てみなさい」

ダイヤさんはノートパソコンを机の上でスライドさせてこちらに

寄越すと、曜先輩がランキングを確認する。

それはついさつき見た時とは打って変わって1500位くらいまで下がっていた。更に言えば現在も下がり続けている。

「本気で目指すならどうすればいいのか、もう一度よく考えることね」「はい」

一同現実を突き付けられて頷く以外に返事のしようがなかった。

Aqoursの面々と津島さんは肩を落として生徒会室を後にする。私は一同が出たのを見計らってダイヤさんに問うた。

「そんなに気を掛けてくれるなら監督してあげればいいじゃないですか」

「私からも言わせてもらえば、そんなに気を掛けてるならもっと助言しないのですか?」

私の質問は質問で返されてしまった。どうやら私は距離を取っているつもりであったが、傍から見たら全然距離を取れていないようだ。だが、それが分かると言うことはダイヤさんが気に掛けている証拠だ。

「私のような素人に助言なんてできませんよ」

「それはお互い様ってことにおきますか」

どうにもダイヤさんの含んだ言い回しが気になるが、それは一旦棚上げしておく。

「私は正直に言えばAqoursの皆が楽しんでいればランキングとかどうでもいいんです」

「黒松さん?」

「皆が共通の音楽を心から楽しめれば順位なんて関係ないですよ」

その活動が悲劇や別れなどと無縁でさえあればそれ以上のものは望まない。それが私の思うことだ。だから不要なアドバイスなんてしないのだ。

「黒松さんは何故彼女達と居るの?」

「見守りたいからです」

ただそれはダイヤさんのとは違う方向性だろう。私がアドバイスするとすればそれはAqoursが分解しそうになった時だけだ。

私が味わった人と人ががすれ違う悲しさを彼女達を知る必要は無い。
「いずれにせよ見守る気持ちがあるならその心に従いなさい。きつと
貴方は、いえ、何でもありません」

ダイヤさんが何を言おうとしたのか分からないが私もまたみんな
を追って生徒会室を後にした。

第二十二話

初夏の熱い日射しとは裏腹に、沼津が内浦の海は今日も穏やかだ。だが、そんな穏やかな海とは打って変わって彼女達の心は穏やかではなかった。

否定されたことに納得出来ない訳では無い。寧ろ気付いていなかった事を指摘されて目が覚めたような、そんな感覚なのだろう。そんなアンニュイな感覚がみんなを埠頭まで足を運ばせたのだろう。

「失敗したなあ」

方向性、テーマ、コンセプト。言い方は数あれど音楽にはそれが必要だ。また、アイドルであればキャラクターは必要であるともμ'sの矢澤にこの持論は有名だ。だから墮天使アイドルというのも、そのキャラクターやコンセプト自体は悪くない。だが、そのコンセプトに理念が伴って居なかった。

津島さんにはあるかもしれないが、他のメンバーはただ人気を得るための手段としてしか考えて居なかった。それを見透かされてしまったのだ。そしてそんなのだから順位も伴わないのだ。

「こんなことでμ'sになりたいなんて失礼だよね」

アイドルとはみんなを笑顔にするための存在であるとは、これもまた矢澤にこの持論だが、それはアイドルとしての真理の一端でもある。それに照らし合わせればアイドルとしてのコンセプトを決めるにあたり、根底の部分でその気持ちが必要ならば上っ面だけの薄っぺらいキャラクターが出来上がってしまう。

「千歌ちゃんが悪いわけじゃないです」

ルビィちゃんの言葉は間違いではない。確かに言い出しっぺは千歌先輩だが、それを流されるままにやってしまったのは彼女達全員だった。だから誰がではなく全員が悪い。私も面白がって煽ってしまったところもあったので少し罪悪感がある。

「そうよ。いけなかったのは墮天使」

ただ一人、墮天使であることに本気であった津島さんは感じ方が違うようだ。

彼女は墮天使であることに可能性を感じていたはずだ。止めなければと思っていた矢先に差し伸べられた手にしがみつかずにはいられなかったはずだ。

「やっぱり高校生にもなって通じないよ」

「やめちやうの？」

「うん。迷惑かけそうだし。少しの間だけど、墮天使に付き合ってくれてありがとう。楽しかったよ」

津島さんは踏ん切りがついたようなスツキリした声でそう述べる
と私達に背を向けた。

改めて思うがリア充になりたいと言う津島さんは十分可愛い。だが、今の彼女では足りないと思つた。

「待つて津島さん。津島さんは墮天使の時が一番可愛いって私はそう思うよ」

「ありがとう。でも、私はもう卒業」

じゃあね、と津島さんは埠頭を後にした。

やるも辞めるも自分の意思だ。だから私は津島さんの意思を尊重するつもりである。

津島さんは選んだのだ。私には選べなかった、辞めるといふ選択肢を。いや、私はもしかしたらまだ選んでさえいないのかもしれない。だから気持ち揺れる。津島さんの選択を尊重したい反面、反対したい気持ちも存在するのだ。

埼玉からここに来て私はまだ引き摺っているのだ。

「何で墮天使だったんだろう」

不意に溢れた疑問は本来ならば墮天使アイドルをやると決める時に話し合わなければならなかったことだ。それがないから、何も分からないまま墮天使アイドルを試すからダイヤさんに見透かされたのだ。

「マル、分かる気がします。ずっと普通だったんだと思うんです。私達と同じで、あまり目立たなくて。そういう時思いませんか？これが本当の自分なのかなって。元々は天使みたいにキラキラしてて、なにかの弾みでこうなっちゃってるんじゃないかって」

キラキラしてるかどうかはともかくとして、物事が上手くいかない時なんかにも私も思う。本当はもつと上手く出来るはずだと、偶々今回は上手くいかなかったただけなのだと。

「確かにそういう気持ちあったような気がする」

皆思うところがあるのか花丸ちゃんの言葉に同意した。

「幼稚園の頃、善子ちゃん。いつも言ってたんです。私本当は天使なの、いつか羽が生えて天に帰るんだ、って」

きつと津島さんはその頃から根本は変わっていないだろう。天使を語る時も、堕天使を語る時もキラキラとしていたはずだ。

私はハーモニカを取り出して演奏をする。曲はやさしさに包まれたなら。ユーミンの曲だ。この曲は世界そのものがキラキラと輝いている、そんな希望に溢れた綺麗な曲だ。

きつと幼少期の津島さんにピツタリだろう。

「そうだ。大人になっても奇跡は起こるんだよ」

千歌先輩は私の演奏が終わると力強くそう言った。短い付き合いだが、彼女はいつだって真っ直ぐだ。そして答えを出してくれる。A qoursを船に例えるなら千歌先輩は羅針盤だ。

「みんな。聞いて」

千歌先輩は私とは違う。私が二の足を踏んでいる時に千歌先輩は走り出している。だけど、その思い切りの良さが心地良い。きつと千歌先輩なら津島さんをいい方向に導ける。私は密かにそう思いハーモニカを仕舞った。

第二十三話

翌日は休日であったが優雅に惰眠を貪ることは許されなかった。津島さんに呼び出されたのだ。どうやら墮天使グッズを捨てる、言わば埋葬の時を私に見守って欲しいらしい。なぜ幼馴染みである花丸ちゃんではなく私なのかと問うたところ、屋上で学校との関わりを繋ぎ止めてくれたことと墮天使を褒めてくれたからだという。

私はもちろん墮天使グッズを捨てようとしていることを千歌先輩に通報した。元々千歌先輩達も今日津島さんを説得しようとしていたらしく、二つ返事で了解と返事が来た。

「ねえ、津島さん。一つ聞きたいんだ」

私は津島さんの住むマンションのゴミ捨て場で一箱の段ボールを抱える津島さんに問い掛けた。千歌先輩がまだ着いていないから時間稼ぎ、とかそんなものではない。純粹に聞きたかったことがあるのだ。

「自分の好きなことを自分自身にも隠すのってどんな気持ち？」

埼玉からこっちに引越す際に私が出来なかったこと。もし私が音楽との繋がりを断っていたらどうなっていたのかと、どうなってしまうのかと疑問に思うのだ。

「まだ実感なんて湧かないかな。これから私自身どうなるのか分からないし」

津島さんは段ボールをゴミ捨て場に置くと力無く笑った。

「例えばばさ。私がかもしハーモニカをやらないうって言ったら津島さんはどう思う？」

「ハーモニカのない貴方なんて似合わないわよ」

彼女もまた私とハーモニカを認めてくれる。例え仮初めでもそれは嬉しかった。だが、それだけに私は恐れる。私が犯した罪が彼女らに知れ渡ることを。それを知ったとき、私は本当にハーモニカを手放さなければならなくなるかもしれないことを。

それでも今はそれを置いておく。何故ならば役者が揃ったからだ。

「なら私も本音をいうね。津島さんはやっぱり墮天使ヨハネが一番良

いよ」

さあ、私の出番はここでお終い。だって星の光なんて覆い隠す程の太陽が出てきたのだから。

「堕天使ヨハネちゃん」

私の言葉に呼応するように堕天使アイドルの衣装を身に纏ったAoursがゴミ捨て場に集まった。その姿に先日のような恥じらいも躊躇いもなかった。こないだの見た目だけの姿なんかより余程様になっていた。

「スクールアイドルに入りませんか。堕天使ヨハネとして、Aoursに」

「何言ってるの？昨日話したでしょ」

「良いんだよ、堕天使で。自分が好きならそれで良いんだよ」

千歌先輩は肯定する。好きなことで輝ける人を。何故ならばそれは自分自身が、自分達自身が目指している事だから。

「だめよ。生徒会長にも怒られたでしょ」

だが津島さんは拒絶する。

津島さんは堕天使に対して好きな気持ちと、人目を気にする恥じらいが混在しているのだ。だから素直にうんとは言えない。それを言えたなら今頃は堕天使グッズを身に纏って街中を闊歩していらだろう。

「それは私達が悪かったんだよ。善子ちゃんは良いんだよそのまんま
で」

「どういう意味？」

「私ね、μ'sがどうして伝説を作れたのか？どうしてスクールアイドルがそこまで繋がってきたのか、考えてみて分かったんだ。ステージの上で自分の好きを迷わずに見せることなんだよ。お客さんにどう思われるかとか、人気がどうかじゃやない。自分が一番好きな姿を、輝いている姿を見せることなんだよ。だから善子ちゃんは捨てちゃだめなんだよ。自分が堕天使を好きな限り」

それは津島さんの一番コンプレックスな部分だ。

堕天使なんていない。分かってる。

高校生にもなつて恥ずかしい。分かっている。

それでも好きならじやあどうすればいいのか？決まっている。好きのままでもいいのだ。自分の納得いくまで。それがきつと輝くことに繋がるから。

「いいの？変なこと言うかも」

「いいよ」

「時々儀式とかするかもよ」

「それくらい我慢するわ」

「リトルデーモンになれって言うかも」

「それは、でも、いやだったらやだって言う」

好きなことだけをやればいいわけじゃない。そうやって人に迷惑をかけていいわけでもない。ただ、自分の根底にある本心を見失わないこと。ただそれだけの話だ。

千歌先輩の言葉に返事はしなかった。ただ、一度置いた段ボールを大事そうに抱え上げた。

津島さんが堕天使グッズを部屋に戻すのを手伝いみんなで津島さん住むマンションに程近い小さな公園に来た。

公園は滑り台くらいしか遊具もない本当に小さな公園だ。

何故そんな場所に来たかと言えばみんなで歌える場所を探しに散策していたからだ。

津島さんが堕天使を卒業しないと改心したと同時にスクールアイドルになることを決意したため、早速練習しようという流れになったのだ。

「星ちゃんお願いがあるんだけど」

「どうしたんです？藪から棒に」

「何か一曲、演奏を頼みたいんだけど」

「随分とまた唐突ですね」

「うん。よく考えたらさ、私達の節目節目の時はいつも星ちゃんが演奏してくれたなって。今回善子ちゃんが正式に入ってくれたしそのお祝いを兼ねてね」

言われてみればグループ名の決定や初ライブ後、花丸ちゃんトルビイちゃんの入部の時などに私はちよいちよい演奏していた。というより、私はそれとは関係なくしょっちゅうピーヒャラと演奏してる気がする。

「了解です」

私は懐からハーモニカを取り出し演奏を始める。曲はメーデー。BUMP OF CHICKENの曲だ。この曲は相互理解がテーマとなっている。

千歌先輩の、A q o u r sの気持ち。津島さんの気持ちを今後とも理解しあえる関係であることを願っての一曲だ。

やはりというかみんなの反応を見るとこの曲を知らないようだがしかたがない。今からもう10年近く前の曲なのだから。そこに一抹の寂しさを感じると共に諦観が私にはあった。

ここには私の音楽を楽しんでくれる人はいるが、あの時間を共有した人はもういないのだと。

第二十四話

週が明けると善子ちゃんは元気に学校に登校していた。墮天使キアラについては辞めないまでもTPOを弁えメリハリを付けることで継続するらしく、クラスメートとの会話では気を張って墮天使が出ないようにしているようだ。好きなところはそのままに自分なりに改善が必要だと思うところを調整する。それは凄く前向きな姿勢だと思ふし、クラスメートも好意的に善子ちゃんを見ているようだ。因みにこないだの一件以来、私は津島さんのこともまた善子ちゃんと呼ぶようになった。

「暫くはこれまでの曲を6人バージョンに調整する練習だね」

「うん。また新しくPVの撮影する時は手伝ってね」

「了解」

そんな様子を平和だなんてを思いながら私は花丸ちゃんと雑談をしていた。

思えばここ最近をよく動いていた。Aqoursのライブの手伝ったり、ルビィと花丸ちゃんがスクールアイドル部に入るように手伝ったり、学園長からのお遣いをしたり、善子ちゃんに墮天使を卒業しないように手伝ったりと人の手伝いばかりしている気がする。というよりAqoursの事ばかりな気がする。

「星ちゃんは練習に参加してみないの?」

「私が?冗談。みんなと釣り合わないって」

「私、スクールアイドルをやるって決めたとき言われたんだ、自分がやりたいかどうかなんだって。だから、星ちゃんはどう思っているの? スクールアイドルのこと」

今日の花丸ちゃんはやけに答えにくい質問をしてくる。それも何か確信を持ったような目で私を見ているから下手な回答がしにくい。

花丸ちゃんは人のことを本当によく見ている。だからこそ人見知りで、遠慮がちなルビィちゃんと親友になり、スクールアイドルに導けたわけだ。

その観察眼、洞察力、空気を読む力の前に私はどの様に映っている

のだろうか？

「ほら、スポーツなんかだと好きにも二種類あるでしょ？やるのが好きなのと見るのが好きなの。私は後者なんだよ」

「あんなに沢山楽器持ってて、演奏もしてるのに？」

「語弊があったね。やるのが好きの中でもジャンルが違うってのが正しかったかな。野球に例えるならピッチャーよりバッターが好きみたいな」

花丸ちゃんはイマイチ納得のいっていなさそうな顔をするが、話自体は「一般的にそういうこともある」流れだったためそれ以上深くは聞かれなかった。

花丸ちゃんはやはり優しい。きっと私がスクールアイドル活動になにがしかの想いがあることに気付いているかもしれない。だけど、私はそれを花丸ちゃん、いや、他のみんなにも言うことなど出来ない。それを言ってしまうえば私が只の裏切り者であることがばれてしまうから。

「花丸ちゃん達のこと、応援してるから」

「うん」

「また黙ってるの」

不意に心に響く言葉に苦い気持ちちが胸焼けのように襲う。これは違う。彼女はこんな言葉を言ったことがない。これは単なる私の罪悪感が作り出した幻聴だ。

「何で星ちゃんは時々、いや、なんでもない」

花丸ちゃんは少しだけ悲しそうに言葉を切ったのが印象的だった。

放課後、私は新しいレパートリーを増やそうと耳コピーした曲をハーモニカに落とし込もうと練習していると、何時ものようにAquoursの面々もまたダンスの練習にやってきた。今日からは善子ちゃんも参加で六人だ。

以前までは5人しかいなかったから二人でペアを組む柔軟運動などは私が手伝ったりしていたが、今日からは私の出番はない。

というか、よくよく考えると私は何でこんなに馴染んでいるのだろうか。スクールアイドル部に入った訳でも無いのにさも居ることが自然であるような錯覚をいつからしていたのか？

「星ちゃんいい？ちよつと曲のアレンジで参考にしたいんだけど」

梨子先輩も作曲そのものや使う楽器の決定などは私に話を振らないが、相談をよく持ちかけてくるの。多種の楽器を扱う強みが私にあるのも事実だが複雑な気持ちだ。これではまるで私もスクールアイドル活動をしているみたいではないか。

「私で良ければ」

そう思ってもそれを拒絶できない私は自身の弱さに反吐が出そうだった。

「あ、いたいた」

そんな風に悶々とする私を嘲笑うかのように鞠莉学園長が屋上に訪れる。

「鞠莉さんどうしたんですか？」

そんな鞠莉学園長に対し千歌先輩は無警戒に質問を投げかけた。駄目ですよ、千歌先輩。その人は腹に何か黒い思惑を抱えてる策略家です。ファーストライブのこともう忘れたんですか？

「貴方達にライブして貰うことになったから」

「ライブ？」

その言葉を聞いて千歌先輩は途端に胡散臭いものを見るような目つきになった。私の与り知らぬところで何か騙されたのだろうか？

「そう、ライブ。とつてもシャイニーなステージがあるの」

「その手にはもう乗りませんよ」

梨子先輩にまでそんなことを言われてしまうあたり鞠莉学園長の信用は低そうだな。

「こ・ん・ど・はホント。幼稚園のお遊戯会にゲストとして参加してつてオフアアが来てるの」

「それって私達のファーストライブを見て？」

「そういうこと」

「凄いよ、と曜先輩は声に出して喜んだ。初期メンバーの三人の活動が認められたからこそ誘いを受けたのだ。嬉しくない筈がないだろう。」

「おめでとうございませす。頑張ってください」

幼稚園の催しだから規模は小さいし保安上の問題でお客様をおいそれと呼ぶことも出来ないだろう。だが、小さな前進であることは間違いない。

「ノーノー。黒松ちゃんもね」

「は?」

「ちよ、星ちゃん声が怖い」

ルビイちゃんが本気で怖がってるが、それも致し方ない。だって勝手が過ぎる。私はそんなことに同意したつもりはないし、それはやってはいけない、譲れない一線だ。

「貴方の近所のお母さんがA q o u r sと一緒にどうって誘ってくれたの。スクールアイドル部とは別枠。それならいいんでしょ?」

「なんだか鞠莉学園長に見透かされているようで非常に癪である。しかもこのアマはドヤ顔して言うもんだからフラストレーションも溜まるものだ。」

「私の忠告、忘れた訳ではないんですよね?」

「さあ、どうかしら」

私の過去を掘り起こさない。そう警告したのだがこの人は笑顔で平然ととぼけるものだから真偽は分からない。

「私は遠慮します」

「えー、星ちゃんやろうよ。絶対楽しいよ」

「それに折角誘ってくれたご近所さんの好意を無駄にするの?」

鞠莉学園長がわざわざ屋上に来た理由が分かった。千歌先輩を自分の味方に付けるためだ。千歌先輩は裏表などなくホントに私も一緒に参加して欲しいと思ってるから非常に断り辛い。

「援護を得て鞠莉学園長が益々調子に乗ってるのが余計に腹立たしい。」

「星ちゃん。私達スクールアイドルだよ」

「私は違います」

「そうかもだけど、でも音楽が好きなんですよ？演奏するのも、人に聴いて貰うのも好きなんですよ」

迂闊だった。中途半端に引き摺っているせいで私が音楽を好きなことが知れ渡ってしまった。仲間内だけならばともかく近所の人やファーストライブに来た人にも一部印象を残してしまった。だからこれは自分の招いた事態でもある。

「自分の責任は自分で果たさないと」

「責任とかそんな難しいことはよく分からないけど、私は星ちゃんと一緒に出たい。みんなもそうですよ」

「うん。絶対にいいステージになるよ」

みんなは私が音楽が好きだということしか知らない。私が私のことを話していないから。だからみんなは期待を込めた視線を向ける。

これもまた私が蒔いた種だ。どうやら私に逃げ道はないらしい。ご丁寧にも抜け道は鞠莉学園長が用意したものがあがるが。

「分かりました。行きますよ。あくまでもA q o u r sはA q o u r s、私は私としてですが」

「OK。なら詳細はこのレジメ読んで」

バァーイ、なんて陽気な声を出して屋上を後にした。私はその背中を蹴りたいと思う気持ちをぐっと堪えた。

第二十五話

時間は二組合わせて7分。幼稚園児の7分となるとかなりの長時間だ。割り振りはされていないため各持ち時間は要相談。

ステージは幼稚園の屋内。当然園児サイズのステージだからそれ程の広さはない。

「7分ってまた中途半端だね」

「平均的な曲なら一曲と半分つってところね」

幼稚園児からすれば長時間でも高校生からすれば短い。お遊戯会がメインで私達はあくまでもゲストであるためしかたがないが、それをどのように活かすのが今回の肝だ。

「自己紹介はごく簡単に高校名とグループ名、曲名までかな」

「曲はどうする？カバーよりオリジナルをやるべきだよね」

私達は現在スクールアイドル部の部室で協議している訳だが、私はあまり口を挟まない。腹の虫が収まらず、話しをする気にならないのだ。それに正直自分の中ではもうベストと思われる結論が出ているのだ。だが、それは私の越えてはいけない一線を越えた結論だ。だからベストと分かっているとしても私からそれを提案することは出来ない。

もしかしたらこの状況すら鞠莉学園長は見越していたのかもしれない。どこまであの人は私を困らせれば気が済むのだ。

「あのさ星」

「なに？」

「あんた何か隠してない？なんでそんなに機嫌悪そうなのよ」

「二日目なのよ」

「嘘こけ」

善子ちゃんからも変に疑われる始末。いや、へそを曲げて不機嫌オーラを出したのも私の意思だとするならこれもまた私が招いたことだ。

私は半眼で私を見詰める善子ちゃんとお互い威嚇しあう。こうまでなると私も素直に譲る気にならない。

「星ちゃん」

「千歌先輩までなんですか？」

「今日、家来ない？」

それは何の前触れも気負いもない、私の毒気を抜くには十分過ぎる何気ない誘いだった。

千歌先輩の家は老舗旅館で先輩の部屋も襖など和のテイストのある部屋だった。だが、内装は普通の女子高生の部屋だ。ベッドがあつてマンガやCDの置かれた本棚や雑誌の広げられた机があつた。そして襖にはμ∞sのポスターが貼られている。

「μ∞sの海外遠征した時に作られたポスターですね」

リーダーである高坂穂乃果を中心に置いたメンバー達の生き生きとした、今にも動き出しそうなポスターだ。一時期は秋葉原中に貼られていたらしい。

「さすが星ちゃん。よく知ってるね」

「人並みには。それで、何でまた急に私を招いたのですか？」

私は雑談もそこに本題を切り出す。千歌先輩もまた始めから話しをするつもりだったのか表情を変えることなく口を開いた。

「こないだ星ちゃん家にみんなで行ったでしょ。それで思ったの。他のみんなは家に来たことあるけど星ちゃんはまだ家に入れたことなかったなって」

「私はAqoursのメンバーじゃないですし」

「それはそれでしょ」

「まあそうですよ」

「私気になつてたの。星ちゃん時々私達と距離取ろうとすることあるでしょ？それは何でかなつて。音楽が好きで、演奏するのが好きで、人に聴いて貰うのが好きで、スクールアイドルも多分好きで。本当だったらもつと輝けるのに、何かをそれを陰らせてる。それが何なん

だろうって」

「先輩も私の事を詮索するんですか？」

私が出して欲しくない類の話題であるにも関わらず、自分が思っている以上に私は落ち着いている。鞠莉学園長の時とは違い、千歌先輩が本音で話しをしているのが分かるからかもしれない。

「迷ってる。本当は色々聞きたいよ。だって折角同じ学校に入ってくれた後輩だよ。それも趣味の分かってくれる。だからその後輩のことを知りたいって思う。でも星ちゃんは知って欲しくないんでしょ？」

「はい。ごめんなさい」

「はつきりいうんだね。でも、いいよそれでも。ただ、それが星ちゃんを悩ませているなら、私は星ちゃんになりたい」

千歌先輩は何事にもいつだって正面からぶつかってくる。それが彼女の長所で一緒に居て心地良いところでもある。だけど、それには眩しすぎる。過ぎる効能のある薬は時には毒にもなるのだ。

「今度のライブはA q u o r sと私とでコラボしましょう」

だから私は自分の越えてはならない一線すら越えてこの場をやり過ぐす。

こんなにも真っ直ぐな先輩に私の醜いところを知られたくない。知られるのが怖い。

大丈夫、たったの一度だ。たった一度だけ。それ以上はもうーーーーー私は音楽に関わらない。

「絶対にいいライブにしましょう」

私は内心を押し殺して空元気で千歌先輩の手を取る。千歌先輩はどこか腑に落ちない表情で頷くのだった。

第二十六話

そこからの一週間はあつという間だった。

演出の構成を決め、新しく振り付けを決め、曲をアレンジした。練習もまるでA q o u r sの一員のようにやりこんだ。この一度きりと決めたからか、この一週間は遠慮せずに全力だった。全力だったから楽しかった。

μ×sも終わると分かっているにもかかわらず、もしかしたらこんな気持ちだったのかもしれないと私は勝手に想像し、それを自分で否定した。彼女達は私みたいに後ろ向きな気持ちはないだろうから。

「凄い、衣装まで用意してくれたんですか」

「当然だよ。折角一緒にやるんだから一体感出したいしね」

「曜先輩愛してます」

「ヨーソーロー」

私は曜先輩の用意した衣装を眺める。

衣装はA q o u r sがファーストライブで着たものと同じデザイン。色は薄いベージュだ。

私にとって最初で最後のライブ。私が想像していた未来とは違ったが、私はこのとても小さなライブを精一杯やりきろうと思った。

「あれ、星ちゃん」

「泣い、てるっ？」

「やだなあ、梨子先輩にルビィちゃんも。花粉症だよ」

私は眼に込め上げるものをすっかり堪えてみせた。只でさえ自らに架した制約を破っているのだ。涙だけは流してはいけない。

私は曜先輩から受け取った衣装に袖を通し、ハーモニカを吹き鳴らしてステップを刻んだ。

曲は僕たちはひとつの光。μ×sの集大成の曲だ。それ以上に深く語るつもりは私には無い。μ×sを知る者ならばそれ以上の言葉は不要だからだ。

「私も躍る」

「私も」

もしも私が今とは違った形でみんなと会っていたらどうなってしまう？千歌先輩に誘われて、きつと少し悩んで、だけど多分スクールアイドルをやることになって、きつと今みたいに衣装に身を包んでいただろう。それは凄く楽しいだろう。毎日がキラキラと輝いているだろう。今日より明日、明日より明後日と先々を夢見ているだろう。私はそんなあり得たかもしれない可能性を今体験している。ほんの一時の白昼夢。それでも私は夢が覚めるまでは一瞬一瞬を噛み締めて楽しもうと決めていた。μ'sが歌い上げたように、ライブが終わった時に今が最高と言えるように。

お遊戯会のゲストライブ当日、本番も直前。私達は通された控え室代わりにの教室で着替えを済ませて円陣を組んでいた。

「みんな緊張してる？」

「はい」

「緊張しててもいいんだ。だってそれはこのライブの事を真剣にやりたい、楽しみたいって思っているから感じる事だから。だから、その緊張感も含めて今日はみんなで楽しもう」

高海先輩が音頭を取りみんなの背中を押す。かく言う私もまた緊張していたため非常に助かったりしている。人前での演奏は始めてではないとはいえ、緊張するものはするのだ。

高海先輩は行くよ、と円陣の中心に向け手を伸ばすと他の面々もまたその手に手を重ねていった。

「星ちゃんも」

私はAqoursではないから本来円陣と一緒に組むことも手を重ねることもしてはいけない。だが、私は躊躇いながらも手を重ねた。今日はコラボをイベント。グループは違えど仲間なのだ。

「Aqours with」

「星」

「サーン…シャイーン」

Aqoursのライブ前の掛け声に倣って、みんなで手を天に掲げ私達はライブを開始した。

ライブ会場は小さな小さな幼稚園のステージ。とても七人で踊れないそこに千歌先輩を先頭に私達は入った。

梨子先輩は備え付けの鍵盤の数の少ない小さめのピアノに座り、私もまたハーモニカを構えた。

「こんにちは。私達は」

「Aqoursと」

「星です」

元気良くみんなで名乗り上げると園児からは元気な挨拶が帰ってきました。

「今日はお招きありがとうございます。精一杯歌って踊るから、よかったらみんなも一緒に躍ろう」

梨子先輩と私以外のみんなは簡略化して園児でも腕の振りだけで出来る振り付けを実演して教える。

挨拶とこの振り付け指導で二分。残り時間は曲を披露する時間に配分したのだ。

幼稚園児にどうしたら喜んで貰えるか、楽しんで貰えるか、夢を見させられるか考えた結果このような形となったのだ。自分達だけじゃない、みんなも楽しめるライブにしたい。そう考えたら自ずと答えは出た。

「じゃあ行くよ。ダイスキだったらダイジョウブ！」

これはAqoursのファーストライブで披露したAqoursの記念すべき第一曲目だ。今回はピアノとハーモニカに対応したアレンジの生演奏バージョンだ。

狭いステージでは全員で躍ることは無理が生じる。そのため、梨子先輩はダンスから抜けてピアノに専念し、バランスを取るため私もハーモニカで伴奏を担当することになったのだ。

私も梨子先輩も既に音合わせは何度もした。お互いの音を食い合わないように強弱も音階も事前に突き詰めて調整していたため滑り出しからばつちり息を合わせられた。

千歌先輩と曜先輩、ルビィちゃんはファーストライブの時と同じ振り付けで躍り、花丸ちゃんと善子ちゃんは園児でも躍れるように簡単にアレンジした振り付けを千歌先輩達の両サイドでやり、園児のお手本となるように躍っていた。

基本的に簡略化したアレンジは単調で繰り返しの動作のため、直ぐに園児は覚えてくれる。

女の子なんかは目を輝かせてキャツキャと声を出して躍り出すし、男の子もお調子者が動き出すと釣られて他の園児も躍り出した。中には全然違う動きをしている子を居るが楽しんでいることは良く伝わった。

「知らないことばかり、なにもかもが、それでも期待で足が軽いよ」「温度差なんていつか消しちやえってね、元気だよ、元気をだしていくよ」

ああ、本当に私は知らないことだらけだった。すっかりと談取りをして人前でパフォーマンスすらことがこんなに楽しいことだったなんて、素晴らしいことだったなんて。私は今、楽しい。許されるならばこのままずっと続けたい、と思うと同時に最後までやりきったときどんな気持ちになるのだろうとワクワクしたりもするのだ。

「ダイスキがあれば、ダイジョウブさ」

そうこうしているとあつという間に最後の歌詞が終わり、梨子先輩と私の演奏で締める。

曲が終わった時、見ていてくれた園児は誰一人として座っていないかった。みんな嬉しそうに飛び跳ねながら見ていてくれたのだ。

きつとみんながみんな覚えてくれることはないだろう。でも、何人かは記憶に確かに残るライブになった筈だ。

「ありがとうございます」

私は揃って頭を下げて感謝すると、園児からもまたお礼の言葉を返された。

ありがとう。本当は一回じゃ足りないくらいだが私は堪えて、みんなと顔を上げると見てくれたみんなに手を振って小さなステージを後にする。

バイバイ、ありがとう、と私は万感の思いで心の中で別れを告げる。

この機会をくれてありがとう。

見てくれてありがとう。

楽しんでくれてありがとう。

みんなありがとう。そしてさようなら。

第二十七話

幼稚園でのコラボライブが終わってからは千歌先輩の家で打ち上げをした。みんな各々ライブで感じた事を思い思いに口にして講評したが、全会一致で楽しかったとのことだった。私はその日はずっと笑っていた気がする。他のみんなには悪いけどこのライブでは私が一番楽しんでいたと思っっている。

それから週が明け、A q o u r s は新たな課題に取り組む事となった。いや、取り組まざるを得なくなったという方が正しい。

何が起きたかって？聴いて驚け見て笑え、統廃合である。何がって浦の星女学院のだ。

年々入学希望者が減り、今年に限っては一年生は一クラスのみとなった現状を鑑みればそれも納得である。一応来年の入学希望者を見てという話らしいが余程劇的な事が無い限り入学希望者は増えたりはしないだろう。ここは近隣の人以外が通うには交通の便が悪すぎる。私が引越してきた時に感じた絶望感はそんな状況が一端を担っている。

さて、こんな状況になり黙っていないのが彼女、高海先輩だ。とうか統廃合の話題が出た瞬間にテンションが最高潮であった。それもμ×sを好きな千歌先輩ならば納得というものだ。

μ×sはそもそも学校が廃校になるのを阻止するために結成されたのだ。統廃合という学校の危機を前にシンパシーを感じているのだろう。

取り合えず高海先輩は入学希望者を増やすために活動すると活動方針を決めた訳だが。

「でも行動って何するつもり？」

「え？」

「え？」

結局勢いが先行しているのは相変わらずでそれを考えるところから活動は始まることとなった。

私はといえば距離を置くつもりではあったが、廃校の話題が衝撃的

過ぎてついつい何時もの癖で一緒に行動していた。

「結局、μsがやったのはスクールアイドルとしてランキングに登録して、ラブライブに出て有名になって、生徒を集める」

「それだけなの？」

「みたい」

前例を参考にするのはどの業界でも変わらない。だが、μsのやったことは言ってしまうえばスクールアイドルとして頑張ったとしたか調べても分からなかった。

「強いて言えば学校のPR活動をしたくらい？」

「PRか。難しそう」

「でも良い考え。今の受験生が入りたいって思うようなPRができれば入学希望者もきつと増える」

「そんな簡単にいくかな？」

「とにかくやってみよう」

そんなこんなでA q o u r sは学校と街の良さを紹介するPVを製作することとなったのである。もちろん私は撮影協力だ。まあ学校と街の紹介ならば学級活動の一環であるし私の制約にギリギリ抵触しないだろう。音楽をやらないうという制約に。

学校の魅力、街の魅力、と言われても正直ポジティブな印象はなかなか思い浮かばない。

学校は坂を登らなければ行けないし、教室にはエアコンが無い。生徒も少ないから部活数も少ない。街は田舎町で学生の好むような商店は無いし、カラオケチェーンやゲーセンもない。

うん、駄目だ。埼玉県北部から引っ越してきた私にはこの問題は難題だ。ん？埼玉もそんなに変わらない？それは気にしてはいけない。

「やはりぽつと出の私には難しいですね。ここは昔から住んでいる土着の人の意見が聴きたいですね」

「土着って、民族じゃないんだから。梨子ちゃんも思い付かない？」
「うーん、中々ね」

そっか、と地元組は頭を悩ませているが、全会一致ですぐに出た案もある。それは自然豊かであることだ。

温暖な気候。小高い山とそれに見守られるような入り江。そして学校の周りがあるみかん。コンクリートジャングルとは違う、リアルジャングルがここにはある。

だが順調に良いところが出たのはそれだけ。山から撮り下ろした風景と、それを紹介する千歌先輩の動画を撮ってから先が進まない。というか、みんな動画に映る気が無いようで、それなら撮影協力の私の存在意義がない気がする。

「では私はここで失礼します」

「今日は早いね」

「はい。今日は」

山から下山し、私は詳しいことを言わずにみんなに別れを告げた。だって下山中に自転車で沼津や伊豆長岡商店街に行こうとか不穏な事を言っているのだ。流石にそこまでトライアスロンするつもりは無い。

私は海沿いを歩きながらポケットからハーモニカを取り出そうとして、やめた。もう音楽はやらないと決めたのだ。

まるで禁煙し始めたヘビースモーカーのような気分だ。今まで私が如何にハーモニカに頼っていたのか、好きだったのか改めて思い知らされる。

思わず舌打ちして私は早足で歩く。

コンビニ、コンビニだ。せめて飴ちゃんかアイス。うん、アイスがいい。ガリガリ様だ。埼玉県民御用達のガリガリ様。

「あれ？ガリガリ様？」

「そんな極端に痩せてないよ」

ガリガリ様、ガリガリ様と唱えながら歩いていたせいか、スポーツ

ドリンク片手にコンビニから出てきた果南さん呼び間違えてしまった。

果南さんは苦笑いして許してくれたから助かった。

「久し振りだね」

「ご無沙汰してます。今日はお店は？」

「予約も無いし、平日だからそうそう人は来ないからね。店頭に張り紙して買い物だよ」

ダイビングショップに思い立ったが吉日で行くような人は恐らく千歌先輩達くらいのもだろう。短時間であればなるほど、少しくらいなら店から離れることも出来るか。

「聞いたよ。千歌達とライブしたんだって？」

「もう知ってるんですね」

「狭い地域だから」

「なら学校が統廃合になることも」

「知ってるよ。実は噂だけならもっと前からあったしね」

「そうだったんですね」

立ち話も何なので私は果南さんとダイビングショップに向けて歩きながら話をした。

「学校が無くなるのってどんな感じなんでしょうね。正直今までそんなスケールの大きな事態に遭遇したことなくて、頭では分かっているのですがあまり実感が湧かないんですね」

「私は、うん。学校を休学する時の感じ。それが近いのかも。うんと近くにあるのに、でも行けない。みんなと同じ時間を過ごしたいのにどんどん時間がズレてく。そんな感じかな」

以前聞いた話では果南さんはダイビングショップを営む父親が骨折してしまったことでやむなく休学し店を営業しているとのことだ。それを聞いた時、自分と同じように父親に振り回されてしまった果南さんには親近感を覚えたものだ。

「でも、廃校になるのもしょうがないかなって、思う気持ちもあるんだ。だって、ここには。ここには」

果南さんは言葉を止め遠い目をする。その様子には私は驚きを隠せ

ないでいた。だってその目は見たことがあるからだ。他でもない、私自身のしている目だ。

何故果南さんがその目をするのか？一体なにがあつたのか？何故果南さんみたいな人がそれを乗り越えていないのか？私は問いただそうとして口をパクパクさせてしまった。

何を言えば良い？どう踏み込めば良い？

聴かれるのを恐れ、踏み込まれることを拒んだ私にはそれが分からない。

「店まで付き合ってくれてありがとう。何か飲み物出してくるからちょっと待ってて」

そうこうしている内にダイビングショップに到着し、気を取り直した果南さんは店の中へと駆けていった。

私は遂に、その背中に言葉を掛けることはできなかつた。

第二十八話

翌日聴いた話ではA q o u r sの面々は鬼の強行軍を実行し何とか学校のP R動画を撮り終えたとのこと。

昼休みにその動画を見せて貰ったのだが、率直な感想を述べるならば、全くと言っていいほど良さが伝わってこなかった。

思い付く限り学校の良さや地域の良さを詰め込んでいた。だが、他に良いところが思い付かなかった私が言うのもなんだが、そこに映されていたのはひどく薄っぺらく感じてしまった。例えるなら地域の観光マップを無理矢理作ったような印象だ。学校のP Rの筈なのにそもそも受験生宛に作られていないとしか思えない出来だ。

ネットにアップする前に承認を受ける必要があるとのこと放課後となった現在、みんなは学園長室に乗り込んでいるところだ。

私とは言えば図書委員の花丸ちゃんの代わりに図書室で受付嬢をしている。とはいえ、今時放課後に図書室に来るような奇特な人はいない。欲しい本があれば買うなり品揃えのいい市立の図書館に行くだろうから。だから暇をもてあました私は本を読む。

今日読んでいるのは蝉しぐれ。藤沢周平の時代劇ものだ。国語の教科書に一部載つたりもしている。

この物語を私は時代劇ものでありながら恋愛ものとして捉えている。主人公の一途な義理堅さ。幼少期の絆を守るため奮闘する様が非常に格好いいのだ。例え手の届かないところに行ってしまった相手でも、昔の輝かしかつた思い出は色あせない。胸に宿る想いは偽物では無い。そんな心の強さに私は夢中になってしまう。それと同時に後悔を自分なりに決着をつけていることが尊敬できる。今の自分にはない強さだ。

「お待たせ星ちゃん。繋いでくれてありがとう」

暫く読書に没頭していると花丸ちゃんと他のメンバーも図書室にやって来た。

誰も来ない図書室とは言えここにゾロゾロと連れ立って来るのはどうなのだろうか。

「どうでした?」

「このテイタラクデスか?なんて言われたよ」

エセ外国人口調の鞠莉学園長を真似る善子ちゃんに嘖きそうになりながら、鞠莉学園長なら言いそうだなと思っただし、その台詞自体にも納得した。言われてもしょうがない。あのPR動画は出来が悪い。

「努力の量と結果は比例しません。大切なのはこのタウンやスクールの魅力をちゃんと理解してるかデスってさ」

「言い返せなかった。でもこの場所を無くしちゃいけないって、確かに思ってるんだ」

きつとそう思う根幹の部分こそ魅力の秘密がある。だから千歌先輩達も喉元まで出かかっている筈。この分ならふとした切っ掛けさえあれば何とかなりそうなものだ。

「また撮り直しになりそうですね」

「ごめんね、星ちゃん。手伝ってくれたのに」

「いいよ。はじめから難しいってのは分かってたし」

謝るルビイちゃんに断りを入れ、私は図書室の鍵を花丸ちゃんに渡すと受付の椅子から立ち上がる。

図書委員の仕事はあくまで繋ぎ。それが終われば私が放課後の学校に残る理由はもう無い。

「今日はもう帰るね」

「星ちゃんもう帰っちゃうの?」

「うん。今日は流石に撮影はしなくてすよね?また撮る時には手伝うから声をかけてください」

「ちよつと待って星ちゃん。明日の朝は海に集合で」

「急に何ですか?まさか早朝の海でも撮影するんですか?」

「海開きだよ」

「正確には海開きの前に浜辺の清掃があるんだよ」

言葉の足りない千歌先輩を囁先輩がフォローする。

なるほど、海の見える街特有の行事らしい。新参者で海無し県出身の私には分からない文化だ。

「分かりました。後で時間と集合場所聴きますので」

それでは、と私はみんなに手を振って図書室を後にした。
街や学校の魅力。改めて考えると私はそもそこの場所に魅力を感じているのか？好きなのだろうか？

親の都合で引越すこととなり、夢を諦めてきたこの場所を私はどう思っているのだろうか？

毎朝の登校で坂を登らずに済むだろう。下校時には沼津の繁華街を冷やかしに行けるし、遊ぶ場所だつてここよりも一杯あるだろう。

統廃合ならばみんなと離れ離れになることもないだろうし、あれ？あまりデメリツトがない？

「ダイヤ。逃げていても、何も代わりはしないよ？進むしか無い。そう思わない？」

一階に着き、下駄箱に向かっていた私は体育館からの渡り廊下で話すダイヤさんと鞠莉学園長を見つけ、思わず隠れてしまった。

この遭遇は完全に偶然の産物で私に何一つ非はないのだが、鞠莉学園長の口調がエセ外国人じゃないため真剣な話しをしていると察してしまったのだ。

「逃げてる訳ではありませんわ。あの時だつて」
「ダイヤ？」

だが、私の予想とは裏腹に話しは長くは続かずダイヤさんは鞠莉学園長に一言だけ伝えて立ち去ってしまった。

これはそう、言葉が足りないやつだ。何を伝えたいのかまでは私には分からないが、それだけは確実に分かった。そのもどかしさが。

「鞠莉学園長」

「あら？盗み聞き？詮索しないように言ってきたのは誰でしたっけ？」

「詮索するつもりはないですし、今回は偶、いえ、堂々回りになるので止めましょう。兎に角、傍から見ても今のやりとりは回りくどいと思いますよ。それじゃ伝わらない」

「それは勘？それとも経験則かしら？」

厳密には経験則ではない。私は伝えようとはしなかったのだから。相手に伝わらないように、話題が出ないように遠回りして遠回りし

て、そうやって私は嘘を吐かなくて言いように嘘を吐き続けてきたのだ。だから、本当は鞠莉学園長に偉そうに説教垂れたり、アドバイスなど出来ない。だけど、放つてなどおけない。例え苦手な相手のことであろうとだ。辿る道が違うとしても行き着く先が私のようになってしまうのならばそれを私は許容出来ない。

「何があつたのか知りませんし、何の話をしているのか分かりません。でも今のやりとりも、こないだの時も、お二人は話しをしているようで全然話せてない。何を格好付けてるのか知らないですけどそう感じるんですよ。偉そうに何言つてんだと思うかもしれないけど、感じたことは嘘ではありませんから」

なんだが、言っていて自分自身が不愉快になってくる。偉そうに語る自分自身が。

私は頭を下げるとそそくさと下駄箱に向かった。

「そう出来れば一番いいのにな、お互い」

すれ違いざま、鞠莉学園長の言葉が私の胸に響いた。その後悔、苦悩、不安、一瞬だけ感じたそれらの感情と共に含まれていた共感。それが私を混乱させる。一体彼女は、いやきつとダイヤさんも果南さんもだ。彼女達に何があつたのだろうか。

私は聴きたい気持ち在必死に抑えて下駄箱に向かった。

安易な気持ちでは向き合えない。だって私ならそうして欲しくないから。

第二十九話

翌朝、我らが浦の星女学院のお膝元である内浦の砂浜にやってくる
と、そこには沢山の人がいました。

「この街ってこんなに人が居たんだ」

「うん。街中の人に来てよ。勿論学校のみんなも」

驚いた表情で梨子先輩が砂浜に集まった人達を見渡した。私も同様の気持ちだ。確かにA q o u r s のファーストライブの時も人が集まったが、あれはこの内浦の人のみでは無い。

打って変わって今日来ているのはこの内浦の住人と浦の星女学院の生徒だけだ。それでも数百人はいる。普段学校の行き来やご近所との付き合いしかしていません。ため過疎の進んだ集落のイメージを持っていたが、まだまだ人が居るではないか。

よし、今日は終わったらラジオ体操を演奏しよう、と反射的に考えてその思考を放棄した。私はもう音楽はやらないのだ。

「毎年やってるんですか？」

「そうだよ。だってこの海に来てくれた人に、内浦がいいところだっ
てそう思っただけじゃないもん」

「私達だけじゃない。この街のみんなそう思っただけじゃない」

海無し県から来た私にとって海はまだまだ馴染みの薄い場所だが、見る度にちよつとした感動を覚えるのは事実だ。その大きさに目を奪われることはしばしばあるし、天気の良い日の海は本当に輝いて綺麗だ。その果てしなさを前にすると世界の広さを実感する。

私はまだ新参者だからそう感じるがここで育った人にとってはきっとそれが普通なのだろう。もしかしたら普通だからこそ、その存在の大きさに気付いていないかもしれない。だが、共通して大切であると認識しているのはその存在感ゆえだろう。

私はふとあることを思った。

「これなんじゃないかな。この街や学校の良いところって」

梨子先輩もまたそれに気付いたようでそう口にした。だが、梨子先輩だけじゃない。千歌先輩も曜先輩も頷いている。

曜先輩は一年生組を呼んでこのことを話すと同意を得たようで、千歌先輩はそれを見て浜辺に設置されている監視員用の演台に上ると今日ここに志を共にして集まったみんなへと語りかけた。

「あの、みなさん。私達、浦の星女学院でスクールアイドルをやっているAqoursです。私達は学校を残すためにここに生徒を沢山集めるために、皆さんに協力して欲しいことがあります」

千歌先輩は本当に凄いと思う。すると決めたらする。単純なようで一番難しいことを彼女は平然とこなすのだ。普通星人を自称しているが私は千歌先輩を普通だと感じたことは無い。

「皆の気持ちを形するため」

その一言は力強く、聴いてるこちらは不思議とやってみようと思うような響きがある。

これだ。私が音楽をしないと決めても尚、スクールアイドル部の活動に協力してしまうのは。

私は千歌先輩に魅せられているのだ。多分最初に声を掛けられた時から今日に至るまで。

音楽が好きであることを曲げられなかった私には、沼津に来てその中でも小さな内浦でスクールアイドルをする彼女の真つ直ぐさが眩しかった。みんなと楽しそうにしている姿に憧憬したこともあった。彼女が作ったAqoursは私が中学時代に夢見たものに酷似していた。だから私はその夢を側から見たくて離れる事が出来なくなっていた。

音楽をやらなと言いつつAqoursの音楽活動に協力するのを止められない。

私は自分の中で一区切り付いた気になっていたが、まだまだ私は乗り越えられていないようだ。

千歌先輩の演説に多くの人が協力すると申し出ている。私はそんな姿を傍らでただ見守っている。きっといい動画が撮れるだろう予感を胸に。

この街は皆が同じ想いを持っている。その大切な想いのためならば街が総出で頑張れる。それがこの街の良さだ。勿論、最初に思い付いた景色の良さなんか魅力的であることに変わりはない。

それらをふんだんに盛り込んだ新曲のPVを作ることとなったのだ。みんなで、という響きはどこかμ'sを彷彿とさせる。

「で、作るの分かったんですが一週間って何ですか？」

「いやー勢いと言いますか」

千歌先輩は相談もなくまた突っ走った結果、海開きから一週間後に撮影することとなったのだ。

まだコンセプトしか決まっていないと言うのだ。

「大丈夫。メロディーはもう出来てるから」

梨子先輩が苦笑いしながらフォローしているが、こめかみな青筋が立っているのは気のせいだろうか？

「歌詞は？」

「どんどん浮かんできてる」

うん。これは怒っていいところですよ、梨子先輩。

実質まだ曲は出来ていない。曲が出来ていないならムービーだつてどんな画を撮るのか決まらない。先行き不透明にも程がある。

さて、何で部外者の私がこんな事を言うのかといえば、振り回される事が目に見えているからだ。いや、私が協力を拒否すればいい話なのだが、それではみんなという大前提が崩れてしまう。

「千歌ちゃんじゃないけど、なんか出来る気がしてきたんだよね」

曜先輩もまたお馴染みの敬礼ポーズでそんな事を言う。見ればルビィちゃん達もまた同じ様に頷いている。

この街の良いところを自覚して吹っ切れたというところなのだろう。今ならどんな事も出来る。そんな顔だ。

「分かりました。必要ならパシリでもなんでもしますから声掛けてください」

「じゃあ早速」

「もうですかっ」

「今日の放課後、部室に集合で」

それではまるで部員みたいではないか。

そうじゃないんですよ先輩。私はそうしちやいけないんです。だ
というのにそんな風を楽しそうに誘われては断れないじゃないです
か。

「わかりました」

こうして私はまたもやスクールアイドル部の活動に協力すること
となった。

第三十話

これまでのAqoursの活動の中でも今回が一番大掛かりな内容となる。また、身内の人間だけで無く、近隣住人を巻き込むこととなったため、調整事項が多数あるのだ。だが、それら関係各所への連携は鞠莉学園長が引き受けたため、実質Aqoursが行うことは陣頭指揮と進捗状況の把握となった。勿論、先陣を切って物資の調達や備品の整備はしているが、本当にみんな協力的で少ない時間ながら楽曲の製作に割く時間が融通できたのは大きい。

個人的には鞠莉学園長のことはかなり警戒しているが、良い仕事をしていると言わざるをえない。

「それにしてもスカイランタンとは、またどえらいことを考えますね」スカイランタン、または天灯ともいう。空飛ぶ提灯的なものをイメージしてもらえばわかりやすかろう。近年では映画のラプンツェルで劇中に出て好評だったのが記憶に新しい。

やることなすことが街を上げての祭りと同規模になっているがその案が通り、しかもみんなから同意を得られるというのだからこの街は本当に結束が固い。

「折角みんなが協力的してくれるっていうから、みんなが協力したことがどんな形であれPVに映るようになってほしいなって思ったんだ」

「コストも部費でなんとかなるみたいだったしね」

現在、私はAqoursの指揮の下、放課後の時間を利用してクラスのみなどとせつせとスカイランタンを製作している。

作ったことのある人なんて居らず、最初こそみんな戸惑いながらもだったが、段々とコツを掴んできたのか雑談しながらでも作る程度の余裕が出てきた。

「楽曲の方はどうなんですか？」

「もう出来たよ。今は衣装作りしてるんだけど、星ちゃんもいる？」

「ノーセンキューです」

「いけずー」

なんて千歌先輩といつも通りのやりとりをしている。なんだかこ

とあるごとに誘われてる気がする。

確かにこないだのコラボ企画では同じ衣装を身に纏った。だが、それはそれだ。夢はいつまでもは続かない、一瞬だからこそ輝きを放つのだ。もつとも、彼女達が太陽だとするのなら私など二等星が関の山だ。

「私に掛けるお金なんてないでしょうに。幾ら思ったよりも安く済んだからって、それなりにはコストも掛かってますよね」
「う」

「あ、今の千歌先輩、弓で射貫かれたみたいですね」

ラブアローシュート的なあれだ。分かる人には分かるネタ。μSが青色担当、園田海未の持ちネタだ。

「千歌ちゃん手が止まってる」

曜先輩からの指摘に慌てて作業に打ち込む千歌先輩に反し、私は作業の手を休めたりはしていない。これでも器用を自負しているのだ。

「あ、星。そこ違う」

「ぴぎいっ！」

と思った側から善子ちゃんからご指摘をいただき、思わず変なリアクションを取ってしまった。

心なしかルビイちゃんが私のことをジト目で見て否定の言葉を口にするが

「私そんな変な声出してないです」

「自覚あるじゃん」

「ぴぎいっ！」

そんな訳は無かった。私も善子ちゃんも心を一つに同じ突っ込み。

このリアクションは正直あざとすぎて同性から嫌われると思うが、ここにはルビイちゃんの事を知らない人は居ない。ルビイちゃんのキャラクターを知っている人ならば、あざとすぎるリアクションに不快感を抱く人は居ないだろう。

「もう、みんな集中するぞら」

そして見かねた花丸ちゃんがみんなを諫めるのだった。

なんだか作業をしているのはしているが気持ち的には久し振りに

のんびりとした日だ。

思えばこつちに引越してから予想以上に充実した日を送っていた。

親の転勤に巻き込まれて引越してきた頃はただ毎日をぼんやりと過ごしていた。引越す前に父親と戦争したためか入学する前は本当に燃え尽きていた。音楽はやらないと言いつつ、音楽がなれば私はきつと腐りきっていただろう。

浦の星女学院に入学してから生活が一変した。その変化の中心にはいつもスクールアイドル部がいた。

まさか沼津の内浦にスクールアイドルをやろうなんて人がいるなんて誰が考えるだろう。音楽活動なんて出来る環境でもないし決めつけ、私自身活動しないという決意はその予想外のことでかなり揺らいだ。悩んだし、でも彼女達と一緒にいることは楽しかった。

できないと諦めない姿。不可能を可能とする行動力。みんなを巻き込む牽引力。それに私は引き摺られながらも付いていった。そしてたら本当に小さいけれど、彼女達は私が願った場所に連れて行ってくれた。キラキラとした夢のような時間だった。

私が音楽を続けていたらきつとハーモニカでμSの「Kirara Sensation!」を演奏していただろう。

ここに引越して来たことに後悔はある。その評価を私はまだ覆すことは出来ないでいる。だけど確実に言えることはある。私はこの街やみんなのことが好きだったことを。

「ねえ、もし差し支えなければだけど、手伝ってくれたみんなにさ、ラタンに一言ずつ想いを書いてもらわない?」

私がなんとなしに言った言葉にみんなは目を丸くした。あ、これ滑った時と同じ空気だ、と思ったがそれは違くと直ぐに分かった。あの意味で滑った時よりもやらかしてしまった。

「星ちゃんが自分から何かを提案するのって珍しいね」

ルビィちゃんに言われて私も自分の失言に気が付いた。

このPV撮影には私はあくまでも手伝いで参加しているのだ。その立場も弁えずその方向性について口出しするなど烏滸がましい行

為だ。私はまた自分で線引きした筈のラインを越えてしまったのだ。

「今のは忘れてください。単なる独り言です」

「いや、それいいと思うよ」

「うん。私もそう思う」

私のささやかな否定はもはや効かない。取り消しはできなかった。曜先輩も千歌先輩も乗り気になってしまった以上、これは決定事項だ。だが何故だろう。後悔とは裏腹に高揚する思いがあるのは。凄く楽しみに思ってしまうのは。

結局私の案は採用されることとなり、私は笑顔でみんなと一緒に準備した。私自身の情けなくて泣きそうな心を置き去りにして。

第三十一話

撮影は二段階で行う。昼の内浦の景色、そして黄昏時の内浦の景色それぞれの魅力を盛り込みたいからだ。

既に新曲「夢で夜空を照らしたい」前半部分の撮影は終わっている。今日は綺麗な晴天。屋上から青空をバックに躍るA q o u r sの六人は本当に素敵だった。

一枚布で作られたような落ち着いたドレスのような衣装はワントーンで大人っぽさを出しつつ胸元に大きなりボンがあしらわれ可憐さが同居している。全体的にしっとりとした曲調としなやかなダンスを十二分に引き立てていた。

正直予想以上に出来がよかった。今回は準備の手伝いに掛かりきりで練習を見ていなかったから尚更そう感じるのかもしれないが、彼女達のパフォーマンスは既にオーディエンスを楽しませるに足る実力がある。

ファーストライブは好奇心だった。二回目はただ楽しかった。そこから成長して今回はみんなに届かせたかった。そばで彼女達の歩みを見ていたからこそそんな思いがより一層伝わるのだ。

「もしも？その位置で良い感じだよ。じゃあ、予定通り一時間後にやる前にまた連絡するから」

夕焼けが深まる時まであと一時間。今回撮影の協力をしてくれるみんなは既に浜辺にスタンバイし、ランタンの代わりに懐中電灯の灯りで位置取りを微調整した。

実に壮観だ。協力してくれるみんなには悪いけれどこれ以上の特等席はないだろう。

「準備万端だね」

「そうですね。みなさんは体が固まらない程度にリラックスしてて下さい」

「じゃあハーモニカ聴かせてよ。最近全然聴いてなかったし」

「そう言えばそうね。星って暇さえあれば演奏してるイメージだったけど最近は全然。どうかしたの？」

千歌先輩と善子ちゃんの提案は、いつか来るであろうと予見していたものではあったが、実際に言われると予想以上に返答に窮するものだった。

私はもう音楽はやらない。そう宣言する度胸も覚悟もないからみんなは知らない。知らないけれど分かって欲しいなんて都合の良いことを考えてしまう私は愚か者だ。

「今日は撮影のために来たので持つてないですよ」「え?」

「持つてきてない、ずら?」

「て、天気予報を」

「納得いかない!」

私の返答と聴いてまるで天変地異の前触れかというような反応をみんながする。

「いやいや、星ちゃんと言えばハーモニカ」

「うん」

「なんですか、その常識でしよみたいな反応は」

「まあ冗談はさておき、最近演奏してるところ見てないから気になつてたのは本当」

何かあつたの、と首を傾げる一同に私は苦笑いして誤魔化すしかできなかつた。

「そうだ。みんなへの合図用に上げるランタン持つてきますね」

私は拙い誤魔化しに誤魔化しを重ねて屋上を後にし部室へと向かつた。

私がもうやらないといつたらきつと何故、と質問が来る。そうなつた時、それに答えるには私の過ちを一から説明しなければ説明しきれない。だが、それは怖い。きつと私は嘘つきとして信用されなくなるだろう。だから言わない。私は私を語らない。それが以前の過ちと同じことを繰り返していると分かつていても。

「なんで黙つてたの?」

かつて静かにそう問い質してきた親友の姿が脳裏に過ぎる。彼女はそんな気持ちだつたのだろうか?

私はスクールアイドル部の部室に着くと、机の上に一つだけある真つ新たなスカイランタンの前に立った。

浜辺のみんなへの合図用に作られたそれはだが、主に補助用としての運用が始めから決まった居た。

他のランタンには今回の撮影に協力してくれたみんなにそれぞれの想いを綴って貰っているが、このランタンにはその役割から何の思いも込められていない。

「大丈夫。空に上がったならみんなと一緒に。地上からじゃ見分けなんて付かないよ」

意図せず一人ぼっちになってしまったランタンになんとなしに私は語りかける。勿論返答なんてありはしない。私は椅子に座り込むとペン立てにあつたマジックペンを手持ち無沙汰にくるくると回す。

「あつ」

そう言えば私はランタンに何も書いていなかった。目の前には真つ新たなランタン、私の手にはマジックペン。

さて、どうしたものかと私は頭を悩ませながらマジックペンをくるくると回し続ける。

想い、願い、と一言で表すのは簡単だが、私にとって何が一番なのか把握することは難しい。

そもそもだ。それ以前の問題なのだ。私にはこのランタンに想いを綴る資格などないのだ。自分のこともまともに話せない私がどの面下げて書くというのだろうか。

「おつと」

ふと手元が狂いマジックペンがコロコロと床を転がっていく。

拾うことに面倒くささを感じながらも立ち上がりマジックペンを拾おうとすると、私よりも先にマジックペンを掴む手が現れた。

「え」

「はい。星ちゃん」

千歌先輩だ。いや、千歌先輩だけじゃない。曜先輩も梨子先輩も、花丸ちゃんにルビィちゃんに善子ちゃんもみんながいつの間にか来ていた。

私は背中にじわりと汗が噴き出すのを感じた。別に大した事をしていたわけではない。だが、タイミングが悪すぎるのだ。屋上から逃げるように部室に来て、ノスタルジーに浸っている姿などどんな印象を与えるだろう？何かあったとしか思わせないだろう。

「何でここに？」

「外は暑いし、それに私達も忘れてたことがあって」

千歌先輩はマジックペンのキャップを取ると、ランタンにスラスラと何事かを書き込んでいく。

「みんなには一筆入れて貰ったけど私達は何も書いていなかったなつて」

「星ちゃんと一緒だよ」

書き終えた千歌先輩からマジックペンを受け取ると曜先輩と梨子先輩もまた同様に何事かを書き込んでいく。

「な、何のことでしょう？」

「知られたくないなら見ないようにするから」

ルビイちゃんもまた曜先輩からマジックペンを受け取り迷いながらもランタンに想いを込める。

「それに発案者でしょ。発案者がやらなくてどうするの」

バトンリレーのようにマジックペンが渡されて行き、その度にランタンは白の面積が減っていく。

「空に飛ばして見上げれば私達の思いなんて小さいものずら」

善子ちゃんが、そして花丸ちゃんが書いたところにはランタンはかなりの部分が黒く染まっていた。当然だ。一つのランタンに6人の想いは大きすぎる。だが、その黒さは私には輝いているように見えた。

「じゃあ先行くから」

みんなはマジックペンを私の前に置くと屋上へと戻って行った。

「本当に強引なんだから」

ランタンには一カ所だけ空白が残されていた。丁度一人分、一筆綴るには十分なスペースが。

そのスペースに私は――

空の色が茜色から紫色に移ろう黄昏時、撮影は予定通り始まった。刻一刻と色に深みが増していく中、A q o u r s の新曲「夢で夜空を照らしたい」が流れ始めた。

始めの頃は三人だけでも息を合わせるのが精一杯だった彼女達が六人になった今、見事に動きを合わせている。メンバーが増えたにも関わらず全体の動きは良くなっているのは凄い一言だ。

公開していない曲を含めてA q o u r s の曲はこれまでアップテンポのものが多かった。イメージを一新したこのバラードは、振り付けもまたこれまでのものと違う種類の動きとなる。今までのアップテンポの曲は動きのキレを要求されるものだったが、このバラード曲は動きのしなやかさで魅せる種類のものだ。

私はみんなの歌とダンスに目を奪われながらも、自分の役割を全うできるようにタイミングを計っていた。

浜辺でスタンバイしているクラスメートや街の人達も既に撮影が始まっていることは承知。あとは通話状態を維持した電話越しに合図を送るのと、大勢の協力者がタイミングを合わせられるように私の、いやA q o u r s のランタンを飛ばすだけだ。みんなの思い込められたこのランタンを。

心の中で私は歌に合わせてハミングする。

この曲はこの場所への想い、そしてA q o u r s の抱いた夢を目指す気持ちを込められたものだ。

彼女達は夢を育んだこの場所から頑張りたいと願っているのだろうが、私がこの曲から受ける印象はみんなとは違う。

私はこの場所で育った訳では無い余所者だ。だからみんなの気持ちを真に理解することはきつと出来ない。でも、この曲には私がここに居てもいいと、そう言ってくれているような暖かみがある。

曲が前半パートが終わり、いよいよPVで使用される後半に移る。

カメラはずっと回している。アングルは既に決めているから私はレンズ越しではなく自分の目で彼女達を見つめる。

とても素敵だ。余計な装飾なく私はそう思う。

うーうーそれは階段、それとも扉、夢の形は色々あるんだろ

うーうー 奇跡的に巡り会った彼女達は性格も好みもばらばら。本来ならば交わることのなかった線なのかもしれない。

うーうー ーうーうーそして？がれ、みんな？がれ、夜空を照らしに行こう

うーうー それでも彼女達は集い、こうして同じ空の下、同じ歌を歌い、舞っている。輝いている。

私は気付けばタイミングを計ることを忘れていた。だが、計るまでもなく私はランタンを飛ばす合図を出していた。

何が言ったのかなど覚えていない。だが、私の手からランタンが離れ空に昇っていく様子は鮮明に覚えている。

「輝きたい」、「やり遂げたい」、「奏でたい」、「夢見たい」、「楽しみたい」、「魅せたい」、そんなみんなの願いが空へと吸い込まれていくその瞬間を。

浜辺に集まりAquoursの文字を象っていたみんなのランタンが多分出したであろう私の合図で一斉に解き放たれ、私の上げたランタンなどすぐに区別がつかなくなった。

「ホントだ。空に上がったなら全然分かんないや」

空を温かく彩るランタンに確かに書かれてる想いはもはや認識領域から離れてしまった。だけれども、みんなの想いを私は覚えている。

きつとPVにはその綴られた想いは映らない。それでもみんなの気持ちは小さな灯りとなつて感動を与える筈だ。

千歌先輩はこの撮影の前に言っていた。ここには何も無いと思っていたがそんなことはなかったのだと。この場所からだって出来ることはあると、追い掛けられると。

この光景を見たらその通りだなと思った。それでもそれは彼女達

の話。残念ながら私は既に終わってしまっている。ただ、願わくばその終わりをきちんとしたものにした。

「終わらせたい」そう綴った私の想いは人知れず天へと吸い込まれていった。

第三十二話

最近は名ばかり図書委員になりつつある花丸ちゃんに代わり私が図書室の番人をしてることが多くなった。

今日もまた放課後に図書室の受付に陣取っている訳だが、これが中々居心地が良い。

エアコンは無いが、今時図書室を使ったがる奇特な人は居ないため、扇風機を独占出来るのだ。

扇風機を弱にして私は心地良い微風に当たりながら今日もまた読書に勤しむ。

今日読んでいるのは幼年期の終わり。アーサー・C・クラークのSFだ。

この作品以外に彼の作品を私は読んでいないが、洗練された未来が描かれていることが彼の作家の特徴らしく、この作品もまたそんな世界が描かれていた。

緩やかな進歩は人類を次のステップに進ませたが、その果てに何が待っているのか？ネタバレにならないように言えば予想していなかったことであるとしか言えない。一つ言えるとしたら進んだ科学を描くようなジャンルでもやはり焦点となるのは生きているものなのだろう。

さて、幼年期の終わりと言えばAquoursだ。ただ輝きたいという願いから生まれた彼女達だが、廃校を止めるという明確な意図を持った今、確実に幼年期の終わりを迎えたと言えよう。

こないだ撮影したPVも昨日の時点で五万再生を射程圏内に入れる好評ぶりであった。これはかなりの進歩だろう。この進歩で天狗にならなければよいのだが。

「星ちゃん、ごめんね変わって貰って」

「お疲れ様、花丸ちゃん」

まあ、こうして練習終わりに律儀に閉鎖時間間際の図書室に顔を出す花丸ちゃんはそんなキャラでもないか。

「さあ、図書室を締めて帰りますか」

私達は図書室の戸締まりを確認すると図書室を施錠し、鍵を返却しに職員室へと向かう。

もともと人数の少ない学校だ。校庭からは運動部の練習の音が聞こえるが校内は閑散としている。そんなか私達は上履きの乾いた音をパタパタと鳴らして歩いた。

「星ちゃんは東京行ったことある？」

「そりやあるよ。元埼玉県民だよ私。池袋、新宿にはよくお世話になりましたよ」

東上線で一時間半以上、交通費片道600円オーバーの非常にハードな旅だが。交通の便や品揃えを考えるとさいたま市に行くよりも池袋なのだ。いかんせん埼玉は横の移動が弱いからだ。

「藪から棒にどうしたの？東京に出たくなかった？」

「いや、東京のスクールアイドルイベントと一緒に歌いませんかって連絡があつて」

「凄いね。そんなとんとん拍子に話しが進むなんて」

詳細は分からないがきつと東京で行う以上はこの内浦にある施設を凌駕する規模でやるのは間違いないだろう。

よくよく考えたらAqoursはまだグループとして大勢の前でライブをしたのはまだ三人だった頃の最初のライブだけ。いきなり東京でライブとか大丈夫なのだろうか？

「まる、東京ってしばらく行ってないからちよつと不安なんだ」

「あ、行くの確定なのね」

私達は職員室に鍵を返し下駄箱に向かうと、下駄箱で皆が待っていた。

「そうだよ。だって東京だよ。東にある京だよ」

「なんの説明にもなっていないけど」

「とにかくチャンスだよ。ここでいい成績を出せば注目も浴びる。私達が有名になれば学校のことだって知って貰える」

千歌先輩はやる気に満ちあふれ、みんなもまた満更でもなさそうな感じだ。かと言って調子に乗っているような感じではない。純粹に挑戦心なのだろう。

「東京かあ。何時以来かな」

「オシャレなものが私を待ってる」

あるいは単に東京に行きたいだけかもしれない。

しかし、東京のイベントに招待されたと言うことは曲がりなりにも五万再生に近似する延びがあるPVが評価されたからだろう。腕試しするチャンスを与えられたのは間違いないではないだろう。

「是非とも頑張ってください」

「何言ってるの？星ちゃんも行くのよ」

「What?」

「行くのよ」

梨子先輩の有無を言わせぬ必死さが垣間見られた。

「何で私まで」

「だってこの子達みんな東京に慣れてないのよ？このメンバーを無事に引率するなんて無理よ」

「梨子先輩みんなのこと軽く馬鹿にしてませんか？」

花も恥じらうスマホ世代。まだ見ぬ土地もナビ見て解決だ。とは言え確かに彼女達がお上りさん丸出しになるうとは容易に想像が付く。また東京の地下なんか迷い込んでほぐれたら連絡を取り合えても合流するのは難しいのだ。

私も慣れてない頃は良く新宿の地下で迷ったものだ。歌舞伎町に行こうとしてサブナードで迷ったり、地上に出たら歌舞伎町の一本前の通りの紀伊國屋に出たりとしたものだ。

この経験から下手に地下を移動するより地上を移動した方が目印が沢山あり、またウェブでの検索にも地図が出やすいことを覚えた。「とにかく、みんなのこの浮かれようを見て。絶対に碌な事にならないから」

「いやいや、私をその碌な事に巻き込まないで下さい」

「起こさせないようにするの。だからお願い」

「大丈夫だよ梨子ちゃん。心配症なんだから。ところで梨子ちゃんは回りたい場所ある？」

「スカイツリー行こうよ」

「あの、ティーディーエルに行きたいです」

「ルビイちゃん。そこは東京を語ってるけど千葉なんだよ」

「ぴぎこ」

小学生の引率の先生じゃあるまいし、とも思ったが完全に意識を東京に染められている彼女達の様子はなるほど、不安になるのも当然だ。

しかし東京行きは即答するには些か躊躇う場所だ。片道3時間以上、約3000円の道のりはホイホイとついて行けるものではない。また、もう一つ私には懸念事項があった。

「音ノ木坂とかUTXとかも見れたらいいね」

そう。μ's好きの千歌先輩やアイドル好きのルビイちゃんなら間違いないμ'sの母校である音ノ木坂に行きたいと言い出すに決まっている。

正直今の私に音ノ木坂に近づく決心はまだ着いていない。こないだのPV撮影で終わらせたいと思いついたことは進歩だったが、まだそこ止まりだ。第一音ノ木坂に行っただけで彼女に会える訳でも無いし、会つても何をどう話せば良いのか分からない。というか皆の前でそんなことをしていたら私の隠したい過去を知られてしまう。

「じゃあこうしましょう。ランキングで100位以内に入ったら私も同行しましょう。東京で腕試しするなら県で2位以内くらいの実力が無いと話にならないでしょうから」

昨日の時点で順位は120位前後。100位目前のようであるが、実はかなり大きな壁だ。ここから先は各地のトップランカーが群雄割拠する、言わば戦国時代状態なのだ。そう簡単には順位は上がらない。

「本当に100位以内でいいのよね？」

「ええ」

「ありがとう」

まるで私が行くのに同意したような梨子先輩の物言いに私は嫌な予感に駆られた。

「マジのマジっ？」

「ほら」

善子ちゃんがスマホでランキングページを出すと私に証拠だと言わんばかりに見せてきた。

まさか100位以内とは私も予想外だった。飛ぶ鳥を落とす勢いとはまさにこのことだろう。

「じゃ、みんなで東京だ！」

こうして東京行きが決定した。

第三十三話

二人は何の影も無く唯々楽しそうに音を掻き鳴らしていた。

私はハーモニカを吹きながらタップシユーズで地を第二の楽器としてビートを刻み、彼女がギターで主旋律を奏でながら歌う。

私達は二人。μΣみたいな人数かいないから少し物寂しいがその分一人あたりが使えるスペースは広い。私達は全身を使って画面一杯に全力でパフォーマンスをしていた。

彼女とパフォーマンスをする前にする掛け声を思い出す。

「太陽にはなれないかもしれない。でも一番星にならなれる。私達は—————」

「まだ消してないんだ」

中学時代に相方と共に動画サイトに投稿した動画を私は見ていた。

音楽活動を活発化させるためにスクールアイドルのランキングに登録しようとも話していたが、スクールアイドルとして活動できるのは高校の三年間だけ。まだ中学生だった私達は大衆的な動画サイトに投稿していた。

ただ投稿するだけでは人目に止まらない。だから色々な有名曲をカバーして、まずは『歌つてみた』、『演奏してみた』のシリーズから始めある程度の視聴者が出来てからオリジナルの楽曲をやっていた。

まだ音ノ木坂を目指していた頃、夢は報われるのだと信じていた時代の名残だ。

東京に行くことが決まった今、どうしても確認しておかなければならないと思ったのだ。

やはり予想通りだった。アカウントはお互いにパスワードを知っているため消そうと思えばお互いに消すことができる。だが、まだ残っていた。

もう無視して放置しているとも考えることもできるが彼女のことだ、それはないだろう。

きっと彼女も何かしらの決着を望んでいるに違いない。自意識過

剩と思われるかもしれないがそれで彼女が悩んでいると思うと私は本当に罪悪感で涙が出そうだった。だが、泣く資格など私にはないのだ。そうすることができるとすればそれは私が彼女に彼女が納得する形で詫びを入れるしかないだろう。

東京で彼女と遭遇する可能性は低いと見ていい。だが、音ノ木坂に近づけばその確率は否が応でも上がる。そしてみんなの性格を考えると音ノ木坂に行きたがるに決まっている。

避けようがないことならそれを逆に良い方に考えることで私は自分の気持ちを整理することにしたのだ。

みんながいればきつと私は逃げない。一人では立ち向かえなくてもみんながきつと私に力をくれる。なら心配することはない。私は自分にそう言い聞かせてざわつく心をひたすらに落ち着かせようとした。

画面の中ではそんな私の気も知らず無邪気に楽しむ私が居た。そんな自分の姿を見ながらぼんやりと思ったことがある。もしも音ノ木坂に通っていたら私達は人を魅了するような活動が出来ていたのかと。A q o u r s のように多くの視聴者を獲得していたのかと。

比較対象として考えた時、心に燻った対抗心に私は驚いた。まだそんな風に思う程に私は未練があることに、なによりA q o u r s に対してライバル心を持つほどに彼女達の存在が大きくなっていることに。

私は燻った心に戸惑いながらもこの問題は後に回そうとパソコンの電源を落とした。

第三十四話

東京行き当日、私達は千歌先輩の家の前で集合し、千歌先輩のお姉さんが出してくれる車に同乗することとなっていた。ちなみに善子ちゃんと曜先輩は沼津駅前で合流することとなっていた。

私はどちらでもよかったのだが、いかんせん時間が早いのでお邪魔することとなった。

「おはようございます、早いですね」

「直ぐ隣だもん」

私は千歌先輩の自宅である旅館、十千万屋の前に着くと、既に到着していた梨子先輩に挨拶した。

東京に行くため服装に少し気合いを入れてしまった私とは打って変わって、梨子先輩は気張らない何時も通りな感じだ。ピンクのサマーセーターがホームグラウンド感を醸し出している。流石は元東京民。埼玉出身の私とは違う。

「そのパンプス可愛いね」

「いえいえ、梨子先輩の可憐さには敵いませんよ」

「何言ってるの。それより今日は無理言っごめんね」

「いえ、私も東京で迷ったことありますから心配する気持ちは分かりませんし、みんなが暴走しだしたら収集つかなくなるでしょうから」
「なんだか段々行きたくなくなってきたわ」

頭を抱える梨子先輩に激しく同意である。そんな雑談をしていると暴走したら止まらなそうな千歌先輩が玄関から出てきた。

「見て見ー」

「見るに堪えません」

何故買ったのか、そもそも何処行けば買えるのか不明なド派手なテクテカした服を着た千歌先輩の両肩を持つと強制的に回れ右をさせて背中を押した。いや、本当なら背中を蹴っても良かったかもしれぬ。蹴りたい背中ってやつだ。

「もー何するの」

「お上りさん丸出しの方がまだマシですよ。気合い入れすぎて完全に

外してますから」

「あの」

「何」

私の言葉を遮る声に振り向くとそこにはなにやら絵本の王子様みたいな格好のルビィちゃんと探検家だか掘削作業者だかよく分からぬ格好をした花丸ちゃんが居た。

「どうでしょう。ちゃんとしてますか？」

「これで渋谷の険しい谷も大丈夫ずら？」

「梨子先輩。私帰って良いですか？」

「お願い。私を一人にしないで！」

出だしから想像を超える暴走っぷりに私は帰りたいたいと思う反面、梨子先輩の要請は正しかったなと納得した。

「梨子先輩。時間設定を早めにして正解でしたね」

「みんな今すぐ着替えてきなさい。東京以前の問題よ、その格好は」

最近梨子先輩に切れキャラになりつつある気がするが、これに関しては致し方ない。

「みんな東京馬鹿にすんな」

「なに地元人みたいなこと言ってるの。あなた埼玉っ子でしょ」

てへぺロ。いや確信犯だからゲヘペロかな。

みんなはどんな格好が妥当なのか頭を悩ませながら走って散会した。地元で着ない服は都内でも着ない。これお出掛けの基本です。

沼津から東海道線に乗り東京までは約2時間の旅。新幹線を使うルートもあるが、運賃が倍になるためのんびり普通の鉄道の旅だ。大人の週末旅行と似ている。

みんなは余り遠出はしないように窓から外の景色を眺めて目を輝かせている。私と言えば今日もまた読書に勤しんでいる。

「何を読んでいるの？」

「少女地獄。夢野久作の作品だね」

読書好きの花丸ちゃんはその読む本が気になるようで表紙を見せて答えた。

ちなみにだが、私は本にブックカバーは掛けない派である。第三者が私の読む本に興味を持ったときにその本がなんなのか分かるようにしたいからだ。言わば宣伝用だ。やはり自分の趣味・趣向は広めたいのだ。

「日本三大奇書の人だね」

「そうだね。でもドクラ・マグラよりは遙かに読みやすいよ」

夢野久作作品において恐らく一番有名なのがドクラ・マグラだが、あれは私には無理だった。一応は最後まで読み切ったが、良く出来ているとしか言えない。まだまだ読み解けていない部分もあれば内容も頭に入りきっていないが、もう一度読む気力が出ない。時代も幾分昔なため表現が難しいことや物語の進み方も難解なのだ。

「時代背景については私の憶測だけど、きつとまだ人の精神についての研究とかそんなに進んでいない時代に人の心の作用とかそういうのを題材にして掘り下げられるのは凄いなと思ったよ」

「その少女地獄は？」

「これはそうだね。短編が幾つかあるんだけど、表題作についていうなら嘘つきの話かな」

「嘘つき？」

「そう。やむにやまれぬ事情があるとかそんなんじゃないやなくて、性分として嘘をつかなくては生きていけない、そんな人の話」

始めて読んだときはしようもない奴だと思っていたが、今読み返してみると、この作品の嘘つきと私にどれ程の差があるかと思ってしまう。もちろん私は嘘つきの性分など持ち合わせていないが、私の嘘に被害を受けた人がいる、それは揺るぎない事実である。また、この作品の嘘つきも私も自分の事を第一に考えて嘘を吐いているのだから違いなどほぼない。

「星ちゃん？」

「ああ、ごめん。とにかくそんなしようもない奴の話だよ」

また自己に埋没してしまい花丸ちゃんに怪訝な顔をさせてしまった。他の面々は景色見たりお菓子食べたりしながら喋っているためこちらの様子には気付いていないようだ。

「花丸ちゃんもお勧めの本があったら教えてね」

「うん。ねえ、星ちゃん」

「何？改まって」

「星ちゃん最近よく読書している姿を見るけど、ハーモニカはどうしたの？演奏してる姿も音も全然聴かないけど」

いい加減私への違和感が誤魔化せなくなってきたようだ。だが、この東京行きがもしかしたら私の転換点になるかもしれないのだ。もう誤魔化すのではなく向かい合わなくてはいけないのではないか？こうして心配してくれる仲間のためにも。

音楽をやめる。たったの一言だ。

「私はもう」

そのたったの一言が何故こうも重いのだろうか。

「ううん。何でも無いすら」

「東京に行ってる間は禁止してるすら」

「今言ってたよ」

「ずっ、はうう」

私の不鮮明な回答に花丸ちゃんは納得していない顔をしながらもそれ以上の追求は無かった。

第三十五話

東京は秋葉原。我らサブカル民の集う電気街口を出るとそこには内浦にはない、雑然とした賑やかさがあった。

有名電機屋やデパートもそうだが、スクールアイドル専門店、コスプレ専門店、各種のグッズ専門店等々が軒を連ねている。

予想通りと言うべきか、A q o u r sメンバーはみんな自分の欲望に忠実に動きまわり、案の定はぐれた。幸い文明の利器に疎い花丸ちゃんについてはルビイちゃんが一緒に行動してくれたが、他の面々は土地勘が無いため梨子先輩と手分けして探す羽目となったのだ。

「それにしても」

何とか集合を果たし各々の買い込んだ物を見ると、なるほど趣味が走ってる。

千歌先輩はアイドルグッズ、曜先輩はコスプレグッズ、善子ちゃん は墮天使グッズ。そして梨子先輩は

「梨子先輩。私を連れ出しておいてそれは無いと思いますよ」

「う、面目ない」

そう。梨子先輩もまたしれっと自分の趣味に走っていたのだ。はぐれたりしたら不安だと私を東京に連れてきたくせに。

「しかも、壁ドン？顎ぐい？意外と梨子先輩って乙女なんですな」

「言わないで。別にそういうことされたいとか、イケメンが好きとかそういうのじゃないの」

意外な趣味が垣間見られたのは収穫であるが、微妙に知りたくなかった。まあ、私も二、三年前は富士蒼汰とかに現を抜かしていたりもしたから分からなくもない。イケメン+ときめきシチュエーションは最強だ。だが、あんな高校生がいるのはフィクションの世界だけだ。それを分かっているからこそ作品として楽しめるし、一時の夢を見ることのできるのだ。

「暫くはこのネタで弄りますんで覚悟してくださいね」

「どうか、ご容赦を」

「知りません」

別にイケメンとかアイドルとかにハマることは恥ずかしい事ではないと思うが、本人は体裁を気にしているようなので実に弄りがいがあるというものだ。

「何の話し?」

「な、何でもないの千歌ちゃん。それよりもう着いたわよ」

私達はみんなと集合してから神田明神に向かっていた。

私の知る限り日本にアイドルの神様なんかいない。当然ながら神田明神もそんなのではなく商売繁盛とかの御利益があるとかないとか、三が日は多くのサラリーマンが足を運ぶ。では何故私達が足を運ぶのかというと、かのμ'sがこの神社の階段で練習をしていたというのだ。その上μ'sメンバーの一人、東條希が巫女のバイトをしていたというのだからそりゃ話題に上がらない訳が無い。その話しが広まっただけからスクールアイドル聖地百選に選ばれている程だ。

駅からそれほど離れていないため見に行くことは当初から予定されていたが各自買物に勤しんでいたためもう夕方になってしまった。

「ここだ」

「これがμ'sがいつも練習していたって階段」

神田明神へと?がる階段「男坂」の前に着くと千歌先輩は感慨深げにつぶやき、ルビイちゃんは憧れに目を輝かせている。

その感覚は私も覚えがある。かつての相方と音ノ木坂に学校説明会に行った時のことだ。私は特別μ'sに入れ込んでいた訳ではないものの歴史の一部を感じるような、足を踏み入れたようなそんな気分になった。

「登ってみない?」

千歌先輩の提案に私達は頷き、駆けだした。

階段はなるほど、かなりの傾斜があり足にくる。だが、長さがダツシュするには適している。頂上に着く頃にはすっかり息が切れてしまった。

「はあ、けつこうきますね」

「というか、星ちゃん。練習とかしてないのに私達と同じペースって、

どうなってるのよ」

「積み上げた貯金があるからね」

管楽器などは吹くのに結構体力がいるのだ。ハーモニカは厳密には管楽器ではないが、吹くことには変わりない。だから私は肺活量と体力を同時に鍛えられるようランニングはやっていったのだ。引越してからは、特に最近はやっていないがそれでも人並みには動ける程度の体力は維持できている。

「μ×sが登ってたんだ。ここを。ラブライブを目指して」

全員が登り終わると、階段を振り返ると夕焼けが美しく私達の目に映った。

きつとこの光景はμ×sが練習していたときから変わらないう。そう思うとまた全国を制したμ×sが手に届くような、そんな近さを感じた。

「—————」

ふと、風に乗ってコーラスが聞こえた。私達はそれに釣られるように境内に入る。少し進むと社殿の正面の開けた場所に出た。

社殿のお賽銭箱の前に二人の女子高生が熱心に歌っていた。

アカペラでありながらただの歌に収まらない。非常に言葉として表現し難いが音楽になっっている。伸びやかで綺麗なコーラスだ。

紺と赤い縁取りをされた制服は見覚えはあるが、この近所の音ノ木坂やUTXとも違う。

私もみんなも思わず聞き惚れていると、やがてコーラスは終わった。

「ブラボー」

みんなが固まっている中、私はささやかながら拍手と喝采を送った。例えば人に聴かせるために歌っていたわけではないとしても、人から賞賛されて嫌な顔をする人はいない。私なら流しで演奏して拍手を送られたらきつと嬉しい。

「こんにちは」

「こんにちは。すみません。盗み聞きするみたいになってしまっ

「いえいえ、公共の場で私達が勝手にやってたことですから」

二人とも非常に似た顔立ちをしている。髪の毛の色も同じ薄く紫がかつたものだし姉妹なのかもしれない。背の大きい方は多分姉なのだろう。柔和な余裕のある笑みを浮かべている。妹の方は勝ち気さが垣間見られるやや釣り目がちな目で私達を警戒するように見ている。まるで猫のようだ。

というか顔を見たら益々見覚えがある。この二人は北海道のスクールアイドルでも三本の指に入る期待の新星、確か名はSaint Snowだ。ランキングを見るとよく彼女達の名を見かける。

「貴方達もしかしてAqoursのみなさん？」

私と同様にSaint Snowもまた私達のことを知っているようだ。Aqoursも有名になったものだ。

「マル達、もうそんなに有名人？」

「PVを見ました。素晴らしかったです」

やはりと言うかAqoursをここに押し上げたのはみんなの想いがつまつたあのPVだ。それを評価しているようだが、他の曲についてはどう思っているのだろう。この二人の実力は全国のトッププランカーと遜色ないレベルだ。二人からしたら夢で夜空を照らしたいのPVの完成度の高さを評価したとしてもパフォーマンスそのものは物足りないと感じているかもしれない。だからこそこの余裕の態度なのだろう。

「ありがとうございます」

「もしかして、明日のイベントでいらしたのですか？」

「はい」

「そうですか、楽しみにしてます」

ここに道民の彼女らが居る理由などそれ以外には思っていたがやはりそうであった。明日はきつと荒れる。イベントがではなくAqoursがだ。

「それにしても驚きです。貴方がAqoursに入るなんて、ジェミニのアカリさん」

別れ際に彼女から出た言葉を理解するまで私は数秒の時間を要した。

聞き間違いなんかじゃない。確かに彼女はジエミニのアカリと言った。何故知ってるのだ？いや、動画サイトに投稿してたのだ、知られることはあるだろうがよりにもよって何故彼女が知っているのだ。何故今それを口にするのだ。

「っ、私はただの引率です！」

「そうですか。ではまた何かの機会にパフォーマンスが見れることを期待します」

彼女は爆弾を投下してこの場を立ち去った。

「ジエミニのアカリって」

「ごめんなさい。明日のライブが終わったら話しますから。だから今は聴かないで下さい」

何事か私に聴きたそうな千歌先輩、いやみんなからの追求を答える余裕は今の私にはない。唯一言えたのが今の一言だけだった。

第三十六話

東京入り初日。神田明神の不意打ちな出会いがあつてからそのまま旅館に行つてその日は終わった。

夕飯を食べ、お風呂に入り、花丸ちゃんが買った『バック・トゥ・ザ・ひよこ饅頭』をみんなが誤つて食べたり、千歌先輩から音ノ木坂に行こうと提案があつたが、梨子先輩が辞退したためその日はそのまま就寝となつたのだ。

梨子先輩は転校してくる前は音ノ木坂にいたと聞いたことがあるが、よくよく考えたら私はその頃の話しを聴いたことがない。千歌先輩が音ノ木坂に行こうと提案したときの梨子先輩の曇つた表情からすると梨子先輩にも何かしら事情があるのだろう。私は自分の事を棚に上げてそんな事を考えながら見慣れない天井のシミを数えていた。

当の梨子先輩は梨子先輩で窓枠に腰を下ろして空を見上げている。何を考えているのか？それを今の私が問う資格はない。自分を語れない私が一方的に相手を知ろうなんて虫が良すぎる。

私は私の事をみんなに語らなかつた以上にみんなのことを聴いていない。過去のことを知つていることが即ち深い関係であるとは言わないが、それでも私は自分から彼女達の今を形作つた過去を知ろうとしなかつた。それは自分に虫が良いとか悪いとか以前の問題だ。

だが、私は明日みんなに語らなければならぬ、私の過去を。全く予想していなかつた形であつたが、私の過去の片鱗が知られてしまったのだ。ここまで来たらもう詰みだ。調べればある程度の情報が得られるしそうなれば当然の流れとして私に追求が来るだろうから。

「眠れないの？」

千歌先輩の声には私は身を固くした。千歌先輩は確かに強引な部分もあるが、人の心に土足で踏み込むような分別の無い人ではない。だから今語れとか言わないだろうが、それでも不意打ちだ。

「千歌ちゃんも？」

「うん。なんとなく」

「ごめんね。なんか、空気悪くしちゃって」

「ううん。こっちこそごめん」

私は内心でほっとした。どうやら千歌先輩は梨子先輩に話し掛けたようで、私が出てきていることには多分気付いていない。

当たり前だ。窓枠に腰を下ろして黄昏をいたらすちらがまず気になるに決まっているし、私は布団に横になり身動きをとっていないのだから気付かれなくて当然だ。

「音ノ木坂って伝統的に音楽で有名な高校なの。私、中学の頃ピアノの全国大会に行ったせいかな、高校では結構期待されてて」

「そうだったんだ」

ぼつぼつと語られた言葉を私は卑怯と思いつつも耳を塞がなかった。梨子先輩が勇気を出して自分の失敗を語っているのだ。相手が千歌先輩だからこそなのかもしれないし、本当は盗み聞きなんて良くないと分かっていたが聴かないなんてできなかった。

「音ノ木坂が嫌いな訳じゃ無いの。ただ期待に応えなきゃって、いつも練習ばかりしてて。でも結局、大会では上手くいかなくて」

才能と実績があるだけに期待されて、その期待に答えようとして頑張つて、それでも上手くいかなくて挫折して。そんな梨子先輩の歩みがとても重かった。重いし、きつと梨子先輩は傷付いたはずだ。目を背けようとした筈だ。内浦に来たのだったとしてももしかしたらそれが原因の一端なのかもしれない。でも梨子先輩はその事実からは逃げようとはしなかった。ピアノは今も続けているし、失敗を失敗として飲み込んで次に繋げようとする勇気を持ち合わせている。

そうできることが私にはひたすらに尊かった。私にはできなかったこと。それを梨子先輩は現在進行形で行っているのだ。

ただ、音ノ木坂に対しての感情の整理がまだついていないようであるが、私なんかよりも遙か先を歩いているのは間違いない。

「期待されるってどういう気持ちなんだろうね」

「え？」

「沼津出るときみんな見送りに来てくれたでしょ？みんなが来てくれて凄いい嬉しかったけど、実はちよつぱり怖かった。期待に応えなく

ちやつて。失敗できないぞって」

それは千歌先輩なりの励ましなのだろう。きつと感じるプレッシャーも悩みも経験した当人しか理解できない。それでも分かってあげたいし、力になりたい。そう思ったから千歌先輩は彼女なりに分かることを伝えたかったのだろう。みんなで東京に出る時の出来事を例に挙げて。

誰かを思いやる気持ち、それが千歌先輩の良さである。筋違いであるが嫉妬を禁じえないくらい的美点だ。だってそれは私に欠けていることだから。私が本当に相手を思いやれる人だったなら今頃はもしかしたらみんなで、A q o u r sとして明日のライブに心を躍らせていたかもしれない。

そんなあり得たかも知れない i f を思い浮かべると、心がときめくと同時に悲しくなった。その可能性を潰したのは他でもない私自身だからだ。

「ごめんね、全然関係ない話して」

「ううん。ありがとう」

「え？」

「寝よ。明日のために」

「うん」

私は盗み聴きしていたことを謝罪することも、起きていたことも言ひ出すことが出来ず二人は床についた。

明日は私の番だ。そう思うと益々眠れなかった。

第三十七話

翌朝、結局眠りに落ちても早い時間に目覚めてしまった私は仕方なく朝風呂を浴びた。流石に都内の旅館ともなると地方のように広々とした大浴場や露天風呂があるわけでは無いが、こじんまりとした浴場は石造りで風情があった。昨日はみんなで入ったから狭かったが、今日は一人で入ったから浴槽の中では足を伸ばせて幾分リラックスできた。

体をさっぱりさせ、これならみんなが起きる前に少しくらいなら寝れるかと思えば部屋に戻ると、他のみんなが眠る中、千歌先輩が静かに練習着に着替えていた。みんなはまだ寝ていたから小さい声で挨拶をし、私もまたジャージに着替えた。浴衣が無きときのために持ってきていたのだ。

千歌先輩の意図は明白だ。朝練と洒落込もうもしているのだ。ちやうど千歌先輩と話したいと思っていた私にはこれ以上のチャンスは無い。朝風呂を浴びてからまた汗をかくのはナンセンスだが、致し方ない。また、昨日のことを鑑みると、土地勘の無い千歌先輩を一人で彷徨かせるのも危ない気がするし尚更だ。

「私もお付き合いますよ」

準備が出来た私達はランニングしてくる旨をメモに残し部屋から出た。

私達は屋外に出て準備運動を軽くこなしてからゆつくりと走り出した。

雑居ビル群と住宅街の中間くらいの街を走り大通りに出る。こんな日が出ているとは言えまだ朝なのに大通りは車が沢山走っていた。歩道にはサラリーマンの通勤姿もあるが、私達同様にランニングや散歩をする人の姿もあり、どこに居ても人の営みは変わらないと変な安心感を覚えた。

この街の景色を見ると改めて内浦との違いを感じる。とにかく人工物が多いのだ。住宅もマンションばかりで高い建物が多く空が非

常に狭い。言い換えれば閉塞感がある。元々埼玉に住み、しばしば都内に訪れたことのある私でさえそう思うのだ。千歌先輩達はそのように感じるてるか。そんな事を思いながら街を走り抜ける。

大通り沿いを走り、御茶ノ水駅前や神田明神前を通過する。秋葉原方面に向けて異様に長い下り坂を下る。この長さで高低差を考えると神田明神の男坂の階段の急さも納得だ。あの階段はもはや壁だ。城の堀の下から上を見上げているような感覚だ

私達はそのまま坂を下ると、信号を通過し万世橋を渡り、秋葉原駅をぐるりと回り込むとUTX学園前に到着した。

ひたすら思いのまま走る千歌先輩に付いてきたが、どうやらここを目指していたようだ。

スクールアイドルのフラッグシップとして第一回ラブライブで優勝したA|R|I|S|Eを排出したUTX学園。その学舎の前の階段を上ると大型のモニターが設置されている。ここはスクールアイドルの情報を発信したりする街の名物にもなっている。

「ここで初めて見たんだ。スクールアイドルを、μsを」

千歌先輩は今の時間帯はまだ何も映していないモニターを見上げながら言った。

「スクールアイドルってものがあることは知っていたけど気にもしていなかった。だってアイドルって雲の上の存在でしょ。自分なんかとは関係ないって、そう思ってた。でもμsを見てスクールアイドルはアイドルとは違うんだって思ったんだ。だから私は憧れたのμsに」

スクールアイドル高海千歌のルーツを語る先輩の目にはきつとμsを初めて見たときの情景が浮かんでいることだろう。羨望の色が瞳に映っていた。

そんな千歌先輩につられてまだ消灯しているモニターを見ると、μsが元気にパフォーマンスしている映像が見える気がした。もちろん気がするだけだが。

千歌先輩は何故μsを見てそう思ったのかみなまでは言わなかった。

μ×sは人に対して与える影響が大きい分、影響を受けた人はそれぞれのμ×s感を持つようになるからかもしれない。彼女達が大好きだからこそ千歌先輩は私の持つμ×s感もまた大切なものと思いは語らなかつたのだろう。

「スクールアイドルは楽しいですか？」

そんな分かりきつたことを私は今一度問う

「うん、楽しい。大好きだよ」

まるでお手本を見ているかのようだった。自分のことを隠さずに伝えることの大切さを千歌先輩に教えられたような気がする。

私にはきつと出来ない。雁字搦めになった私が同じように「音楽は好きか」と問われたらきつと好きと返せない。だが、私は少し踏み込まなければならぬ。手本となるような人が目の前で範を示してくれたのだ。それを見て抱いた思いを大切にしなければならぬから。

「今日のライブが終わったら、私の話聞いてくれますか？」

だから私は私を語ろうと思う。

「うん、聞くよ。でも私だけじゃないよそれは」

ね、と千歌先輩は私の背後に向けて声を掛ける。振り返ると、いつの間にかそこには息を切らせたみんなが私を見て頷いた。

私は心優しい彼女達に感動を覚えたが、ただ一つ悲しかった。恐れていた別れの時が来てしまったことがただ悲しかった。何も知らずに無邪気でいられる時は終わってしまうのだ。

「ありがとう」

これからライブがある彼女達を不安にさせてはいけないと私は彼女達に笑い返した。ちゃんと笑えているか不安だ。

そんな私の悲壮感や彼女達の優しさとは無関係に世界は今も回り続ける。

起動時間になったのかUTXの名物モニターが点くと、そこには今年度のライブ開催が決定した告知が映し出されたのだ。これは昨日まで発表されていなかった情報だ。

「遂に来たね。どうするの？」

「勿論出るよ。μ×sがそうだったように、学校を救ったように。さ

あ、行こう。今全力で輝こう」

彼女達は目の前のライブ、そしてラブライブに向けて円陣を組みお馴染みの掛け声で気合いを入れていた。

私は自分のことで一杯一杯だったからこの時は思い至っていないかった。このイベントで彼女達がどのように評価されるのかということに。だが、冷静だったとして私に予想はできなかつただろう。A q o u r s を評価する人が誰一人としていないなんてことを。

第三十八話

東京スカイツリーから見える景色は思ったほどではないというのが正直な感想だ。夏が近づく昨今は大気に湿気が多く、遠くの景色が見えないのだ。まさか富士山すら見えないのは予想外だったが。きつと冬ならば関東近郊の景色が一望できてまた違った感想になるのだろう。もっともここから見える富士山など内浦から見える富士山に比べれば小さいだろうが。

ルビイちゃんや花丸ちゃんが気の抜けた様子で景色を見ているが、正直傍から見ても景色を気にしている様子には見えなかった。ただただぼんやりと眺めるそれに意味はなさそうだ。

理由は明白。スクールアイドルイベントでの敗北だ。今年のラブライブ開催が決定し、優勝を目指すと改めて決意した矢先にイベントでは入賞すらできなかったのだ。その上、全国レベルのスクールアイドルの実力をまざまざと見せつけられたのだからショックを受けてもしかたがない。

正直全国レベルともなるとネットにアップされた動画では伝わらない魅力や迫力があるのだが、今日生ライブを見てそれを改めて強く感じた。もはや私がうんちくを語れるレベルを超えた世界だ。

そんな世界の片鱗を別の形で知っている曜先輩や梨子先輩は深刻そうな顔で今日浮き彫りになった差を話していた。

曜先輩は高飛び込みの選手として、梨子先輩はピアノの奏者として全国レベルを経験したことがある。だから今Aqoursとして目の前の壁の高さが樂觀できないことを知っているのだ。

各々思うところはあろうし凹んでもいる。それを上手く自分で整理できなければ次はないだろう。もし次に進めなくなったら、それは寂しいことだと私は思ったが、頑張った結果の挫折ならば致し方ないとも思う。頑張ることすら叶わないよりはマシであろうとどこか冷めた自分がいることに驚いた。

「おまたせ。わ、何これ凄い。キラキラしてる」

そして私が何よりも驚いたことが千歌先輩だ。人数分のアイスを

持つてはしゃぐ姿は傍から見れば元氣一杯な様子であるが、それなりに付き合ひのある私達からすれば空元氣であることがバレバレだ。

千歌先輩がここまで動揺するとは私をはじめ誰も想像していなかった。だって彼女はこのイベントに参加することを二つ返事で決めたというのだから。

いつだって彼女は失敗を恐れずに突き進んでいた。だから失敗をしたとしても前向きに捉えるとばかり思っていたのだ。

幼馴染みだという曜先輩が心配げに千歌先輩に声を掛けているが、今日のイベントの結果を気にしていないかのような素振りをしてるのがかえって痛々しかった。

「全力で頑張ったんだよ。私ね、今日のライブは今まで歌ってきた中で出来が一番良かったって思った。声も出てたしミスも一番少なかったし。それに周りもみんなラブライブ本戦に出場しているような人達でしょ。入賞できなくてあたりまえだよ」

本当にそうなのか？頑張ったからそれでいいと満足しているのか？私はそんなのは嘘だと思う。幼年期はすでに通過し、ただ楽しいだけでは満足できなくなっている筈だ。でなければ千歌先輩がこんな悲しそうに笑う筈が無い。

「だけど、ラブライブの決勝にでようと思ったら今日出ていた人達くらい上手くないといけないってことでしょ。私ね、Saint Snow見た時思ったの、これがトップレベルのスクールアイドルなんだって。このくらい出来なきや駄目なんだって。なのに入賞すらしていないかった。あの人たちのレベルでも無理なんだって」

この言葉は非常に重い現実だ。実際に間近に見てトップレベルと感じたあの二人組でさえ入賞すらしていない。それだけ現在のスクールアイドルはレベルが高いのだ。もちろんAquoursのパフォーマンスを見て下手と言う人は居ないだろう。だが、他と比較をしてしまうとどうしてもどちらが優秀か問われたら負けてしまうのだ。

だからこれからののだ。ゼロから初めてようやく入り口が見える所まで来たのだ。故に曜先輩は問うのだ。これからどのようにして

いくのかと。

曜先輩は本当に千歌先輩のことを信じているのだろう。でなければこんなキツイ事を言えない。

「今はそんな事考えてもしょうがないよ、それよりさ、折角の東京だしみんな楽しんでようよ」

だが、千歌先輩の回答は曜先輩の期待には応えなかった。

「みなさん今日はもう帰りましょう」

頑張った結果の挫折なら仕方ない。そう思っている筈なのに私は何故こんなにも腹立たしそうな声を出しているのだろうか？

「みんな疲れてるんです。だから一度帰って、しっかり整理して、それでまた話しましょうよ」

過干渉はしない。そう決めているのに何故こんなに必死になって繋ぎ止めようとしているのだろうか？

「星ちゃん」

「ごめんなさい。勝手なこと言いました」

「ううん。ん？」

花丸ちゃんが声を掛けてくれたおかげで我に返ったが変な空気になってしまった。だが、都合良く鳴ったスマホへの着信音がそれを有耶無耶にした。

だが千歌先輩のスマホに掛かってきた電話が更に私達をどん底に導くことだとは思っても寄らなかつた。

第三十九話

千歌先輩への電話はスクールアイドルイベントの主催者から、渡し忘れた物があるとの連絡だった。郵送でも平気だとのことだったが、幸いまだ会場の近くに居たため戻ることとした。

会場に戻りみんなが連絡をくれた主催者のスタッフと待ち合わせしている間、私は勝手ながら会場内に入りステージに立たせて貰った。ステージはセットの片付けの最中であつたが、誰に見咎められるでもなかつた。舞台セットは今回はほぼ既存の設備で行われていたように壇上の作業は佳境を迎えていたからかもしれない。

ステージから見渡す景色は、未だかつて私が見たことのないものだった。

1500人規模の会場は天井の高さも広さも奥行きも学校の体育館とは比べものにもならなかつた。

座席は映画館のように段々と連なり、二階席、三階席まである。予想以上に観客席がよく見える。アイドルのライブなんかで、奥の人も見えてるとMCをしているのをしばしば聴くが、まさにその通りだ。

舞台の上から私の目に飛び込んできた威容は予想以上に壮大だった。今は照明は普通点灯の状態だが、イベント中は観客席は暗く、舞台にはスポットライトまで照らしていた。もしその時舞台に立っていたら、光の中にいるよう錯覚がしたかもしれない。

考えてしまう。もしも私がここでライブをすることになったらと。

そう思うと目の前に広がる景色がより大きく目に飛び込んできた。

その大きさは怖くもあり、私の体をにわかに締め付けるような緊張感を生んだ。だが、同時に楽しそうだとも思えた。むしろその楽しみたい気持ちの方が強いかもしれない。そう思えるあたり私は未だに音楽活動に未練があるのだろうか。

みんなはどうだったんだろう？控え室で準備をしていた時はかなり緊張している様子だった。それも致し方ない。初めての場所、初めての大舞台、その上、自分達より経験も実力もランキングの順位も上回るスクールアイドルと同じ舞台。緊張しない方がおかしい。ガン

バルビイ、という謎の合い言葉で自分を鼓舞するルビイちゃんは見ていて痛々しかった。尚、痛々しいに含みはない。

観客席から見た時はみんな緊張しているなりに一生懸命やっていたと思う。見世物を生業とする人は舞台の緊張感を含めて楽しむと表現するが、みんなもそうだったのだろうか？緊張感、やらなければという使命感、そして楽しさ。そのどれが心に占める割合が大きかったのだろうか？

多分だけど、使命感が強かったのではないかと思う。それが一観客として見た私の印象だ。

ここでA q o u r sはパフォーマンスを披露したのだ。それをしたくてもできない人がいるのだから、それだけでも十分ではないかとも思えるが、理性的にそう思う反面、心の底から沸き上がる悔しさは理屈では抑えきれない。当事者ではない私がそう感じるのだ。当事者であるみんながそう感じないはずがない。実際悔しいからこそ今回の結果に落ち込んでいるのだろう。だけど、千歌先輩はなんだ。悔しいならそうと言えばいいのに。いつも自分の気持ちに正直な千歌先輩らしくない。それが腹立たしいのだ。きつと曜先輩なんかは私なんかよりもっと動揺しているだろう。

「何か掴めた？」

ぼんやりとステージの中央にいたら流石に邪魔だったのか、作業スツフのお姉さんが私に声を掛けてきた。だが、咎めるような響きはなかったので助かった。この程度の闖入者など

「はい。どんな気持ちなのかって」

私の本心。みんなの気持ち。それがこのステージに立つたら少しは分かった気がした。それに一度でいいからこのような大舞台に立って見たかったのだ。

「ここはね。中小の楽団や演劇団がよく使うステージなんだ。だからみんな悩んだりしながらも明日を夢見てここに立つ。貴方達と同じようにね。今日出たグループには大なり小なり優劣はあるかもしれないけど、根本的なところはみんな同じ」

「みんな夢を追い掛ける」

「そう。そしてここはまだ夢の途中。貴方がどのグループを推していたかは知らないけど今日の結果がゴールじゃない。だから結論を出すのは早いって事。もちろん貴方も」

「私は」

「あ、呼ばれちゃった。ここももうそろそろ忙しくなるから、早くみんなのところに戻りなさい」

ナミキさんつと名前を呼ばれてその作業スタッフの人は行ってしまった。

なんだか私が元氣付けられたような気がしたが、おかげですつきりした。それにヒントも貰った。そうだ、まだ「ゴールじゃない」のだ。

最近ハーマモニカをはじめ楽器から離れているからそういった感覚が鈍っていたが、彼女達にこんな時に必要な曲があったのだ。

私は自分胸ポケットに手を伸ばしかけて、自分の思いつきをすぐに打ち消した。今、私のポケットの中にはハーマモニカはない。よしんばあったとしても私はもう音楽をやらないと誓約している。だけど、私には気の利いた言葉なんか言えないし、知らない。ハーマモニカが、音楽がないと何もできないなんて本当に私は不甲斐ないと思う。

私はステージを後にしながらどのようにみんなにこの気持ちを伝えようか頭を悩ませた。この時の私はみんなが更なるどん底にいることになっているとは思ってもみなかった。

番外編くそれは仄かなバレンタインく

私にはただ一つ、誰にも話していないことがある。それは沼津への引越しがいよいよ決定したことではない。もつと楽しくて、ドキドキして、それでいて今となつては切ない思い出。

あやふやで、でも確かにあつたバレンタインの記憶。

小学校高学年だか中学生だか非常に曖昧だが、それなりに活動範囲は広がった私はその日は一人、秋葉原をふらついていた。

特別人に対して恋心を抱いた事が無い私にはバレンタインなど何処吹く風。アニソンにハマつていた私は埼玉では置いていない、ちよつと古めのアニソンを求めに秋葉原に来たのだ。

どこもかしこも浮ついて、客寄せのメイドさんもどこかバレンタインを意識した呼び込みをしていた。

私はCDを購入した後で真っ直ぐ帰るのは勿体ないと、バレンタインに色めく秋葉原の散策をしたのだ。

恋つてなんだろうと、ぼんやりと考えながら街を当て所なく歩いた。

異性を好きになるということが私にはよく分からない。なんとなくクラスメートに人気のある男子なんかは意識をしたりもするが、それが「好き」と同義かと言われれば違う気がした。

他の好き、と照らし合わせて考えてみれば物事の優先順位を決めるに当たつての中心となるものとも考えられるが、それでは良く聴くドキドキするという言葉は得られないと思う。

街を歩く人を眺めると歴戦のソロプレーヤーに紛れてカップルらしき人達がちらほらと居るが、彼ら彼女らの様子を見ても、同級生の男子と世間話をする自分とどれ程の違いがあるのかと疑問は募るば

かりだ。

正直つまらないイベントであると私は早々に飽き始めていた。恋だの愛だのと今の私には退屈だ。なにか見つけられるかもと思っただが、こんな事ならば一人カラオケをした方がましだと思い、秋葉原駅まで戻ろうと踵を返した。そう、その時だ。今でもその瞬間だけは奇妙に記憶にこびり付いている。

最初見た時は何の冗談かとも思ったが九人のメイドがいたのだ。メイド自体は秋葉原ならままたまあること。しかし、それも駅周辺だけで少し離ればそうでもない。そんな駅とな離れた場所で九人のメイドが歩いていたのだ。

バレンタインで羽目を外したのかとも思ったが、その九人は何となく浮ついたのとは根本的に違う、別の価値観で楽しんでいる雰囲気があった。

そんなメイドさん達が楽しげにイベントがどうか話しているのだ。俄然興味が湧くものだ。

私は高校生くらいの九人のメイドさん達の後をつけると、程なくして九人のメイドさんは学校の敷地内へと入っていった。

「音ノ木坂学院？」

まだ高校の事など近所の高校以外何も関心のない時期だったから聞いたことのない高校を前に私は好奇心に抗えなかった。

思い切って九人の背後まで駆け寄り、しれっと音ノ木坂学院の敷地内へと侵入した。

「呼び込みは完璧」

「こどりのビラ配りの上手さには脱帽ですね」

「そんなことないよ、海未ちゃん」

「お客さん沢山来るといいわね」

「うう、緊張します」

「撮影終わったらみんなでラーメン食べるにやー」

「デリシヤスやね」

「いい？アイドルはラーメンを食べるとき汁を飛ばさないのよ。そこんどこ気を付けなさいね」

「何言ってるのよ」

なんて軽口を叩いているため、私は思わず声を出して笑ってしまっ
た。

シックな色調のメイド服を着ているからどんな人達かとも思った
が普通の女子高生の会話をしているのだから、ギャップが面白い。

当然ながら真後ろで笑い声が聞こえれば気付かれるに決まってい
る。

「あれ？どうしたの？」

「可愛らしいお客様ね」

「お姉さん達何かするんですか？」

この人達は唐突に現れた私を邪険にするでもなく対応してくれた。

「お姉さん達、じゃないわ」

「私達ね、μsって名前で活動してるんだ」

「石鹸の？」

「そのネタはもう聞き飽きました。穂乃果が変なことばかり言うから
お客様にまでネタにされるんです」

「酷いよ海未ちゃん。ことりちゃんも何か言ってるよ」

「えつとー、石鹸じゃなくて『所沢の』にすればいいんじゃない？」

「ミューズ違いね。言ってること同じじゃない」

「私達はスクールアイドルをやってるの」

「スクールアイドル？」

「はい。にこっち出番だよ」

「にっこにっこにー」

「こんな感じにやー」

「誤解を生みそうだから、もうやめた方が」

そう。この時の私は知るよしもないが彼女達こそスクールアイドル
の星、μsだったのだ。今となっては伝説とまで謳われる彼女達
と邂逅を果たしたのだ。

「スクールアイドルって芸人さんなんです」

「何でそうなるのよ」

「にこちゃんのせいでしょ」

「納得いかない」

女三人寄れば姦しいと言うが見事に話しは脱線していき、気付いた時には彼女達の部室でお茶を飲みながら雑談していた。マイペースな空気に当てられたのか、そこまで人懐っこくない私が妙な居心地の良さを感じた。

「星ちゃんはこの近所の子？」

「いえ、埼玉からCDを買いに来ました」

「どんなの？」

「RAMARのWild flowerです」

「んー、聴いたことないや」

「マイナーですからね」

「折角だから聴かせてよ」

高坂穂乃果さんにCDを渡すとパソコンに入れて再生した。

この曲はアニメ『ゾイド』のOPとして使われた曲だ。旅をするアニメの作風と相まって非常に開放感のある旋律と力強い歌詞、延びのある歌声。それらが聴く側に力を分けてくれる、凱歌のようなそんな曲だ。

「格好いい曲だね。なんだか私も歌いたくなってきた」

「つて、もうこんな時間!?!」

「早く準備しないと」

ついさっきまでまったりとしていたμ'sの面々は慌てて湯飲みを片付けはじめた。

「何が始まるんです?」

「生PV撮影だよ」

「星ちゃんも見て行ってね」

どたどたと片付けが終わると、私は穂乃果さんに手を引かれて走り出す。

さっきまで普通のお茶のみ仲間のような雰囲気から一変していた。楽しさを探しに行くような、そんな高揚感が引かれた掌から伝わってくるようだった。

何が起きるのだろうか?どんなものが待っているのだろうと、胸の高

鳴りが私自身からも聞こえはじめた。

「着いたよ。私達はステージに行くから、星ちゃんはあそこから見ていて」

たどり着いたのは煌びやかなステージ。そして満員の会場。

私はそんな人波の中に入るとまもなくμ \square Sのみんながステージに姿を現す。

彼女達の簡単なMCが終わるといよいよ生PV撮影が始まった。曲は「もぎゅつとLove」で接近中！」。

私は生歌や生ダンスパフォーマンスを見るのはこれが初めてだったがそのステージは圧巻だった。

これがさつきまで雑談していた人達と同じ人がやっているのかと思うと俄には信じられなかった。ステージにいる彼女達は格好良くて、可愛かった。その歌に胸をきゅつと締め付けられるくらい感情移入した。

こんなにドキドキしたのは初めてだった。

これが私の嘘のようなバレンタインの思い出。恋だの、愛だのとは全く関係ない、色気のないバレンタイン。いや、色気はあった。煌びやかな九色に私は確かに包まれていたからだ。

第四十話

私がみんなのところに戻った時には空気は既にお通夜モードになっていた。どうやら運営が渡し忘れていたものとは今回のイベントの順位と投票数の結果だったらしいのだが、A q o u r s は30組中30位。つまり最下位だったのだ。その上投票数は0、誰一人としてA q o u r s を推す人はいなかったときた。流石に千歌先輩も何も言えない状態となっていた。

そんな状態ではまともに東京観光なんてできないため、私は比較的ダメージの少ない善子ちゃんと共にみんなを誘導し、帰りの電車に乗せたのだ。

「ありがとう善子ちゃん。でも、善子ちゃんは大丈夫?」

「大丈夫な訳ないでしょ。頭の中とつちらかって、しつちやかめつちやかよ。でも、人に分かって貰えないなんて私にとってはいつもの事だから、みんなよりは耐性があるのーって、こんなこと言わせるな!」

善子ちゃんは元々墮天使キャラとして占いの動画を投稿していたから評価云々については他のメンバーよりも一日の長があるのだ。だからこそ最低限の平静さは保っていられたのだろう。

「善子ちゃんは強いね」

「あつたりまえでしょ。っていうかヨハネよ」

「はいはい。ラブリーエンジェル ヨハネちゃん」

「墮天使だつてば」

くだらないことでも日常の感覚を取り戻せるように私達は冗談を交わしたが、他の面々は乗り気ではないようで、その会話は酷く空々しく響いた。

「ルビィが家を出る時にお姉ちゃんが言ってたんだ。気を強く持つのですよって。お姉ちゃんこうなることを予想してたのかな」

「ダイヤさんがそんなことを」

ダイヤさんは隠そうとしても隠しきれない愛すべきガチライバー。昨今のスクールアイドル事情を鑑みれば壁にぶち当たること

は想定済みだったのだろう。それでもルビィちゃんを、Aqoursをイベントに参加させたのは信じているからだ。今日の結果を明日へ繋げられると。

「ホント人が良いね、ダイヤさんは」

「それ、お姉ちゃんに面と向かって言ったらそっぽ向かれるよ」

「ダイヤさんならありそうぞら」

「花丸ちゃんはもうずら解禁なんだ」

「まる、その手にはもう乗らないぞ、乗らな、の」

「ごめんね。なんかごめんね」

花丸ちゃんは囁んだことで口をパクパクとさせて赤面していた。

花丸ちゃんもルビィちゃんもどうか口を開くと少しずつだが口が回るようにはなつたのはよかつた。

先輩達が落ち込んでいる今、盛り上げるのは後輩の役目だ。スクールアイドルはただのアイドルとは違い部活活動なのだ。その在り方は他の部活動と同様、先輩と後輩それぞれの立場で支え合っていくのだ。

「星ちゃん少し元気が出たみたいだね」

「私が？」

花丸ちゃんの言葉に私は首を傾げた。そんな露骨に元気がない様子を見させていたのかと。

「星ちゃんが私達を気にするように私達だって星ちゃんのこと見てるんだよ」

「誘つてからずっと表情が固かつたのは分かつてただけど、その訳を聞けずにごめんね」

確かに私はかなり身構えていた。だが、それを隠しきれていないとはイベントに集中して貰いたかつたのに要らぬ心労を掛けてしまった。

「もしかして昨日Saint Snowと会つた時に言つてた明日話すつてのは」

「それにについてはごめんなさい。今のみんなには話せない」

私の突然の方向転換に黙つていないのが千歌先輩だった。

ルビイちゃんが嬉しそうに私にそう言ったが私はイヤホンの音で聞こえないフリをした。

第四十一話

沼津駅に着く頃には日も傾き、初夏ならではの夕焼けの涼しさが心地良い。

駅には気をきかせた先輩のクラスメートが迎えに来てくれていた。先輩のクラスメートの方々とは「夢で夜空を照らしたい」のスカイランタン製作で交流があるため、みんな知った顔だ。

「おかえり。どうだった東京は？」

東京に行くのは特別なこと。こちらに来てそれを改めて思った。でなければ出発前にあんなに身構えたり、こうして迎えに来てくれたりはしなかっただろう。それに迎えに来てくれた先輩達は期待に目を輝かせてる。

千歌先輩は当たり前障りの無い返答をクラスメートにしている。その返答にイベントの順位はビリで得票数0であったことは含まれていない。それは千歌先輩自身まだ整理が付いていないからなのか、それとも悔しいと思っているからなのか？いずれにせよ気にしているからこそ話題にしなかったことは間違いが無い。

「もしかして本気でラブライブ決勝狙えちゃうかもってこと？」

変に誤魔化したせいでそんな誤解を生んでしまう。

「いや、今はまだ壁は高いよ」

誤解は嫌だ。私はその一心から即座に否定の言葉を口にしていた。

誤魔化し、誤解、すれ違い。それは良い結果を生まないと体験しているからこそ反射的に出てしまった言葉だ。

「お帰りなさい」

静まった空気を変えてくれたのは意外なことにダイヤさんだった。ダイヤさんもまた迎えに来てくれていたのだ。

正直助かった、その一言に尽きる。Aqoursの一員でもない私が現状の実力差を偉そうに語れないし、順位とかも勝手に言いふらせない。だが、迎えに来てくれた先輩達は何があったのか聴きたいだろうし、色々と身動きが取れない状況だった。我ながらある一定の事となると感情的になってしまう。

「お姉ちゃん」

「よく頑張ったわね」

ルビイちゃんは地元に戻ってきたこと、姉が迎えに来てくれたことで安心したのだろう、目に大粒の涙を浮かべてダイヤさんに駆け寄ると抱きついて泣きじやくった。

気丈に振る舞ってはいたが、やはりイベントの結果は堪えていたのだ。もはや私も千歌先輩も、迎えに来てくれた先輩達も何も言えなかった。

「みなさん疲れてるでしょうから、今日は解散しましょう」

ダイヤさんは迎えに来ていた他の先輩達にそう声を掛けると、先輩達は気まずそうな顔で「また学校でね」と解散して行った。

流石は生徒会長を務めているだけあり、スマートに場を収めた。

「貴方達は少し良いかしら？」

迎えに来ていた先輩達が帰ってからダイヤさんは私達にそう提案すると、場所を変えようとばかりに歩き出した。

私達はそれに黙って付いていった。

ルビイちゃんが電車の中で言っていたことの真意が分かるかもしれない。そんな気持ち私達にダイヤさんを追わせたのだ。

数分歩くと駅前の雑居ビルを抜け、狩野川河川敷に出た。ここは市内でも川幅が広く、堤防の整備が行き届いているため、さながら屋外ステージの観客席のように階段状になっており座れるようになってる。

夏祭りの準備が進み、電柱などに吊された提灯がほんのりと点灯しているのを見ると今日のイベントの結果も相まってノスタルジックな気分を覚える。

「さて、先ずは今日の話聴かせて貰えますか？」

ダイヤさんは話しが長くなるとばかりに整備された堤防の段に腰を下ろしてルビイちゃんをあやしなから問い掛けてきた。

私達は掻い摘まんで今日の出来事を話すと、ダイヤさんは納得したような顔でこう言った。

「得票0、ですか」

「予想通りですか？」

「ルビイちゃんから聴いていたのですね。ええ、今のスクールアイドルの中では厳しいとは思っていません」

ダイヤさんは語った、昨今のスクールアイドル事情を。

A—RISEがスクールアイドルという存在の認知度を飛躍的に広め、μ'sがその広がった輪を確固たるものとした。そして当時とは比べものにならないほどのスクールアイドル人口が増え、そのグループ数は昨年の段階で最低7234にもなるという。これは昨年のラブライブにエントリーした数だから実際はもっと多いだろう。

それだけの人数がしのぎを削りあえばどうなるのか自明だ。レベルの向上である。昨今では初代ラブライブ王者のA—RISE、二代目王者のμ'sレベルのグループがランキング上位に当たり前の様に居る時代となったのだ。

また人口の増加により多様化も進んだ。歌って躍ることが主流であることには変わらないが、アイドルとは歌って躍ることだけにあらず。演奏、演劇、料理、コントと多岐に渡る活動が生まれた。

「貴方達は決して駄目だった訳ではないのです。スクールアイドルとして十分練習を積み、見てくれる人を楽しませるに足りるだけのパフォーマンスはしている。でも、それだけでは駄目なのです。もう、それだけでは」

憧れを追い掛たい。自分達が楽しみたい。みんなを楽しませたい。その気持ちに嘘は無いし、それは伝わっているのだ。だが、今の目の肥えたお客様から「評価」を得ることを期待するならば、自分達の満足以上のスキルアップが求められるのだ。

楽しませることと評価されることはイコールで結ばれない。それが昨今のスクールアイドルの環境なのだ。だから、

「そう。貴方達が誰にも支持されなかったのも、私達が歌えなかったのもしかたがないことなのです」

とダイヤさんは述べた。何か過去にあるとは思っていた。ダイヤさんも鞠莉学園長も果南さんも。だが、それがこんなにも他人事とは思えない事だとは思っていなかった。

私は二の句が継げなかった。みんなも同様だ。一様に驚いている。

「二年前、既に浦の星には統合になるかも、と噂がありましたね」

ダイヤさん、鞠莉学園長、果南さんの三人はμ'sがそうであったように学校を救わんとスクールアイドル活動を始めた。三人は順当に人気を上げ、Aqours同様に東京のイベントに参加した。だが、そこで彼女達はパフォーマンスをできなかったのだという。

まるでAqoursの辿った軌跡そのものだった。町のみんなから好意的に思われ、評価を上げ、そして壁にぶつかった。現在のダイヤさん達の状況を鑑みるに、それが直接の原因か分からないがスクールアイドルとしての活動は終わってしまったようだ。

「じゃあスクールアイドルに否定的な態度をしていたのは」

「こうなることを予想してたからです。私の話はこれで全部です」

では、とダイヤさんは立ち上がるとルビィちゃんを連れずに河川敷を後にした。

ダイヤさんは経験者であることは語ったが、どうしろとは言わなかった。それはAqoursが考えて決めることだとも言うように。

「千歌ちゃん。やめる？やめる、スクールアイドル？」

曜先輩の問いかけは季節外れの北風のように突き刺さった。

第四十二話

みんな色々と抱えている。それは過去であり、今であり、未来のことだ。当たり前だ、生きているのだから何も抱えていない人など居ない。

Aqoursは今という壁を抱えている。私は過去を抱えている。そしてダイヤさん達もまた私と同じだった。

問題は山積みで何一つ解決しないまま今日という一日は終わってしまった。

午前0時、私は部屋のベッドに横になりながらも気分が晴れず寝付けなかった。昨日も余り眠れなかった筈なのに眠気が来ないのは重傷だ。別に暑くて寝付けない訳では無い。それだけ東京行きが精神的にしんどかったということだ。

もしかしたら昔の相方に会うかもしれないと戦々恐々としながらも、やけっぱち気味にそれを覚悟しての東京行きだった。結果的に私が昔の相方と会うことは無かったが、過去の一端をみんなに知られてしまった。別の問題が出たからそれも一時保留となったが、いよいよみんなに本当の私を語るときが近づいていると思うと膝が震える思っていた。

みんな優しい人だから私の過去を知っても軽蔑したりしないかもしれない。だが、そんな都合の良い考えで安堵できるほど私は脳天気ではない。それだけ私のしたことは罪深い。

もしかしたらみんなと友達でいられなくなるかもしれない。それがなによりも怖い。

「考えても仕方ないけどさ」

なるようにしかならない。それしか無いのだ。何とか出来る時はとうの昔、沼津に来る前に過ぎ去っているのだ。私にできることはない。だから今は私のことよりもどうかなる方が優先されるべきだ。具体的に言えばAqoursのことだ。

私は太陽のような彼女達がAqoursとして活動を継続して欲しいと願っている。これは私の後悔から来る願望であることは自覚

している。だけど私は見てみたい。A q o u r s が夢を追う姿を。輝く姿を。そして追い続けられれば何時の日か夢は叶うのだと。

だが、どうすればいいのだろうか？千歌先輩の今日の様子は他人がどうにかできるものとは思えなかった。事実、千歌先輩の親友の曜先輩の言葉さえ今日の千歌先輩には届いていなかった。

「駄目だ眠れない」

モヤモヤする頭を振って私は仕方なくベッドから体を起こし、テレビを付けた。以前ならばラジカセからラジオを聴くか何か音楽を再生しているところだが、そうすると自分が演奏したくなるため最近ではラジカセも付けていない。ラジオも埼玉に居たときと違いNACK5も聴けないため余計にだ。

テレビを付けると丁度映画をやっていた。007シリーズでも近年の作品「007 スカイフォール」だ。

六代目のジェームズ・ボンドことダニエル・クレイグの007だ。ジェームズ・ボンドは今まで超人的に演じられていたが、ダニエルの演ずるジェームズ・ボンドは超人ではあるが、悩んだりするのが非常に新鮮だ。等身大で現代的なジェームズ・ボンドと例えたら分かりやすいかもしれない。

この「007 スカイフォール」はそんな等身大のジェームズが描かれたシリーズの三作目になる。

私は007シリーズは全部見たことがあるからこの作品もまたストーリーを知っている。この作品ほど人と人との繋がり、想いを描いている007シリーズは無いというのが私の感想だ。

信じている人の背信。信じたい想い。歪んだ想いが交錯するこの作品は今の私には毒だ。だが一度見始めるとどうにも止まらない。

映画を見ながら私はあることに気付いた。私にとって千歌先輩はジェームズ・ボンドだったのかもしれない。それも六代目以前のだ。文字通りの意味ではなく、超人的という意味だ。

魅力的で、無茶もするけど何とかしちゃう、壁があっても飄々と乗り越えちゃう、そんな人だと私はいつの間にか思っていた。運動神経なら曜先輩、音感ならば梨子先輩と、千歌先輩よりも能力的に優れて

いる人はA q o u r sに居るがそれでも千歌先輩が凄いと決めつけていた。

もちろん千歌先輩が魅力的であるのは事実だ。明るい笑顔も、良い意味でみんなを巻き込む力も、それでいてみんなへの配慮を忘れない思慮深さがあるのは魅力的なところだ。だが、そこに盲目的なフィルターが掛かっていたのではないだろうか？

私が今日、千歌先輩に対して憤りを覚えた理由がようやく分かった。私は彼女に余りにも期待し過ぎた。多くを求めすぎた。

なんて理不尽なのだろうか私は。千歌先輩だって悩みもすれば落ち込みもする。足踏みだっただけなのだ。だというのに私は千歌先輩の悩みを聴いたのか？弱気を引き出したのか？等身大の千歌先輩を見てあげたのか？何一つできていないではないか。

謝らなくては。元気付けなければ。力になってあげなくては、と想いが溢れてくる。

会いたい。先入観や期待感で無意識に脚色していた千歌先輩ではなく、そのまんまの千歌先輩に。

会って話したい。そして聴きたい。千歌先輩の本音を。東京のイベントが始まる前の日の夜、千歌先輩が梨子先輩に語っていたように、私も千歌先輩から聴きたい。

そんな想いとは裏腹に、急に襲ってきた眠気に私は抗えず、テレビを付けたまま深い眠りの中に落ちていった。

第四十三話

朝。太陽がまだ昇らない時間に私は目覚めた。起きた時、枕が涙で湿り気を帯びていた。それは涎なのか涙なのか判別はできないが、乙女心的には涙であつて欲しい。兎にも角にもするべき事が分かつたからなのか凄く体が軽かつた。

私はシャワーを浴びて外に出ると千歌先輩の家に向けて歩き出した。先行きが不安になるにわか雨が降っているが、それは今の私を止める理由にはならない。

海沿いの道を歩くと水平線に向かって海を進む船が見えた。こんな天気でも船は負けずに今日も仕事に行くのだ。力強いことこの上ない。

そういえば曜先輩は将来は船長になりたいらしい。曜先輩も船の力強い姿に魅力を感じたのかもしれない。そんなことを考えていると思わず笑ってしまった。そうになる。私はみんなの知らないところばかり気にしていたけれど、こうして知っているとところもあるのだ。なんてことない筈のそれが無性に嬉しかった。

パラパラと地面を叩く雨のオーケストラをBGMに黙々と歩いていると、道の先には息を切らせて走る曜先輩の姿があつた。その速度はもはや歩く速度と同じ程度にしか出ていない。逆に言えばそれだけ長く走っていたということなのだろう。

「曜ー先輩、おはよーそろー」

「星、ちゃん、こんな時間、に、どうしたの」

「曜先輩と同じです」

私は大きい声で呼び止めて早足で曜先輩に追い付いた。

「千歌先輩に会いに行くんですよね、お供します」

曜先輩は安心したからなのか、はたまたただ乱れた呼吸を戻そうとしたのか大きく息を吐いた。

「千歌ちゃんを、あのままにはしておけないよね」

「はい」

私達はお互いに真面目な顔をしていたが同時に笑い出してしまう

た。こんなに同じ事を考えているなんて嬉しくて笑えてしまうのだ。

「でも、私達も大概ですね」

「何が？」

「こんな朝早く千歌先輩のところ行くなんて」

「う、確かに。でも千歌ちゃんなら起きてる気がする」

その確信に近い予感実は私にもあった。というか起きてる以前に寝れてないのではないかと思う。よく見れば曜先輩の目の下にも薄らと隈ができている。きつと千歌先輩だけじゃなくみんなそうなんだったと思う。

「星ちゃん」

私を呼ぶ声が出たと思うと、3ケツした自転車が私達を追い抜いて止まった。

自転車は善子ちゃんが漕ぎ、その荷台に花丸ちゃんとルビィちゃんが座るといふ鬼畜使用。最低限の配慮なのか、善子ちゃんの物と思われる傘を花丸ちゃんが差している。これは優しさと捉えていいのか悩みどころだが。

色々とツツコミたいが、余裕で交通ルール違反をしているのはどうしたものか。

「おは善子」

「だからヨハネよっ」

肩を激しく上下させつつもツツコミを入れる当たり拘りを感じる。

「二人とも傘に入れてあげるから自転車から降りなよ」

「ありがとう」

「三人ともどうしたの、こんな無茶な走行して。盗んだバイクで走り出したくなっただけ？」

「オラ盗んでないぞら」

花丸ちゃんに振っておいてなんだが、花丸ちゃんの発言は字面で見ると胡散臭いことこの上ないと思えるのは新しい発見だ。

「もう。真面目に話そうよ」

「ごめん。みんなも千歌先輩に会いに？」

「うん。私、昨日は気持ちを整理するだけで精一杯だったけど、今はス

クールアイドルを続けたいって思うからそれを伝えたい」

昨日のルビィちゃんは正直に言えば精神的にコテンパンにやられていた。ルビィちゃんの憧れていたスクールアイドルになって、一生懸命練習もして、それでも評価されなくて。たぶん悔しかったと思う。だけれどルビィちゃんはその悔しい気持ちを真っ直ぐ受け止めて次に繋げたいと結論を出したのだ。

脱帽だった。人のことを気にして中々自分の気持ちに素直になれなかったルビィちゃんが自分の気持ちと向き合い、自分でこの結論に至ったことに。

私はルビィちゃんを見直した。ルビィちゃんはスクールアイドル活動をしてから確実に成長している。

「オラ、スクールアイドルなんて向いてないって、出来っこないって思ってた。でもやってみて楽しかった。もっとやりたいって思えた」
「東京の大きなステージに立った時、ドキドキした。逃げ出したくもなかったけど見に来ている人達の顔が見えた瞬間、楽しんで欲しいなって、そう思った」

みんなもう気持ちの整理はついた。そして奇しくも目指す方向は同じだった。それがなによりも尊い選択だと思う。その輪の中に自分が居ないことを嫉妬するくらいに。だが、今はその感情はみんなとは関係の無いことだ。

「じゃあ行こうか。千歌先輩もきつと同じ結論が出ていると思うし」
「うん。でも、一人で考えてたら結構キツかったから、みんなで支えに行こう」

「じゃあかつ飛ばすわよ」
「自転車はいいよ。押して行こう」

幸いにも段々と雨脚は弱くなりつつあったため、私達は歩いて千歌先輩の家へと向かった。

昨日までの陰鬱な表情はみんなにはなかった。圧倒的な敗北感を得たことが逆に起爆剤となったのだろう。今のみんなには昨日のイベント以前よりもどこか頼もしさを感じた。芯が通った感じだ。それが私には嬉しくもあり、取り残されたような寂しさもあった。

「あれ？梨子ちゃんじゃない？」

遠目だが千歌先輩の家の前に位置する砂浜が視認できる所まで来ると、砂浜には梨子先輩が居り何やらキョロキョロと周囲を探している様子だ。

「千歌ちゃん、千歌ちゃん」

海に向かって呼び掛けた声を聴き私達はただ事でない気配を感じ取ったが、それは杞憂に終わった。すぐに千歌先輩が海から出てきたのだ。

いや、疑問は残っている。そもそも私服のまま海に潜るなんてどうかしているのだ。いくら海が近い地域だからといって私服で行水する文化はない。

きつと千歌先輩も梨子先輩もみんなと同じなんだと思った。

悔しくて、どうしたいか見つめ直して、答えを出して、それでも晴れない気持ちを水に流そうとした。心の洗濯をしたかったのかもしれない。無性に雨に濡れて帰りたくなる、そんな気持ちに似ているかもしれない。

千歌先輩は梨子先輩に背中を向けたまま何か会話をしていた。遠くて殆ど内容は聞こえなかったがただ一つ、気紛れな海風が私達に千歌先輩の声を届けてくれた。

「くやしーいじゃん」

私は、いや私達はその言葉を待っていた。東京のイベントで敗北感に打ちのめされ、それでも必死に自分の感情を押し殺す千歌先輩が痛々しかった。いつも感情に素直な千歌先輩が悔しさを我慢している。それが嫌だったし、気にしてないでも言うような軽口が似合わなかった。

何で本音を言ってくれないのか？何で強がるのか？何で弱い姿を見せてくれないのか？何で、何で、と苛立ちもした。

そんな感情が千歌先輩の心からの一言で全て氷解した。ああ、やっぱりみんな同じ気持ちだ、と。

「千ー歌先ー輩」

千歌先輩達の居る浜辺の近くまで来ると私達は呼び掛けて駆け

寄って、大泣きする千歌先輩を私達みんなで抱きしめて一緒に泣いた。

悔しい気持ちを水に流そう。そしてここからはじめよう、みんな
で。

「今から0を100にするのは無理だと思う。でも、もしかしたら1
にすることは出来るかも。私も知りたいの、それが出来るか」

STEP ZERO TO ONEそれが合い言葉になったのは
後から思えばこの時からなのかもしれない。

第四十四話

晴天の空の下、海に潜るとそこには青に染まる世界が広がっていた。なんの捻りもない表現になるが、それ以上に妥当だと思える表現がない。

揺らめく海中の景色は喧騒。常に流動的で一度として同じ景色を作ることはない。本来の意味や用途は知らないが、潮騒とはこういうことを言うのかなとぼんやりと思った。

景色とは打って変わり音は驚くほど少ない。いや、音自体は常に響いているが種類が少ないのだ。あらゆる音は水というフィルターを通すためシンプルになる。海に潜ることに慣れた人ならばともすれば無音とも表現されるかもしれない。

今この時、私は一人だ。厳密には違うが今は一人になりたい。そんな気分なのだ。

雨降って地固まると言う具合にAqoursは一つになった。それは喜ばしいことだったが、却ってその空気に当てられてしまった。

私は勝手に感じた疎外感を紛らわすために一人になれる場所を求めてダイビングショップの果南さんの所に行き、海に潜らせて貰ったのだ。今頃はAqoursのみんなは練習をしている頃だろうと思うとなんだか胸が疼いた。私はそれを誤魔化すように海の中を漂い続けた。海の中は暑いが

外気とは違い、程よく冷たかった。

少しずつ問題は整理されつつある。私は海流に身を任せて漂いながら、頭の中のボードに貼り付けた付箋を一枚剥がして捨てた。その剥がした付箋にはAqours解散危機と書かれていた。

まだボードに貼られている付箋はダイヤさん、鞠莉学園長、果南さんの謎、そして私の過去を話すという課題だ。正直、前者の問題は完全に私の個人的な心象から問題視しているだけで、当事者達からすれば既に終わった話なのかもしれない。だが、それを確かめなければならぬ。そんな気がするのだ。それは鞠莉学園長のことが気懸かりだからだ。

私は鞠莉学園長に対し良い印象を持っていない。けれど、ダイヤさんからスクールアイドルと一緒にやっていたと聴いて、鞠莉学園長の今までの行動を鑑みると、ある目的があるのではないかと感じるようになった。それを知りたいと思う。

人間単純なもので目的意識を持つと急に元気が出たりする。私はヒレの付いた足をばたつかせ海面に上がった。

「満足した？」

海上ではボートの上で果南さんが待っていた。

果南さんは私が海面から顔を出すと、私に手を伸ばしてボートに上がるのを手伝ってくれた。

この明朗潑刺な彼女は今、スクールアイドル活動についてどう思っているのだろうか？

「果南さんもスクールアイドルやってたんですね」

「やっぱりその件？」

「はい。ダイヤさんから聴きました。ダイヤさんと鞠莉学園長と果南さんの三人でやっていったって」

果南さんは私の言葉に動揺することなく真っ直ぐに私を見る。その表情を見て私は難しいと直感した。何が難しいかと言えば果南さんの本心を聴き出すことだ。

「そうだね。ちよつとだけね」

「東京に呼ばれるレベルの活動をしててちよつととかどんだけストイックなんですか」

「何が言いたいのか？」

「それだけ真剣にやってたのになんで辞めてしまったのですか？」

いささか直球に過ぎたかもしれない。だけどこれは聴かなければならない。私の懸念が間違えであれば不要だが、現時点ではそれすらも分からない。

「嫌になったのよ」

質問に対する答えはシンプルなほど心地良いものはない。だけど、違う。勝手な決めつけは良くないけれど果南さんの物言いに私は直感的に偽りを感じた。

「仮に嫌になったから辞めたとして、それはダイヤさんや鞠莉学園長も納得しているんですか？」

「だから鞠莉は一度学園から去った」

「でも戻ってきた。それはやり直したかったからじゃないんですか、ダイヤさんと、果南さんと」

「だとしても、私もダイヤもスクールアイドルをやることはない」

それ以降、船着き場にボートを着けるまで私達の間には会話は無かった。

空を見れば澄み渡る青が一杯に広がっているのに、なぜ人の心はこうもシンプルになれないのだろうか？それは自分自身に対してもそう思うし、今は果南さんに対してもそう思う。

今回のやり取りを通して彼女から頑なな感情だけは伝わってきた。その感情が何を発端にしているのか、問題はそこそが焦点となる。

「果南さん。最後に一ついいですか？」

「なに？」

「ちゃんと鞠莉学園長と、いや、ダイヤさんともですけど、しっかり話を付けて下さい。妥協しないでとことん。でないと中途半端な想いは行き場を無くしてしまいます」

私は船着き場から棧橋に降りると果南さんにそう伝えた。

鞠莉学園長はきつと私と同じなのだ。いや、厳密には違う。何もできないのが私で、必死に足掻いているのが鞠莉学園長だ。

なくしたものを取り戻す。生き汚くても、人を利用して、絶対に取り戻す。その純粹で盲目的で熱い想いが私には羨ましかった。

きつと私は最初から感覚的に鞠莉学園長に対してそんな感情を抱いていたのだろう。

持たざるものが持つ物に嫉妬する。だから私は鞠莉学園長に良い印象を持っていなかった。

「そんなの分かってる」

去り際の果南さんの言葉は常の彼女からは想像できないような消え入りそうな声だった。

「今日はありがとうございました」

最低限の礼は尽くし、私は果南さんと別れた。果南さん達をこのままにしてはいけない。果南さんの最後の言葉でそれを確信した。人から言われて心が揺れてしまうなんてまだ自分自身で整理できていない証拠だ。

私は過去の失敗から人とすれ違いが生じることを見過ごせない。けれどもこの問題は多分私には手に負えない。過去を清算できていない私では。けれども彼女達がいる。現在と向き合い、未来へひた走るスクールアイドル、A q o u r s が。

「もしもしルビィちゃん？」

私はみんなと会うべく練習中の彼女達に連絡をいれたのだった。

第四十五話

私は果南さんと別れた後、千歌先輩の家でみんなと落ち合った。みんなは練習後なのか旅館の待合スペースで寛いでいた。善子ちゃんに至っては横になっている。いくらなんでも人の家で寛ぎ過ぎな気がする。

「いらっしやい、星ちゃん」

「これ食べるぞら？」

もぐもぐと棒状の菓子パンを食べている花丸ちゃんが駆け付け一杯にと私に同じ菓子パンを差し出してきた。そこはお茶じゃないのかと思いつつ 反射的に受け取ってしまった。

これは県民遺産に名高いのっぽパン。それも最近限定販売した塩キャラメルのつぼだ。キャラメルソースの甘さを僅かに加えられた塩で更に増し、その甘々ソースをパンが中和してバランスをとった一品だ。

なかなかどうして、うん。美味しい。

「ってそうじゃなくて、話しがあるってルビィちゃんから聴いてないの？」

「聴いてるよ。でも、そんなに力んでると、上手く話しもできないんじゃないかと思って」

「そんなに私変だった？」

「うん。戦場に行く兵士みたいなの顔してたぞら」

私はほつぺたを擦ってみるが特別引き攣っている感じもない。もしかしたら鎌を掛けられたのかもしれないが、だとしてもそれはきつと花丸ちゃんが私のことを心配した上でのことだ。気遣い上手の花丸ちゃんらしい。

「改めまして、今回私が話したかったのは、先輩達のことです」

「私達のこと？」

私の言葉を勘違いしたのか曜先輩が首を傾げている。

「語弊がありました。ダイヤさん達最上級生のことです」

「こないだのダイヤさんの話のこと？昔スクールアイドルやって

たっという」

「そうです。みんなその話しを聴いて思いませんでしたか？何故現在の三人はスクールアイドル活動をしていないのか」

私の詮索するような言葉に反応したのは梨子先輩だ。

「それは気になるけど、掘り起こしていいものなの？知られたくない過去は誰にだっただけである。それは星ちゃんが一番良く知っているんじゃないの？」

ふと東京のイベント前夜の梨子先輩と千歌先輩のやり取りを思い出す。

梨子先輩も隠している訳では無いが抱えている過去がある。それを他人に興味本位で詮索されるのは面白くないと思うのは普通のことだろう。

更に言えば、私自身もまた同類だから分かるだろうと釘を刺された。詳細は語っていないなくても梨子先輩、いや、皆は私の過去に何か秘密があることを察しているのだろう。

「だからこそです。私は過去の辛い経験から今の三年生の三人は危ういと感じたんです」

「危うい？」

「はい。どうにも三人は意思統一して活動休止している訳ではなさそうだと思うんです。それが危うい。抱えている想いがありながらそれを隠すことがどんな結果になるか、想像してみてください」

現時点ですらかなり危ういバランスの上にいると思う。どちらかの想いが走り出してしまつたら、どう転ぶかわからない。いや、今の頑なな果南さんの様子を鑑みると、その頑なさの理由が分からない限り和解はないと思う。

「星ちゃんは何で果南ちゃん達に仲直りして欲しいの？」

「今言つた通りなんですが？」

「そうじゃないよ。でもまあ私も疑問に思つてたことだし、果南ちゃんに話してみるよ」

千歌先輩が私に投げ掛けた言葉が些か引つ掛かったが、どうにか協力して貰えることとなつた。

「そう言えば千歌先輩は果南“ちゃん”って呼ぶんですね」
「幼なじみだからね」

果南さんもいつしか同じ様なことを言っていた。

目と鼻の先に自宅があり、歳も近ければ必然的に付き合いも生まれる。ちゃん付けで呼んでる所を見ればかなり親しい仲だと思われる。

「と言うか、千歌先輩何か聴いていなかったんですか？」

「んー、果南ちゃんって自分のこと余り喋らないからなー」

千歌先輩は腕組みして考えるが心当たりは無いらしい。だとすれば他に何か知っていそうなのは、

「ルビイちゃん。ダイヤさんから何か聴いてないの？」

「えーと、それはですね」

「なんでそこで立ち上がるのかな、ルビイちゃん？」

「べべ、別に逃げようとかそんなこと思っていないよ」

「善子ちゃん」

「了解」

「ピギイイイイ」

そわそわとするルビイちゃんと善子ちゃんが羽交い締めにして確保。哀れルビイちゃんは囚われの身だ。

ルビイちゃんも良い反応をしてくれるから実に弄りがいがある。

「で、ダイヤさんから何か聴いてないの？」

「スクールアイドル活動をしたた時期は忙しそうにしてたけど、ある日ぱたつとそれがなくなったの。それで聴いてみたら東京のイベントで上手いかなかったって。それからスクールアイドルの話は殆どしなくなっちゃって」

「こないだダイヤさんが話したこと以上は不明ってことね」

「うん。でも、鞠莉さんが学園長になってから家に来たことがあったんだけど、お姉ちゃんが鞠莉さんにこう言ったの。逃げたんじやないって、だから果南さんにも逃げたなんて言わないでって」

逃げたわけでは無い。それは果南さんか言った嫌になったという理由とは噛み合わない気がする。だとするなら他に隠された理由があり、尚且つそれはダイヤさんと果南さんとで共有していることにな

る。鞠莉学園長にだけ隠して。

「結局当事者に聴かないと分からないね」

「うん。でも、難しいかも知れませんが」

果南さん達の関係を壊してはならない。その大前提を守らなければ意味が無いのだ。

結局この後、みんなであれこれと話したが妙案が浮かばず、千歌先輩がそれとなく聴いてみる、と言う流れになり解散となった。

「星ちゃん、今日時間ある？」

私は千歌先輩の家の玄関を出ると唐突に梨子先輩が尋ねてきた。どう考えても話したいことがあるという雰囲気である。

「大丈夫ですよ」

「じゃ、カラオケ行きましょう」

「はい？」

「よっちゃんも行くわよ」

なんだか意外な申し出に意図を掴めないでいる私を余所に、梨子先輩は善子ちゃんを誘っていた。因みに善子ちゃんと梨子先輩はお互いを時偶よっちゃん、リリーと呼び合っていたりする。

「じゃあ行きましょうか」

梨子先輩、善子ちゃん、私という中々珍しい面子で私達は沼津駅前に繰り出した。

第四十六話

沼津駅前徒歩数分。ビルの地下に24時間営業のカラオケ店がある。猫がこつちに来て手招きしてる看板のカラオケ屋だ。

思えば沼津に引越してきてからカラオケなんて初めて来たかも知れない。

梨子先輩は誘った割に慣れない様子でそわそわしているのが微笑ましい。

「梨子先輩ってカラオケ来るの初めてですか？」

「東京もんがカラオケにも行ったことないって馬鹿にしてるの!？」

「いえいえ、それは被害妄想ですよ」

梨子先輩は恥ずかしそうに顔を赤くしているが、カラオケなんて私だって初めて行ったのは中三の頃だ。それに行った回数も両手で数えられる程度でしかない。

「善子ちゃんは慣れてるんだね」

「当たり前でしょ。今時の女子高生なんだからカラオケくらい嗜みよ」

ふん、と得意げに答える善子ちゃんにふと疑問が湧いた。学校をサボっていた時期は友達なんていないだろうし、登校するようになってからも大抵花丸ちゃんとかと帰ってる。花丸ちゃんとかからカラオケ行ったなんて話しは聴かないし。

「ヒトカラ?」

「嗜みよ」

「はい。すみませんでした」

なんてからかい気味に言ってみたが、ヒトカラは案外良いものである。仲間でするんでカラオケに行くとも多少なりともTPOを気にした選曲になる。あまりマイナーな曲やザ・バラード曲なんかは歌にくいのだ。その点ヒトカラならば自分の本当に歌いたい曲を歌えるし、覚えたての曲は練習できる。ヒトカラサイコーである。

「それで、梨子先輩は何故行ったこともないカラオケに私を誘ったんですか？」

「それはまた後でね。まずは歌いませよ」

ほらほら、とマイクを手渡してくる梨子先輩。

「さよならは別れの言葉じゃなくて」

「早っ、もう曲入れてるし」

そうこうしているうちに善子ちゃんは既に曲を入れて歌い始めている。最初は準備運動のようで曲の中での音域が狭い曲を選曲している。

曲は“セーラー服と機関銃”それもAcid Black Cherryのカバーバージョンだ。

Acid Black Cherryは本筋の活動と同じくらいカバー活動も真面目にしておりカバーアルバムを三枚出すほどに至っている。私は薬師丸ひろ子のこの曲をまともに聴いたことがないが、Acidのカバーで曲調を覚えた。実に良い趣味をしていると善子ちゃん株が私の中で上がった。

「星ちゃん先どうぞ」

「分かりました」

今更人前で歌うのに緊張も何もない気がするが梨子先輩は子機を渡してきた。どうしようかとも考えたがここは一肌脱いでネタに走ることにする。

因みにカラオケは私的には音楽活動にギリギリ入らないので今日は思う存分歌う所存だ。

「Yeahめーっちゃホリデイ」

曲は一昔のトップアイドル 松浦亜弥の“Yeah!めっちゃホリデイ”。歌詞からしてネタ曲なのだが、謎の中毒性で流行った。それを私は振り付きで歌う。ウルトラマンが空飛ぶようなポーズだった綺麗に決めて見せた。これがカラオケでネタをやるということだ。「凄い。けど、私達って本当に最近の女子校生って選曲じゃない?」「じゃあ梨子先輩は最近の女子校生っぽい曲をお願いします」

うー、と頭を悩ます梨子先輩はどうにか選曲をしてマイクを持った。

「窓もドアも開いている」

梨子先輩は言う割に最新ではなかったが、異様に流行ったアノ雪の
“生まれてはじめて”を歌った。最初こそ緊張していたようだが、歌
い始めるとスイッチが切り替わったのか自然な声が出るようになった。
た。

「偶にはいいね、こういうの」

「梨子先輩」

「ねえ、星ちゃん。星ちゃんは歌うの好き？」

「えっと、好きです」

「じゃあ歌おう。よっちゃん」

「アイサー」

曲は善子ちゃんが入れた。BUMP OF CHICKENの
“真つ赤な空を見ただろうか”。シングル曲“涙のふるさと”のカッ
プリング曲だ。

真つ直ぐで等身大でどこまでも凡庸で、それが心の隙間に染みるよ
うなそんな曲だ。

今この曲を歌うと言うことに私は特別な意味を感じざるを得ない。
果たしてこれは誰に向けての選曲なのか。

「梨子先輩」

「次行くわよ」

今度は梨子先輩が入れた。曲はJUJUの“sign”。映画「麒麟の翼」の主題歌となっていた曲だ。これもまた人と人との繋がりを表現した曲だ。狂おしい程の想いが込められたサビは圧巻の一言に尽きる。

なんだろう。これらの曲を何故私に向けて歌うのか？

「梨子先輩」

「今日千歌ちゃんが星ちゃんに言った言葉覚えてる？」

覚えてる。またその時抱いた疑問は未だ私の中から消えない。

「星ちゃんは何で果南さん達に仲直りして欲しいの？」

「それは果南さん達の関係が危ないと思ったから」

「それは分かっているの。でもそうじゃないの。だって果南さん達の関係は星ちゃんとは関係がないでしょ」

「それは」

「だから、その関係ない星ちゃんがなんでそう思ったのか、その根幹が知りたいの」

「私は――」

改めて問われるとどうなのだろう？このまま見過ごすのは私の気が済まないという自分本位な気持ちからのような気もすれば、少なからず関わりを持った知り合いの事が心配であるという気もする。

「星が三年生三人のことを想った時、どんな気持ちになったの？」

三人でしっかりと話して欲しい。お互いの認識を一致させて、そして「その先に何を願ったの？」

それでも尚、スクールアイドル活動をしないならば致し方ない。でも、願わくばスクールアイドルとして輝いて欲しい。そう、私はもっと早くからそれを幻視した場面があった。

果南さんと初めて出会った日、私は彼女を見て素敵な女性だと思った。そして自然と私は果南さんに対しスクールアイドルをやったらもつと素敵なことだと思い、誘いを掛けていた。

「私は果南さんにスクールアイドルに戻って欲しい。いや――」

ダイヤさんだっそうだ。私の誘導に対して思わず矢澤にこの物真似をしてしまうくらいスクールアイドルが好きなのだ。自分でやったら良いではないかと少なからず思っていた。

鞠莉学園長は得体の知れない胡散臭さを感じていたが、彼女の目的がもし活動していたスクールアイドルグループの再結成だというのなら、是非とも見せてもらいたい。本当にそれが可能なのかと。私が不可能と諦めたことを叶えられるのかと。

「私はみんなが仲良く手を取ってスクールアイドルをやっている姿を見たい」

「そっか。それが分かっているならなんの問題もないわね」

「もしもただの義務感とかならきつと三年生の三人は動かせない」

「でも、そこに願いがあるならその願いはきつと届く。墮天使の私とは違ってね」

二人は、いや、きつとAquoursのみんなは本当に人のことを良

く見てくれている。私のこの深層なんて自分でも気付いていないくらいだったのに、それこそが大切であると気付かせてくれた。

「善子ちゃんは私にとっては天使だよ」

「ばっ、畏まって言わないでよ、恥ずかしい」

「梨子先輩も心配お掛けしてすみません」

「同じ様なことを私もみんなにして貰ってるから」

まるで私がチームの一員であるかのようにそう言ってくれる。それが嬉しくもあり、切なくもある。

「じゃあそろそろ最後の曲にしましょつか？」

「なら、私が選んでいいですか？」

どうぞ、と子機を渡されると私は迷うことなく選曲する。

このメンバーに共通するグループはきつと後にも先にもこのグループしかないだろう。

最後に選んだのはμ☒sの“それは僕たちの奇跡”。底抜けに希望に満ちた曲だ。

この曲には不思議なエピソードが実はある。

μ☒s 人気が高まり、第1回ラブライブを優勝したスクールアイドルA—RISEにラブライブ予選で勝った勢いも後押ししたからなのか、大晦日にTwitterで不思議な書き込みがあった。それはμ☒sが紅白歌合戦に出てこの曲を披露するという内容で、まるで本当に出演しているかのような実況で盛り上がったのだ。

もちろん現実にそんなことはないのだが、この謎の書き込みはμ☒s七不思議の一つとして語られている。その他にも東京ドームなる架空のドームで単独のファイナルライブなんてのもあるのだから、如何にμ☒sが愛されていたのかが分かる。

「今ここで出会えた奇跡」

「忘れないで僕たちの奇跡」

本当に、そんな不思議だって飲み込むくらいにこの曲は爽快だ。

第四十七話

翌日、私は早朝も早朝に千歌先輩に叩き起こされた。なんでもみんなで果南さんの早朝ランニングを尾行し、疲れた所を狙って話を聴いてみるという作戦だ。何故みんな総出なのかというと果南さんのペースが早いため一人や二人追跡に脱落するという想定での保険だ。「それにしても果南さんマジばねえっす」

「星ちゃん、疲れすぎて喋り方変になってる」

ランニング開始から早10分。時間的には標準的な継続時間なのだが、ペースが速いのなんの、普段スクールアイドルとして体力作りしているみんなが息を激しく切らせているくらいに速い。片や果南さんは呼吸を乱していないのだから、私の感想は決して過大な表現ではない。

因みに私もまた絶賛呼吸困難な状態だ。

「アピールポイントは泳力と筋力って自称するだけあるね」

「大分良い感じどころの筋力じゃないよ」

それでもどうにかこうにかランニングに食らいついて行くと、果南さんは弁天島の鳥居をくぐり抜け、鬼のような階段を上り弁天島神社まで駆け抜けた。どうやらそこがゴール地点でストレッチをしている。

私達は無言でアイコンタクトをすると全会一致である結論を出した。今はこちらのコンディションが最悪なため話しにならないため待機と。疲れた所を狙うつもりが自分達の方が先にばててしまっている。

取り合えず茂みに身を隠して呼吸を整えつつ果南さんの様子を観察していると、果南さんはストレッチを終えてダンスのステップを踏み始めた。

非常に軽快でしなやかな見事なステップだ。私達は数瞬見とれてしまった。

流石スクールアイドルをやっていただけある。というか、今でも練習を積んでいなければあんな馴れた動きは出来ないだろう。なにが

嫌になっただ、と呆れながらもどこかほっとした。少なくとも心底嫌いになった訳ではなさそうだ。

「なんで嫌になったなんて言ったんだろう？」

楽しそうにステップを踏む果南さんを見れば見るほど疑問に思ってしまう。

好きなことを遠ざける事がどれほど苦痛かは私も分かる。現在進行形でそうだからだ。

音楽活動は中学時代の私にとっては青春そのものであり、ライフワークであり、絆だった。だが、私の勇気がないがために絆を引き裂き、そして高校生となった。高校生の私にとっては音楽活動は無くした絆への未練であり、青春の代償行為であり禁忌だった。だから私は辞めた。だが、やってはいけなれないと思いつつも私の手は、耳は、体は音楽を求めてしまう。一人で居る時、人と話す話題、人を元気付けるツール、どうしても私に染身に付いたそれは私を苦惱させる。

もしかしたら果南さんもそうなのだろうか？本当は好きだけど何がそれを許さない。だとしたらこの問題は相当に根が深い。

「復学届提出したのね」

自分の思考の泥沼にハマリ掛かっているとここで聞き覚えのあふ敵な声が聞こえ、はっとして私は顔を上げるとそこには怪訝な顔をして踊るのを止めた果南さんと、恐らくは果南さんの踊りに対する祝辞の拍手する鞠莉学園長がいた。

「まあね」

素っ気ない返事をする華南に鞠莉学園長は動じることなく言葉を続けた。

「やっと、逃げるのを諦めた？」

「勘違いしないで。学校を休んでいたのは父さんの怪我がもとで。それに、復学してもスクールアイドルはやらない」

核心を切り出したのは果南さんだった。スクールアイドルはやらない。そのワードが出た瞬間に私達は皆息を呑んだ。

果南さんから感じるのはあからさま過ぎる拒絶の意志。これ以上は無いほどのシンプルで有無を言わせぬ物言いだ。ついさつきまで

楽しそうに踊っていたとは思えない変わり様だ。

だが、それにも怯まない鞠莉学園長は常のような外国かぶれの喋り方ではないこと以前に真剣さが滲み出ている。

「私の知っている果南は、どんな失敗をしても笑顔で次に向かって走り出していた。成功するまで諦めなかった」

鞠莉学園長にとっての果南さんはそういう人なのだろう。果たしてそれは正しく果南さんを捉えているのだろうか？そんな鞠莉学園長の果南さん像が重荷になって嫌になった。そんなことは無いだろうか？

私の相方が私の嘘を見抜けなかったように、鞠莉学園長も果南さんの本質を見られていないのではないのか？

いや、これは考えすぎかもしれない。私のことを簡単に見抜いた女だ。かつての相方を出し抜き続けた私が見抜かれたのだ。傲りかもしれないが鞠莉学園長の人を見る目は確かだ。

「それに今は後輩も居る」

例えば鞠莉学園長は千歌先輩達のスクールアイドル部設立の条件を出したり、ライブの場を設けたり、PV撮影に尽力してくれたりした。それもこれも果南さんが戻る場所を用意するためだったのだろう。

学生でありながら実家経営する小原グループの後ろ盾を利用して学園長に就任してまで準備をしたのだ。どれだけ本気なのだろう。

「だったら千歌達に任せればいい」

「果南」

「どうして戻ってきたの？私は戻ってきて欲しくなかった」

「果南。相変わらず果南は頑固なんー」

「もうやめて。もう貴方の顔、見たくないの」

「だけど、その想いは拒絶で返された。」

スクールアイドルが嫌いな訳ではないだろう。音楽が好きだと以前言っていた。さっきの様子だと躍るのも好きなのだろう。だからスクールアイドルを嫌いであるとは考え辛い。

ならば人間関係が原因かとも思ったが、果南さんの性格が鞠莉学

園長が語るような性格ならばきつと、嫌な相手には素直に嫌いだと拒絶するだろう。

だから余計に分からない。何よりも分からないのが華南さんが辛そうな顔をして鞠莉学園長を拒絶することだ。

鞠莉学園長からは顔を背けていたが、私達からはその表情が見えていた。

私達はどうしていいのか分からず逃げるように下山した。

第四十八話

私達は一度解散し、各自制服に着替えるため帰宅した。それもそうだ。今日は平日、普通に登校する日だ。

帰宅した私はまずシャワーを浴びて汗を流すことにした。早朝とはいえ、7月になり益々気温が上がっている中を私にとっては全速力で走ったのだ、汗もダラダラだ。

体力は確実に落ちていく。それを嫌でも痛感させられた。最近はランニングどころか軽運動すらしていないから当然だ。

音楽活動を辞めた今、体力が落ちようと関係ないはずなのだが、妙な焦燥感が湧くのを冷水を頭から浴びて、今考えることではないと自分を無理矢理抑えつける。

体を流し終える頃にはいい時間になっていたため直ぐに制服に袖を通して家を出た。

折角シャワーを浴びたというのに日が昇ってから更に気温が上がリ、数分も歩いているともう背中が汗ばんできた。

海沿いを歩いていると波の音と蝉の大合唱で一大オーケストラになっている。

夏休みはどうなるのだろうか？この町に来てから初の夏だ。どの様に過ごせば良いのだろうか？聴いたところ沼津の一大イベントとして花火大会があるとのことだ。Aquoursにはその出演オフアールが来ているらしいから、夏はラブライブの予選と合わせて練習漬けの毎日になるだろう。

私もかつてそんな毎日を送っていたことを思い出す。そよ時の夏もこんな風に生徒が大合唱していた。

「あつ、おはようございます」

「おはようございます、星さん」

学校に最寄りのバス停前を通過するとき、丁度バスの到着時間と重なり、バスからぼつぼつと降りる浦女生が見えた。その中に見覚えのある黒髪ストレートの生徒が背筋をシャンと伸ばしている姿があった。ダイヤさんだ。どうやらルビィちゃんとは別行動らしいが、出

会って挨拶もしないのは不自然なため声を掛けることとしたのだ。だが、こないだの今日で何を話せば良いのか分からない。

「ダイヤさんは」

「なんでしようか？」

分からないのに思わず私はダイヤさんから聴こうとしてしまった。だが、その聴こうとしていたことが上手く言語化できなかった。だが、確かに聴きたいことはあるのだ。果南さんでもなく、鞠莉学園長でもなく、ダイヤさんに。

「その何というか」

「そんな風に固まっていますと遅刻してしまいますわよ」

そう言って口をパクパクとさせてしまう私を余所にダイヤさん余裕のある様子で歩を進める。

私は慌ててその背中を追い掛けた。

背後から見るダイヤさんの背中は何んだか不思議だった。別に歩幅が広いとか、ペースが速いとかではないのに何故だがそう、遠く感じるのだ。

「星さんはルビイとは今日も早朝から？」

「あ、はい。ちよつとみんなでランニングを」

本当は尾行なのだが、そんな事は言えない。あと付け加えるならちよつとランニングどころか全力マラソンだったが、それは今は問題ではない。

「そうですか。ちよつと羨ましいくらい仲良くしてくださいって感謝していますわ。ところで星さんはスクールアイドル部のメンバーから一歩引いている様に見えるのですがその訳を聴いても？」

「私はメンバーじゃないから、では納得しなさいですよ？今日はどうしたんですか？えらく踏み込んだ質問をしてきますが」

「ええ。音楽が好きでダンスが好きで、みんなが好きで。それでもスクールアイドルをやらないなんて、どこかの誰かさんに似ているなと思ひまして。余計なお節介ですか？」

それは間違いなく果南さんのことを言っているのだろう。

鞠莉学園長に不用意に踏み込まれた時と違い、ダイヤさんには東京

でのイベント帰りの借りがあつたため、私もいきなり激昂することはないが、些か驚いた。それほど私はダイヤさんと絡みはないのだが、第三者から見るとそれほど分かつてしまふのだろうか？

「私は、ケジメを付けているだけです」

「それは誰のためですか？」

その質問には私は答えられない。未だA g o u r sメンバーにも打ち明けられていない秘密をここで語ることは出来ない。

「そう。ホントにどこかの誰果南みたいですね」

なんだろう。多分「誰かさん」と言おうとして噛んだのだろうか。ど、このいたたまれない空気はどうすれば良いのだろうか？いや、誰かが果南さんを指しているのは分かっていたけれど、これは笑っていないのだろうか？いずれにせよ硬度過ぎて判断の付かない冗談は冗談ではないのだ。

「シリアス台無しですよ」

「とにかく、今はそれだけしか言えません」

「今は、ですか？」

「ええ」

そう言つてダイヤさんは今度はペースを上げて先を歩いて行く。

今のやりとりで新たに得られた情報はあまりない。ないが、何かが動き出そうとして予感だけは感じた。そして、何故ダイヤさんの背中がやけに遠く感じたのかが分かつた。それは覚悟だ。

具体的には分からないが、ダイヤさんはこれから勝負を挑もうとしているのだ。鞠莉学園長の様にアグレッシブではなく、果南さんのように頑なでも無い。嵐の前の静けさのようなそんな気概に満ちている。

私はそんな背中を追い掛けるでもなくただただついていった。登校しなければならぬのは勿論あるか、ダイヤさんから感じる意志の強さの100分の1で良いから分けて欲しかった。

もし中学生の頃の私かそれを持っていたならば、そう考えると胸を掻き毟りたくなるが、今はそれだけじゃ無い。今からでも取り戻せる、そんな希望を幻視している。

“なんで何も言ってくれないの、星っ”

「何でも言わなかったんだろっうね、私は」

今更取り戻せるものなどない。少なくとも、私にとっては。だからこそ私は見届けなければならぬ。擦れ違った果南さん、鞠莉学園長、ダイヤさんがどのような結末を迎えるのかを。

第四十九話

教室に着いた時には花丸ちゃんもルビイちゃんも善子ちゃんも一人も欠けることなく居た。一先ず寝坊が居なくてホツとしたが、ルビイちゃんはうつらうつらと船を漕いでいる状態だった。

「今日二回目だけど、おはよ。ルビイちゃんは眠そうだね」

「うん。バスの中で少し寝たんだけど、変な夢見ちゃって」

「私の呪文で良い夢見れたかしら？」

「ずっと善子ちゃんが耳元で囁いてずら」

何やってたか、と苦笑しながら私は自分の机にバッグを置いて三人の輪に合流した。スクールアイドル部ではないし、他のクラスメートとも関係は良好だが。なんだかんだでいつも連むのはこのメンバーだ。

「さっきダイヤさんと会ったよ」

「お姉ちゃん何か言ってた？」

先程のやりとりで交わした言葉はそれほど多くない。少し質問をされてそれに答えただけ。言ってしまうえばそう纏まるのだが、纏めてしまうとその時の言葉以上のやりとりが伝わらない。だけど果たしてそれはルビイちゃんに言うべきことなのか？自分で話題を振っておきながら私には判断が付かなかった。

「朝の挨拶はダイヤツホーですわ、だってさ」

「お姉ちゃん、熱あるのかな」

「インフルビイだね」

「それより、今朝のこと。ダイヤさんと話したの？」

「いや、話せないよ」

朝の果南さんと鞠莉学園長のやりとりを鑑みると、復学届を出した以上果南さんは今日から登校するだろう。

私達は揃って上階の三年生のことには思いを馳せて天井を見上げた。昨日の今日どころか今朝の今という短い間隔での再会となる訳だが、大丈夫だろうか。

「ちよっと様子見に行かない？」

「え、でも用も無いのに上級生の階に行くのはちよつと」

「全校生徒で100人に満たないのに細かいこと気にしなくていいの」

朝のホームルームまでまだ時間がある。私は三人の手を引いて三年生のフロアに歩みを進めた。

今朝のダイヤさんとのやり取りで何か核心的な事を言われたわけでは無い。だが、確実に事態が動きそうな予感だけはあった。最悪な想定などしたくないが、もしも人手が必要な流れになったしまった場合、私がそこに立ち会っていない事態は避けたい。

私達は階段を登って行くと、その先を見慣れた背中が駆け上がった。曜先輩と梨子先輩だ。

「どうしたんですか？それに千歌先輩は？」

「ベランダに居たら上の階からこれが落ちてきて」

「それに妙に騒がしいのよ。千歌ちゃんは先に行っちゃったから私達も追い掛けてたの」

騒がしきは階段を上り始めた頃から何となく感じていた。

曜先輩が手に持っているのは水兵服をテーマに作成されたような衣装だった。当然ながらA q o u r sの活動で作成されたものではない。ならば消去法でそれはかつてスクールアイドルだった彼女達しかいない。

本当に事態が動き出したのだろう。私達は頷き合い、階段を駆け上がった。みんなが居れば最悪な事態を回避できるかもしれない。居なければその可能性すら0になるのだ。

1秒でも速くと私達は三年生の教室に行くと、教室の入り口には人集りができていた。そして姿は見えないが教室の中からは聞き覚えのある声が激しい口論を繰り返していた。

「離して。離せていってるとの」

「良いと言うまで離さない。強情も大概にしておきなさい。たった一度失敗したくらいで何時までもネガティブに」

「うるさい。何時までもはどっち？もう二年前の話しだよ。大体いままさらスクールアイドルなんて。私達、もう三年生なんだよ」

「二人ともお止めなさい。みんな見てますわよ」

「ダイヤもそう思うでしょ？」

「やめなさい。いくら粘っても果南さんが再びスクールアイドルを始めめることはありませんわ」

「どうして？あの時の失敗はそんなに引きずること？千歌っち達だつて再スタートを切ろうとしているのに何で？」

「千歌とは違うの」

「鞠莉には他にもやるべき事がたくさんあるでしょ」

「どうやらダイヤさんもまたその口論に加わっているようだ。しかもあの口ぶりからすると果南さんがスクールアイドルを辞めた理由を知っているようだ。」

だが、強硬手段に出た鞠莉学園長を前に果南さんは頑ななままだ。

お互いに腹を割って話せば妥協点がある筈だ。なのにそれをしなれないことはどちらかに後ろめたい理由があるのだ。話すことのできない理由が。そして、果南さんの事情をダイヤさんが知っているというのならその二人こそが鍵を握っていることになる。

このまま平行線な口論して、お互いにわかり合うことができないで彼女達は良いのだろうか？仲が悪い訳でもないのに秘密を抱えて、このまま最後の高校生活を終えるのか？その後悔を抱えたまま人生を過ごすのか？

そんなのは悲しいし辛すぎだ。かつての三人がどのような関係であったのかは見たことがないから分からない。でも、きつと輝いていただろうし、希望に満ちていた筈だ。それは素敵なことで尊いものだ。絶対に失ってはいけない宝物だ。

ここで彼女達を終わらせてはいけない。私はその思いに突き動かされて人集りを掻き分ける。こうなったら殴つてでも彼女達の口論を一度止めなければならぬ。

だが、私の想いはやっぱり大局に影響を与えないらしい。

「いい加減にしろっ。なんかよく分からない話を何時までもずーとずーと。隠してないでちゃんと話しなさい」

私達の誰よりも速く駆け付けていた千歌先輩が一喝したのだ。

口論はそれで一度止まり、そのまま場を掌握した千歌先輩により放課後に話し合いが行われる事となったのだ。

その威風堂々とした姿はAqoursが作成したが、まだレコーディングしていない“Aqours HEROS”のように頼もしかった。

第五十話

午前の授業は正直上の空だった。というか、半分は寝ていた。単純に早起きしたから眠かったこともあるが、朝の騒動の時に入れた気合いが、今になって変な形で抜けてしまったのだ。

そのせいなのか授業中の居眠りにも関わらず懐かしい夢を見た。中学時代の夢だ。

夢の中の私は相方と共に二人きりの教室で語り合っていた。

夕暮れのオレンジ色と影の黒色が見事なコントラストを描く綺麗な黄昏時、なんてことはなく、普通に照明を付けて色気の無い白色光の照らす、ごくごく普通の風景の一つだ。

放課後に帰宅してから集合するのは怠い。けれども正式な部活に所属している訳では無い私達には部室などないし、放課後に寄るような店などない。自然と私達は教室に残ることが多かった。

夢の中の会話は実際にしたのかどうかは分からない。私達はそれだけ毎日のように色々なことを話したから、中には忘れてしまった会話もあるからだ。

「曲作って、演奏して、ダンスして、歌って、それでも中々フオロワーが付かないものだね」

「頑張ってるのにね」

「理不尽だって思う？」

「まあ。でも理不尽と言えなきゃ、人生で一番最初に味わう理不尽以上のものは無いって思うと、多少は我慢できるんだよね」

「何？人生最初に味わう理不尽って」

「産まれること。多くの子は両親にこうあれと望まれて産まれるでしょ。でもそこには私達、産みだされる側の意志が介在する余地なんて無いからどうしても一方的に願いを押し付けられる形になるんだよね」

「産まれたくなかったの？」

「そういうわけじゃないよ。ただ、どんな状況でもこれほどエゴを押し付けられる状況は他に無いってことを言いたかったんだ」

「それがどんなに綺麗な願いであつても？」

「伝わらない願いは乱暴じゃない？」

なんて、中学生らしく思春期特有の精神疾患を拗らせたようなことを語っていた。この会話を本当にしていただけのなら恥ずかしくて死にそうだが、この時期の私達にはそれが必要だった。今にして思えば一種の哲学だったのだ。

お互いに持論を交わし発想の幅を広げる。それが刺激的で、食事が不可欠な行為であるのと同等的のように私達は思っていたのだ。

ただ、本当に言わなければならなかったことだけは私は相方に話していなかった。

何故こんな夢を見たのかは考えるまでもない。三年生の三人が発端となつているのは間違いない。

今日の放課後になにかの結末を迎えることとなるだろうが、その前に私にはあと一人、話しをして置かなければならない人がいる。

「失礼します」

「あら？ 貴方が来るなんて珍しいじゃない」

「探しましたよ学園長」

小原鞠莉学園長その人だ。

私は昼休みの時間を利用し学園長と話しをしたかったが、三年生の教室には鞠莉学園長どころかダイヤさんも果南さんも居なかったため探す羽目になった。こうして学園長室に来たのも学食から梯子してのことだ。

「何のようかしら？」

「鞠莉学園長はじめからダイヤさんや果南さんとスクールアイドルをやり直すために千歌先輩達を利用したんですか？」

自分の目的のために手段を選ばない。そんなスタンスはいっそ清々しくあるが、だが、それを許容するには私は千歌先輩達のことには肩入れし過ぎてしまった。

「そうね。そう捉えてもらつて間違いないわ」

見惚れるほどの天然さらさらの金髪を指でくるくるといじりながらぎこちなく余裕の笑みを浮かべる学園長だが、どこか浮かぬ顔を

しているのは朝のやりとりがあつたからかもしれない。

「変に格好つけないでください」

「格好つける？私が？」

「そうですね。だって、学園長には目的があつたかもしれませんが、千歌先輩達に対して真剣に活動を支えてくれていました」

無茶ぶりをしてスクールアイドル活動に対しての厳しさを教えようとしたり、ライブの手配をしてくれたり、全面協力して町の人とスケジュール調整したり色々と活動を支えていた事実は単に自分の目的を満たすためだけとはどうしても思えない。そう。例え伝わらなくても、一方的であつても願いがあつたのではないか。

「だとしたらどうだっていうの？確かに千歌っち達には肩入れしたのは事実だけど」

「どうにもしませんよ。ただ、もし使い捨てようとしていたのなら軽蔑してましたよ」

鞠莉学園長はオープンに見えてハッキリと自分の気持ちを口にしていない。これまで数ヶ月の浅い付き合いしかないが、浅いからこそ却つてそれがよくわかった。とにかく暗躍屋なのだ。

案外三年生の話しがこじているのもそのあたりも関係があるのかもしれない。

「では放課後に」

「待ちなさい。貴方を利用しようとしたことについては聴かないの？」

「学園長が利用しようとしても、思惑通りには動いてないですからいいですよ、もう。それでおあいこにしましょう」

私は当初のやりとりで学園長に対して抱いていた怒りを維持できなくなっていた。それはここまでの経緯がどこかしら私に共感を呼ぶ部分もあつたからだ。だから、私は気にしないことにした。それで劇的に学園長との関係が変わるわけではないが、少しは前向きな関係になるのではないかと思う。そうなれたらいいと、そう思う。

第五十一話

午後の授業は聞き流し、あつという間に放課後がやって来た。

私はスクールアイドル部所属ではないが今回の件にはかなり顔を突っ込んでいるため部室に顔を出すことに遠慮はなかった。

総勢10名が部室に集まってもまだスペースに余裕のある広さがあるが、皆の緊張感からか開放感はなかった。普段元気な二年生達ですらそうなのだから、ルビィちゃんや花丸ちゃんや戦々恐々といった様子だ。

みんな各々席に座るが、果南さんと鞠莉学園長は対面に座り、両者の間で双方を見守るようにダイヤさんが座る配置となった。

「話しを始める前に」

「これ、ベランダに落ちてきたんだけど」

流石に時間と場所を指定した手前もあるのか、千歌先輩が話しを切り出し、曜先輩が続いた。曜先輩が出したのは水兵服をモチーフにした白い衣装だった。

「これって三人が活動していた時の？」

「そう。でもこれを着て満足にパフォーマンスをすることはなかったけどね」

「それって」

「東京のイベントで着た衣装」

鞠莉学園長は衣装を手に取ると抱きしめるように抱えた。因縁があるからなのか果南さんは難しそうな表情でそれを見詰め、ダイヤさんは無表情を通していた。

私は衣装というものに袖を通したことは1回しかない。幼稚園でAoursと共にお呼ばれした時の1回だ。スポーツもやっていないからユニフォームとかも着たことがないので、彼女らが衣装に対してどんな気持ちを抱いているのかは想像するしかない。

ただ1回きりの体験で語るならば、衣装を用意して貰った時はこそばゆい気持ちになったし、それを着てパフォーマンスをした時は楽しかった。自室に飾ったそれを見ると感慨深い気持ちになると共に、二

度と袖を通すことはないと思うと無性に悲しくなる。私ですらそうなるのだから三年生が抱く思いはどれ程の重さがあるのだろう。

「私はもうその衣装を着ることはないよ」

「どうして？ 町の人達からスクールアイドルは受け入れられている。活動の場もある。これだけ条件が整っているのよ？ あの時乗り越えられなかった壁にもう一度立ち向かえるチャンスなの」

「私はあの時のことを悔やんでないよ。とにかく嫌になっただけ」

「何か理由があるんでしょう？ 果南ちゃんはそう簡単に投げ出したりしないでしょう？」

「弁天島でも躍ってたし」

「そんなのないし、そんなこともない。何と言われても私はもうスクールアイドルはやらない」

果南さんの頑なさにはただ東京のイベントで上手くいかなかったという理由だけでは無理があつたが、他の理由を引き出すこともまたできなかつた。

人は嘘を吐くとき、または何かを隠すとき、利益を守ることが動機となる。利益といつても単純に金銭の問題だけではなく、何かを守るためであつたりする。

引越す前の私は現実を直視しないように、自分可愛さにずっと黙り続けた。

じゃあ、果南さんは沈黙をすることで何を守っているのか？

「私の意志は変わらないから」

果南さんは私達を威嚇するように睨み付けて立ち上がった。

「待つてください。それでは誰も先に進めない」

「星には関係ない」

「関係ないけど、救われたいことは知ってる。私がそうだったから」

「そんなの知らないよ」
果南さんは私の制止を聴かずにそのまま部室から出て行ってしまった。けれど、私を含め誰も果南さんを追い掛けることは出来なかつた。

鞠莉学園長は悔しそうに顔を俯かせ、ダイヤさんは相変わらず無表

情を貫いている。昔から果南さんと付き合いのある千歌先輩は納得できない様子で立ち上がっていたが動き出せずにいた。

「あーもう!」

「千歌ちゃん抑えて」

「だって訳わかんないんだもん」

「それ、マルも思いました。でも、果南さんだけなんですか?」

頭を抱える千歌先輩を余所に花丸ちゃんが顎に手を当てて語り出した。

自分の本心を中々出さないルビィちゃんとの付き合いが長いだけに人の心の洞察力が花丸ちゃんは人一倍鋭いようだ。

「どういうこと?」

「私達はその当時のこと殆ど知らない。知った気になっているだけ」

「でも、私達はそうだけど鞠莉さんとダイヤさんは当事者でしょ」

「当事者でも、ううん。当事者だからこそ見落としていることがあるんだと思う」

「私が、見落としている?」

花丸ちゃんの発言に顔を上げた鞠莉学園長は思い当たることは無いと言いたげな表情をしていた。

「そうですよね、ダイヤさん」

花丸ちゃんの指摘にダイヤさんはポーカーフェイスを崩さないし、気配が変わることもなかった。

「ダイヤ?」

「いいでしょう。事態が動いてしまった以上、静観を続けるわけにはいかないですわね。ただし、長い話になりますから場所を変えましょうか」

だが、それはこうなることを予想していたからこそなのかもしれない。朝の短い時間のやりとりの中で感じた気配の真相がこの展開なのだろう。

ダイヤさんは荷物を持って立ち上がると付いてきなさい、と部室から出て行った。

私達は慌てて荷物を持ってダイヤさんを追い掛ける。

「待って。果南ちゃんの荷物はどうする？」

「後で届けるか取りに来るように伝えますからそのままでもいいです」

取られて拙いものがあるわけでもないし、この生徒数100人にも満たない学校で盗難なんて起こらないだろうと判断し、私達はダイヤさんの後に付いていき、黒澤家の門を潜ることとなった。

第五十二話

黒澤家は旧家で内浦に深く根を張った一族だ。それだけに家もその歴史に負けず劣らず立派な日本屋敷だ。通された客間はこれまた立派な和室で、襖が開け放たれ空気がよく通っているため、空調を効かせていないにも関わらず意外に暑さは感じなかった。

そして特筆するべきは縁側だ。実際に住んでいる人にとってはただの通路かもれないが、私のような一般人からすると縁側は憧れの一つだ。一度でいいから春か秋の縁側で日向ぼっこして昼寝をしたい。さすがに今日のような夏の、しかも雨の匂いが漂う気候の中でしょうとは思わないが。

それはさておき、客間に通された私達はまずお茶を一杯ご馳走になった。

話し合いの場で飲み物を出されるということは相手としつかり対話したいという意味があるらしいので、私達はありがたく頂戴した。

「さて、ではどこから話しましょうか」

「判断が付かないので最初から」

「私たちの出会いから、ということですか？」

「はい」

お茶で喉を潤すとダイヤさんは早速話を切り出した。ダイヤさんは懐かしむように柔らかい表情をすると少しずつ、思い出しながら語り出した。

ダイヤさん達が小学生低学年の頃、鞠莉学園長が転校してきて彼女達はクラスメートとなった。

鞠莉学園長は内浦どころか沼津、いや静岡でも有数の資産家である小原グループの令嬢であったが、三人はよく連むようになり、付き合いはそれからずっと続いた。

地元が好きな三人は浦の星に揃って入学することとなったが、入学後までもなく学校では統廃合の噂が広まった。

資産家である小原家や地元を仕切る黒澤家の情報網から経営難であることが事実であると知った三人はμsのように学校を救おうと

スクールアイドルになった。

三人は学校や町から受け入れられ、順当に人気を集めていった。そんな知名度や人気上昇している最中、東京のイベントに招待されたのだ。

「ここまで皆さんも凡その概要は存じてますでしょ？」

「はい」

「なら先に進みましょう」

鞠莉学園長は家柄もさることながら、学業においても優秀な成績を修めていた。当時は転校や留学の申し出が寄せられるような状況にあったが、鞠莉学園長はそれを全て断っていた。

ダイヤさんも果南さんも鞠莉学園長が自らの可能性を狭めていくのを心配しつつも、東京のイベントに挑むことにした。狭まった可能性を別の方向性でも広げていけばいいと思ったからだ。

だが、東京のイベント直前、鞠莉学園長は練習で足首を痛めた。それでも尚、鞠莉学園長はイベント本番に臨もうとする姿を見て、果南さんはある行動に出たのだ。

「歌わなかった？」

「そう。歌えなかったのではなく、歌わなかったのですわ」

鞠莉学園長の生き急ぐような姿にダイヤさんも果南さんも危機感を抱いたのだ。このままでは鞠莉学園長の可能性を全て潰してしまおうと。実際、そう思わせる程に鞠莉学園長はこれまで過密なスケジュールをこなしていたし、痛めた足の状態も後に分かったことだが、重傷の手前まで来ていたのだ。もしそのままステージでパフォーマンスをしたら事故に？がりがかねない程に。

鞠莉学園長の可能性を燃料の様に燃焼させ続ければ、なるほど。きつとスクールアイドル活動は良いところまで行けたかもしれない。だが、そんなことはダイヤさんも果南さんも望んでいなかった。だからスクールアイドル活動は終わりにしたのだ。そして鞠莉学園長は二人に背中を押されて留学していった。

「なんで相談もなくそんな事を」

「相談してましたわ。でも貴方はいつも留学なんて断るの一点張りだ

から相談にならなかつたのですわ」

ダイヤさんの言葉はそのまま今の状況を裏返していた。

「果南さんはずつと貴方のことを見ていました。貴方の立場も、貴方の気持ちも、そして、貴方の将来も。誰よりも考えている」

「そんなの分からないよ。ちゃんと saying てくれないと」

「それも言ってみましたわよ。貴方が気付かなかつただけ」

鞠莉学園長はダイヤさんの言葉にようやく思い至ることがあつたのか、今にも泣きそうな顔になつた。

私も泣きたかつた。

三人は全然私と同じなんかじゃなかつた。私なんか同類だと思ふのは烏滸がましかつた。私は相手を思いやるよりも自分を守ることを優先していたのだから。それが情けなくて、恥ずかしかつた。それと同時に人の心の難しさが悲しかつた。

どうしてお互いこんなにも思い合っているのに本当の気持ちに気付けないのだろうか。心は？がっているのにすれ違ふのだろうか。

私が俯いていると鞠莉学園長は勢いよく立ち上がり走って部屋を出て行つた。

「鞠莉さん」

「行かせてあげてください。きつと果南さんに会いに行つた筈ですから」

外はいつの間にか雨模様となつていた。傘など持っていないだろうに、玄関から勢いよく外に出る鞠莉学園長の足音には雨を気にする様子はなかつた。

「私達も行きましょう。話した後で冷えた体を温めてあげないといけませんからね」

ダイヤさんに促され一同立ち上がるが私は直ぐには動けなかつた。

私には合わせる顔も無ければ語る言葉もなかつた。

「星ちゃん？」

「皆さん先に行つててください」

ダイヤさんに促され、皆は心配そうな顔をしながらも部屋から出て

行った。

「顔を上げてください、星さん」

「私はとんだ恥知らずです」

「そうだとしても顔を上げてください。私は貴方とちゃんと話しをしたいのです」

ダイヤさんの言葉には別に怒気が含まれてるとか、そんなことはなかったが、逆らいがたいものがあつた。

私は顔を上げると、ダイヤさんは私の顔を見て安心したように微笑んだ。

「あまり情けない顔を見ないでください」

「貴方が何故そんな顔をするのか私は知りません。でも、一つだけ言えることはあります」

「何を」

「貴方は自分が卑下する程ヒドい人ではありません」

「そんなこと何でダイヤさんに」

「貴方は鞠莉さん達の話しを聴いて思うことがあつたのでしょうか？そんな顔をするほどに。なら貴方はクスじゃない」

「ダイヤさんは勘違いしています。私は私が恥ずかしいだけです」

「その恥ずかしさがどこから来る感情か良く考えてください。良いですか？何度でも言いますよ。貴方は貴方が思うほどヒドい人ではありません」

ダイヤさんから真っ直ぐ見詰められて掛けられた言葉に私は再び顔を俯かせた。

本当に敵わない。ダイヤさんの優しさが温かくて今日何度目になるかわからないが、そんな風に思った。

第五十三話

夏の空は気紛れで今降っている雨はその短い命を燃やし尽くすかのように激しい降り方をしていた。なんて詩的な表現を試してみるが要は夕立だ。

私達は折りたたみ傘を持っている人はそれを使い、持ってない人はダイヤさんの家にあつた傘を二人で一本を共有する形で借りることとなった。

私もまた折りたたみ傘を持ち合わせていなかったため千歌先輩と共に傘を使うこととなった。

私達はお互いに身を寄せ合うがどうしても傘から肩がはみ出てしまい濡らす形となった。靴もビショビショで散々である。だが、ザーと降り注ぐ雨のお陰で沈黙が苦痛ではなかった。

「少し落ち着いた？」

「はい。ダイヤさんに顔を上げなさいって言われました」

しばらく無言の時間を共有していたが、千歌先輩が心配そうに語り掛けてきた。要らない心配をさせたことを本当に申し訳なく思う。

私は勝手に騒ぎ立て、勝手に落ち込んで、心配掛けて、本当に情けない。だからせめて千歌先輩には正直になりたい。今はそんな気持ちだ。

「私は私は嫌いです。だから私は自分のことを信じていません」

自分の感情を優先する私が嫌い。

平然と隠し事をする私が嫌い。

自分のことだけを守ろうとする私が嫌い。

今でもそれは変わらない。だから幾ら肯定的な事を思ってもそれが自分の内から出たことでは信じられない。

「でも、ダイヤさんが言ってくれたんです。貴方は自分が卑下する程ヒドい人ではありませんって」

でもみんなのことなら信じられる。だからダイヤさんの言葉は的外れではないと思う。完全に自分のことを見捨てるにはまだ早いと思う程度には。

「私ね、普通なんだ」

「千歌先輩？」

「曜ちゃんみたいに運動神経が良いわけじゃないし、だからといって勉強ができる訳でも無い。梨子ちゃんみたいに一生懸命になれることもずつとなかった」

「スクールアイドルが、A q o u r sがあるじゃないですか」

「うん。今はそこが私の居場所だよ。でもね、私はそれでも普通なんだ。でも、それを悪いとは思わないんだ。だって、普通の女の子が一生懸命に力を合わせると輝けるって知っているから」

千歌先輩は目を輝かせてどこか遠いところを見ていた。多分μ'sの事に思いを馳せているのだろう。

普通の女子校生が力を合わせて駆け抜けていった輝かしい軌跡。それが千歌先輩の道標なのだ。

「だから私は普通が悪いとは今は思っていないの」

だからいつか星ちゃんもそう思えるようになってたらいいな、と言われてるような気がした。

「あ、そういえば段々雨も弱くなってきたね」

あと数分もすれば傘が必要なくなるくらいに雨脚は弱まった。そしてもう学校も目と鼻の先だった。

「鞠莉さんと果南ちゃん大丈夫かな」

「心配には及ばないでしょうね」

千歌先輩の呟きに早くも傘を畳んだダイヤさんが答えた。今までずっと二人を見ていたダイヤさんが言うのだから間違いはないだろう。

「それより、二人のこと頼みましたわよ」

唐突にそんなことを言うものだから私達はみんなして顔を見合わせってしまった。

「ダイヤさんは？」

「私は生徒会長ですから。とてもそんな時間はありません」

なんでこの後に及んでそんな遠慮をしているのだろうか？

鞠莉学園長や果南さんがスクールアイドルをやるならばダイヤさ

んが居なければ復帰する意味が半減する。

「それなら暇人の私が居ますし」

「私達も居ます」

「貴方達」

きつとダイヤさんは責任感の強い人なんだと思う。自分の立場を、役割を半端には出来ない。そんな思いがあるのだろう。でも何もそれを一人で抱える必要はないのだ。私の悲しみを汲んでくれたように、誰かがそれを掬い上げてあげればいいのだ。

私達の申し出に呆れつつもダイヤさんは嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「お姉ちゃん」

「ルビー」

「ようこそA q o u r sへ」

ルビーちゃんはまだまだ原案の衣装のスケッチブックをダイヤさんに渡した。

私はそのスケッチブックに何が描かれているか知っている。それはスクールアイドルの衣装を身に纏うダイヤさんの姿だ。

ルビーちゃんはよく自分ではなくスタイルの整ったダイヤさんをモデルに衣装を考えたりしているのだ。

「これから忙しくなりそうですわね」

ダイヤさんが開いたページには夏祭りのステージでパフォーマンスする際に着る衣装の案が沢山描かれていた。

ダイヤさんは平静さを装っているが、その視線は忙しくスケッチブック上のイラストを追っているのが見て取れた。

「まずは一歩ずつ、目の前のことから始めましょう」

千歌先輩が前向きにそう宣った。

東京のイベントで壁を知り、みんな挫折そうになったがそれでも立ち上がった。この道の先に何かがあるのか？どんな景色が広がっているのかを見るために。

「では部室に行きましようか。鞠莉さんと果南さんにも相談しないと」

ダイヤさんはスケッチブックを胸に抱えて校舎に向けて足を運んだ。

みんな顔を綻ばせばせてダイヤさんの後を追い部室へと向かった。私はそんな彼女達の眩しい背中を見送った。

第五十四話

夕立もほぼ止み、空からは夕陽が顔を出し彼女達の行く末を照らすかのように光り輝いている。

私はその眩しい背中を見送って回れ右をした。

当初は鞠莉学園長と果南さんの件の決着が付くまで見届けようと思っていたが、ダイヤさんの御墨付きもあるし見届けるまでもないだろう。

勢いよく飛び出した鞠莉学園長が果南さんと出会えない可能性もあったが、双方のスマホに部室にて待つようダイヤさんが一報しているため、おそらくは平気だろう。部室に果南さんの荷物も置きっ放しになっていたこともあるし、鞠莉学園長もそれを知っている以上、部室を目指していたはずだ。

この問題は私などが出しゃばるまでもなく解決したのだろうと改めて思った。

9人となったA q o u r sはこれからまた一步前に前進するだろう。

まずは夏の花火大会。そしてラブライブの予備予選と忙しくなること間違いなしだ。それに録音をしていないながらも書きためられた曲が幾つかある。活動が益々活発化するだろう、私などと関わる暇はないくらいに。

「星ちゃん、待ってよ」

立ち去ろうとする私を呼び止めたのはルビイちゃんだった。彼女は遠慮がちに、だが、確かな意志を持って私を呼び止めたのがその目から感じとれた。

「私達と一緒に来て」

「私はスクールアイドル部じゃないよ？それに入ることもできない」

「うん。ずっと先延ばしになっていたそのことを知りたいの」

ルビイちゃんは本当に変わった。最初に出会ったころは人見知りで恥ずかしがり屋だった。人を気にして自分の意志を二の次にして

しまう悪癖もあった。だが、彼女は今、人の事に踏み込む勇氣を持てるようになった。だからこそ親友の花丸ちゃんの心を動かし一緒にスクールアイドルをすることができたのだ。

「そうだね。話さなきやとは思ってたんだけど、つい逃げ腰になっていたかもしれない」

その勇氣を無碍にすることなど私にはできない。

私は話をするとはいつつも、東京のイベントでの出来事や三年生の問題を盾に先延ばしにしていたのかもしれない。それを今日、話す事となるとは思わなかったが、寧ろこの時こそが最適解なのだろう。彼女らを取り敢えずのリスタートを切るこの時こそが。

「ありがとう、ルビィちゃん」

私は機会を与えてくれたルビィちゃんに感謝すると共に心の中で謝罪した。

私の話す内容は決して人に褒められたものではないからだ。まず間違いなく信頼してくれた人を落胆させる、そんな話だ。

「星ちゃん」

彼女達の顔を曇らせたくない。なにより彼女達との関係を終わらせたくない。だが、だからと言って嘘を吐いたり隠し事をしたりするのは論外だ。それでは過去の過ちから何も学んでいない。私にはもう退路は塞がれているし、自らもまた退路を断つたのだ。

だが、辛い。自業自得ながら私は足の震えを抑えられなかった。

「星ちゃん」

気付けば私の足は校門を潜ることなく止まっていた。そんな私を心配そうに見詰めるルビィちゃんは、だが、私を強制することはなかった。

「私ね、スクールアイドルになったのは最近だけど、ずっと前からその道はあったんだって、今はそう思うんだ。ただ自分で目を逸らしていただけたっただって。星ちゃんはどう思う？」

「私はずっとありもしない抜け道を探そうとしていたんだ。それで元に戻れなくなった」

「星ちゃんはどうするの？」

校門のラインを挟んで私達は見つめ合う。

きつとルビイちゃんや他のみんなの進む道と私の前にある道は違う。

「ごめんね、ルビイちゃん」

私は重たい足を動かした。

「ルビイちゃんにこんなことお願いするのは違うと思う。でも」「いいよ」

校門を越えてルビイちゃんのところまで辿り着いた私は、迷子になった子供のようにルビイちゃんに手を引いて貰って部室まで歩き始めた。

ルビイちゃんはよく自分のことを小さいと言う。事実そうであるし、今私の手を引くルビイちゃんの手は小さい。けれども私はこれほど頼もしい手はないと本心から思った。

不思議な感覚だった。手を引かれていると何処にだって行けるような気がした。でもそれも部室までだ。そこから先はもうルビイちゃんの知らない、私だけの道なのだ。今、この瞬間が既に奇跡なのだ。

例えこの先、私がルビイちゃんから嫌われたとしても私は一生この感謝の気持ちは忘れないだろう。

スクールアイドル部の部室前に辿り着くと私は自分から手を離れた。

「ごめん。ありがとう」

「うん。先に中入るね」

次にこの部室から出るときはきつと違う関係なっていると思う。だから一足先に部室へと入ったルビイちゃんに私心の中で別れを告げた。ばいばい、と。

沼津が内浦に来て、まさかこんなに色々なことを体験するとは思わなかった。今後の事を考えると辛いけれど、私は内浦に来てからの冒険のような日々後悔はない。ただ、楽しい期間は永遠には続かないのだ。けれども、彼女達の旅はまだまだ続いていく。それが私の希望だ。

さあ、部室に入ろうか。
私はみんなの居る部室へと足を踏み入れた。

第五十五話

踏み込んだ部室には一度立ち去る前にあった緊張感はなかった。

果南さんは目尻を微かに赤くして、濡れの鞠莉学園長の頭を嬉しそうにわしゃわしゃと拭いていた。鞠莉学園長の顔はタオルの影になり見えないが、されるがままのその姿は尻尾がついていたら間違いないく左右に振れていることだろうと容易に想像がついた。

「遅かったね、星ちゃん」

みんな笑顔だった。それだけでもう三年生の関係は修復されたのだと理解できた。

こんな空気の中に水を差すのは気が引ける。でも私はここまで来たのだ。もう後には引けない。いや、引かない。

「すみませんでした。でも、もう逃げませんから」

「そっか。うん。教えてくれるんだね」

千歌先輩は最初は心配そうにしていたが、私の返答を聴くと納得したように頷いた。そして、私と千歌先輩のやり取りを見たみんなもまた、手近な椅子に腰を下ろして話しを聴く姿勢になった。

改めてみんなは私を見詰める。一度は話すと言って先延ばしになっていた話題。私のひた隠しにしていた過去の過ち。それをこれから話すのかと思うと背中から顔までカッと熱くなる。目の前が暗くなりそうなのを必死に耐え、私は口を開いた。

「去年の四月頃、まだ私が埼玉に居た頃の話しです」

私は語る。人生で一番最高だった時のことを。一番最低だった頃のことを。

私は中学のクラスメイトとデュオユニットを組み、音楽活動をした。インターネット上の活動を中心に、最初は有名な楽曲や話題の楽曲のアレンジやカバーを。そして次第にオリジナルの楽曲を公開していき、徐々にフォロワーを増やしていた。

私達は高校生になってからも活動し、その幅を広げようと考えた。そこで手段の一つとしてスクールアイドルとしてやって行くことを決めたのだ。

スクールアイドル活動をするにあたり、私達は音ノ木坂に入学しようという目標を定め、勉強も音楽活動も頑張った。

ただ、私はその活動の中で相方に秘密にしていたことがあった。私の父親が昇進するための前準備期間として地方の関連会社の取締役として転勤を命じられたのだ。

それ自体は喜ばしい。ただ、私の家は両親共働きだったのが災いした。

母は海外の大使館職員をやって日本を離れているため、父の転勤に伴い引っ越しをすることとなったのだ。当然私は猛反対したし、一人暮らしをさせて欲しいと交渉した。それこそ引っ越しの直前まで。

私は引っ越したくなかったし、そのことで相方に心配を掛けさせたくなかった。だから黙っていた。

音ノ木坂への受験も相方共々したし、当然ながら合格もした。そうすれば引っ越しなどしなくてもするかもしれない。そんな淡い希望を抱いて。

だが、父も海外に居る母も一人暮らしには反対した。

音ノ木坂に合格して、制服も採寸して、これからの生活に相方と夢を膨らませていたのに。

当然父とは猛喧嘩した。それこそお互いに顔面を殴りつける程に。でも結果は覆らなかった。寧ろ、こんな暴挙を起こす娘を一人暮らしなどさせられたもんじゃないと揚げ足を取られてしまう始末だった。

引っ越しすることが決まっても、私は遂に相方にそのことを言えなかった。さようならと最後まで言えなかった。

私はそうやって一方的に相方と別れ、沼津に来た。

だから私は音楽活動を辞めた。嗜む程度にしかやらないことにした。でなければ相方に申し訳が立たないから。いづれにせよ沼津のそれも内浦に来て音楽活動などできないと環境的な面で高をくくっていた私は、それが誤算だと思い知らされた。

千歌先輩達と出会い、彼女達の音楽活動に触れ、自らもまたその輪に加わった。

死ぬほど楽しいと思う反面、罪悪感が強くなり私は音楽活動をしな

いと改めて強く決心して今に至った。

「以上が私の物語です」

みんな私の聴くに堪えない醜態に真剣に耳を傾けてくれた。それだけでも有り難かった。そしてその姿が私に勇気をくれた。正直に話そうと背中を押してくれた。

「今まで黙っててすみませんでした」

みんなは神妙な面持ちで考え込んでいた。

「今日は話しを聴いてくれてありがとうございました」

みんなは私に対し何も言わなかった。罵倒も否定も何も。そして私を気遣うような言葉も。

「さようなら」

私は別れの言葉を告げ、部室から出て行った。

今度はしっかりと別れだけは告げることができた、それだけが私の収穫だ。その代わりに失ったものは余りにも大きく、私は心にぽっかりと空いた穴にただ脱力し、死人のように帰路を歩いた。どうやって家に帰ったか後から考えても思い出せない程に私はどうかしていた。

私はこの話しをしてみんなからどんな言葉を掛けられたかったのだろうか？罵倒か、それとも慰めか？いや、違う。そんなもので気が済むのは一時のことだ。私が父を殴った時と同じだ。

では私は一体何が欲しかったんだろうか？私はその日ずっとそれを考えたが答えは出なかった。ただ一つ確実に分かることがある。それは明日学校でみんなと会ったとき、今までと同じようにはようと言えなくなっただことだ。

第五十六話

夢を見た。あの頃の夢だ。いや、あの夢のような日々に至る切っ掛けとなった日の夢だ。

中学生の頃の私はいつものように川沿いで学校のジャージ姿のままハーモニカを気儘に吹いていた。何の曲かは覚えていない。きつとその当時の流行の曲か何かだろう。

私の同級生達は部活動に励んでいるため、放課後の時間は基本的に一人で暇なのだ。だから川沿いで演奏中に誰かと遭遇することもなかった。だが、その日は違った。

「あれ？星？」

「穹」

どうしたの、とお互いに述べることは無かった。私のハーモニカを吹いている姿を見れば何をしていたかなど問うだけ愚問だし、彼女、明里穹が犬をリードで引いている姿を見れば一目瞭然だったからだ。

「そう言えば楽器やってるって前言ってたね。やってるところは初めて見たけど」

「私も穹が犬の散歩してるところは初めて見るよ。飼ってるってのは知ってたけどさ」

「家のたけし可愛いでしょ」

はいはい、と私はたけしという名のパグの頭を撫でると、たけしはパタパタと尻尾を左右に振った。満更でもない可愛さだ。

「ごめんね、邪魔して」

「いいよ暇だし。何かリクエストがあれば吹くけどどう？」

「いいの？じゃあ、ドリカムのやさしいキスをして、で」

「また古い曲を」

確かS M A Pの中居君の出たドラマ「砂の器」の主題歌だ。確かに笛の音色が印象的な綺麗な曲だった。それに短いため、こういうった場面では丁度良いかもしれない。なかなか選曲だ。

私は頭の中でメロディーを思い出して幾つかポイントごとの音を試すとおおよその楽譜は掴めた。私には絶対音感などないが、相対的

に音を掴む勘はそれなりに働くのだ。

「じゃあいくよ」

私は頭の中に描いたできたての楽譜に身を任せハーモニカを吹いた。

驚いた事に、穹は聴くだけでなく歌い出した。私は思わず演奏が乱れそうになったが、次第に彼女の歌に併せることが楽しくなってくるのを感じた。

不思議な感覚だった。人に聴かせることは偶にはあった。一人で演奏は数え切れない程した。そのどれも違い、誰かと一つの曲を紡ぐことは、力強かった。一人では出せないところまで音楽が広がり、ワクワクした。その高揚感が新鮮で癖になりそうだった。

「穹って歌上手いんだね」

約3分程の演奏の時間はあつという間に過ぎてしまった。その3分は私が今までに感じなかった世界に足を踏み入れた瞬間だった。

「それほどでもあるかな？」

私の素直な感想に穹は照れたように笑っていた。

わざわざ今日こんな夢を見るなんて皮肉にも程がある。というのも、今日は私がみんなに告白してから初の登校日だからだ。

きつと今までのような関係は望めない。今朝の夢に見たこととは対極にある、希望のない日々の始まりだ。

それでもみんなと顔を合わせることが考えると胃が痛い。きつと不登校だった頃の善子ちゃんはこんな気分だったのだろう。けれど、私は休む訳にはいかない。彼女達に私のことで頭を悩ませるようなことはさせたくない。

それに私は変わらなければならぬ。今回告白したのだからためでもあるのだから。

「おはよ」

自分の教室に着くと既に登校していた善子ちゃんが不機嫌そうに

私に声を掛けてきた。

「おはよう」

何時もならばこのまま雑談に興じているところだが、今までどのように話題を見つけていたのか不思議なくらい何を話せばいいのかわからなかった。私は数秒立ち尽くすと、思わず善子ちゃんから目を逸らしてしまった。

「星ちゃん」

「ごめん。図書委員の代理は続けるから心配しないで」

心配そうにする花丸ちゃんやルビィちゃんにそれだけ言うのが精一杯だった。私はその後逃げるように自席に着いた。

幸いにして時間ギリギリに登校したため、直ぐに担任が教室に来たため、これ以上の追求はなかった。

これではいけない。それが分かっているが、どうすればいいのかわからない。

正しくありたい。同じ過ちは犯さない。自分を偽らない。そうすればきつと次の道が見つかる、そう思っていた。だけれども、実際はどうだろうか？これが次へと進んだことになるのだろうか？

わからない。何が分からないのか分からないが、このままではいけないという焦燥感だけは本物であるという確信がある。

私は授業が始まってからも授業そっちのけでずっと考え続けた。間違えることは出来ない。それは誰かを傷付けるから。だからせめて考えて考えて考え抜いて結論を出さなければならない。私はどうしたいのかと。何が正しいのかと。

私がみんなに話したのは偽りの無い本当の私の姿を見せるためだ。それは何故か？それは正しい付き合いをしたいからだ。

そう、彼女達との関係を求めているからだ。だが、今朝の私の態度はそれとは真反対だ。寧ろ避けてすらいる。

何がいけない？何故そんなことを？ぐるぐるグルグルと思考の坩堝にハマる私は結局、今日は誰とも話す事無く放課後を迎えることになった。

ふらりと義務感的に図書室に足を運び、受付の椅子に腰を掛けてか

らも考え続けた。

ふと引き出しを開いたときにスクールアイドルの雑誌が目についた。それは五周年特集でμ'sが取り上げられていた。

確かこの雑誌は花丸ちゃんが持っていたものだ。

ペラペラとページを捲っていくと、個別のインタビュページがあった。

確か花丸ちゃんは星空凛推しだった。

天真爛漫の星空凛はコンプレックスがあったそうだ。それは女の子らしくないという思い込みから来ていることだったが、小泉花陽をはじめとしたμ'sの仲間のお陰でコンプレックスを解消したらしい。

他のメンバーもそれぞれ悩みを抱えていたようだが、お互いがお互いをフォローして克服しているようだ。

羨ましいと思う。ただし、私には今頼れる人がいない。いや、いけない。これは私の問題なのだ、と雑誌を閉じて受付の引き出しにしまった。みんなから心を閉ざしてしまうかのように。

第五十七話

この日は終業式だった。茹だるような体育館での固い挨拶を乗り越え、帰りのホームルームが終わると、クラスメートは今年の夏休みの予定を話したと賑やかに騒いでいた。私もその輪に加わり

幾つかの約束を交わした。ただその約束の中に、ルビィちゃんや花丸ちゃん、善子ちゃんと交わしたものはなかった。

私は未だどのように彼女らと接すればいいのか考えが纏まっていないのだ。

去年の夏休みは受験勉強と練習で毎日のように何かしらしていた。対して今年は大した予定はない。クラスメートと遊ぶ約束を少ししただけだ。

去年は高校生になれば幅の広がった音楽活動で大忙しな夏休みになるだろうかと予想していた。いや、それを夢想していたというのが正しいか。

私はクラスメートに別れを告げると代行している図書委員の仕事のため図書室に向かった。

今年は暇だ。暇だが、今度行われる沼津の花火大会だけはクラスメートからの誘いを断った。この花火大会にはA q o u r s がパフォーマンスで参加する予定となっているからだ。気持ちが纏まらない今、どんな顔をして見に行けばよいのか分からない。

私は図書室に付くと扇風機を回し受付の椅子に座り、暇つぶしに本を開く。今日は藤真千歳のスワロウテイルシリーズ一先ずの最終作「初夜の果実を接ぐもの」だ。

スワロウテイルというと岩井俊二の映画作品を思い浮かべるかもしれないが、この作品は全くの別物。(主人公の名前が同じことからインスピレーションを受けたり、リスペクトしているのだろうか)

デイストピアという程の閉塞感はない。男女が共生できない環境の架け橋となる人工生命体、第三の性として人工妖精が共にいるからだ。だから決められたルールの中比較的好きに行動しているのがこの作品の登場人物達だ。だが、彼ら彼女らが抗うのはルールでは無く

未来だ。

人は誰しもが大なり小なり未来のために生きている。だが、誰かの未来のために、それも自分の関与しない名も無き誰かのためには動けない。倫理観とか道徳とかではなく、無理なものは無理なのだ。しかし、この作品の主人公は人ではない。人工妖精（人と寄り添うもの）だからそんな道理を飛び越していく。勿論悩みもするけれど、それでも知っている誰かのため、見知らぬ誰かのため歩みを止めない姿に私は感動したのだ。

今一度読み返し、私は彼女らの決断や勇気を学びたかった。だから今日はこの本なのだ。

私は儂げな妖精の表紙を開こうとしたところで、図書室に向かってくる足音が聞こえた。普段ならばなんてことないただの足音。だが、今日は何故だか妙に気になった。

私は本をバッグにしまうと、背筋を伸ばして来客に備えた。無意識に誰かが来るという予感に体が反応したのだ。

「シャイニーツ」

「図書室はお静かにお願いします」

「この学園では私がルールよ」

「ただの暴君じゃないですか」

姿を見せたのは鞠莉学園長だった。彼女は相変わらずのハイテンションで図書室に飛び込んできた。

鞠莉学園長が関わりとこれまでお遣いを頼まれたり、ライブに強制参加させられたりと面倒なことを関わらされた印象が強いため、思わず警戒してしまう。

「何のご用で？本を読むようなキャラじゃないと思いますけど」

「オフコース、ん？ちよつと失礼じゃないそれは。まあいいわ。それより今日は貴方をお願いします」

「それ、本当にお願いですか？」

「お願いよ。ただ断ったらペナルティーがあるだけ」

「人それを強制と呼ぶんですが、まあ取り合えず聴きますよ」

「花火大会の手伝いをお願いしたいの。勿論曲作りとか、衣装とか

じやなくて舞台とか、運営との調整とかの方だけだ」

ある意味案の定だった。だが、どうしてだろうか？私の過去を聴いてなお、私を使おうとするのは。

「そういうの得意でしょ？」

あくまでも能力で依頼しているのだろう。そうでなければ今の私には彼女達との関わり方が分からない。ビジネスライクにいくというのならばやれる気がする。

「わかりました。お受けします」

「オーケー。なら行きましょう」

「図書室はどうします？」

「一段落着くまでセルフで。学園長命令よ」

有無を言わさぬ物言いに私は扇風機のスイッチを切り、バッグを持つことで答えた。今日の図書室の営業はお終いだ。

「じゃあ鍵を職員室に戻したら部室に来ること」

鞠莉学園長と一緒に図書室を出ると、鞠莉学園長は一足先にスクールアイドル部の部室に向かった。

私は鞠莉学園長とのやり取りに思いを馳せた。

何故だろう？教室で善子ちゃんや花丸ちゃん、ルビィちゃんとは上手く話すことが出来なかった。考えて考えてもだ。だがどうだろうか？私は鞠莉学園長とは普通に話せていた気がする。それは私にとっての唯一の解決の糸口だ。

私は鞠莉学園長に感謝しつつ職員室に図書室の鍵を返し、スクールアイドル部の部室に向かった。

昨日の今日で以前のように接することはできないと思う。それでも私はここから再スタートをしようと思う。願わくばもう一度彼女達の傍らに居られたらと本心からそう思う。

第五十八話

花火大会までそれ程の日数はない。だから花火大会の運営との調整に時間を割くよりも練習を優先したい。今回私に依頼があつた背景にはそんな狙いがあるのだろうと思う。

三年生の加入自体は喜ばしいことだが、突然メンバーが増えたことで歌のパートもダンスの振付も変わったのだろうから、パフォーマンスの構成はほぼ一から作り直しなのだ。

「ステージの下見ができるよう交渉はします。他に要望はありませんか？」

スクールアイドル部の部室に入った私は曰く言いがたい空気の中、不思議と必要なことは平然と話すことができた。

なんて恥知らずだろうとも思うが、やはり私は彼女達と居ることが好きなようで、後ろめたさとは裏腹にやる気が湧いている。

みんなも最初は驚いていたが、打ち合わせを進めていく内に次第に意見を言うようになってくれた。

「ステージの大きさだけでも分かったら連絡頂戴。その幅で区画すれば本番の広さに近い練習ができるから」

「わかりました。じゃあアポ取りして、運が良ければこれから運営に挨拶に行つてきます」

私は地元でも有力者の家系であるダイヤさんと鞠莉学園長から名刺と花火大会の運営委員会の名簿を預かり、部室から出て行こうとした。

「あの・・・いえ、行つてきます」

私は何かを言いたかったが、事務的な会話以外となるとトンと言葉が浮かばなかった。頑張ってくださいとか頑張りますとかすら言えなかった。

「星ちゃん」

私はとぼとぼと部室から出ると、私を追い掛けて梨子先輩が部室から出てきて一言。

「行つてらっしゃい」

何てことのない一言だが、その飾らない言葉がありがたかった。行つてきます。行つてらっしゃい。なんて、極々普通で、日常的で、そして今の私には遠い言葉だった。

「星ちゃん」

「千歌先輩も。どうしたんですか?」

「今はまだだめかも知れないけど、今度また話しの続きを聴かせて」
「話しの、続き・・・?」

千歌先輩は何を言っているのだろうか? おかしい。私は確かにみんなに自らの行いを、その過ちを告白した。それ以上に話すことなどない筈だ。

「わからない?」

「よく思い出さずら」

曜先輩と花丸ちゃんもまた部室から顔を出す。

「貴方の告白は確かにこの墮天使たるヨハネに届いた」

「貴方の覚悟はみんなが感じていますわ」

墮天使モードの善子ちゃんとダイヤさんもまた続いた。

「でもよく思い出して」

「肝心なことが抜けてるの」

果南さんとルビィちゃんが謎かけをする。

「それを星ちゃん自身で気付いて」

「貴方の口から聴きたいの」

梨子先輩と鞠莉学園長がそう締める。

私が見落としていると、そう言っているのだ。だが、一体何を?

「焦らなくていいよ。私達は待つてるから。さあみんな、屋上で練習開始っ」

「千歌さん。校内は駆け足禁止って、鞠莉さんもっ」

千歌先輩は羽の様に軽い足取りで小走りに廊下を駆け、屋上へと向かう。それに続きみんなもまたそれぞれのペースで続いた。

みんな共通しているのはすれ違いざまに私の肩や尻を叩いていったことだ。まるで気合いを入れる、気持ちを切り替えろと言わんばかりに。

私は呆然とみんなの背中を見送った。いつの間にか見送られる側から見送る側になっていたが、本当に彼女達はほとんど前に進んでいく。あつという間に背中が見えなくなるほどに。それはなんだか嫌だな、と思い早く彼女達から言われた事を理解しなければという焦燥に駆られる。

何を見落としているのだろうか？私はなるべく客観的に事実を伝えただ筈だ。確かに細かいことは言っていないが、大筋は読み取れるように伝えたのだ。それ以上にみんなは何を聞いていないのか？

私は悶々と頭を抱えながら職員室に行き、電話を借りて花火大会の運営委員会に連絡した。職員室の電話を使用したのはスクールアイドルが学校の公認のもと行われている課外活動であるためだ。また、見慣れない番号よりも過去にやりとりをしたことのある番号からの方が？がりやすいだろうという狙いもある。

幸い連絡は一発で繋がりが、このまま町役場まで足を運べば担当者が会ってくれることとなった。

やることのある時は気が紛れるから良い。だが、気紛れのために手伝う訳では無い。より彼女達が輝けるようにしたいからだ。

私は職員室に残る先生達に別れを告げて学校を後にする。

校舎から出ると、屋上から小刻みなステップを刻んでいるであろうカウン트가聞こえてくる。決してゼロを踏まないカウンタだか、私はいつゼロと宣言されるか分からない。

嫌な想像にこの猛暑にも関わらず冷や汗か背中を濡らす、私は頭を振って想像を掻き消す。

彼女は待つと言っていた。それは少なからず信用されている部分はまだあるということだ。

親友とも呼べる人を裏切ったと知って尚、私に対しそう言う言葉を掛けてくれることに私は心底から彼女達に頭が上がらない気持ちになった。

その気持ちを私は私にできることで返すしかない。現状彼女達から言われた事に思い至れない以上は成果主義しかない。

私は今日の打ち合わせに向けて作られていた書類を委員会の名簿

のバインダーから取り出して読み直す。

まだまだ出演時間すら未定だが、一つだけ確定条件としてあることは決まっていた。それはA q o u r sが披露する曲のタイトルだ。

披露するのは製作したばかりの新曲「未熟DREAMER」とのことだ。

第五十九話

花火大会において舞台でのパフォーマンスは前座であり、客寄せ以上のものではない。言い方は悪いがそれが事実だ。

舞台でのパフォーマンスも時間一杯Aqoursの曲を披露できる訳では無く、盆踊りをしたりと地域の活動の補助の側面がある。

今をときめく高校生、それもスクールアイドル活動をする華やかな学生が地域の活動をしている姿を見せることで若年層を呼び込む狙いだ。年々、地域の活動から若者が離れている現状がある今、深刻な問題として大人達は捉えている。

私達は舞台をただで借りる手前協力できることは協力しなければならぬだろう。

私はそんな現状を運営委員会の担当者から訴えられた。Aqoursが自分達の活動に本気なように運営委員会もまたこの花火大会を成功させようと本気なのだ。

私は舞台でのパフォーマンス以外の部分において、会場で流れるBGMにAqoursの曲を混ぜて欲しいと要望したところ、BGMについては花火大会のスポンサーCM以外は比較的自由にしているとのこと、3種類ほどルーチンに混ぜてくれることとなった。

翌日、私はその話しを持ち帰り、屋上に実際のステージの広さを目張りしながらみんなに話した。

「自由に使える持ち時間は10分つてところですかね」

「グループ紹介と併せてぎりぎり二曲つてところだね」

「未熟DREAMERは確定なんですよ？もう一曲どうします？」

みんなはあれこれと頭を悩ませているが、ほぼ一択しか選択肢は無い気がする。それは「夢で夜空を照らしたい」だ。

初期の「ダイスキだったらダイジョウブ」や「決めたよHand in Hand」は三人でパフォーマンスを行っていたため、見直すのはこれまた一からとなってしまふ。あくまでも比較した場合の程度の問題だが、六人で披露した「夢で夜空を照らしたい」の方が構成を直しやすい。

「ねえ、星」

「やりませんよ」

私は鞠莉学園長から皆まで聞く前に拒否した。どうせ私に舞台に立てとでも言うのだろう。幼稚園での時のように。

「そうじゃないわ。貴方にまた交渉に行つて欲しいの」

「何の交渉ですか？」

「沼津の吹奏楽部のある高校に生演奏の依頼を」

鞠莉学園長の提案に私は難色を示さざるを得なかった。それもそうだ。基本的にカラオケに併せて歌つて躍る方式でのパフォーマンスをしていたのが急に生演奏で行いたいなど冒険し過ぎである。

「運営の意を汲むならより多くの学生を関わらせたいし、他の学校にも私達のことを知つてもらおうチャンスよ」

「一理ありますが、みなさんはいいんですか？」

こんな思いつきのような意見を取り入れて良いのか私には判断が付かない。この人はまた一人で突っ走っているのではないだろうか？

「いいと思うよ、それ」

「みんなでお祭り騒ぎずら」

千歌先輩が肯定的なのは想定していたが、予想外にも他のメンバーも好意的な反応だったのは驚きだ。

「分かりました。交渉しますが、そのためにも曲は早く決めていただいていますか？運営にも話しをつけないければなりませんし、生演奏を依頼するにも楽譜がないと。他にもやることは山積みですよ。BGMで流す曲も九人で取り直さないといけないんですから。それに上手く生演奏の依頼を受けて貰えるとして、現地に指導に行かなければならないんですよ。のんびりしている暇はありません」

「あわわ。星ちゃんが鬼プロデューサーに」

「文句なら私を引き込んだ鞠莉学園長に」

改めて自分で言っておいてなんだが、やることが多過ぎる。これを実現できるかは私の働き次第だ。

「では、私は先ずは沼津市内の学校で吹奏楽部があるところを調べて

取り敢えずのアタックを掛けます。終わったらまた来ますのでそれまでに披露するもう一曲を決めてください」

「あ、その前に未熟DREAMERの通し練習見てかない？イメージがあつた方が説明しやすいと思うんだけど」

私は屋上から引き上げようとして果南さんに捕まった。確かに彼女の言うことには一理あるので断るに断れず、私は彼女達の練習を見ることとなった。

具体的な広さが設定された練習は今回か初のため、歌はなく曲を流しての動きの確認だったが私にとっては初めて曲を聴く機会とやった。

曲を聴き、私はやることのハードルが上がったことに頭痛がした。使われる楽器が吹奏楽部が扱うものとは些かジャンルが違うのだ。楽器をやつてる人は一つだけではなく他の楽器にも手を出す人が少なからずいるため、吹奏楽部にエレキギターを扱える人を探さなければならぬ。そして、冒頭には琴のパートがあるため、その手配しなければならぬ。幸い琴は公立中学などに時偶あるので何とかなるだろう。冒頭だけなので練習すれば誰でもいける筈だ。

ハードルが余計上がったのはあれだが、この段階で知れたのは助かった。後になってからでは取り返しが付かないところだった。

「ありがとうございます。凄く参考になりました」

「こつちが無理なお願いをしているのですから」

「ではまた後で。さつき言ったこと、忘れないでくださいね」

私はそそくさと屋上を出る。

今日は一切プライベートな内容の会話が無かつたため自然に話せた。だが、それでも一人になると気が抜けるということは彼女達と関わることに気を張っている証拠だ。昨日、花火大会の運営委員会の人と会つてからも、みんなに対しての説明で足りないところを考えたが、結局思い付かなかつた。この活動を通じて何か思い付くか分からないが、やるしかない。今はそんな気持ちで一杯一杯だった。

第六十話

沼津市内の学校との交渉は難航した。夏は吹奏楽のコンクールがあるためどこの学校もそれに向けて最後の追い込みをしているところなのだ。突然オフアールされても対応できないのは致し方ない。だが、幸いにしてというかなんというか、コンクールに出るほどに人数が揃わない学校があり、そこが引き受けてくれることとなった。

披露するもう一曲も予想通り「夢で夜空を照らしたい」になり、運営委員会からも今回の件は許可を貰った。寧ろ参加する学生が増えたことを喜んでいた。

私は今日、協力してくれることとなった吹奏楽部に音源と楽譜を持って挨拶に来ていた。

「今回はこちらの無理な申し出をお受けして頂いてありがとうございます」

「ありがとうございますこっちの台詞。この子達は練習してもそれを披露する場が少ないから、こういう機会は願ったり叶ったりよ」

吹奏楽部の顧問の木皿先生は若くて気さくな女性だった。

木皿先生に案内されて音楽室に通されると、そこには10名程度の部員が練習をしていた。

「見ての通り、うちも生徒数が減っててね。部活を回すだけでも精一杯なのが現状」

「でも、みんな楽しそうに演奏してますね」

木皿先生は自虐的なことを言うが、部室は成績を出したり活躍するだけが意義ではないと思っている。だから今ここにいる吹奏楽部員達が生き生きと演奏する姿は羨ましささえ感じる。

「ええ楽しそう。だけどちよつと一部走りすぎね」

木皿先生はバイオリンを演奏する生徒に目配せしてハンドサインをすると、バイオリンのリズムと音量に僅かな変化があり、全体のバランスが良くなった。

「凄いですね。先生は指揮の経験が？」

「そんな大層な経験は無いわよ。ただそれなりに楽器は触ったかな。」

最近はもっぱらコレよ」

と先生はギターを格好良く弾くポーズをした。私はそれを見て吹奏楽部員が楽しくやれている理由をなんとなく察した。この先生自身もまた、現役で音楽が好きで新しいことに挑戦し続けているからこそ、その楽しさを上手く伝えられているのだろう。

「星ちゃんはスクールアイドルなんだっけ？」

「私は違いますよ」

「でも音楽は好き」

「違いありません」

シンプルな問答が気持ち良く、私は笑って返答した。先生は私の回答に口を大きく開けて気持ちいい笑顔を見せてくれた。

「じゃあ、早速楽譜を見せて。それで演奏してみるからアドバイス頂戴」

「え、あのっ、私は」

「いいから。ここは遠慮する場所じゃないから」

私は音楽活動を自粛しているとは言えなかった。それを言えば木皿先生なら何故と必ず聞いてくると思ったから。

私は流されるまま楽譜を取り出すと、二曲分、各パートの楽譜を各部員に配った。

「あと、申し訳無いのですが、誰かエレキギター出来る人いますか？二曲目の未熟DREAMERは結構エレキギターが主体なんです」

エレキバイオリンでも代用は可能ではあるが、なるべく制作者の意向に近いものにしたいため一応の確認だ。

「残念だけど。エレキギターできるの私しかないのよね。良ければ私やるけど？」

「お願いできますか？」

がつてん、と木皿先生は力強く頷いた。先生の参加もまたイレギュラーと言えばイレギュラーだが、先生もまだ20代。まだイケるだろう。

「今失礼なこと考えなかった？」

「いえ。あと、和琴って学校で扱ったりしてませんか？本当にごく一

部で使うのですが」

「流石に取り扱ってないわね、それは」

「分かりました。取り合えずその部分は録音した音源で代用しましょう」

ラジカセを借りてCDを一度通しで流す。すると各々の部員は曲を聴いてエアで指を動かしたりリズムを刻んだりと、体に染みこませようとしていた。規模が小さいとは言え流石は吹奏楽部員だ。

「じゃあ早速練習していきましようか」

木皿先生の音頭で各々自分のパートの楽譜を見ながら音出しをしていく。

「私も練習するから、気になったところあったら教えて」

木皿先生は音楽室に併設された倉庫からエレキギターを取り出して練習を開始した。この際、学校に私物の楽器を持ち込んでいることは置いておこう。

「アドバイスって言われても現段階で言えることは一つしかないです。いいステージになるよう頑張りましょう」

「最初はそんなんでいいの」

木皿先生は私の言葉を皮切りに部員に発破を掛け、自身もまたギターを派手にならして場を盛り上げる。

本当にこの部活は部員数とは裏腹に活気がある。経緯こそ他の学校が駄目だったからというものだったが、私はここに依頼をしたことが正解であったと素直に思う。

「ではまた後日来ます」

今日のところは木皿先生に練習を任せ、私は学校を後にした。

学校を去っても私はまだ吹奏楽部の印象が拭えなかった。彼女達もまたスクールアイドル部のみならず同じだ。好きを素直に好きであり続けている。その姿が眩しかった。

私は彼女達の輝きをより活かせるようにとステージの配置を考えなければならぬ。また、和琴についても手配をしなければならぬ。

私は唯一、手配のつきそうな相手に電話を掛けた。

「もしもしダイヤさん。黒松です」

「お疲れ様です。どうですか、手配の方は？」

「なんとかなりそうです。でもやっぱり琴だけは駄目ですね。ダイヤさんからお借りするしかなさそうです」

かねてから和琴に関しては調整不可の可能性が高いと予想されていたため、手配がつかない場合は自宅に琴があり自身もまた嗜んでいるダイヤさんに借りるといふ最終手段を取ると調整していたのだ。

「そうですか。でも、おいそれと持ち運びするものでもないですし、演奏を担当される方は慎重に選んでいただきたいのですが」

「まだ人選はしてないです」

「もしよろしければ黒松さんが。いえ、それは今言うことではありませんね。ではまた」

ダイヤさんの言おうとしたことは容易に想像がつく。だけど私はそれをダイヤさんから確かめることはしなかった。

私が琴を、楽器を弾くことはない。それはダイヤさんも分かっているからこそ言葉にしなかつたのだろうから。

第六十一話

調整事項は順調に進んでいる。吹奏楽部とA q o u r sの舞台配置も決まった。ただ、琴を弾く担当がまだ決まらないことと、演者の質がまだ追いついていなかった。

私は今日もまた吹奏楽部にお邪魔していた。

「もう楽譜を覚えたんですか？早いですね」

「原曲がすでにあるから、頭で音を覚えれば後は体で覚えるだけだしね。一度通すから聴いてよ」

驚きだった。たった数日で二曲を覚えるなどと。確かに個人レベルなら覚えられる人も居るだろう。だが、部員全員は流石に無理だ。習熟度には個人差があるのだから、普通は覚えが遅い人もでてくるものだ。

「ああ、ほら、ここって部員数少ないからあんま個人差ないのよね。でもって誤魔化しも聞きにくいから皆覚えるのだけは早いのに」

私が口をパクパクとさせていると木皿先生がなんてことないかのようにさらりと教えてくれた。

「でも、みんなまだまだ実践レベルではないのは聴いて分かったでしょ」

それはそうだ。流石にそこまでできたら指揮者泣かせにも程がある。冷静に聴けば確かにみんな音のバランスが取れていない。それに覚えたとはいえ大筋は、だ。まだまだ音を外しているところもあるし、人前で披露するレベルではない。

「それでも現段階でこれだけできれば練習が捗りそうですね」

「そうですね。よし、じゃあもう一度」

「夢で夜空を照らしたい」は木皿先生が指揮し、「未熟DREAMER」は私が今度は指揮をした。指揮とは言っても手を振ったりはしてない。ほとんどメトロノーム代わりだ。

最初に聴いた時に気になった箇所をハンドサインで修正し音量のバランスを整える。方向性さえ分かかって貰えればあとはまた体で覚えるだけだ。

個人で間違えた箇所は修正されていたり、別の場所を間違えたりとまだまだうる覚えの様子だが、こればかりは個人練習でなんとかしてもらえない。

私も指揮は素人だから方向性を示す以外のことはできないが、今はその方向性を理解してもらおうところからだ。

しかし、こうして吹奏楽部に混ざって作品を完成させようと動いているのは不思議な感覚だった。かつて憧れ、挫け、ついこないだケジメの第一段階をつけたところでこうして私の元に転がり込んできた。奇縁、としか言い様がない。

楽しい。ただ後ろめたさが常に付きまとう。だから必要以上には練習に踏み込まない。そのケジメだけは守る。

「そういえばこないだ言ってた琴。手配はついた？」

「物は借りれそうです。ただ、弾き手がまだ」

「星ちゃんが弾けばいいじゃない？楽器の嗜みあるんでしょ？偶には別の楽器をやるのも乙なものよ？」

やはりというべきか、同類には私が楽器をやっていることはお見通しのようなだ。今更それには驚かない。

「ちよつとあって、私今はもう音楽はやらないことにしてるんです」

この人はこと音楽については半端な理由でやらないと言えばごりごりと勧めてくるだろう。私は皆までは言えはしないが白状することにした。

「ふーん。まあ、無理強いをするつもりは無いけど、一ついい？」

「何ですか？」

「音楽をやらないのは義務感から？それとも本心から？」

その問い掛けに私は言葉が詰まった。本心なんて言うまでも無い。ただどそれを口にする訳にはいかないし、例え義務感から生じた「やらない」という気持ちであってもそれは偽物とは言えない。

「必ずしも答える必要は無いけど、星ちゃんのお友達はそれを知ってるの？余計なお世話かもしれないけど、本心を伝えられないとすれ違いう元になるわよ」

つい最近、誰かに対して思ったことがそのまま自分に返ってきた。

だけど私はもう、すでにみんなに過去を語っている。

「あつ」

そう、過去は語っている。けれど、私は事実を客観的に述べるだけで肝心の事が伝えられていなかった。

私がどんな想いを抱いていて、どんな風に思い、どう感じたのか。それを今、どう思っているのか全く話せていない。

私は馬鹿だ。一番大切なことを話せていないではないか。みんなが言っていたことはこのことだったのだ。それに今更気付くなんてつくづく救えない。

「あの」

「いいわよ。大体の方向性は掴めたから」

木皿先生は私の言葉を聞くまでもなく背中を押してくれた。

私は全力で頭を下げると音楽室から駆けだした。

引越すと知った時、私は怖かった。夢を語った親友と離れることが、友情が壊れるかもしれないことが。

引越すことを黙っていた時、引越さなくても済むかもしれないと自分自身を偽り微かな安堵を得たこと。そしてそれが全く中身の無いことで、ただ親友を騙しているだけであるという罪悪感を感じたこと。それでも尚、微かな希望に縋り付き、あがき、そして絶望したこと。親友と離れることが悲しくて、認めたくなくて本当のことを言えなかったこと。そして、離ればなれになって悲しくて寂しくて、音楽だけが慰めだったこと。みんなに出会って楽しくて、その分親友を想うと苦しかったこと。過去を話すことでみんなに嫌われるかもしれないことが怖かったこと。全てを知って貰った上でそれでもみんなと共に居たいと思ったこと。それを全て話そう。

私は一刻も早くみんなに会いたくて全力で走った。

第六十二話

夏の太陽は高く、夕方になってもなお燦々と輝き地表をジリジリと焼いていた。そんな中であって、太陽に負けない輝きを放とうとみんなが練習に勤しんでいた。

練習着は汗で濡れ、顔も暑さで赤く染まっていた。

私が屋上に姿を現すと、みんな気付いた様子で一瞬こちらを見詰めたが、練習を止めることはしなかった。それだけみんな真剣に取り組んでいるのだ。

「じゃあ少しコーヒープレイクにしましょ」

私に気を遣ったのか、切りの良いところで鞠莉学園長が相変わらずネイティブな発音で休憩を提案した。

「星からも話があるみたいだし、ね」

ありがたいことに鞠莉学園長は悪戯っぽくウインクして私に話を振ってくれた。みんなもまた言うまでも無い、という顔をして私を見つめた。

「皆さんに言われたこと、あの後ずっと頭の中から離れなかったんですが、ようやく気付くことができました」

みんな本音を言えば今すぐにも楽な姿勢になり、呼吸を整え水分補給をしたいであろうが、私の言葉を真つ直ぐに受け止めようと態度で示してくれる。

こんな馬鹿で世話の掛かる私に対しこんなにも親身になってくれることに本当に申し訳なく思う。

「私は自分のことを話したつもりで全然話せていなかったんですね」

「そうだね。確かに星ちゃんは事実を言っていたんだと思う。でも、それは単なる事実でしかなかった。それでは歴史の教科書を読んでいるのと同じすら」

歴史の教科書とは実に読書家の花丸ちゃんらしい表現的を得ていると思う。

「聴かせてくれるのですね」

「ダイヤ。ここで立ち話で聴くことではないでしょ。みんなも」

「じゃあ部室に一度戻ろうか」

食い気味なダイヤさんを窘めて鞠莉学園長と千歌先輩が先導してみんな部室に向かいはじめる。

「ほら、星も行くよ」

「はい」

ぼうっと立ち尽くす私は果南さんに促されてみんなの背中を追い掛けて部室に向かう。

こないだ告白した日に見た背中と寸分の狂いも無く同じ背中だが、今は少し印象が違って見える。あの時は恐ろしさや悲しみが先行していたから今とは心の持ちようがかなり違うし当たり前と言えれば当たり前とかもしれない。

前は遙か先にあるように感じた背中が今は少しだけ近くに感じた。

部室に着くともはやみんな自分の定位置が決まっているだろう。迷うこと無く着席して私が話しをするのを待った。

「私は自分の過去の失敗を正確に伝えようと思ってきました。でも、そこには私の気持ちが入ってなかった」

「星ちゃんのこととは事実を客観的に見ても良いこととは言えない。寧ろ悪いことだと思う。だからこそ、私達は星ちゃんがどんな気持ちだったのか知りたいんだ」

「一緒に音楽を楽しんだ星ちゃんが時々さみしそうな顔をしていたのを知ってる。その答えがそこにあるんでしょう？」

本当にこの人達はよく人のことを見ている。だが、ここで涙を流してはいけない。それでは話にならない。私はこの奇跡のような人格者達を前にこみ上げて来るものをぐっと堪えて話しをする。

「私は結局臆病で現実逃避していたんです。別れる結末を認めたくなくて、安易な誤魔化しで安心感を得て。そんな自分勝手なことばかりで私はこれっぽっちも相手の気持ちを考えてませんでした。もちろん未来を変えようと抗いましたが、それも結局は無駄に終わりました。そこで正直に告白すれば良かったのに、怖くて言えなくて。そのまま皆まで言わずに相方と別れました」

私の話は脈絡に欠けていたと思う。それでもみんなは私の本音を汲み取って聴いてくれた。

「今はどう思ってるの?」

「後悔しかありません。あの時穹に、相方に本当の事を話していれば彼女を混乱させることも傷つけることも無かったと思います」

時を巻き戻せるなら間違いなく戻したい案件だ。だが、歴史にタラレバはない。動き続ける時間を少しでもマシな物にするには今から逃げてはいけない。それを気付かせてくれたのはみんなだ。

相方との別れを経て、まさかこんな風に仲良くなりたいと思う人達に巡り会うこととなるとは思って無かった。けど、みんなを大切だと思っただからこそ、私は今、事実と向き合えるようになった。

「その穹って子には最後まで何も話してないんだ?」

「はい。今でも引越しの当日に、何で話してくれないのって言われた事が耳にこびり付いています」

改めて話してみても本当に私は救いようがない。けれどもそれを全て知りたいとみんなは言ってくれた。だから私はそれに少しでも報いたかった。それが今の私に出来る最大限の誠意だ。

「沼津に来てからずっと苦しかったと思う。誰にも相談していないんでしょ?」

「はい」

「なら私が敢えて言うよ。星ちゃんは最低だよ」

「ちよ、千歌ちゃん!」

「何も分からないままある日突然親友が引越しちゃうんだよ?そんなのって無いよ。ホント最低。馬鹿だよ。星ちゃんは大馬鹿だよ」

そう捲し立てて千歌先輩は私を抱きしめて号泣した。

ああ、本当にこの人には敵わない。私はそんな資格など無いのに気付けば涙を流していた。

ずっと苦しかった。誰にも言えず、誰からも指摘されないことが。私は誰かに正して欲しかった。お前は悪い奴なのだ。ずっとそう思っていた。それを千歌先輩は真っ直ぐな言葉をぶつけてくれた。

「ごめんなさい」

嗚咽と共に漏れた言葉は本来千歌先輩に言うべき言葉ではない。
それでも今は千歌先輩の胸を借りて言いたかった。

第六十三話

花火大会当日。幸いなことに天候は晴天。その上微かに風もあるため花火日和と言えよう。

対岸に見えるステージは今は無人だが、あと数時間もすればスクールアイドルと奏者が彩る華美な舞台に様変わりする。

最後のリハーサルを終え、各自自由時間となってから私はステージを一望できる場所にやって来た。

ステージは河川敷から縁出すように特設のステージが作られた非常に手の込んだ代物だ。その上で披露されるパフォーマンスをここから見たらどんなに素晴らしいだろうか。私はステージの正面の対岸となるここから見る事ができないことを名残惜しく思う。

「こんなところいたんだ、星」

「鞠莉さん」

私はこの前の一件があつてから彼女を呼ぶときから学園長という役職を外すようにした。流石にあの呼び方は他人行儀に過ぎる。親身になってくれた人にそれは礼儀知らずだろう。

「良いんですか？小原グループの娘として来賓席に顔を出さなくて」

「ノープロブレム。もう済ませたから。それに良いのか、は私の台詞。本当に良いの？」

「はい。琴は私が責任を持って弾かせていただきます」

そう。今日私がステージを見られないのは私自身もまた舞台上上がるからだ。結局弾き手の見つからなかった和琴を私が担当することになったのだ。

「コレは善子ちゃんに言われたんですが、相手に伝わらない誠意は自己満足だつて。だから示さなければならなんだつて。それで考えたんです。やってないことは側に居ないと伝えられない。だからやって伝えなきゃいけないんだつて」

「そうね。まずはコンタクトを取らないとね」

「はい」

他の人からも色々と言われた。それでやっぱり私は私が思った以

上に相手の気持ちを考えられない人なんだと再認識した。

私と同じようにもし穹が音楽を辞めていたら私は嫌だと思う。きつと穹も同じ気持ちを抱くと言われるまで私は思い至らなかった。

だから私はこの花火大会のパフォーマンスを穹に見せる。見せて私はこの沼津に居ること、音楽を好きでい続けていることを伝えるのだ。

「それにしても相変わらず、切っ掛けは強引ですよね」

「あら。何のこと？」

「今回の件もこれまでも最初は強引にイベントをねじ込むけど、その後は自主性に任せて傍観して。最初は何を考えているんだって思ってたけど、何時だってそれが成長に？がってた。鞠莉さんはみんなに何が必要なのか考えていてくれてた」

「褒めても何も出ないわよ」

「そうですね。らしくありませんでしたね」

みんなを見続けていた鞠莉さんはきつと私のことも見ていたのだろう。思えば出会ったときもわざわざ私を探していた様子だったし、私の過去を知っている節もあった。そして、本当に私の嫌がることはしなかった。結果的にだ私が心を整理するのに必要なことを多く経験することになった。花火大会の手伝いの件もそうだ。けど、飄々として素直じゃない鞠莉さんは面と向かってお礼を言われることに素直に喜んでくれないだろう。だから心の中で言わせて貰う。ありがとう、と。

「そうそう、一つ言い忘れてた」

「なんですか？また厄介ごとですか？」

「そうじゃないわ。貴方、今回の花火大会用の衣装に今日初めて袖も通してたじゃない？似合ってたわよ」

自分は面と向かって言われなかったくせに私には平然と鼻の痒くなるようなことを言うのだから卑怯だ。

「あれ、最初から用意してたんですか？」

「答えはノーよ。貴方がやるっていうから用意したのよ」

和服をモチーフとした衣装。前回の幼稚園でのお遊戯会の時と同

じくベージュを基調とした衣装だった。

「今日はいいステージにしましょ」

じゃあまた後で、と手を振って鞠莉さんは立ち去った。

こないだまでは一度別れると次に会えるかどうか自信が無かった。だが、今は違う。私の過去を、本音を、彼女達は受け入れてくれた。

「A q o u r s か。良いグループね」

「木皿先生」

いつの間に居たのか、木皿先生が手すりに河川敷の手摺りにもたれていた。

「走って学校から飛び出した次の日、星ちゃんの顔が凄くすつきりしてたから上手くいったんだとは思ってた。今日リハで初めて彼女達と会って安心した」

「みんな一途で、愚直ですよね」

「気持ちいいくらいにね。いつそ嫉妬しそうだね」

「何言ってるんですか」

「だって、見てよあのステージ」

木皿先生は対岸に見えるステージを強く指を指して言った。

「あそこでパフォーマンスしてけられてオフアーが来るのよ？こんな大舞台、私も経験したこと無いわよ」

「普通はそうですよ」

先生は現役でバンド活動をしているとのこと、ライブハウスでライブ活動をしているようだ。

一般的なバンドだとそこそこ大きな会場となると単独ライブとは中々いかなるのが現実だ。

「今日は楽しんでください」

「感謝してる。家の連中も良い経験になるわ。ホント、最初誘われた時はとんでもない話しを持ってきたと戦々恐々としたのよ？」

「そんな疫病神みたい言わないで下さいよ」

「蓋を開けてみれば疫病神じゃなくて福の神だったけど。また良い話あったら教えて。独り占めは許さないからね」

「私はA q o u r sのメンバーではないんですが、善処しますよ」

約束よ、と木皿先生はグーを作って突き出して来た。私はその突き出された拳に拳を合わせて返した。本当にこの先生は楽しい人だ。

「今回は本当にありがとうございました」

さっぱりした正確の木皿先生でなければ私は自分のことを浅くすら語らなかつただろう。先生だったからこそ私は足りなかつた部分に気付くことができたのだ。

もし中学時代にこんな先生がいたら、と思いその考えを中断した。自分の過ちは誰のせいでもなく私自身のものだ。

私はそれを認め、今日のステージに挑むのだ。

今日という日は幼稚園のお遊戯会での舞台同様、一生忘れることの出来ない日となるだろう。

第六十四話

黄昏時が過ぎ、空は紫から徐々に黒へと移ろい始めていた。

その闇の中にあつて、提灯で照らされた河川敷でも特に異彩を放っているのは今回パフォーマンスをすることになった特設ステージだ。ライトアップされる直前のステージには和をモチーフにした色彩豊かな衣装に身に纏った九人のアイドルと奏者がその時を待っていた。

対岸に目を向けるとそこには花火を見に来た客達が花火が打ち上がる瞬間を今か今かと待ち構えている。誰も彼女達、いや、私達を目当てとして来た人は居ないだろう。それどころか認知すらされていないかもしれない。それでも私達に不安は無かった。前座だろうと、おまけであろうと、こうして素晴らしいステージを用意してくれているのだ。ワクワクしない訳が無い。それに、脇役だろうと主役だろうとゲストを楽しませることに如何ほどの違いがあるだろうか？

「本日は沼津夏祭り、狩野川花火大会にお越し頂きありがとうございます」

花火大会の開始10分前、主催者の挨拶やスポンサーからの応援コメントの紹介などが始まった。

その中にはダイヤさんやルビィちゃんの実家である黒澤家や鞠莉さんの実家である小原グループの名前もあったが、他のスポンサーは頭に入らなかつた。

「緊張してる？」

最初の一曲目「夢で夜空を照らしたい」では私に出番はない。だから舞台上上がるのは二曲目の「未熟DREAMER」からになる。それでも、もう間もなく始まると思うと気分の高揚を抑えきれなくなる。それを見て不安に思ったのか木皿先生が私に声を掛けてくれたのだ。木皿先生もまた二曲目からの出番となるため、私と共に舞台袖に待機しているのだ。

「良い意味で緊張はしています。でもみんなが居るんで大丈夫」

「ホントそれね。こんな大舞台、流石に面の皮が厚い私でも独り占め

できないわ」

「独りじゃ勿体ないですしね」

私達はみんなを眺めながら密かに笑い合った。今は先生と他校の生徒という垣根を越えて、まるで乙女が秘密の話しをするかのよう
に、ささやかな時間が流れた。

「今日は沼津に現れた期待の新星がオープニングを飾ってくれます。
スクールアイドルAqoursが吹奏楽部とともにパフォーマンス
を披露してくれます。それではどうぞ」

いよいよ出番がやって来た。

ステージの背面に設置された大型モニターが点灯し、薄い闇に包ま
れていたステージがライトアップされる。

この日のために練習を重ねた吹奏楽部とスクールアイドルが互
いにアイコンタクトで呼吸を合わせると前奏が開始した。

残念ながら電子ピアノを使用することとなったが、ピアノとハンド
ベルの優しい入りから次第に広がっていく演奏を後押しにAqou
rsが柔らかなダンスで魅せる。

ところどころで人差し指を立てて腕を振る振付はさながら指揮者
のようですらあり、それが吹奏楽部の存在感を損なわせない。今回は
みんなが主役のステージだとそう語り掛けているようだ。

この曲でPVを作った時、みんなが力を貸してくれた。思いを込め
てくれた。人が作った光が空を飾る様は今でも目に焼き付いている。
今日はその光が天灯から花火に変わるわけだが、歌詞に非常にマツ
チしていると思う。

この曲を聴いて、パフォーマンスを見て、どれ程の人が心を揺らす
だろう？

東京の時、その評価は支持者0という結果だった。だが、今は少な
くとも0ではない。そう確信があった。だって私がそうだから。東
京の時になかった感情の揺らぎが私の目頭を熱くさせているから。

「緊張してる？」

木皿先生が私の顔を覗き込んでもう一度同じ問い掛けをした。

「良い意味で緊張してます」

私もまた同じ返答をした。

この感動はあの時よりも積み重なった想いがあるからだろう。否定はしない。

この感動はシチュエーションに支えられたものだろう。それも間違ではない。

だが、歌とはダンスとは、そして音楽とは聴き手の心に注ぐ水だ。想いという種は人それぞれの形があり、その感動の仕方も千差万別。そこに貴賤はない。

「さあ、最高の時間の始まりだよ」

ピアノの前奏が始まり、終わりもまたピアノでしつとりと一曲目が締められる。

私と木皿先生はお互いに無言で頷き合うと、輝くステージへと上がった。

眩しい。凡庸な表現だがまず思ったのはそれだ。

スポットライトでライトアップされたステージは床が白く輝いて見える程に明るかった。だが、それすらも霞むくらい、ステージにいるみんなの表情が良かった。

私は設置された和琴の前に移動してスタンバイした。馴れない楽器、馴れない大舞台。思い返せばホントに限られた小節とはいえ数日でよくもまあ仕込んだものだと思ながら思う。そんな本番前の練習風景を思い出すと自然と笑みがこぼれた。

私は小さく深呼吸をしてみんなを見る。この「未熟DREAMER」という曲は私の琴の音から始まるからだ。

みんなの顔を見てみんなが同じ想いであると、想いが一つであると確信した。今か今かとその時が待ち遠しい。そんな顔をしている。

私は静かに弦に指を添えると体全体を使って弦を弾いた。

弦から弾き出される音が指先から全身を振わせる。心地良い響きに酔いしれる。そして始まった演奏に私は体を委ねた。

舞台の最前列にいる私はみんなのパフォーマンスを目にすることは出来ない。だが、みんなの熱が、舞台を揺らす動きが、空気を振るわす音が振り返らずとも私を染める。「未熟DREAMER」という

曲の一部になっていく。

歌詞に込められた想いが私の過去を鮮明に浮かび上がらせ胸を苦しくさせる。それすらも今は掛け替え無い感動として私を熱くさせた。

どんな事も越えていける。どんなつらい気持ちも輝きに変えられる。そんな力強さが元気をくれる。

そう、答えはここにあったのだ。みんなが教えてくれた、大切な答えが。みんなとなら乗り越えられるという簡単な結論が。

この夜空を通して穹に届け。曲の最後に夜空に咲いた大輪の花を見上げて私はそう願った。

第六十五話

一学期の延長戦のように花火大会の準備をしていたが、花火大会も無事に終わるといよいよ夏休みに入った気分になった。

さて、明日から忙しいぞ、と私は部屋で布を被った楽器達のメンテナンスの順番を考えていた時のことだ。スマホに着信が入り、確認すると学校に集合せよとダイヤさんから召集命令が来た。

「私はスクールアイドル部員じゃありませんよ、と」

私はそうダイヤさんに返事を返す。音楽活動の制限を解除したとはいえ、それはそれである。

返事を返して数秒、スマホをベッドの上に放り投げようとしたところで、今度は電話で着信があった。

「もしもダイヤさん？」

「もしもですわよ。それはそうと、何を連れないことを言っているのですか？別に練習に参加しろとは言っていないでしょうに」

「ならどうして？」

「花火大会の時の映像、いるでしょ？」

今回のパフォーマンスの映像はA q o u r sの活動としてスクールアイドルのランキングにアップさせるとともに、私のかつて活動していたグループ「ジェミニのアカリ」のアカウントで動画サイトに投稿するのだ。私が穹に伝えたいことがあると示すのだ。

「分かりました。学校に行けばいいですか？」

「いいえ。千歌さん家近くの浜辺に海の家があるからそちらに来て下さい」

「何急にパリピみたいな事言ってるんですか？そこは由比ヶ浜ではないですよ」

「誰がパリピです、まったく。兎に角、待ってますからね」

ダイヤさんはそう言っただけで唐突に電話を切った。

内容が余りにも「らしく」ない。ダイヤさんと海はイメージが合わない。もし海が似合う女になりたいならば黒澤パールと改名するべきだ。

私は布を被った楽器達を眺めて溜息を吐いた。どうやらメンテナンスはまた今度になりそうだ。

私は一応水着をタンスの奥から引っ張り出して鞆に詰め込んだ。そして机の引き出しからハーモニカを取り出すとそれもまた鞆に入れて家を出た。

あまり防犯・防災面でよろしくないが、イヤホンを装着して自転車の跨がった。

夏・海ときたのでそれらしいセレクションでウオークマンから音楽を流した。

先ずは反町隆史 with Richie SamboraのForeverだ。これはドラマ「ビーチボーイズ」のタイアップ曲だ。

夏というどうしてもアゲアゲなイメージがあるが、この曲は一夏の思い出が掛け替え無いものに思うことを歌ったバラードだ。夏の大三角が見える夜など雰囲気としてマッチしていると思う。

これをチョイスしたのはこの夏休みを良い思い出にしたいという願いからだ。既にして良い思い出ができたため今のところは幸先が良い。

その他数曲を流している内に浜辺に着くと、寂れた海の家が直ぐに見つかった。隣にはハイカラなオシャレな海の家がある。さて、どちらがダイヤさんの指定したものかと考えてすぐに結論が出た。連絡の時点で詰めが甘いダイヤさんがこんなオシャレオツな海の家に居る筈が無い。

「こんにちわー」

「へいらっしやい、って星ちゃんか。ヨーコソー」

海の家に入ると曜先輩が鉢巻きを巻いて元気良く焼きそばを作っていた。

店内は曜先輩のクラスメート達が数人遊びに来ていたため、それに賑わっていた。

「バイトですか？」

「自治会のお手伝い。それに千歌ちゃん家で合宿も兼ねてるんだよ」

「いいですね、合宿。なんか部活っぽい。そうだ、ダイヤさんから呼び

出されたのですが、ダイヤさんは？」

「食材足りなくなりそうだから買い出しに行ってる」

「呼び出したくせにお出掛けですか」

私は取り合えず一つ、焼きそばを注文をして客席に腰を掛けた。

よくよく見れば曜先輩の背後ではニヤニヤと独り笑みを浮かべる善子ちゃんが黒いたこ焼きを作り、鞠莉さんはブツブツとシヤイニーと呟きながら鍋を混ぜている。うん、見なかったことにしよう。

「みんなが来てくれたお陰で思ったよりも売れてね。というか、当初の予定を低く見積もりすぎたんだけども」

「みんなも手伝っているんですよ？どちらに行かれてるんですか？」

「砂浜で呼び込みしてる。それよりちよつと注文の前に手伝って貰ってもいいかな？」

曜先輩は料理をしているためか額に球の汗を掻いて調理を続けている。他の二人は、いや二人など居ない。まあ、一時的に手伝いが必要なのも頷ける。

「いいですよ」

「はい。言質頂きましたわよ」

不穏な台詞が外から聞こえたかと思うと、ダイヤさんが不敵な笑みを浮かべて入ってきた。

「どういことですか、と曜先輩を見やると彼女は乾いた笑いをして謝った。

「乗せられたってことですか？高くつきますよ」

「撮影データ分、むしろそちらに借金があるのでなくて？」

「やられた、と思いつつも私は仕方なく余っていたエプロンを付けた。

この夏と言えば海とはどこの反町がなんのドラマで言っていたかな、ととぼけてみようとして止めた。きつとネタを知らないだろうか。

いずれにせよこの夏は熱く、忙しく、忘れられない夏休みになりそうだと、腕まくりした。

第六十六話

この内浦の海はメジャーな海水浴場とは言えない。客層はちよつとした家族サービスで来た近郊の住人や、プール代わりに遊びに来た子供とかがメインとなる。

そのため、夜になつても近所の子供なんかは遊んでいたりもしたが、海の家そのものは早めに閉めることにしている。いつまでも開けていると子供の溜まり場になつて夜遊びする子供が増えてしまうという理由から、自治体から閉店時間を決められているのだ。逆に言えば終わる時間が決まっているため、その後のスケジュールが管理しやすい。みんなはそれを利用して地域の活動を手伝いながらスクールアイドル活動をすることに成功している。

私は海の家のを片付けながら、まだ残暑の残る夏の夜空の下で練習に励むみんなの声を聴いていた。

ダイヤさんに嵌められた私は結局成り行きのまま海の家を手伝っていた。

本当ならば自宅に保管している楽器類のメンテナンスやアルバイトをするつもりだったのだが、このままでは少なくともアルバイトは無理そうだ。楽器のメンテナンスは少しずつ進めるしかない。

「ごめんね。やっぱり手伝おうか?」

善子ちゃんと鞠莉さんが作った謎の料理が大量の在庫となったためそのの片付けに頭を悩ませていた頃、一旦基礎練が終わったのか梨子先輩が顔を出し、そう申し出てくれた。

「大丈夫ですよ。休んで下さい」

そんな風に言われるとつい強がってしまう性分なのも私の損なところで、気付けば在庫は後回しにして箒を手にテキパキと海の家の中に入り込んだ砂を掃き出していた。

「今日はこの後はどうするんです?」

「今度のラブライブ予備予選に向けて新曲を作ることになったから、私は作曲に取り掛かるつもり。千歌ちゃんも作詞を担当して曜ちゃんは衣装をみんなと考えるような分担になつてるの」

体を虐めすぎても逆効果であるのはみんな承知しているようで、練習や作業の効率化を上手くしている。その効率化の中に私まで雑用係として組み込まれているあたりダイヤさんもちゃっかりしている。

だが、ダイヤさんから報酬として見せて貰った花火大会の映像はかなり質と量が良かった。まさかあんなに多角的に撮影しているとは思わなかった。さらに言えばメンバー個別のアップの映像もあるため、編集すればまるでテレビ番組で流すような出来の良いものが作れると確信した。花火大会のスポンサーである黒澤家と小原家の人脈があつてこそ出来たパワープレイだ。そのデータと引き替えならば海の家の手伝いなど寧ろ安上がりな部類になる。

「そうだ、こないだの花火大会に向けて吹奏楽部を探してた時に色々調べて知ったんですけど、そろそろ吹奏楽関係のコンクールの時期ですよ？ 梨子先輩は今年のピアノコンクールはどうするんですか？」
この情報は吹奏楽部に生演奏の依頼をするに伴い、吹奏楽部事情を調べた時に偶々気付いたことだ。だから大会後に梨子先輩からそれとなく聴いておこうと思っていたのだ。

「まだ決めてないの」

東京のスクールアイドルイベントにみんなで行った時、梨子先輩が千歌先輩に音ノ木坂に在学中に出場したピアノコンクールで上手くいかなかったことを語っていた。

私は盗み聴きしてしまう形でとそれを知ったのだが、知った以上、梨子先輩がその負の遺産を清算することを期待してしまうのは仕方無いことだろう。

同じ様に、とは言えないが乗り越えられる壁があるのなら乗り越えるに越したことはないからだ。

私の問い掛けに梨子先輩は暫く難しい顔をして考え込んで、ようやく口にした返答は保留とのことだった。まだ気持ちの整理が付いていないのかもしれないため、私としてはそれ以上に勧めたりはしない。ただし

「いずれにせよ千歌先輩とかにちゃんと話さないと心配させちゃうと思うんですよね」

最近続いているが、果南さんやダイヤさん、鞠莉さん、私と色々と言葉が足りずに失敗しているのだ。梨子先輩も嫌と言うほど知っているだろうが、コレばかりは言わせて貰った。

「うん。それも分かってるんだけどね」

梨子先輩はテーブルに広げた楽譜を見ながらどこか遠い目をしていた。目を落とした楽譜から何かを探すかのように。だが、その譜面には何も書かれていない。

「話し変わりますけど、今度の新曲。どんな曲にするんです？」

「ある程度ストックがあるんだけど、千歌ちゃんから歌詞のイメージを聴いて、新しく一から作るか、ストックの中から合うのを見繕って再編集するかかな」

「じゃあ千歌先輩待ちですね」

「星ちゃんからも千歌ちゃんに言つてよ。締め切り間近ですつて」

まるで雑誌の編集長の様な事を口にして笑う梨子先輩に先程一瞬見せた遠い目は無かった。だから私はそれほど今年のピアノコンクールに対し梨子先輩がどれ程頭を悩ませていたのか知るよしも無かった。迂闊にも私はこの時、ピアノコンクールの日程がラブライブ予備予選の日と同日であることを知らなかったのだ。

だからこの時の私は脳天気にも、梨子先輩がラブライブ予備予選とピアノコンクールのどちらも上手くいくと良いななどと思っていた。

第六十七話

朝練して、海の家で働き、夕方からまた練習。夜は残飯を処理して曲や衣装作りというかなりのハードな日々が続いていた。

私はそれに寄り添って彼女達のサポートをした。

今日もまた夜の残飯処理を終えて、千歌先輩の家である旅館のお風呂に三交代で入った。

私は丁度千歌先輩と梨子先輩と一緒にのタイミングで入ることになった。

「大分難航してるみたいですね」

「私待ってますよ」

作詞担当と作曲担当か一緒になったのだから話題は自然と曲作りについてのものとなった。

私の言葉に乗ってプレッシャーを掛ける梨子先輩の言葉に千歌先輩は鼻歌を歌って誤魔化した。

「あ、今の μ の Music S.T.A.R.T!! ですね」
「当たり前」

この曲はひたすらに楽しさを詰め込んだパーティーチューンだ。頭を空っぽにして聴いていると思わず躍りたくなるようなそんな曲だ。しかもこの曲の振付は非常に覚えやすいのも魅力だ。ついでに言うならばPVもパジャマパーティーをしている内容となっている。丁度この合宿なんかにはマッチしていると言えよう。

「じゃあ次は」

「もう、誤魔化されないわよ」

鼻歌クイズになりそうなのを軌道修正した梨子先輩に千歌先輩は悪戯っぽく舌をだした。てへぺろってやつだ。

「ごめん。色々書いてはいるんだけどしっくりこなくて」

「無理に一人で考える必要ないんだから、煮詰まってるなら相談してね」

「水を差して悪いんですけど、千歌先輩はどちらかというと感覚派ですよね。多分こういう時って切っ掛けが無いと駄目だと思うんです

よね」

私の言葉に二人揃って凶星を突かれたように呻き声を上げた。どうやら梨子先輩自身も感覚派のようで身に覚えがあるようだ。

「参考までに梨子先輩の時はどうやって抜け出したんですか？」

「余り参考にならないわよ。千歌ちゃんも知ってることだからね」

「どういうことですか？」

梨子先輩と千歌先輩は楽しそうに教えてくれた。

ピアノを楽しく弾けなくなった梨子先輩は直感的に海の音を聴ければ何かが変わるかも知れないと思っていたこと。千歌先輩と出逢い、ダイビングに連れ出してくれたこと。そして海の音を聴けたこと、スクールアイドルになったことを。

その話しには思い至ることがあった。というかばつちりその時のことを目撃していた。海沿いでハーモニカを吹いた時にいた見覚えのあるダイバー達の正体が千歌先輩と梨子先輩、曜先輩だったのだ。そう思うとなんだか歴史に立ち会ったみたいなきらびを感じた。

「でも、今の話しを聴くと・・・」

海の音を聴けたことだけだろうか、と思った。

確かに感覚に導かれたものを得られたのは大きい。だけれども、例えば梨子先輩が一人でダイビングして海の音を聴いたとしてそれでスランプを抜け出せたのか？私はそうは思えなかった。そう、本当に切っ掛けとなったのはきつと千歌先輩や曜先輩という自分に体当たりでぶつかり、真剣に一緒に悩みを解決しようとしてくれる仲間と出会えたことなのではなからうか？

「どうしたの星ちゃん？」

「いえ、なんでもありません」

だとすると確かに参考にはならない。今更人間関係の新しい変化を意図的に求めるなんて不純にも程がある。

「あつ、梨子先輩」

「？ どうしたの星ちゃん」

不純にも程があるが、一つ思い浮かんでしまった。というか、これも放置できない事では無いだろうかと思ひ、私は梨子先輩に無言で問

う。ピアノコンクールの事を千歌先輩に話したのかと。

「そうね、話すべきよね」

「何の話し？」

「あのね、私ピアノコンクールに出ないかって通知が来てるの」

千歌先輩は梨子先輩がピアノの演奏でスランプに陥っていたことを知っているためか、湯船から勢いよく立ち上がった。

「出なよ。出るべきだよ」

「うん。ありがとう。でも、その日は駄目なの。ラブライブ予備予選の日だから」

私も千歌先輩もその事実には心臓が止まる思いだった。少なくともしばし呼吸を忘れた。それくらい衝撃的なことだった。

ああ、私はなんて迂闊なんだろうと自分を呪った。まさかピアノコンクールの日が予備予選と被っているなどと夢にも思っていなかったのだ。

梨子先輩の苦悩は私の予想を遙かに超えるものだっただろう。それを私は気付くことができなかった。それが情けなかった。

「でも安心して。予備予選、出るから」

「え？」

「確かにコンクールには出たいと思ったよ。でも、今の私の演奏がどう成り立っているのかって思った時、みんなの顔が思い浮かんだの。そしたら自然と答えが出たんだ」

「—————」

「みんなには内緒だよ。心配させたくないし、後で必ず私から話をするから」

じゃあ先に上がるね、と言葉を残し梨子先輩は先にお風呂から上がった。

私も千歌先輩も何も言うことは出来なかった。何も言うことはできなかったが、本当にこれで良かったのだろうか二人して同じ疑問が胸の中で渦巻いていた。

「千歌先輩」

「うん」

だが、しなければならぬことは分かっている。梨子先輩の決断に
対して、肯定するにせよ否定するにせよ答えを出さなければならぬ
い。真剣に悩み、答えを出した梨子先輩に対して失礼だ。

第六十八話

穹とユニットを組むことになってからのことだ。私は彼女の歌声に惚れ込んでいたため、穹が楽器を弾くことなど想定していなかった。だから彼女が歌うだけではなく何か楽器をやりたいと言いだした時は驚いた。だってそうだろう？彼女には人よりも秀でた歌声があるのだから、それだけで十分魅力的なのだ。だから他の要素は蛇足であると思っていた。

「穹は変に楽器をやらないほうが良いと思うけど？中途半端になってせつかくの歌声が形無しになっても勿体ないじゃん」

手で楽器を扱う時、口は自由に動かせるように思えるかもしれないが、人の体とはそれ程自由には動かないものだ。例えば右手で○を、左手で□を同時に書こうと思っても上手くできないように。もちろん訓練次第でできるようにもなる。だが、穹にそれが必要とは思えない。折角歌という授かり物があるのだからそれを活かせばいいと私は思っていた。

「でもほら、工夫次第でやりようはあるでしょ？それにテレビに出てる人とかはギターとかピアノを弾きながら歌うなんてザラじゃん。それってつまり、やれば出来るってことでしょ」

「でも二兎を追う者は一兎をも得ずっていうけど？」
「それでも私は一挙兩得を狙う。それに楽器の演奏が上手いかわくても、演奏をさええ止めれば歌は上手く歌う自信あるし」

妙なところで欲張りな穹に私は苦笑しながら問い掛けたものだ。何故そんなに演奏したいのかと。それで帰ってきた答えにまた驚いたのを今でもよく覚えている。

「星が楽しそうに演奏しているから。一緒にセッションできたら素敵だなって、そう思ったから」

なんて齒の浮くようなことをしれつと言うのだから反応に困る。だが、そうなったら確かに素敵なことだと胸の高鳴りを感じた。

「じゃあ私はギターやる」

「え？普通ハーモニカとギターはセットでしょ。やるなら私じゃない

？」

「思い付いたんだけど、星にはやって貰いたい事があるんだよね」

こうして穹の食欲な思いつきから、穹のギター&ボーカル、私のハーモニカとタップダンスビートという二者二様の二刀流スタイルが確立したのだ。

私は梨子先輩からピアノコンクールの出場を諦めてラブライブ予備予選に出場するという決意表明を聴いてから穹とユニット結成当初のことを思い出していた。

一つを選んだ梨子先輩、二つを選んだ穹。立場も状況も全く違うものの、私はこの選択に近いものを感じていた。それは何かの契機になる選択であるという共通点だ。

だが、これらの選択には正解はない。だからこそ胸につつかえる気分の悪さが気掛かりなのだ。まるで今回の選択が良くない選択であると言うように。

「ほら、ここで二人で反転して背中合わせにした方がいいでしょ？」

「そうだね。それで修正しましょう」

梨子先輩はあの決意表明の後に予備予選に向けてある申し出をした。それはピアノコンクールのために作曲した曲をリアレンジして使いたいということだった。

もともとピアノコンクールに出る、出ないに関わらずそうしたかったらしい。

まだ千歌先輩が作詞していないため、歌詞次第で多少の調整が入るが、大筋の流れが出来たことでこうしてダンスレッスンが始まった。

海の家営業終了後、一通りの片付けを終わらせた私は浜辺で汗だくになりながらダンスに試行錯誤をする姿を見学していた。

梨子先輩は心なしかあれから練習に気合いが入っていた。だけど、その姿に私はどこか危うい輝きを感じていた。このまま進んだらこの予備予選で燃え尽きてしまうような、消え去る直前のような儚げな輝き。それが梨子先輩を魅力的に、熱くさせているようだった。

みんなもどこか梨子先輩の様子に違和感を感じているようであったが、その切っ掛けを知らないため様子見をしている。

みんなに相談すべきなのか、それとも私と千歌先輩だけでどうにか結論を出すべきか？

一概に判断できないことが私の焦燥感を煽る。背中にじんわりと流れる汗は日中の残暑のせいではないだろう。

私は千歌先輩の様子を見ると、千歌先輩もまたどこか練習に集中出来ていない様子だった。やはり同じ事を考えていたからだろう、動きにキレがない。付き合いの長い曜先輩なんかは敏感にそれを感じ心配そうにしている。

ああ、まただ。どうしても大切な想いと想いは上手く噛み合いにくいらしい。

真剣に悩んだ末の尊い決断をしたことで逆にグループ内で不協和音となってしまうている。それが分かってしまうと心を締め付けるような痛みに逃げ出したくなる。

「みんなそろそろ一旦休憩にしては？」

全体的に集中力が散漫になりつつあるのを感じ、私はそう提案した。練習に干渉するのは気が引けるが、このままではいられない。それだけは確かで、今のままでは多分予備予選でも良い結果は出ない。そんな予感がした。

「じゃあ、星が一曲演奏している間に水分補給。その後でストレッチしましょ」

果南さんの提案に花丸ちゃんが無邪気に賛成と手を挙げる。

そういえばこういうのは久しぶりな気がすると思いつながら私は言われるがままポケットからハーモニカを取り出した。

「じゃあ一曲。Snow halation」

説明不要のμ'sの名曲。その名の通り、本来は冬のラブソングだが、今はこの曲を奏でたかった。そう、この曲のように先に希望を見据えていなければならない。そんな気分からの選曲だった。

第六十九話

切り捨てることの出来ない二択を迫られた時、人はどの様な選択をするのだろうか？

梨子先輩はそれに答えを出したが、そのままみんなにそれを聴けない私は例え話としてみんなに個別に聴いてみた。

「自分の宝物とA q o u r s メンバーのどちらかを選ばなくてはどちらも無くす、ですか。意地悪い質問ですわね」

「それって答えの出せるものなの？」

「正解も不正解もない問題ね」

あまりにも漠然として、それでいて難問だけにみんないい顔はしなかった。

それでも答えを出さなければならぬと私は続けて言うと、

「でもその問題の出し方には抜け道があるぞら」

「悪魔の出す二択の裏側には天使が潜んでいるって寸法ね」

「どちらかを選ばなければどちらも無くすってことは、どちらかを選んだ場合にはどっちも取れる可能性があることを否定していないよね？」

と私の想定していなかった答えを出すのだ。これは単に私の問い掛けかたの問題かもしれないが、みんなそれぞれ二択を素直に選ぶことも諦めることもなかった。

「片方を選んだ上でもう片方も捨てない、なんてどうかな？」

曜先輩なんかは照れたように言った。その言い方は私ならばそうする、ではなくこんな選択肢もあると提案するかのようだった。まるで答えを求める私に向けて言っているかのようには。

私はこの結果を千歌先輩に話した。ただ、みんなから話しを聴いて参考にはなったが、私はまだ自分なりの結論が出ていなかった。

どちらも捨てないなんて選択肢は今回ないのだ。どちらかを選ぶ事なんてできない。

「千歌先輩ならどうします？あれからずっと考えているんですけど答えが出なくて」

「うん。私も分からない。分からないけど、大切なのは選択肢を選んだ結果じゃない気がする」

「何故選んだのかってことですか？」

それならば梨子先輩も言っていた。今の梨子先輩の音楽はみんながいるからこそ成り立つのだと。

千歌先輩は難しい顔で考えながらも少しずつ話してくれた。あれから千歌先輩が考えていたことを。思ったことを。

「それでね、考えたんだ。梨子ちゃんが予備予選に出てくれるって言ってくれて嬉しかったのと同時にピアノコンクールに出て欲しいと思う気持ちが沸いたのは何でだろうって。そしたらね、同じだったんだ」

「みんなの今があるのも梨子先輩が居たからこそってことですか」

「うん。それとね、私が梨子ちゃんをスクールアイドルに誘ったときに言ったことがあったんだ」

「それは？」

「ピアノを諦めるんじゃないかって、スクールアイドル活動を通してピアノをまた楽しく弾けるようになったら弾けばいいって。そうなれるように私も力になりたいって」

千歌先輩は語るに連れて瞳に輝きが戻ってきた。言葉にも力が宿り始めた。千歌先輩の中で整理出来ていなかったことが片付き、迷いが次第に消えていったのだろう。語り終えた頃にはすっかり決心が付いたような顔になっていた。

「梨子先輩はもう楽しくピアノを弾くことができます。大分前ですが一度セッションした私が保証しますよ」

「うん。私話すよ、梨子ちゃんに。ピアノコンクールに出て欲しいって」

交わした想いの上に成り立つ音楽。それを奏でる梨子先輩の姿を想像して、私はいつか穹が言っていたようなことを思った。それはとても素敵なことだと。

「ところで星ちゃんが梨子ちゃんの選択に違和感を感じたのは何でなの？」

「そうですね。私もあまり考えが整理できていないんですけど、多分昔の相方の影響だと思います」

「中学時代にユニットを組んでいた子のことだね」

「はい。あの子ったら欲張りで二択を迫られたら二択とも得ようとするんですよ」

だからだろう、私が梨子先輩の決断に納得できなかったのは。千歌先輩に比べればなんとも自分勝手な動機だ。

「大胆不敵な子なんだね。そう言えば梨子ちゃんも以外と大胆なところがあるんだよ」

そう言って千歌先輩は楽しそうに梨子先輩と出逢った時のことを話してくれた。

海辺で悩ましい顔で黄昏れていた梨子先輩が気になったこと。その梨子先輩が唐突に制服を脱ぐと中に着ていたスクール水着姿で海に飛び込もうとしたから飛びついて止めたこと。止めきれずに二人してずぶ濡れになり、焚き火をして暖を取り、梨子先輩が悩んでいた理由を聞き元氣付けたこと。

千歌先輩の語りは正直拙い言い回しだったけれど、ありありとその時の光景が目には浮かんだ。きつと千歌先輩は今でもその時のことを鮮明に覚えているのだろう。それだけ大切な出逢いだったのだろう。

「梨子先輩のこと、お願いします」

「まかせて」

胸を張って頷く千歌先輩に私は一曲送ることとした。

曲はMr. Childrenの箒星。車のCMで使われていた曲だ。

この曲は登っていくようなキーが特徴のアップテンポな応援歌だと私は解釈している。というのも、比喻表現が多く、読み手次第で解釈が変わる内容となっているからだ。だけど私は確かに背中を押す力をこの曲を聴いて感じたのを覚えている。先が見えなくても、道標を頼りに向かおうと、一人では無く二人で行こうと。

まだまだ温かい夜風に乗せて、私はハーモニカを吹いた。たった今この浜辺は私と千歌先輩だけのライブハウスだ。

千歌先輩は演奏を聴きながら夏の大三角が燦然と輝く夜空を見上げていた。

この曲のようにスツと星が流れていることを私は願った。

第七十話

翌日、A q o u r sメンバーや私は梨子先輩の部屋に招かれた。唱歌先輩以外のみんなにとつては唐突に、私にとつてはある意味で待ち望んでいた催しだ。きつと唱歌先輩が梨子先輩と話しをしたに違いない。そしてそれが良い結果に繋がったのだと私は確信していた。

開かれたのは小さな小さなピアノの発表会。たった九人のために開かれた、たった一人の奏者の発表会。

梨子先輩により奏でられたのは今度のラブライブ予備予選で披露する予定だった『タイトル未定』の原曲『海に還るもの』。

聴いたことのあるメロディーラインを基軸としながらも私達の知らない一面を覗かせるそれにみんな聴き入っていた。

この曲はスランプに陥りピアノの楽しさを見失っていた梨子先輩が沼津に来て、みんなと出逢い、音楽の楽しさを取り戻したことで生み出された梨子先輩の歩みそのものの曲だ。

そう思つて聴くと、ゆっくりとしたリズムの中に要所要所で早打ちされる音の連なりは彼女の転機や内浦の穏やかな波を表現しているように思えた。

曲や演奏そのものもそうだが私が何よりも心奪われたのはそれを弾く梨子先輩の姿だった。

心から没頭し、音に身を委ね、そして楽しむ姿にはこれ以上無い説得力があった。

私達はこれまで言葉や気持ちを交わさないことですれ違いもしたけれど、この時は違った。言葉を交わさずとも誰もが理解できた。

梨子先輩は予備予選への出場ではなくピアノの演奏をするのだと。たったの1分45秒程度の時間の演奏で私を含め誰もがそれを理解し、それを認めた。それこそが梨子先輩が生きていくことに必要なことで、私やみんなにとつても通るべき道であるということ。頭ではなく心が感じ取っていた。

演奏が終わると私達はみな一言も発することは無かった。その代わりに部屋の中には温かな拍手が満ちていた。

私の人生の中でこんなことが起こりえるのかと、あまりにも信じられない出来事に私は現実を否定しようとしてその材料がないことに再度驚かされた。

言葉が無くても伝わることがある。そんなことはフィクションの中にしかないロマンだと思っていたし、実際、これまでそんなことは一度たりとも起きなかった。だから穹を傷付けたし、私もまた傷付いた。だけど今私の前にある光景はそんな価値観を真っ向から否定することだ。

梨子先輩の決意が分かる。それがみんなに伝わったということが分かる。それを私が理解したことをみんなが分かる。相互理解が無限に連なるそんな不思議な感覚がこの場に満ちている。

梨子先輩がピアノから立ち上がると深々とお辞儀をする。まるで本物のピアノの発表会の様に。私達は梨子先輩が頭を上げるその時まで拍手を止めることはなかった。

夜、私は梨子先輩を浜辺に呼び出した。千歌先輩を交えない、二人だけで話をしたい。そんな気分だった。

「星ちゃんにも随分心配掛けちゃったね」

「ごめんね、とは梨子先輩は言わなかった。お互いにその言葉が不要なものであることを理解しているからだ。」

「『想いよひとつになれ』 良い曲になりそうですね」

タイトル未定はあの小さな発表会の時をもって完成した。不思議なこと誰が言い出したでもなくタイトル未定は『想いよひとつになれ』に生まれ変わったのだ。

「当たり前じゃない。みんなで作った曲だもん」

「予備予選。心配はないですか？」

「心配よ。でも信じてるから。星ちゃんは不安？」

「少し、ですね。みんな歌は不思議とすぐに覚えましたが、梨子先輩が抜けた穴は実際にあるわけですから、ダンスの組み直しは大変だと思います。そこが心配なところですね」

「その不安、自分で何とかしてみる気ある？」

「どういうことですか？」

いや、こんな風にとぼけなくても本当は分かっている。

「スクールアイドル、やりませんか？」

梨子先輩が私のこともまた信じているということに。

「—————」

「星ちゃんなら任せてもいいと思ってる」

その気持ちは凄く嬉しかった。でも、私は悩むまでも無く答えが出た。

「私が居なくてもA q o u r sは大丈夫です。というよりも私は今の距離感が好きなんです」

彼女達の活動に一喜一憂し、共に笑い、共に悩む。でも、私の心配など何処吹く風と、二段飛ばしで乗り越える彼女達を側から見ているのが私は好きだ。

「断られると誘いたくなる千歌ちゃんの気持ち、今分かったわ」

「梨子先輩の誘いを断るなんて、私も罪な女ですね」

「じゃあ、詫び代としてハーモニカ、吹いて貰ってもいい？」

「そうきましたか。何かリクエストはありますか？」

「シェフのお任せで」

「そうですね・・・」

曲はμ'sの「どんなときもきつと」。これは誰かと共にありたい、見ていたい、応援したい。そんな気持ちを歌った曲だ。

私の思う距離感をこの曲が代弁してくれる。音楽は私にとっての感情表現の一つだ。

ただ一つ演奏を始めてからあることを気が付き、選曲を失敗したと思った。それはあることをこの曲は表現しているからだ。

大好きだという、思わず赤面してしまいそうなドストレートな感情を。

幸い梨子先輩はメロディーに身を委ね、目を閉じているため赤面した私の顔が見られなくて済んでいる。

夜風が気持ちいいと感じる程顔が赤くなつたまま、私は最後までこの曲を梨子先輩に贈った。

第七十一話

「ジェミニのアカリ」として活動していた時のアカウントで花火大会の時のステージの動画を動画サイトに投稿して数日、寄せられるコメントは無く、穹からのアクションは今のところ何も無かった。

彼女との関係をどのような形であれ切りの良いものにする。目下のところそれを目標にし、その第一歩として近況の片鱗を見せようと動画を投稿した訳だが、やり方が間接的過ぎるのかも知れない。よく考えれば私ですら暫くこの動画サイトにログインしていなかったのだ。何も知らない彼女ならば終わったものと割り切り一生アクセスしないかもしれない。

「はあ」

私はスマホからジェミニのアカリのアカウントページの確認をして変化のないことに落胆し、溜息を吐き出そうとして、それを別の人の溜息に遮られた。曜先輩だ。

彼女は常の飄々とした様子から打って変わり、悩ましげな表情をしていた。だが今、それについて問い掛ける人はここには誰も居ない。端的に言ってしまうえば、今私と曜先輩の二人きりでコンビ二の前でたむろっているのだ。

何故こんな組み合わせでここに居るのかと言われるとその原因は予備予選のパフォーマンスにある。

梨子先輩がピアノコンクールに出ることとなり、彼女はピアノの練習のために一足早く東京に言った。みんなで梨子先輩を見送った後、
“想いよひとつになれ”のダンスフォーメーションの見直しをすることとなったのだが、そこで梨子先輩の穴を埋めるために抜擢されたのが曜先輩だ。

この曲は千歌先輩と梨子先輩のダブルセンター曲であったため、センターの梨子先輩と千歌先輩は他の人よりも特殊な動きがある。だが曜先輩ならば器用に立ち回れるという皆の期待があり、何より曜先輩と千歌先輩は幼馴染みであるため呼吸もすぐに合うだろうという楽観もあり推薦されたのだ。

「私、千歌ちゃんのこと全然分かってないのかな」

だが、予想とは裏腹に中々二人の呼吸は合わなかった。

私はもともと二人組のユニットで活動していたことから練習後に曜先輩に呼び止められアドバイスを求められたのだ。勿論、私のスマホで練習風景を撮影していたことも理由だ。

曜先輩は私のスマホからSDにコピーした動画を自分のスマホに移し、何度も見返していた。

「まだ初日ですよ。上手いかわなくても仕方ないきがするんですが」

「でも、梨子ちゃんのステップだと上手いいったんだよ?」

「寧ろ、梨子先輩のステップを覚えてるあたり凄い気がするんですが」

そう、ただ一度だけ息がピッタリと合ったのが、曜先輩が梨子先輩の動きを真似てステップを踏んだ時だった。それが曜先輩を焦らせていた。

「暫く梨子先輩と組んでたから千歌先輩の体に動きが染み付いちやっ
たんでしょうね」

「それはそれで悔しっ、おほん」

曜先輩はいつか言っていた。千歌先輩何かを一緒にしたことがないからスクールアイドルをすることになって楽しいと。だから曜先輩は千歌先輩とダブルセンターを勤めることになったことに特別な想いを抱いているのだろう。

だからこそ千歌先輩に影響を残す梨子先輩に対して曜先輩の中に
曰く言いがたい想いが芽生えたのかもしれない。

「星ちゃんは二人組でやってたんでしょ?どうやってやってきたの
?」

「そりゃあ、散々練習して喧嘩してましたよ。ただ、妥協はしませんで
したよ。私も穹もそれがわかってたから遠慮もしなかったですが、一
度合うようになると不思議とあとはトントンと進みましたよ」

本当に穹は貪欲だった。下手に合わせようと私が妥協しようもの
なら突っ掛かってきたものだ。

だが、千歌先輩と曜先輩を見ているとお互いに譲り合っているよう
な印象を受ける。

「うーん、そっか、星ちゃん達はそうやって来たんだ」

「ま、肝心なところで私は穹と話しを出来てなかったんですけどね。言葉が無くても伝わることはありますけど、やっぱり言葉で伝えた方が良いこともあると思うんですよね」

「うん、そうだね。でも、私はどう話しをすればいいんだろう?」

悶々と頭を抱える曜先輩だが、生憎私にはその答えはない。それは曜先輩の心の中にあることだからだ。

私はビニール袋の中からガリガリ君を取りだして風を開けると齧り付いた。

もう日も暮れているとは言え、まだまだ屋外は暑い。既に曜先輩とここで一時間以上たむろっているのでもいい加減喉も渇くものだ。

横目で曜先輩を見ると彼女もまた暑いのだろう、汗だくになっているが、彼女はそれを意に返した様子は無かった。それだけ真剣に悩んでいるということなのだろう。

私は口の中に広がるソーダ味に舌鼓を打ちつつ、今暫く曜先輩に付き合おうと決心した。

例え答えが無くても相談には乗れる。それに迷っている時、悩んでいる時、それを知っている人がいると言うだけでいくらか気分が楽になるものだ。私はずっと一人で抱えていたからそれを良く知っている。

キーンと頭に走る痛みはアイスを嚙ったことからなのか、悩む彼女の姿に私自身もまた頭を悩ませているからなのか判断できなかった。

第七十二話

穹と組むようになってから二人でいる時間は必然的に増えた。お互いにお互いの存在が人間関係の中心になったわけだが、その他の交友関係も当然あるわけで、時には私達は別行動を取ることもあった。予定を合わせたい時に限って穹が他の誰かと先約があったりした時は、頭で理解をしながらも心に処理仕切れない、腑に落ちない感覚が芽生えたものだ。

あの時の私はそれをどのようにやり過ごしたのだろうか？その答えに心当たりが見つからないまま今日も彼女達と一緒にいた。

屋上には手拍子の乾いた音が響き渡る。手拍子が一定のリズムを刻み、それに合わせて千歌先輩と曜先輩が歩み寄る。そして反転して背中合わせになるのだが、二人は今日もまた噛み合っていないかった。「やっぱり梨子ちゃんのステップで行こう」

「でも」

「このままじゃ間に合わないよ。だから、ね」
「うん」

曜先輩は自らそのように申し出るがそれが本心で無いことは直ぐに分かった。常日頃の満開の笑顔は影を潜め、思案顔になっているのだから分かり易いくらいだ。当然ながら千歌先輩もまたそれに気付いているようだが、今度の予備予選を突破しなければ九人でステージに上がることが叶わなくなる。その事実が枷となり曜先輩の申し出を強く否定出来ないで見ているのは見ていて歯痒かった。けれど、妙案が浮かぶことも無く、曜先輩が梨子先輩のステップを真似ることで、二人の動きが噛み合うのをただ眺めるしかなかった。

「ほら、やっぱりピッタリ。ね、こっちの方がいいでしょ」
ただ、動きは噛み合うのに、笑顔なのに、何故こうも痛々しいのだろうか。

「はい。今日は練習お終い」

「この後はプール掃除をやりますわよ」

その明らかに違和感のある空気を察し、果南さんが練習を打ち切

り、ダイヤさんがさり気なく生徒会の手伝いを提案した。

「プール掃除まだやってなかったの？」

「まだやってなかったのじゃありませんわよ。貴方も放置していたでしょう？」

自然な話し運びで空気感を持ち直させ、三年生達は私達一年生を引き連れて行く。二年生をそのまま置いて。

「二人はゆっくり練習してて」

「プール掃除は任せるすら」

私達もまたそれに乗るようにして二人を残し手屋上から出て行った。

二人で気持ちを話さないと好転しない。それを誰もが感じていたのだ。

「千歌ちゃんと曜ちゃん大丈夫かな」

プールへと移動する最中、ルビイちゃんの呟いた言葉に明確な返答が出来る者は誰も居なかった。

「私、少し曜さんの気持ち分かるかもしれない。中学の頃、周囲から少し浮いてた私にルビイちゃんがいつも一緒に居てくれたけど、一緒に組めない時なんかはどうしたんだろう、どうしてだろうって思ったから」

花丸ちゃんとルビイちゃんの付き合いができたのは、私と穹の様に中学に入ってからだ。

本を読むのが好きで、自分の好きなことを共有することができずにいた花丸ちゃんに理解を示したのがルビイちゃんだった。だから花丸ちゃんにとってルビイちゃんは付き合いの長さ以上の親友だと思っっているからこそ、こういう感性が働いたのだ。

「でも、千歌先輩は別に梨子先輩ばかり気にしてるから曜先輩と動きが合わせられてないわけじゃないと思う」

「そうね。千歌っちが曜のことを大切に思っていないなんてことはないわね」

「私も千歌と曜とは幼馴染みだけど、やっぱり曜が千歌に懐いてる感じはあったからね。曜の想いが強いんだよ」

「ですが、想いが強いからこそ、二人のそれが一致した時、とんでもない力を発揮するでしょう。私達は余計な口を挟まず当人達にゆつくり話してもらいましょう」

そのためにこうして無理矢理にでも二人きりになれる時間を作ったのだ。

「でも、不思議ですね。みんながA g o u r sとして動き出してから一月も経ってないのに、みんなお互いのことを自分のこと以上によく知ってるんですね」

私の言葉に皆お互いの顔を見合わせて、違いない、と苦笑いした。「一応梨子先輩に今起きていること伝えようかなって。ちよつと電話しますね」

私はスマホで梨子先輩を呼び出すと数回のコール音の後に梨子先輩が電話に出たためスピーカーホンにしてみんなと一緒に喋った。

「星ちゃん？電話なんて珍しいね」

「そうですね。ちよつと直に言葉で伝えたくて」

「どうしたの？」

私は事のあらましを説明した。曜先輩が梨子先輩の代わりにセンターを務めること。千歌先輩に対する想いが強いあまり空回ってしまっていることを話した。

「そつか。曜ちゃんが。曜ちゃんってホントに千歌ちゃんのこと大好きなんだね」

「これ私の見解だけど、曜は梨子に嫉妬F i r e、がメラメラしてるんじゃないかなって」

「そんな。私からしたら寧ろ・・・いや、そうね。お互い様なのかもね。ちよつと後で私、曜ちゃんと話してみるね」

梨子先輩はそう言って電話を切った。

ダイヤさんの言葉ではないが、同じ大好きという想いが一致しているからこそ、相乗効果で凄い力が発揮できると思う。

私達は二年生組が上手くいく事を祈り、プール掃除をやった。

第七十三話

翌日から千歌先輩と曜先輩の動きが見るからに変わった。梨子先輩の動きを再現していた曜先輩からは窮屈そうなところが無くなり、活き活きとした曜先輩らしい躍動感が戻った。

それに呼応して千歌先輩もまた動きが変わった。梨子先輩とセンターをしていた時よりも上達したということはないがマイナーチェンジというべき変化があり、曜先輩と並び立つ「らしさ」を感じるものとなった。

そう言えば私が穹と組んでから暫くは一緒に同じ曲を奏でてでもイマイチ一体感がなかった。ひたすら練習して考えをお互いに話して、突き詰めていくことで次第にお互いの音楽が一致するようになった。具体的にどれくらいの間掛かったのか覚えていないが、少なくとも昨日の今日でということにはなかった。

私はみんなの練習を眺めながら梨子先輩に一言メッセージを送った。もう大丈夫、と。そしたらすぐさま梨子先輩から電話が掛かってきた。

「今大丈夫？」

「はい。丁度みんな目の前で練習してますよ」

「曜ちゃん、千歌ちゃんと上手くいったんだ」

「そうみたいです。どんなことを話したんです？こんな劇的に変わるなんて」

「もともと二人の仲は良かったし、気持ちも一緒だったから。変わったというよりも元の鞘に収まったっていうところかな」

「軌道修正したってことですか？」

「そんな上から目線じゃないわ。でも、曜ちゃんが心配しなくていいことを心配してたから、それが杞憂だったってことを」

「それだけですか？」

「それだけよ」

「ははっ、今の様子を梨子先輩にも見せたいですよ」

今屋上で躍る彼女達には今や何の憂いもない。梨子先輩がいない

からこそ失敗出来ないとか、予備予選に負けられない、とかそんな後ろ向きな気持ちではなく、今この時を良いものにした、楽しみたい。そんな前向きさが彼女達に輝きを生み出していた。

「そうだ。もしコンクールで上手くいったらね、音ノ木坂に顔を出そうと思ってるんだけど、その時に星ちゃんの親友の穹さんのこと聴けたらなって思うんだけど、どうかな？」

それはなんとも心強い申し出だ。けれど、この件については私が主体となっていたい。

「予備予選を見たら私も東京に行きます。だから、その、一緒に行ってもいいですか？」

一人では勇気が足りないかもしれない。でも、背中を押してくれる仲間がいればきつと今度は逃げない。

「分かった。私も良い結果を伝えられるよう頑張るわ。だから」

「はい。みんなに梨子先輩が頑張れって言ってたと伝えときます」

「それ・もあるけど、星ちゃんも頑張ってるね。みんなのことばかりに気を遣って、自分のこと後回しにしないでね」

またね、と梨子先輩は電話を切った。

「今の梨子ちゃん？」

「ひゃいっ!」

思いのほか長電話していたのか、気付けば曜先輩が私の隣に座り、私の首筋に冷えたペットボトルを押し付けてきた。

「梨子ちゃん何だった？」

「頑張れ、ですって。みんなと私に」

「そっか。ねえ、星ちゃんは自分の気持ちが自分だけじゃ整理できない感覚をずっと感じていたの？」

それは私の嘘が始まってからのことを聴いているのだろう。かつての私なら踏み込むなど激昂するかもしれない一線だが、今の私はそうは思わない。みんななら私を曝け出せる。踏み込まれてもいいと思えるようになったからだ。

「はい」

「あの感覚をずっとか。自分で蒔いた種だからこんなこと言われる様

な立場じゃないと星ちゃんは思うかもしれないけど、辛かったね」

「————はい。辛かったです」

それ以上の返答を私は出来なかった。もし返答しようものなら、辛いと感じていた時期の想いをぶちまけてしまっただろうから。

隠す訳では無く、これは私なりのケジメだ。

こうして共感を得られただけでも私には贅沢なこと。千歌先輩なら奇跡だよ、とでもいうべきことだ。

「よし。素直でよろしい」

「ちよつ、髪の毛ぐしゃぐしゃになります」

曜先輩は私の頭をガシガシと乱雑に撫でると気持ちいいくらいに口をニカつと開いて笑った。

「そうだ、一曲お願いしてもいいかな？休憩中のリフレッシュってことで」

「お安い御用です」

「やった。みんなー、星ちゃんが一曲吹いてくれるってさー」

各々水分補給や汗ふきをしているところに曜先輩が呼び掛けると、みんな嬉しそうに笑みを浮かべてくれた。

ああ、私の演奏をこうして楽しんでくれる人がいるなんて、なんて贅沢なことだろうか。こんなこと穹に会った時に話しても信じて貰えるだろうか？なんて思うと苦笑いが込み上げてくる。きっとそれは難しいことだ。でもみんながいればそんな困難にも立ち向かうことができる。自然とそう思えるようになってた。

「じゃあ、たむらぱんの『ラフ』を」

この曲は世界不思議発見で一時期タイアップしていた不思議な印象の曲だ。

自分の頭の中で巡らせたことで感情が変遷し、素の自分がいいも思えるような、気の抜けたテーマの曲だ。

非常に耳に残る歌詞回しで一時期はラジオなんかでもよく流れていた。

この楽曲の歌詞のように私も、曜先輩も、梨子先輩も、気持ちが決まってからは気楽になったのだろう。正に今の私達にはびつたりの

曲だ。

第七十四話

穹と初めて動画を投稿することとなった時のことは今でもよく覚えてる。

自分達のパフォーマンスに対しどれ程の反応があるのか？どれくらいの人が動画を見てくれるのか？そんなことを考えて胸を高鳴らせていた。

だが動画を投稿してから一週間が経ち二週間が経つてからも再生数が伸びず、コメントも貰えない日々が続いた。

私達は期待から徐々に落胆へと気持ち下がっていくのを抑えられなかった。

「なんで再生数伸びないかな？」

私達は私の部屋のパソコン画面で動画サイトのマイページを見ていた。芳しくない再生数や未だ0件のコメント数を前に穹は不機嫌そうに言った。

「んー、検索で引つ掛からないことには始まらないからね。いきなりオリジナル曲は気が早かったかもしれない」

「カバーをするってこと？それってなんか負けた気がするんだけど」

穹は不機嫌そうにまだまだ発展途上のギターを掻き鳴らした。すっかりハマっている彼女に苦笑しながら私は取り成すように提案した。

「好きな音楽のジャンルって人それぞれあるでしょ？それって何かしら切つ掛けになる曲があつて、そこからそのジャンルの沼に嵌まる訳じゃない？だけど、私達がどんなに誰かの趣味にあう曲を作ってもそれを聴いて貰わないことには始まらない。だから私達がどんな音楽をやるのかって知って貰うにはパフォーマンスで見せるしかないと思うのよ」

「あー、なる。つまりラップだって語るよりは実際にラップで見せた方が早い、みたいなことね」

「なんで例えがラッパーなのか分からないけど、そゆこと」

「じゃさっ、何やる？」

「色々やろう」

「何それ、雑っ」

私達は身の前に果てしなく広がる音楽の海に飛び込み、そのただ中を全身で楽しんでいた。

そして今、私は一人で自室のパソコン画面を見ている。あの時とは違う。音楽を楽しむ以前に相方を見失っているのが現状だ。

遠く距離が離れてしまったと感じながら私はパソコンの電源を落とした。

今日はラブライブ予備予選と梨子先輩のピアノコンクール当日だ。今から予備予選の行われる沼津市民文化センターに行かなければならない。

「穹は今どうしているのかな？」

花火大会で披露した『未熟DREAMER』の動画に対し、少なからずジェミニのアカリのページには反応があった。

単純にスクールアイドル界でAqoursの知名度が上がりつつあることもさることながら、古参の視聴者からジェミニのアカリ復活？なんてコメントもあり、少しは動画を投稿した成果があることが確認できた。もし昔の同級生とかが気付いて穹に連絡をしているなら近々穹からなにかしらアクションがあるかもしれない。けれどそれを期待するばかりの受動的な対応はもうしない。期待はすれども、私は彼女に会いに行くことをもう決めているのだ。

先ずはこの予備予選を見てからだ。

私は文化センターの楽屋に足を運び、各々のパーソナルカラーの衣装に身を包んだみんなと会った。

「今回も可愛く仕上がってるね」

「星ちゃんも欲しければ作るよ？」

主に衣装を担当したのは曜先輩と善子ちゃんだ。

ふりふりの付いた衣装は見る分には非常に可愛らしいけれど、私自身身が身を包むには些か可愛らし過ぎる。それに梨子先輩が着ていない衣装を用意してもらうなんて出来ない。軽口で魅力的な提案をした曜先輩にやんわりと断ると私はふと彼女の手首のシュシュに気付

いた。

「シュシュなんて用意してましたっけ？」

見れば他のメンバーもそれぞれの色のシュシュを手首に付けていた。

「常勝無敗の魔具をリリーが贈ってくれたのよ」

余程気に入ったのか善子ちゃんはすっかり墮天使モードで顔の半分を隠すような格好いいポーズを取っていた。折角なのでスマホで写真を撮らせてもらった。

「梨子ちゃんも付けてコンクールに出るんだって」

「それは素敵ですね」

距離は遠く離れても想いは？がっている。それを思わぬところで見せつけられる形となり、胸の奥にちくりと痛みが走った。私と穹とは大違いだと。

「貴方の分も届いてるわよ」

「えー」

鞠莉さんは私の右手首を取り、まるで結婚指輪をはめるかのようにシュシュを手首に通してくれた。私はそれをぼんやりと他人事のように眺めていた。だってそうだろう？私はA q o u r sメンバーではない。そんな私がこのようなものを貰って良いのだろうか、誰だって思うだろう。

「また難しい顔してる。ぶつぶーですわ」

「所属だとかそんな小難しいことはいいのよ。だって貴方も感じているのでしょうか？」

鞠莉さんは私の胸に掌を当てて問い掛けた。

「ここにもう答えがあるって。ならそれでいいじゃない」

そう。あの日感じた一体感を私は今も忘れていない。忘れられる筈がない。いくら思考として自らにその資格があるのかと問い掛けても、その時の感覚が強く肯定するのだ。

私は右手首を天に翳し、みんなとお揃いのシュシュを見上げた。いつの間にか私のパーソナルカラーとなったベージュのシュシュは天に翳して見ると心なしか輝いているようにも感じた。

「予備予選、存分に楽しもう」

曜先輩はそう言って私のようにシユシユの付いた手を天に翳した。

「最高のパフォーマンスにしましょう」

「準備万端ずら」

「今なら何でもできそうよ」

「全力で行こう」

「絶対に通過しますわよ」

「オフコース」

ルビイちゃんが、花丸ちゃんが、善子ちゃんが、果南さんが、ダイヤさんが、鞠莉さんが続き、千歌先輩もまた天にシユシユを翳した。

円陣を組む九色のシユシユを見上げ私は自然と笑みが溢れた。

「最高に輝こう、Aquours」

千歌先輩の掛け声に合わせ、私達は一斉に手を重ねながら一度下ろした。

円陣を組んで手に手を重ね、下ろしてから天に掲げるのはパフォーマンスをする前のAquoursの気合いの入れ方だ。いつもは傍目から見ていたが私はこの時はなんの躊躇いも無くそれに参加していた。梨子先輩の代わりとしてではない、Aquoursのメンバーではない私としてその輪に加わっていた。

「サーン・・・シャインーツ」

仲間であってチームメイトじゃない私をこうして受け入れてくれる奇跡がある。でも私は誰かさんの影響なのか欲張りで、穹のどの仲間も修復できる奇跡をこの時幻視した。

それに穹ならこういう時にこう言うだろう。奇跡は一度きりなんて誰が決めたのって、底抜けに前向きな事を。

第七十五話

音ノ木坂の入試を受け、その結果が発表される時、私と穹は寒空の下、おでん片手にコンビニの前でスマホと睨めっこしていた。

「もしもどっちかしか受かってなかったらどうする?」

「取り合えず肉まん奢りで」

「でも、音ノ木坂って実はそんなに偏差値高くなかったじゃん」

「とは言ってもお互いそんなに頭良くないでしょうが」

「それは言わないお約束」

この頃には私の引越しはほぼ確定していた。だけど諦めたくない気持ちだけで私は沼津行きを拒んでいた。だけど、心の底ではその拒絶は現実的ではないとも思っていた。だから二人とも不合格ならば、とも考えたことがあった。でも結果を目前にすると、諦めたくない気持ちが増すのを感じていた。

「もしも二人揃って不合格なだったらどうする?」

「……………」

ずばり穹に問われた時、咄嗟に言葉は出てこなかった。それを一瞬とは言え望んだこともあったのに、そうはなりたくないという気持ちがそれを上回っていた。

「私はそれでも星と音楽を続けるよ。きつと予定してたスクールアイドルって括りでは活動できないけど、音楽に国境はないしね」

悪戯っぽく言う穹をこの時の私はどれほど信じただろう。多分穹の言葉に嘘はない。それは感じていたけれど、現実の距離は気持ちだけでは覆せないとも思っていた。だから彼女の気持ちに正面から向き合えなかった。

「そんな心配はどうやら無用みたい」

私はスマホに映し出された合格者の受験番号を穹に見せた。

「二人とも合格。やったね」

私達は静かに拳同士をぶつけて健闘を讃え合った。

そして今、その頃とは打って変わり炎天下のコンビニ前で私はチューペットの類似品を片手に みんなと一緒にスマホと睨めっこしていた。どうでもいい話したが、チューペットは今製造中止されているらしく、市場には出回っていないらしい。

何故私達がこうしているかと言われると、ラブライブ予備予選の結果発表の日だからだ。

沼津市民文化センターで行われた予備予選。そこで披露された「想いよひとつになれ」のパフォーマンスはミスもなく、一人少ないことを感じさせない力強さがあった。だから予備予選を通過出来ないことなど私は微塵も感じていない。ただ、未来に絶対はないから結果が出るまでのスッキリしない時間をみんなとこうして共有しているのだ。あの時ように。

「うー、なんだかどきどきしてお腹が空くぞら」

「花丸ちゃん。さつきからのつぼパン食べすぎ。肥るよ」

「縦に行くから大丈夫」

「なんでそんなに自信満々？あまりこれまで実績はないみたいだけど」

実は花丸ちゃんはAqoursメンバーの中で一番身長が小さいのだ。普段ルビィちゃんが影を薄くしようとしているため勘違いされがちな事実だ。

「勝負はこれからぞら」

「あー、まあ高校から伸びる人もいるし、ファイトだね」

「もう、二人とも緊張感なさすぎ」

「だって、もう結果に影響与えられないし」

とは言え緊張していないかと言われれば実は私も緊張はしているのだ。ただ、その緊張感を含めて今を楽しんでいる。だって、多分通過してるし、という楽観があるから。

「あ、結果出たよ」

「Aqoursですわよ、”あ”ですわよ」

「上から、えーと、イーズーエクスプレス」

「……………」

あれ？という沈黙が一同に流れた。始まったと思ったたら終わった出落ち感がする。

「あ、エントリーNo.順だった」

「あるじゃん、Aqoursやったね」

横から果南さんが曜先輩のスマホを掻っ攫い、読み上げるとあつさりとAqoursの名が見つかったようで、安堵の溜息をしていた。

「これも全て墮天使のお導きよ」

「黙ルフオイ」

「それじゃ嫌がらせする魔法使いの同級生じゃない！」

「さて、それじゃあ梨子先輩にも連絡しないとですね」

こらー、と騒ぐ善子ちゃんを余所に千歌先輩に話を振ると千歌先輩も同じ事を思っていたのか自分のスマホを取り出していた。

「今、向こうから掛かってきたみたい。スピーカーにするね」

もしもし、と通話を始めると梨子先輩の聞き慣れれ応答があった。

「予備予選突破おめでとう」

「うん。梨子ちゃんはコンクールどうだった？」

「うん。ちゃんと弾けたよ」

スランプに陥っていた梨子先輩は一時期楽しくピアノを弾くことが出来なかった。それがこうして人前で、それもスランプの切っ掛けとなったコンクールで弾けた。そのことが何よりの成果だ。

「次はラブライブ予選大会で一緒に歌おう！」

「……………」

今回の予備予選に向けて、千歌先輩に染み付いていた梨子先輩との動きと曜先輩は対峙していた。だから、今回、苦勞することとなったと思うことがあった筈だ。だが、それを乗り越えて曜先輩はまた共にステージに立とうと言葉を掛けた。そこに特別な意味を感じたのか、梨子先輩もまた万感の想いで返事をしていたように感じた。詳しいことは当人同士しか分からないが、私でも言葉にならない想いが感じ

取れた。

「梨子先輩。お疲れ様です」

「ありがとう、星ちゃん。乗り越えられたよ」

「はい。私も、すぐに追い付きますから」

梨子先輩が、そして曜先輩が壁を乗り越えた。もちろん、私にとつてのそれとは違う種類の壁だが、そこに苦悩するのは同じだ。そこに答えを出して、行動して、そして乗り越えたのが二人で、私はまだどうすべきか答えを出しても行動に移せていない。そこが明確な違いだ。

「この機会にみんなにも聴いて貰おうと思うのですが、私は穹に会いに行こうと思います」

「星ちゃん!?!」

「ようやく、決心ができました」

「行くの、東京に」

「はい」

そっか、と千歌先輩は嬉しそうに笑った。私も気負うこと無く笑顔になった。

チャレンジすること、立ち向かうこと、本音をぶつけること、諦めないこと、大切なことの多くをみんなから教えて貰った。頭でっちな私に気付かせてくれた。勇気をくれたのだ。

だから、離ればなれになった私の片割れ、双子の欠片を探しに私は東京に行く。そう決めたのだ。

そんな私にみんなは、大丈夫?とは聴かなかった。その信頼が嬉しかった。

第七十六話

電車の車窓から見える景色はここ半年で約6回目になっている。

まずは浦の星への入試。次いで引越し、そしてこないだあった東京でのスクールアイドルイベントへの参加だ。それらの往復で計6回だ。

初めて沼津へと赴いた時はまだ冬で、車窓から見える景色も常緑樹以外の大半の木々は寒々と枯れ、田畑も休作しているところが多かった。それが今では生命力が有り余らんばかりに木々は青々と茂り、畑も栽培が始まっていた。そんな景色を見ると少なからず月日が経過しているのだなと改めて実感させられる。

「星ちゃんの番だよ」

「あ、すみません」

私は正面からの催促に苦笑いをして返し、目の前に広げられた裏向きの3枚のトランプカードを見た。

そう。この東京行きは本来は一人で行く予定だったのだが、彼女達Aqoursもまた自らの方向性やμ'sといったトップスクールアイドルとの違いを探しに東京に行くとのことで、私達は揃って電車に乗ることとなった。そして今はこうしてババ抜きに勤しんでいる。

「善子ちゃん相手なら選ぶまでもないね」

「はうっ」

特別駆け引きするでもなくカードを選ぶと果たしてそれはジョーカーではなかった。

運の要素が絡む勝負事は善子ちゃんが大の苦手とする分野だ。これは本人の意図とは別のところで自動的と思えない不運が運ばれてくるのだから善子ちゃんもさぞかしこれまで苦労してきただろう。

だが、その不運が私にまで波及していないだろうかと少し不安を感じている。と言うのも、東京行きに決めてから私は思いきって穹にメールをしたのだが、一向に返事がないのだ。

果たして穹から無視されているのか、彼女もまた悩んで返事をしか

ねているのか私には判断がつかない。

「不安ずら？親友に会うのが」

そんな一抹の不安を抱える私に目敏く花丸ちゃんが気付いた。

「そうだね。もしかしたら会えないかもしれないし」

「そしたらどうするの？」

「諦めないよ。もう私は簡単に投げ出したりしない」

そんな大切なことを教えてくれたのは花丸ちゃん、君もその一人なんだよと私は心の中で感謝した。

東京駅に着くとまずは梨子先輩と合流することとなった。

今後の予定としてはA q o u r sのみんなは誰かと会うことになっていくらしい。私はその後に梨子先輩をみんなからお借りし、音ノ木坂に行く予定だ。そこに穹が居ないなら埼玉の穹の自宅まで行く。

「ここで待ち合わせであってるよね？」

私達は今、東京駅の丸の内北口エントランスにいる。

近年改装され、西洋建築の影響を受けた円形の高い天井をしたそこは今日もまた人の往来が引つ切りなしかった。天下の往来とは今やお天童様の見える屋外の道路よりも、こうした屋内の駅の通路こそを指す方が正しいかもしれない。

「あつてますよ。梨子先輩ももう着いたって連絡が来てたので、もう間もなく合流できるかと」

「呼んだかしら？」

そうこうしている間に、なんら問題なく梨子先輩と合流ができた。時間ピッタリなところは流石元東京人だ。

「お帰り、梨子ちゃん」

「—————ただいま」

最初に声を掛けたのは果たして曜先輩だった。

なんの曇りもない笑顔で軽く握った拳を差し出す。梨子先輩もまた笑顔でその拳に拳をぶつけた。お互いの健闘を労うように。

印象的だったのは曜先輩の手首には梨子先輩から贈られたシユシユが付けられていたことだ。

ボーイツシユな曜先輩のフアツシヨンは少し噛み合わないが、彼女は今日ずっとそれを外すことはなかった。そこに特別な想いがあるのを感じざるを得ない。

「ありがとう、みんな。私、弾けたよ」

改めて梨子先輩が頭を下げて結果を報告した。ただ、結果としてコンクールで優勝したことよりも梨子先輩がみんなの前で楽しくピアノを弾くことが出来たという事実が嬉しかった。

「よし。A q o u r s 全員集合したし、行こう！」

「どこに行くの？」

「秋葉原。話しを聴きたいって言ったら、会ってくれることになったの。誰かかは秘密だよ」

今日の予定はほぼ千歌先輩が組んだため誰と会うのかは千歌先輩のみぞ知る。ただ、スクールアイドルのことを聴くに打って付けの人物とのことだが、秋葉原というところでももある二つのグループが思い浮かんでしまう。

ラブライブ初代王者のA—R I S E、そして二代目王者のμ S だ。

正直スクールアイドルのことを聴くにこれ以上の相手は居ないが、流石にそれはないだろうと思う。

「スクールアイドル、秋葉原、まさか」

「お姉さん！」

「ルビィ、色紙とサインペンの準備を」

流石にそれはないだろうな、と私は思っているが黒澤姉妹は何を思ったのか盛り上がっている。それについてはみんな何の指摘もしないので、そっと見守ることにした。

ドタバタとコンビニに駆け出す黒澤姉妹がはぐれそうになったり、ちゃんとプリペイドをチャージしているのに善子ちゃんが自動改札機で弾かれたり、完全にS Fの世界に迷い込んだ気分になっているテ

ンシヨンの異様に高い花丸ちゃんがどこかにふらふらしらないよう誘導したりと四苦八苦しながら山手線に乗り、秋葉原へと赴いた。

もしも私が音ノ木坂に通うこととなったらきつと池袋当たりから山手線に乗り換えていたのかなと思いつながら私は道中を楽しんだ。

乗り込んだのは偶々だが、配備されて一年も経っていない新型車両だった。

今は通勤・通学時間じゃないからそれ程ではないが、きつと通学していたらパンパンの電車の中を潰されたヒキガエルのような気分で穹と共に乗っていたのだろう。そう思うと思わず笑い出してしまうた。

「楽しそうだね、星」

「そうですね。花丸ちゃんじゃないですけど、私もテンション上がってるみたいです」

私の様子に小首を傾げる果南さんに苦笑いしながら返答した。

あつたかもしれない、もしもの光景を幻視する程度には今回の私には余裕があつた。それは前回の時とは違い、能動的に覚悟をして行動しているからだろう。

「会えるといいね、穹って子に」

「はい。本当に」

ポケットからスマホを取り出すが、未だ着信はない。ジェミニのアカリのページも確認したが、何のアクションもなかった。

穹はこの電車に乗り、一人で音ノ木坂に通い、どんな一学期を過ごしたのだろうか？それを思うと一抹の不安を覚えた。

私はみんなと出会えた。けれど穹にはそんな存在と出会うことができたのだろうか？

第七十七話

秋葉原駅を降り電気街口を抜けて行く。大型の電機屋さんの前を通過し、裏路地を進むと見えてきたのは壁かと思紛う急勾配の階段。神田明神が袖入り口となる男坂だ。

本来ならば正門から入るべきなのだろうが、かのμsが基礎練の一環としてこの階段をダッシュしていたという由来からスクールアイドルにとつてはこここそが神田明神の正門となっている。

階段を息を切らしながら登りきり、本殿の前に行くところには見覚えのある二人が居た。どうやら彼女らが待ち合わせ相手だったようだ。

「お久しぶりです。Aqoursのみなさん。それにジェミニのアカリの星さん」

「今日はありがとう。Saint Snowさん」

「北海道予備予選突破おめでとうございます」

紫を基調とした制服に身を包む二人組、姉妹ユニットであるSaint Snowの鹿角聖良さんと鹿角理亞さんだ。

沼津に先だつて行われた北海道予備予選でSaint Snowはトップで通過する快挙を成し遂げている。それ故なのか幾分前回のスクールアイドルイベントで会った時に比べ印象が柔らかい。

「ありがとうございます。お参りはまだですよ？それを済ませたら場所を変えてゆっくり話しましょう」

律儀にも私達を待っていたのか、Saint Snowの二人はそう言つて回れ右をすると、本殿まで歩み寄り、賽銭の入れると手を合わせた。私達もそれに倣いお参りをした。

「さて、ゆっくり話すには打って付けの場所を予約しているんですよ。ついてきて下さい」

心なしかSaint Snowの姉の方、鹿角聖良さんは気分が浮ついていようだった。それを見て妹の鹿角理亞さんは些か呆れた様子だ。

「スクールアイドルなら秋葉原は最早聖地と言つても過言ではありません

せん。前回のスクールアイドルイベントの時は時間の都合上それ程見て回ることは出来ませんでした。今日はその分見ていこうと思っ
ているんですよ。ただ、これから行くところは私と理亜だけでは借り
るのは気が引けた場所なので、皆さんからの申し出は正直有り難かつ
たんですよ」

「大人数じゃないと予約出来ないんですか？」

「そう言う訳ではありませんが、二人だけだと気が引けるっただけ
です」

道中、聖良さんは陽気に聖地巡礼の予定を話してくれた。尚、神田
明神に来る前に既に音ノ木坂に立ち寄っていたらしい。

神田明神から電気街に戻り、オフィスビルの方へと歩くと、スクー
ルアイドルにとって秋葉原にある二大高校、ラブライブ初代王者A―
RISEの母校であるUTX学園へと辿り着いた。

「このカフェスペースは予約さえすれば一般の方でも利用できるん
ですよ。さ、入りましょう」

高層ビル丸ごと学校となっている偉容に小心者の私はビビりま
くってしまったが、聖良さんは目を輝かせて私達に早くしろと催促し
た。

クールな印象の聖良さんだが、こう接してみると可愛らしいところ
があるのがよく分かる。

UTX学園の事務室に足を運び、入館証を借り受けると私達は駅の
改札口のような入り口を通過し、高層階にあるカフェラウンジに入っ
た。

カフェラウンジは白を基調とした空間でミーティングなどでも使
えるようなテーブルを挟んでゆったりとした赤いソファがあり、更
に壁面には大型モニターまで完備されている。事務的でありながら
高級クラブの一室のような雰囲気も兼ね備えた仕上がりとなってい
る。

「ここはかのA―RISEも愛用していたカフェラウンジなんです
よ。一回来てみたかったんです」

「お姉様、些かミーハーに過ぎるのでは？」

「予備予選突破したんだから、自分へのご褒美よ。理亞だって昨日は楽しんで眠れないとか言ってたじゃない」

「な、それは言葉の綾です」

ツンケンとした態度の理亞さんは顔を赤くして否定するが、十中八九聖良さんの言うとおりなのだろう。

私達は姉妹喧嘩というかコントを余所にソファアに腰を下ろした。

私とルビイちゃんは全員分の紅茶を入れてから座った。

ここのラウンジの飲料はセルフだが無料でクオリティが高い。なんて入れる容器が紙コップではなく、しっかりとしたティーカップなのだ。

「紅茶ありがとう。うん、例えインスタントだとしてもこうやって飲むと雰囲気あるわ」

「ご満悦ですね」

「勿論。さて、付き合わせてばかりも何だし、早速本題に入りましたよるか」

柔らかな表情だった聖良さんは一転して表情を引き締めた。

本題とは、スクールアイドルとして自分達はどうかあるべきか？トップスクールアイドルと自分達の違いとはなんなのか、だ。

その命題は井戸端会議で軽い気持ちで話す内容でもないし、相手のことを認めていなければ話す話してもない。そういつた面を考えると、Saint Snowの二人はAqoursのことをそれなりに認めているのだろう。

以前、スクールアイドルイベントでは散々な結果を見せる形となったが、その頃から成長したと評価したのだろう。少なくとも話しをする程度には価値がある相手だと。

それを感じたのだろう、Aqoursのみんなもまた背筋を正して表情を引き締め気持ちを切り替えていた。

「私達はA-RISEを見て、憧れてスクールアイドルをやろうと思っただけです」

先に口を開いたのはSaint Snowだった。ありがたいことに、彼女達は素直に自分達のことを話してくれた。

第七十八話

Aqoursの始まりがμsへの憧れであるように、Saint Snowの始まりもまたスクールアイドル、ラブライブ初代王者のA-RISEだ。

μsとA-RISEは全く異なるタイプのスクールアイドルであり、それらに多大な影響を受けたAqoursとSaint Snowもまた同じスクールアイドルでありながら共通項がまるで無い。ただ、唯一共有する価値観が光り（μsやA-RISE）への憧れという原動力、そしてその目標こそが越えなければいけない壁であることだ。

「私達も考えたことがあります。私達はA-RISEやμsといったトップスクールアイドルと何が違うのか？」

「答えは出ました？」

「残念ながらまだ分かりません。でも、それを知るためにも私達は勝つしかないと思っています。勝つてA-RISEの見た景色を見るしかないって」

彼女達は結果からその過程、理念を得ようとするアプローチを取るつもりらしい。

その在り方に私は少し引つ掛かるモノを感じながらも、それを飲み込み何も言わなかった。

それは私がSaint SnowひいてはAqoursに対して引け目を感じることもあると気付いたからだ。

彼女達と違い、私は私の音楽の源流を知らない。いや、本当はそれを知っている筈なのに私にその自覚がないのだ。

私が音楽に取り憑かれた最初の音楽、私が自分で演奏したいと思う切っ掛けとなった音楽が絶対にある。だけど、それを忘れてしまっていることに私は恥ずかしさを覚えた。だからこの二組のグループに対し私は何も言うことはできない。

「勝ちたいですか？」

けれど、私の抱いた引つ掛かりに千歌先輩が問い掛けた。

何も分からぬまま、ただ勝てば良いのかと。

ただ、千歌先輩の疑問に対しSaint Snowの反応は冷やかだった。何を馬鹿なことを言っているのだと。

「勝ちたくないなら、何故ラブライブに出るのです？何故μ'sやA-RISEはラブライブに出たのです？」

ある意味でそれこそが彼女達の結論のように私は感じた。

誰よりも素晴らしいパフォーマンスを披露出来るスクールアイドルになること。即ちラブライブで優勝することであると彼女達は思っているようだ。

確かに彼女達のスクールアイドル活動に対する姿勢をホームページの活動記録を見るとかなりストイックである。それはアイドルというよりもアーティストイックと言う方が正しいと思えるくらいに。彼女達の楽曲「SELF CONTROL」の歌詞にも描かれている。

強くありたい。唯一無二の存在でありたいという夢。そのために独立独歩の精神で、自らの心と向き合い、打ち勝つという孤高の闘争心が描かれた世界観。

弱肉強食の世界でひたすらに自分を磨くことがトップに導くことであるという信仰。それがSaint Snowの生きる場所なのだ。

だからSaint Snowには千歌先輩の疑問をそもそも理解できない。勝つこと以外に意味を求めるAqoursとは相容れない。彼女達は決定的に異なる価値観を持っていることだけがこの会谈で分かった。

「貴方はどう思うのです、星さん？トップスクールになるためにどうあるべきなのか？」

「何故私に聴くのです？」

「ジェミニのアカリ、私達は注目していたんですよ。なんて型破りなんだって。二人で四人編成のバンド相当の音楽を作り、更にパフォーマンスと融合させるなんて欲張りすぎて、清々しいくらいに馬鹿げている。だから、この人達はきつと凄いい志があつて音楽をやっている

だろうなって、そう思ってたんです。だから、ジエミニの片割れである貴方がどう思っているか興味があるんです」

「ラブライブは手段であって目標ではなかった。それが私から言える確実なこと」

「教える気は無いんですね」

「うん。ただ、ありがとう。そんな風に思ってくれている人が居たってこと、初めて知ったよ」

聖良さんの言うことは私を少なからず驚かせた。ファンとは違だろう。例えるなら近隣にある余所の学校の強豪チームのような感覚なのだろう。

以前会った時は突然私が内緒にしていたジエミニのアカリのことを知っていたためいい印象は抱かなかったが、今は彼女の言葉を砂に嬉しく思った。

今日穹と会えたらこの事を伝えようと、そう思った。

「さて、そろそろ今年のラブライブの告知が行われる筈です。このUTXのモニターで告知がされるのが毎回恒例もなっているんですよ。良かったら見に行ってみては？」

「もしかして、お二人はそれを見に北海道から東京へ？」

その質問に聖良さんも理亞さんも揃って紅茶を飲んで黙りを決め込んでいた。

「今日はありがとう」

「礼には及びません。ラブライブ決勝でお会いしましょう」

私達はソファアーから腰をあげると揃って頭を下げた。

結局自分達の命題、μ'sとの違いや、どうあるべきかについて新たな発見はなかった。けれど、同じ立場のスクールアイドルがどんな思想をしているのか知れただけでもある意味で収穫だったんではないかと私は思っている。

「はい」

ただ勝てば満足する訳では無い。けれど、まだ見ぬ大舞台に心か躍るのは本当の気持ちなのだろう。別れ際に挑戦状とも取れる発言に、千歌先輩は笑顔で答えた。

第七十九話

A—R I S Eがμ☒sが、そしてその他歴代のトップスクールアイドルが煌びやかな舞台上でパフォーマンスを披露している姿がUTXのモニターに映し出されている。そして今年のラブライブ決勝大会がアキバドームで開催されることが告知された。

四万人規模の広さを誇るそこは普段はプロ野球の試合をやることが多い。その他にも都市対抗野球、有名なアーティストのライブ会場、スキー・スノボの大会など多岐に渡るが、いずれにせよかなり大規模な催し物だ。

そんな会場でスクールアイドルの大会が開催されるのはそれだけ現在ではスクールアイドルという存在が世間に浸透し、また人気であるからこそだ。

例えばサッカーの人気が無ければ全国大会で国立競技場は借りられないだろう。野球の人気が無ければ甲子園球場は借りられないだろう。

勿論、最初はアキバドームでの開催など夢物語だった。そんなマイナーなスクールアイドルとあうコンテンツをA—R I S Eがカリスマ性でメジャーなコンテンツに押し上げ、μ☒sが大衆に浸透させた。だからこそアキバドームで毎年の様にラブライブが開催される現在があるのだ。だからこそ、この二組のスクールアイドルは未だに特別なのだ。

無理だと言われるようなことを実現させる実行力。その原動力はどこにあったのか、画面越しには分からない。ただし、μ☒sについてなら一つ共通項がある。それは学校が廃校の危機にあるということだ。それが切っ掛けとなってμ☒sは始まったという。

そう言えば浦の星の統廃合問題は実際どうなのだろうか？暫定でも入学希望者がいるのだろうか？その当たりの運営的ところは鞠莉さんに任せきりでまったく触れてこなかった。これは後で確認しよう。

「なんか、信じられないね」

私達はUTX前の歩道橋広場からモニターを眺めている。みんな一様に呆然とアキバドームでのラブライブ開催の告知を眺めていた。高飛び込みで全国レベルを知る曜先輩が呆然と信じられない、という発言をしたことが印象的だった。

私はスクールアイドルでは無いけれど曜先輩の呟いた言葉には同意だった。

あのアキバドームが満員になり、一面を色とりどりのサイリウムが煌めくのだ。その中心に果たして自分が居ることをどうして想像できよう。私や穹がしていた活動を卑下する訳では無いが、私達の活動では精々が学校の体育館を三分の一を埋める程度だったのだから。

「それでも私達の活動の先にあるんだよね」

「でも行くのでしょうか？」

「勿論」

「最果ての約束の地ね」

「それは私達の……」

「未来ずらー」

未だ答えはない。けれど道は？がっている。そう思うと不思議と力が湧くのか、みんなは前向きだった。

「無謀な夢の果て、か」

μsのファイナルシングルと題されて公開された「MOMENT RING」という曲がある。

それは彼女達の活動の総決算となる曲の内の一つだ。

廃校の危機から学校を救い、スクールアイドルの認知度を広めラブライブ決勝大会をアキバドームで開催できるよう導いた。小さな活動だったそれが様々なものに関わり、絆を紡ぎ、物語となって奇跡を起こした。

そして彼女達の手から離れた今、青春はこのように続いている。そう思うと、胸に込み上げるものがある。

「ねえみんな。音ノ木坂、行ってみない？」

そんなμsの始まりの場所に行けば何かが分かるかも知れない。そんな風に思ったのか梨子先輩が提案した。

「いいの?」

けれど、その提案は梨子先輩からすれば一つの区切りの筈だ。なぜなら彼女は音ノ木坂にいた頃に不調に陥り学校を去っているのだ。トラウマと言わないまでも複雑な感情を抱いていた筈だ。

「うん。今は楽しくピアノを弾けるから。コンクールも上手くいったしね。それに行ってみたいの。今、行つてどう思うのか、それが知りたいの」

そう言う梨子先輩には気負いは無かった。

陳腐な表現かも知れないけれど、梨子先輩は凄いと思う。

藻掻き、苦しんで沼津に来て、そして今東京の舞台に舞い戻り成功を収めたのだ。

もちろん、一人で何もかも成し遂げた訳では無い。けれど、みんなの助けがあつたとしても、やはり壁を越えるのは自分なのだ。

「星ちゃんもいい?」

梨子先輩は改めて私にも確認を取ってくれる。

もともとそう言う予定だったとはいえ、やはり言葉にすることにも意味は生まれるのだ。だからこそ梨子先輩はみんなの前で口にしたのだ。

「はい。行きましょう、音ノ木坂に」

未だ穹から返信はない。もしかしたら練習中なのかもしれないし、そうではないかもしれない。けれど、もしかしたら会えるかもしれない。なら会いに行く以外に選択肢などない。いや、選ばない。もう私も腹を括つたのだから。

「でも、一ついいですか?」

「何?」

「私は学校の中に入って穹がいるか確認しようと思つてますが、それは私一人でやろうと思うんです」

それは穹に対するケジメだ。彼女と向き合うときは1対1で。そうでなければ本音をぶつけられないだろうし、彼女からも本音を引き出せないと思う。

きつとぼろくそに言われるだろう。そう思うと恐怖を感じるが、そ

れから目を背けてはいけないのだ。

「大丈夫なの？」

千歌先輩が確認するように言うが、その顔には特別心配する様子はなかった。あくまでも一応の確認だともいうように。

「はい」

それは私ならば大丈夫だと、そう無言で背中を押されたような感じ
でなんだかむず痒い感じがしたけれど、素直に嬉しかった。

「じゃあみんな行くかうか、音ノ木坂に」

おー、とみんなで掛け声を出して私達は音ノ木坂に向かった。

ちようどその時、モニターにはμsが“Happy Maker”
“を歌っていた。ひたすらに前向きなその曲がまるで私のことを応
援しているようで、幾分私の足が軽くなった。

第八十話

夏休みの学校は部活動こそ行われているが、メインは校庭や体育館が活動地となるため、校舎内との温度差は大きい。校舎内から見る校庭の部活模様はまるで対岸の火事のように他人事のように感じた。

私は今、音ノ木坂学院にいる。みんなと学校まで来て、梨子先輩に紹介して頂き、こうして一人、校内を散策している。

私が嘗て目指した場所。そして叶うことの無かった願いの形。そんな場所があり、私は意外にも心穏やかだった。

何故だろうかと自問しながら私は校内を見て回る。

音ノ木坂学院は施設的には目立った特徴は無い。強いて言えば講堂があることと、都内にしては広い校庭があるくらいだ。教室を見ても備品関係はよくある国公立系の学習机と椅子が並んでいた。

穹の教室は何処だろうか、と思い各教室を見て回ったが机やロッカーにネームは無く見つけることはできなかった。

スクールアイドル部の部室や屋上、生徒会室や講堂を覗いてみたが誰も居なかった。どうやら今日はスクールアイドル部の活動はないらしい。

不思議なことに散々校内を歩き回ったが、誰とも会うことは無かった。夏休みともなるとそんなものなのかも知れないが、何時しか校庭や体育館からの運動部の練習音も聞こえなくなっていた。

何だが不思議の国に迷い込んだアリスのような、現実から隔絶された場所にいるかのような錯覚に陥る。

学校とはある種特殊なコミュニティで、独特な法則で成り立っている世界だ。だからある意味隔絶された場所であるのは間違いないのだが。

しかし、校内を見て回って私はある確信をした。ここには私にとって特別なものはないのだと。

ないのだ、なにも。私と関わる物語が。積み重ねた思い出が。

ここにあったのは漠然とした憧れと、叶わなかった未来予想図。具体性が無かったからこそ見た夢の名残だ。

だから未練はあるし、穹のことは気掛かりではあるけれど、特別大切であるとは思えなかった。私にとっての母校とはもはや浦の星女学院であると自覚した。

きつとμ×sにとつてもそうだったのだろう。どうしようもなく母校で、積み重ねた思い出があり、だからこそ特別で、守りたいと思えたのだろう。

なんとなく新しい気づきを得た私は、最後に音楽室に立ち寄った。

梨子先輩が練習していた場所。それ以前にはμ×sの西木野真姫が作曲などをしていた場所だという。

私は何の気も無しに音楽室へと歩み寄ると、室内からピアノを弾く音が聞こえた。

ようやく第一村人発見かと、思いながら音楽室の中をのぞき見ると、ピアノを弾いていたのは赤毛の小学生くらいの女の子だった。

本来ならば何故小学生が、とか疑問は色々湧く筈のだが、この時の私はそんな事を考えつきもしなかった。それだけ小さな彼女がピアノを弾く姿が自然体でとても楽しそうだったからだ。

私はまるで誘蛾灯に惹かれる様に音楽室へと入った。

「あれ？お姉ちゃんどうしたの？」

赤毛ちゃんは好奇心に満ちあふれた大きな目を向けてきた。

「うん。ちょっと探検してたのかな」

「探検？楽しかった？何か見つかった？」

「そうだね。見つかったかな。うん。少しはケジメが付けられた気分にはなれたよ」

「ケジメ？」

「そ、ケジメ。この学校に対する私のコンプレックスのね」

「ここに来たかったの？」

「うん。友達とね、一緒ね通えたらいいねって話してたんだ」

「私もね、大好きなみんなと一緒にがいいの分かるよ」

赤毛ちゃんは曇り無い笑顔でストレートに感情を吐露してくれる。その言葉がすつと心に入り込み、ついつい私も素直に喋ってしまった。

「きつと本当に大切なのは場所じゃなかったと思う。一緒にいればそこが私にとっての大切な場所になるんだって今ならそう思う。だから今の私にはこの学校よりも浦の星女学院の方が大切に思えるんだ」

「音ノ木坂学院は？嫌いになっちゃった？」

「そんなことないよ。だってここには穹がいるんだから。だから特別。でもそれは大切とか守りたいとかとはちよつと違うかな」

「むずいね」

「ごめんね。こんな話しをして練習の邪魔しちゃって」

私はじゃあね、と手を振って音楽室を後にした。

赤毛ちゃんは私にバイバイと言って再びピアノを弾き始める。

このキャッチーなメロディーは μ \boxtimes s の Music S. T.

A. R. T!!”だ。

思わず躍りたくなるアップテンポなリズムに見送られ、私は校舎を後にすると正門前で並んで一礼するみんなと合流した。

「穹ちゃんと会えた？」

「居なかったです。やっぱり家を訪ねてみよー」

不意に訪れたメッセージを知らせるバイブレーションに私はスマホをポケットから取り出した。

そこには待ち望んでいた人物からのメッセージの着信があった。

「やっぱりまた出直そうと思います」

ほら、と私は苦笑いしつつスマホに表示されたメッセージをみんなに見せた。

そこにはこう書かれている。「ごめん。また今度。今バイクの免許取りに合宿行ってるから」と。

ようやく？がった。それだけでも大きな一歩だ。

第八十一話

早いもので沼津に帰るには夕方には東京を出ないと深夜になってしまう。それだけ東京と、ついでに言えば埼玉からは距離があるのだ。場所が離れば心も離れるとはある種の真理なのかもしれない。けれど、繋がりには消えないのだ。その可能性を私は今日感じた。

「みんなは何か得られましたか？」

「なんとなく、かな」

私の問い掛けに答えたのは曜先輩だった。曜先輩はどちらかと言えば感覚派な人だから細かいことを言葉にするのは苦手な部類に入る。だが、だからこそ彼女の感じたことは間違いないものであると思える。

「今日ね、音ノ木坂学院の生徒に教えて貰ったんだ。μ×sが何を言っていたのか」

「何て言っていたの？」

「気持ちには？がっているからいいんだよって、言っていたんだって」

嬉しそうに語るのはルビィちゃんだ。ルビィちゃんとダイヤさんはドルオタだけあり音ノ木坂にはずっと来たそうにしていた。だからμ×sが何も物を残していなくても、その言葉だけで千金の価値がある。

μ×sが残したその言葉、そして楽曲や、語り継がれる彼女達の軌跡。活動指針「みんなで叶える物語」。Saint Snowから問われた時には答えられなかったが、それらのピースを思い起こすと彼女達は別にラブライブで勝ちたいから活動していた訳では無いことがよく分かる。

μ×sの活動は、もちろん自分達が楽しいのは確かにあっただろうが、その裏には常に誰かのためという側面があった。学校のため、仲間のため、応援してくれるみんなのためだ。

それが原動力になり、彼女達の物語となった。

μ×sが結成された当初からある種王者として君臨していたA—R I S Eとの最大の違いはそこだ。μ×sには共に歩んだという共感が

あったのだ。だから喜びを、笑顔を分かち合えるからこそ、みんなが好きになった。だからラブライブでも優勝できたのだと、私はそう思う。

みんなはどう思ったのだろうか？そして統廃合の危機にある浦の星女学院を今後どのようなにしていくのだろうか？

「浦女の統廃合って話しは進んでるんですか？それに来年の入学希望者って今のところどうなんですか？」

私の問いに鞠莉さんは僅かに表情を曇らせたが、飄々と溜息交じりに答えた。

「入学希望者はまだ分からないけど、入学説明会の参加希望者は0」「0、ですか」

学園長という立場である彼女の言葉なのだから間違いの無い事実なのだろう。

しかし、A q o u r s が花火大会でパフォーマンスしたりラブライブ予備予選を突破したことは、厳密には断言できないが入希望者を増やすことには？がっていないようだ。

その事実は思った以上に堪えた。学校を大切であると自覚した今、それがより顕著に感じられた。

沼津の人口は東京のそれとは比べようのないほど少ない。その中でも更に端にある浦の星女学院は条件がそもそも悪いのだ。それを覆せるほどの魅力をどのように発信すれば良いのだろうか？

みんなも今日のことや今後のことを纏めているのか、電車の車窓から海の景色を眺めていた。

私もまた、同じようにぼんやりと茜色に染まる海を眺めた。東に沈む太陽が染める色は空と海の境界を曖昧にし、沈んでいる最中にも関わらず沈むことはない主張しているかのようだ。

「海見に行かない？」

そんな幻想的な景色に惹かれたのか千歌先輩が根府川駅に停車中、急に立ち上がると電車から駆け下りてしまった。

放っておく訳にもいかないので私達は急いで荷物を持って千歌先輩を追い掛ける。

千歌先輩は何かに取り憑かれたように真つ直ぐに改札を出ると、高架線下をくぐり抜け、砂浜へと出た。

そこには先程電車で見たよりも大きく広がる景色があった。

「綺麗」

内浦の海から見る夕暮れも勿論魅力的だが、この景色はきつとそこでは見ることの出来ない何か惹かれるものがあつた。まるで夢を見ているようなふわりとした感覚だ。けれど断言できるのはこの景色を私は忘れることはないだろうということだ。

千歌先輩は考えが纏まつたのか、みんなに語り出した。μ×sのこ
とを。

「多分比べたら駄目なんだよ。追い掛けちゃ駄目なんだよ。μ×sも、
ラブライブも、輝きも」

それは何かを目標に始めた人にとっての壁だ。

目標にはどうやってもなることはできないのだ。できるのは目標に似た何かであつて、目標そのものでは無い。当然だ。土台が違うし、積み重ねたものが違うし、何より人が違うのだから。だからただ真似るだけでは、目指すだけでは駄目なのだ。

それはきつとμ×sにとつてμ×sに憧れたスクールアイドルに氣付いて欲しい事実なのだと思う。

「一番になりたいとか、誰かに勝ちたいとかμ×sってそうじゃなかったんじゃないかな?」

「うん。μ×sの凄いところってきつと何も無いところを何も無い場所を思いつきり走つたことだと思う。みんなの夢を叶えるために。自由に、真つ直ぐに。だから飛べたんだ」

それこそがμ×sの物語を作つた。だからこそみんなが応援したのだ。

「μ×sみたいに輝くつて事はμ×sの背中を追い掛けることじゃない。自由に走るつてことなんじゃないかな? 全身全霊、何にも囚われずに、自分達の気持ちに従つて」

それに氣付くことの出来た千歌先輩は憑きものが取れたように晴れやかな顔をしていた。

きつと千歌先輩はμ☒sを目指してからずっと考え続けていたのだろう。だからこそ成長出来たし、壁にもぶち当たった。けれど、それは確かに千歌先輩の、いや、Aqoursの物語になる切っ掛けになった。

昨日までの自分を否定はしない。けれど、それを糧にAqoursはきつと走り出す。

「何処に向かって走るの?」

「私は0を1にしたい。あの時のままで終わりたくない。それが今向かいたいところ」

故に、その宣言に迷いも涙も無かった。

あり得ないほど綺麗な夕暮れの中、私は円陣を組み始めた彼女達を静かに見ていた。その中にも一つの変化があった。

手を合わせるのでは無く、みんなの指で一つの0を作ってからそれぞれ1を作るというものだ。

step 0 to 1、走り始めた彼女達の合い言葉だ。

私はそれを見て感じたことを素直に表現しようと思う。懐からハーモニカを取り出し演奏を始めた。曲はμ☒sの二年生ユニット曲、〃ススメ↓トウモロウ〃。明日を夢見る私達の応援歌だ。

第八十二話

音ノ木坂学院で穹から返事があつてから、穹とはそれほど多くのやりとりはしていない。

『電話していい?』

『だめ』

『合宿免許は何時終わるの?』

『終わったら連絡する』

『待つてるよ』

それだけだ。

もともと穹も私も女にしては文章を飾らない。だから酷く淡々とした内容になっている。

電話が駄目のくだけは穹の心中でどのような感情があつて言っているのか判らないが、無視されてない以上はもう一度話すチャンスはあるということだ。けれど急いてはいけない。私が穹に連絡を取るのにこれだけの時間が掛かったのだ。穹からすれば腑に落ちない時間を私と同じ期間過ごし、急に私から連絡が来て驚きだけではない気持ちが必要なのだ。

彼女のタイミングが良いときに会おう。そしてこれまで離れていた期間のこと、一緒に居た時に隠していた気持ち、そして今後のことを曝け出して話すのだ。

私は蒸し暑い図書室の窓を全開に開け放ちながらそう気持ちを整理した。

今日は久し振りに図書室に来た。鞠莉さんの学園長特権で図書室の利用をセルフサービスにしていたのだが、花丸ちゃんの代理とは言え私も図書委員の端くれ、流石に放置のしすぎは良くないだろうと思いい、図書室の空気の入れ換えと本棚の整理に来たのだ。

空調設備が未熟で冷暖房がないこの学校の図書室で私はせめてもと扇風機を全開で回し、本棚の整理を始めた。

人と土地には自ずと歴史が刻まれるが、この図書室もまた歴史があつた。

経年により色あせた本、一時は人気があつたのか角や背表紙が擦れた本、落書きされた本など、種々様々な人の軌跡がある。

私が知らないだけでここには多くの人が居たのだ。私が知らない多くの物語があつたのだ。それに思いを馳せながら本棚の整理を黙々と進めていく。

このままこの学校が統廃合された時、ここにある人の軌跡は誰が引き継ぐのだろうか？

その軌跡の中には私達ももう含まれているのだ。

まだ終わりたくない。東京に行つて穹と連絡が取れてから私の中にはまだ終われないという感情が芽生えていた。

穹と和解できるかは判らない。けれどせめて穹に恥じないようになりたい。その気持ちを育ててくれたのがみんなで、だから私はみんなと出会えたここを好きになれた。好きになれたからそこに関わつた人達の重みを大切にしたいのだ。

みんなも学校が大切だと思ふ気持ちは同じだった。

東京から帰つてきてから、みんなはどうすれば学校を統廃合の危機から救えるのか真剣に考えていた。スクールアイドルである自分達に何が出来るのかと。

今日もまた屋上で元気良く練習するみんなの声が開け放つた窓の外から聞こえてくる。

みんなはスクールアイドルだ。スクールアイドルは学校だつて救える。μ'sという前例があるのだから。けれど、みんなはμ'sとは違うし、環境だつて東京と比べてしまつたら大違いだ。

だが、それは諦める理由には、やらない理由にはならない。

彼女達は、A q o u r s は、自分達の道を進むと、物語を作つていくと決めたのだ。その先に何があるのかは判らないけど、それが彼女達のイデオロギーになつたのだ。

「軽やかに 緩やかに 時は過ぎていくけれどー」

私はそんなみんなの心意気に感化されたのか、気が付けば懐かしいフレーズを口ずさんでいた。それは私と穹が初めて作ったオリジナルソング。歌詞もメロディーラインもちぐはぐな恥ずかしい曲だ。

けれど大切な一步を二人で歩み出した曲だ。

私はボーカルではないけれど、作った当初は幾度となく口ずさんだ。穹と離れてからはしなくなっていた。心の奥底に蓋をしていた。けれど、穹と連絡が取れてどうやら私の心の蓋は外れかけているらしい。口から溢れ出した歌は止まることはなかった。

「鮮やかに 艶やかに 私達は過ごしていく

今を飾って良いじゃない？

楽しまなけりや損でしょ？

だから、みんな奏でていこう

音を繋げて 口ずさんで リズム刻んで作ろう

心踊れるこの時を

だから今を 共に輝くよ 星の導きのように”

口ずさんだ歌は、やっぱり私の声ではしつくり来なかった。けれど、久し振りに口にした歌は、他のどの曲よりも私の心を震わせた。

この曲を作った時はただただ楽しかった。初めて穹と奏でた時はどこか気恥ずかしく、それでいて誇らしいと思った。もしかた穹とこの曲を奏でることが出来たのなら、今度は誰かのために奏でてみたい。

歌は、音楽は作られてしまえば変わらない。その中に込める気持ちで意味の違いを持たせられる。そういった意味で音楽には果てがなく、未熟な私達が作ったそれも変化し続けるのだ。

今は私の音楽を誰かのためには奏でられないだろう。けれど、穹と会えたら私はみんなに聴かせてあげようと思う。いつも私は貰ってばかりなのだ、たまには返さなければならぬ。

私は図書室の整理が終わってから一度学食の自販機に飲み物を買に行った。練習するみんなへの差し入れだ。今はこういう形でみんなに少しずつでも返していこうと思っている。

第八十三話

かんかんミカン、では無くカンカン照りの屋上で汗水垂らしてダンスレツスンするA q o u r sの面々。ラブライブ予選で披露する曲は作成中の新曲だ。

これまでの私なら、あくまでも彼女達の活動は彼女達のものであると線を引き、積極的にパフォーマンスに関わろうとはしなかっただろう。けれど、今はそういう垣根を拘らなくなった。積極的にあしろ、こうしろなどとは言わない。けれどこうした方が良いんじゃないかと思いついたらその情報を共有するようになった。

「星ちゃん水、水を」

「はいはい」

練習も一区切りつき、へとへとになった花丸ちゃんから催促が。

私は自販機で買ったスポーツドリンクを苦笑いしながら手渡した。

「どうです練習のほうは？」

「見る？」

ダンスは動画撮影し、水分補給の間に動画を確認して、都度フォームを修正する。そうやって練習を進めているのだ。

曜先輩に勧められるまま私も動画をチェックさせてもらう。

みんな流石に練習を積み重ねただけあって淀みない、それにタイミングも合わせられている。けれど、一つ疑問が湧いた。

「折角のセンターステージなのに横一列でやるんですか？」

「へ？センターステージ？」

「今度やるガイシホールのセット見てないんですか」

私はスマホで今回のラブライブ予選のページからガイシホールでのステージの概要が載っているページを表示させるとみんなに見せた。

そこに映し出されているのはガイシホールの中央に浮島のようにポツンと一つ円形のセンターステージがあった。メインステージが無いという珍しい構図だ。

「ま、まずは基本から覚えなきゃだし？これから少しずつ修正すると

「ころだったんだよ」

「そういうことにはしておきますか。なんだか千歌先輩最近悩んでるみたいですけど、それで見落としてましたか?」

上の空、という訳でも練習に集中できていない訳でも無い。ただ、なんとなく考え事をしている様子がある。けれど基本情報を押さえしていないのをそれを理由にはいけない。

「う・・・まあ、練習して今できる最高の歌とダンスをして、それで良いのかなって思ってた」

「どういうことですか?」

「私達の、A q o u r s のステージはそれでいいのかったこと」

「鞠莉さん?よく分からないですけど」

「私達は私達のミュージックで一人でもハッピーにさせたい」

「それと同時にこの学校への入学希望者を一人でも増やしたい」

「でも、それってどうすればいいのか・・・」

ただ憧れから始まった彼女達は自分達の理由を見付けた。けれど、それはようやくスタートラインに立てたというだけだ。具体的なものは何も決まっていない。その白紙の地図をどう描いていくか、千歌先輩だけではなくみんなが共有する課題として悩んでいるのだ。

「ただ練習して自分を磨いて、チームワークを良くするだけじゃ多分ここから先には進めない」

その「先」という言葉はラブライブのことだけでは無い。この学校の未来がという意味を多分に含んでいる。

自分達だけで学校を背負うなど烏澁がましいことを言うつもりは無い。けれど、学校の顔としてフラッグシップとしての自負からそう思うのだろうか。

「やっぱり居た」

「あれ?三人ともどうしたの?」

物好きなことに屋上に顔を覗かせたのは千歌先輩達二年生のクラスメート、通称四五六トリオだ。

「図書室に本を返しに来ただけ、屋上からみんなの声が聞こえたからさ」

「そうなんだ」

「こんな暑いのに練習して、倒れないでよ」

「大丈夫、無理はしないよ。それに毎日練習してたから体も慣れてきたし」

「毎日・・・」

四五六トリオはその言葉に驚愕していた。

千歌先輩はこれまで何かに夢中になるほどのめり込むものは無かったという。私よりもずっと付き合いの長いクラスメートからすればこの茹だるような暑さを押しでも練習する千歌先輩というのは想像できなかったのだろう。

スクールアイドルをやっていることは知っていてもその活動の全てをみんなが知っている訳では無いのだ。

「千歌達はさ、学校を救おうとしてるんだよね」
「うん」

「統廃合の話があつてからみんな最初はしようがないねって話してたんだ。でもね、やっぱり無くなって欲しくないって、そう思うようになったんだ。私達だけじゃなくて、他の子も」

「そっか。私達だけじゃなかったんだ」

千歌先輩や他のみんなもその言葉に救われたように安堵表情を浮かべた。

自分達の頑張りは決して独りよがりの事では無いのだと、分かっているつもりだったけれど、やはり言葉にしてもらうと心に響くものがあるのだ。

「それでね、私達にも何か出来ないかってみんな話してて。千歌達みたいになってのは無理かもしれないけど」

四五六トリオの三人は千歌先輩達に対する羨望の眼差しと、自分達ではそうは成れないという諦めの混在した曰く言いがたい左右非対称な表情をしていた。

その顔を私は知っている。ちょっと前の私と同じ、自分の事を諦めてただA q o u r sという光を見ることしかできなかった私だ。

「やろうよ。できるよ。だって私達だって最初はそうだったんだか

ら」

「いいの?」

「うん。きつと素敵なステージになる」

「え?ちよつと千歌先輩?それ大丈夫なんですか?レギュレーション的に」

「え?駄目なの?」

「知りませんよ、調べないと」

千歌先輩は興奮のままAquoursのステージに三人を、いや賛同者を参加させようと口走っていたのを私は慌てて止めた。

気持ちは分かる。クラスメートにとつての憧れの対象がAquoursというのは千歌先輩の立場に置き換えれば自分にとつてのμ'sとなるのだ。人を惹きつける、楽しませる、幸せにする、それを目標に掲げ、その一人が目の前にいるのだから嬉しいに決まっている。

それに考え無しに賛同者をステージに立たせるという訳では無いのも分かる。数というのは力だ。それは民主主義とかそういう実在的な話ではない。単純に人が大勢いるということはそれだけの圧を呼ぶ。実際、μ'sが全国のスクールアイドルを招集し、SUNNY DAY SONG”を全員で披露したのは今でも伝説に残る程の感動と反響を呼んだのだ。そこまでの規模には到底及ばないけれど、それでも上手く伝えられればきつと素敵だろう。

けれど、現実問題として出来ない約束は出来ない。

「こんなマニアックなパターンはQ&Aにも多分ないでしょうから、すぐには調べられないかもしれませんが、調べておきますよ」

「お願い。それじゃあ、大丈夫だった時に備えてみんなに声掛けて貰える?同じ想いがあるなら私は一緒にやりたい」

「わかった」

「よし。なんだかイメージが湧いてきた!ちよつと走ってくる!」

「ちよ、千歌ちゃん!?熱中症になるよ」

「じゃあ泳いでくる」

千歌先輩はそう言って屋上から飛び出し、一分後にはプールに飛び込んでいた。

きつと千歌先輩は今のやりとりに何かを見いだしたのだ。見れば他のみんなも苦笑いしながらも少し晴れた顔をしている。どうやら閃きを得たのは千歌先輩だけではないらしい。

「私達も今日は体力作りの日にしようか」

「賛成。じゃ、よーい、どんっ」

「こらっ、廊下を走ってはブツブツですわ」

私は四五六トリオと共に屋上から走り去るAqoursの面々の背中を見送った。

「折角ですし、一曲聴いていきますか？」

私は苦笑いしつつ懐からハーモニカを取り出してそう提案した。

「リクエストいい？」

「どうぞ」

「B'zのultra soul」

「丁度いいチョイスだと思いますよ」

説明不要の水泳大会のテーマ曲だ。プールの中にはもってこいだろう。そしてこれから頑張ることとなる彼女達へのエールとしてもこれ以上はないだろう。

私は頑張れ、と応援の意味を込め、いつもよりも大きめに演奏した。きつとそれはプールにいる皆にも届いていると、そう思う。

第八十四話

学校の有志を集いラブライブ予選に挑む。それはともすれば風車に突撃するドン・キホーテのように蛮勇と称されるかもしれない。けれどその心意気を上手く表現できれば共感を呼ぶことができるかもしれない。けれど、私にはその方法が分からない。私はいつだって音楽で気持ちを伝えて来たから、それ以外の方法は分からない。だから私にできることはみんなの心意気を無駄にしないよう、ルールの可能なかどうか調べることだけだ。

「まだ返信なし、か」

だが、ラブライブの運営に問い合わせをして数日、まだその返信は来ていない。

私はスマホをポケットにしまうと生地を漁るルビイちゃんも曜先輩合流した。今日は衣装作成のため手芸用品店や雑貨屋などを梯子しているのだ。

「これ可愛いですよ、曜さん」

「いや、そうなんだけど、みんなとステージに経つなら私達だけフリフリのアイドル衣装じゃバランス悪いでしょ」

「じゃあ指揮者みたいな感じでどうかな？」

「シユツとして洗練された感じの衣装か。いいかもね」

ラブライブ予選に向けての衣装デザインについてはルビイちゃんと曜先輩が担当している。故に実際の生地を見てイメージを膨らませようとこうして沼津市内まで足を運んでいるのだ。

「制服に追加で装飾するってのはどう？」

「それだともし私達しかステージに立てない時に余りステージ映えしなくなっちゃう」

「規約を見る限り、予選はエントリー外の人は出られなそうなんですよ。だから追加エントリーではどうかと思っただけで問い合わせはしてるんですが、まだ返答がないんですよ。だから両睨みで対応しないと間に合いませんよ」

物理的な制約としても何人集まるか分からない生徒分のオプショ

ンパーツを作るよりAqoursメンバー分の衣装を新調した方がコストも手間も掛からないだろう。

「でも折角参加するならみんなお揃いでやりたいよね」

学校のみんなで同じ衣装を身に纏いステージに立つ。そこには中心にAqoursがいて、その周りに私や先輩達のクラスメートがいる。そんな風景を想像して、壮観であるという感想を持つと共に、ちよつとした違和感を感じた。それはAqoursの面々と私や他の生徒は同じステージに居ながら、同じ場所に立ててないように思えたのだ。

「二人は他の子とステージに立つってこと、どう思う?」

「温かく応援してくれてたみんなと今度は一緒に歌えるってなんか本当にスクールアイドルになれた感じがする」

「それは今更でしょ、ルビィちゃん」

ルビィちゃんの言葉に苦笑しつつ、私はルビィちゃんの言いたいことも分かる気がした。

始めたころはただ楽しくて、けれどそれはルビィちゃんがダイヤさんとやっていたスクールアイドルごっこ遊びの延長線に過ぎなかった。それから色々な経験を重ね、ルビィちゃんなりにスクールアイドルとは何なのか? Aqoursとはどんなスクールアイドルなのかを考えるようになった。だから誰かに夢を、希望を、笑顔を与える存在になれた時、本当の意味で自分もアイドルの端くれになれたと、そう実感したのでろう。

「でも、それって同じステージに立つこととは違うんじゃないかな?」

「星ちゃんは反対なの?」

「そういう訳じゃ無いけどー」

一番しつくりくる言葉は分かりやすい反面、それを言うことは適切ではないようにも思えて言い淀んでしまう。

「いいよ、言いなよ」

けれど、そうやって思ったことを言えない仲ではもうない。曜先輩に促され、私は確かに感じた思いを形にした。

「Aqoursと他の子は同じステージに立つても対等じゃないと思

う」

「どういうこと？」

「他の子達はスクールアイドルじゃない。みんなに惹かれたり、学校をなんとかしたいって思ったり、そういう色々な気持ちがあるからがついて、たぶんみんなに同調することではか気持ちを表現できないんじゃないかと思う。それってなんか違うと思う」

「本当の想いは自分の意志で伝えないと嘘ってこと？」

「そこまでは言わないけど、ただ追随するだけじゃ多分魅力的には映らないと思う」

「手厳しいね」

「曜先輩は？」

「私はみんなの気持ちを汲めることが一番大切だと思う。星ちゃんが言ってたみたいに慣れとか、学校をなんとかしたいって気持ちとか、それを一番良い形にできればいいんじゃないかな。それこそ私達が指揮者みたいにみんなを引っ張ってさ。そうだ、ルビイちゃん！」

「はい。私もいい案が浮かびました」

「色は？」

「白」

曜先輩はどんどんとアイデアをメモに纏め、絵心のあるルビイちゃんはラフ画を凄いいスピードで描き上げる。

「どうやら衣装の件については解決したらしい。」

「なら私も一つ、もしみんなでステージに立つところになった時に困らないよう、ステージ映えするアイテムを押さえることにしようと思う。」

「すみません。纏めての発注をしたいんですけど」

「雑貨屋に電話をし、サイリウムをざっと100本注文した。」

「これならステージに立つても使えるし、もしステージに立てなくても観客として使える。」

「お金は掛かるが時間も手間も掛からず、どう転んでも役に立つ、我ながらいいチョイスだと思う。」

第八十五話

曜先輩とルビイちゃんと共に沼津市内の商店をまわった翌日、ラブライブの運営から問い合わせについての返信があった。

ラブライブの予備予選のエントリーが始まった時点で浦の星女学院のスクールアイドル部として登録しているメンバー以外のステージでのパフォーマンスは不可であるとのことだった。また、予備通過ごとのメンバー追加申請等は行っていないため、途中加入作戦もできない。ステージと一緒に上がるという目論見は崩れてしまった。

どんな形でもいいから力になりたいと申し出てくれたみんなにどのように説明すべきだろうか？

私は結果報告と相談のため今日もまたみんなの練習する学校の屋上に足を運んだ。

「そっか、駄目なんだ」

「その分、頑張らないとですね」

「その前にみんなに話さない」と

みんなでステージには立てないと聴き、千歌先輩は落胆していた。けれど、みんなへの配慮を忘れないあたりは流石だ。

「なら家庭訪問かしら？聴いたところ全校生徒が賛同してるって話だし」

「なんか先生みたいですわね」

「私、学園長ですから」

鞠莉さんは冗談めかして人が率先してやりたがらないことを引き受けようとする。さり気なく学園長だからと理由付けしてるのが抜け目ない。

「私も同席します。生徒会長ですから。お二人は気持ちを伝えるのは上手いかもしれないですが、上手くは説明できないでしょ」

感覚派の二人に任せては不安だと名乗りを上げるダイヤさん。しかし、一つ忘れて貰っては困ることがある。

「私も同席しますよ。問い合わせする際に色々と調べてますので細かい質疑応答にも対応できますから。その代わり、他のみんなはパ

フォーマンズの構成を考えてください」

そう、私だ。私はスクールアイドル部の、A q o u r s の一員ではない。けれど、この学校の誰よりも寄り添って彼女達のことを見て来た。だから、彼女達側の人間として力になりたい。そしてそんな立場の私だからこそ A q o u r s のみんなと学校の子達の架け橋となれると思うのだ。

「じゃあ、この学校みんなとこの学校の魅力を一つつつ杯、詰め込んだステージにしよう」

「ふ、革命の時、来たれり」

「やめるすら」

何時までも引きずってもしかたないと、曜先輩に善子ちゃん、花丸ちゃんが空気を替える。

そんないつものやり取りに絆されたわけではないけれど、一先ず練習を再開しようと各員ウォームアップを始める。

「千歌、来たよ」

「あ、練習に誘ってたんだって」

ただし、練習が再開されることはなかった。千歌先輩達二年生組の同級生、通称四五六トリオが屋上に顔を出したのだ。これには流石に私も心の準備ができていなかった。

「あ、みんなごめん。ステージ立てないや」

けれど、千歌先輩はしれっと、雑に、ざっくばらんに参加不可を告げた。

「そうなんだ」

「うん。エントリーしてないから駄目なんだって」

「うん」

その有無を言う余地の無いシンプルさが寧ろよかったのか、四五六トリオは残念そうにはしていたけれどこれといった波風はたたなかつた。

「じゃあ千歌。みんなには私から伝えとくから、託したって」

「うん」

「先輩方。良ければ見学、していきませんか？」

「そうね。折角だしお邪魔するね」

千歌先輩とのやりとりは非常に短かった。けれど、そこに込められた感情の熱量は横で見ていると思わず汗が滲み出る程だった。それもそうだろう。その熱量は彼女に賛同する生徒、つまり全校生徒の持つ気持ちの総量なのだから。

「私ね、ううん。私達ね、例えステージに立てなくてもみんなを応援したいって、学校をなんとかしたいって気持ちは変わらない」

「みんなが頑張っている姿を見ると、不思議と応援したくなるんだ。そんな気持ちもみんなにも分かかって貰えたらきつと学校だって救えると思う」

「だから応援するよ、みんな。私達の学校にいるスクールアイドルはみんなに愛されてるんだって、みんなに分かってもらいたいから」

一瞬でも煌びやかな舞台を夢見ただろう。銀河の海のようなサイリウムの煌めき、地鳴りのような声援、空を飛んでいるような高揚感。そんな感動を夢想した筈だ。それが叶わないと知って落ち込んでいる筈なのに、なぜこの学校人はこんなにも温かいのだろうか？

私は厚顔にも、A q o u r s 以外がステージに立つことに難色を示していたにも関わらず質問をぶつけてしまった。

「なんで、そんなに平然としているんですか？」

「だって、私達はスクールアイドルじゃないもん」

「みんなと同じ想いを抱いてもいるし、そうじゃない部分もある」

「私達の一番はステージに立つことじゃない。学校を存続させることだからね」

「でも」

「そりゃあ一緒にステージに上がれるかもって舞い上がりもしたけど、そこはやっぱり私達の立つステージじゃないんだよ」

「実はこないだ星ちゃんも演奏してくれたじゃない？その時にそう思ったんだ」

「演奏しているときのあそ場所は確かに星ちゃんのステージだった。だから、人にはそれぞれの立つべきステージがあるんだって、そう感じただ」

言うなればそれは棲み分けの話だ。AqoursにはAqoursの、私には私の、そして彼女達には彼女達の戦うべき場所があるのだ。それが、今回はニアミスしただけ。

なんてことのない思いも寄らぬ急接近したに過ぎない。

「みなさん、ウォームアップしながら聴いて下さい」

私はみんなにそう告げると懐からハーモニカを取り出す。

曲は“Snow halation”。μ'sの楽曲の中でも不動のラブソングだ。

その歌詞に込められた内容を紐解くと、少し強引な解釈かもしれないが、必ずしも対象を人と限定しない。

だからこれは新しい発見と挑戦の曲ともとれるのだと私は思っている。

だから、Aqoursに感化かれ自分達の本心と出会った彼女達に私はこの曲を贈る。

炎天下の夏の太陽の下、雪のように白いのはきつと心の中に灯った光なのだろう。

第八十六話

ラブライブ予選に用意しているのはAqoursの最新曲。その編曲の最終調整が終わり、梨子先輩と私、花丸ちゃんはようやく心地つくことができた。

「ようやくできましたね」

「ええ。ありがとう、二人とも。星ちゃんの編集力があつたから効率よくできたし、花丸ちゃんがリードボーカルしてくれたお陰で流れを損なわない編曲になったよ」

梨子先輩は編曲、私はデータ編集、花丸ちゃんがモニターとして実際に曲を流して歌ったのだが、なかなかどうして、壮大な曲になった。特に入りの繰り返し返す度に増える楽器、そして一端落ち着けてからの総出演は聴くたびにワクワクする。なんというか既存の曲で例えるならば“A Whole New World”、豪華さがうるさくない曲だ。

「珍しいですよね。こんなオケ風な編曲をしたのは」

「そうね。これまで積み重ねてきたから出せる味なんだと思う」

「これまでのAqoursの歩みを象徴する曲ってことですか？」

「それだけじゃない。これから始める曲でもある」

「だからタイトルがMIRAI TICKETすら」

編曲が終わるとちよつとした講義会になった。この曲を作った感想や展望を話す梨子先輩や花丸ちゃんはとても良い表情をしていた。「今までは惚れを追い掛けるようなテーマでしたけど、今回は惚れになるというテーマでしたね」

「ただ追い掛けるだけじゃない。それをこないだ自覚したからね」

「歌詞からも読み取れますね、それは」

実際気持ちいいくらいにストリートな歌詞だ。それで居ながら積み重ねたもの、そしてAqoursらしさを含んだ歌詞の巧さを感じる一作だ。

「花丸ちゃんは流石に歌上手いね」

「うん。歌は昔から好きだったんだ。歌は短いけど一つの物語だった

り、一時の感情だったり、意義だったり。色んな表情があつて歌つて
る時はその世界に入り込めるから好きになつたの」

「本が好きな理由と根本的には同じだったんだ。それなら中学時代に
ルビイちゃんとカラオケ行ったりはしなかったの？」

よく花丸ちゃんは目新しい機械を見ると未来ずら未来ずらと興味
津々に騒ぎ出すのだが、沼津市内でルビイちゃんと遊び歩いていれば
市内にある設備など慣れたものであると思うのだ。

「ルビイちゃん家は厳しいからそういう風に長時間遊んだりはできな
かつたの」

「ああ、それ納得」

黒澤家はその家柄もあり結構厳しいらしい。ただし、節度を持って
行動すれば多少のことは大丈夫なようでスクールアイドル活動につ
いてもそれで通しているようだ。

「明日からダンス練習に専念できますね」

「ダンスはまだ苦手ずら」

「でも、私も花丸ちゃんも最初の頃に比べれば体力着いたよね」

感慨深そうに梨子先輩が言うと花丸ちゃんも深く頷いていた。

確かにピアノばかり弾いてた引き籠もりの梨子先輩と本の虫に
なっていた花丸ちゃんの運動能力は同世代の平均水準よりちよつと
下だった。けれどスクールアイドル活動を通じてダンスをしたり基
礎トレをしたりとした結果、元が低かったただけあり肉体的なポテン
シャルの成長率ではA q o u r s のなかでも1位、2位を争う。

「今の梨子先輩と花丸ちゃんそのものがある意味でこれまでの歩みを
物語っている訳ですね」

「生活習慣とか趣向も少し変わってきて、昔はそんな事無かったのに
最近リアルゴールドばかり飲んでる」

「オラもお鍋を混ぜながら空いてる手で振付してたりとか」

スクールアイドルあるあるなのだろう。今度は梨子先輩が深く頷
いている。

毎日会っているとついつい見落としてしまいそんな細かなところ
で変化し続けているのだろう。しかし、梨子先輩のリアルゴールドに

ついでには触れないでおこうと思つてたことだが、自らネタをぶつ込んできたあたり梨子先輩は侮れない。

「みんな一歩、ううん。もしかしたらそれと気付かないくらいかもしれないけど少しずつ変わつてる」

「それはオラ達だけじゃない。学校のみんなもそうずら。だから千歌さんのクラスメートの方が学校のために何か出来ないかと思つてゐるって知つた時それを感じたんだ」

「もう頓挫してしまいましたが、二人はみんなとステージに立つってこと、どう思つてたの?」

「正直に言えば私は全面的には賛成じゃなかったかな。学校を救うために学校のみんなど力を合わせるその方針には賛成。でも一緒にステージに立つのはちよつと違う気がしてたかな」

「オラはやり方次第ではそれでも良かったと思つてたかな。ほら、オラ聖歌隊に入つてるでしょ?だからあんな風に合唱するとまた違つた歌の響きになるのかなつて」

「そつか。じゃあ、みんなが同じステージに立てなくなった今、みんなの想いをどう表現していく?」

曲は出来た。ダンスも完成形は見えている。あとはそれに近づけるように練習するだけだ。けれど、それだけで足りているのだろうかとずっと考え続けている。私も、千歌先輩も、いや多分A q o u r sのみんな同じ様な想いはあると思う。

「星ちゃん。気持ちの伝え方は音楽だけじゃないよ」

「どういうことですか?」

「まだぼんやりとしか分からない」

「けど、歌つて躍るだけがスクールアイドルじゃない。今はそんな気持ちしか分からない」

歌つて躍るだけがスクールアイドルではない。それはかつて私もそう思い、高校生活の音楽活動の場としてスクールアイドルになるうと考へていた。私のように考へ、アイドルなんて柄じゃないガチのガールズバンドグループなんかもスクールアイドルとして登録したりもするのだ。けれど、それがどのようにつながるのだ

ろうか？

「さ、一段落したし晩ご飯食べていくでしょ？」

「いただくすらー」

いくら考えても全く妙案が浮かばない。けれど私には思いも付かないことをみんなはしてくれそうだと、そんな予感が私の胸を高鳴らせた。

第八十七話

何故こんなことになったのだろうか？と後悔したことはあるか？そう問い掛けられたら私は間違いない、ある、と答える。そして今、学校のプールサイドで濡れた体で私は後悔真つ只中にいる。

「はい。あと10往復は軽いかな」

「重いです。軽いのは果南さんだけです」

学校の25mプール。それでも10往復もすれば500mだ。水泳初心者からすれば重労働だ。

私は今、善子ちゃん、ダイヤさん、ダイヤさんと共に果南さんのトレーニングメニュー体験をしている。

事の発端は善子ちゃんだ。善子ちゃんはAqoursに入ったのが花丸ちゃん達より遅い分、体力面で少し不安があるのか、体力お化けである果南さんにトレーニング方法を教わっていたのだ。よりにもよって果南さんにだ。

聴かれた果南さんは喜んでトレーナーをやると張り切りだしたのが運の尽き。とんとん拍子で体験ツアーが始まりだしたのだ。

私とダイヤさんはどうかと言われれば善子ちゃんの天性の不運に見事に巻き込まれた形だ。

「これでも予選前だから軽めのメニューにしてるんだよ？それにいつもなら波の抵抗のある海で泳ぐんだから」

「ば、化け物」

「私から言わせればハーモニカ吹きながらタップダンスしてる星の方が化け物だけどね」

「見たんですか？」

「もう隠してる訳じゃ無いんでしょ」

「それもそうですね」

別に怒ったわけではない。ただ、不思議な感覚だった。自分からハーモニカを聴かせることはあるが、自分の過去の投稿動画を見せたことはなかったから。

「ちなみに、多分みんな見てると思いますわよ」

「もう今更な話しよ」

「なんとというか、気恥ずかしい。自己紹介で墮天使って言うくらい恥ずかしい」

「なによー!」

呼吸の回復に努めていたダイヤさんと善子ちゃんだが、加入が遅かったとは言え人並み以上の体力は持ち合わせているのか早くも呼吸が整いつつあり会話する余裕を見せていた。

「呼吸も整ったし、次行く?」

「それはご勘弁を」

「というか、星はなんでそんな平気そうなの?」

「やせ我慢。それよりも善子ちゃんは何で急にトレーニングなんて?」

「それは・・・みんなの分も頑張りたかって思ったからよ」

顔を赤くしてそう告白する善子ちゃんは新鮮だった。

善子ちゃんは周囲と合わせたいと思う反面、自分の「本当」を曲げられない性格だ。だからその板挟みになり素直になれない。素直になれないからなかなか人とも馴染めない。けれど、この学校の人はそんなありのままの善子ちゃんを受け入れた。

「それはいい心掛けだと思いますが、無理は禁物ですわよ」

「ああ、ダイヤさんはそのため」

「そ、そんなことありませんわ。ただちよつと運動不足を解消しようとしただけ」

「そう?ならオマケしてあと5往復でいいよ」

「へ?いやああああ」

口は災いの元。ダイヤさんは果南さんに抱きかかえられるとそのままプールへとダイブした。よい子は危険なので真似してはいけないやつだ。

「今更無理して体壊すような真似はしないわよ」

「成る程ね。だから基礎トレなんだ」

「そ。それにしてもまさか私がこんな気持ちになるなんて、屋外で星の演奏を聴いてた頃には考えてもみなかったわ」

「そうだね。善子ちゃんも丸くなったね」

「クックック、墮天使が悪物だと誰が決めた？」

「ああ、こういうところは相変わらずだね」

突如現れる善子ちゃんのアイデンテイテイ。彼女が一番自分らしいと思う自分の姿、墮天使ヨハネ。最初は珍妙で難儀な性格だと思っただけ、慣れるとこれが面白い。

変わったところもあれば変わらないものもある。

「星だつて丸くなったじゃない。最初の頃は何て言うか、捨てられた犬みたいな感じだったわよ」

「そんなにやさぐれてないよ」

「そうじゃないわよ。ただ、誰かの優しさに飢えてて、でもそれを信じていいのだからなくて、行き場の無い、そんな感じだったってこと。その頃に比べれば今は全然良いよ。余裕がある」

「お陰様でね」

不意にそうなことを言われたもんだから今度は私が赤面しそうになる。いや、顔が熱いのはきつと夏の日射しが燦々と照っているからだ。思えば濡れた髪の毛も半乾きになっている。

「はあ、はあ、え、泳力が即ち水中で強いことと同義ではないと分かったかしら？」

ザバンツ、と気持ちいい音を大きく起て、ダイヤさんは水中から上がった。果南さんの足を掴んで。

「はあ、はあ、急にプロレス技を掛けるなんて反則だよ」

「ぶつぶーですわ。急に引き釣り込んだのは果南さんの方でしょう」
どうやら二人は水中にダイブしてから激しくキャットファイトを繰り広げ、ダイヤさんがその戦いに勝ったのだろう。

しかし、ダイヤさんはいっプロレス技など習得したのだろうか？習い事でプロレスをやっているのだろうか？

「あ、教えたの私」

「善子ちゃんも変なこと知ってるね」

「大変助かりましたわ」

「覚えてなさいよ、ダイヤ」

逆恨みの気もするが、果南さんはそう言うとプールサイドに豪快に寝転んだ。

「全く、嬉しいことがあると体を動かしたくなる。昔から変わりませんわね」

ダイヤさんは自然に「昔から」と口にするが、そこに関係がぎくしゃくしていた頃の影はない。たった一度のすれ違いで紡いできた仲を引き裂くことなどなかったということだろう。

ダイヤさん達の関係は私に勇気をくれる。三人を見ていると私も穹とやり直すことが出来るのでは無いかと思える。

「ダイヤこそ。善子がみんなのためって言った時、顔がにやけていたよ。そういうところ、変わらないね」

ずっとみんなのこと、学校のことを気にしていたからこそその思いなのだろう。

変わっていいこともあれば変わらなくてもいいものもある。

きっと三年生の三人が抱いていたそんな想いは変わらないからこそその尊い輝きなのだろう。

第八十八話

だだっ広い会場にはまだみんなが立つてであろうステージは設置されていいない。平坦な空間がぽっかりと空いているだけだ。

客席はその空間を取り囲む壁にしか見えない。いや、例えるならば蟻地獄と言う方が適当かもしれない。空調も停まり、停滞した乾いた空気の漂う今、私にはここがそう感じられた。

「ライブの予選が始まってからずっとこの会場を使ってるみたいですけど、毎回ほぼ満席になるそうです。出場するスクールアイドルの所属する学校の生徒や保護者、それに入学希望の中学生とかも来るみたいですよ」

「この会場か満席に」

今日、私は鞠莉さんと千歌先輩と一緒にライブ予選会場の下見をしに名古屋にある日本ガイシホールにやってきた。

こういった施設はイベントの予定が組まれていない日であれば中の見学は意外と簡単にできる。それどころか貸し切ることすら可能だ。

コンサート会場として見たとき、愛知県内でも最大規模の会場なだけあり、その大きさはA q o u r sのこれまでライブを行ったどの会場よりも大きい。もっとも、数千規模のお客様がいるという条件だけ見れば花火大会のステージがあったが。

「どうしたの千歌っちゃん？ 惚けちゃって」

満席になった様子が想像できないのか口を開いてぼんやりとする千歌先輩に鞠莉さんが声を掛けた。

「この中で私達が歌って、躍ってさ。あの客席にいる人達はどう思うのかなって」

千歌先輩は薄明かりの中、会場の中心から客席に向かって、そこに何かを探すかのように手を彷徨わせる。

私も自分達を取り囲む客席を見渡すと、今はまだ誰も居ない客席が私には遠く感じられた。きっと千歌先輩も、もしかしたら鞠莉さんもまた同じ様に感じているのかもしれない。

「歌が上手い、とかダンスが素敵、とか？」

「うん。そう思われたいとは思うよ。けどー」

「分かった。それじゃ物足りないんだね」

「うん。私達は内浦の、浦の星女学院のスクールアイドルだって知って貰いたい。興味を持って貰いたいって思ってる」

0を1にする。その0とはAqoursの支持者であり、学校の入学希望者である。そして0はスタート地点であり、そこから一歩踏み出すことを命題としてAqoursは再始動したのだ。

「そうね。少しでも入学希望者が増えてくれればってのはあるわね。でも、千歌っち。私はね、廃校とかそういう問題がなくてもきつと同じように思ってたんじゃないかなって思うんだ。」

「私達を見て心を動かして欲しいって？」

「そう」

けれど、それだけが全てでは無いと鞠莉さんは諭すように言った。

「初めてスクールアイドルを見たときどう思った？」

「きらきらしてた。素敵だなって。そうなりたくなって思った！」

「Shinyって感じたでしょ。一瞬だけ思ってたんじゃないかって、その思いがHeartに火を付けたんでしょ？」

「輝きをそうやって人に伝えていく。そんな風になりたい」

禅問答では無いけれど、鞠莉さんと千歌先輩の二人のやりとりを見ていると、そこはある意味で一つのステージが出来ていた。この広い会場の中心で、私というたった一人の観客の中、二人は話しを続ける。私は二人から離れ、アリーナ席に座ってその様子を眺めた。

「私達がなんでそう思ったのか、それをオーディエンスのみんなに教えてあげようよ」

「上手く伝えられるかな・・・私はまだどうすれば良いのか思い付かないんだ」

千歌先輩は少し自信がなさそうに顔を伏せた。普段余り見ない姿だ。けれど私はそれで良いと思う。一人で抱え込まないで悩みも共有して進んで行くこと。それがきつと彼女達には向いているのだ。

しかも今日は千歌先輩よりも更に先輩、それも年齢だけでなくスクールアイドルとしても先輩の鞠莉さんがいるのだ。少しくらい肩を借りても罰は当たらない。

「どんな言葉でもちちゃんと聞こえますよ、先輩」

私はアリーナ席の最上部に移動して会場の中心にいる千歌先輩たち

ちに大きく声を掛けた。
中心にいるときは遠く感じたけれど、アリーナ席から見ると二人の姿は予想以上に大きく感じた。だから、きつと9人揃えばもつと存在感があると思うし、言葉も気持ちもきつと届く。

「ありがとう、星ちゃん」

「声だけじゃないです。ちゃんと見えていますから」

「私からもちゃんと見えてるよ」

「Shinyー！ほらっ、千歌っちもShinyー」

「しゃ、Shinyー」

「もう一回、Shinyー」

「Shinyーっ！」

「よく聞こえます。どんときてください」

「みんなー、輝いてるー？」

「輝きたーい」

「1+1はー？」

「2」

「明日来てくれるかなー？」

「いいともー」

なんてことないコール&レスポンス。たった三人でやる悪ふざけ。私達は一頻り腹を抱えて笑うと、妙にスッキリした感覚があった。

私達は小難しいことを考えすぎていたのかもしれない。

「これでいいんだっ！」

「シンプルで良いんですねー？」

「いいんだよー」

なんとなくだが、掴めたものが形になったのだろう。千歌先輩は凄くいい表情でいい声を出していた。

何か劇的なことがあった訳では無い。答えが出た訳でも無い。けど、歌って躍るだけがスクールアイドルではない。その真骨頂をきくと発揮してくれるという予感を得た。

私達はその整然とした気持ちを抱えてガイシホールを後にした。

第八十九話

今年の夏休みは忙しい。いや、正確には今年の夏休み「も」だ。

去年の夏休みは穹と一緒に練習したり出かけたり、遊んだり、遊んだりと悩みを抱える傍ら、それを誤魔化すかのようにひたすら暇をないように過ごしていた。

今年の夏休みは殆どをA q o u r sのみなどと過ごしている。

自分が参加していない音楽活動にこれほど入れ込むなんて我ながら絆されてしまったとも思うけれど、みんなと関わりを持ってから得たものは掛け替えのないものだと思うし、失った繋がりに蜘蛛の糸ほどの繋がりを作る切っ掛けになった。だから一緒に居るのが素直に楽しいし、わくわくするのだ。

けれど、今日は珍しく何も予定のない空白の日となった。

穹からの連絡は相変わらずない。合宿免許という、ある種陸の孤島に行っている今、連絡しても身動きが取れないからなのか、黙って消えた私に意趣返しをしようとか分らない。けれど、私は連絡は来るものと勝手に確信している。穹が、あの行動力の塊が私からの連絡に文句の一つも言わないなんてあり得ないのだ。

我ながら穹のことを分かった風なことを考えている気がしないでも無い。けれど穹はそういう奴なのだ。何と言っても私と音楽をすることにした翌日には楽器を抱えていたくらいなのだから。

「さて、私もやることやらないと」

宅配で届いた大きな段ボールを玄関から部屋に運び込むと、中に入っていたペンライト約百本を一本ずつ取り出して点灯確認をする。言うまでも無いが浦の星女学院全校生徒分のペンライトだ。

ラブライブ予選にはどうやら本当の本当に全校生徒が応援に駆け付けるらしい。今のところ変更の連絡はないため、こうして初期不良がないか確かめているのだ。

白、ピンク、黄、桜、みかん、青、緑、赤、紫、と色の変化も問題が無いことを確認する。

近年のサイリウムは機能性が高く、一本で何色もの色の変化させる

ことができる。また、微妙な色彩を調整できたりする高機能なものも存在する。

今回私が取り寄せたのはラブライブ公認グッズのラブライブレイドで九色の色が既に設定されているものだ。公式品であるため、光量のレギュレーションに引掛かる心配も無いいためラブライブ観覧の必需品とも言える。時々居るのだ。改造サイリウムでやたらと明るい光を出して悪目立ちしようとする輩やサイリウムを連結させて周囲の観客に当たりそうになる輩が。

「よし、全部OK」

当日は私がコレを現地に持って行く手筈となっている。

さて、と私は窓から外を覗くと天候は生憎の雨。特別外に用事がある訳でも無いけれど、私は敢えて外に出ることにした。本当にただの気紛れ。それ以上でもそれ以下でもない。

私は傘を片手に気の向くままに歩みを進める。

住宅街を抜け、海沿いに行く。

天候のせいもあり波が若干高めだが、船が航行不能になる程でも無いのだろう。急ぎ足で帰ってくる船などは見当たらない。

こんな天気日に態々歩き回る物好きな人は私くらいなものだろう。人影が無く、車も通らず、船も見当たらず、今この時、私は世界に一人だけなのだという感覚に心が高揚した。

いつもと違う状況が本来ならば気が滅入るような状況を楽しいと感じさせたのだ。

私はミュージカル女優のように傘を持ちながらくると回った水たまりでステップを踏んだり雨の中を、一人の世界を楽しんだ。

私は穹と活動をするまでダンスなどしたことは無かったけれど、タップダンスの成り立ちに惹かれ独学でダンスを学んだ。だから誰も居ない舗装された田舎道などでステップを刻んだりをよくしたものだ。懐かしい感覚に身を委ね、パシャパシャと飛沫を起しながら私は雨の中に行く。気温自体は高いため段々と汗が噴き出してきたため傘を閉じて雨を全身に浴びた。気にすることはない、私は今は一

人、ここには手拍子でリズムを取ってくれる穹もいなければAqoursのみんなもいないのだから。このパフォーマンスは私の、私のためだけのものなのだ。

ステップを刻みながらふと思う。Aqoursのパフォーマンスは今の私とはきつと対極にあるのだろうか。みんなのためのパフォーマンスなのだろうと。

ラブライブ予選ではどんなパフォーマンスをするのだろうか？

私は憑きものが落ちるような気分が現実的な思考を始める。驚いたのは、私が何時も何やら学校の前まで来ていたことだ。どんなに一人の熱中が快感に感じても、心の奥底では誰かの存在を求めていたのかもしれない。

特に用も無いが私はそのまま学校に入る。

「……………」

誰も居ない閑散とした停まった時間。けれど、どこからか聞こえるのはもはや聞き慣れた声。

「……………私達の学校のことです」

Aqoursのみんなの声だ。

私はその声に導かれるまま体育館に顔を出すと、ステージ上にはみんながいた。

私は彼女達のこれまでと全く違う取り組みを見て安心すると共に納得した。これでもう後は本番を迎えるだけであると。

一言付け加えるならば、歌って躍るだけがスクールアイドルではないのだと。

第九十話

ラブライブ予備予選、言い換えれば県大会を突破したAqoursは予選大会、つまり地方大会へと出場することとなる。

東海地区の予選大会は愛知県が名古屋にある日本ガイシホールで行われる。

沼津からは約三時間弱の道のりとなり、気が向いたから行こう、とか気安く来れる環境ではない。だから学校の生徒全員が集まるなんて、心のどこかで不安であった。けれど、その認識は改めなければならぬようだ。

「みんな同じ電車なんて修学旅行みたい」

駅前にAqoursのみんなが集合するのに私は便乗したのだが、よくよく移動距離を考えたら乗る電車の選択肢なんて殆ど無いのだ。ぼったりと駅のホームで見覚えのある制服姿の団体様と遭遇すると、私達は驚きの余り苦笑いをするしかなかった。

私はみんなにサイリウムを配り、簡単に使い方をレクチャーする。馴れないうちは結構扱いが難しいのだ。特に色替えを曲の途中でやろうと思うと中々上手くいかない。あと曲に熱中し過ぎるとサイリウムの存在を忘れてりするのだ。まあ、色を固定し思い思いにリズムに合わせて振っていれば間違いは無い。

私達は一車両をほぼ独占して名古屋まで電車で乗り継いで行ったのだが、女三人寄れば姦しい。ならば百人弱が集まればどうなる？決まっているお祭りだ。

ガールズトークにトランプならば可愛いもの。弁当を食べたり、スマホから曲を流してカラオケしたりとどまることが知らない。学校にクレームが来るのでは無いかと内心ヒヤヒヤしたが、何とかトラブルもなく名古屋まで着いた。そこから笠寺駅まで数駅移動し、駅から？がる歩道橋を渡るとその丸い形状の会場が目についた。

私や千歌先輩、鞠莉さんは二度目だが、他の面々は初めてのよう目で目を輝かせていた。

「私、こういう場所でライブ見るの初めて」

「私も」

生徒の中から聞こえるその声に私は初めてライブに行った時のことを思い出した。

私が初めて行ったのはアニメと連動して活動していた女性声優グループのライブだ。意外に思うかも知れないけれど私も結構なミィハーでオタクな側面も持ち合わせている。

そのグループのライブ会場に入った時、まだ始まる前だというのに私は会場の雰囲気を感じた。会場に贈られた祝花がところ狭しと並べられ、会場に入った瞬間に微かに花の香りを感じた事に驚いた。また客席には所狭しと人が詰めかけ、サイリウムが思い思いの推しメンのテーマカラーに彩られ、波打っているのがとても綺麗だった。同じ想いを持った人がこんなにも沢山集まっているのだと思うと込み上げるものがあった。

まあ、その時はヤフオクで落とした別名義のチケットで入場したがバレ、あえなく退場となったオチがつくのだが。今となっては良い思い出だ。

「出場者はまた別の入り口みたいですね」

「うん。みんなとは一端ここでお別れだね」

「はい。先輩達はステージから、私達は客席から、また会いましょう」
頼もしい九人の背中を見送り、私はみんなを先導して会場内へと入った。

例えばA q o u r s が沼津から出てパフォーマンスを披露するのはこれが二度目だ。今回は東京のイベントで苦い思い出となった。だが、今回は前回との彼女達とは違う。その変化は目に見える形では小さく、目に見えない部分では大きな変化だ。

歌やダンスといったパフォーマンス面では上達はしているがそんなジャンプアップするようなものではない。けれど、彼女達は見付けたのだ。自分達がどのように進んで行くのかを。だから大きく変わったのは心の在り方だ。

開き直りかもしれないけれど、どんな結果だろうと彼女達はもう大丈夫。そんな変な安心感があった。

会場の空気に当てられたのか、私は衝動的に穹に連絡したくなった。私は今、学校の凄い人達の晴れ舞台に來ていると、とても素敵なステージが目の前に広がっていると、そう自慢したかった。そして、いつか一緒にその舞台に立ちたいね、と夢のようなことを思ってしまった。けれど、私はぐつとその気持ちを抑えた。ライブが始まったからだ。

A q o u r s の出番は運良く大トリ。こういう合同のライブ形式だと順番も印象を左右するため、大トリはこれ以上無いほどいい順番だ。

順々に登場する他のスクールアイドルのパフォーマンスは東海地区の県の代表の一角だけあり流石の一言だ。

彼女達はアイドルではあるがプロではない。だからこそ彼女達にはしがらみがない、自由なのだ。

彼女達の持つ感性が作り上げた曲は新鮮な構成であるし、ダンスは今彼女達ができる最上級のものであるという全力さが伝わってくる。全力で、心の底から楽しんでるのが伝わってくる。

見ているとまた穹と話したい想いが胸の中で疼いたが、ここでスマホを弄るのは、いや、目を逸らすのは全力でパフォーマンスをする彼女達に失礼だと思い直し、堪えることができた。

私は一曲一曲に心を揺さぶられながらもライブを楽しむこと二時間半、スクールアイドル達の饗宴は進み、そしてA q o u r s の出番がやってきた。

第九十一話

これまでステージに上がったスクールアイドル達のパフォーマンスは会場に詰めかけた人々を楽しませるには十分すぎるほどだった。だから会場の空気は熱を帯びており、その熱が冷めやらぬままAqours達はステージに上がった。たったそれだけのことで会場からは地鳴りのように拍手が巻き起こる。それは期待と応援、両方の意味を込めてのものだ。

そんな歓声に迎えられてセンターステージに立ったAqoursはスクールアイドルらしくパフォーマンスを披露するための衣装、ではなく見慣れた学校のセーラー服姿だった。

学校の制姿でパフォーマンスをするスクールアイドルも中にはいるが、少なくとも今日のみんなはそうするつもりは無いことを私は知っている。

「はじめまして。私達は浦の星女学院スクールアイドルAqoursです。今日は皆さんに伝えたいことがあります」

そして、それを知らない会場のみんなからはざわめきが始まった。それもそうだろう。歌って躍るスクールアイドルの姿を想像していたのに突然語りから始まったのだから。

「それは私達の学校のこと、町のことですー！ー！ー！ー」

困惑する会場の空気の中、千歌先輩は語ることを止めない。一応ミュージカルを意識しているのか、所作の所々が芝居がかっており要所所で効果音も入れている。しかし、Aqoursの、いや、ラブライブ予備予選を突破したスクールアイドルのパフォーマンスを見に来たお客様からはいつしかざわめきすら聞こえなくなった。それを私は否定しようとは思わない。だってそうだろう？スクールアイドルが頑張つて歌って、躍る姿を見て楽しみたいと思つて会場に足を運んだら何故かミュージカルとも言えない来歴の語りが始まったのだから。

けれど、ステージに立つみんなは別に歌って躍る姿だけを見せに来た訳では無いのだ。自分達のことを知って貰い、共感してもらい、そ

の上で楽しんでもらい、自身も楽しむ。そう決めてきたのだ。

よくよく考えるとアイドルに自己紹介やキャッチフレーズがあるのはそういった意味合いから始まっているのだ。だから彼女達のやり方は間違っていない。いないが、私は不器用だと思った。楽曲の中にキャッチフレーズを盛り込むとか、そういう手法をするアイドルも存在する。だからやりようは他にもあった筈なのだ。だけど、みんなはそれをしなかった。ドが付くほどの馬鹿正直さでストレートに語ることを選んだのだ。

「本当に敵わないですね」

その真っ直ぐさ、ひたむきさは不器用だからこそ私には好ましく、眩しかった。そして自分にはできなかったことをやってのけるみんなが誇らしかった。私の友人達はこんなにも素敵な人なんだと、今すぐにも穹にも教えたい、そんな気分だ。

「……………協力してくれた音楽が大好きな少女と東京に行きました」
海が綺麗な片田舎の町でμsに憧れてスクールアイドルを始め、少しずつ仲間が増え、東京に行くことになった。そこにまさか私のことも含めて語られるとは思っても見なかった。

「……………東京での出来事を前に、私達と彼女は己と向き合うことになりました」

東京のイベントで出会ったスクールアイドルのこと、誰からも支持を得られなかったこと。ただ楽しいだけでは済まない奥深さ。それを知った彼女達は悩むこととなる。今後どうしていくのかと。

Aqoursの物語を聴きつつ私は会場の様子を盗み見た。最初は何をしているのだと動揺していた観客たちであったが、いつしか物語に耳を傾けていた。当事者達からすれば本当に粗筋でしかない物語であるが、それを経験しているからこそここで語られる物語には説得力があった。

「……………みんなと向き合って、私達は進むことを選びました」

三年生の抱えていた過去、向き合った現状、それを乗り越えていこうとAqoursは九人になったこと。そして迎えた花火大会のパフォーマンス、ラブライブ予備予選。そして物語は現在に至る。

ともすれば興味を惹かれない人がいるかもしれないAqoursの物語。ただラブライブ予備を突破しようと思うならば、あるいは省いても問題はなかったかもしれない。けれどAqoursのみんなはそれを堂々と語りきった。AqoursがAqoursである理由、追い求めるもの、それを知って貰うために。

その想いは少なからず、いや、多大な影響を与えたと思う。スクールアイドルは瞬間的なものではないのだと認識を改めさせるものだった。それこそがμSやA-RISEがこれからのスクールアイドルに託したものだと思える。スクールアイドルはどこまでも続くのだ。色んな人に色んな影響を与えて、想いを共有して。

「私達は」

「この町と」

「この学校と」

「この仲間と一緒に」

「私達だけの道を歩く」

「起きること全てを受け止めて」

「全てを楽しもうと」

「それが輝くことだから」

「輝くって楽しむこと。あの日0だったものを1にするために」

そしてここからAqoursの物語は再始動する。ここから先は見ること無い夢の軌道。それを追い掛ける旅の始まり。

円陣を組み九人は一つの0を手で作ると、千歌先輩が、曜先輩が、梨子先輩が、花丸ちゃんが、ルビィちゃんが、善子ちゃんが、ダイヤさんが、果南さんが、鞠莉さんが、「1」、「2」、「3」、「4」、「5」、「6」、「7」、「8」、「9」と点呼していく。

私は、いや、私達浦女生は気付けばそれに続けてアリーナ席から「10」と叫んでいた。

私達はAqoursではないスクールアイドルでもない。けれど、向かいたい先は同じだと、学校の生徒として応援していると気持ちを伝えたかった。

「今、全力で輝こう！0から1へっ。Aqoursーーー」

千歌先輩が会場のスポットライトでは足りないとはかりに入り口の扉を開いたのはご愛敬だ。

こうしてA q o u r sのラブライブ予選は確かな支持を感じた中で幕を閉じた。

第九十二話

ラブライブ予選大会の翌日、前日の疲れを感じさせないAquoursのみんなは新曲のPV撮影をしようと浜辺まで足を運んでいた。私とは言えば今日はカメラ小娘、所謂カメコだ。

今日は快晴も快晴。夏雲は高く、海は穏やかに波を立てている。ざざー、ざざー、と寄せては返す波は見えているだけで気持ちよさそうだ。こんな天気の日だと耳を澄ませば船の汽笛が聞こえるかとも思ったが、残念ながら山沿いから聞こえる蝉の大合唱しか耳に入ってこなかった。

「改めまして、昨日はお疲れ様」

「ふ、一万人のリトルデーモンからエネルギーを集めた私に疲れなどー……」

「っん」

「いっ……何するのよっ!？」

「やっぱり痩せ我慢ずら」

相変わらずの漫才をする二人に私達は苦笑いした。善子ちゃんが筋肉痛になったように蓄積した日々の練習疲れや昨日の本番疲れはあるのだろう。けれども、各々セルフケアは怠っていないようで過度な疲れは残っていないらしい。

「今日の撮影はダンスパートは控えましょうか」

「そうだね。取り合えずジャケット写撮ろうよ」

千歌先輩に促され、みんなは靴を脱いで波打ち際に集まる。今を写真という媒体に刻み込むために。

思えば私がこの町に越してきた時、彼女達にはまだAquoursという名前すら無かった。千歌先輩と曜先輩の二人きり。そんな形のあやふやだった存在から、慣れを糧に、不安に立ち向かい、今を作った。そしてこれからという光を信じ歩み続けるのだろう。

私はどうなのだろう？

逃げて、諦めて、それでも抱き続けたものを千歌先輩達に拾い上げて貰って、立ち向かうことを決めたけれど、ここに来てから状況は余

り変わっていないようにも思える。穹とはコンタクトを取れたけれど、それだけだ。A q u o u r s のみんなとくらべれば本当に微々たるもの。けれど、私はそれを恥ずべき事だとは思わないしそもそも比べることもないのだろう。

今は穹からの連絡待ちの状態だけど、私も彼女達と共にいい加減学んだ。待っているだけでは変わらないと。だから穹からの連絡待ちに期限を設定した。もしその期限内に連絡が無かったらまた私から連絡をしよう。

「ほら、準備できたよ」

健康的な九人の生足は浜辺の白砂よりも輝いて見えた。そして思っているだけには変わらないと。だから穹からの連絡待ちに期限を設定した。もしその期限内に連絡が無かったらまた私から連絡をしよう。

「はい、撮りますよー。セーのっ」

「君のこころは」

「「輝いているかい?」」

その問い掛けは新曲のタイトルだ。抽象的であり、けれど始まりの切っ掛けとなる問い掛けだと思う。

私の心は輝いているのか?そう問われたら今はまだ輝いていないと答えるだろう。けれど輝こうと磨いている最中だ。

「ほら、もう一枚撮ろう。今度は星ちゃんも入って」

「私はスクールアイドルではないですよ?」

「ただの記念撮影だって」

訂正だ。少しくらいは輝いているかもしれない。だって私の近くにはこんなにも大きな光があるのだ。側に居る私も照らされれば光を返すだろうか?だって私の名前は星なのだから。

「じゃあお言葉に甘えて」

私はデジカメラをセルフタイマーにセットして、みんなの列に加わろうと掛けだした。

波打ち際に近寄るとより波の音が身近に感じられた。けれどやはり船の音は聞こえないし、蟬の大合唱も継続中。

その中でふと聞き慣れないエンジン音が遠くから木霊しているの

を感じた。きつとツーリングしているバイクか何かのエンジン音だろうと、私は意識をカメラに戻し、みんなの列に加わった。

「じゃ、せーのっ」

「二」ラブライブ！」

この夏はまだ中盤に差し掛かったばかり。きつと、もつと暑くなる、そんな予感が私の胸を満たしていた。

第九十三話

諸行無常と言いたくなるほどあつという間に夏休みは終わり、今日と言う運命の日を迎えた。言うまでも無く始業式の日、二学期の幕開けだ。

とは言え、夏休みの宿題もそれなりにやった感を醸し出せる程度には終わっている私に新学期を迎えるにあたり、学校から出されたノルマについて不安要素はなかった。

日に焼けたり、焼けていなかったり、夏バテしていたりするクラスメートと挨拶もそこそこに朝のホームルーム後に体育館に移動する。

どの学校でもそうだが、えてして体育館とは極地だ。夏は暑く冬は寒い。ある窓は全て開放し通気性を確保しても尚、体育館はその例に漏れず暑かった。これで人口が密集すると更に湿気がプラスされてサウナと化するが、幸いと言うべきか判断に迷うがこの学校は生徒数が少なく体操隊形に開けるくらい人との間隔を確保できるため湿気については多少はマシだ。

「セカンドシーズンのスタートですー！」

体育館での始業式に出席した矢先に聞こえたのは、そんな暑さなど吹き飛ばすような景気の良い鞠莉さんの声だ。

壇上が上がって学園長の挨拶代わりだとばかりに彼方を指差すポーズを決めて一言放った鞠莉さんは大変満足そうだ。他に何か言うことはないのだろうかと思っていれば、囁き女将のごとくダイヤさんが舞台袖から小言を言っている。

「理事長挨拶と言いましたわよね？そこは浦の星生徒らしい節度を持ってくださいね」

「雪像？」

「節度ッ!!」

それを盛大に捉え間違える鞠莉さんの前にダイヤさんの我慢というダムが決壊。ついでに言えば私の腹筋は崩壊だ。口から堪えようもなく漏れる空気を誰が責めようか。

そんな空気に当てられて緊張感を保てる生徒はここ浦の星女学院

には居ない。

「それにしても千歌ちゃん遅いね」

ふと聞き慣れた声は曜先輩だ。その眩きにおや、と思いい100人にも満たない全校生徒の顔を改めて確認していくが確かに千歌先輩が居ない。不登校をしていた善子ちゃんや休学という名の不登校をしていた果南さんが居るにも関わらずだ。

いつの間にか生徒Aから学校の顔となった千歌先輩の存在感は私が思っていた以上に大きいようで、千歌先輩が居ないと思うも先の鞠莉さんの開幕宣言がどこか実感が湧かない。

「惜しかったね。あともう少しで全国だったんだって」

すこし弛緩した空気の中、聞こえたその言葉は私の胸にチクリと刺さった。

ラブライブ地区予選敗退。それは変えようのない事実としてAqoursに、そして浦の星女学院の皆に突き付けられた。

けれど、明るい話題もあった。敗退という結果は変わらないけれど、予選を通過したグループにAqoursは僅差まで追い詰めたという。それは東京のイベントで評価されなかった時に比べ大きな躍進だ。

投稿した楽曲の人氣があっても一票という限られた票ともなると話は別物となる。それでもなお票が入ると言うことは間違いなく評価されているというのだ。

その上、東海地区予選の舞台となったのは名古屋。近年はSKE48やチームしゃちほこといったプロのアイドルが活動の本拠地としているため、名古屋は多くのアイドルファンを排出し、そのファンの目も肥えている。そしてアイドルファンには結構居るのだ。ラブライブに関心を持つ人が。

そんなファンが多く参加する条件が重なる東海地区は全国でも評価を得るのが比較的厳しい部類に入ると言う。

そんな中であって評価を得たということは少なくともラブライブは遊びじゃない、と怒られない程度には本気であると認められたのだ。

スクールアイドルAqours結成という幼年期を終え、名実共にスクールアイドルとなったAqoursは鞠莉さんの言うようにセカンドシーズンを迎えたのだ。

更に、だ。思わぬ副産物もあった。それは入学希望者が増えたことだ。どんな因果かラブライブ予選のパフォーマンスの後、その日のうちに0だった入学希望者が1になったのだ。

最初はみんな我が目を疑い、二度見、三度見したもので、ようやく現実感が湧いた頃には狂喜が場を支配した。

千歌先輩は「奇跡だよ!!」と連発し、ルビィちゃんは「ピギイイ」で、善子ちゃんと曜先輩は「地元愛」で、鞠莉さんは「アンビリーバボー!!」でダイヤさんは何を思ったのか屋上から下界に向けて「ダイヤモンド」。一周回って花丸ちゃんはおやすみなさんと居眠りしでした。勢い余ってタイトルしか決まっていない新曲のPVを撮ろうと翌日の予定を入れる始末だ。もっともそれはジャケ写候補となる写真撮影に終わってしまったが。

その時の出来事を思い出し、憂鬱になりそうになったため思考を元に戻した。

とにかく入学希望者は0から1になったのだ。

「でも0が1になり、今では入学希望者も1が10になった!」

生徒の声を聴いたのか、結局壇上で指揮することとなったダイヤさんが高らかに前向きな結果を語る。

しかし去年受験生だったからこそ私は思うのだ。その結果は実に淡い希望でしかないのではないかと。

何故なら10人では学校は間違いなく存続出来ない。

そして夏休みは受験生にとってターニングポイントなのだ。

私立高校受験する多くの受験生は夏休みに内定を貰う。だから夏休み以後は学力がまだ足りていない人がラストスパートを掛け、既に目標に定めている志望校に受かるよう必死な訳だ。

だから現時点では入学希望者を集っても第2、第3希望になってしまいうのだ。

Aqoursが最終目標と掲げる廃校阻止という目標を達成する

のはかなり現実的でない。寧ろあの予選大会からここまで入学希望者が増えたことこそが尋常じゃ無い事態で、千歌先輩ではないけれど本当に奇跡なのだ。

「そして今日、次のラブライブ開催が発表になりました。決勝大会は前回と同じ秋葉ドゥーム」

その発表に歓喜の響めきが起こり、そして主役は遅れてやってくると言わんばかりにドタドタと息を切らして千歌先輩が体育館に漸く姿を現した。

「どうするっ？」

「聴くまでも無いと思うけど」

その全校生徒の意志を代弁したその問い掛けに千歌先輩は正面から応える。

「出よう。ラブライブ。そして、1を10にして、10を100にして、学校を救って、そしたら、私達だけの輝きが見つかると思う。きつと輝ける！」

その答えは完全にそうと信じて疑わない人のそれだ。そして、それを千歌先輩だけでなく他の生徒もまたそうと信じている。

私は自分と周りの温度差に心がまたざわついた。本当に学校が救えるのだろうか。

そんな私を余所に、この学校の生徒は微笑ましくも始業式そっちのけでLove Liveと人文字を作ったのだった。

第九十四話

なんとも締まりの無い、けれど意識の高い始業式が終わり各学年が教室に戻ると、簡単な申し送りを受けてその日は終わる。所謂昼ドンと言うやつだ。梨子先輩ならその「ドン」という響きに反応しそうだからどつかのタイミングで振ってみようかと思いつつ、私は諸先輩方やクラスメートに誘われるまま街に繰り出した。とは言っても遊びに行ったのでは無い。市内の駅やバス停、公民館や許可が貰えるなら遊戯施設などに学校説明会のチラシを貼りに行ったのだ。

印刷代もバカにならないだろう枚数のチラシを作り、もう後には引かない、やれるだけやろうと千歌先輩のクラスメートの四五六トリオが浦女生に呼び掛けた。

今の浦女は恐らくこれまで浦女の歴史の中でも類を見ない団結力で纏まっている。部活などに所属していない、手の空いている生徒はほぼ参加することとなったのだ。

この行為でどれ程の効果が見込めるかと相変わらず後ろ向きに考えながらも私はそれに参加した。

「どれくらい学校に来てくれるかな？」

「10人は最低でも来るんじゃない？」

「入学希望してるならもう腹を括っつて一々見に来たりしないかもしれないよ?」

「いやいや、死ならば諸共って言うでしょ?どうせ入学希望するならこれを機会に他の子も勧誘する筈よ」

道中で皆の会話を聞いていると、少なからず人は来ると、そう信じているのが伝わってくる。

「当日はなるべく在校生を集めよう。私達の学校の魅力には私達の存在は欠かせないんだから」

「皆が歓迎してるよって、気持ちを伝えられたらきつと入学希望者も増えるよね」

そして、机上の空論では終わらせないと、どうすれば少しでも入学希望者が増えるのかと話し合う姿はとても活き活きとしていた。

「時間は幾らでもあるし、星ちゃんどうする？ステージで一曲披露するとか？」

「え？ああ、なら梨子先輩と校歌をセッションするとかならいいですよ？」

「上手くスケジュール組み立てればできるかも」

そんな皆から要請されて断れるほど私は無感動にはなれないらしい。私が学校説明会のステージに立つことで何かを得られるのかわからない。けれど、前向きに取り組む皆と一緒に居ると私も何かやりたい。そんな気にさせるのだ。

「後は千歌達に聴かないとね」

それはきつと先陣を切るAqoursという道標があるからだ。

あのラブライブ予選でAqoursから感じたもの。何かが待ち受ける予感、追い掛けたい衝動、それを皆で共感したこと。それが今に？がっているのだ。

そして私もまた動き出さなければならぬ。その予選の次の日に起きたことこそ私にとっての転機であり、次に？がることだったのだから。

「よし、みんな成果はどう？」

「全員チラシを使い切れたよ」

「よし！ならみんな。今日はお疲れ様。日が暮れる前に帰んなね」

四五六トリオ先輩は良く皆を纏めていると思う。そして進行もさり気なく上手い。

沼津はエリアで見れば結構な広さがあるけれど、それを昼から夕方チャイムが鳴るまでの間に人海戦術で廻りきりその上チラシも無事に貼り終えたのだ。これは彼女達がある程度の計画性と事前の申請が無ければ出来なかつただろう。

「それにしてもバス少ないのは何とかして欲しいね」

「これからの季節は終バスも早くなるしね」

傾きかけた太陽は山に隠れて早々に姿を隠している。

高低に立体的な地形をしている伊豆半島は夕焼けが早いのだ。夏休みが終わった今、これからはどんどん夕暮れが早くなり、活動は制

限される。

「今日も千歌達は屋上で練習してるんだよね。ちゃんと帰れるのかな？」

「そこは案外抜け目なくやってますよ。何と言っても生徒会長の黒澤ダイヤさんが居ますからね」

「確かに。黒澤家って門限とか厳しそう」

なんて話ながら、これからのみんなの活動が益々やりにくい環境になっていくのだと思うと地方でスクールアイドル活動をする事の困難さが良く分かる。

交通網のある都市部ならば各々住む場所が離れていても帰宅時間をそれ程気にしなくて済む。けれど、こういった地方では同じ街に住んでいても物理的な距離以上に移動が困難なのだ。

まあそんなことはみんな百も承知で、今頃は二学期の活動の仕方を相談しているかもしれない。

「それじゃあ私はここで」

バイバイ、と今日集まった皆に別れを告げて私は一人、家路につく。そして一人になると最近はいつもの同じ事を考えるのだ。内浦に引越してからの私の音とはどのようなものかと。

「あー、気分転換しよ」

けれど、どうにも全く纏まらない。

梨子先輩がスランプに陥ってピアノを弾けなかった時はこんな感覚だったのだろうか？なら梨子先輩にアドバイスを貰うのが妥当なのだが、私の場合はハーモニカが吹けなくなっただけでもない。実際、頭や気持ちをリセットしたいと思った時には吹きたいと思うし、こうして吹きに出掛けたりもするのだ。

ならきつと私のそれは梨子先輩とは本質的に違うものなのかもしれない。

私はとぼとぼと夕陽に染まる空と海を眺めながら川辺までやって来た。

山から続く川と海が交わるそこは、水面の波形がとても複雑で、それ故に綺麗に光を弾く。

その景色はあまりにも眩しくて、だからこそ作り出す影は濃く映る。

ここには今、川と陸と海の境界と昼と夜の境界が重なっている。とても浮世離れしているとも言える。

「—————」

そして思い浮かんだ曲は、「逢いたい気持ち」。GLAYの曲だ。これはドラマ「サトラレ」のタイアップとして使用されていた。

決して夕陽をテーマにしている訳ではないけれど、メロディーラインの美しさと切なさが今の情景にマッチしている。そしてそのメロディーに載る歌詞が胸を締め付ける。

タイトルのテーマに沿って歌われたそれは夜、朝、星、月、朝日、夕陽、というワードがちりばめられ、歌詞を追えば追うほどに時の流れを感じ、それ故に過ぎた時の尊さに胸を締められる。

この曲を選んだのはきっと私自身の心がこの曲に共感しているからなのかもしれない。

私の知っている音楽は素直に出てくるのに、私の心から探す音は出てこないのは何故なのか、その答えを探して私は音を重ね続けた。

第九十五話

翌日、今後の放課後の活動についての懸念を花丸ちゃんに話したところ、やはりみんなもそれに気付いていたようで、今日場所を探すととなったらしい。

私も今日は予定が開いていたため、同行したのだが、どうにも芳しい成果は上げられなかった。

やはり九人という大所帯は強みでもあり弱みでもあった。

二、三人ならば公園などで練習しても問題視されないだろうが、九人であるとそれなりに場所をとるためクレームになりかねない。今の浦の星女学院は廃校の瀬戸際であり、マイナス印象を植え付けるような行為は極力避けなければならない。また、そもそも屋外であると雨の日は練習できないため、必然的に屋内か、少なくとも屋根のある場所を探す必要があるのだ。

「じゃあ最後の手段しかないか」

「最後の手段？」

「うん。パパの知り合いでスタジオ借りてる人が居るらしいんだけど、今は使ってないみたいだから頼めば使わせてくれそうなんだって」

そんな中、各々独自のルートも当たっていたのか、曜先輩からとてもいい解決策が提示された。

ちゃんとした歌唱・ダンス練習が出来るスタジオはどこもそれなりにレンタル料が掛かるため早々に見切りを付けて選択肢から除外していただけに嬉しい誤算ではあった。

「いいの、曜ちゃん？」

「今はやれることを全部やる。でしょ？」

けれど、それは「浦の星女学院の生徒」としての活動では本来クリア出来なかった問題だ。それをこんな裏技じみた解決法で良いのかと千歌先輩は聴いたのだ。

A q o u r s は活動方針として名言した訳ではないけれど、自分達だけの課題においてはなるべく自分達の力だけで取り組むという意

識がある。けれど、その課題が学校や地域に関わる問題である場合は学校の友人や親類に協力を仰いでいる。

今回はA q o u r sの最終目標である廃校阻止を見据えて曜先輩はそれを受け入れたようだ。更に言えば改めて金銭を払って貰っている訳では無く、既に借りているということも大きい。

借りている人は支払ったお金を無駄金にせずに済む。みんなはいい環境で練習出来る。うん。実に無駄が無い。

曜先輩の色よい返事はみんなの総意でもあるようで、みんな顔を合わせて頷くとそのスタジオに足を運ぶ流れとなった。

「そう言えばこうやってみんなで市内を歩くってなんか新鮮だね」

「そう言われると確かにそうですね」

「学校ではいつも顔を合わせてるのよね」

「学校って不思議だよ。外では一緒に居るのが珍しい組み合わせでも、学校だと一緒に居るのが当たり前みたいな感じするから」

特に学年が違えばそれも顕著だろう。けれど、生徒数が少ない浦の星女学院だからこそ学年の垣根が低く、居ることが自然に思える関係になれたのだ。

「学校の外のみんなってどんな感じすら?」

「どんなって、どんなだろう?」

「あ、あそこだよ」

程なくして着いたのはガラス張りの目立つ小綺麗な8階建てほどのビルだった。その中にスタジオがあるらしく、早速足を運ぶと待っていたのは予想以上に良い環境だった。

空調良し。防音機能の穴がぼつぼつ開いたタイルが壁を覆っているため防音対策も良し。ダンス練習を想定しているため、大きな全身鏡もある。そして九人で手狭に感じないスペースもあるのだから完璧と言っている環境だろう。

「うわあ」

「広い」

「しゅごーい」

「みんな語彙力・・・」

「じゃあさ、みんな一度フォーメーション確認してみない？」

私ですらタップを踏みたくなる環境に飛び込んで黙って居られる筈もない。語彙力がなくなるのも仕方ない。でもルビィちゃん、「しゅごーい」は色々酷い。

それをスルーして曜先輩は早速練習しよう提案する。

みんな、いや、一、二年生は諸手を挙げて賛同していたけれど、ここに至って三年生が微妙な空気を醸し出しているのに私を含めようやく気付いた。

「みんな、ちよつと待って。その前に話があるんだー鞠莉」

果南さんの必死そうな顔、ダイヤさんの諦観、そして鞠莉さんの爆発を堪えるような噛み締めた顔。

「実は、学校説明会は中止になるの」

そこから発せられたのはAqoursにとって悪夢のような宣告。そして、私にとってはいつか来るであろうと思っていた発表だった。

「中止」

「どういう意味」

「言葉の通りの意味。説明会は中止。浦の星は正式に来年度の募集を止める」

やはり夏休みというのが一つの区切りなのだろう。これ以上は運営側が耐えられない。

善子ちゃんも花丸ちゃんも急にと口にするけれど、運営側からすれば急ではないのだ。ダイヤさんも窘めるように言うが、この計画は二年前から模索されていたのだ。今の生徒数を鑑みると寧ろ二年も保ったのが不思議なくらいだ。

それもきつと鞠莉さんが裏で手を回していたのだろう。

魔法が解ける瞬間とはこういう時なのかもしれないと私は思った。

「でも入学希望者は増えてるんでしょ？0だったのが今はもう10になつて」

「これからもっともっと増えるって」

それはAqoursが活動を通して出たであろう成果であり、希望だ。そして明日への目標としての羅針盤でもあった。

でもそれは大人達からすれば決定を覆すそれには至らないのだ。

頑張れば報われると、輝きを求めれば掴めると信じてきたそれが否定される事はどうしようも無く耐えがたい。きつとみんなそれを実感しているからこそ必死に何か手は無いかと足掻く。

私はそれを横目に、やはりどこか他人事だった。そのことに引け目を感じ、みんなからの心の距離を感じた。

何故私はこの問題に対しこどもも冷徹なのだろうか？

「鞠莉ちゃん、どこ？私が話す」

千歌先輩は鞠莉さんの父親に直接交渉しようと駆け出そうとするけれど、やはり私はそれをしてと決定は覆らないだろうと冷静な頭の部分がそう考える。決定的に私は何処かで最初から諦めているのだ。

「鞠莉さんのお父さんはアメリカなのよ!？」

「お小遣い前借りしまくってアメリカ行つて、もう少しだけ待つて欲しいって話す」

千歌先輩らしいといえば、廃校にしないで、とお願いするではなく待つて欲しいとお願いすると言ったところで、時間さえあれば自分達の力で何とか出来ると、それだけ信じているのが窺える。

「千歌ちゃん。できると思う？」

「できる!!」

けれど、そのできる、は自信でも過信でもなく、希望ですらなかった。けれど、そうしなければ自分を保てないような、そんな情動に駆られているようだった。

鞠莉さんが留学を止めて、理事長になってまで戻ってきたくらい無理を通してこの学校を存続させようとしていたのはみんな知っている。きつと知っていること以上に無理を通していたこともあると思う。

「千歌っち、ごめんね」

だからこそ、そう言うて戯けた悲しみで笑顔を作る鞠莉さんを前に、千歌先輩も私達も何も言うことはできなかった。

第九十六話

あの日、あの時、あの場所で、と過去を想うのは歌の世界の話だけではない。誰だって、当たり前のようにそれをして、ある時は失敗しなくて良かったと胸を撫で下ろし、ある時は何故失敗したのかとす。そして私はその「もし」を想い、変わらない結論を出した。

もしもA q o u r s がラブライブ決勝に進み、例え優勝したとしても廃校の決定は覆らなかつたのではないかと言うことだ。その最上の結果を引っ提げたとしても入学希望者は今の10が精々30程度にしなければならないだろう。夏のラブライブ決勝から今日までそう日は開いていないからだ。

高校受験とは多くの人にとって初めて自分の未来を選択する行事だ。学校選びはどんな能天気な人であってもそれなりに悩む。短期間で劇的には変わりようが無いのだ。とはいえ切っ掛けとするには片田舎の高校がラブライブ優勝というのは劇的だ。だからこそその入学希望者30という仮定だ。

けれど、その30をもつてしても出来ても恐らくは猶予期間の引き延ばし程度だろう。

単なる廃校ならばともかく厳密には統廃合なのだ。生徒の受け入れ先の準備期間もある。だから一方的な希望的観測では期間の引き延ばしは難しい。

だから今回の鞠莉さんから告げられた事実はどうしようもない出来事なのだ。

素敵なスタジオで練習することもなく失意の内に各々帰宅した翌日、そこ事実は全校集会でもって各生徒に告げられた。

やっぱりそれは衝撃的で、全校集会だというのに体育館がざわついたりもしたけれど、A q o u r s のみんなが大人しくしていることが皆を黙らせた。もうどうしようもない出来事なのだ、そう思わせた。

けれど、クラスに戻って私は愕然とした。どうすればこの危機的状況から脱することができるかと皆が真剣に話し合っているのだ。

そして口々に言う。やはりA q o u r sを旗頭に盛り上げるしかPR力の強いものはないと。ならどうやって彼女達を奮い立たせるかと、自分達が出来るのは何かと話し合いをしている。

願うことはとても大切だ。今の自分を超越する活力を与えてくれる。それを私は身をもって知っている。けれど、叶えることは難しい。それもまた私は身をもって知っているのだ。そして願いが強ければ強い程、叶わなかった時のショックは大きい。

だからか、と私は納得する。

「皆はもし、真剣に足掻いてそれでも廃校を阻止できなかつたらどうする?。」

私はそれがもまた身をもって知っているから恐れているのだ。

「そしたら、思いつきり皆で泣いて、その夢はお終い」

「え、そんなにあつさり?。」

その答えは思わず問い掛けた私がバカみたいに思えるほどシンプルで

「うん。でも強い想いでやり遂げた後なら、きっと新しい夢が見つかると思う」

とても美しい在り方だった。

きっとその在り方は千歌先輩達みたいに諦めの悪い、本質的に強い人ではきつと辿り着けないスタンスなのだろう。けれどそれは誰にとっても必要な夢への立ち向かい方。

「そっか・・・千歌先輩達は自分でまた立ち上がると思うよ」

「そう?なら学校説明会の告知は回収しないようにしなくちゃ」

「気の早い人はもう回収してるかも。急いで止めなきゃ」

じゃ、とクラスメート達は各学年に向けて散開した。飛脚かなにかのようですらあった。幸いにして放課後であったため問題ないけれど、皆ならば授業中でも授業そっちのけで飛び出しかねない勢いがある。

さて、と私は誰も居ない教室から屋上へと向かう。

ルビイちゃんや花丸ちゃん、善子ちゃんは今日は足早に帰った。思うところがあるのだろうか。

だから今日は屋上には久し振りに誰も居ない。私が入学した直後の、まだA q o u r s が出来る前の状態だ。

しかし決定的にあの頃とは違う。それは早くも傾き始めた太陽の茜色が否が応でも時の移ろいを実感させる。

「私はどうしたいのかな？」

その圧倒的な太陽の存在感は、けれど問い掛けても答えを返してはくれない。

無謀な足掻きは無駄に自分達を傷付けるだけなのではないか？それならばしないほうがいいのではないか？

もしも私が引越す事になった時、そのまま諦めていたら穹とも上手く別れる事が出来たのだろうか？

いや、そんなことは無い。きつと変なところで器用な私はきつと引越すその日まで隠し通しただろう。その頃の私にはさつき初めて知ることとなった在り方など知るよしもないのだからきつと同じ結末を迎えたいだろう。

なら私は変わらなければならぬのだろう。でなければきつと緩やかに終わりを迎えて結局傷付くのだ。

私はどうしようもないこの逃げ腰を今よりももっと何とかしないとイケない。みんなのお陰で一步は踏み出せた。ならまた一步、踏み出さなければきつと私は後悔する。

「—————」

今の私にはまだ新しい音楽は聞こえてこない。けれど、こんな時にぴったりの曲は思い浮かぶ。

奏でるのはS u n S e t S w i s h の「マイペース」。ノスタルジーなサウンドにキャッチーな歌詞が耳に残る楽曲だ。

一つ、数えて進めばいい、二つ、数えて休めばいい、三つ、数えて考えりやいい、マイペースで進めればいい。そのフレーズはとても優しさに満ちた私の大好きなフレーズだ。

第九十七話

蟬の大合唱と寄せては返す波の音、そして遠くから聞こえるバイクのエンジン音。

快晴の下、砂浜に裸足でじやれるのはA q o u r sのみんだ。

この光景は見覚えがある。そう、ラブライブ予選の翌日に写真を撮ったあの日だ。

みんなと一緒に写真を撮った時のことは今でも覚えているし、写真も色褪せずに残っている。けれど、その後の出来事がより印象的になるのは致し方ないことだろう。それだけ私の予想していなかった事態があり、手痛い目にあつたのだから。

私は自分の夢を夢と分かりながらもそれをぼんやりと眺めていた。所謂明晰夢というやつだ。

「結局撮影会になっちゃいましたね」

「このグラーマラスな果南の体を前にグラビアを撮らないなんて手はないですから」

「鞠莉がそれを言う?」

なんてじゃれついたり、波打ち際で足だけ水に浸けて涼んだり、何しに来たのだから忘れかけた頃、それはやって来た。

前触れはあつた。遠くから聞こえるバイクの音が遠ざかる事無くしばらく周辺を回っている様子があつたのだ。

「さっきから聞こえるバイクの音、どんどん近づいて来るね」

「あ、あの人じゃない?」

海岸線を颯爽と駆け抜けていた細身のバイクはパンペーラ250、日本では馴染みの薄いG A S G A S社のトライアルバイクだ。このバイクは2000年代初期のもので、仮面ライダークウガの劇中で主人公が乗り回し、リアルなトライアルの要素を取り入れたアクションで子供達を魅了したバイクだ。

そんな劇中の活躍や、バイク本体の見た目がトライアルバイクの割にしつかりしたシートであること、燃料タンクが比較的大きいことから走破性とトライアルバイクとしての要素の良いところ取りしたバイ

くだと思われがちだが、実際はクウガ劇中のように長野から東京までフルスロットルなんて無理だ。外国産バイクは当たり前ハズレが激しいが、当たりを引いたとしてもそれはできないという。

さて、何故私がそんなマイナーなバイクを知っているかだ。

仮面ライダー、おジャ魔女、デジモンの組み合わせは至高である。リアルタイム世代で無い私でも確信しているけれど、理由は他にあり。要は生で見たことがあるのだ。

「下りて……こっちに来るけど？」

それは他の誰でも無い、明里穹の自宅のガレージで埃を被っていたもの。穹が羨望の眼差しで見詰め、親に声高にくれと要求していたものだ。

そして、今、バイクから下りてこっちに歩みを進めるのはやはり、穹その人だった。

くそが付くほど暑いだろうに、ライダージャケットを着た穹はだが、涼しい顔に汗一つかいていなかった。

「やつと見付けた。免許取ったのがまさかこんなに早く役に立つなんてね」

私の目の前、手の届く位置に止まり、穹は飄々とした様子で言った。けれど、私はそれが内心で渦巻く感情を抑えて余裕であることをアピールしている態度であることを知っている。ただ、その内心の感情が怒りか、喜びか、それとも他の感情なのか、私には掴めなかった。

「穹……どうして？」

「決まってんじゃない。借金を帳消しに来た」

「それは……」

どういう意味、と言おうとして突如私の視界の下に消えた穹に私は軽々とリフトされた。それはもう地面から綺麗に大根が抜けたかように。

「スマホとハーモニカは？」

「あっちに置いてる」

「なら心置きなくっ」

肩に担がれた私は叫ぶ間もなく穹は走り出し、それはもう豪快に海

に放り投げられた。

一瞬の浮遊感の後、天頂に見える輝きが透明なフィルターに阻まれる。そのゆらゆらと揺れる様は私の動揺をそのまま表現しているかのようだった。

本当はこの後にもやりとりはあったのだけれど、私の夢はそこで突如として終わりを迎える。

得てして夢の終わる瞬間とは落下と相場が決まっているのだ。

水の中に放り込まれた夢を見て先ずは自分がおねしよをしていなか確認した。水に纏わる夢を見るときは大汗を掻くか漏らすかどっちかだからだ。幸いにして大汗を掻いた方だった。

私は一度シャワーを浴びながら先程の明晰夢について思いを巡らせた。

あの日から私はまたずっと考え続ける日々が続いている。その転機となった日の事を夢に見るということは、今私は再び転機を目前としているのだろう。

浦の星女学院廃校という大きな転機。その事実をどのようなスタンスで迎えていくかということだ。

普通に考えれば廃校阻止なんて無謀な夢だ。学生が数人協力したところで覆らないだろう。

けれど、それを私は無駄と断じて何もしないのか？

「そんなの・・・」

どうすればいいのかなんて、何が正解かなんて分からない。分かるのは後悔したくないということ。そして傷付きたくないということ、傷付けさせたくないということだ。

「穹、私はどうすればいいのかな？」

頭から冷たい水を浴びようと答えは出ない。私は早々にシャワーを切り上げた。

時計を見れば寝直すには些か遅く、学校に行くには早すぎる時間だった。

どうしようか迷った挙げ句、私は早めに登校することに決めた。これからどんどん気温が高くなるため、本格的に暑くなる前に登校しよう思っただのだ。

私はこの半年に満たない間に随分と着慣れたセーラー服に袖を通す。いや、なかなかハイセンスな一年生用の夏制服はノースリーブのため袖はないのだが、兎に角制服を着て私は家を出た。

劣化の進んだアスファルト。所々錆び付いているガードレール。生い茂った木々。それらも随分と私の日常に溶け込んだもので、今なら寝ぼけていても通学できる自信がある。

住めば都、なんて言葉があるけれど、私はこのかつたるい通学の過程がそれ程嫌いでは無いのだ。きっとそれは私だけでは無い。多くの浦女生がそうなんだろう。

早めに出れば多少はマシだろうという当ても外れ、学校に到着する頃にはじつとりと背中汗を掻いていた。けれど、それは単に暑いからなのか、廃校になるということに無意識に焦りを感じたからなのか分からなかった。

「好きだよ。私だって。それだけははつきりと分かる」

みんなと巡り会えたこの学校のことを好き。それは分かっている。守れるなら守りたいという気持ちもあるにはある。けれど、どうしてもなく怖いのだ。そんな行き場の無い気持ちに私は相応しい方向性を見出せていない。

「みんなは—————」

「—————」

見付けられるの、と問い掛けたかった。

そんな私の心の声に応えたのは反骨心と空元気の入り交じった獣、いや、怪獣の声だった。

幻聴ではない。現実起きた一瞬の空気の揺らぎ。けれど、確かにそれは世界の片隅に響いた。私の耳に届いた。

私はそれに導かれるまま校庭に足を運ぶとそこには果たして居た。

千歌先輩を初めとした浦の星女学院が誇るスクールアイドル達の姿が。

ああ、みんなはやっぱ凄い、と思った。

言葉を交わさずとも見ただけで分かる。答えを出したのだと。

「起こそう、奇跡を。足掻こう精一杯。全身全霊、最後の最後までみんなで輝こう!!」

絶対に勝つ、とか、廃校阻止、とか言わないのは心のどこかでそれが無謀であることを理解しているからなのだろう。けれど、それでも諦めることはしないと、立ち向かうと決めたその姿は無力であることは変わらない。それでも可能性という輝きを私は見た。

去年の私は同じように足掻いていたけれど、果たしてそこにみんなのような輝きは無かったと思う。それはきつと私が心の底から引越しを覆せると信じていなかったからなのだろう。

けれど、みんなは現実を見つとも可能性を捨てていない。それがどうしようもなく私を惹きつける。

「奇跡を」

みんなが宣誓するように口にしたそれを、あつ、と思った時には私もまた口にしていた。

「星ちゃん!」

「なんか不思議。一人では雁字搦めになって何も決められなかったのに、みんながいるとこんなに素直に気持ちが出てくるなんて」

でも、それこそが本心なんだろうと私は口にした『奇跡』という言葉
葉を噛み締めた。

第九十八話

0だった可能性は行動を起こすことで0ではなくなる。もちろん、それが妥当な行動であればの話だけれど、私達はその妥当な行動とは何か知っている。

「交渉する」

そう、浦の星女学院の経営者である鞠莉さんのお父さんと話を付けなければならぬ。もちろん、廃校にしないでください、なんてのは交渉にはならない。するのは統廃合の見切りを付けるギリギリの期限をはつきりさせること、そして改めてその期限まで統廃合の決断を待つて貰うことだ。

幾ら鞠莉さんが遅延交渉をしていたとはいえ、期限にはまだ多少の余裕は残していると推測される。そのあたりは大人の打算が働いているはずだからだ。

こちらから提示できる交渉材料はやはりライブライブ予選後の短期間で増えた入学希望者の数しかない。ここで重要なのが、短期間で増えたという部分だ。その増え方は結果的に見ればAqoursの活動とリンクしているのだから、これからの活動次第ではもっと増える可能性を秘めていると捉えることもできる。そして幸いと言うべきかライブ後期大会が開催されることが決定し、予備予選が近々行われる。学校説明会と合わせてそこでAqoursが活躍出来ればと思わせられれば統廃合決定の期間を遅延させることは夢ではない。勝算は十分ある。

「鞠莉さん。貴方のお父さんは何故こんな片田舎でホテル経営をしているのか？何故学校を経営しているのか？私はきつと鞠莉さんのお父さんもこの地域が好きだからなんだってそう思ってる」

「好きなものが一緒ならきつと可能性を信じてくれる」

具体的な期間や、今後の展望を出すこと。それである程度は交渉できるとは思うけれど、最終的にはやはり人の情だ。

そう言つて鞠莉さんに電話を掛けて貰い早十分が経過してた。

「何気なく待つているけど、これで駄目って言われたらもう打つ手は

ないんだよね?」

「うん。あーなんか落ち着かない。曜、ちよつと走らない?」

「それよりプールで泳ぐ方がいいかな」

「水着持ってきてないけど・・・ま、脱げばいいか」

「良くないです果南さん!」

「こういう時は本を読むに限るすら」

「とか言っつて丸ちゃん。さっきから本を読まずにパンを食べてばっかだけど」

「ルビィちゃんも食べるすら?」

「うん」

「くつくつく、本当に良いの?こんな場所で間食なんて今に天罰が下るわよ?」

「天罰?」

「ルビィ、お行儀が悪いですわよ」

「ピギィ!お、お姉ちゃん」

なんて落ち着かない気持ちをみんなで共有し、アンニユイ時間を過ごしている。

「ねえ、星ちゃんは どうして信じようって思ったの?」

「合理的じゃないって、私も思いますよ。けど、何でかって言われたらきつと信じたかったからなんじゃないかな」

「でも良いの?穹ちゃんから課題出されてるんでしょ?」

あの日、穹とはあまり長くは話していない。何から話していいか分からなかったからだ。

そして穹も語ることを望まなかった。彼女は私にこう言ったのだ。「星の伝えたいこと、それを音楽にして私に教えてくれればいい」とずぶ濡れになった私に向かって。

千歌先輩の言う課題とはそのことだ。

「こういうことを含めて私の音楽にしろって、穹は言ってるんですよ」
難しい事を吹っ掛けてきたなと思った。

ひた隠しにしてきたこと、引越してからのこと、浦の星女学院のこと、沢山沢山話したいことはある。それを音楽にしろというのだから

ら。

男子ならば拳で語るとか言うのだろうけど、私と穹にとってこれは拳で語る事に等しい。お互いに本気で取り組んできたそれを見せろというのだから。案外穹も曲を作って待っているかもしれない。

「困ったことがあつたら言つてね」

「千歌先輩がそれ言います？」

「えー、私はいつもみんなに助けられてるけど」

私達は顔を見合わせて笑った。意地っ張りなのはここにいるみんなの共通点だ。意地っ張りで、諦め悪い。

「鞠莉さん」

「どうだった？」

学園長室から鞠莉さんがようやく出てきた。鞠莉さんはオープンな様でいて奥深い性格をしている。その二面性が表情を取り繕う術を生み出しているため鞠莉さんの表情から何かを感じ取るのは難しい。

「残念だけど、どんなに反対意見があつても生徒が居ないんじゃない？」

「やっぱりそうよね」

「だから何人居れば良いかって聞いたの」

「それって何人？」

「100人。少なくとも今年の終わりまでに100人集めれば来年度の募集をするって」

期限と人数がこれで明確となった。これで目標にも具体性が出てよりやる気が出る――

「なわけねえだろ」

「星ちゃん、落ち着いて。兎に角可能性は？がったんだよ！」

「あう、ごめん。取り乱した」

無理はそれこそ百も承知していた筈だ。期限を延ばすことが第一目標だったのだ。それ以外の条件まで望むなど高望みしすぎた。

それにしても期限については予想以上に頑張ってくれていると思う。けれど、その分人数については相当厳しい。かぐや姫の求婚者に与えられた条件のようだ。しかし、赤字経営を立て直すにはそれくらい

でなければいけないということなのだろう。

「ならばは予備予選と学校説明会だね」

実質最後のチャンスと思わなければならぬだろう。年末が期限とは言えどんな悠長な受験生でも11月中旬には流石に志望を決めている。だから次の予備予選と学校説明会で広く注目を集め、地区予選で最後の駄目押し。そういう流れとなるだろう。

「準備、間に合います?」

「間に合わせる!」

「それじゃあ、予備予選と学校説明会に向かって、全速前進——」

「——「ヨーソロー!!」——」

可能性とは獣、とはよく言ったもので0が1に成った瞬間に未来が広がった。広がった瞬間にやれるなんて気になってしまっただから。けれど、その可能性を0にしないように見えた光を見失わないようにしなければならぬ。だからこそ暗中模索の航海に旅立つように。

第九十九話

統廃合が決定となるまで猶予期間を得たという事実はあるという間に校内を駆け巡り、その日のうちには皆知る事実となった。

学校説明会が行われると信じピラを回収しなかった皆の士気は高い。当日の段取りの打合せに皆が参加したいと意思表示する中、意見を取りまとめる四五六トリオ先輩は本当に運用上手だと思う。経営者に向いているだろう。

A q o u r s メンバーと四五六トリオ先輩、そして何故か私は放課後、スクールアイドル部室に集まり、当日の段取りをすることとなった。

「沼津市内とか隣接市から来る人のこと考えると遅めに時間を設定した方がいいと思うんだけどどうかな?」

「でも、実際に通学することを想定したとも思うだろうし登校時間と合わせた時間設定の方がいいのでは無いかしら?」

「それだと朝早すぎてやっぱ入学希望にするのをやめようとか思われるかもしれませんが?」

「それならそれまでじゃない?そういうのも含めての学校説明会でしょ?」

千歌先輩は状況が分かっているながらあつけらかんと言うのだから、この人は本当に誠実だ。

都合の良い所だけでは浦の星女学院とは言えない。輝きを求めて、スクールアイドル活動を通じて得た実感があるからこそその千歌先輩の言葉は説得力があった。

「なら午前中は学校の紹介、お昼を挟んで午後には部活見学とA q o u r s のライブという流れがいいと思うよ」

「なら、お昼は皆で容易するぞら」

「シャイ煮をー」

「予算オーバーです」

「O h m y g o d ! ! ? 」

流石に一杯10万円のシャイ煮などを振る舞えるほど予算はない。

ここは近隣の農家から食料を恵んで貰うほか無いだろう。幸いにし
て浦女生には実家が農家の生徒も少なからず居る。

「流石にガッツリ全員を満腹には出来ないでしょうから、豚汁だとか
汁系を一品振る舞う位の方がバランスが良いのでは？」

「な・ら、それこそシャイーーー」

「はい、それじゃ次」

「私学園長よ!？」

「ダイヤさん、次行きましょう」

おちやらける鞠莉さんをスルーしてダイヤさんが進行する。けれ
ど、決して私達は鞠莉さんを蔑ろにしているつもりはない。

鞠莉さんのことだ。今回得られた機会に感謝し、ポケットマネーで
シャイ煮を振る舞つてもいいとも考えているのだろう。けれど、そこ
まで鞠莉さんにさせる訳にはいかない。学園長ではあるけれど、一
徒でもある鞠莉さん個人に負担を強いるのは違う気がするのだ。そ
れは皆も同じ気持ちだ。だからこそダイヤさんもまた鞠莉さんを流
した。

「当日の進行は学園長と生徒会長に任せて平気ですか？」

「OK」

「じゃは私達はお昼の準備と」

「ライブの準備をするね」

「そうだね。総力戦になると思うからお昼の準備までは手伝って貰う
けど、部活見学についてはこっちでやるから千歌達はライブに集中し
て」

この学校の良さを生徒全員が自覚しているというのは他の学校で
はまずないだろう。統廃合という問題があるからこそ得た気付きで
あり、この学校の新たな良さでもある。だから当日は全校生徒が総出
だ。

「バス停からここまでの案内要員もいるから・・・」

その後も人員の割り振り、設営期間の設定、資機材の準備について
など、話は進み、いよいよ当日のライブのセットリストの話となった。

「新曲がいいよ」

「学校説明会の一週間後にライブ予備予選がありますけど、そこで披露する曲のことですか？」

「それとは別」

「・・・そう言えばそもそも曲も準備出来てるんですか？」

「えー・・・あはは」

頭を掻いて苦笑いする千歌先輩から梨子先輩に視線を移すと、梨子先輩は呆れたように首を横に振った。

「結構難産みたいですね」

「タイトルと方向性は決まっているんだけど、そこから先がね」

「まあ、それはそのまま進めて貰うとして、そこから更に新曲ですか？」

「うん。やっぱりどの会場でも来て良かったって思っただけで貰いたいしね」

気持ちも心意気も分かるけれど、千歌先輩と梨子先輩だけで二曲も用意するのは現実的に厳しいものがあるのではないかと思う。

「みなさんは曲作りに専念してください。細々とした作業は進めておきますから」

そういうやいなや私と四五六トリオ先輩は千歌先輩達を部屋から追い出して打合せを再開した。

「説明会事態の進行はともかくやっぱりネックなのは部活見学と」

「ステージ作りだね」

Aqoursのライブは校庭に特設ステージを作る予定だ。

それはAqoursを学校の目玉として宣伝していること、そして生徒の活動を学校全体が応援していることを伝えるためだ。

「ステージ背面はベニヤにペイントしてサッカーのゴールポストに固定すれば自立すると思うけど、舞台をどうする？」

「ステージは最低でも一段上げたいですね」

「でも、足場を組んで安定したステージってどうする？床が抜けない強度を確保するとなるとそれなりにお金掛かりそうだけど？」

「漁業組合から輸送用パレットの使い古しを借りるか貰いましょう。輸送用なんで元の強度はありますのでちよつと補修すれば使えるで

しよう」

パレットとはフォークリフトなんかで持ち上げる荷物を載せる板のことだ。その用途から荷重には見た目以上の耐久力があり、尚且つフォークリフトの爪を差し込む穴があることから連結するなどの小細工もしやすい。また、その穴に砂袋か何かを入れれば安定した自重を得るだろう。

一番の特徴はその使い回しの良さとは裏腹に3000円前後で買えることで、それ故に中古で売られる場合は二束三文で売られる。

沼津漁業組合には浦の星に縁のある人も居るだろうし中古を譲ってもらえる公算はある。

「じゃあ後はベニヤ板と大きいシートだね。大凡の方向性はそれで行く」

4ブロックぐらいに分けて作って連結し、ベニヤとシートを敷けばそれなりに見えるステージとなるだろう。

「兎に角準備で怪我しないこと、そして本番で怪我させないこと。それは徹底していきましよう」

「なんて格好つけてるけど、千歌達の居ないスクールアイドル部室でこんなことしてるって割とシニールじゃない？」

「それは言わないお約束ですよ」

イマイチ締まりのない会議の幕となってしまったが具体性は見えた。

あとは千歌先輩達が具体性を見せるだけだ。後で差し入れでも持って行こう。そう決めて私はスクールアイドル部室のパソコンを拝借し、学校説明会の準備に向けて書類作りを始めた。

第百話

パチパチとキーボードを叩いて学校説明会に向けて設営準備の書類を作成していると、机の上に置いていたスマホが震え着信を知らせた。

着信したメッセージはルビイちゃんからだった。

どうやらラブライブ予備予選と学校説明会に向けて新曲を二曲用意することとなり、作曲を二組に分かれてやることになったようだが、その組み合わせがまた新しい。二年生組と一・三年生組に別れてというのだ。

そう言われると基本的にA q o u r sは各学年毎に行動することが多く、特に一年生組と三年生組にはあまり絡みが無い気がした。ルビイちゃんがダイヤさんと戯れたり、私が三年生の誰かと話したりしている時はそうでもないかもしれないが、それ以外には皆無といえる。

それに比べ二年生は変に意識していないからか、上手く各学年と付き合っているように思える。あの人見知り集団の一年生が懐き、本音の中々言わない三年生の心を開いたのだから。

そんな二年生だからこそその采配なのかもしれない。学年の垣根を壊さなければならぬと。

それだけで決めた無策な訳では無く、三年生組は旧A q o u r s時代に作詞・作曲・衣装作りをしていたため出来る見込みがあるからこそその采配なのだろう。

とにかく、二組に分かれて作曲するのは分かった。分かったけれど、何で私に連絡が来たのかと言えばどうにも一年生組と三年生組が上手く噛み合わないらしくヘルプが来たのだ。

確かに私も学年を気にせず接してはいるけれど、私に加わって一・三年生の間を取り持つことにはあまり意味が無い気がする。

私は少し迷ってからパソコンを閉じ、今から行くと返信した。

仲を取り持つことは出来ずとも仲を割きかねない事態になったら千歌先輩達に知らせる事くらいはできるだろうというのと、どのみち

差し入れをするつもりだったことが理由だ。

最初は浦女周辺にいたらしい一・三年生組は市内の方に移動して、何故か温泉に行っているらしい。その時点で迷走しているのだろうかというのが察せられた。

道中、よくみんなで立ち寄るセブンイレブンで私はのっぽパンとお茶を購入して市内に向かう。

そういえば何時だったかA q o u r sメンバーの誰が一番セブンの制服が似合うかと話題になったのを思い出した。どんな話の流れからそうなったのかまるで覚えていないけれど、意外とみんなガチで議論し、結果1位に選ばれたのが梨子先輩だった。

その際にお互いに顔見知りとなっている店員のお姉さんに制服を借りて梨子先輩に着せた写真はしばらく私の待ち受け画像だった。

梨子先輩の照れながらも満更でも無い、そんなはにかんだ表情がとても良い一枚に仕上がっている。

その時に梨子先輩言っていた。音ノ木坂に居た頃はピアノのことばかりで他のことにはあまり関心を抱いていなかったからきつとこんな話一つで笑ったりしなかったと思うと。

それが悪いこととは言わない。一流と呼ばれる人の中には他の多くを擲って一芸に特化した人もいるのだから、ピアノ一筋がいけないなんてことはない。けれど、それは結果的に見れば梨子先輩の肌には合わなかったと言っていた。

色んな人や体験に触れて、その経験が音になる。練習だけでは得られない五感の感覚が無ければ私は駄目だったと、内浦に来て良かったと梨子先輩は話していた。

みんなが梨子先輩みたいに前向きに感じられるならきつと浦の星女学院も安泰なのだろうけども、市内に向かう道中思うのはポジティブには思えない交通の便の悪さだ。今でこそ慣れたため普通にしか思わないが、初めて浦の星女学院に来る人は遠いと感じるだろう。

スクールバスでもあればいいのだろうけれど、それも採算が取れないければ運用は叶わない。

学校説明会ではそんなハンデを上回る魅力を見学に来る人達に伝

えなければならぬ。

それをするのはA q o u r sを含む浦の星女学院生全員だ。全員が一つの目標に一生懸命に取り組む姿。それこそが人を惹きつける一端だと思うから。

「あれ、雨？」

あと少しで市内に着こうかというときポツポツと雨が降り始め、私
がバスを下りる頃には地面はびしょ濡れ。雨雲は黒々と分厚く空を
覆い、ザーザー降りになっていた。

バスの中でルビィちゃんに連絡した時には、花丸ちゃんの知り合い
のお寺に避難するとの話だったが、それ以降、連絡は途切れた。

温泉に引きこもってくれてれば良かったのにと、愚痴りながら私は
バッグの中からナイロンのマウンテンパーカーを羽織り、雨の中花丸
ちゃんの知り合いのお寺目指して走った。

幸いネット検索で地図で表示はあったため、大凡のあたりは付いて
いる。

しかし、この降り方は酷い。傘などあったとしても役には立たな
かっただろう。

吉兆を天候で占うと雨とはそれ程良い予兆ではないという。けれ
ど、そんな占いの信じられていた時代には、干ばつを乗り越えるため
雨乞いをしたりという側面もあるのだから、捉え方一つで世界は広が
るのだろう。

この雨が私にとって、そしてA q o u r sや浦の星女学院にとって
吉となるかは私達の捉え方次第なのかもしれない。そう思い、私は走
る速度を速めた。

第百一話

シャワーなんかを使う時に感じると思うけれど水が大量に落下すると当然ながら押し出された空気が動き出す。すると風が生まれるのだが、雨が音を起して降りしきる中、このお寺の空気は止まったかのように静寂に包まれていた。

門扉は閉ざされていたことから察するに、今は使われていないのかもしれない。

普段こういった場所とは縁がないだけに環境を変えてみるという意味であればいい試みなのかもしれない。

したし、何故花丸ちゃんはこのみんなを招いたのだろうか？

距離的に温泉施設から近いというのもあるかもしれない。けれど、誰かを招く、という行為そのものが花丸ちゃんらしからぬと短い付き合いながら感じる。

どちらかと言えば花丸ちゃん自己完結した肯定者だ。起きたことを受け止める度量、他者に求めない達観。それが花丸ちゃんの根幹にあるスタンスで、だからこそ自己で完結出来てしまうため、創作の世界で満足できるのだろうと思っていた。

普段のルビィちゃんや善子ちゃん、他の人との付き合い方を見ていてなんとなくそれが分かる。

けれど、誰かを招くという行為は他者を求めるからこそ生じる行為だ。何を思っただ花丸ちゃんは借り物とは言え自らの土俵に人を招いたのか？

「あ、星ちゃんいらっしやいって、凄くビショビショだよ!?!タオル、タオル」

「中には浸透してないから平気だよ。はい、差し入れ」

「Thank you! 疲れたでしょ、座って座って」

本殿に入ると中はお釈迦様に見守られるように畳敷きの間があり、そこに円陣を組むようにみんなが座っていた。

幸い濡れ鼠になっっているのは私だけだった。

「なんだかこんな薄暗い中でお釈迦様の前で円陣組んでるって、怪し

い儀式している見たいですよ」

「ふ、今こそ召喚仕るはー！ー」

「やめるすら」

儀式というワードに当たり前のように反応する善子ちゃんを何時も通り花丸ちゃんがいます。

そんな花丸ちゃんからは特別なことをしただとかそんな印象は感じない。さつき考えていたことは私の考えすぎなのか、私の知らない花丸ちゃんの一面だったのかもしれない。

「どうです？少しは曲作り進みました？」

「まだそこに至ってすらいらないよ。どんどん私達の違いがはつきりしただけ」

「今考えると、私達よく一つのチームになれましたわね」

曲作りに伴い、集中できる場所を探して小原家、黒澤家と場所を転々とし、音楽性の違いを解消するため、共通項を探そうとレクリエーションにドッジボール、読書、そして温泉と手を変え品を変えと試してみたそう。けれど、分かったのはお互いに趣味趣向が違うということがはつきりしたということだけ。共通項はなかったらしい。

「タオルありがとう、ルビィちゃん」

「星ちゃんがユニット組んでた時ってどうやって作曲してたの？」

「ジェミニのアカリの時ね。どうだったかな・・・」

今にして思えばみんなが手こずっているように、私も穹もタイプが違う。

あらゆる事に興味を抱いてその世界に飛び込める穹と、自分の物差で興味のあること意外の世界は切り捨てる私。言うなれば開放的な穹と閉鎖的な私だ。けれど、作曲は割とすんなり出来た記憶がある。たぶんだが、初めの頃の活動はカバーアレンジからやっていたため、お互いの趣味趣向が分かってから作曲という段階に進んだからだろう。

「じゃあさ、どんな曲を普段聴いたりしてるのか情報を交換しようよ」

「じゃあ言い出しっぺの善子ちゃんから」

「え、私!? っていうかヨハネ!!」

「どんな曲かあ・・・閣下は好きかな」

「閣下？」

「リトルじゃないデーモン閣下の事」

「ああ、蠟人形にしてやるってやつ？」

「それぞれ。あとKISSかな」

ああ、とみんなが納得した。どちらも顔にペイントしている。それは東京に行く際にハメを外した善子ちゃんが同じ様なメイクをしていた。

「ルビィはどんなのよ？」

「私はやっぱりアイドルが好き」

言わずもがな、というところだ。

きつとハロプロ系統か秋本傘下のグループなどのキラキラしたアイドルが好きなのだろう。誰もがそう思っていたけれど、予想とは得てして外れるものだ。

「でもそうなあ・・・アイドルとも一番好きともちよつと違うけど、カーペンターズは意識しちゃうかな」

「兄妹デュオだから？」

ダイヤさんをチラリと見てからルビィちゃんはうんと頷いた。

「小さい頃からお姉ちゃんとアイドルごっこしたりして、スクールアイドルが流行るようになってからはいつかお姉ちゃんとやれたらつて。そう思ってた。変な事言うかもだけど、果南さんや鞠莉さんが居なかったらSaint snowみたいにデュオつてこともあったのかなって」

そんな「もし」はみんなと組んだ今はもう起こりえないだろう。なぜならばダイヤさんは三年生。つまり今年で卒業だからだ。高校を卒業してもアイドル活動を続けるスクールアイドルは少なからずいる。けれど、ダイヤさんは地元の網元である黒澤家の長女として、今後は専念するだろうからだ。

恐らくはダイヤさんは高校生という今だからこそ、アイドル活動をする期限を設けていると思われる。

ふと、それをルビィちゃんは推測しているのだろうかと思った。

「花丸ちゃんは？」

「オラの家はレコードとか無いからあまり最近の曲は知らないすら」

「今レコードどころかCDも全盛期とは言えないけど」

「未来すら!?!」

「あと、安心して良いのは閣下もKISSもカーペンターズもそんなに最近ではないから」

「過去すら!?!」

「それで花丸ちゃんはどんな曲を？」

「はいはいと寸劇を切ったのは果南さんだ。」

脳筋を自称する果南さんはそう言う割にしつかり者だ。たぶん鞠莉さんに散々振り回されて嫌でも身に付いたものなのだろう。

「Time To Say Goodbye。聖歌隊の人から教わったすら」

この曲はサラ・ブライトマンが歌ったことで世界的に有名になった。

タイトルから勘違いされがちだけれども、この曲は別れの曲ではなく、門出の曲だ。そもそも曲の来歴を辿るとあっさり出てくるが、原典が君と旅立とうという曲だそうだ。

歌詞を見るとまた面白い。「光」、「旅立ち」、「海」と言ったことなくAoursが好むワードで構成されているのだ。

「オラは歌えないけどね」

「まああんな高い声出ないよね。私はやっぱり耳馴染んだ曲になるんだよね」

果南さんは自宅がダイビングショップであることから基本的に海と縁のある曲をよく耳にするのだという。

「湘南乃風の睡蓮花。この曲はアがるよね」

睡蓮花は非常に構成が豊かでラップ、コール、様々な要素で構成される。聴いてて楽しいし、歌いたくなる。みんなで楽しめる曲だ。コール部分でみんなで声を出せるのはアイドルソングなんかとも親和性があるだろう。

「ダイヤは？」

「私はやっぱりμsのトリオ曲Soldier gameですわ」

「エリーチカ推しだもんね」

「もちろん。今更解説は不要ですわよね」

「ダイヤが話すと一晩あっても足りないからね。私はやっぱりロックなテイストが好きなの」

最後に順番が回った鞠莉さんの口にした曲はロックはロックでも少しイメージしていたものとは違った。

「陰陽座の甲賀忍法帖」

それは一概に一括りには出来ないけれど和ロックとも称されるジャンルだった。

和ロックはジャンルとしては定義がやや曖昧で、和楽器を使っているロックだとか和音階だとか言われている。

この甲賀忍法帖は全体的には実はそれ程和楽器成分はないけれどイントロと間奏で笛を効果的に使っており、非常に印象に残るためこのジャンルに括られたりするのだ。

こうしてそれぞれの印象に残る音楽一つ聴いてもやっぱりばらばらだ。

「なんだかんだそれとなく聴いたことあるアーティストだったり、曲だったりするんじゃない？」

まあ陰陽座はマイナーな部類に含まれるだろうけれど、甲賀忍法帖はバジリスクというアニメのタイアップであり、バジリスクはパチスロ化したことでテレビCMなどで耳にすることもあるだろう。

「ちよつとみんなの好きな曲、聴き合いましよようよ」

そう言って鞠莉さんはバッグからBluetoothのスピーカーを取り出す。

こうして作曲という目的は何処へやら、各メンバーの推しの曲のデイベート大会が始まったのだ。

それは豪雨による雨漏りがするその時まで続いたのだった。

第百二話

みんなの音楽のデイベート大会はそれはもう盛り上がった。入れ込んでいることについて好きに語れるのだからそれはもう楽しくない筈が無い。特に普段遠慮してあまり喋らないルビィちゃんや花丸ちゃんときたら普段の反動からか、多弁も多弁だった。

花丸ちゃんについては脱線しはじめ『無』とはと語り出すのだから焦ったけれど、その『無』に対する花丸ちゃんの世界観を楽曲に取り込みたいと言っていたから、花丸ちゃんの言う『無』とは花丸ちゃんの根幹をなす概念なのだろう。

しかし、『無』とはまた難しいことを言いだしたものだ。

形而上学的な学問としての『無』。そして数多の宗教で語られる宗教的な『無』。どちらも共通するのは認識である。

観測する事象に対し、意味を与えたり、そもそも存在しない物、つまり『無』をそういつた状態が存在すると仮定したりする。それこそが『無』を語る上で大前提となることだ。

つまり花丸ちゃんは世界の捉え方とは認識である、と伝えたかったのではないかと思う。

もつともー

「花丸、そつち」

「ずら。鞠莉ちゃんお皿持ってきました」

天井からの雨漏りの対応で現状それどころでは無くなってしまったのだが。

古いお寺であるとは思っていたけれど、まさか私達が来た日に限ってこんな事になるとは不運としか言えないだろう。

私達はお寺内にあるお皿やら器やらを総動員して天井から滴り落ちる水滴をカバーしている。

文字通り水を差された事で折角盛り上がっていた空気が慎と静まりかえってしまった。もつとも、曲作りという工程事態が進んでいた訳では無いので、そろそろ曲を作れという合図と受け止めれば良いのかも知れない。

「みーみー」

静寂に波紋を作るのは、それもまた天井から滴り落ちる水滴だった。

雨漏りを受け止めるために置いた水受けから発するのは天の恵み。もたらされたのは天啓となり、みんなの心を打った。

聞き逃してしまうような水滴の落ちた複数の単音。そこには本来関連性も意味もない。けれど、そこに特別な何かを見出せるのは私達だ。

「ばらばらな音が」

ただのばらばらな音も連なればメロディーにだってなるのだ。いや、ばらばらだからこそそこにメロディーが存在しえるのだ。

みんなはその天から降りてきた音の連なりに自分達の姿を見た。好みも音楽性もばらばら。けれど、無理に同じである必要はないのだ。

お互いを知り、個性を認め、そこに価値を与える。

「調和して」

それが本来色も形も無い aqua に Aqours という意味を与えるのだ。

それを気付いた。気付けた。だからみんなはもう大丈夫だろう。

ああ、みんなの胸にある音楽が合わさった時、どんな曲が生み出されるのか今から楽しみだ。

そう言えばジェミニのアカリとして作曲した時はすんなりといったけれど、ユニットを組んでから一番最初の活動となったカバーアレンジをどの曲にするかとなった時、えらい時間が掛かったのを今更になって思い出した。

その時はお互いに譲らずカラオケでオールを決行し、カラオケバトルを繰り広げた。中学生がオール？とか疑問に思っただけじゃない。田舎の地元民がご鼻根にする店なのだ。たまにハメを外すのはご愛敬というものだ。

さて、バトルとは言えけれど、内容は散々たるもの。泥仕合と言う奴だ。体力も喉も限界まで使い切って結局カバーすることになった

のはお互いに歌わなかった曲だったのだから。

カバーアレンジしたのはメロキユアの「Agape」、円盤皇女ワルキユーレのタイアップ曲だ。

高音域での高い歌唱力と透き通る声、誤魔化しの聴かないシンプルで短い歌詞から演奏と歌の調和がキモとなる名曲だ。

それを選んだのは挑戦。そして音楽に対する愛からだ。

「Would you call me if you need my love?」

歌詞の中にあるその問い掛けに胸を打たれたのは私達だけではないだろう。

私達はその問い掛けに対してのアンサーとしてカバーアレンジを選んだのだ。

そう言えばAgapeもまた無償や無限の愛という意味があるそう
うだ。

無償、無限という概念もまた無と同様の概念だ。本来は存在しえないことに意味を与え、生み出されたのもの。

概念上の存在には現実的でないからこそ人を魅了するのだ。

さて、と私はそつと腰を上げると集中して作曲し始めたみんなに気が付かないようにお寺を出た。

気付いたとは言え現実としての形の無いものに形を与えるのだから長丁場になるのは必至だ。

空想と現実の狭間に心を置いて作業するみんなのために私は現実
でできる手段を講じる必要がある。

「もしもっ・マルゲリータとシーフード、あとは・・・」

差し入れ程度では一晩明かすには全然足りないだろう。

私は主屋から出るとスマホでピザ屋に出前を注文したのだった。

第百三話

一晩を寺で明かすというのは中々に貴重な体験と言えよう。けれど、その中で行われていたのは念仏を唱えることや写経ではなく、ひたすらに作曲という作業だった。

私とは言えば作曲そのものには参加はせず、みんなが紡いだメロディーをスマホのアプリに譜面を入力し、音出ししてみるといった作業を手伝った。スクールアイドルではない、Aqoursのメンバーではない私が手伝えるのはここまでであると線引きしているのだ。

その甲斐もあつてか、夜が明ける頃にはどうにか一曲仕上がった。途中、眠りそうになったルビィちゃんのほつぺたを弄り倒した鞠莉さんがダイヤさんに叱られたり、唐突に黒魔術を執り行なおうとした善子ちゃんが花丸ちゃんから般若心経を耳元でリピートそれたり、地味に意外なことにお化けが怖いらしい果南さんが一人でトイレに行けなかつたりと色んな出来事がありながらもなんとかだ。というか、脇道に逸れることが無ければ仮眠くらいは取れたかもしれない。

ともかく、みんなの心のメロディーが調和して作られたそれは新しいAqoursの始まりをラブライブという大会に告げるだろう。それくらい今までのAqoursのイメージとは違う仕上がりとなった。

「どうにか仕上がりましたね。このデータは学校のパソコンに入れておきますね」

「I, m tired」

「でも、全然眠くならないんだよね」

「果南さんは体力お化けだからです」

荷物を纏め、見守っていた仏様にみんなでお辞儀をする。来た時にはなんとも思わなかったけど、仏様の顔が何となく微笑んでいるように感じられた。これも物の捉え方一つということなのだろう。

外に出るときさっきまでの雨が嘘のように晴れ渡った青い空が目飛び込んできた。

「眩しっ!?!」

「う、浄化されるうう」

「霹靂からの晴天ずら」

雨降って地固まるとは正に今回のことだろう。

趣味が合わないとあれやこれやと東奔西走したけれど、雨が降ったことで普段は立ち寄らないような環境に身を寄せ、そしてお互いを知ることができた。

みんなはとても良く纏まったと傍から見てもそう思えるのは、今まで学年毎に固まっていた立ち位置がばらけたことだ。良い意味で互いに壁が取り払われたのだろう。

私達は晴れ渡った空から祝福されたような気持ちで千歌先輩の家へと足を運ぶ。

千歌先輩ら二年生組も千歌先輩の家で一晩明かしたらしい。

ラブライブ予備予選、そして学校説明会で披露する二つの楽曲が完成したことは凄い。もちろん、学校説明会で披露する予定となっている二年生組の曲「君のこころは輝いているかい？」はタイトルと方向性は決まっていたため、完全に一から作り始めた訳では無いけれど、それでも一晩で形になったのだから音楽とは分からないものだから出来るときはすんなり出来るし、出来ないときはとことん出来ない。そして今、私はとことん出来ない方にいる。

ラブライブ予選の翌日に内浦に姿を現した穹は私に課題を出したのだ。

言いたいことは曲にして伝えに来いと。穹はそれを私に告げるためだけに遠路遙々埼玉からここまで来たのだ。

その課題はある意味、私達らしいと思う反面、いざ作ろうと思うと全然頭に浮かばず、今日に至っているのだ。

本当は沢山話したいことがある。謝りたいことやこれからのことだつて沢山、沢山話したいのだ。

だが穹は私との対話を望んでいない。決して拒まれた訳では無いだろう。けれど、対話という形を選ばなかった。

音楽は時に言葉以上に気持ちを、想いを震わせるのだ。

「結局付き合わせちゃったね。星ちゃんも曲作りしているのに」

「そんな気にしないで。多分、私のは悩み続けないと出てこないタイプなんだと思うから」

穹に話したい事の中にはここでの出来事、Aqoursのみんなのことも含まれている。だから私はみんなのこともまた曲の一部にしたいのだ。言うなればみんなと一緒にいることもまた作曲活動の一環だ。

「あ、千歌ったらまたあんな所に」

千歌先輩の家まで辿り着くと、呼び鈴を鳴らすまでも無く、千歌先輩を見付けた。

どうやって昇ったのやら屋根の上に腰を下ろし、昇る朝日を眺めながら階下の梨子先輩や曜先輩と話していた。

「おーい、千歌ー」

「みんな！曲出来たんだね」

「ぼっちり」

みんなで意見を出し合って、描き上げた譜面、歌詞、そして衣装案を纏めたノートを千歌先輩に見せつけ、みんな得意そうな顔をしていた。

一つの壁を乗り越えた今、後はひたすら下準備と練習あるのみだ。だけど、今日の所はゆっくりしたい。千歌先輩達に作曲完了を知らせると、急に眠気が襲ってきた。

けれど、それも束の間のことだった。眠気など一気に吹き飛ばすニュースが舞い降りたのだから。

「一週間延期!?それ本気!?!」

唐突に着信を知らせるスマホに鞠莉さんが応答するとOh my Godとネイティブな発音から話が始まった。正直その時点で悪い知らせだろうと想像が付いた。

「鞠莉ちゃん?」

「何だったの?」

「学校説明会が一週間延期になった。今日の雨の影響で道路が復旧するのに時間が掛かるところもあるからって」

ああ、と私はこの伊豆半島の道路事情を思い出した。

伊豆半島は海辺が山になっているところが多く、降水量が1000mとかを超えると通行止めになってしまうのだ。しかも、その山道が国道で、他に回り道をしようにも迂回路もまた山道という八方塞がりになる交通事情となっている。

車がないと移動が困難なのに、車を通らせるのもまた困難なのだ。学校説明会が中止ではなく延期となったのは不幸中の幸いとも一瞬思ったけれど、よくよく考えるとそれは学校説明会とライブ予備予選がバッティングすることを意味していた。

みんなにそれを説明されて初めてそれに気付いた千歌先輩は驚きのあまり屋根から落下した程だ。

これはまた一波乱ある。皮肉にも落ち着きを取り戻した青空を睨め付け、私はどうなるか予想出来ない先行きに不安に思った。

第四百四話

みんなで目標に掲げた統廃合阻止。そのためには既に入学の意志を見せてくれている受験生の心を掴まなければならぬ。そのためには学校の魅力を知らしめなければならぬ。生徒の繋がり、活気、そしてA q o u r s。学校説明会はそれをアピールする場として最後の好期だ。

当初の予定ではラブライブ予備予選を良い成績で突破し、翌週の学校説明会でその成果を宣伝するとともにライブを披露し、学生の活動に学校や生徒が協力して取り組む姿。そして、その力を結集した姿が輝いていると知って貰いたい。そんな計画だった。

けれど、学校説明会が一週間延期となったことで、学校説明会とラブライブ予備予選にそもそも両方参加出来るのかという問題が発生した。

予備予選は市町村単位の大会だ。そのため、狭い地域の中で体育館や公堂などを借りて行われるのだが、恐らく今回は良い立地条件の会場を抑えられなかったからこそ、山中にある狩野ドームが会場に選ばれたのだろう。そのうえ、そこに特設ステージを作るというのだからラブライブ運営が今後の発展のために実験的な試みをしているような姿勢も窺える。

まあ、そんなラブライブ運営側のことはさておき、問題と向き合わなければならぬ。

「狩野ドームがここ」

「山の中じゃない」

「それで学校がここ」

「山の中じゃない」

「みんな知ってますわ」

地図上の直線距離で見れば大した距離ではない。けれど、狩野ドームは山の中。道は当然一本道では無く、曲がりくねった山道が続ぎ、迂回をするしかない。その上、移動手段も限られるため行ったが最後、長時間滞在を強要させられる。

「鞠莉ちゃん」

「No. お父様には自力で学校を何とかするって行ってるの。へりな
んて頼めると思う?」

「やっぱり。じゃあー」

「家も日曜日は船使うからなあ」

「というか、海まで辿り着ける時点で学校に戻る手段あるでしょ」

目下の所、ラブライブ予備予選に参加し、学校に戻って学校説明会
をこなすという方向性を模索しているのだが、やはり移動手段は公共
機関を乗り継ぐこととなる。問題はバスの本数と電車の乗り換えの
タイミングの悪さだ。

ラブライブ予備予選開始後、一本を除き学校説明会に間に合うよう
に戻る便はない。その一本を逃すと最速で学校に戻る便は三時
間後だ。

「何番手までならそのバスに乗れるんです?」

「一番手。それ以外に方法はありませんわ」

それはまた何というか、もう無理だろうとしか思えないような番号
だ。

全部で40組以上のグループで順番を決めるのはクジだ。40分
の1を引き当てるというのは狙ってできることではない。

なら他の手段を講じるしかないだろう。

タクシーは却下。今回の学校説明会やらの準備でお小遣いの大半
を使っているのだ。経済的な問題からタクシーは難しい。

会場入りする際に自転車を持って行き、パフォーマンス終了後それ
で駅に向かうのはどうか? 基本的には下りとなるため体力的に消耗
の度合いも少なくてすみそうだが、スピードが出すぎてしまうこと、
偶にしか来ないとはいえ、車が通ることから安全上の問題があるため
余りお勧めは出来ない。それに平地に戻ってから距離があるため
それなりに時間は掛かってしまう。三時間待ちに比べればマシだが、
クリアできる条件が一番手から十番手に変わる程度の差しかないだ
ろう。

みんなで地図と睨めっこした結果、結局この日はくじ運に任せるこ

ととなり、対策については保留となった。

「花丸ちゃん」

「ん？どうしたの？」

一時解散となり、帰宅しようとする花丸ちゃんを私は呼び止めた。まだ気持ちが新鮮な内に聴きそびれていたことを聴いておきたかったからだ。

「花丸ちゃんはなんでみんなをお寺に招いたの？」

「おかしい？」

「おかしくない。ただ、なんとなくらしくないなって思っ」

「らしくない、ずら？確かにオラ、今まで誰かを誘った事ってなかったかもしれない」

「どうやら改めて考えないと気付かないくらい、それをすることが自然だったのだろう。」

それは花丸ちゃんにとって小さくない変化なのではないだろうか？

これまでそれ程多くの交友関係を持っていなかったといつ花丸ちゃんにとって誰かと一緒に居ることは本来不自然なことだ。それが自然であると思えていること。それこそが花丸ちゃんにとって A q o u r s とはどんな存在であるのかということを示している気がする。

「花丸ちゃんの家も昨日のお寺みたいな感じなの？」

「ルビイちゃんは花丸ちゃんの家行ったことなかったんだ」

帰宅しようとしていたところを呼び止めたから当然ながら側にはルビイちゃんもいる。

花丸ちゃんの少ない交友関係の中でルビイちゃんは中学時代からの親友だという。そのルビイちゃんが花丸ちゃんの家に行ったことが無いというのだから今回のことが稀なことであるということを実際立たせる。

「オラの家はもうちょっと生活感あるよ。でもそっか。ルビイちゃんも呼んだことなかったんだ。ルビイちゃんのお家には行ったことあるのね」

「花丸ちゃん家は遠いから」

「それだけじゃないのかも。オラ、ルビィちゃんに仲良くして貰ってたけど、やっぱりどこかで遠慮していたんじゃないかなあって思う」「ルビィちゃんが楽しそうにアイドルの話、お姉ちゃんの話、洋裁の話とかしてるのを聴くのが好きだった。でも、オラはオラの事を上手に伝えられてなくて、だからいつも話をしてもらってばかりで。でも、スクールアイドルをルビィちゃんがやるって、やって欲しいって思っただけで行動をしてからはなんか少し自分の気持ちを出せるようになった。そんな気がするんだ」

「花丸ちゃん、スクールアイドルになってから前よりよく笑うようになった」

人の好きは原動力で、時に周りの人をも巻き込む大きな力になる。切っ掛けは多分、ルビィちゃんのスクールアイドルへの憧れだったのだろう。それが花丸ちゃんを今まで踏み込んでいかなかった場所へと引っ張ったのだ。

良い関係だと思う。私も穹とそんな関係であればらとつい夢想してしまう。

友達に優劣は無いのだけれど、どうしても関わった密度で穹のことを意識してしまうのだ。

「星ちゃんも。よく私達に、ううん。学校のことに関わってくれね」

「星ちゃんって結構リアリストだもんね」

「それは私も思う。でも、どんな願いでも願うことは出来るから」

私の性格上、100%不可能を可能にしようとは思えないだろう。けれど、それを切り捨てることをどうしてもしたくないのだ。その気持ちこそが大切なんだと、今の私に必要なものなのだと思うから。

「信じよう。学校説明会とライブ、どっちも参加できるって」

ライブ予備予選の抽選会は翌日。今の私達には確立を信じることしか出来ないのだ。

第百五話

自分の力だけでは物事の方向性に影響を与えられぬ事象。それを決定させる力が「在る」と仮定した時、その力は「運」と呼ばれる。時に運に助けられ、時に運に見放される。運に助けられた時はまだ良い。けれど、運に見放された時は嘆くしかない。自分達の力で物事を決定させられないことは理不尽と言う点で天災と変わらない。

そして今、私達の前にはその理不尽が立ち塞がっている。

ラブライブ予備予選、出場順は24番。それはどう足掻いても学校説明会には間に合わないことを意味していた。自転車を持ってくるとか、そんなレベルでは無理だ。ダウンヒルスペシャリストが86にでも乗って峠を下りなければ間に合わないのではないだろうか？

私は学校でみんなから連絡を受けた時、いよいよ詰んだと思った。けれど、それを諦めるかどうにかするか決めるのはAqoursだ。みんなが諦めると言い出さない限り、私も学校の皆も学校説明会の準備を中断することはない。

「パレットの配置はこんなもんですね。じゃあ今度は今並んでいるパレット同士をしっかりと固定しましょう」

学校の皆はとても精力的に動いている。

漁業組合に所属する親を持つ生徒が中心となり、積載用のパレットを借り受けることに成功した。それも、学校まで運んで貰えるというサービス付きでだ。

そのため、今日はラブライブ予備予選の抽選会に行ったAqoursとは別行動し、私は学校で設営準備をしている。

もちろん今週末に学校説明会があるわけでは無いので、仮設置と、設置ノウハウの習熟のためにパレットを組んでいるのだ。

実際に配置していると当日の景色をイメージしやすい。

パレットを一段平置きしただけでも見え方が違うもので、当日集まるであろう人数を考えると下手に積み重ねない方が良さそうだった。

ステージを高くし過ぎると距離感が出てしまう。それは多分、千歌先輩達の目指すスクールアイドルの姿ではないのだ。

完全に理解しているわけでは無いけれど、Aqoursの在り方はあくまでも学校の生徒の延長線上。特別な何かではなく、誰にでも開かれた世界の住人。それがAqoursだと思う。

だから学校説明会に来た人がAqoursを見て、別世界の存在だと思われてしまうのはみんなの本意ではないだろう。

パレットを一段の平置きで済むのは工程的にもかなりの時短となるため、ありがたい。

あとはパレットが剥き出しにならないよう化粧を施したベニヤ板と背面の装飾をすればステージは形となる。

ステージに適当に九人配置し、背景の見え方を美術部が撮影する。影の入り方、死角となる場所。それを予め抑えることでデザインを調整することだ。

こうして出来ることが多くある反面、どうにも出来ないこともある。

良い順番を引き、最速で移動するという手段は駄目となった今、取れる手段は限られる。

ラブライブ予備予選に出場し、学校説明会を諦めるか、その逆かだ。チームを分割し両方に出るという手段もあるけれど、対処療法的に両方に参加しても良い結果はでないだろう。

また、何組も出場するラブライブ予備予選では順番も評価を得る大きな要素となる。トップバッターなんかは印象に残るため当たり前と言える順番である。順番を譲って貰えるよう交渉するなど論外だろう。

浦女生全員でカンパしてタクシー代を捻出すれば、とも思ったが、それを千歌先輩達が受け入れるとは思えない。それに、24番手でパフォーマンスを終えてからタクシーで帰って来たとしても時間は16時近くとなってしまいうだろう。学校説明会のAqoursのライブをそこまで遅らせることは出来ない。

「みんなどうするんだろうね」

「どっちを選んだとしても多分後悔はしますよね」

四五六トリオ先輩が一人、むっ先輩が私に話を振ってきた。

何をしても後悔する。そんな選択肢しか存在しないとき、何を思えば力に変えられるのだろうか？

「気持ちだけじゃ物理法則はねじ曲げられないもんね」

「ラブライブ予備予選の会場、あのみかん畑山の先だもんね」

「周りのみかん畑なんですか？良く知ってますねそんなこと」

「ジモティーだし。それ以前にあのみかん畑ってよしみの家のだし」

「そりゃあ勝手知ったるって訳ですね」

四五六トリオがナンバー4ことよしみ先輩のことだ。流石は狭いコミユニティであることに定評のある浦女だ。

「その勝手知ったるむつ先輩からみて86で全開走行すれば行けそうですか？」

「24番手でしょ？デロリアンじゃなきや多分無理じゃないかな」

車での例えにむつ先輩は車を例えに出して返した。けれど、バツク・トウ・ザ・フューチャーに登場したタイムマシンの車を例えに出すということは時を超えなければ無理だと言うことだ。事実上、不可能だということだろう。

「私達はどう転んでも平気なように学校説明会の準備をする。それしかないでしょ」

「予備予選の様子を中継してライブビューイングでもしますか？」

「もしAqoursがそつち一本にするっていうならそれも手だけど……」

けれど私は思うのだ。画面越しではAqoursとの距離は遠いのだと。憧憬の念を抱いても、憧れだけでは学校に入学しようとは思わないのではないかと。

「とにかく今できること。それを進めよう」

それは前向きなようでいて実はそうではないことなのかもしれない。

私が去年、自ら道を閉ざし、その閉じた道で必死になっていたように。

だから私達は今、本当なら抜け道を探さなければならぬのかもしれない。けれど、私にはその抜け道が見付けられない。

みんなは今、道を探しているのだろうか、と私はむつ先輩と共に会場設営の下準備に戻った。

第百六話

運に見放された、と言えども思い浮かぶのが津島善子ちゃんだ。

彼女の尋常でない運の無さは一日一緒に行動していれば必ずその場面に出くわす程だ。

ヒールを履けば、ヒールが側溝の隙間に挟まり、日傘を差す時に限って強風が吹き、トイレに入れば紙が無く、信号を急いで渡ろうとすると直前で赤に変わり、フラッシュを焚いて写真を撮れば目を瞑ってしまう。そんなありふれたところから徹底して運が悪い。

だからこそ、今回のこの事態をどう思っているのかを聴きたかった。

「大したことだけど、致命的じゃないわよこんなの」

「予備予選と学校説明会の両方には出られないの？」

「そうと決まった訳じゃ無い。それに、今回の事でどちらかが駄目になると決まった訳じゃ無い」

学校説明会の今日の分の下準備が終わった後、私は善子ちゃんに電話を掛けた。

善子ちゃんは流石というか、自分の身に降り掛かった不運への対処も良く心得ている。

不運をただ嘆くのではなく、現実的に今後どうするのか？何が出来て、何が出来ないのか見極めようとしている。

そんな善子ちゃんがまだ両方に出る可能性を捨てていないあたり、私はまだ見逃している方法があるのかもしれない。

「みんなはどう？」

「気落ちしてるけど、多分すぐに立ち直る。だから私がしつかりしてないよね。みんなが立ち直ったときにすぐに行動できるようにしたい」と

「何をしているの？」

「学校説明会でやるライブのセットリスト。持ち時間毎にパターン分けしているところ。あと、人数毎に担当するパートのパターン分け」

「どう転んでも良いように?」

「そう。残念だけど、私には両方に全員が参加する方法が思い付かなかったから、それはみんなに任せるわ」

普段は堕天使ヨハネを名乗り、厨二とも取れる発言で周囲を困惑させるけれど、これでいて善子ちゃんは結構常識人なのだ。

それは理不尽な不運に見舞われ続けたからこそ、その埒外のことに対抗するかのようには培われたものなのかもしれない。

私は善子ちゃんのそんなところを凄いと思う。

去年の私は親の昇進という幸運により、その分の不運が私に回ってきた様に感じていた。それに対して行った事と言えば現実逃避と反抗だ。決してその全てが無意味であったとは言わないけれど、幻想の未来に縋っていただけであつた。善子ちゃんのように可否の判断が出来ていたとは言えない。今だから言える。きつとどんな手段を使つても私が埼玉から引越すことを覆すことは出来なかつただろう。それを認めていたら、きつと穹との接し方も違つただろう。

「学校の準備の方はどう?」

「今日ステージの材料が来たから試し組みしてみたんだけど、良い感じだったよ。デザインについては美術部と微調整出来たし、順調と言える」

「流石ね」

「うん。学校の皆凄く頑張っていて・・・そう、輝いているって、こういうことなんじゃないかって、ふとそう思う時がある」

学校説明会を成功させて生徒を呼び込む。それを本気で信じて、今自分に出来ることは何かを必死に考えて、出来る最大限のことに全力を尽くす。そんな生徒が沢山居る浦女が凄く素敵で、去年の私がそれを見ていたらきつと沼津に越してくることに前向きになれたんじゃないかと思う程だ。

「そっか。皆も本気で、私達も本気なんだ」

「本気をぶつけ合つて」

「手に入れよう、未来を」

そのフレーズは既に発表済みのためラブライブでは披露すること

の叶わない楽曲。未来の僕らは知ってるよ」だ。

この曲は非常に力強い。ただ望むのではなく、それを自分達の気持ちで掴み取ろうと手を伸ばす、意志力を前向きに揺さぶる渾身の曲だ。

どちらともなく飛び出したそのフレーズに私達は笑い合った。

やはり、同じ音楽を共有するのは、そして同じ音楽で同じ気持ちを抱けるのはとても楽しい。

「この気持ちを少しお裾分けしなくちゃね」

「うん。じゃあまた。電話長くなっちゃってごめんね」

「電話代はそっち持ちだしダイジヨウブ」

げ、と思つて私は画面に表示される通話時間を見てがつくしと肩の力を落として通話を切った。

さて、と私は懐が寒くなる気持ちに蓋をしてA q o u r sの別メンバーに電話しようとして、ふと外から聞き慣れた声を耳にした。

学校の屋上から声の聞こえたミカン畑の方を見ると、よく知る三人の二年生、千歌、曜、梨子先輩だった。

何を話しているのか分からないけれど、やたらと千歌先輩が元気に跳ね回り、ミカンを連呼しているのだけは分かった。

確かにミカン畑にはミカンが沢山生っており、ミカンの収穫の季節が来たことを告げていた。

流星はオープニングMCのコーレスが「カンカンミカン」なだけある。どんだけあの人はミカンが好きなのだろうか。

まあ、あの様子を見ると私が電話を掛けて励ますまでも無いだろう。

私は苦笑いしながらも、自分で元気を取り戻せる千歌先輩を頼もしく思い、彼女達に合流すべく私は屋上を後にした。

まさかこの時に千歌先輩が妙手を思い付いているとは思ってもよらなかった。

第一百七話

余所で発注を掛けると特殊衣装はかなり値が張る。その上、想定したデザインに微細な差異が生じてしまう。そのため、スクールアイドル活動するにあたり、衣装のクオリティについてはダンスや歌以上に差が付きやすい。

衣装を作る洋裁技能を持ち合わせているスクールアイドルを抱えているグループの衣装は本当に素材の活かし方が上手いのだ。

Aqoursがどうかと言うと、素晴らしい衣装担当が二人居るため、衣装のクオリティは全国的にもかなり上位に食い込むだろう。

制服系の衣装が好きな曜先輩、そしてカラフルな衣装が好きなルビィちゃん、このツートップがAqoursを支えている。

けれど、九人分ともなると二人で用意するのは時間的にも負担が大きいため、下拵えくらいであれば私も手伝ったりする。

今回は特に九人分の衣装を二着だ。それも一方は学校説明会のための、学校の顔としての衣装という意味合いもある。なら手伝うことに何の躊躇いも無い。

「裁断終わりました」

「ありがとう。そっちの金具は取り付けたからハンガー掛けて貰っていい？」

「アイサー」

細かい手作業はテクニックに左右されるため手伝えないけれど、サイズを測って下地となる布の裁断だとか仕付け縫いならばできる。

地味ではあるけれど、そんな細かい下拵えでも手伝えればかなり時短となる。

「ルビィちゃん、髪飾りの仕分けはしたからね」

「うゆ」

衣装についても分担は当初の予定通り、ラブライブ予備予選の分はルビィちゃん、学校説明会の分は曜先輩だ。

曜先輩は何時も通りリラックスして作業し、ルビィちゃんは没頭して作業している。

二人は同じ衣装担当でありながら、その作業スタンスは異なる。

曜先輩はある意味でどんな物事にも高い数値でのフラットライン。常に楽しんで取り組むからだ。対してルビィちゃんは好きな物事には全霊で取り組む、職人気質なのだ。

「没頭してるね、ルビィちゃん」

「今回は特別だからね」

「それにしても、本当に九人分でいいんですか？」

「九人でA q o u r sでしょ」

予備予選と学校説明会、どちらも出るといっなのは物理的な制約から限りなく難しい。そのため、最小限の数の衣装を準備して、パフォーマンスの練習に時間を費やすという手もあるのだ。

「本当に上手く行くとおもいます？あのきまぐれオレンジロード作戦」

「その作戦名言ったら多分千歌ちゃん、オレンジロードじゃなくてみかんロードだよって直すと思うよ。というか、その作戦名言ってるの星ちゃんだけだよね」

けれど、曜先輩が言うように、九人でなければA q o u r sではないのだ。だからどちらにも全員で参加しようと千歌先輩は妙案を出し、今日はその実証をしている。

「なんで千歌先輩って自分のイメージカラーをみかん色って言うんでしょうね」

曜先輩の言葉を聴き、ふと思った疑問を口にする。

スクールアイドルは往々にして自分のパーソナルカラーを決めている。それはライトにスクールアイドルが好きなのにも印象で覚えて貰いやすいようにする配慮であるとともに、好きなメンバーカラーのサイリウムで応援できるようになど、活動を支えるメリットが多いことから始まっていると思われる。

けれど、思えば千歌先輩はさり気なく自分のイメージカラーをみかん色と称し、オレンジ色と言われると頑なに訂正する。

「たぶん、オレンジ色は千歌ちゃんの色じゃないんだよ」

「どういうことですか？」

「何て言うのかな、背番号3番は永久欠番みたいなの？千歌ちゃんに

とってはオレンジ色ってそういう存在なんじゃないかな」

ならばオレンジ色は千歌先輩にとって誰の色なのか？その筆頭となるのは言わずもがなμ∩sの高坂穂乃果さんだろう。

千歌先輩がスクールアイドルに夢中になった切っ掛け、始まりのグループ、そのリーダーの色。特別でない筈がない。

μ∩sのライブ映像を見ると、“Snow halation”で落ちサビの入りのソロパートでオーディエンスが一斉にブレードを色替えるのが圧巻だ。会場が心一つにしたその景色は映像で見てもすら鳥肌ものだ。

曲のイメージを反映した白からオレンジ色に変わり、会場を染める様は穂乃果さんの圧倒的なカリスマ性を表しているとも取れる。

多くの後続のスクールアイドルが憧れ、自らのイメージカラーをオレンジ色にしたことだろう。実際、一時期の上位のスクールアイドルグループのリーダーのイメージカラーがオレンジ色になったこともあるほどだ。

憧れから自分もまたそうなろうと特徴を真似るのはままあることだ。形から入るというやつだ。

「ただ追い掛けるのではなく、自分達の道を歩く。その結論は千歌ちゃんの中では無意識の内に最初からあったんじゃないかな」

「だからみかん色」

スクールアイドルAqoursとして自立した存在であると示すかのようで、それは千歌先輩の本気度の表れなのだろう。

例えばμ∩sに憧れたというだけあり、一番最初に作られた衣装はμ∩sの一番最初に発表された曲の衣装をモチーフにしたような出来だった。しかし、それ以降の衣装はμ∩sのイメージとは離れたデザインになっている。

μ∩sの衣装は多々あるけれど、グループのジャケットイメージの衣装は赤色と白色を基調とした衣装だ。

Aqoursとは言えば、ジャケットイメージの衣装は青系統のカラーリングだ。そして今、そんな青系統の衣装が新たに誕生しようとしている。

「この衣装、A q o u r sらしいですよね」

「あはっ、やっぱり」

そんな風にハニカム曜先輩は、きつとこの衣装を身に纏ってステージの上で縦横無尽に素敵なパフォーマンスをしてくれるのだろうか、私は生地の下準備をしながら期待に胸を膨らませた。

第百八話

千歌先輩の下見の結果、全力疾走すれば可能というなんとも微妙なスコアが出た。また、別の問題として人の私有地を横断したり、一部設備を使わせて貰うこととなるため、地主との交渉をしなければならぬのだ。

私は鞠莉さん、ダイヤさんと共にその対象となる地主さんへの挨拶回りをしていた。

「意外とみんな協力的ですね」

「やっぱり何だかんだ言って縁のある人が多いですから」

「さっきの家の奥様、卒業生だったね」

「私の母校のための協力しないなら離婚よ、なんてご亭主共々焦りましたね」

やはりこの地域の人は誰かの大切なもののために力を貸してくれる、そんな温かみがある。

学校説明会が終わったら改めて菓子折の一つも持っていかななくてはと思った。

「でも鞠莉さん、本当にこの確実性の無い手段を使うのですか？」

「正直迷ってる。もしかしたら学校説明会が台無しになるかもしれない。そのリスクを考えると二手に分かれる手段の方が魅力的に思える」

鞠莉さんの迷いも致し方ないだろう。

Aqoursメンバーの中でも体力面で言えば中の上にいる千歌先輩が全力疾走でぎりぎりなのだ。体力の無い花丸ちゃんなんかは遅れずに来られるのだろうかとも思う。誰か一人でも欠けてはいけないのだから、八人間に合って一人間に合わないなんてのは失敗と同じだ。

「行く家、行く家、みんな浦女のこと、Aqoursのこと、応援してました」

「うん」

「そうですね。それに報いなければなりませんわね」

挨拶回りは今予想以上に滞りなく終わった。その結果を鑑みれば成功する条件はある一点を除き、全て揃った。

「不可能を可能にする男の話、知ってます?」

「I don't know」

「なんですの?」

「機動戦士ガンダムSeedの話です。自称不可能を可能にする男が居るんです。でも、その人って不可能を可能にしている訳では無いんです」

絶望的な劣勢のなか、実現できる逆転の目を見付ける力、そしてその決して高くない可能性を信じて自分の100%を引き出せる力。それが合わさって、誰もが実現可能であることから目を逸らしていることを成し遂げる、そんなキャラクターがいた。

「最善の努力をすれば可能なことを、最善の努力をして可能にする。ただそれだけなんです」

「星さんは出来ると?」

「みなさん次第です、と言ってるんです。物理的に可能。ならば心の持ちようじゃないですか」

因みに私ならばきつと安牌を切る。自慢では無いけれど私には見る目は無いのだ。昨年の私という実績があるためそれは間違いない。だからこそ、私はみんなには最善から目を背けないで欲しいのだ。

「星の欠点はネタが分かりにくいことよ」

「世代ではないですからね」

「良い作品なんですよ?理想と現実、両極端が混在していて」

「今度星さんの家で鑑賞会を開きましょうか」

「Let's party!」

「50話以上ありますからね!?Destiny合わせれば100話超えますからね?覚悟してくださいよ」

よくよく考えればこの二人とここには居ない果南さんは受験生だ。アニメ鑑賞なんてしている場合ではないのではないだろうか?

「お二人は、いや三年生は来年どうするんです?」

「

鞠莉さんは学園長という立場があるため、学校さえ存続すれば来年も浦女に居られるだろう。けれど、ダイヤさんと果南さんは留年しない限り卒業する。普通に学校生活を送っていれば当たり前のように卒業だ。果南さんは休学していた期間があるけれど、ギリギリ出席日数は足りているらしいから、何ら問題はないだろう。

どうするのだ、という問いに二人は顔を見合わせて人差し指をピンと立てて唇を二分した。

「Top secret」

「今は言いません。けれど、いずれみなさんに話すことを約束しますわ」

「これだから美少女は」

一々仕草が可愛いのは本当にズルい。そんな風に約束、なんて言われて問い詰めることなんてできない。

「星は今後、どうするの?」

「もちろん穹とのこと。きつちりケジメを付けます」

「曲作りは進んでいるのですか?」

「あんまり、です」

方向性や詰め込みたいことは分かっている。そこから先が進まないのだ。

「それって星一人で作る必要あるの?」

「はい?」

「だって、駄目なんて言われていないでしょ?」

流星は学園長という肩書きは伊達では無い。契約書に書かれていないことは禁止されていないとはつきりと捉えているからこそ出る発想だろう。

「確かに言葉尻を捉えるなら駄目ではないですが、でも、私が自分で作りたいんです。私の触れてきた音楽、もちろんAoursのこれまでもこれからのも聴いて感じて、それを踏まえて形にしたいんです」

「そう。なら私達のこと目を離しちや駄目よ」

「手伝えることがあれば言ってお下さい」

本当なら二人を前向きにしなければならぬのに、逆に激励されてしまった。けれど、それを不甲斐ないと思うほど私は二人を低く見えない。寧ろ、やっぱりこの人達には敵わないと脱帽するだけだった。

第百九話

遂に迎えたラブライブ予備予選当日、そして学校説明会当日。しかし、前日に新たに発覚した問題によりA q o u r sは二手に分かれてパフォーマンスをすることとなった。新たに、というより完全に失念していた問題によりという方が正しいが。

その問題とは、学校説明会の父兄に向けての挨拶だ。

学校説明会があるというのに理事長や生徒会長が挨拶をしないなど有り得ないだろう。もちろん、浦女に足を運ぶ人も事情は多少は知っているだろう。けれども、生徒会長はともかくとして学校説明会の場に学校のトップが現れないとなると、学校のことより自分達のことを優先していると取られかねないのだ。学校に人を呼び込まなければならぬ今、その印象を与えることは得策ではない。

挨拶をしてから予備予選会場に向かうとなると時間ギリギリになり、一つ歯車が狂うと予備予選に遅れ、更に学校説明会後のライブにも出られなくなる。

やはりリスクを考えると二手に分ける事が一番のように思えるのだ。

それらを踏まえて協議した結果、予備予選には二年生組と黒澤姉妹、学校説明会には花丸ちゃん、善子ちゃん、鞠莉さん、果南さんという割り振りになった。

未来のことを語る上で絶対はない。正しいこともない。それを分かっているながら私は鞠莉さん達の選択をどうしても正しいと思えないでいた。そしてそう思ってしまう自分に戸惑っていた。

私はどちらかと言えば合理主義の傾向があると自分を分析している。そのため、普通ならば低い可能性に賭けるよりも無難な方にと選択するだろう。けれど、それを出来ないと言うことは私が自分で思っている以上に感情的になっているか、合理的に見えるそれこそ合理的でないかだ。いや、いつそ両方なのかもしれない。いや、両方なのだ。私はそう思うことで、今まで背中を見ていたみんなと同じ立ち位置に並ぼうと思った。

今こそ本当に示すのだ。心から私はみんなと、皆と同じ浦女生なのだ。

「アンケートのご協力をお願いします」

私はムツ先輩達に相談し、そして学校説明会の人員を一部借りることとした。そして今、私は体育館に足を運んだ未来の後輩候補と親御さんにたった二問のアンケートを実施している。

これはA q o u r sの活動に私が干渉することではない。ただ、皆の望み、それを伝えるだけだ。

一心不乱に私を含め2名体制でアンケートを探り、それを纏める。たった今、最後の一人分が終わった。

時間が無い。焦りからか暑さだけではない汗が額と背中に流れる。けれど、私は確かに今日、ここに来た皆の想いを預かったのだ。ならばそれを当事者に伝えなければならない。そう思うと体の奥からカツと別の熱が沸き上がるのを感じる。

そして、熱に浮かされながら、私達は集計を終え、その結果に満足した。もちろん、私が満足してもしようがない。この結果を前に、鞠莉さん達がどう感じるのかが大切なのだから。

「星ちゃん。後はこの結果、託したからね」

「うん。手伝ってくれてありがとうございました」

名前は知らないけれど顔は知っている一つ上の先輩は私の名前を知っていたことに驚きながらも私は精一杯力強く頷いた。

そして、始まった学校説明会。

学校の代表としてステージに登壇する理事長 鞠莉さんは演台から語り掛ける。

今日来てくれたこと、そして浦女に興味を持ってくれたことに感謝を。そして、今日は浦女の魅力を沢山見付けて欲しいと、要約するとそんなことを話していた。

鞠莉さんが話す言葉は今日のために用意しただけの台詞ではない。言葉に嘘が無いのだ。本当に心の底からそう思っているから引き込まれる力を持つ。

「あの、質問いいですか？」

だからこそなのだろう。私が司会進行のフリをして鞠莉さんへここに居る皆の気持ちを伝えようと口を開いた瞬間、想定外のこと起きた。それはステージの前に集まった受験生の一人から発せられた質問だった。

「はい。どうぞ。私に答えられることなら」

「理事長はAqoursでもあるんですよね？なら、今日は予備予選にAqoursは出ないってことですか？」

「そんな事ありません。どちらにも出ます。二手に分かれてね。私達は九人も居るのでから」

「それって、Aqoursなんですか？」

仲間の夢を守るために梨子先輩が予備予選に不参加となったあの時とは事情が違う。今回のこれはただの消去法でしかない。それを自覚しているからこそ、鞠莉さんは言葉に詰まる。

「全員で予備予選に出られないんですか？」

「物理的には可能です。全員で予備予選に出て、学校説明会後のライブにも参加することが」

「星ちゃん!」

「徹底的に調べました。可能です。今すぐに出発すれば」

「でもー!」

「ここで『今から予備予選通過してくるから待って』って言って予備予選に出て、そのあとこのライブに帰ってきたら最高に格好いいと思いませんか？皆さんも、今質問してくれた貴方も、そう思いますよね?」

「思います!!」

私の煽りにご来場下さった受験生と保護者さんは肯定の言葉を返してくれた。

「誘導した訳じゃありませんよ。ほら、この通り、アンケートでもバツチリ、ちゃんと聴いているんですから」

アンケートはAqoursのフルパフォーマンスを予備予選で行って欲しいか、という問いと学校説明会から一時的に理事長を初めとしたAqoursメンバーが退席しても良いかという問いだ。そ

の結果はどちらも肯定だった。

その結果を纏めた紙と、回答を貰ったアンケート用紙を鞠莉さんに見せつけた。

「みんな・・・」

「任せてください。あ、ついでにライブ運営に問い合わせたんですけど、学校でライブビューイングすることは特段禁止されていないらしいので、今日はみんなの勇姿、ここで見ようと思います」

学校の生徒の応援、そして関係者や保護者の観覧は可能かと問い合わせをしたところ、二つ返事で答えが返ってきたのだ。というか、よく調べたらよくある質問の欄に似たものがあった。

幸いにしてプロジェクターは学校に常備してある備品だ。ちよつと調整するだけでこの体育館はライブビューイング会場に早変わりだ。

学校説明会に行くか、予備予選に行くか迷っていた受験生も居たのだろう。私の言葉を受け体育館には歓声が上がった。

「どうします?」

「今から・・・最っ高ーにシャイニーな結果出してくるから皆待っててくれるかな?」

鞠莉さんの問い掛けに返されたそれは、言葉に表すことの出来ない歓声という名の肯定だった。

鞠莉さんは、そして舞台袖から見ていた花丸ちゃん、善子ちゃん、果南さんは目を閉じてそれに聴き入っていた。

「OK! よーし、みんな行くわよ!」

「でもまだ準備が」

「準備ならできてますよ」

体育館の入り口に旅行鞆を4つ用意したムツ先輩が態とらしく格好を付けてそう言葉を返す。

既にバッグには着替え、シューズその他諸々が詰め込まれているのだ。

「着替えは道中のバスでお願いします。どうせ今の時間なら私達しかいませんから、少し目隠しすれば行ける筈です」

「了解」

「例え曲の途中だったとしても飛び込んだから！」

「それじゃあ」

「レッツゴーずら！」

学校を代表するスクールアイドルの四人は入り口で一度一列に揃って来てくれた人達に一礼すると、鞆を力強く掴んで走っていった。

私達はそれを姿が見えなくなるまで拍手で見送った。

「さて、では学校説明会に戻りましょう」

今まで人前に出て何かをしていなかったから目立たなかっただけで実は人を纏めるのが上手いムツ先輩が司会進行を引き継ぎ、今日のタイムスケジュールを説明していた。そのタイムスケジュールは昼頃にライブ予備予選のライブビューイングが組み込まれ、説明会後のAqoursのライブ予定はそのままになっていた。

第百十話

昼食抜きで作業を進めた甲斐もあり、体育館はどうにかライブビューイングを開催できる状態に出来た。

流石にこの季節に各窓の暗幕を下ろすことは自殺行為だ。空気が循環しなくなった瞬間に体育館は蒸し器に変わり、私達はたちまちシウマイに変わるだろう。

そのため可能な限りステージの奥にスクリーンを配置し、直接太陽光が差し込む窓のみ暗幕を下ろし、スクリーン周辺の暗さを最低限確保することに成功した。

私は放送担当に連絡して会場の準備完了であることを伝えた。今頃は受験生や保護者の方々は家庭科室で在校生や教職員と会話をしながら豚汁を啜っている頃だろう。

私も空腹感を感じるが後回しだ。寧ろこの茹だる様な暑さの時は空腹ぐらいの方が体温が上がらないため丁度いい。

今のうちに映像の角度調整と音響テストの最終チェックを行う。

そのチェックの間にも各校のスクールアイドルがパフォーマンスを披露するけれど、そこはやはり予備予選。実力差にかなりばらつきがある。

審査に引っ掛からないが明らかに過去の人気グループを意識した作りの楽曲だったり、衣装を作る技術がなかったのか学校の制服だったり、ダンスが単純なツーステップを刻むだけだったり、息切れで歌えなくなったりと散々なチームもある。もつとも、このライブ予備予選は他校のグループと自分達を比較することで自分達の課題を見付けられる成長の場でもあるため、それは悪いことではない。今ばかりはそれに安心させて貰うしかないのも事実だ。

「さてさてー、ここからライブ予備予選も後半戦だああ！24番手には前回予備予選を通過し惜しくも地区大会で敗れたAqoursも居るから益々目が離せないぞー！」

やけにテンションの高いメガネの司会の方が会場を煽る。もう半分が終わり、Aqoursの出番がどんどん近くなる。

けれど、今だみんなからは合流の連絡はない。

計算上は問題ない。けれど、参加するスクールアイドルが持ち時間一杯使うとは限らず、早く次の出番になる場合もある。そのため、想定より回転が速く、それが私を焦らせる。

「これから、体育館でラブライブ予備予選のライブビューイングを行います。昼食を食べた方は休憩がてらどうぞ足をお運び下さい。繰り返します・・・」

私からの連絡を受け、校内にライブビューイングの案内放送が流れる。

本当なら観覧希望者にブレードを渡したい所だが流石にそこまで手は回らない。

ガイシホールで行われたラブライブ予選の際に用意したブレードは全校生徒各個人に配布後は個人所有になったため在庫はないのだ。

「お疲れ様。よく間に合ったね」

「やれば案外出来るものみたいです。豚汁の方は？」

「大好評。星ちゃんの分も取ってあるから後で食べてね」

「ありがとうございます。実は結構豚汁を楽しみにしてたりしてmy七味持ってきたんですよ」

「こだわりだねえ」

なんて家庭科室から体育館までお客様を案内した先輩と駄弁りながら徐々に受験生やその父兄の方々が体育館の席を埋めていく様を眺める。

そして、そうしている間にもトントンとテンポ良く、いや、良すぎる位に各校のスクールアイドルのパフォーマンスは進んでいく。

「順当に行けばA q o u r s がパフォーマンスで劣っているとは思えないけど・・・」

「次もう順番来ちゃうけど、みんな合流出来てるのかな？」

楽しそうに各スクールアイドルの活躍に胸を弾ませている受験生達とは裏腹に私達在校生は内心で冷や汗を掻いていた。

流石に無事に合流出来ていたならば私達に連絡の1つもあるだろうが、それが無いのだ。だとすると間に合っていないと思えな

い。

そして、その嫌な想像は現実の物として姿を現す。

「あれ?」

「五人、だけ・・・?」

遂にやって来たA q o u r sの番。ステージに現れた彼女達の中に、ここを出発したメンバーの姿はなかったのだ。一瞬嫌な予感が的中したと思った。

けれどーーーー

「いや、たぶん大丈夫だと思う」

私は直感的にそれを悟った。

何故ならば、フルメンバーではない筈の彼女達に全くと言って良いほど不安そうな素振りが無いからだ。

更に言えば、今身に纏っている赤いロングポンチヨをドレス風にアレンジした衣装が、みんなが予備予選に向けて作った、和ロックを意識したパッション溢れる和装とは違うものだったからだ。

どんなやりとりがあつたにせよ、連携した結果こうすると方向性が決まったからこそその今があるのだ。心配など無用だろう。

ステージに上がった五人の中から梨子先輩だけが少し歩みを進め、舞台袖に用意されたピアノの前に腰を下ろすと、幕を上げよと命じるかのように鍵盤を叩いた。

「これはーーーー」

やられた。

始まったジャズテイストのそれに私は脱帽すると共に、リズムに合わせて手を叩いた。

陽気で誘うようなその楽曲はパーティー用に三年生が作っていた未発表の楽曲。G線上のシンデレラだ。まさかこの土壇場で、この日のために作った最新曲を出さないという選択肢を取るとは思ってもみなかつたけれど、この曲ならば他の曲では出来ないことができるのだ。

もちろん、生演奏というのも凄くお洒落だ。それだけでも相当にインパクトがある。けれど、この曲の真骨頂はもつと先

「Shall we dance?」

躍りませんか、との問い掛けに会場全体でもちりんと返す。一緒に躍ろうと。

会場を巻き込むクラブ、そしてコーレス、楽曲が佳境を迎えるに連れ、熱を帯びるパーティーはいよいよその様相を変えるのだ。

「Let's dance! step with me」

「……………!?!」

誘われる声に惹かれて舞台袖から招かれたのは、先には居なかった残りのAqoursメンバー。

音楽に合わせて舞台上のシンデレラ達のパートナーとなるべくステージが上がってきたのだ。

その様に現地の会場も、こちらの会場も黄色い歓声に包まれる。

全員が集まったAqoursのステージはパーティー会場でありながらミュージカルの一舞台でもあるようで、華やかな楽曲と鮮やかな赤いゆったりとした衣装はエンターテイメント性をそのまま表現していた。

よくよく見ればその衣装には見覚えがある。

「あ……………」

この体育館に設置してあった暗幕だ。あの暗幕は裏地が鮮やかな赤色であったため、即席で改造して衣装にしたのだらう。生地自体が大きいため頭からスッポリと被るタイプの衣装にするのはそれ程時間は掛からない。最悪縫わなくても安全ピンと紐さえ在ればなんとかなる。

やはり時間ギリギリの戦いだっただらう。恐らくは後発の四人の着替える時間を確保するための措置だったのだらう。

けれど、ステージをパーティー会場に変えた彼女達はそんな即席であるという違和感はない。本当に、心の底からダンスを楽しんでいる。けれど、楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。全員が揃ったと思ったらもう曲は後奏になってしまった。

梨子先輩は最後の一音を弾ききると立ち上がって一礼した。そして、各メンバーと合流すると、赤い衣装を脱ぎ捨てた。

「メドレー!?!」

会場がざわつく。確かに持ち時間はまだまだある。けれど、ライブ出場には未発表の楽曲という制約上、1曲以上披露するグループはほぼ無い。

けれど、A q o u r s は本気だ。赤いドレスの下にタイトな和装を隠していたA q o u r s はフォーメーションを変える。

この日のために用意した新曲、ルビィちゃんとダイヤさんのダブルセンターのナンバー。

「躍れ、躍れ、熱くなるため　ひと生まれははずさ」

新しいA q o u r s の形、和ロック　MY舞☆TONIGHT”
。それが披露された。

楽しいパーティーは終わったけれど、躍る心を無くさなければ、いつまでだって人は躍れるのだ。この曲はその残った熱を、突き動かされる衝動を歌った微熱の曲だ。

如来のような振付とフォーメーションダンスはこれまで以上にズレを許さない精密さが要求されるけれど、それを見事に合わせる。

これは文句なしにライブ予備予選を通過するだろう。私はその確信を持って会場の景色に目を移した。

誰も彼もが食い入るようにスクリーンを見詰めるその顔が私は大好きだ。強いて言うならばブレードで光の海になっていたら尚更良かった。

中にはスマホのライトでブレード代わりにする人も居るのには笑ってしまったけれど、みんながA q o u r s を応援してくれる姿に、私は一言、優勝と呟いた。

第百十一話

各部活紹介の間は私も手が空いたためキープして貰っていた豚汁をすすることにしたが、なんとも独特なアレンジをしてあった。

柚子を入れるのはまだ分かる。けれど、ミカンを入れるのは予想外だった。それを美味しいと感じられるレベルに落とし込んでいるのだから地域性とは侮れない。

これだけミカンに囲まれた地域で、これだけミカンを美味しく食べて育ったのなら千歌先輩がミカン大好き人間になるのも頷ける。もしかしたらミカンが好きすぎて髪の毛の色もミカン色になったんじゃないかと思うと、口の中に入れた豚汁を吹き出しそうになってしまった。流石にそれは失礼だ。

けれど、自分の好きな色が自分の特徴と一致するのは羨ましい。

かく言う私もオレンジ（千歌先輩的にはミカン色）は好きだ。赤程突き抜けた熱さではなく、包み込むような暖かさがある。強さの中に優しさを感じるような、そんな色なのだ。

かの有名なμ'sの高坂穂乃果さんもイメージカラーにしているし、個人的に好きなアニメ『デジモンアドベンチャー』の主人公の一人、八神太一の勇気の紋章もこの色で輝いている。

だからなのか私もこの色を特別な色だと感じる。けれど、同時にその色は私の色ではないとも思う。

私の色とはなんだろうか？

「星ちゃん。お疲れ様」

「お疲れ様です。そろそろ準備ですか？」

「うん。綺麗に変身させなくっちゃね」

準備とは私が勝手に『きまぐれオレンジロード』と称している作戦の準備だ。

行ってしまうはこの作戦。単なるショートカット作戦なのだが、そのショートカットルートにこそこの名前の由来がある。

本来は迂回しなければならぬ山道をミカン畑の貨物用レールを使って突っ切るのだ。

貨物用レールがどの程度の積載量なのかカタログスペックは分からなかったけれど、人間九人分の容積ミカンを載せても動くらしいので多分大丈夫な筈だ。ミカンも人間も保有する水分量の比率は大差ないだろうから。

MY舞☆TONIGHTではないけれど、諦めない心が道なき道と思っていた場所に道を見出したのだろう。

諦めないからこそ、この地域が好きだからこそ、そして皆のことが好きで良く知っているからこそだ。他の誰でも無い、Aqoursだから、千歌先輩だから通れるビクトリーロード。

「星ちゃんも行く?」

「私は運営側を任されてますから」

「分かった。なら、手を引つ張つてでも連れて来なくちゃね」

行つてきまーす、とクラスメートはみんなを迎えに貨物用レールからの導線への配置に向かった。

ショートカットしたとはいえ道は長い。軽いマラソンだ。だから帰つてきても休む間もなくステージになつてしまうため、道中で給水、着替えをして貰わなければならないのだ。そのため、誘導と補助のために人員を割いたのだ。

学校総掛かりの大イベントになったものだと思う。

校庭で行われている部活紹介と、同時進行で進んでいる仮設ステージの調整。休日だというのに部活に所属していないような生徒までいる。というより生徒総出だ。それでいて皆やる気に満ち溢れていて、それを見ているだけで元気が貰える。

入学した時と人数は変わらないのに活気が増えた。それはきつとAqoursが気付かせてくれたからなんだと思う。皆がいるこの場所が大切な場所であるということに。だから守りたいんだということに。

私も随分遅くなつてしまつたけれど、この光景を見て、実感としてそれを得られたのは初めてかもしれない。それに感動すると共に、ちよつと申し訳なかった。皆がとつくに知っていたことを、私は本当の意味では分かつていなかったことに。

「ごちそうさまでした」

ミカン豚汁を食べ終え、私は心の底から作ってくれた皆に感謝した。聴く人は誰も居ないけれど、しっかりと手を合わせてから食器を片付ける。

校庭に向かう途中、忙しく動く生徒の姿がチラホラある。名前までは覚えられずとも皆顔を知っているし、少ないながら会話も交わしたこともある。学校の規模は小さいけれど、だからこそこの関係性はとても心地良い。

下駄箱横にある掲示板に貼り出した今日の学校説明会のお知らせを見ると、皆で方々に足を運んだことを思い出す。今日のために頑張ったこと、色々考えたこと。沢山の人に協力して貰ったこと。それはきつとそう、楽しかった。

校庭に出ると、小降りながら雨が降っていた。

「どうしよう、雨降って来ちゃったよ!」

「ブルーシートがまだ在りますから、ステージを保護しましょう」

「いや、でも本降りになったらできないんじゃない?」

「分の悪い賭けには皆もう乗ってるじゃ無いですか。今更ですよ」

海沿い、山沿いと天候の変わりやすい条件は満たしているけれど、みんなはこっちに向かってきている。みんなが諦めないのなら私達が諦めてしまっではいけない。逆転の物語を綴ろうというのなら自分達で物語の終幕を描いてはいけないのだ。

幸い、スピーカーは既に保護してくれていたため、私達は急いでブルーシートを広げるとステージを覆い、その下に潜り込んで既に濡れた部分を拭き取った。

「全校放送でお知らせをしましょう。ギリギリまでライブをするかどうか見極めるので、結果は再度放送で知らせます、と」

急ぎ放送委員に連絡して全校放送を流して貰う。

けれど時間が近づくにつれ観覧希望者が徐々に校庭に集まる。小降りとはいえ雨が降っているというのに傘も差さずに。

それは皆が期待しているのだ。信じて立ち向かえば一見無茶に見えることも実現出来るのだと。

開始予定まで残り五分。観覧希望者は受験生だけでなく、保護者の方もまた校庭に顔を出していた。

Aqoursのみんなの姿はまだ見えない。けれど、もう衣装に着替えは済ませたと現場から連絡が来ている。ならば今日は決行だ。

「Aqoursのライブを観覧の皆さまにお知らせします」

放送が流れる。けれど、その放送も無用だったかも知れない。観覧希望者はすでにステージの前に揃っている。そして空を見れば虹が掛かっているのだから。

ステージからブルーシートを外し、スピーカーやスポットライトの電源を入れる。

一つ一つ、ステージが整うたびに増えるAqoursコール。

そして、息を切らせながらも彼女達は姿を現した。

円陣を組むようなフォーメーションからピアノの音と共に始まるのは新曲『君のこころは輝いてるかい？』

そう問い掛ける彼女達の姿は私達の目に間違いなく輝いて見えた。

第一百十二話

迎える時は急いでしまうけれど、過ぎてしまえば呆気ない。そんな通り雨のように学校説明会は終わりを迎えた。

奇跡的に天候も回復し、疲れがありながらもフルパフォーマンスでAqoursはライブをすることが出来た。

学校説明会に来てくれた人は間違いなくポジティブな印象を受けただろう。

かく言う私も片付けの終わった今も興奮が冷めやらず、屋上に夕涼みに来ていた。思えば私は割と個人行動が多く、集団行動に対して幾分冷めた目で見えていた節がある。

何故皆でやらなければいけないのか？なんで大して付き合いの無い者のために頑張らなければならないのか？何故それを素晴らしいことだと吹聴するのか？そんな思考が常に心の何処かにあった。勿論、頭ごなしに否定はしないし協力しないという訳では無かったけれど、どちらかと言えば個人単位の行動の方が性に合っていた。

けれど今回、私は自然と集団行動に身を投じていた。目的が同じだったからというのものもある。けど、それよりももっと根源的に、楽しいと感じたからだ。

その気持ちが出来てくれた人にどのくらい伝わったかは分からない。けど、どうか伝わっていて欲しいと、そう思った。

「あれ、星ちゃん？まだ居たんだ」

「梨子先輩・・・どうしてここに？」

「うん。なんか名残惜しくて。景色でも眺めてから帰ろうかなってね」

傾きだした日は既に沈み、空は半分は紫色に染まり、夜の到来を告げていた。

早くしないと暗くなってしまうと思いつつ、帰ったら今日という日が終わったのだと実感してしまうため足か中々進まない。

「なんだか文化祭みたいだったね」

「それ言ってますね。忙しなくて、手作りで、皆前向きで」

「私初めてなんだ。そうやって皆でやったことが終わって寂しいって思う」

「そうなんですか？」

「ええ。ずっとピアノばかりだったからね。もちろんサボってた訳じゃ無いよ。でも、心ここにあらずっていうか」

「ああ、担当になった係を淡々とこなすやつですね」

「もう何回目になるかな。内浦に来てそんな初めてと出逢うのって」

「そうですね。最初は何も無い場所だっと思ってたんですけどね」

私も梨子先輩もこの地域では新参者だ。だから内浦で得る感動に対する感覚が近いのだ。

「星ちゃん、鞠莉さん達残留組を説得してくれたんだって？」

「いや、あれは私が居なくても結果は変わりませんでした」

私がしたことなど単なるダメ押しだ。実際、王手を掛けたのは名も知らぬ受験生だ。彼女の代弁した皆の願いがあればこそ、鞠莉さん達は一見無理に見えそうな現実を踏破できたのだ。

「結果が変わらないなら過程は関係ない？」

「・・・」

けれど、梨子先輩の返しの問い掛けに私は否定出来なかった。その問い掛けを否定することは前期ラブライブ予選に参加して敗退したAqoursを、そして私自身でさえも否定することになるからだ。

「梨子先輩ってそんな人を試す言い方するキャラでしたっけ？どちらかと言えば弄られキャラというか、オチキャラというか」

「オチキャラ!？」

「その反応の良さが梨子リストには堪らないんですよ」

「何？梨子リストって」

「そんなジト目で見ないで下さいよ。ほら、羽生結弦ファンをユズリストって言うみたいないな？」

「私のファンなんて居ないよ」

私は冗談のつもりで話していたのだが、梨子先輩が本気でファンなんていないと思っっているのだから驚きを隠せなかった。

「居ない筈ないんですよ。試しにTwitter見てみますか・・・ほ

ら」

「えーと、梨子ちゃん貴重な生演奏枠？あざと医くらしいの美少女？ピ
アノガチ馬？素射つすわ？」

「おつとと、まあ、よく分からないのもありますが、A q o u r s メン
バーの中でも個々で注目されたりするんですよ」

恐らくは特定厨だろう、梨子先輩がピアノコンクールで優勝した経
歴も紹介されていたりもする。ここまで注目を集めてファンが居な
いなんて口が裂けても言えない。

「はあ、何か改めてラブライブってコンテンツの大きさを実感したわ」
「ホントですね。でも、だからこそチャレンジしがいがあるんですけ
どね」

私が音ノ木坂に入って路上ライブやライブハウスの活動とは別に、
スクールアイドルを通して音楽活動をしようと計画していたのもそ
れが理由だ。

注目される為に音楽活動をするのではなく、注目されるからこそ楽
曲について様々な視点からの感想が聴けるのだ。それを踏まえて次
のステップに繋がられる。ラブライブとは挫折せずに前を向いて走れ
ば成長に？がる、成長を促す、そんなコンテンツなのだ。

「そんな大きなコンテンツの中に居て、自分達の成長を感じることは
？」

「確かに前回の地区予選よりも今回の予備予選とか学校説明会のライ
ブの方が確実に進歩してる・・・けど」

梨子先輩はそう言って言葉を濁す。

「梨子先輩？」

「ラブライブは頑張れば頑張っただけある程度の結果がついてくる。
でも、学校の統廃合は私達の頑張りだけじゃどうにも出来ないことも
あるんじゃないかなって」

「ラブライブの結果が入学希望者数に直結しない。そう言いたいんで
すね。でも、現状、やはり無関係ではないんですよ」

「うん。それも分かってる」

目に見えない繋がり。一見無関係に見える事象が回り回って相互

作用する関係性、因果。それを無闇矢鱈に信じることはただの盲信だろう。梨子先輩はリアリストだからこそ、捉えきれない因果を頭から信じることは出来ないのだろう。

「捉え方は人それぞれですからね。梨子先輩はそういう立ち位置で良いんじゃないですか？」

「たぶん、悩んでるって事は、私自身信じたいんじゃないかなって、思うんだ」

それを聴いて私は密かに共感した。みんなの信じるものを信じていい。そんな思いを私も持っているからだ。

「なんだか話し込んだね。そろそろ帰ろうか」

「そうですね。送りますよ」

「ふふっ、生意気言わないの。それに同じ方向じゃない」

「そうでした」

私達は心地良い冗談を口にしながら屋上を後にした。

こんな時だからだろうか？本来出逢うことの無かった私達がこの町でこうして冗談を交わしているのだ。それこそ何の因果だと思っ
出来事だと普段なら考えないようなことを思った。

第百十三話

学校説明会も終わり、取り敢えずの一区切りが付くと、目を背けていたそれ以外の現実が急に気になってきた。穹から課題の出された私の音楽？それもある。けれど、もつと即物的で、けれど妥協出来ない問題だ。

「バイトしようかな」

そう、金がない。金がないのだ。

要所所で節約はしていたつもりだが、方々走り回った結果、交通費でかなり持ってかれたようだ。

浦女は周辺に金を使うような場所がないため普通に学校に通うだけならば大して出費はない。けれど、一度沼津市内に行こうものならそれだけで金が掛かる。学校説明会の準備のために浦女生は今、皆金欠なのだ。

教室で皆でタウンワークなどの求人情報を精査する。

仕事を選ばなければアルバイトは正社員登用以上に世間に溢れている。

引越してくる前は、都心まで出ればリフレで高収入・短時間なんてのもあり、年齢を誤魔化して働こうとした同級生がいたが見事親バレしていた。散々説教されたのか、明るめに髪を染めていた彼女が翌日には黒髪の日本人形みたいになっていたが、そのイメチェンが功を奏したのか、翌週には彼氏が出来たのだから人生とは分からないものだ。

勿論私はリフレだとかで稼ぐつもりはない。現実的にそういう職業はあるし、必要とされてもいるとは納得しているけれど、あの職業は業務に関わる事故遭遇率が高いのだ。私は不必要なリスクを負うつもりは毛頭無い。探すならば収入と労働環境、確保できるプライベートの時間とのバランスを考える。

「だとすると無難に倉庫でのピッキングとかか」

「星ちゃん、人のこととやかく言うつもり無いけど、もう少し女子であることを楽しもうよ」

クラスメート数人で求人フリーペーパーを覗き込みながらそんな話をすると、呆れたように返される。

確かに私も人並みにファッションには興味があるし、可愛い制服で仕事を出来るなら素敵だとも思う。けれど――

「そういうのは接客でしょ？ 好んでしたくないのと、制服って洗ったりするの面倒だし。職場でクリーニングあるっていつても数回は着てからだったりするから案外良いものでもないよ」

「そ、そうなんだ」

とは言つたものの、公然と制服を着れることはやはり魅力的であることに変わりはない。東京で見たことがあるけれど、喫茶店の椿屋珈琲なんかは大正ロマン風の給仕服を着ていたりしてシツクに可愛かった。そういう出で立ちでスマートに仕事をする姿はさぞかし映えるだろう。

「とはいえ仕事してたら制服云々なんて余裕無いだろうけど」

「それもそっか」

「随分と詳しそうに語るけど、アンタバイト経験なんてあつたの？」

一緒にバイトの求人を見ていた善子ちゃんが訝しげに尋ねてきた。

「んー職業体験ってやつだよ」

「ものは言いようね」

全くもつてその通り。

私は沼津に来てからバイトはしていない。だとするとバイトが出る時期など本来は無いのだ。あるとしたら年齢を詐称するか、個人経営の店のお手伝いという名目で働くかの二択だ。

回答を曖昧にしたことで察したのか呆れたように善子ちゃんは溜息を吐いた。

「真つ当なルートで働くのなら何処がいいかな？」

「果南ちゃん達に聴いてみるぞら？」

「先輩だし、そういう経験もあるかも」

花丸ちゃんとルビイちゃんはそう提案するけれど、私はあまりそうは思わなかった。

鞠莉さんの実家は裕福で、ポケットマネーの心配は不要なくらいに

お小遣いを貰っているようだし、ダイヤさんは実家が厳しいため、バイトをさせて貰えなさそう。どちらもバイトをしたら社会経験のため、となるだろう。

果南さんは家業のダイビングショップの手伝いがあるためバイトどころではないだろう。

「寧ろ二年生に聴いた方が良いんじゃない？」

「甘いわよ星」

「梨子ちゃんはピアノ一筋。千歌ちゃんは実家の手伝い。曜ちゃんは高飛び込みの練習」

「そうだった。って、それだとどっちも駄目じゃん」

「だけど、三年生なら自分がバイトをしても友達になら居るんじゃないかな？ 私達くらいにバイトし始めたって人が」

「じゃあ鞠莉ちゃん達に聴いてみる？」

「もう授業始まるわよ。ルビィ、ダイヤさんにメッセージ送っておい」

「うゆ」

ルビィちゃんは掌を見せない肘を張った警察式の敬礼をビシツと決めると素早くスマホを操作してものの数秒でメッセージを送っていた。

因みに日本では掌を見せない敬礼が主流だそう。曜先輩の掌が見えるような敬礼も可愛いので好きだが。

「それにしてもみんな先輩達の呼び方変えたんだ」

「そうね。今まで変に意識し過ぎていたのかなって、そう思ったの」
「今までより気兼ねなく話せるようになったと思うぞら」

困難と一緒に乗り越えたみんなの間に気付けば深い絆が芽生えたのだろう。

それにしても鞠莉ちゃんに果南ちゃん、か。警戒心の強い善子ちゃんや人見知りの花丸ちゃんがそう呼び慕う姿を想像すると微笑ましい。

しかし、何故ダイヤさんはダイヤ“さん”のままなのだろうと、それだけが気になった。

第百十四話

私が穹のことを穹と呼ぶようになったことに特別な意味は無い。穹の友人の誰もがそう呼んでいたし、本人もそう呼ばれることに慣れていたので気が付いたら私もそう呼んでいた。

善子ちゃん達が上級生の呼び方を変えたことに気が付き、ふと思いつくと私と穹はユニットを組む事になった時には既に星、穹、と呼び捨てにしていた。いや、呼び方で言えば雑な時はとことん雑で、平然とアンタ、テメエ、クソ尼、など散々な呼び方だった気がする。そう考えると浦女の皆は随分と丁寧な喋り方だ。これが地域性というものなのだろうか？

話が逸れたが、そんな雑なやり取りさえ受け入れていたことを考えると、私達の間では呼び方で親密さを確認していた訳ではないのだから。

「で、何で鞠莉さんと果南さんはにやにやしながらダイヤさんを遠目に見ていたのです？」

「べっつにー」

「ダイヤのポンコツ姿を見るのも久し振りですねーなんて、思っただいでーす」

A q o u r s が練習場所としているスタジオのあるビル、プラザヴェルデの屋上でのことだ。

金欠であることはA q o u r s 内でも問題になっているらしく、金策に頭を悩ませているとのことだが、どうにもダイヤさんの様子がおかしいらしく、鞠莉さん達は物陰から千歌先輩達と話すダイヤさんを覗いていたのだ。

「ポンコツ？的確にアドバイスしてみたみたいですけど」

私が言ったのは千歌先輩達が趣味とか理想丸出しでバイトを決めようとしていたことに釘を刺すダイヤさんの姿のことだ。

「そう。ダイヤはどうあってもちゃんとしてるのよ」

「融通が利かないってことですか？」

「ちよっと違うんだけどね。んー言葉だと伝えにくいんだよね」

「はあ、それはそれとしてなんでそれを見てるんですか？」

「面白半分」

「期待半分」

なんだがよく分からない。三年生の三人は一時期距離を置いていたにも関わらず、そんなブランクを感じさせないくらい心が通じ合っているため傍から見てもその意思疎通がどんな意図なのか読み取りにくいのだ。

「ところでバイト、するんですか？」

「今はアイドルもバイトをする時代なの。スクールアイドルなら尚更」

「なら、私もちよつと仕事したいんですね。お小遣いがもう底を・・・」

「Oh my God」

みんな揃いも揃って金欠。そんな話をしていると何だか気が滅入ってくる。

そんな寒い懷事情になんだかいたたまれない沈黙が続き、空気を変えようと果南さんが手を叩いて提案した。

「じゃあバラバラにだと練習の予定も合わせにくいし、みんなで一緒のところまでバイトしようよ。星も一緒にさ」

「・・・果南さん」

「? なに?」

「ダイヤさんに気付かれましたよ」

物陰からこそこそしていたのは無意味になった。盛大に手を叩いて大きな声を出すものだから、ぎこちなく千歌先輩達と会話をしていたダイヤさんに見つかってしまった。

「果南さん、鞠莉さん、それに星さんまでこんな所でどうしたのです?」

「ダイヤさん達と同じく私達も休憩ですよ」

「またしれつとそんなことを。まあそういうことにおきましよう」

「ねえダイヤ。やつぱ部費として使う訳だし、みんなで同じバイトに

しようよ」

部費をバイトして稼ぐなんて響きだけ聴くとブラック部活だと思えるけれど、スポーツなんかでも自分の使う道具は自費で賄っていたりする。スクールアイドルもそれは変わらないという事なのだろう。まあ、部活は趣味的な側面も存在するため、致し方ないのだろう。それに理事長自らが所属するスクールアイドル部にばかり学校のお金を使うわけにもいかないのだろう。

「それならやはり長期より短期ですね」

「なら三津シーが良いかもよ」

「それ楽しそうだね」

ダイヤさんと共に曜先輩と千歌先輩、梨子先輩もまた会話に加わり、具体的な提案が出される。

「曜先輩、それうちっちーに合いたいだけじゃないですよね？」

「曜ちゃんうちっちー大好きだもんね」

「梨子ちゃん、それ内緒の話」

うちっちーとはセイウチをモチーフとした伊豆・三津シーパラダイスのマスコットキャラクターだ。

曜先輩はボーイッシュなファッションが好きなため誤解されがちなのだが、これでいて可愛いものに目がない。

「いやいや、曜先輩。それみんな知ってますって。恋アク事件で公然の事実になってますから」
「ううっ」

恋アク事件とはA q o u r sの未公開楽曲 “恋になりたいAQUARIUM”のPV撮影の時のできごとのことだ。

撮影にかこつけて曜先輩がうちっちーの着ぐるみを着てしまったのだ。それ自体は許可も貰っていたし、そこまでハメを外していなかったから・・・外していなかった？から問題にはならなかったけれど、渦中にいた私達は大混乱したものだっただけ。

尚、うちっちーの著作権の関係で恋アクは撮影したPVが公開できなくなってしまう、未発表となっている。それを利用してカメラの入れないライブなんかでは使ったりしているのだからA q o u r sもた

だでは転ばない。

「曜ちゃん家のうちっちークッション。あれは人を駄目にするよ」

「梨子ちゃんあの時は結局そのまま私の部屋に泊まったもんね」

「あ、あれはあのクッションが悪いの！私がだらしないわけじゃないんだから」

曜先輩と梨子先輩はいつの間にか凄く親密になっていることに驚いた。というか、その人を駄目にするうちっちークッションが気になるどころだが、それについてはまた今度だ。

「じゃあ、みんな明日までに履歴書を書いてください」

「ほえ？」

「履歴書って？」

「ダ、ダイヤサーン!？」

千歌先輩と曜先輩の叫びにダイヤさんは盛大に溜息を吐いてこう言った。「しかたありませんわね」と。

第百十五話

運良く伊豆・三津シーパラダイスでの短期のアルバイトの一斉応募があり、私達はそれにエントリーする運びとなったのだが、

「ど、どうしよう曜ちゃん！私学歴なんてないよ!?中卒だよ、中卒!」「え、ホントだ。千歌ちゃん、残念だけど千歌ちゃんは雇って貰えないかも」

「今時中卒を雇ってくれる会社なんてブラック企業くらいしかないすら」

「ブラック、即ち闇。私の居場所に相応しいのはそこね」

「ただでさえ危ない業態なのに善子ちゃんが入ったらすぐに潰れちゃうかも」

「入社当日に労基が入るとか? 案外不運じゃないんじゃない、それ?」「訪れたブラック企業に100%労基を入れる謎の女、なんて勧善懲悪もののドラマみたいだね」

私達は今、スクールアイドル部の部室で机を囲み、履歴書と睨めっこしている。

色々とツツコミどころがあるけれど、一々それにツツコんでいたら日が暮れてしまうほど履歴書の作成に手こずっていた。

「えっと、住所は・・・ああ、郵便番号なんだっけかな!」

私としては学歴だとか自己PRなんかは文字を綺麗に書く以外にさして苦労もなく書けたのだけれど、住所で戸惑ってしまった。こっちに引越してから未だに住所に自信がない。特に郵便番号なんかは普段全く使わないため中々覚えられない。

そういえばと思い、同じく引越してきた梨子先輩の履歴書を覗き込むと、しっかりと綺麗に住所も郵便番号も書かれていた。しかし、それ以上に目を引く項目があった。

「梨子先輩はしっかり覚えてるんですね。って、何です?趣味にピアノと、絵・・・絵?、絵?糸と会うじゃなくて?」

「趣味が糸と会うって何!?そんなに驚かれても困るんだけど」

「いや、だって・・・ルビイちゃん」

「ピギイ!?な、なんで私に振るの!？」

ルビイちゃんの動揺は致し方ないだろう。私は忘れない。以前衣装案をA q o u r sメンバーが出し合っていた時のことを。

一人ずつ全身のラフ画を絵で描いていたのだが、梨子先輩のはそう、エジプト壁画だった。これはお世辞で言っただ。

その時は本当に酷かった。衣装案などそっちのけで審議となった。聴くところによると入学初日の梨子先輩の自己紹介では音ノ木坂では美術部だったなんて話だったらしく、絵を切っ掛けにその設定に物言いが入ったのだ。

始まったA q o u r s裁判で被告人 桜内梨子は絵を描いた。セイウチ、犬、象、カワウソ、それらの悉くがエジプト壁画。特に象は顎から鼻が生えていた。セラヴィーガンダムの背中に顔どころの騒ぎではない。私は絵を見て悲鳴をあげる人を初めて見た。

判決は言わずもがなだ。尚、被告人の証言では本当に美術部に所属はしていたらしいけれど、名義を貸していたというのが本当のところ。で幽霊部員だったようだ。

「私も少しはやるんだから」

見えて、と書き終えた履歴書を脇に寄せ、メモ帳を引き寄せると手際よく絵を描き始めた。

「あ、ああ」

「イア、イア、クトウルフ、フグダン」

部室がざわつき、善子ちゃんに至ってはブツブツとお呪いを口にしていた。けれど、それは念仏どころか災厄を招くのではないだろうか？

「はい、完成。どう?」

みんなに晒されたそれは人物画、いや、正確にはキャラクターの絵だった。

「ちゃんと人だよ!？」

「セーラームーンですね」

「そこはプリキュアとかじゃないんだ」

「ちよつと待って。梨子ちゃんって今いくつだっけ?」

とそれなりに認識できる絵を描いたにも関わらずそれが褒められることもなく別の問題が生じた。桜内梨子年齢詐称疑惑である。

「これはまた裁判ね」

「もう・そんなんじゃないってばー」

なんて、梨子先輩が悲痛な叫びをあげている逢田に、いや間に私は履歴書を書き終えた。

「善子ちゃん、履歴書はフルネームじゃなきゃ駄目だよ？」

「うう、分かってる。けど、善子は仮初めの名前、ここで書いてしまつてはー」

「じゃあヨハネで書くすら？」

「それじゃ落とされるでしょ！ん？墮とされる？つまり墮天使！」

「よすすら」

「私が書いてあげるね」

「ちよ、何よヨハ子って!?!」

私以外は殆ど履歴書の作成が進んでいない。確かに人の履歴書を見るのは面白くもあるのだが、このままではいつまで経っても書き上がることはないだろう。

流石にそろそろ真面目にやらないと、と思つた矢先のことだ。

「みなさん働く気はあるのですか！」

ピシヤリ、と躊躇いなく言い切つたのはダイヤさんだつた。

どんなに周りの空気が緩んでいても一定以上は緩まない、周りの声に迎合しない、それが黒澤ダイヤだ。そう再認識させられるような一喝だった。

「いいですこと？例え読み流されるものだとしても、お金を稼ぐために仕事を提供してもらおう。その事を忘れてはいけませんわ。ちゃんとお書きなさい！」

言うべき所はしつかりと言う。締めるところはしつかり締める。それができるダイヤさんの存在は本当に頼りになる。

あの千歌先輩ですら背筋を伸ばしてペンを取り、矧先輩は思わず敬礼をしていた。

「すみませんダイヤさん」

「星さんはちやつかり書き終えているでしょう」

「いえ、ちよつと弛んでたかなつて」

ふと、私はあることに気付いた。

下級生が上級生を呼ぶときに「ちゃん」付けで呼んでいるのに、ダイヤさんのことだけはみんなダイヤさんと呼ぶことは何となく察していた。けれど、ダイヤさんもまた誰に対しても「さん」付けなのだ。

「ダイヤさんつて何でみんなのこと「さん」つて付けるんですか？」

思えばダイヤさんは幼馴染みである鞠莉さんや果南さんですら呼び捨てや渾名ではなく「さん」付けなのだ。

「何でつて言われましても」

ダイヤさんにしては珍しくハツキリしない答えだった。けれど、自分が当たり前にしている行動とは案外そんなものなのかもしれない。

「因みに聴いてみただけですから、いいですよ」

「何だか新参者みたいな台詞ですね」

「でも、どうせなら私、星さん、より星ちゃんつて呼ばれたいかも」

そう冗談めかして言うと、ダイヤはんはまた考え込むような仕草をして黙ってしまった。

「ダイヤさん？」

「な、なんですか、あ、あ、あか、りちーりー」

「ダイヤさん！資格つて持ってないとバイト受からないんですか!？」

「・・・そんなことはありませんわ」

千歌先輩の悲痛な申し出にダイヤさんは表情を改めて即座に答える。

私の勘違いで無ければダイヤさんはそう、意外にシャイなのではないかと思つた。

チラリと果南さんと鞠莉さんの様子を窺うと、凄く良いニヤけ顔でダイヤさんの事を見ていた。

第百十六話

ここ最近のダイヤさんはどこかおかしい。みんなよりも早くそれに気付いたのは果南さんと鞠莉さんのダイヤさんを様子をこっそり覗うようなことをしていたからだけど、流石にみんなも違和感に気が始めています。

距離感が変なのだ。最近のダイヤさんは。

みんなそれなりにお互いある程度砕けた仲になっているけれど、どうにもダイヤさんの受け答えがぎこちない。変に取り繕うような仕草が必ず入る。けれど、何を取り繕うのか誰も、何も心当たりがない。「ねえ、鞠莉さん。ダイヤさんのこと流石にみんな不思議に感じてるみたいですよ」

昼休みのちよつとした時間。私は理事長室の革張りの椅子に腰を下ろし、理事長のデスクでお弁当を頬張る鞠莉さんに話を振った。

「もう少しそのままにさせておきなさい。いずれ気付くでしょうし」
「結局、ダイヤさんは何を悩んでいるんです？それがどうにも読めなくて」

「ちよつとした憧れ。それからくる嫉妬Fire」

「ダイヤさんが嫉妬？」

言ってしまうとダイヤさんは本人の努力もあるだろうが、ほぼ人が望むことの多くを持っている。明確な基準も定義もないけれど知力、美貌、財力、交友関係の水準が一般的と呼ばれるであろう水準を上回っている。

更に言えばダイヤさんは基本的に自己完結出来る人だ。

「Yes. あれでダイヤ、決行寂しがり屋だったりするんだから」

「ダイヤさんが？でも成る程、だからルビイちゃんに甘いのか」

構っているようで実は構って貰っている。もしかしたらダイヤさんの妹思いなどころはそんなところから始まっているのかも知れない。

「私達が花丸や善子と気軽にやり取りしているのを見て寂しくなったのよ」

「確かに、お寺で一晩明かしてからみんな仲良くのりましたもんね」

最近で一番驚いたのが、それなりに人見知りである花丸ちゃんが果南さんに本を貸していたことだ。

「でも立ち位置は変わらない。その立ち位置がダイヤに誤解させているんじゃないかな」

「ダイヤさんだけみんなから打ち解けられてないって?」

もしそう感じているならばその疎外感はやりきれないかもしれない。けれど、確かにその認識は人が幾らそうじゃないと言ったところで説得力を持たない。これは実感の問題だからだ。

「放っておくしかないですね」

「まあ、星は下級生の中ではダイヤとの距離感も近いし、いつも通りでいいんじゃない。それにしても」

鞠莉さんはニヤニヤしながらこちらを見詰め、態とらしく言葉を一度切った。

「随分と周りのこと気にするようになったね」

「私のこと言ってます?」

「Off course. 入学したばつかの頃なんて、誰かと関わるなんて状況に流されてって感じだったでしょ」

「その状況を一部作った人が言います?」

「それはズバリ凶星だった。」

こちらに引越してきた当初、人付き合いは当たり障り無いこうと思っていた。

穹とのがあったから、自分が誰かと仲良くするなんて烏澁がましいと、そう思っていたからせめて傷付けないようにしようと思っていたのだ。けれど、ルビイちゃんや千歌先輩と関わるうちに、気付けば人間関係は広がり、深まっていた。

「理事長だからね。余所からこの土地に、それもこの学校に人が来るって言うからね。色々気にしてたの」

「ああ、下調べもしてたみたいですね」

「表面的な情報しか無かったけどね。けど、星も梨子も何か抱えているなって雰囲気はあったからね。何とかしなきゃってのはあったよ」

「こつちに引っ越してきて驚いたのはみんな凄く踏み込んでくるんですよね」

埼玉に居た頃はそれ程の関係になったのは穹だけだった。それは埼玉はベツドタウンであり、人が多かったことから、広く浅い人間関係が構築されていたのだろうと思う。それとは対象的に沼津の地域である内浦は人が少ない分、人間関係も距離感も近いのだ。

「嫌だった？」

「いいえ。助けられました。鞠莉さんの言うように、少しは周りのこと、人のこと、気にすることができるようになりました」

「なら良かった。けど、最近自分のことちゃんと見詰めてる？」

「え？」

「人のことばかり気にして、穹さんのこと、棚に上げてない？」

それもまた凶星かもしれない。

穹に聴かせる私の曲。方向性やメッセージ性は決まっているのに全く作曲が進まないのだ。

「忙しいことを理由にしたらいけないこともあるよ」

「分かっています。でも・・・」

みんなとの時間を重ねれば重ねるほど、曲に乗せたい想いが増えていく。だからこそ纏まらないというのも要因の一つなのかもしれない。

「ま、自覚あるならいいの」

「ホントかないませんね」

「理事長ですから」

二つ年上の先輩であり理事長であるその人は食えない笑顔で「教室に戻りなさい」と、退出を促すのだった。

「偶には今回みたいにこうやって相談して欲しいかな。今度は星自身のことです」

「その時はヒントだけ下さい。答えは自分で見付けなければならぬでしょうから」

もちろん、と本当に嬉しそうに笑う鞠莉さんは理事長という肩書きよりは先輩という言葉が似合う、年相応の少女の笑顔だった。

第百十七話

幸運なことにみんな短期のバイトとして伊豆・三津シーパラダイス、通称三津シーに雇って貰えることとなり、私達は今日から数日、三津シーで行われるイベントの増員スタッフとして働くこととなった。やることは基本的に雑務だ。売店のレジや厨房、フロアの清掃に風船配りなど、普段は水族館スタッフが兼任しているものをイベントに伴い代行するのだ。

「とはいえ、来るのは幼稚園の団体だから売店とかはそんなに大変じゃなさそうだね」

「迷子とかでないといいけどね」

「ルビイちゃんも気を付けるんだよ」

「うゆ・・・って、私そんな子供じゃないんだけど」

「と、言っていますけどどうでしょうダイヤさん？」

「慣れ親しんだこの場所で迷子になる地元民はいないかと」

それもそうか、と納得しつつダイヤさんは今のところ平常運転であることに少しホッとした。

「私ここで一時期バイトしたことあったから分からないことあったら聞いてね」

更衣室で着替えながらそんなやりとりをしていた私達にうちっちーの着ぐるみを着た曜先輩がそう言った。というか、着ぐるみを着て話すのは御法度な様な気がする。

「割り振られたところに三人一組でやろっか」

そこで私は見てしまった。平常運転だった筈のダイヤさんの目つきがチャンスが来たとばかりに見開かれたのを。そして、半ば確信めいた予感がした。これはきつと空回ると。

人が何かを成し遂げる事において心の持ちようは大切だ。立ち向かう気概が無ければ始まらず、困難な壁にぶつかっても進むことを止めない気持ちが無ければ続けられず、絶対に事を成すという気合いが無ければ踏破できない。けれど、その過程において全て全力でなければならぬかと言われれば違う。力の振り方はセクションで異なる

のだ。

例えば継続が必要な場所ですつと全力を出していたら長持ちはしないだろう。私は今のダイヤさんが正にそういう感じなのではないかと思っっている。

「そう言えば星ちゃんってバイト経験ってあるの?」

「中学生のころにちよつとしたお手伝いを。その報酬として善意でお金を頂いていただけです」

「いや、それバーバー」

「お手伝いです。中学生がバイトなんて出来るわけないじゃないですか。アストルフオくんが男つていくらい有り得ないですつて」

「いや、それ絶対男の娘でしょ」

梨子先輩のツツコミを受け流しつつも私は包んだオブラートを開くことは無かった。建前も時には重要だ。

「でも色々しましたね。穹の趣味に引き摺られて車の修理工場の雑用やったりもしましたよ」

穹が虎視眈々と自宅にあるバイクを狙っていた頃、バイク弄りをできるようにと地元の整備屋さんへ乗り込んで無理矢理手伝いをし、お駄賃を頂くという穹特にならぬ行為に付き合わされたのだ。とは言え、整備屋さんもお祖父ちゃんでも半ば趣味でやっているようなものだったから、趣味を理解してくれる存在はありがたかったらしく、邪険にされることは無かった。因みに私はバイクよりもどちらかといえば車派だ。知識としてはアニメ化した『頭文字D』を見た程度にしかなかったけれど、機械弄りは見えて面白かった。それに整備場は天井にクレーンが着いていたり、車を持ち上げるリフトがあったり、遊園地のアトラクションのようで楽しかった。

「みんなはバイトしたことは?」

「家は旅館だから手伝いはしてるけど、バイトって感じではないかな」

「家もダイビングショップあるし」

「ヨハネは生放送の広告代あるし」

「マルはないぞら」

「私は株で稼いでるわ」

「ルビイはあまりお金使わないからやったことないかな」

「私は自分の使うお金は自分で稼げと教えられましたので短期とか派遣なら少々」

どちらかと言えばバイト経験者が少ないようだが、高校生くらいなら寧ろそれが普通だろう。

「じゃあダイヤさん、千歌ちゃん、花丸ちゃんは売店のキッチンで、梨子ちゃん、ルビイは水槽周りの清掃、私と善子ちゃんは風船配りね。果南ちゃん、鞠莉ちゃんは入場口の受付。星ちゃんは・・・適当で」
「はぶられた!？」

「それじゃLet's working!」

なんだか少し釈然としないけれど、私達は何故か体育会系のノリで円陣を組み、おーと気合いを入れた。因みに曜先輩の着ているうちっちーの着ぐるみのヒゲの部分はもふもふで気持ち良かった。

「さて、何処やろうかな」

各担当エリアに散開したところで、早速手持ち無沙汰になってしまった私は先ずは園内を把握しようと遊撃的に歩きながら風船を配る曜先輩達と合流した。このグループならば園内もそこそこ移動できるし、バイト経験のある曜先輩ならば聴けば解説もしてくれるだろうから。

「ここに来るのは初めて？」

「実はそうなんです。学校からならバスの道中にあるんですけどね」

「行かない人は案外そんなもんだよ?でも、私達はみんな幼稚園とか小学校の頃に学校行事で来るから覚えちゃうんだよね」

「ふ、地元愛とは正にこのこと」

「善子ちゃんは地元嫌ってなかったっけ？」

「ヨハネよ!それに嫌いつて訳じゃ・・・」

「愛しさ余って憎さ100倍、みたいな」

善子ちゃんはやや恥ずかしそうに、それでいて認めたくなさそうに肯定した。

そう言えば私も埼玉に居た頃は地元の観光名所などプライベートでは足を運んだことはない。まあ、埼玉も一つの市がやたら広く、市

内と言えども私の家からその観光名所まで車で30分掛かる。当然、車など法的に運転出来ないから行こうと思うともっと掛かる訳だ。何が楽しくてそんな時間を掛けてまで原始人達の住んでいたような洞穴を見に行かなければならないのだと思っても仕方ないだろう。もつとも、私もまた地元民らしく学校のウォーキングイベントで足を運んだくらいだ。

「私からすると海がこんなに側にいるだけで不思議なんです」

「埼玉は海ないもんね」

「何処まで行っても陸続き。だからなんていうのかな？世界なんて自分の知ってることの延長線上にあるんだろうなって、そんな気がしてた。けど、ここには海があつて、それって私からしたら異世界というか、私達から切り離された別物なんですよ。だから、その果てには何があるんだろうって突き付けられているような、そんな感覚なんだと思います」

「うん。つまりよく分からない？」

「まあ、それでいいですよ」

実際そんな根拠のない感覚的なものなのだ。けれど、そんな自分から切り離されているからこそ意識せざるを得ないものは誰にだってある筈だ。曜先輩ならきつと千歌先輩。善子ちゃんなら自分では左右する事の出来ない運なんかだろうか？

「流石は音楽やってただけあつて詩的な感覚だね」

「活かせてるといいんですけどね」

ふと、ここ最近様子のおかしいダイヤさんのことが気になった。基本どんなときもしつかりしていて、理性的な物の見方をする彼女が意識せざるを得ない存在。それはこれまではきつと幼馴染みである鞠莉さんや果南さんだったのだろう。けれど、今は――

「あれ？ちよつと今日、来る園児の数多くない？」

入場口を見て絶句する善子ちゃんの声に、私は余計に嫌な予感がするのであった。だってそうだろうか？不運の墮天使様がここにおわるのだから。

第百十八話

高校一年生の私が子供の頃、なんて言うのも可笑しいかもしれないけれど、沢山の園児の姿を見て私は自分が子供だった頃のことを思い出した。いや、思い出そうとした。

そう、案外思い出せないのだ。思い出せるのは漠然と楽しかったという気持ち、そして私にとつての転機となった出来事などだ。

きっとその当時は今起きている出来事を忘れることなど有り得ないと思つていただろう。けれど、蓋を開けてみればこの通り。

これは何も私が薄情であることとは関係がない。みんな誰しもがそうなのだ。

例えば親であつたり、教員に昔のことを聴いても具体的なこととなると忘れてしまったと口にするのを一度や二度聴いたことがあるだろう。些か早い気もするけれど私もその例に漏れないということだ。

で、何が言いたいかというと、つまりは今日来た園児にとつて今日のことを忘れられない一日になると良い、そう思つたのだ。

「うちっちーだ！」

「うちっちー!!」

「うちっちー！」

三津シーに入場して目敏くも曜先輩扮するうちっちーを見付けた園児が、囲い猫でもするようにうちっちーに群がってじゃれつく。園児の中にはどうにかファスナーを見付けようとしたり、パンチをかます者も居て曜先輩は大変そうだ。

自分が子供の頃のことを鑑みても子供とは案外現実を知っている。着ぐるみの中に人がいることは知っているし、他に例を挙げるならばサンタクロースが各家庭にプレゼントを配って回っている筈が無いとも知っている。何故か親になるとそれを忘れてしまうようで子供を茶番に巻き込もうとするのは不思議なことだ。

また、子供は無邪気であるけれど人間で、故にやることは得てして碌でもない。

今うちっちーに対して行っている様に、知的好奇心を満たしようと

フアスナーを探し、自分の力を振るいたいからパンチをかます。

「こらー！うちっちーを虐めない！ほら、うちっちーが泣いちゃうよ？」

私が大袈裟に言うと、曜先輩が機転を利かせて短い手で顔を多くような仕草をする。すると、元気良く「はい」と手を挙げてじゃれつくのをやめた。

「はい、みんな良い子だね。先生の言うこと、ちゃんとして聞いて今日は楽しんでね」

どうぞ、と追い掛けてきた先生にバトンを渡した。先生からアイコンタクトで感謝されてしまった。

「はい。じゃあ、先ずはあっちのエリアに向かうよ。全速前進」

「「ヨーソロー!!」」
「!?」

その号令をして先生が園児達を先導してペンギンのエリアに向かう。その際に先生がうちっちーに対し敬礼のポーズをしていたのだから驚いた。

「な、何今の!？」

「地味に知名度上がってるみたいですね」

善子ちゃんが驚きに目を見開いているけれど、まさかAquoursの気がこんな風に地域に広がっているとは思っても居なかつたのだろう。けれど、「夢で夜空を照らしたい」、のPV撮影の時や幼稚園でのパフォーマンス、花火大会の時など地域の人と絡むことは多々あった。それを切っ掛けとして情報を追い掛けてくれている人も居るのだろう。

「それにしてもアンタよく場を纏めたわね」

「ああ、本気で怒ると萎縮しちゃうし、かといって放置もできないでしょ？だからああいう時は芝居がかつてるのがいいんだよ。そういう習性だから」

子供とはあれで空気を読む術に長けている。何をすると怒られ、何をすると褒められるのか観察しているのだ。そして自身で観察して得た感触を正しいものと認識する。それを利用し、これ以上すると本

気で怒ると合図を出してやればいいのだ。もちろん、それが通じない子もいるけれど、半数の子が空気を察して大人しく言うことを聴く方向性を示せば、少数の子は後は巻かれるだけだ。

「習性って動物じゃないんだから」

「いやいや、人間は動物でしょ？万物の霊長なんてお為ごかしを使ってるけどさ」

生まれたときから年老いて死ぬその時まで人はDNAに刻まれた習性や欲に縛られる。理性という枷も存在するけれど、人はその脳の構造から、解釈という武器を編み出し、理性をねじ伏せることを可能にした。人は今、野生と理性を双方支配するに至った獣、いや魔物だと言っても良いかもしれない。

「そう考えると私達って案外リトルデーモンなのかもね」

「なんかよく分からないけど、ちよつと同意しかねるわ」

なんて話しているけれど、私は別に人間が嫌いな訳では無い。ただそういうものであると思っただけだ。だからこそ、自分に親しい人のことをがっかりせずにいられるし、逆に好意的に思えるのだ。中にはこういう人も居るのだ、と。

「ま、星らしいと言えばそうなのかな」

「ドライってこと？」

「それだと淡泊だから、ドライフルーツってところかしら」

「何それ」

また新しい表現が生まれた。

らしさを語るならば善子ちゃんの発想力の方がよっぽど善子ちゃんらしい。

「二人とも、喋ってないで手を動かして」

「すみません」

園児達が立ち去り、周囲から私達以外の人気が消えると、曜先輩は小声で注意を促した。

確かに些か喋り過ぎたと素直に謝罪し、私達は屋外から屋内のエリアへと移動した。

しかし、「らしさ」を人から語られるとは私は今、私らしくあるの

だろう。自分ではその実感は中々湧かないものだけど、時にはそういう指摘を受けることは自分をチューニングする上で大切だ。

自分「らしさ」を知ってくれている、認めてくれている存在があつてこそその自分とも言えるのだ。

「あれ、ダイヤさんだ」

「どうしたんだろう？ダイヤさん」

売店のキッチンにいて思っていたけれど、何かあったのだろうか？手持ち無沙汰な様子で所在なさそうなダイヤさんがお土産コーナーにいた。

「どうかされましたか？」

「それはこっちの台詞ですよ。キッチンはどうしたんです？」

「お昼までは暫くキッチンは暇で。順番にフロアを見てるんです。お三方はどうしたのですか？」

「遊撃かな。今日は小さい子が多いみたいだから園内を周った方がいいと思つて」

お土産コーナーにはまだ人は居らず、それを確認した曜先輩はうちつつーの着ぐるみの頭を外してそう説明した。

「ダイヤさんちよつと元気なさそうでしたけど、何かありました？」

そしてズバリダイヤさんにダイレクトに問い掛けた。

「そ、そんなことありませんわ。今日もお仕事頑張りますわよ。よ、曜ちゃん」

「……………」

そそくさとの場を離れるダイヤさんと顔を見合わせる私達。

「今のは？」

「曜「ちゃん」ですつて？」

「これは一体何を意味するのか？」

ダイヤさんは普段、親しい間柄の人でも「さん」付けで呼ぶ。けれど今は確かに「ちゃん」だった。

「なんか、らしくないねダイヤさん」

少しだけ感じていた違和感が明確になり、曜先輩と善子ちゃんは口々に「らしくない」と言う。

「でも本当にらしくないの？」

「らしくないわよ。ダイヤさんはいつも真面目で、ちょっとへっぴこで、妹にゾッコンで」

「スクールアイドルが大好きで、多分私達のことにも信頼してくれて」

「馬鹿丁寧が体に染み付いたみんなのお姉ちゃんみたいな感じ？」

「それよ」

「みんなのこと、一人の人間として良く見てるし、だからみんなのこと〴〵を付けてるんだろうなって思ってる」

そう、ダイヤさんは偶に抜けてるところがあるけれど、基本頼りになるお姉ちゃんなのだ。

ダイヤさんから言葉を掛けられる時に〴〵を付けて呼ばれる事が、一人の自立した人間として認められているような気がして心地良いのだ。

幼馴染みの二人は別にして、だからそう呼ばれるみんなもダイヤさんのことを信頼と親しみを込めて〴〵を付けて呼ぶ。

「それ、多分ダイヤさんが欲しい言葉なんじゃないかな？」

「ダイヤさんが？」

「最近ちよつと様子おかしかったでしょ？みんなとの距離感に迷いがあつたんじゃないかなって」

「まったく、ホント自分のことは不器用なんだから」

それさえも分かっているのならば後はそれを本人に気付かせるだけの話。だけど、改めて面と向かって話があります、なんて変だしどうしたものでしょう？

曜先輩も善子ちゃんも自然とその結論に至ったようだと考えを巡らせているけれど、妙案は浮かばない。

午前の時間をそのまま何の案も出ないまま過ぎ、ダイヤさんが離れた隙にみんなが認識を共有したけれど、結局好期はすぐには訪れなかった。

「千歌先輩。らしさってなんだと思います？」

「んー・・・積み重ねたものとか、咄嗟に出るもの、とかかな」

「なら、自分が思うらしさと他人が思うらしさってどっちが本物です

か？」

「どっちでもでしょ？だって自分には見えないものが誰だってあって、それは他人にしか分からないんだから」

お昼休憩の時に千歌先輩に問い掛けた。それに対しあっけらかんと、何を当たり前のことをとでも言いたそうに千歌先輩は答えた。

正解かどうかは置いておいて、一理あるのは間違いない。

なら、私はみんなから見てどう思われているのだろう、と考えかけたけれどその答えは感覚的には知っていて、一々理屈をこねるようなものでは無いと思った。人間関係の一つ一つに一々考察していたらキリが無い。けれど、ダイヤさんはそれを考えてドツボにハマってしまったのだから人間関係とは奥が深い。

「そう言えばあまりこういう風に聴いたこと無かったけど、穹ちゃんってどんな子なの？連絡先は交換したけど、まだ文章のやり取りしかしたことなくて」

「いつの間?!？」

「Saint Snowさんとはけっこうテレビ電話とかしたりするんだけどね」

「それもいつの間?!？」

「気付いたら、かな」

千歌先輩のコミュニケーション能力の高さには脱帽だ。

しかし穹、か。

「例えるなら穹はチャレンジャーですね。食欲で見境なくて、腰が軽くて、満足しない奴ですね。そのクセ器用だから質が悪い」

「褒めてるのか貶してるのか分からないね」

言っていてなんだか私もそう思う。けど、私から見た穹とはそんなものだ。

「ま、今度話してみたら少しは分かるかな」

「百聞は一見にしかずですしね」

「なんかさ、普段考えないけど、改めて友達のことを考えてみるのって楽しいね」

「—————」

「だってそうでしょ？この人のこと、私ってこんな風に思ってたんだって気付けるんだもん」

だから人を想うのは楽しい。千歌先輩はそう言い切った。

「千歌先輩はもしダイヤさんが『ちゃん』付けで呼んで欲しいって言ったらどうします？」

「本人がそうして欲しいっていうなら、そう呼ぶかもしれないけど、でも私は今のままダイヤ『さん』って呼びたいかな」

そんなやりとりをお昼にしたあと、仕事に戻ってからしばらくすると園児が方々に散開し、立ち入り禁止エリアにまで足を踏み入れた子が出るほど収集が着かない事態となっていた。

園児は騒ぐは、泣くは、ついでにルビイちゃんまで泣き出すのだから手に負えない。

もういつそのこと放っておこうかとも思ってたけれど、水難事故になってからでは遅い。どうしたものかと途方に暮れた時、場を纏めたのはやはりダイヤさんだった。

「みんな集まれー」

ダイヤさんがイルカやアシカに合図を出すための笛を鳴らし、スタジアムに注目を集めると大仰な手招きで園児を一カ所に集めたのだ。

それを見て流石だなと舌を巻いた。私もうちっちー（曜先輩）が絡まれた時に似たようなことをしたけれど、ダイヤさんのように一気に園児を集め、その視線で園児の心を釘付けにはできない。

思えばダイヤさんのコーレスは「私の視線に釘付けの貴方が好きよ」で、彼女の視線は吸い込まれそうなほど力強く、魅力的だ。

「やっぱりダイヤさんはダイヤさんだよ」

事態が収拾した時に千歌先輩は全幅の信頼を寄せてそう呟いた。

そしてそれはみんなの総意でもあった。

ダイヤさんはダイヤさんだからこそ好きなのだ。そして、その好きの中にはダイヤ『ちゃん』と呼ばれたいなんて悶々とするダイヤさんも含まれるのだ。

「結局、私は私でしかないのですね」

今日の仕事が終わわり、三津シーから出るダイヤさんの背中はどこか

寂しい。

「それで良いと思います」

その寂しい背中を千歌先輩がみんなの言葉で包み込む。

ダイヤさんの良さは「ちゃんと」している所であると。ダイヤさんがダイヤさんらしいところ、そんなところが好きなのだ。だからこれからもダイヤさんで居て欲しいと。

「私はどっちでもいいのですわよ、別に」

みんなの気持ちを受けてハニカミながらそう強がるダイヤさんに私達は一言、これからもどうぞよろしくね、と気持ちを込めてこう送った。ダイヤちゃん、と。

ダイヤさんはスツキリしたように、それでいて儚げに微笑んだ。

第百十九話

短期集中でアルバイトをした成果として私のお財布事情は大部改善された。

打って変わってA q o u r s と言えばラブライブ予備予選を無事に通過したという事で、未来に金欠問題が再発することが確定となったが、今は予備予選を通過出来たことを喜ぶ時だ。

更に予備予選通過と学校説明会の効果があつたからなのか入学希望者の数も徐々に増えているという。現時点でまだ増えるのも驚きだが、これからはまだ第一志望校が固まっていない、或いは学力が届いていない生徒をターゲットに絞るのも悪くないのかもしれない。もつとも、方針としてはありかもしれないが、現実的には難しいため広域な宣伝をするしかないのが実情だが。

「星ちゃん、ストレッツチ終わった？」

「はい。もう十分です」

ダンス練習で負担を掛けた筋肉を解しながらどうやら考え込んでいたようで、すっかり汗の引いたルビィちゃんから声を掛けられてしまった。

「それにしても星が自分から練習に参加したいって言い出すなんて珍しいわね」

「というより初めてすら」

「最近鈍ってたし、新しい曲のアイデアも浮かばなくて。ちよつと気分転換にね」

そう。私は今日、プラザヴェルデにある貸しスタジオでのA q o u r s の練習に混ぜてもらったのだ。

言った通り、我ながらちよつと情けない事情だ。

「曲作り進まない？」

「はい。煮詰まってしまうと言うか、なんというか」

忙しかったこともあり本格的にアイデアをノートを取れるくらいになつたのは本当に最近。それこそ学校説明会が終わってからくらいだが、音階やフレーズが浮かんだものを書き出したりはしている。

けれど、それがハマらない。連ならない。音楽にならないのだ。

「それで気分転換？」

「はい。偶には頼りなさいって、誰かさんに言われましたから」

チラリと鞠莉さんを覗き見ると、アヒル口を作って笑っていた。このパツ金、あざといったらありやしない。

「それにしても最初の頃に比べてみんな体力付いたね」

私なんて息も絶え絶え、着いていくのに精一杯だった。初めの頃はすぐに息切れし、動きが鈍くなっていた花丸ちゃんですらキレのある動きを維持していられるようになっていくというのに。

「何だかんだ成長してるんだよ」

「怠けているなんてブツブツですわっ！星さんももっと精進しませんと」

「日々精進だよ」

耳に痛い事をすばりと言う。けれど一理あるため、ちよつと自己練を増やそうとも思う。

「今度から練習に加わる？」

「いえ、私は部外者ですから。九人には九人のフォーメーションがあるでしょうし、毎回は遠慮します。基礎トレの時は教えてください」

「そっか。うん。分かった」

私の我が儘とも取れる物言いに千歌先輩はすんなりと納得した。千歌先輩ももう私のことをAqoursに誘うことはしない。千歌先輩は分かっているのだ。私のケジメが付くまで私が誰かと正式にチームを組むことはない。

それだけではない。Aqoursは今の九人でこそAqoursなのだと分かっているのだ。

私への理解、そして今のメンバーへの信頼。その二つが千歌先輩に私を誘う文句を言わせない。

その空気感がとても心地良いと、そう思った。

「偶には違うフォーメーションも良いと思うけどね」

「個人的には奇数で汎用性が確保できる九人を推しますけどね」

曜先輩の呟いたことに反論する訳では無いけれど、九人とはこれで

いて中々バランスが良い。

まずこう言ったグループ活動はセンターが居て左右に開くフォーメーションが多い。変な言い方をすれば、センターを置ける奇数でこそ割り切れるのだ。

例えばダブルセンターという手法を取っても、裏センターを置くことでバランスがとれ、九人という人数で立体感を維持しつつ大きさも取れる。

どんなステージに行っても大体収まる人数で奇数である九人はパーフェクトだというのが持論だ。

「強いて言うなら十人よりは十一人の方がまだいい気がしますね」

九人では出来ないけれど十一人なら出来るフォーメーションがある。

私と穹が居たら、なんて妄想が膨らみそうになるが、それは夢のまた夢、早計だと自制する。私はまだ穹を納得させるだけの武器がないのだ。

「体作りならそれでいいとして作曲は？私も手伝おうか？」

「どうしても浮かばない時はヘルプを出します。でも、どちらかと言えば編曲を頼むかもしれませぬね」

「これは大仕事になりそうね」

一時は自分の音を見失っていた梨子先輩が今では心から音楽を楽しんでいると、傍から見ても分かる。梨子先輩はある意味で私の目指す場所を知っているのだ。

「でも次の予選大会の曲。先ずはそっちからですね」

「分かってる」

最近の梨子先輩は絶好調の様で、作曲もかなり捗っているのだという。何でも今回は応援歌のような皆で声を出せるような曲にしたいらしい。

「気分転換ついでに、星さん。一つ仕事をお願いしても？」

「何処の組を潰しに？」

「家はカタギです。あ、み、も、とですわ！」

「そうでした。でも、海無し県出身の私にはマグロの一本釣りは荷が

重いです」

「まだ一言も内容を言っていないのですが」

「ええ。知ってまー嘘です、ごめんなさい、ごめんなさい!」

余りにも巫山戯すぎたせいかダイヤさんはこめかみに青筋を浮かべたので、慌てて全力謝罪してしまった。ルビィちゃんが鞠莉さんと果南さんを盾に身を隠す程だったから本当に危なかった。

「人の話を聴かないのはブツブツですわよ」

「すみませんでした。それで仕事とは?」

「ええ。老人会の催しがありまして、浦女生として出席して頂けないかと」

「老人会ですか」

ふむ、とちよつと考えてしまう。

こういった地方では老人が地元で権力を握っていることもある。だから変に関わって反感を買うと痛い目を見たりもするのだが、逆に味方になって貰うと心強かったりもする。

そう考えると地元の網元であった黒澤家や地元での富豪である小原家が出席しなければならぬような気がしなくも無い。けれど、私にお鉢が回るというのはどういうことだろう?

「スケープゴート?」

「イエース、生け贄でーす」

「違いますわ。ただ、落としどころとしては丁度いいっていうのは事実ですけど」

「難しい事情は考えないようにしますよ。それより催しつてのは大凡鑑賞会的なものってイメージであってます?」

「ええ。そうです。例年は特に縛りもなかったのですが、学校説明会で漁業組合に手伝って貰ったこともあり、繋がりのある筋から要請が来てまして」

「なるほど。で、学校の行事の貸しでの要請には学校として返す、という名目なんですね」

一々建前がなければいけないのは面倒くさい。しかし、ここで生活するのならばそういったことも大切にしなければならぬだろう。

この広いけど狭い人間関係の中、知らない間に助けられていることもあるだろうし、老人は大切にしなければならぬ。

確かに年老いて肉体も頭脳も衰える所は必ずある。けれど、それが即ち蔑ろにして良い理由にはならないし、そんな人を大切にしてきたからこそ人は繁栄してきたのだ。

更に言えば先にも言ったようにこう言った地方では老人の持つ力は馬鹿にならない。

「分かりました。なら後で詳細をメールで送ってください」

「助かります。ではそろそろ今日はお開きとしましょう」

「雨も降ってきたしね」

窓の外を見れば暗雲立ちこめるといいうやつで、既に土砂降りだった。

「善子ちゃん」

「何よ!? 私のせいじゃないわよ・・・っていうかヨハネ!」

なんて冗談を交わしつつ私達は帰り支度をする。どのみち帰りは車で迎えに来て貰うことになっているらしい。

「星ちゃんも乗るでしょ?」

「今日は走って帰ろうかと思えます。大した荷物も無いですし、丁度水を弾くパーカーも着てますから」

「風邪引かない?」

「案外体強いんで大丈夫」

雨に打たれて風邪を引くというのは、濡れたことで体温が下がった状態が長時間続くような条件が揃わなければなりにくいのだ。濡れた後の処置を間違わなければ問題ない。

ただ、失敗したのは靴ばかりはびちゃびちゃになることは避けられないということだ。雨の予報は出ていたしレインブーツなりを履くべきだった。

私はバッグにビニール袋を被せて背負うとみんなと一緒に外に出た。

外には既に迎えが来ていて、みんなはプラザヴェルデの入り口からダッシュして慌てて車に乗り込む。

「じゃ、怪我しないようにね」

「海とか川とか見に行ったらだめだからね」

「分かっていますって」

それじゃ、と発進する車を見送ると、私も最後に残った善子ちゃんに別れを告げる。善子ちゃんはこの近所のマンションに住んでいるため徒歩なのだ。

「じゃ、ヨハ子ちゃん」

「ああ、傘が!? 待ちなさい」

自分でしたボケが聞き届けられる間もなく善子ちゃんの持っていた傘が風に煽られ飛ばされる。早速かーい、と思わずツツコみたくなるほどの発生スピードは流石は不運が代名詞となっている善子ちゃんだ。

「前方、足下気を付けてよ」

「分かっている。足下がお留守になっていきますよなどとは言わせない！」

そんな神様みたいなことを私も言うつもりはないのだが、と思いつつ危なっかしいため善子ちゃんの後を追うと、程なくして運良く傘は背の低いブロック塀に引っ掛かった。

「運良く? いや、飛ばされた時点で運は良くない? うーん」

「取った!」

流石に不運慣れしているというか、私がふと思った懸念など想定済みの様子で、警戒しつつも傘を掴むことに成功した。が、善子ちゃんは何かに気付いた様子で下を向いたまま動かなくなった。

「どうしたの?」

「ふっ」

「いや、鼻で笑われても分からないんだけど」

何か珍しいものでも見付けたのかな、と近づいてみると、丁度傘の引っ掛かったブロック塀の影に犬が居たのだ。

「捨て犬、じゃなさそうだね。首輪付いてるし」

「そう、導かれたのよ。この私の闇の波動に」

「確かに結構汗だらだらだったしね」

「臭いって言うの!?!ちゃんとボディースーツで拭いたわよ」

なんて、言いつつ善子ちゃんは小型犬を抱きかかえる。

「善子ちゃん?」

「ヨハネよ。心配は無用。我が眷属はしつかり私が面倒を見る故」

すつかりスイツチが入ってしまった善子ちゃんはそのまま自宅マンションへと歩みを進める。

どうしたものかとも思ったけど、あれでいて善子ちゃんは案外しつかりしている。私はちよつと不安に思いつつもこれ以上は何も言わず、私も帰路へ付いた。

第二百一十話

老人会の催し物ではちょっとした見世物の鑑賞会が行われるとのことで、私の他に大道芸や手品師などと呼ばれているとのこと。私は音楽パフォーマンスのパートを担当するとのことだ。

さて、と私は頭を悩ませる。音楽は流行廃りはあれど素晴らしいものは素晴らしい。けれど、やっぱり自分と縁のある音楽は特別な響きがするものだ。

だからなるべくその年代にマッチした曲目にしたいのだが、イマイチイメージが湧かない。恐らくは1940年代、1950年代だとは思うけれど、よくよく考えると半世紀以上前の流行、私を知るよしも無い。

レパートリーを増やさなければ、と動画サイトを回る。やはりオリジナルよりカバー曲がいいだろう。私もそれくらいの分別がある。

「お、Saint Snowの予備予選の動画だ」

道民、道産子等々、色々と言いはあるけれど、とにかく北海道が誇るスクールアイドルデュオだ。順調に予備予選を通過したらしい。

予備予選に引っ提げてきたのは“CLASH MIND”。その歌詞からは彼女達の生の感情が読み取れる。更なる高み、輝きを模索するために今一度スタートラインにたったという、その等身大の姿が凄くこちらを引き込む。

そして前作“SELF CONTROL”のお客様がコールするような構成とは違い、聴き入らせる構成となっているが、聖良さんの圧倒的な歌唱力が説得力を持たせている。きつと生で見えていたとしたら聞き惚れてブレードを振ることすらままならないことになっていただろう。

そんな人達がジエミニのアカリを知っていた。それがちよつとむず痒い感じがする。

「案外知っていたりするかも」

私達のようなマイナーな存在すら認知しているほどスクールアイドル活動に熱心な聖良さんならばもしかしたら良い楽曲知っている

かもしれない。

「もしもし、千歌先輩？」

「星ちゃんどうしたの？」

ちやっかり聖良さんと連絡を取り合っているという千歌先輩に説明し、聖良さんへの連絡を仲介して貰った。千歌先輩は二つ返事でOKしてくれて、聖良さんに許可を取り、晴れて直接連絡することになった。

「こんばんわ、鹿角聖良さん」

「こんばんわ、黒松星さん」

どうも聖良さんは直接相手の顔が見えるテレビ電話が好みらしく、私は今、パソコンのディスプレイ上に映し出された聖良さんと顔を合わせた。

「東京で顔を合わせて以来になりますね」

「じっくりと話はできませんでしたけどね」

「しかし、幅広いレパトリーが売りのジェミニのアカリから相談を受けるなんて、思っていますんでした」

「幅広いって言っても限度はありますから。私達のことを知っているくらいに情報通な鹿角さんの知識、当てにさせて貰いますよ」

「聖良で良いですよ。理亜も居ますからね」

では聖良さん、と言うと聖良さんは満足げに頷いた。

千歌先輩から既に話は聴いているとのことだったが、改めて事のあらましを説明した。

「地域の人との交流ですか。いいイベントですね」

「流石にジェネレーションギャップがありませんよ」

「確か。案外音楽の教科書に載るような曲は認知されていたりしますよ」

山口百恵の“秋桜”、いい日旅立ち”なんかは確かに誰もが知る曲だろう。確かによくよく考えれば分かることだが、生まれた年の音楽とは案外知らないもので、そこから音楽を意識するようになるには最低でも5年、少なくとも10年は経過してからだろう。細かい時代背景は分からないけれど、1950年代は徐々にラジオからテレビに

メディアが移行しつつある時代で、ラジオでは音楽番組とは必ずしもメジャーでは無かったと思われる。すると、その年代に生まれた人が音楽に熱中するのは今の人よりも遅いかもしれない。

「1960年代は良いかもしれませぬね」

「とは言え私はやっぱり最近の音楽の方が好きなんですけどね」

「どんなの聴きます?」

「もう解散しちゃいましたけど、BOYSTYLE」とか好きですね。理亞なんかは、BABYMETAL」が」

「BOYSTYLEが最近って、聖良さん歳幾つでしたっけ?」

「色々調べてると2000年代が最近に思えるの」

確かに1990年代後半からの音楽は、広まった各音楽ジャンルが成熟し、より広くの人に受け入れられるようになった。現代音楽の形が出来た頃なのだ。だから2000年前後は最近と言っても違和感がない。

「星さんって基本的にJ-POPでしょ?」

「凶星です」

「いいの、私もだから。でも、それこそ1960年代の流行なんて洋楽じゃない?ビートルズとか」

「良いですね。その辺りも探ってみますね」

「私も纏めてリスト化しておくから後で送るね」

「すみません。予選の準備もあるのに」

「いいんです。私達がラブライブを優勝するには多分、もっと多くの見識が必要なんだと思うので」

「前回大会は傍から見れば大健闘だと思いますが、Saint Snow的にはやっぱり?」

「それは頂点を目指していますからね」

不覚にも私はその真っ直ぐな言葉にSaint Snowを応援したい気持ち芽生えた。

迷いもあろう、苦悩もあろう、けれど到達点はぶれないそのストイックさがとても格好いい。しかも、それをするのが聖良さんのような可憐な女子なのだから尚更だ。

「応援しますよ」

「Aqoursと決勝でぶつかっても？」

「そうならどうしましょうね？」

私達はふふ、とお互いに笑い合う。少ないやりとりながらもこの人が気持ちの良い人物であるというのがよく分かった。流石に妹の理亜さんがお姉様と呼び慕うだけのことはある。

「私としてはジュエミニのアカリの活動も気になるんだけど？」

柔やかな表情も声のトーンも全く変えることなくしれつとぶつ込んでくるところなんか本当に食えない。

「絶賛活動休止中です」

「喧嘩でもしたの？」

「ノーコメントで」

「・・・お節焼いちやいましたね。その辺りは千歌さんに任せますよ」なんて、しれつと言うのだから毒気も抜けるというやつだ。

聖良さんはそれではSaint Snowでした、と茶目つ気たつぷりに額の両サイドで開いた手の甲を見せつけるようなポーズを決めて通話は切れた。北海道は函館のヤバイスクールアイドルだと改めて認識させられる。

「気にされるってのは悪い事じゃないんだけどね」

私も多少はキモが据わったらしく、その話題を出されただけで心がざわつく事も、人に八つ当たりすることもなくなった。聖良さんの期待や善意を感じ取ることが出来る程度には私も弁えられるが、だからといってすぐに相談できる内容でもない。

「あれ？善子ちゃんからだ」

聖良さんとの通話を終えた後、一日の締めとしてメールやSNSのチェックをしていると善子ちゃんから連絡があることに気付いた。

犬の名前に付いて、ライラプスとケロベロスのどちらがいいかとの内容だった。

首輪が付いていた犬だから捨て犬ではないと思われるし、名前なんて気が早いのではないかと思うのだが。

私は2、3秒考えてどうでもいいや、と思い適当にフェンリル、と

返信した。

よくよく考えれば首輪の付いている犬なのだから警察に拾得物として届け出ることも可能なのでは無いかとも思ったけれど、善子ちゃんはどうにも自分で何とかしたいと考えている節がある。

変な騒動にならなければいいけど、と善子ちゃんが関わっている時点で既に無理なことを願うのだった。

第二百一十一話

翌日のことだ。どうにも一日を通して善子ちゃんがそわそわとしていて、非常に不気味だった。それを花丸ちゃんもルビイちゃんも察していたようで昼休みには、

「善子ちゃん今日はトイレ近いの？」

「違うわよ！」

「じゃあ貧乏揺すりずら？」

「それも違う！」

なんて善子ちゃんを弄っていた。

二人とも善子ちゃんから犬を預かれないかと連絡を受けていたとこのことで、善子ちゃんが犬の件でそわそわしているのだろうとは検討が付いているらしい。

と言うか、颯爽と自宅マンションに犬を引き上げていったクセに善子ちゃんのとこのマンションはペット禁止とは、いよいよどうするつもりなのだろうか？

「善子ちゃん、あの後犬どうしたの？」

「ど、どうもしないわよ。ライラプスなら今頃魔力を蓄えて居る頃よ。って、そういえばフェンリルってなによ!？」

「いやいや、善子ちゃんももう飼うつもりでいるの？」

「悪い!？」

「悪いとかじゃなくて、飼い主見つかったら返さなきゃいけないんだよ。」

善子ちゃんは私の言葉に不満げな表情をしながらうー、と唸る。

唸られてもどうしようもないし、どうしようもないことは善子ちゃんも理解している筈なのだ。

「飼い主なんて居ないかもしれないじゃない。そしたら私が面倒見るしかないでしょ」

「それにしても善子ちゃん家じゃ飼えないじゃん」

「あれは仮初めの仮宿。墮天使ヨハネにはもつと相応しい家がある」

「仮って二回言ってるぞら」

「うるさい」

善子ちゃんはそう言ってこの日は放課後まで私に口を聴いてくれなかった。

なぜこんなに入れ込んでいるのだろうか？私はペットを飼ったことがないからそれが分からない。やたらハマる人が居ることは分かっているけれど、動物を可愛いと思えどそこまで夢中になったことのない私にはその気持ち分からない。

確かに動物は、特に哺乳類は多少はコミュニケーションを取ることが出来る。その中でも犬は奇跡的に人間に寄り添って生きることを選んだ、或いは選ばされた種族で、飼い主に信頼を注いでくれる。単に私がその実感をしたことがないから淡白に捉えてしまうのだろうか？

善子ちゃんが入れ込む理由を知るには私もそれを実感しなければならぬのだろう。知りもしないのに知ったような口を聴かれたら善子ちゃんだって腹も立つ。そう思い、放課後はとっと練習を切り上げた善子ちゃんを追うように沼津市街地に出掛けた。

流石にアポ無しで善子ちゃんの家飛び込むのは気が引けたため、今からどれだけ犬が素晴らしいのか確かめに行きたいと連絡したところ、少し間があつてから、彼の流れの杜にて待つ、と返信があつた。「いや、どっかって話よ」

確か自宅の事を仮初めの仮宿と言っていたから多分自宅ではない。杜、というくらいだから奉っている系の物がある印象だけど、彼の流れって何だ？

流れ、時、流行？いや、多分もつとシンプルで、彼の流れ、狩野流れ、狩野川ではないかと推理し、私は狩野川沿いに出ると善子ちゃんのマンション付近まで川沿いを下る。すると、

「善子ちゃん、それに梨子先輩？」

珍しい組み合わせだ、と思った。この三人だけで集まったのはカラオケに一緒に行った時以来ではないだろうか？

「星ちゃん、助けて！」

「ほあっ!？」

二人を見付けて早々、ライラプス（仮）に追い掛けられている梨子先輩は私の後ろに回り込み、容赦なく盾にした。

幸いライラプス（仮）は出来た犬のようで追い掛けてはいるものの無闇矢鱈に飛びついてこなかったのでホッとした。

小型犬と言えども侮れない力があり、完全に野生化した戦闘態勢の犬ならば小型犬でも成人男性を軽く殺害しうる殺傷力を持っているのだ。

「つてあれ？」

飛びついてこないことに心を撫で下ろしている間に、私達を通り越したライラプス（仮）がマンションの植栽に頭を突っ込んだかと思うと、Uターンして戻って来て私の前で止まった。

「私？善子ちゃんでも梨子先輩でもなく？」

思わず二人を指差してしまったけれど、ライラプス（仮）は首を振って私のことを見詰める。

愛らしい眼差しは確かに心くすぐられる。

「どうしたの？つて何か啜えてるじゃない」

梨子先輩にライラプス（仮）をけしかけた善子ちゃんが近づいてくると、ライラプス（仮）の口から何かを取り出した。

「こ、これは彼の魔術王の!？」

「はいはい。でも、指輪ね」

善子ちゃんの妄言を軽く一蹴して梨子先輩が冷静に指輪を検分する。

見た感じ特に意匠に特徴の無いシルバーリングだ。

誰かが落つこととして転がってしまったのだらうとは思うけれど、周囲には私達しか居ないため何時から落ちていたのか分からない。案外若い人が買った安物なのかもしれない。

「後で交番に届ければいいよ。ここからだつたら帰りの道中に交番あるから私預かるよ」

そう申し出ると、何故か善子ちゃんがライラプス（仮）を抱きかかえ私に押し付けてきた。

「え？交番に届け出ているの？」

「そうじゃなくて！預かって」

「いやいや、そう言われても・・・この子梨子先輩のことが好きみたいだし？」

「はい？」

「やっぱり梨子先輩は犬から好かれるタイプなんだよ。だから梨子先輩が適任だと思うよ」

丁寧にそう言つて善子ちゃんと指輪と交換でライラプス（仮）をお返しする。善子ちゃんは「ギラン」なんて態々口に出して梨子先輩を次なるターゲットとして見据える。

どうやら既にそんな話を二人はしていたようで、がやがやと協議を始めた。

まだ状況を掴みきれて居ないけれど、どうやら善子ちゃんは自宅で犬を飼えず、屋外でこつそりと面倒を見ていたのだろう。けれど、そんなもの長くは続けられないためみんなにヘルプを出していたようだ。

なんとも行き当たりばつたりだと思いつつ、私は押し付けられぬよう、しれつとこの場を立ち去つた。

殆ど一瞬の対面だけど、どうやらあの犬と私との間には運命の糸は結ばれていないらしい。

ただ可愛がるだけなら良い。けど、善子ちゃんから預けられそうになった時、一瞬でも飼うことに面倒くさいと思つた私には多分無理なのだと思う。常に可愛らしい犬を愛でることが出来るのと引き換えにはちよつと自分の時間を私は愛しすぎているようだ。

「じゃあまた明日ね」

「星ちゃん!?!は、薄情者ー」

そんな梨子先輩の悲鳴を背に私はクールに立ち去るのであった。

第二百二十二話

自宅に帰り、メールをチェックすると聖良さんから早速ピックアップした曲のリストが届いていた。

パツと思い浮かばなかっただけで、私でも知っているような曲が幾つもあり、改めて聖良さんのポップスに対する知識の深さを思い知る。流石はラブライブ決勝大会に進出したことはある。

その中からどれを選ぼうかとリストにある曲を口笛を吹きながら吟味する。

そう言えば穹と組んでカバー曲をしようとお互いにアレンジしたい曲目を一覧にしたらエライ数の曲が並んだものだ。お互い欲の向くまま選んだ結果がこれかとお互い苦笑するしかなかった。

流石に一から新しく曲を覚えられるとしたら1曲が限度だ。だから完全に初見の曲は一度全て省いて選別する。

年代が一致するからと言って必ずしも知っている訳では無いため、可能な限りリストにある曲がどんな経緯で流行ったのか調べ、広告的に使われたり、ラジオでパワープレイされたりといった曲は優先的に選ぶ。

これは私の持論だが、音楽とはそれ単体よりも、その楽曲に夢中になっていた時の思い出との抱き合わせでこそ心に残りやすいものである。だから出来るだけ昔のことを思い出せる、そんなセトリリストにしたいのだ。

「ん？ 梨子先輩？」

ふとスマホのバイブレーションに気付き、着信を見ると梨子先輩から電話が着ていた。

「もしもしどうしました？」

「どうしました、じゃ、なーい！ 私が引き取る事になっちゃったじゃない」

「あ、そうなんですな」

なんて言ってみるけれど、大凡そうなるだろうとは思っていた。「どうしても預かりたくなかったなら警察に届ければよかったです

よ。そうしなかつたってことは心の何処かに預かつて大丈夫って気持ちがあつたんじやないですか？」

実際、梨子先輩は犬アレルギーではないらしいし、過去に噛まれたとかそういうトラウマも無いらしい。つまりは単なる食わず嫌いなのだ。

本人もそれは自覚があるらしく、千歌先輩宅に行った時なんかは頑張つて千歌先輩の家の犬、しいたけに触ろうと試みたりと苦手克服しようとはしているらしい。

だったらいいか、という気持ちが私にあつたことは否定しない。

「それに私の家より犬を飼つてる千歌先輩の家が隣にある梨子先輩の方が何かあつたときに便利でしょ」

「星ちゃん、ちやつかり理論武装してきたわね」

梨子先輩はあからさまにはあ、と溜息を吐くと電話口から慰めるように可愛らしい犬鳴き声が聞こえた。

「ああ、ノクターン！静かにしないとだめよ」

「ノクターン？」

「そう。ほら、少しでも馴れるにはやつぱり自分で名前を付けなくちやつて思つて」

「ライラプスってのは？」

「いいの。(仮) だつた名前なんだから」

なんだかややこしい事になりそうだと思い、これ以上踏み込むのは止そうと私は無理矢理話題を変えた。

「そうだ。こないだ私に話が回ってきた老人会の演し物。何曲かやろうと思うのですが、この中だつたらどれがいいですか？」

そう言つて絞つた曲目を梨子先輩に伝える。

梨子先輩はスクールアイドルを始める前はμ'sの存在すら知らなかつたけれど、過去に流行つた名曲などは案外知つていたようで、知つてる曲なんかは一言二言コメントをしてくれた。

その曲を伝える間もノクターンは時々吠えていた。雨の中、ずぶ濡れで見つかつたから時間差で体調を崩さないかとも思つたけれど、どうやら杞憂だつたらしい。

「以上です」

「じゃあ、3曲目と16曲目が良いと思うよ」

「その心は？」

「ノクターンが反応してたから」

これは冗談と受け取って良いのか迷ったけれど、案外馬鹿に出来ないチヨイスだったので否定も出来ない。

「ところで、星ちゃんは自分の曲はやらないの？」

「そこまでの説得力のある曲は残念ながらこれまで作った曲の中には無いと思いますので」

決して手を抜いた訳では無い。その時々で作り出せる最高のものを作ってきたという自負もある。けれど、それだけでは人の心を動かすには足りないのだ。

本当に凄い曲は初めて聴く曲であつても記憶に残り続けるし、体が底から熱くなつたり、涙が出たりするのだ。

「それを決めるのは星ちゃんだけじゃないんじゃない？」

「そうかもしれないませんが、やっぱり今回私のオリジナル楽曲をやるのは違うと思いますよ」

一方的に自分のお勧めを押し付けるだけでは人は喜ばない。人を喜ばす為の企画に出演するのに、それではいけない。だから私は今回、オーデイエンスに寄り添った構成にしようと考えているのだ。

「ワンっ」

「こーら、静かにしないと駄目よ、ノクターン」

電話の向こう側ではどことなく問い掛けるようにノクターンが吠え、それを梨子先輩が窘める。

「案外満更じゃなさそうですね。安心しました」

「そ、そんなことないよー」

「苦手克服頑張ってください」

では、と通話を終える直前、ノクターンがまた吠えているのが妙に耳に残った。

犬も吠えれば棒に当たる、という言葉があるように何かと暗喩が含まれる生物なのだ、犬とは。

第二百二十三話

曲目を決めると後はひたすらに練習だ。

基礎トレについてはA q o u r sメンバーに混ぜて貰って行うけれど、流石に演奏やタップダンスの練習までは一緒にできない。

幸い家は帰宅時間程度でうるさく言われない。そもそも母親は海外で働いているし、父親もまだまだこちらに来てからの仕事に四苦八苦しているらしくいつも帰りは遅い。更に言えば父親とは現在冷戦下にある。文句を言おうものなら再び戦争だ。前は買い換えが効く父親の私物を引っ越してくるのに乗じて廃品回収して貰ったけれど、今度はそれでは済まさない。

八つ当たりも多分に含まれるけれど、自分の人生に人を巻き込んだのだからそれくらいは覚悟して貰わなければ困る。

子供は親を選べないし、親は子供を選べない。親の言いなりになる子供である筈もないし、子供は純粹ではないのだ。純粹だと考えている人は自分が子供の頃を思い出すといい。

幼稚園児の頃にはサンタの存在に半信半疑だったし、小学生の頃には悪いことと分かりながらもライターで折れた枝や葉っぱに火をつけて楽しんだりした。親が知らないだけで悪いことなど沢山しているのだ。

なんてくだらない事を考えながら学校と自宅との中間くらいの場所にある船着き場に行くと、持ち込んだジョイント式の木目の床タイルを広げた。

タップダンスは靴に貼ってある金属板を打ち付けて音を鳴らすため地面に傷が付きやすいのだ。だからやるときはその点に配慮しなければならぬ。ポータブルのタップボードは良い値段をするため、始めたばかりの頃は大きなベニヤ板をホームセンターで買って持ち運んでいた。けれど、流石に重い邪魔であるため、最近は持ち運びしやすいこれを買ったのだ。

このジョイント式の木目タイルならば一部傷んでも買い換えをしやすいし、持ち運びも十分可能であるので非常に重宝している。更に

言えば、屋内用の床タイルのため、裏面が元の床を傷付けないクッション材であるのが非常に良い。室内での使用も十分可能なのだ。

すっかり屈伸、伸脚、アキレス腱、腰の回転、と一つずつ動かし、体を解す。若干だが一番活動していた時期に比べて体が固い。それは追々元に戻すつもりだ。

どうなるかは分からないけれど、もう一度「ジェミニのアカリ」としての活動を目指すならば、その時が来た際に動けないようでは困る。

まさかこんな風に思えるようになるとは浦女に入学した当初は考えてもいなかった。

千歌先輩が、みんなは決して私に強制はしなかった。いつだって私にはするかしないかの選択肢があった。けれど、みんなの活躍を間近で見て、私はしないという選択をすることなどできなかった。気付けばみんなの生き様に支えられている自分がいて、もう一度向き合おうと思えた。そして今、私はまた音楽を人前で披露することを楽しみに思っている。借り物の曲ではあるけれど私の音として見てくれる、聴いてくれる人を楽しませたいと思う。

準備運動が終わってからのはひたすらにタップを踏む。そんなに激しいタップは不要。今回はそういう舞台ではない。原曲を壊さない様に、聴く人がリズムに合わせて自然と体が動いてしまうようなそんなタップを。

私自身、こんな気持ちで踊るのは本当に久し振りで、気付けば鼻歌交じりにタップを踏んでいた。

単純にその場に留まって刻むタップ、大きくステップを踏みながら刻むタップ、汗を飛ばしながら私は踊る。心躍るままに。

「やるじゃない」

本当に時間の経過を忘れたのは何時以来だろうか？空はすでに茜色を越して紫色になっていた。

曲を踊りきると梨子先輩が拍手し、善子ちゃんが素直じゃない賛辞をくれた。

「どうして、ハハハハ？」

肩で息をしながら問い掛けると、善子ちゃんが引いている自転車のかごに見覚えのあるかごが積まれていた。

「ライラプスの散歩よ」

「ノクターンよ」

梨子先輩の言葉に善子ちゃんは柄悪く「ああん？」とでも言うように視線で火花を散らせる。それに一々突っ込んでいてもどうせ話は平行線だろうから、私は敢えて無視することにした。

「散歩なら出さないの？」

「梨子が怖がるのよ」

「ちゃんと紐を持つてくれるなら良いって言ってるのに、善子ちゃんったら全然付けようとしなんだもん」

「ふ、我が眷属にそのような無粋なものは不要。それに同じリトルデーモンである梨子を襲うような粗相はしない。ね、ライラプス」

そう問い掛けると、かごの中から元気に犬からの返事が聞こえる。

本当に意思疎通が出来ているかのようだ。

「それより星ちゃん、はい」

梨子先輩はどこぞのマネージャーよろしくタオルと水を差しだした。

私は人目も気にせずにペットボトルをラッパ飲みして一気に飲み干した。

「うあー、リビングゲテッド」

「普通に生き返るって言えばいいじゃない」

梨子先輩の突っ込みを聴きつつタオルでガシガシと汗を拭く。周りに慣れ親しんだ人しか居ないとなると所詮女子なんてこんなものだ。

「折角だし一曲聴かせて欲しいかも。ね、ライラプス」

「リクエストは？」

「シェフのお任せで。ね、ノクターン」

また始まった、と苦笑いしながら自分の中の楽曲リストをスクロールし、ハーモニカを取り出す。

海沿い、そしてなつたばかりだが夜空。それらから連想されたの

はーはー

「西沢幸奏で、帰還」

この楽曲はアニメ『艦これ』の劇場版のタイアップ曲で有名だ。

微睡むように始まる曲は音が連なる毎に力を増し、クライマックスの壮大さは本当に艦隊が隊列を組んでいる様を幻視する。歌手自身の力強さも相まって物凄いパワーチューンとなっている。

当然ながら後半のドラム音を再現するのはタツプだ。海をバックに奏でるとその踏み込みにも自然と力が入る。

オーデイエンスの二人と一匹は曲が終わるまで静かに聴き入っていた。

第二百二十四話

沼津市内のホテルの宴会スペース。そこで食事会の腹休めの時間として各種パフォーマンスが披露される。今日はそんな会だ。

地域のひととの交流の一環である催しであるため、私を含めたパフォーマーもまた食事を一緒にした。どうやら地元出身のパフォーマーらしく、中には老人会の面々と顔なじみの人もいるようだ。

私もまたその輪に加わって元気なお婆さんやお爺さんと会話していた。もつとも、私から話を振ると言うより聴き手に回っている形であるが。

「アンタ浦女生なんだって？私もそこ出身なのよ」

「そうでしたか。その頃はどれくらい生徒がいたんですか？」

「まだ学校数が少なかったからね。今の倍以上いたんじゃないかな」

「浦女生って言ったらその頃はこの地域のマドンナだったのよ」

「何がマドンナだ。坂の上まで登校するので鍛えられてるもんだから、みんな足が太くて、大根足を見たら浦女生だって思えって良く言ったもんだ」

がはは、と茶々を入れたじいさんが最初に話し掛けてきた婆さんにどつかれていたのは見なかったことにする。

因みにマドンナと言えばアメリカの歌手のマドンナは決して細身ではないようなので、あながち間違いではないのかもしれない。

「遂に廃校になるのか」

「だから共学にせいと儂は中学生の頃から言っただけだよ」

「それは単に可愛い子と登校しなかったっていう下心でしょ」

「悪いか！」

「悪いわ！」

本当に和気藹々と、そして遠慮のないそのやりとりは見ているこちらが元気になるくらいだ。

「まだ廃校になるか確定はしていませんよ。今、みんなで浦女のPRを頑張ってます」

この片田舎で100人の生徒を集める。それは尋常でない奇跡が

なければ無理だろう。けれど、尋常でない努力と全力の活動が実を結んだのか既に50人を超える入学希望者が集まっている。

実際の数字として成果を見た時、私は奇跡が起こるんじゃないかと思いたくなくなった。この50人という数字の時点で奇跡なのだから。

「学校のために頑張ってくれてありがとうね。でも、廃校を阻止することだけが学校を救うことなの?」

「? そうしなければ学校がなくなってしまいますよ?」

「形あるものは必ずそのままではいられないの。私と同じ浦女生の同窓だつてもう何人も見送った。もちろん悲しかったけど、そればかりは覆せないの」

「ならどうしたら」

「どうして欲しい、つていうか思考を固まらせないでつて話。だつて、仮に一年延命したとして、貴方達はこれからずっと浦女を守り続けられる訳じゃないんだから」

確かに私達が高校生で居られる時間は限られている。卒業してしまえば浦女のために費やす時間は限られる。というよりだ。

「学校のための自分じゃなくて、自分のために学校を救いたい。それを見失っちゃだめなんですね」

「うーん、まあ今はそれでいいわよ」

どうもお婆さんが意図していたこととは違つたらしいけれど、お婆さんはそれ以上は語らなかつた。

「それでも無くなって欲しくないものもある」

「どうしたんです、おじいさん?」

「結婚指輪を無くしてしまつて、じいさんつたらすつかり老け込んじゃつて」

「あの頃は金が無くて、飯も抜いて少しずつ少しずつ金を貯めて、それで二世一代の勝負に出たもんだ」

「プロポーズですね」

「いや、金が足りなかつたから競馬でな」

なんだか急にこのおじいさんが駄目な人に思えて来たけれど取り合えずスルーするのととした。

「もちろん外れたがな。婆さんにコツテリと絞られたわい。けど、なけなしの金でおもちやみたいにシンプルな指輪だけは贈ったよ」

それが生涯のものになったのだから贈り物は金じゃないんだ、と良いこと風に言うけれどどう考えても競馬の話は余計だと思う。

「こないだ散歩に行くまではあつたんじゃ」

「ああ、捨て犬がいたって言ってた日か」

ん、と気になるワードが耳に入る。そして、ポケットに入れたまますっかり忘れていたある存在を思い出す。

「それって、これ？」

「それをどこでっー！？」

ポケットから取り出した指輪を見ておじいさんが咽せだしたのは焦った。

流星に警察に届けようとしてすっかり忘れていたなんて言えず適当に誤魔化したけれど、ついさっきまで背中が丸まっていたおじいさんはどこへやら。狂喜乱舞していた。

合縁奇縁とはまさしくこんなことなのだろう。

このおじいさんだけではない。ここにいる皆この地域の人だからどこかで？がっている。さっきのお婆さんのように浦女の卒業生もいる。割と近所の家のおじいさんもいる。漁業組合の人もいる。ここの場において繋がり無い人はいないのだ。

そんな元気な皆に囲まれてパフォーマー達の演目は始まった。

大道芸の人は分かり易い超絶テクニクで拍手を誘い、熟年の落語家は静と動の空気の読み方、動かし方が流星の一言で私達を引き込んだ。

そして私の出番。ここに居る人に受け入れられるのか？楽しませることは出来るのだろうか？

仲間内で好きに鳴らすのとは違う、誰かのための音楽。大舞台は花火大会の時以来だ。あの時はA q o u r sのみんなも、吹奏楽部の皆もいた。けれど今日は仲間が居ない。

少しの緊張、少しの不安。けれど、ステージに立って見ていてくれる人達の姿を見るとその感情に蓋をすることができる。思考のシン

プル化。がんばろうと。

「—————」

曲は『Sing in the Rain』。ハリウッドが誇る名作映画『雨に唄えば』の劇中で披露されたシーンの再現だ。

自由に、伸びやかに、楽しそうに歌うその様は多くの人を魅了し、未だにそのシーンはハリウッド史上最高にロマンティックなシーンであると名高い。

かく言う私もタップダンスの練習の題材として最初に目指したのはこのシーンだ。

タップダンス、というワードに必ずついて回る程に有名であり、それだけ説得力の詰まったシーンなのだ。

流石に室内だから雨は降らないけれど、小道具として傘も持つてきた。ハーモニカを片手で吹くのは大変だけれど、ある程度タップダンスが出来るようになってからは幾度も打ち鳴らした楽曲だ。音楽とダンスにこれ程身を預けられる曲もそうは無い。

気付けばリズムに合わせて手拍子が聞こえるようになり、私は更に楽しく音楽に没頭した。

やはり、私の音楽は誰かのためより私のためなのだろう。でなければここで一番楽しんでるのが私であるはずがないのだから。

体が浮くような熱に身を浸し、約4分もの演技を終える。そう、音楽とダンスが融合しているのだからそれは演奏と呼ぶより演技と呼ぶのが相応しいだろうから。

「懐かしいね」

「ああ。モテたくてタップダンスをしようと思ったのはこの映画だった」

音楽を聴けばそれが自分の中で流行っていた時、自分がどんな事をしている、どんな事を思っていたのか思い出す。だから音楽とは人生に寄り添うもの、思い出とワンセットのものであるというのが、私の音楽論だ。

「ありがとうございます。一つの音楽に宿る思いは人それぞれですが、積み重ねた思い出を少しでも呼び起こせればと思います。短い時

間ですがどうぞ楽しんで下さい」

次の楽曲はThe Beatles、いやビートルズの「Help！」。音楽の授業ですら扱われる程音楽業界に影響を与えたモンスターバンドの楽曲だ。

上はお父さん世代や、更にその上の世代、下は私達まで幅広く認知され、キャッチーなメロディーは一度耳にすれば覚えてしまうほどだ。

この楽曲はテレビ番組「なんでも鑑定団」で使われているのがお茶の間ではお馴染みとなっている。

今日の選曲は結構メジャーどころが集まったけれど、これは聖良さんがリストアップし、私が剪定し、犬が選んだのだから面白い。

やはりと言うべきかこの楽曲の認知度は高く、私がハーモニカを吹いているから変わりにと歌ってくれる人が多い。英語の歌詞だけでもしつかり覚えている人が多く、その流行の凄さを改めて思い知る。

歌詞とは不思議なもので、意識せずとも一度そういうものだと思解すると、自然と口ずさめるのだ。

老人達の後押しを受け、私はまた楽しい時間を過ごせた。楽しい時間を共有できた。

「今日はありがとうございました」

「ありがとう」

ライブ、というの大袈裟だけどそういう会場に行くと、演者も客も感謝を口にする。音楽を聴くとそれを届けてくれた人にお礼を言いたくなるのだ。だからここでも「ありがとう」と言ってくれる人がいた。本当はこっちがありがとうなのに。

「星ちゃんのオリジナルはやらないのかい？」

「私一人ではちよつと。楽器と歌い手が足りません」

そっか、と残念に思っつて貰える程度には私の演奏を楽しんで貰えたようだ。

「アンっ！」

え、と思うと紐を繋がれたまま飼い主から逃走したのか見覚えのあ

る 小型犬が宴会スペースに迷い込んできた。

「こら、ライラプス、待ちなさい！」

「ノクターンよ。ごめんなさい」

「何やってるんですか、善子ちゃん、梨子先輩」

幸い小型犬は私の方に駆け寄ってくれたから紐を掴んで大騒ぎにはならなかった。

「お友達かい？」

「ええ。なら、楽器と歌い手、任せられるんじゃないかな？」

え、ええ!?!と思わず二度聴きしてしまつたけれど、おじいさんは早速とばかりに梨子先輩と善子ちゃんに声を掛け、あれよあれよとピアノまで用意された。というか、ピアノは初めからある道具らしい。

「えつと、良いの?」

「ここまでお膳立てされたら断るのが野暮です。それより梨子先輩、善子ちゃんは？」

「何だかんだで星のサイトから動画は視聴してたから耳にタコができてるし、歌ならなんとか」

「私も楽曲の構成に興味あつてコピーさせてもらつたからなんとか」
普段はそんな事少しも言わないくせに本当にちゃっかりしている。

ボーカルが善子ちゃん、ピアノが梨子先輩、そしてハーモニカとタップダンスが私と少し変則な編成だけれども、一度滾つてしまつた血はそうそう冷えそうに無い。冷静なんかでいられる筈が無いのだ。

「では私の、いや、ジェミニのアカリの曲、聴いて下さい。『Strange Journey』」

「これだけあればいいんだよ」

重いものはいらないんだよ

確かに言えることは一つ

楽しむこと ただそれだけ」

いつかの休日にとこまで行けるか試すというただそれだけの理由で始発から終電まで電車で揺られた時に作つた曲だ。

「知らないこと一つ見付けたら」

知つてることと?がって

新しい未知と道を 教えてくれたんだよ”

けれど、その思い出を二人は知らない。これは私と穹の思い出だからだ。それでも、音楽を聴くと自然とその時のことを思い出すのを止められない。

”どこまでなんて 知らなくても

どこにだって行ける気分

だって たぶん きつと そう

どこだって楽しいはあるから”

音楽とは人生に寄り添うもの。思い出と音楽はワンセット。なのはやっぱりその通りだな、と感傷に浸りながら、けれど今、私はたぶん笑っている。私の音楽が形は違えど誰かに聴いて貰えているのだから。

”歩こう そして見付けよう

知らない先の知らないこと

走ろう そして見出そう

躓いても 笑えること”

やっぱり私は音楽が好きだ。それを共有することが好きだ。だからまたいつか、穹とも一緒にされたらいいと、そう思った。

第二百二十五話

唐突の別れは心にシコリが残るものだ。そんなのは分かっているけれど、こう目の前でそれを見ると私は自分の行ったことが穹にどれだけ衝撃を与えたのかと改めて考えさせられる。

「ライラプス」

「ノクターンよ」

「いや、アンコだって」

こないだの老人達で梨子先輩達が闖入した際の零れ話だ。

どうも老人達の出席者の中に犬の飼い主の親類であるおじいさんがいたことで、ライラプス・ノクターンあらためアンコが無事に飼い主の元に帰ることになった。

飼い主は幼稚園児くらいの女の子で凄く喜んでいたからきつとこれからもアンコを大切にし、一緒に育てていくのだろう。

引き渡しも済んで、私達は市内のコンビニの軒下でアイスを頬張っているのだが、どうにもアンニユイ感覚が抜けない二人は先程から溜息ばかり吐いている。

「なんでそんなに入れ込んでるの？」

「なんでって・・・」

梨子先輩は言葉を切り、己の掌を見詰める。

そこはアンコを返す時にお別れの挨拶だと言うようにアンコが舐めた所だ。

「私が犬苦手なのは知ってるでしょ」

それはもう、千歌先輩の家に行くたびに飼い犬から距離を取っていたくらいだからみんな周知の事実だ。何を今更とも思ったけど、梨子先輩は構わず話を続けた。

「それって何にも根拠が無くて、気付いたら苦手だったんだ。小っちゃい時に噛まれたわけでも無いし、アレルギーがあるわけでも無い。ホント不思議なんだけど、気付いたら怖くなってた」

梨子先輩の食わず嫌いは私にも覚えがある。

やってもいないのに苦手だと思いついていたこと。文字通りだが、

食べたことも無いのに嫌いだと意識していたことはきつと誰にだつてあつて、その始まりを理解することは当人ですら出来ないことなのだろう。

「犬が苦手だつて生きていけるし、特別苦手意識を消す必要はないんだつて、そう思つてた。でも、知らないことを知ること。それで景色は凄く広がつて遠くまで見通せる。そんな風に思えるようになって、苦手意識を改善しようと思えるようになったの」

ピアノ以外に目を向けなかった頃と今、梨子先輩は沼津に来て明らかに意識が、気を持ちようが変わつたという。

「そんな時に急に犬を預かれなんてくるんだもんびつくりしちゃつたよ」

「運命よ。そう、運命」

梨子先輩に善子ちゃんは芝居がかった口調で相槌を打ち、だけど自分自身に言い聞かせるかのように言葉を続ける。

「知つてるでしょ、私に運が無いこと」

クジを引けばハズレ、ジャンケンをすれば負け、サイコロを振れば狙いは出ず、ソシヤゲのガチャではピックアップですら外す。

ゲーム『ダンガンロンパ』的な表現をするならば超高校級の不運というのが善子ちゃんだ。

「いつもの不運の中に出逢つたのがライラプス」

アンコだつて、と内心で思いながらも口に出すのを堪えて私は善子ちゃんの話に耳を傾けた。

「出逢いつてそれそのものは運とか不運とかとは関係がないでしょ？ その出逢つた結果、その先に待つことは自分達次第で、良縁にも悪縁にもなる。だから出逢つたことは運、不運じゃなくて運命なの」

善子ちゃんの話は難しい。それというのも彼女は頭が良く、そして独自の世界観があるため言語化しても正確にはこちらに伝わらない。また、全部が全部言語化される訳では無いから余計に伝わらないのだ。そんな彼女の言動は聴く人が聴けば厨二と揶揄されるだろう。けど、それは伝えての伝達不足と受け手の理解不足によるすれ違いなのだと思う。

だから善子ちゃんの言う出逢いとは即ち運命であるということについて良く考えなければならぬ。

「出逢いにどんな意味があるか？それを決めるのは自分ってこと？」

「運は自分ではどうにも出来ない概念。逆に言えば自分でどうにか出来ることは運ではない」

分かったような、分からないような、だ。

「とにかく、少なくとも私はライラプスとの出逢いを運命と感じたの」

「出逢いは運・不運とは関係が無い、か」

梨子先輩は相変わらずじつと掌を見詰めてそう呟いた。

「そうなのかもね」

梨子先輩も善子ちゃんも、そして私も多分思い当たる節がある。それは浦女に入ってからの出逢いのことだ。

特に私なんかは劇的な出逢いなんてのは無かった。だけど、大きく私を揺るがすような出来事に？があった。出逢えて良かった、と思えた。

「だから梨子、確かめに行くわよ」

「え？」

「運命を感じる、いや感じたいと思う気持ちがあるなら確かめないと」

そう言って善子ちゃんは啞えていたアイスクリームの棒（当然ながらハズレ）をゴミ箱に捨てて、スマホを取り出すとアンコの飼い主の住所から地図を検索し、自宅を割り出した。

「ここからそんなに離れていないわ」

「どうするつもり？」

「また運命があるなら、ライラプスは呼び掛けに応じる」

「連れ出すの？」

その質問に善子ちゃんは不敵に笑うだけで返事をしなかった。

「気が向いたら来ることをこの墮天使ヨハネが許そう」

そう言って善子ちゃんは颯爽とアンコの家を目指し立ち去った。

「ちよっと私も行ってくる。善子ちゃん一人じゃ心配だし」

「お目付役ですね。どうぞー」

行ってらっしゃーい、とヒラヒラと手を振り私もまた啞えていたア

アイスクリームの棒を口から出した。

その棒には見事に“アタリ”と印字されていて、何だか自分か良い行いをしたかのようなそんな感覚になった。

「お兄さん、アタリ出たんでもう一本ください」

唾液に濡れた棒を人に渡すのはちよつと躊躇われたけれど、JKの採れたての唾液だ。寧ろご褒美だろうと敢えて羞恥心を無視し、もう一本アイスクリームを貰った。

そんな不謹慎なことを考えたからだろう。もう一本は見事に外れた。

第二百二十六話

「今日ね、あの後善子ちゃんとアッコの所までいったでしょ」
「どうでした？無事に捕獲できました？」

「それじゃ誘拐犯じゃない。全然無事じゃないでしょそれ！まあ、そこそと待ち伏せはしてたんだけど」

「ストーカーさんですか？あ、こゝろ犯罪的な言葉のあとに『さん』をつける当事者は俄然やる気になるらしいですよ」

「そんなんじゃないよ、もう。でも、インターホン鳴らすのもちよつと違うでしょ？私達の線にまた交わるところがあるならって」

「出てきたんですか？」

「うん。それでね、呼び掛けたりはしてないんだけどこつちに振り向いてくれたんだーって、言ってみるとこれだけ。意味分らないでしょ？」

「はい。たぶんそれは梨子先輩と善子ちゃんだけの世界なんだと思います」

電話越しに話しをする梨子先輩からは妙にスッキリとした印象を受ける。

きつと梨子先輩の言う『これだけ』がなにものにも代え難い体験だったのだろう。それは当事者にしか分からないし、分かった風に同意することを梨子先輩が求めている訳では無い。

伝えたいけど伝わらない感動、それでも誰かに話したいもどかしい微熱とでも言う気持ちだけは何となく分かるから、私はただそのあつたという事実にも同意した。

「それでね、なんか触れる気がしてさっき帰ってきた時に千歌ちゃん家に寄って、そしたらしいたけに触れたの」

「遂に苦手克服ですね」

「今までの反動なのかな？今凄くハマリそう」

梨子先輩は没入型のハマリ方をするタイプだからちよつと大丈夫かなとも思いつつ、梨子先輩が犬を飼うことになったら、それはどんな出逢い、運命をもたらすのか楽しみになった。

露することの楽しさを再確認するためには必要なことだったのだろうと、後付みただけけどそう思った。

「実はあれから曲作り、少しだけ進んだんです」

「そっか。うん。完成するのを楽しみにしてる」

じゃあね、と通話を終え、私はベッドにゴロ寝した。

目を閉じれば心に響く音がある程度の法則性を持つように感じられる。新しい、私の音が聞こえてきた気がする。それは大きなヒントだった。

「そうだ。聖良さんにもお礼しなきゃ」

放り投げたスマホを再び取り、聖良さん連絡すると、聖良さんはワシントンで出てくれた。

「はい。茶房 菊いず・・・間違えました。鹿角です」

「すみません。仕事中でしたか？」

鹿角姉妹の実家は古民家カフェ風のお店を経営していて、二人は看板娘としてお手伝いしているらしい。いや、看板娘ってのは私の勝手な想像だけれども。

「今は理亞の持ち時間ですから大丈夫です。それより上手くいきましたか？」

「はい、無事に。ありがとうございます」

「どう致しまして。私も良い息抜きになりました」

聖良さんはSaint Snowの楽曲の作詞、作曲を一手に行っているためラブライブの予選前などは頭を相当に酷使するのだ。予備予選が終わった後だったからこそ今回手伝ってくれたのだろう。

「次の予選。頑張ってください」

「本戦に進んだら東京でまたお会いしましょう」

「楽しみにしてます」

「ところでAqoursのみなさんもそろそろ予選の準備をしていると思いますが、大丈夫ですか？なんだか千歌さん、悩んでたみたいですが」

「千歌先輩が？」

「やっぱりスクールアイドルの宿命というか、生徒数の少なさは小さ

くないハンデですから。それを覆すにはどうするかって」

スクールアイドルの世界はパフォーマンスのレベルだけが勝敗を決する訳では無い。アイドルコンテンツであるため人気投票の側面もまた存在する。そして人気投票であるならば自分の所属する学校のスクールアイドル以上に認知しているアイドルはいないのだ。その差は馬鹿に出来ない。

「前は超えられなかった壁ですしね」

「私から言える事は千歌さんに伝えました。だから、後は側にいる貴方達が力になってください」

本大会に進んだらぶつかり合うことになるけれど、それまでは良きライバル。切磋琢磨する関係であるというそのスタンスは清々しい。

ここ数日は自分の活動が忙しかったため、A q o u r s の活動はあまり追えていなかった。

明日は鞠莉さんとダイヤさんに報告がてらみんなと練習しよう、そう思った。

第二百二十七話

天気は快晴、気分は爽快、体調は快調と三拍子揃った練習日和。

今日のA q u o u r sの練習メニューは基礎トレ。学校周辺での練習に終始するそうで、放課後は着替えてから屋上に集合となった。

私はみんなの部室にお邪魔して練習着に着替えながら鞠莉さんとダイヤさんに老人会でのこの結果報告をした。

「Thank you. 私の所にも感謝の連絡が何件か入ってるわ。ジジババに好評だったみたいじゃない」

「こちらも労いと応援の連絡を受けています。星さんに頼んで正解でした」

と概ね好評だったようで一安心だった。

「星さん、自分の曲を披露したとか？」

「・・・はい」

当然ながらどんな様子だったのかも耳に入っているようで、私がジエミニのアカリの楽曲を披露したことも知っていた。

「後悔はありません。それに折角作った楽曲ですから。そのまま誰の耳にも入らないとそれこそ罰当たりです」

もちろん穹に無断で、他の誰かと楽曲を披露したことについては後ろめたさもある。けれど、この機会があつたお陰で少しだけ私は前進できた気がするのだ。

だからこそ心配なこともある。それは穹が私とのことを気遣いすぎて生み出した楽曲を楽しめていないのではないかということだ。

かく言う私が沼津に来てからしばらく自分達の曲を封印していたのだから。

「そう。ならまた聴ける機会もあるってことね」

「それこそ・・・いや」

穹ともう一度、と言おうとして言葉を句切る。

私にそれを言う資格があるのかと脳裏に過ぎったのだ。

「言いなさいよ」

「そうだよ。言葉にすると願いつて叶うんだよ？」

ぶつきらぼうに背中を圧す善子ちゃんと口に出して伝えることの大切さを身をもって知っている果南さんがそう私を促した。

「・・・また、穹と私達の曲を披露したいです」

だからこそ観念したというか、私は私を誤魔化すことなく素直な言葉を言えた。

「凄いなね星ちゃん。ちゃんと前向いてる。私達も負けてられないね」

なんてルビィちゃんは関心したように言うけれど、全然そんなことはないのだ。本当に凄いのはA q o u r s のみんなの方で、私はそれに励まされて精一杯の強がりをしているだけなのだ。負けてられないのは本当は私の方なのだ。

「次はラブライブ東海地区予選」

「今更隠し事も何もないけど、東海地区予選の夜が入学希望者の応募の締め切り」

「事実上、この地区予選が私達に出来るアピールの最後の機会。最低でも東海地区予選通過」

「つまり東海地区予選の優勝」

今更ながらその言葉は重くのしかかる。

前回大会は絶対に負けない、というより精一杯輝く、という方向性で出場だった。それが悪い訳では無い。それに勝ち方は勝者の数だけあるのだ。A q o u r s の前回の心の持ちようで勝ち進んだグループも中にはいるだろう。

しかし、A q o u r s は前回それで前に進めなかった。だから前と同じではたぶんいけないのだ。

「こないだね。私S a i n t S n o w の聖良さんと電話で話をしたんだ。やっぱり聖良さんもいつかダイヤさんが話してたことと同じように言ってた。今のスクールアイドルはパフォーマンスのレベルだけで言えば先駆者達に引けを取らないって」

アーティスティックさで世を魅了したA—R I S E、見る人の多くを楽しませたμ S、その他多くのスクールアイドル達の活躍によりラブライブは実力主義が進む結果となった。先駆者達の意図はどうあれそうなってしまった。

傍目から見てAqoursのパフォーマンスはもう一線級だ。ラブライブ決勝に勝ち進むグループと遜色は無いだろう。

「そのなかでどうすれば良いか聖良さんも迷ってた。ラブライブを今の形にした人にまだ並び立ってないって。手の届かない光があるって」

「光・・・」

「私達、自分達の道を自由に進もうって、私達の輝きを見付けようってこれまでやってきたけど、まだそこに答えをだせてない。だから、私達Aqours“らしさ”を形にしなきゃいけないと思うんだ」

その千歌先輩の言葉を聴いて私は真つ先に思い浮かんだAqoursらしさは千歌先輩だった。

ぐいぐいと周りを巻き込み、でもとてもよく人を見ていて、ペースを合わせるAqoursの舵取り。今のAqoursの発起人。この人が居なければAqoursは無かったのだから。

そして、ダイヤさんや鞠莉さんもまた同じ思いがあったのか、二人は顔を見合わせて言った。

「このタイミングで千歌さんからこんな話があるなんて運命ですわあれ、話しますわね」

そう言ってダイヤさんは果南さんに一言確認を取り話を続けた。

「二年前、私達三人がラブライブ決勝に進むために作ったフォーメーションがありますの」

ダイヤさん語ったのは、嘗て三人の関係に溝を作る要因になった事件の切っ掛けとなったものだった。

この高難易度のダンスフォーメーションで鞠莉さんは足に怪我をし、それを見た果南さんが強引にスクールアイドル活動に終止符を打った。

だからだろう。ダイヤさんが話している間、果南さんはずっと浮かさない顔をしていたし、消極的には反対しているようでした。

「これはセンターに掛かる負担もみんなに掛かる負担も大きい。今そこまで無理する必要があるの？」

高いパフォーマンスを求めることが勝ち上がることと直結しない。

そう話していたばかりだろうと果南さんは言う。けれど、私は違くと、高いパフォーマンスの部分ではないのだと思う。

「果南さん達三人だけのAqoursの時にやろうとしたこと。それを今のAqoursがやるってことが大切なんじゃないですか？」

その物語がAqoursらしさに？がるのではないか？

「星はやらないからそんなことを言えるんだよ」

果南さんは私を睨むようにそう言い捨てる。けれど、私もまた今回は忌憚のない意見を言おうと思う。どうにも果南さんは過去の体験から消極的になつているように感じられる。

私がそうする必要は無いのかも知れないけれど、少しでも果南さんがいつもの感じになれるならと私も負けずに言う。

「そうかもしれないです。でも、だから無責任に言つてやりますよ。少なくとも私はそのフォーメーションを見たい」

Aqoursの発起人で、今回の曲のセンターを務める千歌先輩が、先代Aqoursから引き継いだフォーメーションを引っ張る。それはとても——

「それが今のAqoursらしいと、私は思いますから」

「星……」

「果南ちゃん。今そこまでしなくて何時するの？」

千歌先輩は果南さんの手を取つて懇願するとも違う、真に問い掛けるようにそう口にした。

「千歌……」

学校の存続を賭け、最後のチャンスに全力を注ぐ時は今しかない。それを分かっているから果南さんは最終的に折れた。

「もし危ないと思ったら、私はラブライブを棄権してでも止めるからね」

果南さんはぶつきらばうにそう宣言するが、気付いているのだろうか？その一言は、以前の失敗を繰り返さないとする果南さんの確かな前進だと言うことに。

「どれどれ——うわー！」

そう言つて千歌先輩に手渡されたヨレヨレのノートをみんなで見
て、みんな若干引いていた。

確かにこれは一筋縄では出来ないフォーメーションであると。

第二百二十八話

果南さんから、いや、旧Aqoursの三人から伝えられたフォーメーション「Aqours Wave」の練習は、その当日から始まった。

これは個人のスキルと全体の動きが連動する高度なフォーメーションで、最初は全体の動きを合わせる以前に自分のスキルを磨く必要があった。

基礎トレを終え、早速体育館に行った私達は分厚いマットを用意しながら各々頭の中で動きを想像していた。

「ちなみに星ちゃんは？」

「できませんよ。体操選手じゃありませんし」

「だよね」

ちよつと不安そうに笑う千歌先輩は今回の目玉だ。

チア的な連動した動きの中でサビ前の大一番を飾る千歌先輩の大技があつてこそそのフォーメーション。けれど、その大技こそが最難関で素人がおいそれと手を出して良い分野から一步外に出ている。果南さんの懸念するように下手をすれば怪我たつてする。

「ただ、出来るようになる練習の仕方は聴いたことがあります」

「どうやるの？」

「恐怖心から来る体の硬直を無くす練習からするみたいです」

怪我をする可能性のある動きをいきなりやれと言われて出来る奴は頭がおかしい。だから、どんな分野でも動き以前の心構えの練習から始まる。

スキージャンプの選手が小さなコブ山から跳ぶのを始めたり、高飛び込みの選手が競泳と同じ様な普通の高さからの飛び込みから練習を始めたりするように、まずは心と体を馴れさせるのだ。

「今回の千歌先輩の場合はベッドに背中からダイブするような、そんな練習からですね」

「背中から・・・」

「そうです。無理して回ろうとせずにまず跳ぶことそのものを覚える

んです」

他にも側転の入りに捻りを入れるところから初めて徐々にシフトする、という練習方法もあるみたいだが、そちらは変なクセが付きやすいようだ。

「さて、準備完了」

どうぞ、とみんなが見据える中、千歌先輩は――

ざっぱーん、ともう何度目になるか分からない水の音を聴きながら私はスマホの録画を止める。

学校での練習を終え、千歌先輩が思い詰めた顔をしていたことから私や曜先輩、梨子先輩が千歌先輩と一緒に帰って見れば案の定、千歌先輩は自宅に帰ると40秒で水着に着替えて浜辺に出てきた。

「海だったらもつと上手く飛び込めるかも」

そう言っただけから紫に変色し始めた海に背面から飛び込むのを何往復もしたのだ。

別に今日、明日が本番という訳では無いのだけれど、千歌先輩は取り憑かれたようにひたすら練習をする。

その様を見て、きつと旧Aqours時代の鞠莉さんも同じようにハードな練習をしていたのではないかと、ふと思った。

「無理しそうなら私達で止めよう」

曜先輩がそう言うように梨子先輩も私も、無理だけはさせまいと決めたけれど、練習そのものを止めようとは思わなかった。

「曜先輩は――」

「やらないよ。きつと果南ちゃんも。これは千歌ちゃんじゃなきゃ本当の意味で完成しないと思うから」

運動能力で言えば曜先輩か果南さんが行うべき大技。多分二人なら容易でないにせよ練習をすれば出来るようになるだろう。けれど、

それでは意味がないのだ、きつと。

自称「普通怪獣」の千歌先輩がやるからこそ、ただの片田舎のスクールアイドルから脱却するのだ。何より今のAqoursを形作る物語は全てとは言わないけれど千歌先輩あつてのものだ。だからこそ千歌先輩がセンターとして、みんなを輝かせることでAqoursらしさを獲得できる。それが私達の共通認識だ。

ただ一つ、私は懸念していることがあった。それは千歌先輩がその事に無自覚であるかもしれないということだ。

「今のどうだった？」

息を整えながら、手ですぶ濡れの体から水滴を払い、千歌先輩が駆け寄ってくる。

私は録画したばかりの映像を再生して千歌先輩に見せる。

「あまり変わってなさそうかな？」

「でも、思い切りは良くなってそうですよ？」

最初学校でマットに飛び込む練習をしていた時は飛び込むどころかへっぴり腰になりすぎて後転していた。今ではへっぴり腰ながらも後ろに倒れることは出来ている。

「やっぱり私、まだ跳べてないんだ」

「はい。でも今は意識改革の作業を始めたばかりですからこんなもんかと」

私の言葉に頷きながらも釈然としない顔をする千歌先輩は、だが、もう間もなく完全に日が暮れてしまうと気付き慌てた様子で手をパッと合わせた。

「ごめん！付き合わせちゃった」

「そろそろお開きですね」

「勝手知ったる海の浅瀬と言っても真っ暗な夜は流石に危ないしね」

「じゃあ千歌ちゃん。また明日」

じゃ、と曜先輩はそれとなく私の腕を引き、私達二人は連れだって砂浜を後にした。

「これ以上長居したら千歌ちゃんに余計なこと考えさせちゃうからね」

曜先輩の家は千歌先輩の家からそれなりに遠くにある。バスの無いこの時間帯になると徒歩での帰宅を余儀なくされるため、長居したらそれこそ千歌先輩の家の人に車を出して貰うとか、そんな結末になるだろう。

「ダイヤさんからフォーメーションの話が合ったとき、星ちゃん賛成してくれたじゃん?」

「はい。流石にここまでのことを要求されるとは思ってもいなかったですが」

「そうだね。でもね、その時思ってたんだ。千歌ちゃんに乗り越えて貰わないとって。漠然とだけどね」

「そうですね。やっぱり曜先輩にとっても」

「うん。A q o u r s は千歌ちゃんが居ないとね」

幼馴染みとして千歌先輩の一番側に居た曜先輩にとつてその存在は大きいのだろう。

「見守るしかないってのはもどかしいですね」

「そうだね。でもね、誰かと何かするってことってこういうことなんじゃないかな」

千歌先輩が挫けそうになったら励ます。間違えそうになったら道を正す。無茶しそうなら止める。それを出来るのは一緒に同じ道を探す仲間だけなのだ。曜先輩はただの幼馴染みというだけではなく、千歌先輩と同じ道を探す仲間であるということが嬉しいのだと言っている気がした。

私が穹と組んでいた頃、私は穹をどういう風に思っていたか、ふと自問した。

同じ道を探す仲間であった。そんな時期は確実にあった。けれど、私が引越しを隠すようになってから、私が探していた道は方向性を変えてしまったのかもしれない。

「そうですね。一緒に同じ景色を見たいって、そういうの大切ですよね」

それが出来たとき、本当の意味で私は穹と同じユニットとして立てるのだろう。

「そうだ。折角だし」

「リクエストあります?」

「いいの?なんか独り占めなんて凄いVIPじゃん」

私はポケットからハーモニカを取り出した。夜ではあるけれど、海岸線だ。それ程民家は多くないから音はそれほど気にしなくていいだろう。

「じゃあSunset Wishのモザイクカケラで」

「染みますね。了解」

コードギアスのタイアップとして使われたこの曲は苦しいくらいの高音が詞と相俟ってせつなさを呼び起こす。積み重ねたものを振り返る曲だ。

今のAours、そして私。積み重ねられるほど既に密度濃く時間を過ごしていることに曲と共に浮かぶ思い出で改めて気付かされる。

私達が歩んできたこれまでから、これからどんな絵が出来上がるのだろうか?私達は二人でそんな事を考えながら海岸線を歩き続けた。

第二百二十九話

千歌先輩の練習は難航を極めた。当然だ。人によっては何かしらの分野において早熟な人も中にはいる。ちよつと練習をしただけでコツを掴んでしまう人もいる。けれど、そういう器用さがないからこそ千歌先輩はこれまでスクールアイドル以外に夢中になれるものが無かつたのだと思う。

そんな人が壁にぶち当たっている様を見ると、無闇矢鱈に応援することも出来なかつた。

「やっぱりこうなるか」

全体練習の後、日も暮れそうな空の下、自宅前の浜辺で個人練習に勤しむ千歌先輩を果南さんは物陰からそつと見守りながらそう呟いた。

今日たまたま早めに帰ろうとしたからこそ自販機の影に身を潜めた果南さんに気付いたけれど、このフォーメーションをやることになつてから、きつと果南さんはこれまでずつとそうしていたのだろう。

嘗て自分がやるはずだったフォーメーション。それを千歌先輩に引き継ぐことにどんな想いを抱いているのか、私には想像も出来ない。そして、それを聴くほど私も野暮ではないつもりだ。

「ああ、今の惜しい」

「うん。千歌はよく頑張つてる。何をやっても長続きしなかつた。いや、続けられなかつた千歌がホント・・・よく頑張つてるんだ」

例えば幼馴染みというポジションとして同学年ということもあり曜先輩が目立つけれど、果南さんもまた千歌先輩の幼馴染みなのだ。その言葉にはずつと見てきたからこそその実感が籠もっていた。

「そういえば、千歌って昔は結構臆病なところがあつたんだよ」

苦笑いしながら果南さんは言う。

結構人見知りして、いつも果南さんの背中を追い掛けていた女の子。それが幼少期の千歌先輩だつたのだという。

けれど、何時しか物怖じしない、今の千歌先輩になつていたらしい。

どうしてそうなったのかは果南さんも心当たりが無いみたいだけれど、きつと果南さんに影響されたのではないかと思う。

「そうそう、何時だったか千歌、海に入るのが怖いって、あの棧橋の上でしゃがみ込んだことがあってさ。信じられないでしょ？今は自分から飛び込んだじゃうくらいなのに」

昔語りする果南さんは練習を続ける千歌先輩から目を逸らすことなく苦笑いしていた。

本当に果南さんが語るようなか弱い女の子から随分と変わったもののだ。そりや苦笑いもしたくなる。

「でも、その分色んな事に出して失敗して、平気なフリをして、また新しいことに挑戦して、失敗して。その繰り返し」

果南さんの千歌先輩像とは何なのか、それが分かった気がする。

挑戦と失敗。届くことの無い成功に手を伸ばし続ける永遠の挑戦者。おそらくはそんな人物像なのだろう。

心配、諦念、悲哀、そんな感情が入り交じると同時に淡い希望を信じたい。そんな気持ちで果南さんもまた千歌先輩にどう声を掛けて良いのか分からない。だからなんとなく私に話をしてしまったのだろう。

「千歌先輩がスクールアイドルをやっているのは、これまでの繰り返しと同じだと思います？」

「どうだろうか？ことが大きくなりすぎてもう分からない。ねえ？逆に聴くけど、私達、ラブライブで勝てるって、学校を救えると思う？」

気付けばそう、ラブライブで勝つことと学校を救うことは同義になっていた。それしか選択肢が無いのだから仕方ないとは言え、その在り方はスクールアイドルとしての在り方としては異質だ。そして、それがより成功という結果を困難なものにしているのは否めない。

「わかりませんよ。わかりません。千歌先輩だってそんなの分からないって分かっててやってる筈です。ねえ果南さん。もし今練習しているのが例えばルビイちゃんなら、こんな風に影からこそそと見守ります？失敗するのではないかって疑います？」

先のことなんて誰にも分からない。それは千歌先輩だって果南さんだって、みんな同じだ。

「それは・・・」

「どうなのだろうか、と果南さんは言葉を続けられなかった。気付いたのだろう、千歌先輩だからこそ果南さんは気にし「過ぎてる」ということに。」

「果南さん。言い方悪いですけど、千歌先輩のこと、見くびってませんか？」

千歌先輩との付き合いはそう長くは無い。けれど、これまで見てきた千歌先輩は、果南さんが思っている千歌先輩像とは逆の千歌先輩像を私の中に造るだけのことをしていた。

「できるかな？そう問われたらどう返すのか？果南さんはどう返すのです？」

お互いに掛けている色眼鏡は違うけれど、だからこそ視点が増えれば見えるものだって変わるのだ。

果南さんはその気付きがあつたからなのか、それとも期限を既に決めていたからなのかは分からないけれど、物陰に隠れるのを止め砂浜へと歩みを進めた。

「千歌」

大技を失敗して天を仰ぎ見る千歌先輩に向け、果南さんは伝える。

「約束して。明日の朝までに出来なかったら、諦めるって」

それは聴くものが聴けば心ない最後通告。けれど、私は知っている。以前、曜先輩が言っていた。千歌先輩は止めるかと問われれば絶対に止めないと、力を発揮するのだと。

知っているからこそ、信じているからこそ言えること。穹との関係において、私が持ち合わせていなかったことだ。

私は物陰に隠れたまま、二人の前に顔を出すことなく帰ることにした。

二人のこの関係性がとても羨ましくて、嫉妬しそうだったから。

第三百三十話

限られた時間の中で必死に足掻く。一年前の私は正にそんな気でいた。いや、それ事態は間違いないくそうだったのだろう。けれど、私は足掻き方を決定的に間違えた。誰に相談するでもなく、一人では越えられない壁に一人で挑み続けた。

私は穹に心を開いていたのだろうか、先程の果南さんと千歌先輩のやり取りを見て、ふと自分に疑念を抱いた。

これまで深く考えてこなかったけれど、今一度考えなければならぬ。私は何故、穹に本音を話せなかったのかを。

まだ果南さん達の居る砂浜からそう離れていないけれど、どうせこんな中途半端な時間に、こんな中途半端な場所を好き好んで通る人はそうは居ない。

私は海岸線のブロック塀に腰を下ろし、空との境界が曖昧になった海を眺めながら物思いに耽った。

初めてこの町に来て海を見たとき、その存在感の大きさに一々心を騒がせていたけれど、今は少し変わった。相変わらず圧倒されるけれど、そのお陰か余計な思考を吹き飛ばしてくれるようになった。シンブル化された頭で私は沢山時間を使つて考えた。

これまで私は穹に話をしなかったのは私自身が自分のことを信じていなかったからと考えて、そこで思考停止していた。けれど、私はそこから先を考えなければならぬ。自分自身のことをどう思おうとそれは取り合えず棚に上げ、穹のことをどう想っていたのかを。

ひよんな事から一緒に音楽をやることになって、切磋琢磨しながら共同作業をして一つのものを作り上げる。それは楽しかった。その感情に嘘は無い。一緒に沢山の時間を過ごしたこと、それは全て掛け替えのない時間だったと確信を持って言える。

こつちに来てから他の人と濃密な時間を過ごすことでそれをより自覚した。それと同時に私は穹に対して感じていたことも何となく分かるようになった。ただ、これまではそれを見ないフリをしていた。

そう。私は穹に嫉妬していたのかもしれない。

なんでも出来るようになってしまおう穹。なんでも興味をもって飛び込める穹。

それと比べ、器用なフリをする私。本当は出来ないことも多いのに、出来ないことはとつと諦めて出来ることだけを伸ばす私。

隣に居ることで私の小ささを自覚させられる穹に私はきつとそんな感情を抱いていたのだと思う。

そう思うと無意識に千歌先輩に対し親近感を覚えていたのはどこか立ち位置が私に似ているからなのかもしれない。

上には運動神経抜群の体力おぼけである果南さん。同い年には器用に何でもこなせる曜先輩という二人の幼なじみがいる。千歌先輩はどこか自分に引け目を感じていただろうことは想像に難くない。

でも、千歌先輩は何故引け目を感じていながらずつと一緒に居るのだろうか？

私と穹の付き合いとは比べものにならない程の時間を過ごして、劣等感を抱いて、それでどうして一緒に居られるのだろうか？

「あれ？星ちゃん？」

「……また3ケツして。捕まるよ？」

「女の子がケツとか言っちゃ駄目だと思うな」

海は穏やかに波を起て、空は見守るように星を煌めかせゆつくり時間を掛けて軌跡を描いていた。答えの出ないまま、どれくらい時間それを眺めていたのだろうか？

突然掛けられた声に振り返ると、何時しか見た光景があった。

自転車に三人乗리するという道交法的に完全にブラック・オブ・ブラックなことをしているAquoursが1年生組の三人が通りかかりに声を掛けてきた。

「何でまたここに？」

「本番は明日、というか今日なのよ。千歌が習得しているか確認に行くのー」

「とか言っつて、善子ちゃんさつきまでオラ達に、絶対に大丈夫に決まっつてるって力説してたずら」

「ずーらーまーるー……って、ヨ・ハ・ネよ！」

そう。明日はライブ予選の日。

千歌先輩の大技以外のフォーメーションは既に完成しており、後は千歌先輩さえ、と言うところまでパフォーマンスは出来上がってる。

「星ちゃんこそこんな所で黄昏れてどうしたの？」

私が疑問に思ったことはそっくりそのまま彼女達の疑問でもあるため、当然のように質問をされる。

「ルビイちゃんは身近に優秀なお姉ちゃんがいてどう思うの？」

「どうって？」

ふと、私はルビイちゃんなら分かるかなと思い、気付けばそれを口にしていった。

「嫌になったりとか、距離を取りたいとか、本音で話せないとか」

「穹さんに対してどう思っているのか、それを考えちゃったんだね」

質問に対して唐突な質問で返してしまっただけで、ルビイちゃんはその意図を即座に見抜いた。

これまでずっと人の気持ちばかり考えて、人目を気にしてきたルビイちゃんだからこそその観察眼だ。

「私の答えは参考にならないと思うよ。だって、どんなに理由を並べても、最終的に家族だからって、その一言で片付いちやうでしょ？」

「確かに。ルビイちゃんがその一言を言わなくても私がそう思っちゃうかも」

「だから行こう。その答えを見に」

「答え、分かるの？」

「きつと」

自転車から降りて、行こうと差し出された手を私は何かを考える前に取っていた。

「言葉にしなきゃ分からないこともある」

「けど、百聞は一見にしかず、ともいうずら」

善子ちゃんと花丸ちゃんの背中を追い、ルビイちゃんに手を引かれて私は砂浜へと戻る。

驚いたことに、私は一晩もの時間を明かしていたようで、すでに空

が白みはじめていた。

私達が砂浜に着いた頃、いつの間に来たのか、梨子先輩と曜先輩もまた砂浜足を運んで千歌先輩を見守っていた。

千歌先輩は相変わらずムキになったようにチャレンジと失敗を繰り返していた。砂に塗れ、擦り傷を作り、それでもなお必死に、そして懸命に。

それは私が何かを上達しようとして練習に取り組んでいる姿勢とは真反対のもの。

私は伸びしろがあると思ったものしか伸ばそうとしないけれど、千歌先輩は0だったものを1にしようとしている。

果南さんの言葉を鑑みるに、千歌先輩はこれまでは結局0のまま終わってしまったっていたようだけれど、今は確実に1に近づいている。そんな様子が垣間見られた。

「あーもうー」

何度目かの失敗の直後、砂浜に横になり、天を仰ぐ千歌先輩は自身自身へのもどかしさに声を上げる。その声は誰に当てたものでもなく、ただただ見上げた空に吸い込まれていくけれど、確かに私の、いや私達の耳に届いた。そしてそれは私の心に問い掛けた。

私自身が何かが出来ないことに対しこれ程までに悔しいと感じたことはあるか、と？

「何で？ 私まだ、何にもしてないのに。まだ、何も返せてないのに！」
思わず漏れる千歌先輩の嘆き。それは弱気とも取れるけれど、それだけ取り組んでいることに本気だからこそそのものだ。

砂にまみれ、傷を作るその姿は見る人が見れば無様なのだろう。けれど私はその姿にこそ、私に無いものを見た。それを表すのに相応しい言葉は一つしか心当たりがない。

「びー、どっかーん、普通怪獣ヨーソーローだぞー」

「ずびびびびびー、がっしやーん、普通怪獣りこっぴーもいるぞー」

突然戯けたように、幼児のように怪獣の小芝居をする曜先輩と梨子先輩の様子に、千歌先輩は体を起こして怪訝な顔で振り向いた。

普通じゃない人が何を普通怪獣なんて言っているのだと。

「ねえ、千歌ちゃん」

「まだ自分のこと普通だと思ってる？」

けれど、そう思ったことはそのまま二人の思っていること。いや、みんなが思っていることだ。

「普通怪獣ちかちかで、リーダーなのにみんなに助けられて、ここまで来たのに自分は何も出来てないって、違う？」

「だってそうでしょ？」

それを千歌先輩に納得させられるのは、千歌先輩のことを信じ続けた人にしか出来ない。

「千歌ちゃん。今こうしてられるのは誰のおかげ？」

「それは学校のみんなでしょ？町の人達に曜ちゃん、梨子ちゃん、それから」

千歌先輩はけれど、やっぱり自分のことを普通だと思っていて、問い掛けでは思い至ることが出来ない。だから曜先輩は優しく諭す。握った拳を解きほぐすように。

「一番大切な人を忘れていませんか？」

「なに？」

「今のAqoursが出来たのは誰のおかげ？最初にやろうって言ったのは誰？」

「それは」

ただの始まりの切っ掛けならばそれは特別ではない。そう千歌先輩は思っているのかもしれない。けれど、本当にそうなのか？始まりの切っ掛けこそが、心に火を付けたその瞬間こそが特別なのではないか？

「千歌ちゃんが居たから私はスクールアイドルをはじめた」

「私もそう。みんなだってそう。」

「他の誰でも今のAqoursは作れなかった。千歌ちゃんがいたから今のAqoursがあるんだよ。その事は忘れないで」

いつか千歌先輩がスクールアイドルをやろうと決めたその瞬間。それはきつとスクールアイドル高海千歌の今を形作っている特別。千歌先輩にとってμsがその特別なならば、Aqoursのみん

なにとつての特別こそが千歌先輩なのだ。

誰かにとつての特別な存在が普通であるなんて筈が無い。

「自分の事を普通だつて思つてる人が諦めずに挑み続ける。それが出来るつて凄いことよ。凄い勇気が必要だと思う」

「そんな千歌ちゃんだからみんな頑張ろうつて思える。Aqoursをやってみようつて思えたんだよ」

「恩返しなんて思わないで。みんなワクワクしてるんだよ。千歌ちゃんと一緒に自分達だけ輝きを見付けられるのを」

その特別な存在は自覚はなかったのかもしれないけれど、ずっと普通ではない人達に並び立とうと足掻き続けることのできる、輝こうとすることを諦めない人だった。だからこそ、普通ではない人とずっと一緒に居られたのだ。

「みんな」

曜先輩、梨子先輩をはじめルビィちゃん、花丸ちゃん、善子ちゃんもまた同意だと頷く。

そして、訪れた3年生の三人も話を聴いていたのだろう。言葉にこそ出さないけれど、その目が物語っていた。

「千歌。時間だよ」

千歌先輩の正面に仁王立ちする果南先輩は全幅の信頼を乗せた言葉で刻限だと告げる。

下ろしていた腰を上げる千歌先輩からは先までの気負いは消えていて、けれど、力が漲っているのがよく分かった。

そして千歌先輩は一步を踏み出し――

ステージに立つ彼女達はこれまでのAqoursとは違う姿を見せていた。

スタイリッシュに見えるようにへそを出すように絞られた黒いT

シャツ。可愛らしさを演出するのは羽織られた短い上着とスパッツに装着されたフリフリ。白とピンク色のそれは跳ねれば揺れて素材の滑らかさが弾く光をキラキラと輝かせるだろう。

そして一見するとブーツのようにも見えるのはレッグカバー。それは動きやすさを損なわないようにする地味ながらも優良なアイデアだった。

小気味良いギターとドラム音に招かれ、吹き出す煙の中から現れたAqoursはそんな衣装に身を包んでステージを跳ね回った。

やろうとする自分と、心の声。そんな歌詞の掛け合いとともに前へ、前へと足を進ませる力がこの曲を応援歌たらしめている。

“悔しくて じつとしてられない”

それはみんなが抱いていた気持ち。そして多くの人が持つ気持ちだ。

サビ前のそのパートで千歌先輩以外の八人が頭く足の順に地面を舐めるように伏す技 “ドルフィン” を千歌先輩の歩みに合わせて波を作ると、千歌先輩はソロパートを歌い、練習していた大技、後方着地側転からの後方倒立回転跳び、つまりロンダートからのバク転を決めた。その様は波間から海面に飛び出すイルカの様だった。

今朝、千歌先輩はみんなの前で習得したそれは3年生から受け継いだ絆。Aqoursという名前と共に今に届いた波紋、みんなと共に完成させたAqours WAVEだ。

“できるかな?”

そんなAqoursの問い掛けに、この会場に集ったみんなはその通りだと “Hi” と肯定する。

“信じようよ”

その言葉はいつか輝けると信じ続けて壁を乗り越えた千歌先輩だからこそその言葉だ。

客席から見る私達は “YEAH!” とそのMIRACLE WAVEを称えたのだった。

第三百三十一話

オレンジ、いや、みかん色に輝く光の海のただ中で私は彼女達のパフォーマンスをその目に焼き付けた。

波を作る八人による連動ドルフィン、そこから？がる千歌先輩のアクロバットはそのパフォーマンスを目にしたみんなの心を惹きつけた。

何をするのか知っていた私はステージの上でドルフィンを決めた直後の八人と同じように胸の前で手を合わせて成功を祈った。千歌先輩がアクロバットを決めた瞬間は感情の爆発をおさえられなかった。けれど、それは私だけでは無いはずだ。

会場のみんなも千歌先輩が何かをするただならぬ気配を察して、好奇心から一時ブレードを振る手が止まった。アクロバットが成功した瞬間、会場はみかん畑に変貌した。本当はレギュレーション的には良くないけれど、UO（ウルトラオレンジ）を折る人もいた程だ。

曜先輩でも果南さんでもない、また、一部からカルト的な人気のあるルビィちゃんでもない、千歌先輩が決めたからこそ、Aqoursの底力を垣間見た。

それを見てしまったら結果発表される前に結果など分かっちゃったようなものだった。

おめでとう、そしてありがとう。私は心の中で賛辞を送り続けた。

今回のこの「Aqours WAVE」というパフォーマンスを巡る練習の日々で私なりに分かったことがある。

千歌先輩が劣等感に苛まれてもなお、曜先輩や果南さんと一緒に居られた理由。それはいつの日か千歌先輩自身が二人に並び立つても恥じない自分になろうと常に先に先にと突き進む心を持っていただけだ。もちろん、これは私がそう思っているだけで、千歌先輩に確認を取った訳では無いけれど、スタンスの方向性としては合っているはずだ。もつとも、千歌先輩は無自覚にそうしている可能性があるため確認しても答えは返ってこないかもしれないが。

千歌先輩のそんなスタンスに気付いたことで私自身のことも見つ

め直せた。

私は多分、穹と肩を並べられていなかったのだと思う。そして、穹が居なければ私は輝けない。そう思っていたのだ。

私は穹と出逢わなければ誰かに音楽を届けたいと思わなかった。きつと一人で奏でては満足していたに違いない。

私にとって、誰かに聴かせる音楽の始まりは穹で、だからこそ特別であり、穹と一緒に輝けるって、私の輝きはそうやって誰かに依存していたものだった。

自らの秘められた輝きを信じて、遂にはその輝きを煌めかせた千歌先輩とは違う、外からの光を反射させて輝いていたと勘違いしていたのが私だった。

だから私は次に穹に会うまでに自ら輝きを放つ、そんな存在になりたい。だってジェミニのアカリは一等星の二つ星。同じ等級の恒星なのだから。

「やりましたね」

「ありがとう。決勝だって」

地区予選の結果は文句なし、ぶっちぎりの1位通過で、いよいよライブ決勝に進むこととなったみんなは何処かぼうつとしていた。まるで夢の中にいるような、ても確かにやりきったような、そんな感じだった。

「秋葉ドーム、どんなところだろう?」

「私も野球の試合とか、ライブで観客席からしか見たこと無いんですけど」

とにかく広い。ただただその一言に尽きる。

野球の試合を見に行った時は三塁側の下の方だったし、ライブを見に行った時は、スタンド席の前の方だったけれど、見た限り奥まで行くと凄く遠いし、上は凄く高い所に席があった。

ライブで行ったときはJPOPアーティスト複数組のフェスだったからブレードとかを振るようなライブでは無かったけれど、ライブライブ決勝はどんな景色が広がるのか、未知の領域だ。

「星ちゃんも知らない景色」

「そんなの今までだってそうだったでしょ？」

「でも、私達の知らないこと星ちゃんやんは沢山知ってたでしょ？」

「お互い様ですよ。私の知らないこと、気付いていなかったこと、沢山みんなから教わりました」

「人の数だけ見聞はあるものですわ」

「人の数だけ、か・・・」

ラブライブ地区予選の様子はライブ中継され、アーカイブにも動画が残っている。その再生数は今もまだ凄い勢いで伸び続けている。

丁度私達の居るセントラルパークの特設モニターにAquoursのパフォーマンス映像が流れた時には再生数は4万を超えていた。

それだけの人が見て、聴いて、何を思っただろう？私も頑張ろうとか、私がやるのはこれだとか、そんな風に気持ちを動かしたり、夢を見せたりしているのだろうか。

「まだ80人。入学希望者、増えないですね」

だから入学しようとか、そう考える人が居てもおかしくない。だって言うのに、入学希望者の数は増えない。

日本ガイシホールから学校に戻ってからその人数は変わらない。期限は明日の0時、つまりは後4時間ほどしかないというのに、だ。

このラブライブ地区予選が最後のアピールポイントだったけれど、やはりそれを終えてからの猶予時間は短いに過ぎる。

「見て！今一気に増えた」

「本当だ！」

現在86人。あと14人増えれば統廃合は無くなる。偶々なのかもしれないけれど、今の延び方を鑑みればあと一日、二日あれば越えられるのではないかと思える。

鞠莉さんはみんなと顔を見合わせると、経営者である父親と話すと、理事長室を出て行った。

「これが本当に最後のチャンス」

「みんなやれることはやっただと思います」

「今からでもまだ！」

「気持ち分かるよ、千歌ちゃん。でも今はもう」

「ビラ配りとか、ライブとか、もうそんな時間はないですし、ホームページにはでかかど期限のカウントダウンバナーを付けました。迷ってる人は必ずその時間内に結論を出すように、見落とさないように」

多分先程一気に増えたのもA q o u r sのパフォーマンスを切っ掛けにし、ホームページを見て駆け込みで応募したからだろう。

「今はどんと、腰を下ろして待っていてください」

ラブライブ地区予選を無事に突破した今、今までなんとか心配するこの頃に蓋をしていた問題と向き合わざるを得なくなった。

浦の星女学院統廃合問題。今まではそれを阻止すべく、最大限のアピールが出来るようにとスクールアイドル活動をしてきたけれど、今、この時はもう出来ることはない。ただ待つしか無い身となってしまうのだ。急に抛り所がなくなり不安になっているみたいだ。

私はといえば不安だ。けれど、案外何とかなるのではないかとも敢えて樂觀していた。というかそう思うしかないのだ。

この問題に対し、私ははじめ、みんなから一步引いた場所にいた。それは傷付くことが怖かったから。一途になればなるほど、その気持ちと相反する結果になった時、絶望は大きくなるから。でも、私はみんなの立ち向かう姿に感化され、立ち向かうことを決めた。

予備予選、学校説明会、アルバイト、老人会などみんなと一緒に頑張った。けれど、どうしても思ってしまう。私はみんなに並び立つて、この問題に真剣になっただろうかと？

「そうだね。不安に震えるだけが真剣って訳じゃ無いしね」

「みんな晩ご飯まだでしょ。私達買い出し行ってくる」

そう行つてルビィちゃんは善子ちゃんと花丸ちゃんの腕を引いてそそくさと理事長室を後にした。

「星ちゃんも」

と思つたら、ルビィちゃんに引つ張られ私も買い出し行くことになった。

「心配？」

外はすっかり夜だ。それもそのはず、既に21時を越えている。

誰が言い出すでも無く今日は帰らないとみんな決めていて、すでに保護者から了解は貰っているのだから容易周到だ。

けど、ルビイちゃんが提案するまでお腹が減っていることすら誰も気付かなかったあたり、やっぱりみんな何処か平静ではないのだ。

「そりゃ秒読みの段階になったら流石に実感するよ」

「そうじゃなくて、星ちゃんが自分自身を疑ってないかってこと」

「あんたまた難しいこと考えてたでしょ」

見事に凶星を突かれて私は返答に窮した。本当にエスパーかと思うほどよく気付く。

「星ちゃんも仲間ずら。まる達が保証するずら」

なんてことないようにそう断言する花丸ちゃん。

けど、みんなは分かっているのだろうか？この統廃合問題に対し真剣になろうとしても、他の問題とかに頭を悩ませたりしていたことを。

「花丸ちゃん達に分かるの？」

そんな私と花丸ちゃん達中心人物は取り組み姿勢が違いすぎる。

だから私は花丸ちゃんの言葉をそのまま鵜呑みには出来なかった。

「分からないずら」

「でも、ずつと一つのことばかりに気持ちを置くことはできない。墮天使だってそうなのよ」

「みんなそれぞれ大きいこと、小さいことで悩むことだって沢山あって、気持ちもふらふらしちゃうかもだけど」

「それでもおら達は真剣だったと思うずら。星ちゃんは違うずら？」

学校のこと、みんなのこと、穹のこと、自分のこと、悩むことは沢山あって、誰かにとつては取るに足らない事かもしれないけれど、私にとつてそれは大きな事だった。どれも大切で、だからルビイちゃんのように気持ちもその時その時でふらふらしたけれど――

「真剣だった。真剣だったよ」

「なら自信持ちなさい」

バシツと背中を叩く善子ちゃんの姿には入学当初屋上にいた頃とは違う逞しさがあった。

「そうだねっ！」

そんな姿に少しだけ対抗心が湧いたからか、私もバシツと善子ちゃん
の背中を叩いたら当たり所が悪かったのか善子ちゃんは盛大に咽
せた。それを私達は堪らずに笑ってしまった。

第三百三十二話

0時の影時間を越え、2時の丑三つ時を越え、そして朝日がおはようと顔を出した。その間、私達は一睡もすることなく入学希望者の人数を見ていた。

それが出来たのも他でもない、鞠莉さんの交渉の甲斐ありタイムリミットを朝6時まで引き延ばすことに成功したからこそだ。流石にラブライブ地区予選の動画の再生回数の上昇率、そして入学希望者の突発的な延びは運営サイドも無視出来なかったのだろう。実際、朝5時30分現在、入学希望者数は97名にまで延びた。

ここまで長かった。流石にみんな待つことに疲れた様子を隠せなくなっていた。当然だろう。よくよく考えるまでもなく私達は二徹しているのだ。

半ば意識が怪しくなり、目は開いて、周囲の状況変化にも反応しているけれど無意識であるという、支離滅裂で訳の分からない感覚があった。

現実感の欠乏する状態の中、97という数字だけが妙に頭にこびり付き、気付けば時刻はあと5分を切っていた。

「……………」
窓から差し込む光がやけに明るくて、それでいて穏やかで、嫌味なくらい温かかった。

「……………」
残り時間が3分を切った。

やれることはやった。語る言葉は尽くした。祈りはとうに捧げ終えた。だから誰も何も言えなかった。

「……………」
残り時間、1分。入学希望者数は97のまま変動は無かった。

「大丈夫、届く!!」
遂に発せられたのは千歌先輩の祈りだった。それは届くと信じて、信じて、それでも足りないくらいの感情の発露。

私は思った。何故こんなに際どい数の入学希望者数にまでなった

のだろうと。こんな気持ちになるくらいならいつそ圧倒的に少ない方がまだ諦めも付くのと。そう、思ってしまった。

そして訪れた朝6時00分。入学希望者は97名から変動すること無く、募集終了の文字が97という数字を上書きした。

それを見て私は泣いた。ここに居る誰でも無く、私だけが泣いた。それはみんなが薄情だとか、そう言う意味じゃない。みんなは何が起きたのか心が追いついていないのだ。そして、私は、私だけは何が起きたのか理解している。最後の最後に諦めた私だけが感情の整理が出来てしまっている。

理解しているからこそ、悲しいという感情を素直に受け入れている自分が居て、それが本当に情けなくて余計に涙が出た。

終わったのだ。浦の星女学院は。みんなと出逢ったこの学び舎は。もう、来年にはみんなとここで会えないのだ。

流石に二徹など無茶が祟ったからなのだろう。疲れて爆睡した私は久し振りに夢を見た。

夜中の三時、近所のスーパーの駐車場となっている屋上で私は穹と何をとち狂ったのか線香花火をして遊んでいた。今にして思えば迷惑極まりない、というか幾らコンクリートで固めていたとはいえ危険である。

これは確か去年の夏の終わり、穹が大処分の花火を大量に貰ってきた時のことだ。

「花火ってき、儂いとか言う人いるでしょ?」

「いるいる。私だめなのよ、そういう良いこと言ったでしょ的な」

「アンチ?」

「違うよ。だって、全然儂くなんて無いからさ」

「は？線香花火に見とれてる人がそれ言う？」

「だーかーら、綺麗だからだよ。燃えてるのが」

「それこそだからすぐ消えちゃうのが儂いってことでしょ？」

「そうなんだけど、そうじゃなくて、こう。ほら、火って怖いものでしょ？でも、凄く惹きつけられるのって分かる？」

「思わずライターで火を付けて遊びたくなるような？」

「そうそう。で、怖いんだけど、それを忘れさせるような、難しいことまとめて全部持つてっっちゃうような、なんて言うんだろう、怪盗？」

「いや、聴かれても分からないって、アンタの頭の構造は」

「うん。怪盗だ。スカツとしたいときは打ち上げで、ストンと落としたいときは線香で、って感情をさ持つてっっちゃうから怪盗なんだよ」

「つまり？」

「華麗で、鮮烈。そして当事者には激烈で、第三者には爽快感を与えるんだよ」

「何が言いたいかさっぱりなんだけど」

「だから、捉え方は立場で違うつて事」

「それ、自分で言つて纏めきれなかった感ない？」

「伝えたい気持ちも持つてかれちゃったんだよ」

「したり顔で言うな！」

「あれ？本当に私がかかってないと思つてるの、星？」

いつものような取り留めの無い会話。そしていつものようにオチの無い会話だと、私はそう思つて聞き流していた。

今になってみれば立ち位置で見方が変わることを実感として知つている。けれど、穹はどうだったのだろうか？そして、みんなはどうなのだろうか？

「星ちゃん」

「へ？」

がばつと状態を起こすとそこは教室で、自分が教室の机で寝ていたことを思い出した。

流石に家に帰ってから再度来るのは手間しかないため、あのあと私は学校に残つたのだ。

「起きた？」

「うん」

「鞠莉ちゃんが全校集会やるって」

学校の全員が既に知っているだろう事実を鞠莉さんは敢えて語らなければならぬ。

例えるなら身内が亡くなって心の整理も出来ぬまま葬式の準備に明け暮れるような、そんな感覚だろうか。そんな風に思えてしかたがない。

「ほら、二人とももう皆行くよ」

ぼさつとしている私やルビィちゃんを見かねてクラスメートが急かすように声を掛けてくる。

どうにも体に力が入らず、それでも行かなければとルビィちゃんと共に早足に廊下を歩く。

「おはよ」

「昨日寝てないんだって？大丈夫？」

クラスメートに追い付くと皆は口々にそう気を使ってくれた。それが有り難いと同時に申し訳なく思った。

皆だつて学校を盛り上げようと頑張ってくれた。

ビラ配りもした。町役場や市役所に電話したり手続きをしに行つた。資材を借りに頭を下げに行つたりもした。皆学校のためを思っていたのだ。だから今回のことはショックな筈なのに余計な心配をさせてしまつて、それが申し訳なかつた。

「ラブライブ決勝、ルビィ達三人は頑張らないとね」

「星も、応援隊長みたいな感じになつてるんだから、秋葉ドームへの最安値のルート、探してよね」

事の大きさの余り見失つていたラブライブ決勝進出という事実。

「ねえ、三人とも」

「今はまだ何にも言えないぞら」

このままA q o u r sはラブライブ決勝に出るのか？

みんなはどう思っているのか？

それを改めて考える必要がある。そう、みんな思っていた。そして

放課後、千歌先輩が思った以上に心の整理が付いていなかったことから、A q o u r s は結論を出すことになるのだった。

今後、スクールアイドルを、A q o u r s を、ラブライブを続けるのか否かを。

第三百三十三話

始まりがあれば終わりはある。それは誰だつて知っているけれど、決して馴れることはない。

浦の星女学院が終わる。そしてAqoursすらも瓦解する危機にある。それが私には堪えた。

この町を、学校を、皆を好きになれた切っ掛け、そして中心にいたAqoursは私の指針の一つだった。

私の見失ったものを照らしてしてくれた。諦めた心を奮い立たせてくれた。音楽が楽しいと、素直にさせてくれた。

そんなAqoursがこのような形で終わる？それは全く想像もしていなかった。終わりがあつても3年生が卒業して自然に活動を縮小させるものとはかり思っていた。

けれど、浦の星女学院が無くなる今、それは仕方の無いことなのかもしれない。Aqoursは浦の星女学院の“スクールアイドル”なのだ。当初の切っ掛けはどうあれ、学校、学校の皆、学校を取り巻く地域の人、そんな支えあつてのAqoursで、だからそれらを盛り上げたいと、そうすることで輝きたいと願つたのがAqoursだったからだ。

そんなAqoursが終わるということは、事実上、浦の星女学院は本当の意味で終了することになるだろう。

“スクールアイドルやらない？”

悶々とスツキリしない頭を、感情をどうにか整理しようと思夜中に散歩に繰り出した私はしかし、とうとう頭がスツキリすることも、気持ち晴れることもなく、気付けば学校に辿り着いていた。

校門を抜けて敷地内に入った私は、今は葉っぱも落ち始めている桜の程近くで、入学式の日千歌先輩と曜先輩がスクールアイドルの勧誘している姿を幻視した。

もしもその時に戻れたなら私はその誘いにどうしただろう？

「やりません」

私は数秒考えた後、あの日のようにそう口にした。私はスクールア

アイドルをやりたい訳では無いのだ。

校門を過ぎ、中庭に行きベンチに腰を下ろす。

なら私は何がしたいのか？埼玉を離れ、沼津に来たことに意味を残したくないのか？この学校に来た意味を――

「あれ？先客が居るなんて」

ぼんやりと校舎の狭間にある小さな空を眺めていると気配を隠すことなく誰かが近づいて声を掛けてきた。

こんな時間に、こんな場所で誰かと会うなんて思ってもみなかった。

この人は見覚えがある。確か3年生の先輩だ。学校説明会の準備の時にやたら料理の手際が良かった事を覚えている。

「こんばんは。どうしたんですかこんな時間に？」

「こんばんは。統廃合するって正式に決まっちゃったからね。まだまだだしてないこと、やっておかないとなって」

「例えば？」

「夜の学校に忍び込む、とかね」

悪戯っぽく笑う先輩につられて私も笑ってしまった。

「あれ？ごめんなさい。逢い引き中でしたか」

二人で雑談をしていると程なくしてまた別の生徒が姿を見せた。

確か2年生の先輩で、全校で一番背の高い人だ。身長から勘違いされがちだけど運動は苦手だと言っていたのを覚えている。

「乙女の花園へようこそ」

「何ロマンティックなこと言ってるの」

2年生の先輩は呆れながら中庭の木に背を当てて、頭頂部に本を載せると、その部分の幹の表面を削った。

「いや、何してんのなんて顔しないでよ」

今まで全然注目していなかったから知らなかったけれど、木にはこれまで何度となく身長を測っていたような形跡があった。

「嘘！こんなに小さかったんですか？」

その形跡の一番下。それはクラスでも真ん中くらいの身長の私よりも10cm程も低い位置にあった。

「ホント、なんで高校に入ってからこんな伸びるのかな？」

聴けばクラスどころか学校でも一番背が低く、背を伸ばしたいと願って入学式の日にかつそりとこの木に記録を付けだしたのが始まりらしい。

しかし、急に身長が伸び出したらしく、最初は嬉々として記録を付けていたらしいのだが、如何せん伸びすぎた。最近是人目が気になり記録を付けていなくなったそうだ。

「でも、学校無くなっちゃうでしょ？なら、やっぱり最後の日まで残しておかないとなつてね」

この学校に自分が居た証。自分だけの証を刻みに来た。2年生の先輩の言葉を借りるならそれはとてもロマンティックだった。

「あれ？なんでこんなに人がいるの？」

そんな風に一人、二人と、どんどんと何かを求めて浦の星女学院生が中庭に集まった。

夜のテンションというのは恐ろしい。顔は知っているし、幾らか話したことはあるけど、名前を知らない誰か同士なのに、普段話さないようなこと、秘密、好きなこと、嫌いなこと、沢山皆で話した。

ある人は学校に来る坂道が面倒くさいと、今では半分寝ても登校出来ると言つて皆で共感して笑った。

ある人は中学ではスクールカーストでも下位にいたらしいけれど、女子にしては人間関係がさっぱりした校風が心地良く今では人付き合いも怖くなくなったと言つて皆から喝采を受けていた。

ある人は浪費癖がひどくて周囲に何も無いこの学校に入れられたとかで最初は文句たらたらだったけど、バイトは学校側が認めていることから、バイトをしたこともありお金の使い方を覚えたと言つて、皆から奢れと集られていた。

それこそ空が白み、遂には青空が見える頃まで皆と沢山話をした。皆共通しているのは、この学校でやり残した事を残したくない。そして、この学校に居た証を残したいということだった。

「それって自己満足じゃないんですか？」

「当然でしょ。でも、誰かが知っている浦の星女学院と私しか知らな

い浦の星女学院。その二つがあるからこそ特別なんじゃない?」

「でも、内面の部分は私達が覚えていても、上つ面の部分は皆覚えていくくれるの?すぐに忘れられちゃうんじゃないの?」

片田舎の中でも辺境の位置にある小さな学校。知る人ぞ知るそこはたった100人にも満たない生徒を最後に、消えるのだ。その存在などすぐに新しい生活に掻き消されるに違いない。関係者ですらそうなるだろうし、無関係な人はすぐに忘れる。というか、知りもしないだろう。

「そうだよ。私達が、私達だけが知っててもしょうがないんだよ」

「学校を守ろうって、盛り上げようって決めたじゃん。最後まで足掻かないと」

千歌先輩の幼馴染みである四五六トリオが声を上げた。

「守ろうって、言っても、どうするのさ」

「残すんだよ。学校を、皆の記憶に」

「どうやって」

「ラブライブで!」

そうやって見上げた屋上からは、いつの間にか声が出た。良く知っている声。Aqoursのみんなの声だ。

細かい内容は分からない。けれど、悲痛に彩られたその声音からはもう、Aqoursは活動しなくなる。そんな響きを感じ取れた。

そして――

「学校を救いたい。みんなと一緒に頑張ってきたここを……」

その言葉だけはハッキリと、私達全員に聞こえた。

私達は顔を見合わせて頷き合うと、姿の見えない屋上のスクールアイドル達に声を掛けた。私達の答えは、もう出ているのだから。

「じゃあ救ってよ」

「ラブライブで優勝して、学校を救ってよ」

「どうやって?学校なくなっちゃうんだよ!できるならそうしたいよ!でも……」

屋上から顔を覗かせたAqoursのみんなは学校を救うこと即ち統廃合を阻止することと定義付けているようで、そこから考えが進

私はそうやってこの学校に貰ったものを返そう。そう、皆と決めた。きつと本当の意味で学校の皆と肩を並べられたのは今なんだと、そう実感した。

「「「Aqours集合ー！ー番号っ！」」」

本来は千歌先輩の号令を私達が呼び掛け、私はいつものようにハーモニカを吹いた。

「1」

「2」

「3」

「4」

「5」

「6」

「7」

「8」

「9」

そして、

「「「10」」」

「「「レッツゴーサンシャインー！！」」」

そして、屋上から駆け下りてきたAqoursと私達は肩を組んで歌う。

曲は「太陽を追いかけろ」、Aqoursの曲だ。とにかく前へと、元気なマーチが特徴の曲だ。

曲に歌われているように変わらない未来はない。それは良い意味でも、悪い意味でもだ。だから希望を持てる。希望を持って行くしかないのだ。

第三百三十四話

空を自由に飛びたいな、というフレーズに聞き覚えのある人も今ではだいぶ減りつつある。国民的アニメ「ドラえもん」も声優が代替わりしてからそれなりに時間も経過したからだ。件のフレーズのオープニングは私も小さい頃に聴いたきりだ。

話が逸れたけれど、空を自由に飛びたいな、というフレーズは一見すると希望に満ち溢れているようであるけれど、実はそうではないのかもしれないとも解釈できる。なぜなら、「飛びたいな」から分かるように、彼ないし彼女はまだ飛べていないのだ。飛べていない者が空を、それも自由に飛びたいと言うことは現状に満足が出来ていない、或いは苦境に立たされて逃げ出したい状況なのではないだろうか。

なんて、何故私がそんなことを考えているかというところ、答えはいったってシンプルだ。私は今、空の上にいるのだ。

二学期の期末テストも無難に終え、後は冬休みを待つばかりだとAoursの基礎練に参加していた日のこと。

私も体力が復活してきたからか、ランニングでは梨子先輩と良い勝負を出来るようになってきた。

インドアな梨子先輩はああ見えてフィジカルが強く、最近ではピアノに次ぐライフワークは筋トレだと豪語している。流石に昔から体を動かしている果南さんや曜先輩、案外野生児な千歌先輩やルビィちゃん程ではないけれど、それなりに体力は付いてきている。

「そう言えばみんな予定は大丈夫だった？」

「うん。バッチリ」

「？ 何かあるんですか？」

特にライブが控えていることもなく、新年まで特に予定らしい予定

に心当たりはないけれど、みんなはどうも違うらしく、果南さんの発した言葉に各々頷いている。

「ラブライブ決勝進出のチームだってことで、他の地方予選の観覧券を頂いたの」

「函館だよ、函館。H A K O D A T E」

「美味しいものが呼んでるぞら」

「ちよつとした旅行なんですね」

いいな、と私は内心羨ましかった。このメンバーも恐らくは来年の卒業式を迎えたら揃うことも難しくなる。だからみんな旅行に行く機会なども無いかもしれないのだ。

それに北海道が数多持つ観光都市が一つ、函館。いや、千歌先輩風に言うならばH A K O D A T Eは私もまだ行ったことがない土地。興味が湧かない訳がない。

「星さんも来ますか?」

「自腹だけどね」

「・・・ちよつと調べさせて貰いますね」

沼津から函館に行くには羽田から飛行機になりそうだ。新幹線という手段もあるけれど、L C Cを使えば陸路に近い値段で移動出来そうだ。それも私からすれば決して安いとは言えない値段だが。

これは稼いだバイト代の残りを使うときがいよいよ来たようだ。

「行きます!」

「ホテル代は?」

「何とかします」

「OK。じゃあー」

そんなこんなで私はA q o u r sに同伴する形で函館に行く事となった。

函館で行われるラブライブ予選にはS a i n t S n o wが出場するし、彼女らの家も函館市内にあるらしい。挨拶くらいする時間も作れるだろう。

そうだ、と私は沼津を出発する前に念のため穹に連絡を入れた。

万が一、穹が沼津に来ようとしていたら擦れ違ってしまったためだ。

「これから少しHAKODATEに行ってきます、っと」

返事など期待しない。けれど、もしお土産の催促があったなら、買って帰ろうかなと淡い期待を胸に沼津を出発し今に至る。

思えば自分が手配して飛行機に乗るのは初めてだった。

本当に乗れるのか不安があったけれど、今は随分と手続きが楽で、インターネットで予約してQRコードの付いたページを印刷して持って行くだけ。後は場所さえ間違えなければ問題ないのだから楽なものだった。

しかし、羽田空港はやたら広く、移動が大変だった。海外やら国内をそこかしこ言ったことのある鞠莉さんがいたからスムーズに移動できたけど、あの広さは初見の人には絶対無理だ。

「星ちゃん、飛行機は初めて？」

「乗ったことはありませんよ。小さい頃でしたけど」

「友達と旅行とかは？」

千歌先輩からの問い掛けに、私はそう言えばと思い起こす。

穹とは遠出はしたことはあったけれど、あれは旅行とは言い難い。もちろん修学旅行はノーカンだ。

ならば、私が友人と呼べる人との旅行は今回が初めてになるのだろうか。

「そう言えば初めてですね」

そう思うと、なんだか少し気分がそわそわとしてしまう。

これから降り立つ地ではどんな事が待っているのか。そして、願わくばそれが私の血となり肉となり、そして音になって表現できたらな、と少しずつ見え始めた大地を眺めながらそう思った。

第三百三十五話

降り立った函館空港は予想に反して小さかった。

飛行機など小さい頃に乗ったきりだったため羽田のイメージばかりあつたけれど、日本全国に羽を伸ばす羽田と行き先の限られる地方空港では必要な敷地面積に違いがあることなど少し考えれば分かることだった。

空港からバスに揺られて函館市内へと向かう。まずはホテルに荷物を置いて、観光はそれからだ。

バスから見る景色は思ったほど田舎では無いけれど、多分榮えているのは市内だけなのだろう。国道沿いでも個人経営のものと思われる食事処が疎らにある程度で全国チェーン店やコンビニなどはあまり見当たらなかった。

ただ、函館に来たんだなと実感させられるのは雪がそこかしこにあることだ。

沼津も埼玉の私が住んでいた地域も雪など滅多に降らない。だから綺麗に雪かきされているとはいえ、それがあるだけで異国に来たと、そんな気分になる。

「沼津は最後に雪降ったのいつだったっけ？」

「確か今年の初めにちよろつとだったかな」

「そう言えば、その日は曜ちゃんの家泊まったんだっけ」

「炬燵で寝落ちしちゃったんだよね」

なんて、珍しいからこそそれに纏わるエピソードの一つや二つ、みんなあつて、それを聴いている間にあつという間に空港から函館市内の榮えているところまで来た。

「私、路面電車って初めて見た」

「東京にもあるって話ですけど、私も」

ホテルに荷物を置いて私達は街を散策する。

ラブライブ北海道予選は夕方からだ。それまでは自由時間であるし、予選の行われる函館アリーナは路面電車やバスで行けるため、時間さえ気を付けていればそれなりに市内観光ができる。

今の話のように日常的な景色からして函館は沼津とは違った。

北海道という本格的に開発されたのが明治頃からとなった土地柄や、観光都市として整備されたためか利便性を優先するように密集していないがらどこか整然として洗練されている。船着場なんかは特に綺麗だったし、赤レンガ倉庫の並びなんかは近所では見られない光景だった。

また、函館山はあるけれど、地表付近はなだらかな勾配で、伊豆半島のように切り立った山のすぐそばに海岸線があるのとは違い、景色が広い。山の上から見たらそれは良く見える事だろう。

「取り合えずご飯食べようよ」

「何食べたい？」

「函館と言えばイカずら」

「蟹とかイクラじゃなくて？」

「イカずら。市の魚として盛り立てているくらいイカがお勧めなんだから」

「イカなのに魚なの？」

「イカが魚かなんだかは置いておいて他に食べたいのがないなら市場でも行こうか」

「ハセガワストアのやきとり弁当とか、ラッキョーピエロのフトツチョバーガーとか言ってなかった？」

「それはおやつずら」

どちらもガッツリとしたB級グルメの筈だけど、とイマイチ釈然としない気分になりつつも私達は函館を満喫する。

そう言えばSaint Snowの二人は函館山の麓の坂道に実家件茶屋があるという。

予選が近い今、二人とも既に家を出ているだろう。案外自転車に乗って会場に行っているのかなと思うと少し面白い。Saint SnowのPVだけ見ていると全然そんなイメージは湧かないから。そんなこんなで腹拵えもしつつ函館アリーナに足を運ぶと既に多くの人が会場に詰めかけていた。

この北の果てでもまたスクールアイドルが流行っているのだと思

うとちよつと感無量だった。

今ではこの函館アリーナを満員出来るのはGLAYかスクールアイドルだと言うのだから凄い時代なんだと改めて思う。そりやスクールアイドルのレベルがインフレを起こす訳だ。

「本番前だけど、会ってくれるって」

千歌先輩が不躰な訪問にならないようにと事前に連絡を取っていたこともあり、私達は客席ではなく真つ直ぐに控え室へと向かった。

控え室に向かうまでの廊下には本当に多くのスクールアイドルが思い思い過ごしていた。

ストレッチしているスクールアイドル、イヤホンをしながら音程確認しているスクールアイドル、着ている衣装の最終手直しをしているスクールアイドル。誰を見ても東海地区予選の会場にいたスクールアイドル達と引けを取らなかった。

「失礼します」

よくよく考えたらAqoursではない私がここに居るのもどうかとも思ったけれど、同好の士として激励はしたい。そんな思い出で控え室を覗き込むと、鹿角姉妹は落ち着いた様子で椅子に座ってメイクを整えていた。

「あ、お久しぶりです。Aqoursさん。それに星さん」

「ごめんなさい。本番前に」

「私も着いてきちゃいました」

私達の訪問に快く挨拶を返してくれた聖良さんにホツとしつつ、私はじつと観察してしまふ。

白を基調としたライダーズ風のジャケット衣装とパンクなホットパンツ、あしらわれた赤い差し色のリボンと流石格好良さの中にキュートさを併せ持つSaint Snowに良く似合っていた。

「いえ。今日は楽しんでってくださいね。みなさんと決勝で戦うのはまだ先ですから」

「はい。そのつもりです」

「こないだ助けられましたからね。全力で応援しますよ」

とは言えラブライブという特性上、曲はどのグループも初見。バツ

チリコールを決めるのは難しいからキラキラでそれを表現する。

S a i n t S n o wの二人は確か聖良さんがスカイブルーで理亞さんがピュアホワイトだったため、ラブライブレードの色をスマホのアプリで既に調整済みなのは言うまでも無い。

聖良さんは既に決勝を見据えているような発言をするのにも驚いたけれど、千歌先輩もまた平然と返す辺り二人ともキモが据わっている。

実際問題、下調べに北海道予備予選の様子を見た限りでは余程のことがなければ確かにS a i n t S n o wの牙城を崩すグループはいなさそうなのは確かだ。

柔やかに話す聖良さんの様子からどうやら緊張感を上手くコントロール出来ているのだろう。これなら確かにこの余裕さも領けるといふものだ。

「数日は滞在しますので、どこかのタイミングで打ち上げしましょうね。あとセッションも」

「良いんですか？言い出しつぺの星さんの奢りですよ」

「それは勘弁してくださいマジで」

なんて軽口を叩いている間、理亞さんは黙って目を瞑り、イヤホンを外そうとはしなかった。

完全に外界と自分を切り離すその様子は聖良さんとは対照的な集中の仕方だ。普段の集中の仕方がどうかは分からないけれど、今はあまり触れない方がいいのだろう。

「次に会う決勝は一緒にラブライブの歴史に残る大会にしましょう」

「うん」

そう言つて聖良さんは千歌先輩と握手を交わした。

あまり本番前に長いする訳にもいかなかったためそれを最後に私達は客席へと移動した。結局最後まで理亞さんとは挨拶できなかったけれど、大会が終わればその機会もあるだろう。そう明るい未来を予想して私は純粹にラブライブ北海道予選を楽しんでいた。S a i n t S n o wの二人のパフォーマンスを見るまでは、そう、楽しんでいった。

第三百三十六話

その気持ちを私は経験したことがない。穹と二人でやってきたときは競技形式での大会に出たことはないからだ。だから新曲を配信して再生数が伸びなくて悔しい思いをしても、どこかマイペースだった。だってそれはまだ次があったから。改善の余地はあったから。

だけど、ラブライブは負けてしまえばそれでお終い。改善の余地はあっても、次がある回数には限りがある。3年生のいるグループなら最大二回。それつきりだ。

「驚いたね」

「まさかあんな事になるなんてね」

ラブライブ北海道予選終了後、会場から立ち去らずに口々に感想を言う客からそんな言葉が聞こえた。

皆思ったことは同じだった。まさかSaint Snowが失敗するなんて、と。

ラブライブ前期大会では新進気鋭のグループとしての新鮮さ以後押しされながらもその完成度の高いパフォーマンスで決勝大会まで進んだSaint Snowは北海道のスクールアイドル中でも頭一つ抜けていた。だからこそ、期待されていたし、予選大会でもSaint Snowが負けるようなことがあるならば、それは更にレベルの高いスクールアイドルの誕生だから寧ろ喜ばしいことだろうと、北海道のファンはそう思っていたに違いない。私だってそうだった。

けれど、Saint Snowは失敗した。負けたのではなく失敗したのだ。

パフォーマンスのド頭、接触による転倒により、最後まで二人は立て直せずに次に進む機会を逃した。

そして、それはSaint Snowの終わりを意味するのだろうか。それは想像に容易かった。

鹿角姉妹が長女、聖良さんは3年生。二人組で活動していた事を鑑みれば彼女が抜けければSaint Snowとは到底呼べない。実

質、理亞さんのみとなってしまうのだから。

それは私が引越すことになって訪れた終わりとは違う終わりの在り方。だから私はつい想いを馳せてしまうのだ。彼女達は今、どんな気持ちなのだろうか。

「二人とも大丈夫かな？」

「控え室にも居なかったもんね」

私達は大会終了後、控え室を尋ねたがそこはもうもぬけの殻だった。

まるで風に乗って降った雪のようにそれは唐突で、消えるのも一瞬で、私達はそれを前にただ戸惑うことしか出来なかった。

ある意味でAquorsにとってはためになっただろう。ステージの上で失敗するということが何を意味するのか、それを取り戻すにはどうすれば良いのか、考えさせられる旅になったのだから。

「二人とも仲良いから多分大丈夫だよ」

「そうだよ。姉妹のことは姉妹にしか分からないこともあるもんね」

結局、私達はSaint Snowのことは当事者である二人に任せようという結論になった。けれど、姉妹のことだからこそ、外から見ないと分からないこともあるのではないかとも思ったけれど、私達には無かったのだ。今Saint Snowに掛けるべき言葉が。だから私達は無理に二人の行方を追おうとはしなかった。

私はウォークマンからSaint Snowの曲を流しながら、みんなと乗り込んだ路面電車の車窓から空を見上げた。どんよりと曇る、今にも雪の降りそうな陰鬱な空を。

北海道に住む人は冬の間、こんな空ばかり見ているのだろうか？もちろん、天気好みなど人それぞれだけれど私はあまり好きになれそうにない。

そんな気持ちで曲を聴いていたからなのか、どこかSaint Snowの曲から閉塞感を感じられた。

「ねえ、星ちゃん」

「どうしたの、ルビィちゃん？」

ルビイちゃんは落ち着きのない様子で私だけに聞こえる位小さな声で言った。

「星ちゃんが穹さんと・・・ううん、ごめん。なんでもない」

それつきりルビイちゃんは顔を伏せてしまい、私はその真意を読み取ることは出来なかった。

質問の真意は読み取ることが出来なかったけれど、その意図はどこから端を発しているのかは分かる。

きつとルビイちゃんはSaint Snowのことが心配なのだろう。

けれど、終わりを迎えたグループがどうなるかなど、私に参考になるようなことは言えない。私の場合はあまりに身勝手に、一方的で、Saint Snowとは違う。

二人はまだ姉妹として毎日顔を合わせているのだから、これから機会など幾らでもあるのだ。

「大丈夫だよ、ルビイちゃん。あの二人はまだ致命的じゃないと思うよ」

けれど、渦中にある二人がそれが分かっているのか、私にはそれこそ判断できることじゃなかった。

だから、そんな根拠の薄い励ましに、ルビイちゃんは顔を上げることはなかった。

不意にスマホが着信を知らせる震えを私に伝えてきた。

私はポケットからスマホを出して着信を見ると、それは驚くことに穹からのものだった。

穹には今北海道に来ていることを一応連絡していたのだ。

その着信メッセージにはこう書いてあった。

『蟹、イクラ、ホタテ、イカ』

土産の注文にしては流石に多いよ、と苦笑いを噛み締めつつ、私は何となしに穹に今起きていることを書いて送った。

するとすぐさま返信が来た。

『お前も終わりがたくなければ早くしろ』

流石にぐうの音も出ない催促だった。

第三百三十七話

こじんまりとしたそこはだが、息苦しい圧迫感ではなく、心安まる温かみがあった。外が極寒なだけにここは凄く居心地がいい。店員さんも可愛いし文句の付け所はない。

「何？人の顔じつと見て」

「眼福ですなーって思っただ」

「ずーと音を起ててほうじ茶を啜りながらそう答えると態とらしくそっぽを向くのだから、あざといっただらない。」

「いい？食べたらずぐに出て行くのよ」

「理亞ー」

「そう。可愛いし店員さんとは他でもない、Saint Snowの二人のことだ。」

片やツインテールの吊り目がちな女の子。片やサイドテールのお姉さん。二人とも大正ロマン風の給仕服ベースにメイド風味のアレンジを効かせたピンクと黄色の制服に身を包み、カウンターの中から私達の相手をしてきている。

「ここは喫茶 菊泉。今流行の古民家カフェの先駆的存在で、函館の観光ガイドにも載るような有名なお茶処だ。」

北海道予選の次の日、市内観光と洒落込んだ私達が偶然にも辿り着いたのだ。

外装も内装も昔の物をそのまま使っていたり、囲炉裏だったところを炬燵にするアレンジをしたりと、所謂近代風ではなく、家庭的アレンジを施しておりとても気持ちが良い。

「良いお店ですね」

「本当に。これなら住めそうなくらい」

「住めそう、じゃなくて住んでるの」

「実際私達の自宅でもありますからね」

「つつけんどんな理亞さんと、苦笑いの聖良さん。表面上、取り繕えるくらいには気持ちの整理ができたのだろう。」

「でも驚きました。学校に寄られるかとは聴いては居ましたが」

「まさかドンピシャでお家まで来ちゃったなんてね」

「世間は存外狭いみたいです」

「それは私が保証する」

「鞠莉さんは世界中飛び回ってますもんね」

鞠莉さんの言葉の妙な説得力に苦笑いしながらも間違いではないと同意出来る部分もあった。

片田舎のスクールアイドルが偶々東京で出逢ったスクールアイドルに会いに函館まで来られるのだ。距離なんて壁は案外ハードルとしては低いのもかもしれない。それこそ距離なんてバイクをかつ飛ばして越えてくるくらいに。

「素敵な街ですね。落ち着いてて、ロマンティックで」

「ありがとうございます。私も理亜もここが好きで、大人になつたら二人でこの店を継いで暮らしていきたいねって」

何てこと無いその夢を語る聖良さんの姿は、何処か親しい誰かに、いや、彼女達に似ていた。地元が大好きで、みんなが大好きで、だから精一杯一緒に居る、そんな彼女達に。

「残念でしたわね。昨日は」

だからだろうか。普通なら踏み込まないそれに触れたのは。

誰もが避けようとしたそれをダイヤさんが口にした。

「いえ、でも」

「食べたらさっさと出て行って」

「理亜、なんて言い方を」

言い淀む聖良さんに先じて理亜さんはそう言い捨てると、何事かをルビィちゃんに耳打ちして奥の厨房へと引つ込んでしまった。

「ごめんなさい。まだちょっと昨日のこと引つ掛かってるみたいで」

「そうですね、やっぱり」

「会場でもちよつと喧嘩してみたじゃない」

喧嘩してたという情報のソースは不明だけど、そんなうわさ話を会場で言っていた人達もいたのは事実だ。けれど、根拠の内ことを言うなど花丸ちゃんがジト目で善子ちゃんを睨め付けていた。

「いいんですよ。ラブライブですからね。ああいうこともあります。」

私は後悔していません」

聖良さんは本当に大人だ。後悔はないというその言葉が嘘か、本当か、まるで読み取れない。

「だから理亜もきつと次はー」

「いやー！何度言っても同じ、私は続けない。スクールアイドルは…… Saint Snowはもう終わり！」

次、という展望を理亜さんは許容できないのか、厨房から姿を見せると、聖良さんの言葉を真っ向から否定した。

「本当にいいの？あなたはまだ1年生。来年だつてチャンスは」

「いい！だからもう関係ないから。ラブライブも、スクールアイドルもー！」

「お恥ずかしい所を見せてしまいましたね。ごゆっくり」

自分のことは完璧にコントロールしているけれども、理亜さんのことはそうではないみたいで、どこか寂しそうな顔をする聖良さんが頭から離れない。

私達のごゆっくり出来るはずもなく、デザートをしつかりと平らげて店を後にした。

「何も止めちゃうことないのに」

「でも理亜ちゃん、続けるにしても来年は一人になっちゃうんでしょ」

理亜さんがスクールアイドルを今後続けていくのは困難であるのは間違いない。それは分かる。

聖良さんと同等の人材はそうはいない。

それにステージで起きたミスが心にこびり付いているのならそれを乗り越えないと次など考えられないだろう。

「結局、ステージのミスってステージで取り返すしかないんだよね」

「でも、すぐ切り替えられるほど人の心は簡単ではないってことですわ」

それ以前に、聖良さんの変わりなど理亜さんにとって居ないのでは無いか？そう、私にとっての穹と同じように。

「自信無くしちゃったのかな？」

「違うと思う。聖良さんが居なくなっちゃうから、お姉ちゃんと一緒

に続けられないのか嫌なんだと思う。お姉ちゃんが居ないなら、もう続けたくないって」

ルビイちゃんが言ったその言葉は果たして理亞さんの気持ちを代弁した言葉なのか、それともルビイちゃん自身の言葉だったのか。

「そう、だよね」

「ち、違うの！えと、これは理亞ちゃんが泣いてて、」

「泣いて?」

「ピギイ!?う、うあああ!」

盛大に自爆したと思つてルビイちゃんは走り去ってしまった。

「任せてください」

それをダイヤさんがゆっくりと後を追う。ルビイちゃんが何処に行くかなどお見通しだと言わんばかりに。

「他人事じゃないんだよね」

「私達はスクールアイドル」

「その時は必ず来るもの」

S a i n t S n o wを通じて奇しくも自分達の未来を垣間見た A q u o r s メンバーはそれぞれどんなことを考えているのだろうか？

私とは言えばみんなとは少し違う想いがあった。

どんな形にせよ、最後まで駆け抜けたならそれは一つの終わり。私の方に半端な終わりでないだけ美しい終わり方なのではないかと少しだけ羨ましかった。

「どこを終着駅にするのか、決めるのはみんなだよ」

けれど、私はみんなのお陰で終わったと思つたそれが終わりじゃないことを教えて貰った。

だからきつと、みんなが思っているより、最後となるのはずっと先なんじゃないかと思う。

きつとS a i n t S n o wだつてそれは同じ。

私は聖良さんにメッセージを送り、少ししてダイヤさんに手を引かれて戻ってきたルビイちゃん達と市内観光に戻った。

第三百三十八話

函館に観光に来るにあたり必ずと言って良いほど話題になるのが函館山から見る夜景だ。百万ドルの夜景と称されるそれは年頃の女の子なら必ず惹かれるだろう。だというのに、何故か今回の観光プランにはそれがない。だから機会があれば絶対に行こうと決めていたのだけれど、まさかこんな形で訪れるとは思わなかった。

「どう？私の街は」

「なんていうか、手が届きそうですね」

くびれた壺型を街の灯りが綺麗に形取る。眼下に広がるそれはだが、函館山があまり高くない事もあって、その存在が隔絶されたものではなく自分と地続きなものであると、身近に感じられる。

なるほど。確かにこの輝きの中に自分の場所があると自覚できたならずつと暮らしていきたいと思えるかもしれない。

「こんな所に呼び出して。何をしてくれるのです？」

私は聖良さんをここに呼び出した。それは愛の告白でもなければ、別れの挨拶でもない。鞠莉さんならばきつと「ぶっちゃけトーク、する所だよ」なんておちやらかした様子で言うかもしれない。

生憎私にはそんな雰囲気醸し出すことは出来ないし、聖良さんから本音を引き出すほどの話術はない。これが理亞さんなら違ったかもしれないが。

「セツシヨンしましょう」

私に出来ることはずつと変わらない。どこの誰とでも、どんな時でもこれしかない。

私の申し出に、さしもの聖良さんも表情を崩し、目を見開いて驚いていた。

「驚きました。でもそんな話もいつだったかしましたね」

「告白でもされるかと思いましたか？」

「経験上、その可能性も想定はしました」

「告白されたことあったんですか！聖良さん女子校ですよね！」

「さて、どうですかね」

意味深に笑う聖良さんに逆に一杯食わされてしまったが、否定しないということはあるがち冗談ではないのかもしれない。女子目線から見ても聖良さんは素敵女子だ。

「それで、どんな曲を？」

「二人が知ってる曲って限られますから。ですので選曲したのは『Private Wars』」

「A—RISEね」

私はマスクと手袋を外してポケットにねじ込むと、逆にハーモニカを取りだして構えた。

流石に冬真っ盛りの函館の山頂。防寒していても少し屋外で待っているだけで口も手も悴んでしまったため、適当に慣らしで音を奏でると聖良さんの目つきが変わった。

「ハーモニカって結構変幻自在なんだね。そこまで小さな音出せるとは思わなかった」

「逆にキツいんですよ、大きい音出すより。それでははじめましょうか」

「A—RISEで『Private Wars』」

テクノ風味のある楽曲が特徴のA—RISEの曲はハーモニカの単音とタップの4ビートだけでは相性が良いとは言えない。けれど、そこは私達二人の楽曲への理解力がカバーする。

本来は三人のグループであるけれど、私達はダンスを二人でこなす。幸いA—RISEの振付は魅せを重視しているため、それ程複雑ではない。

「本気が苦しい そんな弱音より

涼しい顔して走りたいの

お願いはしない 諦めもしない

華麗にsuper action please」

私はSaint SnowがA—RISEに影響を受けてスクールアイドルを目指したということからイメージが湧いたのは理亞さんよりも聖良さんだった。

聖良さんは多分普段は自分のことをオブラートに包んでいる。で

なければ、あんなに闘争心剥き出しだったり、迷いだったり、承認欲求のある曲を作れないだろう。

もしかしたら私の勘違いなのかもしれないし、勘違いじゃないとしても何故そうなったのかは分からない。だから私はそのルーツを知りたい。知って、聖良さんがどうしたいのか聴きたい。

一度は終わりを選んでしまった者として、そして、今改めてそれを撤回したいと考えている者として、Saint Snowの行く末が知りたいのだ。ただ聖なる少女は趣味じゃないであろう、この少女の口から。

「……………ふう、流石は振付も完璧ですね。二人での振付アレンジは理亞さん？」

「そうですね。やっぱりカバーから私達も入りましたから。理亞と完璧にコピーしたものです。星さんも噂に違わぬ奇抜さでした」

「それ程でも」
はあ、と白い息を吐き出して持ってきていたホットコーヒーを煽る。寒いこの土地にはやはりマックスコーヒーは最適だ。

「機会があれば貴方のパフォーマンスを、ジエミニのアカリとしてのパフォーマンスで見たいですね」

「約束は出来ませんが最大限の努力はしますよ」

暖まったむせかえるような糖分を染み渡らせる。そして、聖良さんの言葉もまた私の内側まで響き渡った。いずれ、きつと、そうなりたいた。そうなれたらいいなど。

「……………それで、私から何が聞きたいんです？」

「流石はお見通しですね」

お見通しの聖良さんに苦笑しつつ、なら遠慮無く、と私はズバリ聴いた。

「聖良さんって結構カマトトぶってませんか？私の予想だともっとパンクな気がするんですよ」

「その心は？」

「だって由緒あるお嬢様学校でしょ。それも函館とは言え片田舎の。スクールアイドルなんてやってる人いなかったでしょ？だから白眼

視されたり、内心笑われたりとか、そういう風にされてたんじやないんですか？」

最初にそう思ったのは、昼間に聖良さん達の店で善子ちゃんが失言した際の反応だ。余りにもぶれなすぎると聖良さんの様子に、私は一つの仮説を立てた。適切な場面で適切に振る舞うのではなく、常に仮初の姿を振る舞っているのではないかと。もちろん、だからどうしたという話なのだが。

「・・・間違つてないですよ。確かに、私がスクールアイドルやるつて言い出したとき、皆冷めた反応をしましたよ」

懐かしむように聖良さんは語った。別に隠すような内容でも、恥じるような内容でもないのだと。

「スクールアイドルをやれるのは高校生のみ。だから理亜が高校生になるまでの2年間、私は一人でスクールアイドル活動をしていました」

もちろん、人数が足りないから部活なんて大層なものではなく、ライブにエントリーする際やイベントに出る際に必要な時に学校の名前を借りるような、そんな活動だった。

「普段の活動実態もよく分からない同好会以下の活動。クラスメートによく『なんでやってんの？』なんて言われましたよ。それに、ライブにエントリーするから学校の名前を使いますって生徒会に申請出した時も先輩から鼻で笑われたりもしました」

誰からも理解されず、ただ理亜さんが入学する時の下地を作るためにずっと頑張り続けた。

「もちろんスクールアイドルは今グループが主流の時代。ソロの私なんて予備予選通過がやっとって有様。きつと陰口だって叩かれてたんじやないのかな」

人は基本的な性質として異種を拒む。価値観の理解出来ない聖良さんなんて恰好の的だっただろう。それも女子の陰口は陰湿だ。表だっては可愛いと褒め称えても、裏ではあの子は自分を可愛いと思っているなんて言っているのが常だ。

「でも辛くはありませんでしたよ。寧ろ妥当な評価とさえ思っていま

した」

「酸いも甘いもあつてこそスクールアイドルだど？」

「そうですね。それを音に乗せてこそスクールアイドルの音楽は素晴らしいのだと、そう思います。それに、完全に自己を律している私の姿を理亜も好ましいと思っているみたいだったし」

だからこそ“SELF CONTROL”だ。

自分の持つ絶対的価値観、理亜さんの求める自分、それらが噛み合った結果、今の聖良さんが作り上げられたのだ。故にこの楽曲は他人と自分との壁を如実に表しているし、自分達なりのやり方で見返そうという気概に溢れているのだろう。

「今年になって理亜と一緒にやり始めて本当に楽しかった。これまでため込んでいたもの、全部吐き出すような毎日だった」

あつという間に北海道のトップスクールアイドルにまで上り詰めたのだからそれはもう、スカツとしただろう。

「でも、私は自分のことに夢中で一つ見落としていたんです」

「理亜さんのことですか？」

「厳密には違いますが、まあそうです。私達は今を追い掛ける余り、終わりのことを考えてなかったんです」

頂きを目指してひた走り続けて、けれど、立ち止まるその時のことを考えていなかった二人は今、完全に今すら見失っている。そんな感じなのだろう。

「まさかこんな風に負けるなんてね」

「負けなんですか？」

「負けは負け。ラブライブだからね」

「だから止める？」

「分らない。でも、理亜には続けて欲しいな」

「理亜さんがそれを望まなくても？」

「そんな強要するつもりはありませんよ。でも、そっか・・・いつも当たり前のようにいたから改めて確認してなかったです」

あなたはスクールアイドルが好きなのかと。

「あーあ、私駄目姉ですね」

展望台の手摺りに力無く寄りかかると、聖良さんは天を仰いでそう漏らした。

「・・・星さん」

「なんです?」

「スクールアイドルのその先ってなんだと思う?」

「色々ありますよ」

A—RISEはプロに転向した。μsはそうならなかったけれど、詳細は語られていない。その他にも音楽関係の道に進んだり、デザイン関係の道に進んだり、インディーズ活動を続けたりと千差万別だ。

「私達にも、Saint Snowにもそれがあのかな?」

「どうでしょうね?寧ろ、私が知りたいですよ」

「なんですかそれ。説得しに来たのでは?」

「・・・強いて言うなら」

私はここに来る時に、一足先にホテルを出るルビィちゃんの姿を思い出した。

そのエメラルドグリーンの眼差しは常に無い力強さを秘めていた。

いつもは弱々しいその小さな背中には覚悟があった。

馴れない凍結しだした道を歩く足は覚束なかったけれど、迷いはなかった。

「・・・その答えはきくと、理亞さんが導いてくれるんじゃないかな?」

遠くない未来にきくと、自分の気持ちを胸に姉の元にやってくるであろう彼女、いや彼女達の姿を幻視して、私はそう聖良さんに答えた。

「何ですか、それ」

ふ、と笑う聖良さんは相変わらず空に向けて白い息を吐き続けているた。

私もまたその泣き出しそうな空を見上げる。

薄く広がる雲はだが、何の気紛れかカーテンを捲るように星空を垣間見させる。

函館に来てから初めてまともに見られた星空は、少女の心のように

深遠で、希望のような小さな光を称えていた。

第三百二十九話

聖良さんとそれはもう素敵な夜を過ごした次の日、私や花丸ちゃん、善子ちゃんはルビイちゃんに相談を持ちかけられ、函館が誇るファストフードの名店“ラッキーピエロ ベイエリア本店”にお邪魔していた。

この店は外装からして攻めに攻め、その名の通り派手な黄色いピエロの看板がドデカく貼り出され、一見すると何の店か分からないデザインの店構えとなっている。

その内装もユニークで、普通のカウンター席、ソファ席の他にブランコ席があるのだ。文字通り、天井からブランコが吊されている四人席。ソロでそこに通された暁には、間違いなく次の人に席を譲るだろう。もしくは別の席の人に相席を頼むだろう。幸いにして今回はソファ席に通されたけれど。

「一人じゃないならブランコでもよかつたずら」

「私は嫌よ。子供じゃあるまいし」

「いや、子供というより寧ろパリピよね」

花丸ちゃんの言うとおり女も三人集まれば姦しいと言われるように、複数名集まれば所謂ハイというやつになり多少の羞恥も楽しめるような異常な精神状態になれる。

もつとも今日は私を含めた1年生ズと理亞さんの五人だから物理的にブランコ席は無理だったか。

「ああいう連んで騒ぐ連中って好きじゃないんだけど」

「まあそうだね」

人にドン引きされない程度が丁度良いという点では理亞さんに同意だ。

「と言うかこんなに人が居るなんて聴いてない」

そう言って理亞さんはルビイちゃんをジト目で見詰めると、ルビイちゃんは若干の後ろめたさがあったのか、頬を人差し指で掻きながら目を逸らす。

「ルビイちゃんはどうしても理亞ちゃんに協力したいずら」

「さつきも似たようなこと言ったけど、余り人と連むのって苦手なの」
「それなら安心してよ」

「マルもルビィちゃんもそうずら。善子ちゃんに至っては不登校だったずら」

「ヨハネよ」

「正確には屋上登校だったかな」

「何それ。というか、ずら？」

怪訝な顔で花丸ちゃんを見詰める理亞さんの様子に、方言が出てしまったことを悟り、手で口を抑える花丸ちゃんは見えていて面白い。

そんな仕草がまた可愛いのが相変わらずズルい。

「お、おら」

「おら？」

「まあまあ、コミュ障も四人集まれば何とやら」

「それ余計不安なんだけど。それに、誰か一人含まれて無いみたいなんだけど」

「星ちゃんも大概ずら。詳細は・・・省くずら」

「何それ。余計気になるんだけど」

「そうね。それが知りたければ我がリトルデーモンになるとここで誓いなさい」

「ならいいわ」

「こーら。人の秘密を勝手に出汁に使わないの」
「痛てっ!？」

そう言つて私は善子ちゃんの右側頭部にあるお団子に刺さつてい
る黒い羽を取ったのだけれど、妙にリアルな反応を返されてしまつて
逆に関心してしまった。

「とにかく、私も理亞ちゃんと同じ。お姉ちゃんに私達は大丈夫つて
思つて貰いたいの」

「それは・・・分かつてる」

昨日私が聖良さんと話をしている裏で、ルビィちゃんは理亞さんと
1対1で話をしたらしい。

秘密という訳では無いだろうけど、細かいことは二人だけの大切な

思い出なのだろう。

部屋に帰ってきてからルビイちゃんは概要を話ながらも皆まで言わなかった。けれど、ルビイちゃんが共感した気持ち、抱いた想いは伝わった。一番最年少の私達がしつかりしなければ、やれると見せつけなければいけないのだと。

だから私達はルビイちゃんに協力することにしたのだ。

人見知りで、ビビりで、でもこれと決めたら引かないルビイちゃんのことを信用して。

理亞さんもそんなルビイちゃんのことをある程度信用しているからか、反感は尻すぼみになった。

「自己紹介は不要かもしれないけど、こう言うのは儀式みたいなものでしょ。という事で善子ちゃんからどうぞ」

「儀式、くくつ、良い響きーって、だからヨハネよ」

「ーってー」

まるで不思議なものを見るかのような理亞さんの視線にいたたまれなくなつたのか、善子改めヨハネちゃんは咳払いをして続けた

「こほん。ハアイ、墮天使のヨハネよ。リトルデーモン10号は、君に決定！一緒に墮天しよ」

「新興宗教とか、そういうのお断りのんですけど」

「ちーがーう！」

「津島善子ちゃんのアイデンティティすら。どうかご容赦いただきましたい。因みに私は国木田花丸ずら」

「そのズラもアイデンティティなの？」

「そ、そんなことない、ない、アル」

「何故中華風!?って言うか、それ無いの有るのどっちなの？」

「ない、ある・・・ないある、ナイアルラトホテプ!」

「はいはい」

「はいはい・・・這い寄る混沌!」

「もう、話進まないじゃない。それで貴女はー」

どうも今日の善子ちゃんは絶好調な様子で一々反応するものだから、業を煮やしたのか理亞さんが無理矢理ぶった切り私に振った。

「私は黒松星。クロマツでもホシでもないからね」

「うん。よろしくホシさん」

「だから荒川アンダーザブリτζジじゃねえっての！」

なんて、少しは緊張も解れてきたのか、クスリと笑う理亞さんを見て、ふと気付く。この子のこんな表情を見るのは函館に来てから初めてだと。

S a i n t S n o wのPVなんかでは不敵に笑う表情をしてもこんな風に可愛らしく笑う姿は無かっただけに新鮮だ。

「それで、今日は早速なんだけど、楽曲の方向性を決めたいなっと思って」

「クリスマスイベントでライブするために新規で書き下ろすの？」

「うん。企画だけしてっつのじゃイマイチやれたって気がしないと思うの」

ルビイちゃんと理亞さんは函館市内で行われるクリスマスイベントに出てライブを行うという計画をしている。

確かに既存楽曲を二グループでカバーコラボするのでは捻りが無い。私にもそれは覚えがある。

穹と文化祭の演し物に出ようとした時のことだ。

それまでカバー活動を中心にやっていたけれど、完全オリジナルのものを披露するのは今しか無いと勇んでやったのは良い思い出で悪い悪夢だ。

カバーはそれなりに好評だったけど、オリジナルはやはり耳慣れないからか、それほど反応は無かったのが正直なところだった。けれど、やりきった。それは自信に？がったものだ。

「それで理亞ちゃんには試しに歌詞を書いてきて貰ったんだけど…」

「書いたわよ。悪い！」

「いや、何も言っていないから」

「ねえ、本当に見るの？」

「見ないと意味ないでしょ」

「ううーはい！」

「ぶへっ!？」

理亞さんから開いたノートを顔面に叩きつけられて、思わず乙女らしかなぬ声をあげてしまった。

不器用そうな子なんだと諦めて、私達はノートに走る歌詞を読み進める。

「これはまた」

「うん。方向性はよく伝わるすら」

それはとても熱く、前のめりで、そして、大好きが沢山詰まった理亞さんの想い。不器用で、何の捻りも無くて、だからこそ、その強さだけが胸に突き刺さる、そんな歌詞だった。

私達は顔を見合わせて笑った。その歌詞の幼稚さではない。理亞さんとは上手くやっていける。そんな期待に胸を膨らませてだ。

第四百四十話

ラッキーピエロでの会合は一端お開きとなり、私達4人は理亞さんに東の間の別れを告げて、急ぎホテルに戻りみんなと合流した。

今日は当初の予定なら旅行最終日。だから飛行機のキャンセルやみんなへの説明をしなければならぬのだ。

「残る!?!」

「理亞ちゃんがまだ元気がないぞら」

「だから少しでも気が紛れればと思つて」

けれど、クリスマスイベントでライブをやるために残るとは言えない。言えばみんなは手伝ってくれるだろうけれど、今回の計画は理亞ちゃんを励ますだけではない。ルビイちゃんを初めとした私達が、私達だけでもやっていけると、頼りになるだけの力があるのだと証明することもまた含まれているのだ。

「もう少し布教してから帰るわ」

「もう少し、あの二人のその先を見てようと思ひます」

「善子ちゃんとはかく、偶にはそういうのも良いんじゃない」

「ヨハネよ!最近扱い雑じゃない!」

言つていて理由になつていような、なつていないような微妙な言い回しになつてしまつたと思つたけれど、何かを察したのか千歌先輩が後押ししてくれた。

「でも泊まるどころはどうするの?」

「理亞ちゃんの家にお邪魔しようと思ふの」

「居心地良かったもんね」

「ルビイ。くれぐれも粗相の無いように、ちゃんとするのですよ」

「うゆ」

言葉だけ聴くと、落ち着きの無い妹に注意を促しているようにも聞こえるが、信頼を向けたダイヤさんの視線には注意するということよりも、頑張りなさいと、そう激励しているように思えた。

ダイヤさんも何も知らないだろうけれど、何かしらを感じているだろう。私達が何かをしようとしていると。

「それじゃ、先に」

「はい。行ってらっしゃい」

「なんか変な感じだね。函館まで来てこうやって見送られるのって」

ホテルの前で私達は別れ、荷物を片手に喫茶菊泉に向かう。

「まさか冬真つ盛りなこの時期に北海道で過ごすことになるなんて」

「スクールアイドルやってなかったら今頃善子ちゃんは生配信する毎日すら」

「ズラ丸こそ、お寺でお経でもよんでいたんじゃないの？」

「ところがオラは聖歌隊に入ってるからこの時期は歌の練習すら」

「あんた、ホントごった煮よね」

確かに花丸ちゃんは中々謎の多いプロフィールをしている。

寺の孫娘で、聖歌隊で、文学少女で、食いしん坊。これだけ聴くと人物像がまるで浮かばない。

「それを言うなら皆そうずら。春には新しい知り合いとたわいのない嘘に笑って、夏にはお盆休みやお祭り、秋には仮装したり美味しいものを楽しんで、冬にはクリスマスを過ぎたと思ったらお節料理を食べているんだから」

けれど、花丸ちゃんの言うように日本人はそんなものだ。プロフィールで見える人物像なんてたかが知れていて、だからこそ触れあうことで新しい一面を垣間見ることができるのだ。

入学式のあの日、千歌先輩にスクールアイドル部への勧誘を受けていなかったら、もしかしたら花丸ちゃんと私はただのクラスメイトで、お互い良く知らぬまま過ぎ去っていたかもしれない。

「でも、いいの？お寺のお孫さんが嘘ついちゃって」

「解釈の違いすら。オラには理亜ちゃんにはまだまだ元気が足りないように見えるすら」

「うゆ」

些かファンキーなところがあるのも愛嬌というやつだ。

ともかく私達は無事にみんなを丸め込むことが出来たのだから。

「そうだ、一つ言っておかなくちゃいけないんだけど、曲作りに
は—————」

「うん。分かってる」

「不干渉だつて言いたいでしょ」

それをするのは穹とのケジメがついてからだ。その誓約は今回も変わらない。

「その分、きつちり働くよ」

クリスマスまでの短い期間で楽曲を製作するとなるとほぼかかりきりになるだろう。その間、店の手伝いを出来ない理亞さんの穴を埋める必要がある、その役目を果たすのに私という人材が最適なのだ。

「ごめんね、星ちゃん」

「そういうのは言いつこなしだよ」

私が肩入れしているのは私の個人的な心情からなのだから、ルビィちゃんが気にする事では無いのだ。

「さて、着きましたな」

函館国際ホテルを出て、今日既に一度通った海沿いを歩くこと約10分。函館の名所である八幡坂を荷物片手にえっちらおっちら上り、函館西高前を右に曲がると、先日伺ったばかりの喫茶菊泉に到着した。

「御免下さいーい」

「いらつしやいませ」

「いらつしやい。こつちよ」

暖簾を潜ると、聖良さんと理亞さんが待ち構えていた。

既に理亞さんが話を付けてくれたのか、聖良さんはニコニコと笑顔で通してくれた。

理亞さんの後を追って客間を通り抜けて細い廊下を抜けて突き当たりまで移動した。

「いい？好きに使って良いけど勝手に物に触ったりしないですよ」

「振りですね、分かります」

「アンタは部屋に入れないから」

「冗談だつて。勝手にベッドにダイブしたりしないから」

「星ちゃん、そんなことしようとしてたんだ」

理亞さんは一々反応してくれるからついボケ倒したくなるのだが、

反面、話が進まなくなってしまう。

ともかく気を取り直して部屋に入れて貰うとそこは小綺麗に纏まった物の少ない部屋だった。

「あまり物を置かない主義なの？」

「いい？タンスは開けちゃだめよ」

「ははあ、ワカリマシタ。ゼツタイニアケマセン」

「姉様ー。黒松さんだけ沼津帰るってー」

「ちよ、理亞さん!?冗談だつて。宿無しだけはご勘弁を！」

そんな茶番を見守っていたルビイちゃんだが、ふと、溢れた言葉に私達は一時停止を余儀なくされた。

「なんで理亞ちゃんと星ちゃんはお互い、〴〵さん〴〵付けなの？」

そう言われると確かに私は、〴〵さん〴〵付けている。けれど、それはほぼ初対面であるし当たり前のような気もする。下の名前なのはお姉さんである聖良さんが居るのだから仕方ないとして、それ程疑問に思われるような事なのだろうか？

「それを言うならルビイちゃんも花丸ちゃんも善子ちゃんもみんな最初は、〴〵苗字〴〵さん〴〵だつたけど？」

「いきなり馴れ馴れしくは呼べない。そういう友達学校にも居ないし」

「まあ呼びやすい言い方で良いよ。なんとなく気になつただけだから」

私がみんなを、〴〵苗字〴〵さん〴〵付けから下の名前で呼ぶようになったのはそれなりに親しくなつたと思つてからだ。それに私達の名前は個性的な名前が多く、名前がそのまま愛称になつている。もつとも、善子ちゃんはヨハネをゴリ押ししてくるけれど。

では穹はどうだつたかと言われると、穹はコンビを組む前から穹だつたし、クラスの皆もそう呼んでいた。感覚的なものだけけれど、明里と読む日本的な呼び方よりも穹というキーワード的な呼び方の方がイメージに合うのだ。それにその響きは実に穹に良く似合つていた。だから皆穹を呼ぶ時、その単純な響きを好んでいた。

そう思いだし、私は理亞さんを改めて目詰めてみる。そして、どち

らで呼ぶ方がイメージに合うか考えるまでも無く答えは出た。
次に呼ぶときは、さり気なく言ってみようと、そう思った。

第四百四十一話

ルビイちゃん達が理亞さんの部屋で楽曲テーマについて話し合いをしている間、私は聖良さんと店番をしていた。けれど冬の北海道は夏に比べるとやはり観光客も少なく、冬休み期間に入っているため夕方時間帯でも街にいる学生も少ない。自然と店の客足も少なく、忙しいとは言えない時間を聖良さんとお茶を片手にお喋りしながら時間を過ごした。

「理亞が誰かをお招きするなんて初めてなんですよ」

「それはちよつと盛ってませんか？」

「そうですね。でも、それくらい理亞が人見知りつてことです」

人と連るむのは苦手と本人も口にしていただけけれど、その理由が人見知りとは、まあ分かりやすいというか、なんというか。

けれど思い当たらないこともない。理亞さんは態度が幾分つっけんどんなところがあるため、初対面の人は印象を悪くする可能性があることは否めない。

「それ言つたつて理亞さんに知れたらきつと怒りますよ」

「やだ、私つたら。こんなこと今までなかったからつい」

親などが子供の黒歴史を何時まで経つても忘れずに笑い話にするのを誰もが経験したことがあると思うが、あれは正直たまつたものではない。

理亞さんの名譽のためにも、また姉妹仲を守るためにも今のことは黙つておこうと思つた。

「理亞つたら店番を人に任せて何をしているやら」

「ホント何をしているんでしょうね」

聖良さんは具体的には分からずとも流石に何かしらを察しているようだ。それを良い変化と捉えてくれていたようで一安心。また、理亞さんの口から話題にならない限り深堀りするような野暮なこととはしないため有難い。

「いつも練習は夜にやっていたんですか？」

「そうですね。学校から帰ってきたらお店の手伝いをして、閉店して

から練習。冬は死ぬほど寒いからもう大変で」

「その辺やっぱり地域性でますね」

「沼津はどうなんですか？」

「私はもともと埼玉出身ですから、沼津を語れるほどでも無いですが、そうですね・・・日暮れが早い気がしますね。冬の寒さはここほどではないにしても、海側から冷たい風が来るときは激寒ですね」

ずっと沼津に住んでいたならそんなことを思わないかもしれないけれど、埼玉県北部とはいえ平野部に住んでいた私からすると、山間にある沼津は太陽が山陰に隠れてしまうため夕方が早い、特に冬に入ってからそれはよく実感する。

「それに地域が広い割には交通網が微妙で、全員がちゃんと帰れるように練習するってなると制約がありますね」

「九人となると大変なんですね。家は姉妹でやってたからそこは楽しんでよ」

「学校が徒歩1分とか、こっちは大違い」

「近いと逆に気が抜けて遅刻しそうになるんですよ」

流石にしたことはないですけどね、と言葉を添えて恥ずかしそうに聖良さんは笑った。

「全国津々浦々、色んなスクールアイドルがそれぞれの場所で、色んな折り合いをつけながら活動をしているんですね」

私もまた聖良さんにつられてお茶を口にする。いつの間にか時間が経ったのか、お茶はすでに冷たくなっていった。

「才能を持っていても、身を置く環境によつてその才能を開花させられない人もきつと居る。私は・・・私達Saint Snowはそうはなりたくなかった」

練習時間、練習場所、作曲環境や資料調達環境、下積みする機会などやはり都心部で活動するスクールアイドルが有利であることは間違いない。けれど、それを理由に自分達の全てを出しきれないことを善しとしなかったのがSaint Snowで、そしてAqoursだ。

「周囲の言葉に惑わされずに私達は私達の道を行く。そうやって活動

してきたのでA q o u r sとはアプローチが違ったと思いますよ」

「そうですね。自分達の道を行くというのはA q o u r sにとつては途中で獲得した価値観でしたよ」

「だから初めてA q o u r sを見たときは何て弱々しいんだって、そう思いました。でも、私達に無いものもありました。自分達の力だけじゃない、他の誰かと作るスクールアイドル像。『夢で夜空を照らしたい』のPVを見た時は少しそれを羨ましいとも感じました。あの空に昇っていったランタンにはきつと色んな人の願いとか想いが詰まっているんだなって、胸がドキドキしたのを覚えています」

東京でのイベントにA q o u r sが参加する切っ掛けとなった楽曲は、けれど、そのイベントでは評価されることはなかった。それはPVあつての、皆の力があつての評価だったからだ。それをこのように誉められるのは、PV作りに協力した身として嬉しい限りだ。

「きつと理亞も同じことを感じたと思います。私達とは違うスクールアイドルの在り方・・・理亞もスクールアイドルを続けてくれるなら、今とは違うスクールアイドルになるかもしれないですね」

どちらが優れているかではなく、スクールアイドルという時間を楽しんで欲しいと、聖良さんの言葉にはそんな響きがあった。

今まさに理亞さんがしていることはそうなのだと、私の口からは言えず、誤魔化すように冷たくなったお茶を音を発てて啜った。

「星さんはスクールアイドルになろうとは思わなかったんですか？」

色々と話をしているとやはり深い部分にも自然と話が流れていく。今まで聖良さんは突っ込んだ話をしてくれだし、自分の思っていることも隠さずに話してくれた。だから私も少しは自分の話をしてもいいかと、そう思えた。

「そう思っていた時期が私にもありました。音ノ木坂学院に入学して音楽をしようって、場合によってはスクールアイドルとしてやっていくのも良いかもねって」

でも、そうはならなかった。私の嘘が原因で、住む場所が離れる以上に心の距離が離れてしまったから。

「嘘を真に、ってそう思いたかったんです。でも、そうはならなくて」

「離れ離れになってそれっきりなんですか？」

「今はその嘘と向き合っているとします。なんとか穹とも連絡できたのですが、答えは音楽で聴かせろって」

「その子も結構パンクな子ね」

「そうなんです。パット見はお嬢様のように澄ましてるのにもう活動的で、多趣味でー」

気付けば私は穹のことを聖良さんに話していた。会ったことのない、そしてこれからも会うことなどないであろう人のことなんて聴かされてもしようがないだろうに、聖良さんは私の話を微笑ましく聴いてくれた。

たぶん、理亞さんも自分の好きなことをこんな風に夢中になってお姉ちゃんに話しているのかな、と後になってそう思った。

「お土産まで請求してくるんだから、ちやつかりしてますよね」

「函館滞在が延びることはもう連絡しているんですか？」

そういえば忘れていた。

私は閉店した後でお土産の配送を依頼しに行き、穹にお土産を送った件と、クリスマスまで函館にいる件を連絡した。

第四百四十二話

冬の北海道の、それも夜に態々外を出歩くなんて私の頭はどうかしているのだろうか？でも、理亞さんの部屋から外を見ると空には雲ひとつなく、とても綺麗な星空だったからもつと大きく外を見たいと思ったのは致し方ないことだろう。

夕食後、食器を洗うのを手伝ってから上着を着込んで静かに外に出ると、鹿角家から徒歩一分ほどにある学校の敷地内に入り込んだ。

他校に、それも完全に営業時間外に入るなんてちよつと気が引けるけれど、別に悪さする訳ではないし、校舎内には入るつもりはない。それに、いても不自然ではない年齢なのだからグレーゾーンだ、きつと。

この学校は浦の星女学院と同じ様に坂の上にあるけれど、校庭は校舎の更の上にあり、

そのため白い息を吐きながら坂を上っていくと段々と体も暖まってきた。そうなると刺すような寒さも幾分気持ち良く感じる。雪が降っていたらまた違っていただろうと思いつつ歩いてみると、やがて広い交代に出た。

野球やテニスをする専用の校庭とサッカーや陸上をする校庭が併設されており、とても広い。

そのお陰で山側に寄って空を眺めると遮蔽物のない、とても大きな空を見ることが出来る。

澄んだ冬の空はとても綺麗びやかで、地上にある百万ドルの夜景にだって劣らない。きつと観光に来る人の大半は冬場を避けているだろうからこの空を見ることができないのだろう。

函館山からの展望台で景色を眺めたなら、鏡写しになっていると錯覚してしまうかもしれない。

「何やってんのよ、こんな時間に」

「んー、夜のお散歩？」

いつの間にか着いてきていたのか、理亞さんが私に呆れたように声を掛け、私の返答のテキトーさに白い息を吐き出してまた呆れた。

「楽曲のテーマは？」

「決まった。眠っている・・・秘められた力の覚醒」

満天の星空に向けていた視線を理亞さんに向けると、その顔には自信が満ちていた。そして、その瞳には頭上の星空に負けない輝きが宿っていた。

「なんか意外。理亞さんってもっとクールな印象だったけど、結構：：んー、わんぱく？」

「テーマが決まったのが嬉しくてアンタに言いに来た訳じゃないから！勝手にどっか行くから気になっただけだし」

話せば話すほど私の中にあつた鹿角 理亞という人物像が変わっていく。でもそれは不快でも何でもなく面白いと思う。本当に、人は接してみないと分からないし、接してみても初めて見える姿があるのだ。

例えばルビィちゃんなんて人見知りなクセにダイヤさんのことを語ると饒舌になる。

花丸ちゃんも引つ込み思案なところがあるけれど本や哲学を語るといつまでも話せる。

善子ちゃんは普段墮天使というキャラクターを纏っているけれど、TPOに応じて礼儀を弁えた行動や言動がしっかりできるのだ。

それらは普段から接していたからこそ気付くことのできる特徴なのだ。

「だいたい、それを言ったら私だってアンタの印象、かなり違うんだけど」

「どんな印象ーっていうか、ほぼ今回の北海道旅行が初対面だし印象も何も無いんじゃない？」

「姉様と一緒に芽が出そうなグループはリサーチをしていたの。それに、最近姉様と連絡取り合ってたでしょ。だから調べたのよ」

「ジェミニのアカリを？」

「そう。あんなパフォーマンズしてるの他にも先にもアンタ達だけ。アンタ達だけのオリジナルー悔しいけどカッコ良かった」

ジェミニのアカリについて鹿角姉妹が知っていることは私も知っ

ていた。けれど、まさかこの函館の地でそんな感想を直に聞くことになるとは夢にも思ってみなかつた。

「アンターーーー」

埼玉から北海道まで一体どれ程の距離があるのだろうか？

ジェミニのアカリとして活動してからどれ程の音楽が生み出され世に出たのだろうか？

それと比較して尚、私達がカツコ良いなんて言われて嬉しくない筈がない。

ねえ穹。私達はやっぱり音楽やってて良いみたいだよ。カツコ良
いって、オリジナルだつて、こんなにキラキラしている子に言われた
んだよ？

「・・・ほら、凍えないうちに帰るわよ、星」

「・・・うん」

涙って嬉しい時も流れると知っていても、それを実感することなんてあまりない。

頬を伝う暖かい滴はきつと、この寒空でも凍りはしないと、そう思う。でも現実はそのこともなくて、流れ出た水は0度を境に氷になるのだ。

だからそんな現実には直面して、暖かくなつた気持ちが冷めてしまわぬよう、理亞さんは私の手を引いてくれた。

「理亞ちゃんの手、子供みたいに暖かいね」

「うるさい」

おまけに「さん」付けしていたのを取るのも先を越されてしまった。

本当に不意打ちのように心に響く言葉を言えるのだから流石はSaint Snowのラップ担当だ。理亞さんは自覚がないかもしれないけれど。

聖良さんが言っていた理亞さんはもう既に昔の理亞さんになっていた。きつと、楽曲のテーマと向き合うと共に、理亞ちゃん自身の秘められた力が目覚め初めているんじゃないかと、そう思った。

ふと、なんとなく思い立った曲を今日は口笛で吹く。今は塞がつて

いる片手を離したくないから。

こんな時間に少々お行儀が悪いかもしれないけれど、私なりの感謝の気持ちだ。

「……何て曲？」

理亞ちゃんは歩く速度を落として最後まで私の演奏としてそれを聴いてくれた。

「STAR GAZER」星の扉、根岸さとの曲」

この楽曲は『機動戦士ガンダムSEED C.E. 73 STAR GAZER』のタイアップ曲だ。

バイオリンとピアノの音で世界観ならではの切なさや深遠さを作り上げ、それを歌い手の声で只のバラードで終わらせない力強さを感じる一曲となっている。

辛いこと、悲しいことがあつたって、誰かが側に居てくれるなら、誰かが見ていてくれるなら、見えない明日だって、痛みがあつたって迎えに行ける。そんな風に私は歌詞を解釈している。

「色々知ってるのね」

「好きだったから、音楽が」

「それは今でもでしょ」

「お互いね」

一度自らの嘘で終わらせた私、一度自らの失敗で終ってしまった理亞ちゃん。言葉にすれば小さな違いだけれど、そこには大きな違いがある。違いがあるのに、私は理亞さんにシンパシーを感じている。

「ジェミニのアカリ。またやらないの？」

「やりたい。でも、まだ出来ない。曲が出来ないんだ」

きつと理亞さんからすれば何のことを言っているのかさっぱり分からないだろう。けれど、ずっとその言葉が出てしまった。

「なら見てて」

理亞さんはそれだけ言うのと辿り着いた自宅、喫茶菊泉に入っていた。

これから先、もしかしたら起こり得る未来の姿を感じさせる、そんな背中だった。

第四百四十三話

函館で行われるクリスマススイベントには誰でも応募できるけれど審査がある。

今まではそういった手続きは聖良さんが主体となつて処理していたそうだけど、今回は頼る訳にはいかない。それではサプライズにはならないし、聖良さんがいなくても理亜ちゃんはやっていけると証明する主旨と合わなくなってしまう。

そのため、作曲作業と同時進行でその手続きもしなければならぬ。

「ほらほら、早くやらないと締め切りきちやうよ」

「でも、まだ曲も出来てないのに」

「絶対に出るんでしょ？なら今やっても同じでしょ。ね、ルビィちゃん」

「うゆ。えつと…はい、じゃあ名前は鹿角　理亜で、生年月日は…」
「分かった。やるわよ」

貸しなさい、と理亜ちゃんはノートパソコンを自分へと向けると応募フォームのフォーマットに沿って入力を開始した。

「えつと、応募動機？そんなのも入れなきゃいけないの？」

「フツ、人はすぐに意味を求める。けど仕方ないわ。それが性なんですもの」

「流石は意味を突き詰めることに定評のある善子ちゃん」

「安易なネタに走るのはやめなさい。最近厳しいんだからそういうの。と言うか善子いうな」

何だかんだ言いつつタイピングを続ける理亜ちゃんを他所に、花丸ちゃんと善子ちゃんは漫才のように言った。言い方こそ漫才のようだが、その言うこともまた一理あるのだ。

自分の不運には何か理由があると原因を突き詰めて、墮天使ヨハネという暴論的結論で自分や置かれた状況と向き合っているのが善子ちゃんだ。私達には見えない角度から意見が出てくるかもしれない。「先ずは書く。箇条書きで良いから書きたいって思うことを書く。と

にかく書く。考えてるだけじゃこんがらがるだけなんだから」

ほらほら、と善子ちゃんもまた理亜ちゃんにやらせる。そう。理亜ちゃん、そして残ると言い出したルビィちゃんが主体でなければこれは意味がない。私や善子ちゃん、花丸ちゃんはあくまでも協力者なのだから。

「今日は終わらせてから作曲だね」

「衣装も忘れずに」

「はあ、何だか無理な気がしてきた」

「そ、そんなことないよ!」

「冗談よ」

パソコンの画面を見たまま悪戯っぽく笑う理亜ちゃんはすっかり私達と馴染んだ様子だし、ラブライブ予選敗退のショックから立ち直りつつあるようだ。

この時点で函館残留の目的の半分は達せられたようなものだ。

「それより、一つ提案があるんだけど」

函館に来てからルビィちゃんは本当に積極的だ。勿論、奥ゆかしさは変わらないのだけれど、自分の意見を言うことに躊躇いがなくなつた。

もともとルビィちゃんが引つ込み思案だったのは相手の意思を尊重しようとする余りのことだったという。

変わったのはその根本ではなく、それに対する考え方だ。

自分の意思を伝えることが相手のためになると、そう考えられるようになったから言うべきだと思つたことは口にするようになった。

そうなつた理由は定かではない。けれど、きつとルビィちゃんにとってとても大切な切っ掛けがあったのだろう。

「私と理亜ちゃんでお姉ちゃん達に新曲を披露する。それは変わらな
いんだけど」

「だけど?」

「お姉ちゃん達と一緒にパフォーマンスをしたい。皆の前で!」

それは私達が目標としていた以上の夢だ。

只でさえ期限が迫っている。練習する時間だつてあまり確保でき

ないだろう。衣装だってまだ素材すら集めていない。現実的に言えば無理だ。無理だけどーーーーー

「……もう一度、姉様とーーーーー?」

「どうするの理亞?」

「やめておくずら?」

その光景はどこかで既視感があった。そう、千歌先輩だ。

挫けそうになった時、千歌先輩にいつも「やめる?」と問うのが先輩だった。それにはやめないで、立ち直ってという願いがいつも込められていた。

そして今、理亞ちゃんに向けられた問いにも同じ願いが込められていると、そう思った。

「……やるわ」

そして、その願いは理亞ちゃんも同じだった。

「本当に?」

「やる」

私だってそうだ。蛇足的になってしまったけれど、言わずにはいられない想いだってあるのだ。

「あなた達にはかなり手伝って貰うことになると思う。でも、力を貸して」

「フツ、愚問ね」

「そのためにおら達はここにいるずら」

「絶対にあり得ないって、そう思っていた景色を見せてよ」

「任せない。先ずはこの応募フォームをーーーー出来た」

「早っ」

会話しながらも着々と入力を進めていた理亞ちゃんは自信満々にパソコンの画面をこちらに向けた。

「どう花丸ちゃん?」

「えっと……うん。理亞ちゃんの熱意がよく伝わるずら」

「ホント!」

「うん。保証する。一番良いなって思ったのがここ」

どれどれ、と私達は花丸ちゃんが指差した所を読むと、こう書いて

あつた——Saint
Aqours
Snowと。

第四百四十四話

S a i n t A q o u r s S n o wと名乗ることとなった理亞ちゃん達は作詞を終え、作曲作業に取りかかっている。それと同時に衣装作りを行っている形だ。

衣装について理亞ちゃんは以前から、それこそ聖良さんがソロでスクールアイドル活動をしていたころから主体として作成していたらしく、デザイン画も本格的で、素材の注釈など細かく書かれていてイメージが湧きやすかった。

ルビイちゃんは言わずもがな、A q o u r sが衣装担当である曜先輩と双璧をなす。

そんな二人が組んだものだからかなりの力作となった。かなりの難易度と引き換えに。恐らくはA q o u r s、S a i n t S n o w含めていずれも過去最高だろう。

幸いと言うべきか、衣装作りの手伝いをこれまで何度もしてきた善子ちゃん、花丸ちゃんが居るため、案外何とかかなりそうなのが恐ろしい。何が恐ろしいかといえば、最高のものなのに工期まで含めて計算されていることがだ。商業デザイナーとしてやってけるのではと一瞬思った程だ。

衣装の作成はだから何とかかなりそうで、問題は作曲だった。

主旋律は完成した。問題は所謂編曲部分で、ソフトの使い方から分らず、私も慣れないソフトだからおおよそ共通する操作方法しかアドバイスできず、とにかく弄って慣れてもらうことになった。ある程度慣れてからは私は別の仕事があった。

「もしもし千歌先輩」

「どうしたの？そろそろ帰ってくる？」

「いえ。ちよっとお願いが」

そう。ルビイちゃんが発案したサプライズの準備の協力依頼だ。

先ずはみんなまで再び函館に来てもらうこと。そして、歌とダンスを密かに覚えてもらうことだ。

ダイヤさんと聖良さんはスペックが高いため後追いでもパフォー

マンズの準備は間に合うだろう。けれど、他のメンバーについては予め練習して貰っていたほうが話が早いし、実践することで微調整する点等を洗い出せる。

私はルビイちゃんが函館に残った本当の目的、理亜ちゃんの願い、そしてルビイちゃんの妙案と合体グループSaint Aqours Snowのことを千歌先輩に電話越しに話した。

「すみません。勝手に話を進めていて。それにグループ名まで」

「いいんじゃない。ずっと続けていくならダメって言ってるかもしれないけど、夢を見るくらいなら良いと思う」

「夢、ですか？」

「うん、夢。もう一度って願って、それを叶えて貰って、新しい願いが生まれて、それでみんなで見える夢」

「叶える夢、ですね」

「そう。一瞬でしかないかもしれないけど、でも奇跡ってそういうものですよ。だって函館と沼津のスクールアイドルがお互いの地元じゃない東京で出会って、それで同じグループとしてパフォーマンズをするんだよ。奇跡じゃなかったら、何て言っただいぶん分からないよ」

改めて言われると数奇な巡り合わせだった。

最初の出会いは決して良くなかったし、方向性は違った。けれど、お互いに認め合う関係となったのはきっとお互いの持つスタンスが近付いたからだと思う。

たゆまない努力に裏打ちされた圧倒的パフォーマンスで勝ち輝きの正体を求めたSaint Snow。

自分達の輝きを求めた結果、誰かを導ける光になり、勝利がついてくると信じたAqours。けれど、Saint SnowもAqoursも勝利することはなかった。自分達のスタンスは間違っただけじゃない。けれど、足りないのだと自覚して初めて、一度は否定したその存在が意識に浮かんだのだろう。

そして今回、一緒にパフォーマンスをするというのだから偶然が生んだ必然なのかもしれない。

「サプライズかあ」

「どうしたんですか？」

「されたことないから。もしされたならどんな気持ちになるかなって。星ちゃんならどう思う？」

「その時にならないと分からないですけど、取り敢えず驚きそうですね」

そもそもどんなサプライズかにもよるだろう。けれど、誰かのためを思って仕掛けられたサプライズならば、きっと素敵なものなのだろうとだけ思った。

「今年は素敵なおクリスマスになりそうですね」

千歌先輩はきつととても優しい顔で微笑んでいるだろうなと思わせる声でそう言い電話を切った。

これまでクリスマスに大した思い出などなかった。それもそうだが、小、中学生の子供のクリスマスの過ごし方など程度が知れている。

女子も男子も外面が整った異性を侍らせるのを妄想したり、親から買ってもらえないような高額な物品を夢想したりするところだろう。

私だってそうだ。そんなけつたいな妄想を誰かと話しては無い無いと笑う、そんな感じだった。

ちよつと違つとすれば去年のクリスマスだけだ。

去年は穹と一緒に勉強をしていた。国立高校を受けるのだ。私立で早々に内定を貰っている受験生とは緊張感が違つ。高難易度と言つうほどではないけれど、自分の実力を間違ひなく發揮しなければ受からない。

だからクリスマスだと言つうのに私達は炬燵に半身を突つ込み、勉強をしていたのだ。

「東京まで通学するとか私達何時から意識高い系になつたんだろうね」

「私達の言つう意識と意識高い系のそれは多分別物でしょ。それにもう合格したつもりなの？」

「いやするでしょ。だつて偏差値的にはもう半年前から合格ライン

行ってるんだよ、私達」

「まあね。でもそう言いながらこうして勉強をしてるあたり穹って徹底してるよね」

「ま、張り合う人がいるお陰かな」

なんて、何でもない一日を過ごした。特別ではない日常。けれど、今となってはそれこそが特別だった日常だ。

一日だって同じ日は無いし、特別じゃないことなんてない。それを私は自分の過ちで気付いた。その気付きこそがプレゼントだというのならサンタクロースには遅延料金を請求したいところだ。

「千歌ちゃんどうだった?」

理亞ちゃんの部屋に戻ると、開口一番ルビィちゃんが訪ねてきた。

「なんくるないってさ」

「なんで沼津飛び越えて沖縄なのよ。函館と真逆じゃない」

「クリスマスサプライズ協力してくれるって」

「じゃあ、せっかくだからサンタ衣装も作るすら?」

「そんな時間までないでしょ。それにサンタクロースは良い子の所に来ませんから。ヨハネの所には来ないんじゃない?」

「都合のいい時だけヨハネ言うな」

「そう言えば理亞ちゃんはサンタさんっていつまで信じてたの?」

「私は姉様もいたから早かったわよ。ルビィは?」

「私も実はそうなの。でもお姉ちゃんがね、サンタさんは居ないってことを私がきづかないように必死になってたから、なんとなく信じてる気持ちもあつたかな。こんなに必死になるんだからもしかしたらって」

なんとなく過ごしているけれどクリスマスがそもそもどんな起源か、サンタクロースとは何者なのか私達は知らないで過ごしている。けれど、一つ思うことがある。サンタクロースがプレゼントを配る以前に、クリスマスという日そのものがプレゼントであるのだろうか。

誰かに抱く特別な感情、感謝の気持ちなど、伝えたくても切っ掛けがなければ行動に移せない人は多いのだ。そんな人の背中をそっと推してくれる魔法の日だと思える。それこそクリスマスツリーの頂

点に輝いている星は迷えるクリスマスに勇気を、機会を貰った人たちの指標として燦然と光を放っているのかもしれない。

そして今回、この日がなければイベントとという機会に巡り合う事もなかったのだ。

私達はすでにプレゼントを貰っているのかもしれない。

「今度は私達が必死になってお姉ちゃん達に隠しておかなきやね」

そう悪戯っぽく笑うルビイちゃんは本当に楽しそうで、連れて私達も悪戯っぽく笑ってしまった。

第四百四十五話

「これお願いしますね」

「はい。あと追加でほうじ茶を」

中学生のころに飲食店でバイ・・・お手伝いをした経験もあるため、喫茶菊泉での作業はそれなりにできるようになった。けれど、やはり一朝一夕で常連さんの顔や好みを覚えるには至らず、そこは聖良さんがフオローしてくれているので大きなミスはなく過ごさせている。

「新しい看板娘が入ったんだって？あー、可愛らしい子じゃない」
「ピンチヒッターですけどね」

なんて常連さんとのやり取りも数回。流石に家族経営していると新入りが入ることも稀というか無かったのだろう。このおばさんみたいにわざわざ見に来る人もいたほどだ。

「でも、あなた誤魔化してるわね？」

「メイクにはそれなりに自信ありますから。素材は理亞ちゃんの方が別嬪さんですよ」

「当たり前じゃない。小さい頃から知ってるんだから」

なんて言葉に聖良さんは苦笑いするばかりだ。

誰にとつても自分が小さかった頃には迂闊なことが沢山ある。人それを黒歴史と言うけれど、聖良さんや理亞ちゃんにとつての黒歴史の生き証人が数多くいるのはもう笑うしかないのだろう。

「聖良さんの小さい頃ってどんな感じだったんですか？」

だから私もまた面白がってそう切り返す。

「この子ったらお転婆でー！ー！ー！ー」

楽しい思い出はいつになつたつて自分が変わらなければ楽しいままなのだ。

嬉々として語るおばさんに聖良さんは苦笑いをひきつらせているのがとても面白い。が、後で何を言われるのか怖い。

「ただいま」

「お帰りなさい」

「あら理亞ちゃん、お帰りなさい。ちょうどよかった、理亞ちゃんの話

もしかかしらね」

「ちよつとおばさま。よしてつたら」

今日はエントリーしたイベントの参加審査のため、理亞ちゃんとルビイちゃんはすぐ側にある旧函館区公会堂まで面接に行っていた。

前日に面接の練習として意地悪な質問を散々浴びせたり、圧迫面接形式でやってみたりと試したので、ちよつとやそつとのことならあしらえらると思っただけれど、私の予想以上に二人とも緊張していたため、善子ちゃんと花丸ちゃんに付き添いに行つて貰っていたのだ。

理亞ちゃんもルビイちゃんも人見知りで、面接とかでは力が出せないタイプだ。こればかりは場馴れと事前練習しか対処方法が無い。けれど常連のおばさんと戯れる理亞ちゃんには凹んだ様子は無いため、どうやら上手く行つたようだった。ルビイちゃんを見ると、聖良さんに見えないように小さくピースを返してくれたし、善子ちゃんと花丸ちゃんも頷いていたので間違いない。

私はホツと胸を撫で下ろし、おばさんの語る聖良さんと理亞ちゃんの黒歴史に耳を傾けつつ次の手を考えていた。

「レディオずら?」

「なんで徳永英明みたいな言い方なのよ」

理亞ちゃんの部屋に集まったみんなで、もはや恒例となった作戦会議だ。とは言え、あつたことの報告、進捗の状況については、私達は自然とそれを把握するようにしていたため会議というほど畏まったものではなく、日常会話の中で話し合いがされているのが常だ。

「無事にイベント参加もかなった事だし、宣伝は必要だと思ふの」

「それでラジオなのね。でもそんな簡単に出られるの?」

「出られるかもしれない。今回のイベントの協賛でFMいるかが入っ

てるし、調べたらイベント情報もラジオCMで流してるみたいだから、イベントの運営と交渉してもらえればなんとかなるかもしれない」

ここで有利に働くのが、Saint Snowの名だ。北海道全体で見ればどうか知らないが、この函館という地域限定であればかなりの知名度だ。特に中高生の間では知らぬものはいないだろう。

「Saint Snowは終わってない。それを自分達だけじゃなく多くの人に知ってもらおうよ」

世間的にはもう破れ去ったグループと、そう見なされているだろう。そのことに意気消沈してしまったのは理亞ちゃんや聖良さんだけでなく、もしかしたら他にもいるかもしれない。もうSaint Snowのパフォーマンスは見られないのだと。

なら多くの人に知ってもらうことには意味があると思うのだ。

「でも、そんな放送したら姉様に気付かれてしまうんじゃない？」

「聖良さんってFMいるか聴く？」

「聴かない」

「なら平気でしょ。それに、イベント開催が近づいたらいずれにしても隠しきれないでしょ」

まあバレたとして聖良さんなら知らないふりをするだろうけど。

「待って、FMいるか聴く人ってそもそも中高生にどれくらいいるの？」

「日常的に聞いてなくても、耳に入ればいいの」

それに駄目元だ。やれるだけやるに越したことはない。

「どうする？」

「私は良いと思うよ。理亞ちゃんは？」

「やってやろうじゃない。ならちよつと運営に聴いてみるね」

待ってて、と理亞ちゃんはスマホ片手に部屋から出ていった。たぶん運営に連絡するのだろうか。

けれど、人見知りをする理亞ちゃんが慣れない人と話すことに躊躇う様子がないのには私は少なからず驚いた。

「なんか、随分と威勢がよくなったというか、なんというか」

「理亞ちゃんね、いや、私もなんだけど、参加審査の面接の時に凄く緊張してたんだ」

今日、出掛ける前までの理亞ちゃんとルビィちゃんは確かにそうだった。それはきつと今まで頼れる誰かが助けてくれる場面が多かったから。そして、それに慣れていた自分が居たからなのだろう。優秀な姉がいるということがどんな気持ちなのかは分からないけれど、そう推測できる程には二人の姉は優秀なのだ。

「私も理亞ちゃんも今までの人前で話すことなんかなかったし、お姉ちゃんがいないのがこんなに心細いんだなんて思ってたの」

一時期、ダイヤさんがスクールアイドルを避けていた時ですらきつと姉妹仲は良かったのだろう。姉の卒業した後の中学時代だってこの狭いコミュニティの中であれば皆既知の存在だ。それなりに上手い距離感でやれていたのだろう。

「だから面接官の前に来て頭真っ白になっちゃったんだけど、その時にね。やっぱり思い出したのはお姉ちゃんのことなの。すぐに泣いちやう私にお姉ちゃんはいつも言ってくれてたんだ。ルビィは強い子でしょ、って」

泣くな、でも強くなれ、でもなく、既に貴方は強さを持っているのだと、そう諭す言葉にルビィちゃんは今日、その意味を初めて理解したのだ。

本当は秘められた力があるのにそれに気づいていないのだと。困難を乗り越える力は既にあるのだと、他でもないダイヤさんの数重なる言葉で保証されているのだと。

「そしたら勇気が出てきて、思ってることを自然に言えるようになったんだ」

きつと理亞ちゃんも何かしら心に積み重なったものが力を貸してくれたのだろう。

「きつと一人である場所にいたらそんな風に思う事もなかったんじゃないかな」

隣にいる誰かのため、力を貸してくれる誰かのために、その場所に望んだからこそ至った気付きだとルビィちゃんは言う。

ルビイちゃんも理亞ちゃんも、今度発表する楽曲を正しく体現していることが凄いと素直に思った。本当の本当に、離れた場所で活動するグループが手をとって一つのことをなし得るのだと。

第四百四十六話

クリスマスイベントの運営と交渉した理亜ちゃんによると、意外なほど呆気なくOKが貰えたとのことで、私以外の四人はラジオCMに望むこととなった。

FMいるかは喫茶菊泉から徒歩5分程の場所にあり、ロープウェイ施設の中にある。

幸いそのスタッフにも店の常連が居たため話は余計に早く、私達が訪れると待っていたと言わんばかりに収録ブースへと通された。

ブース内は公録できるようガラス張りで、外から見える構造となっていた。

「あの・・・」

収録ブースに四人が入っている間、私はブースの外から見学していると、理亜ちゃんと同じ学校の制服を着こなす女子生徒二名が恐る恐るというように私に声をかけてきた。

「どうしました？サインとかは事務所通して貰わないと困るのですが」

「え？いえ、そうじゃなくて、鹿角 理亜ちゃんとその、話がしたくて」
私がした適当な冗談をさらっと流し、続けられた言葉に私は首を傾げた。

理亜ちゃんと私が函館で絡む姿を見る機会はここ数日しかない。であるにも関わらず理亜ちゃんと話したいと私に切り出したということは、最近の理亜ちゃんの様子を見たということに他ならない。もう冬休みだというのだ。

それがどういった理由からなのかは分からないけれど、こうして顔を晒して申し出た以上、少なくとも害意は無いのだろう。

「学校のお友達ですか？」

「クラスメートです。今までの学校で余り話したこと無いんだけど」

「でも、ずっと応援してたんです。Saint Snowのことを」
「あんなことがあって、きつと落ち込んでるって思ったら、気持ちだけ

でも伝えないとって思ってた」

「Saint Snowは最高だって。遊びだなんて思ってたないよって」

純朴そうな二人は小さな声で、だけれども、確かな意思を持ってそう言った。

きっと今まで学校で話す機会そのものは沢山あったのだろう。けれど、二人がちよつとした勇気が足りなかったことや、理亞ちゃんの人見知りがそれをさせなかったのだろう。

もしも、もつと早くこの二人が理亞ちゃんと話しをしていたら、もしかしたらあの失敗はなかったかもしれない。そう思うとネガティブに捉えてしまうけれど、行動を起こすことは遅い早いに関わらず次に繋がるのだ。

今そうしようとしている私達がこの二人の行動を否定することはない。

「うん。きっと理亞ちゃん凄く元気出ると思うよ」

「本当?」

「確かめたらいいじゃないかな」

きつと理亞ちゃんだけじゃないだろう。聖良さんだって知れば喜ぶはずだ。

親しい訳じゃない誰かからの言葉こそ信用出来ることもある。こ

と評価に置いては鼻真目というのが存在しないから尚更だ。

「今度のクリスマスイベントでライブをやります」

「グループ名は?」

「Saint Aqours Snowです」

「是非来るすら」
ブースから聴こえる声は簡潔で、それだけに聞き間違いの無い内容だった。勿論、二人にもそれが聞こえた訳で、

「ライブやるんですか!?!」

「しかも、Saint... Aqours Snow?」

「合同チームなんて、SUNNY DAY SONGみたい」

と驚きの声を挙げている。

それもそうだろう。多くのスクールアイドルはその活動をラブライブと共に推移させている。

三年生を擁するグループならラブライブに敗退した時点でそのグループとしての形での活動が終わることも珍しくない。だからこのタイミングでSaint Snowの活動が続いていること、それだけではなくAquoursという外地のスクールアイドルと合同でライブをするなど誰にも予想など出来なかっただろう。

「どんな魔法を使ったんですか？」

「魔法か・・・多分そうじゃないよ」

「どういうことですか？」

「女の子はみんな魔法に掛かってるんだよ。ただそれを忘れてしまうだけで、理亞ちゃんもきつと見失っていた物をもう一度見つけただけなんだと思うよ」

それは時に信じられない行動力を生み出す。片田舎のスクールアイドルがラブライブ決勝に進むくらいに。

「あ、終わったみたいだよ」

録音も終わったようでも理亞ちゃんたちかブースの中で一礼する姿が見える。

そして、みんなが出てきたところで私は理亞ちゃんに会いに来た二人に目配せした。

「あの、私達、ごめんね。応援行けなくて。本当はもっと前から話をしたかったの」

「でも嫌われてるのかなって思ってた・・・」

勇気を出して何とか伝えたい事を言った二人を前に理亞ちゃんは豆鉄砲を食らったかのような顔からちよつと気まずそうな顔をして視線をさ迷わせた。

「私も人見知りだから・・・嫌ってなんか無くて、その・・・そう言ってくれて嬉しいから」

「クリスマスのイベントでライブするんですよ。皆で行っていい？」

「皆？」

「そうだよ。皆Saint Snowのこと凄く応援してたんだよ」

「Saint Snowは学校の誇りだって」

その言葉はきつと今までの理亜ちゃんに向けられたことのなかった称賛だったのだろう。

理亜ちゃんは人見知りだと言うのに剥き出しの感情をその瞳から流した。余り絡みのなかったクラスメートの前で。

「ごめんなさい。ラブライブ、失敗しちゃって・・・ごめんなさい」
「いいんだよ。だってまだ終わってないでしょ。ならいいんだよ」

この後一番の大事が待っているというのに、理亜ちゃんは声を出して泣いた。でも、その涙はラブライブ決勝に進めなかった時のそれとは違う、とても温かな気持ちだったんじゃないかと、そう思った。

「花丸ちゃん、善子ちゃん、ルビィちゃん」

ポケットに入れていたスマホがメッセージを着信し、私はそれを確認すると三人に画面を見せた。

メッセージは千歌先輩からで、一言だった。

曰く、函館に着いたと。

第四百四十七話

薄い雲は星々の輝きを遮るには至らず、小降りの雨は輝きを求めて集う人の足を止め得ない。

今日はクリスマススイブ。八幡坂の麓で二人のスクールアイドルが背中を合わせ、その時を待っていた。クリスマスイベントの開幕のその時を。

FMいるかで収録のあった日、日が暮れた頃に函館山の展望台では二人のスクールアイドルが顔を合わせることとなった。片や沼津のスクールアイドル 黒澤ダイヤ。片や函館のスクールアイドル 鹿角聖良。

万能とも言える才を持った二人には共通点も多く、特に一番の共通点はやはり妹という存在だ。

「そうでしたか。ルビイが大変お世話になりました」

「いえ。理亞のこと元氣付けてくれたみたいで、お陰様で毎日とても生き生きしてるんですよ」

なんて、妹談義に華を咲かせていた。なるほど、吐き出される息が白く揺らめき花に見えなくもないともとれる。それくらい寒い中、二人はそれを感じないくらい夢中で話しているのだから、好きなことを表現するというのは熱があるのだ。

けれど二人がここに来たのはそんな話をするためではない。二人はそれぞれの妹に呼び出されてこの山の頂にいるのだ。

そう、流石にクリスマススイブまで隠すことはできないし、準備期間が必要だったため、条件が揃ってすぐに計画を実行することになったのだ。

「お待たせ。お姉ちゃん」

「ルビー」

「今日は来てくれてありがとう、姉様」

「理亞」

物陰から顔を出したそれぞれの妹の姿を見て一安心した様子の姉二人は、お礼もそこそこに駆け寄る妹から差し出された手紙を見て驚きの表情を浮かべていた。

「これは？」

「クリスマスライブにライブをやります」

「姉様から教わったこと、想い、全部込めて作った曲」

「お姉ちゃんに見てほしいの」

自分の妹が何かをしようとしている。それはなんとなく感じていただろうが、まさかライブをやるなど、しかもこの短期間で曲を作ったなど想像も出来なかっただろう。

「……………」

ルビーちゃんと理亞ちゃんは背中を合わせると、早速その新曲を披露し始めた。

とても伸びやかで、美しい導入。元気の出るストリートな歌詞、そして壮大な可能性を感じる締め。それはこの短期間で作り上げたものとは思えない程のクオリティだ。

「とても」

「ええ」

難しい言葉など出せないくらいに二人の姉は心を震わせただろう。けれど、どこか物足りない。きつとダイヤさんも聖良さんも口には出さないけれどそう思った筈だ。事実、この曲はまだ……………」

「お姉ちゃん実は……………」

「まだこの曲は完成してません」

「え？」

「二人だけじゃ歌えない」

「伝えきれない。だから」

「一緒にライブをやりませんか？」

あと数日でイベント当日。準備期間など無いに等しいけれど二人の姉は己の妹を抱き締めて快諾した。

「なら、早速練習ですね」

その様子を見守っていた私達や、こっそりダイヤさんとは別の便で来ていた千歌先輩達はようやくと言うように物陰から出た。寒かったためみんな重装備だ。

「はい。ダイヤさん、聖良さん」

花丸ちゃんは包み紙を二人に手渡した。

「これは？」

「墮天使の祝福よ。さあ、封印から解き放つのです！」

言い回しはともかく善子ちゃんに促され、包み紙を開けると、そこには対になるような衣装が入っていた。

「『メリークリスマス』」

隠れていたみんなは上着を脱ぎ去ると、二人に手渡された衣装と同類のものを見にまもっていた。

ダイヤさんも聖良さんも顔を見合わせて、目尻に涙を浮かべながら苦笑いした。完全にしてやられたと。

こうして、練習に明け暮れる日々を過ごし、クリスマスイブを迎えたのだ。

この寒空の下、静謐な薄明かりに包まれるルビイちゃんと理亞ちゃんにはその体の小ささを感じさせない力強さを秘めていた。

時計の秒針は逸ることも遅れることもせず確実に歩みを進めていた。

周りを見渡せば歩道沿いには大勢の人がいた。あの日、理亞ちゃん

に会いに来てくれたクラスメイトや他のクラスメイト。お店に足を運んでくれた近所のおばさん。ラブライブ北海道予選会場にいた他のスクールアイドルの姿まで。

そして時刻は19時00分00秒。黄金の時間が幕を上げる。

「始まるときは 終わりのことなど 考えてないからずつと」

ルビイちゃんと理亞ちゃんの限界まで振り切った高音。そしてがむしゃらに駆け抜けてきたその先へ目指して、今、みんなの前で披露される一夜の夢。その名は――

「Come on! Awaken the power yeah!
h!」

Awaken the power。それは二人の姉だけじゃない。全ての人へと捧ぐ夢。

「Are you ready? Let's go!!」

理亞ちゃんの誘いに誘われ、Saint Aquours Snowの他のメンバーがパフォーマンズの輪に加わる。そこには当然、聖良さんとダイヤさんの姿もある。

「がんばるって決めたら」

「絶対負けないんだ」

Saint Aquours Snowだけじゃない。その決意は会場にいる人をも巻き込んで紡がれる。

「セカイはきつと」

「Hi Hi Hi!」

それは地鳴りのようですらあって、小降りの雨の冷たさを感じさせないくらい熱かった。

私はみんなのパフォーマンスの輪には入れないけれど、皆と一緒にコールは出来る。寧ろ、会場のモニターにコール部分の歌詞を表示させ、率先して煽る。

皆、誰もが大きく口を開け、心からの声を挙げている。誰もが楽しそうに、本当に夢の中にいるかのような、そんな気持ちだった。

「Wake up wake up my new world

“そして11人のコーラスで締め括られると共に作られた星はこの人数でなければ作れないフォーメーションだ。

こうして水と氷の結晶が混ざりあって作られた夢はきつと見に来た人に忘れられない輝きを見せたと思う。

ここには悲しい顔をした人は誰もいなかった。昨日の辛いことも、明日の辛いことも、今の楽しさで全て吹き飛ばした。だって、皆が笑顔だから。理亞ちゃんに会いに来てくれたクラスメートも、他のクラスメートも、店に来てくれた近所のおばさんも、他校のスクールアイドルも。そして――

「メリークリスマス、星」

埼玉にいる筈の穹もまた、穏やかな笑顔でそこにいた。

第四百四十八話

地上に11人が作り出した星が舞い降りたその日、そこにいる筈のない人を見た。

彼女は在りし日のように私に笑顔を向けているのだ。それは幻なのではないかと疑っても仕方ないだろう。

「幻じゃないよ、星」

穹が、穹の顔で、穹の声で、私に語りかける。

何故？一体どうして、と聞き出したのに口も頭も回らない。

「難しいことはいいでしょ、別に。だって今日はクリスマスイブで明日はクリスマス。それ以外に理由がある？」

始まりを告げた夢の時間はどうやら私をも巻き込んで広がっていったようだ。

完全に頭が真っ白になった私を他所に、ライブを終えた千歌先輩が私達に気付いて駆け寄ってきた。

「穹ちゃん。いらつしやい」

「メリークリスマス、千歌さん。今日はお呼びいただきありがとうございます
ございます」

「突然ごめんね。遠かったでしょ。」

「いえ、沼津より寧ろ近いくらいに感じましたよ」

「む、それ沼津バカにしてる？」

「飛行機や新幹線とじゃ、バイクと比べ物になりませんよ」

全然気付かなかったけれど、いつの間にか千歌先輩と穹は友好を深めていたようで、二人は普通に軽い口調で話している。

どうやら今回の仕掛人は千歌先輩らしい。サプライズの共犯者が実はこんなサプライズを仕掛けていたとは、完全にしてやられた。

「その衣装とても素敵ですね。三角形を折り重ねたのは光が綺麗に反射するからですね。テレビの紙吹雪と同じ原理ですね」

「この衣装作りには星ちゃんも手伝ってくれたんだよね」

へえ、と意地悪く穹は笑うと挑発的に私に問う。

「人の手伝いする余裕あるんだ？」

「余裕は無い。けど、こういうの含めて音楽にしたいの。それに……」

Saint Aqours Snowが披露した“Awaken the power”は可能性を見せてくれた。「ほら、距離だつて、グループだつて、飛び越えられるんだよ」つて言っているかのよう感じた。だからインスピレーションはどんどん湧いている。後は形にするだけだ。

私は率直に穹へと伝えたと、穹は数瞬だけ試すように私を見詰めていたけれど、納得したように頷いた。

「そうでないと。なら一つ教えてあげるよ」

今の私を、と穹は背負ったいたギターケースからギターを取り出し、演奏を始めた。特定の曲というわけではなく、即興での演奏だ。

「スラム奏法……」

簡単に例えるなら演奏にギターを叩く要素を取り入れ、ドラム的な音を取り入れた奏法だ。これをするこゝとで、音に多様性が生まれ、リズムカルになるのだ。ただ叩けば良いというわけではなく、力加減やタイミングが難しく、少なくとも私の知る穹はそれをしたことはなかった。

「どう?」

「ブラボー」

まさか修得していたとは言葉もなかった。当然だけれど、私の知らない間に穹もどんどん上達しているのだ。

「あんたが居なくなつたからね。リズム取る必要があつたのよ」

けれど、その上達の理由は私には後ろめたいものだった。

「サプライズ成功だつたかな?」

そんな微妙な空気を感じたのか千歌先輩が話題を変えるように尋ねてきた。

「これ以上ないくらいに」

私はありがたくそれに乗つかると穹もまた会わせてくれた。

「本当、サプライズ過ぎですね。地方都市の地域振興イベントでこんなに人が集まるなんて」

そう言つて穹は周りを見渡す。

若い人もお年寄りも、男の人も女の人も、もしかしたらどちらでもない人だっているかもしれない。ボーダーレスでこのイベントは成り立っている。

もちろん、クリスマスイルミネーションを見に来た人も居るだろう。けれど、先程の“Awaken the power”の熱に浮かされている人も見受けられる。

「お姉さん楽器でできるの?」

穹がギターを持つているからか、熱に浮かされているか、幼稚園児くらいの女兒が興味津々に穹に喋り掛けてきた。

穹もまたしゃがんで目線を合わせてうれしそうに返事をした。

「弾けるよ。バッチリ弾ける。聴きたい?」

「いいの!?!」

「いいの。子供は遠慮しちやいけないよ」

そう言つて穹は立ち上がると私に目配せした。

やれと、そう言っているのか?本気か、といぶかしんで身動きが取れなくなると、千歌先輩がそつと背中を撫でてくれた。

「今日は夢が叶つても良い日だよ」

「良い子じゃないとサンタさんは来ないですよ」

「サンタさんが来ないなら、代わりに私達が届けるよ」

撫でていた手は気合いを入れるようにポンと背中を押しして離れた。けれど、じんわりと残る温かさが力を貸してくれる。

私は手袋を外してポケットに挿じ込むと代わりにハーモニカを取り出した。

「準備は良いね?」

「OK。どんな曲だつて合わせてみせる」

「いいね。なら、行くよーハーハー」

軽快に掻き鳴らすそれは“シугァーソングとビターステップ”、UNISON SQUARE GARDENの楽曲だ。

ポップで踊り出したくなりそうなりズムが自然と私のタップを動かす。

一回聴けば耳に残るその曲は何度も聴いた。だからハーモニカ
だつて自然に音を奏でられる。

気分は正に I f e e l 上々 だ。

例えこの一興の後に一難あるとしてもまた一興あることを信じて、
私はこの小さなお客様に精一杯を届ける。他の誰でもない穹と共に。

第四百四十九話

奇跡の時間はあっという間に終わりを告げた。

やるべき事を終えた私達は翌日には沼津に帰る。だからこの夜が函館で過ごす最後の夜となる。だからやり残すことのないように、最後の夜を過ごさなければならぬ。

気付けば天気も良くなり、地上だけでなく夜空にも星明かりか輝き出した頃、クリスマスイベントは無事に閉幕した。

私達はみんなで喫茶 菊泉へと戻り、パフォーマンスをしたメンバーは着替えに、穹はカウンター席に待たせて、私はお茶を入れるために厨房に入った。

「Saint Snowはこれでおしまいにするそうです」

お湯を沸かしていると一早く着替え終わった聖良さんが手伝いに厨房に顔を出し私にそう言った。

「でも、スクールアイドルは続けるそうです。Saint Snowに負けない新しいグループを作るって」

「それが理亜ちゃんの答えなんですね。聖良さんはその答えをどう思うんですか？」

聖良さんは私の問い掛けにただ笑顔を見せるだけだった。理亜ちゃんが考えて考えて、自分の意思で決めた事ならばどんな結論であろうと笑顔で見守ろうと、そう言っているかのようだった。

「星さん。あなたはこれからどうするんですか？」

「答えは出ています。だから後はそれを形にするだけ」

私の答えを聴いて、聖良さんはまた微笑みを返すだけだった。それは先程私に向けた笑顔に比べちよっと心配そうな、そんな顔をしている気がした。

「さて、じゃあ急須は13人分ですから星さん。手伝って下さいね」

「いやいや、ちゃっかりお盆一杯に載せないでくださいよ。私の細腕には全部一片に運ばせんって」

なんて言いつつ、結局半分ずつ持って厨房から客席に出ると、まだみんなは着替え終えていないのか穹しかいなかった。

「すみません、お邪魔することになって。自己紹介が遅れちゃいました。明里穹です」

「バタバタしてこちらこそすみません。鹿角 聖良です。これだけ人数がいるんですから今更一人増えても変わらないので気にしないでください」

お互いに軽く挨拶を終えると聖良さんは感慨深げに私達二人を見やる。

「まさかこんな形でジェミニのアカリのお二人とお会いすることになるなんて、何が起きるか分からないものですね」

私が居る時点で関係者には「ジェミニのアカリ」として音楽活動をしていたことが知られていようと少しは予想していたであろう穹はだが、意味を図りかねたのか探るように私を見た。

「私が紹介するまでもなく、聖良さんは私達のこと知ってたよ」

「・・・まさかそんな人が居るなんてね」

「カバーとはいえ素晴らしいパフォーマンスまで生で見られたのは良い収穫でした」

S a i n t S n o wはおしまい、と先程言った言葉はどこへ言ったのやら、聖良さんは少しうずうずするようにそう言った。まあエントリーでできるラブライブが無い期間というだけで、卒業まではスクールアイドルでいてもなんらおかしいことではないしもしかしたら・・・なんて思いを馳せている間に聖良さんと穹は意気投合していた。

「それで、二人の本気のパフォーマンスはいつ見られるの?」

その質問に私も穹もお互いに顔を見合せ、数秒の沈黙の後どちらともなく気まじく顔色を逸らした。

「まあ、こうして二人ともコンタクトが取れているみたいだし大丈夫だとは思いますが、時間は有限ですからね」

分かってますね、と真剣な表情で釘を刺してきた。

時間は有限。その言葉は三ヶ月後には卒業を迎える聖良さんだからこそ重みがある。

私だって早くしなければとは思っている。曲作りだって少しずつ進んでいる。けれど、何故だろうか?完成する確信はあるのにそれは今

ではないと、そんな予感があるのだ。今ではまだ足りないのだという確信が。

「私は最大限譲歩しているつもりです」

穹が極力感情を隠して返答している。情けないけれど私も穹の言葉に同意だ。

穹は私が何も告げずに消えた理由、何も告げなかった理由を知らないのだ。知らないのにそれを一時棚上げにしてくれているのだ。これが譲歩出なくて何だと言うのだろうか。

「ラブライブ決勝」

「はい？」

「あなたたちはそれまでに決着をつけなさい」

「何でそんなこと貴女が決めるんですか？」

「あら？大なり小なり音楽家なら自分の音楽を製作するのに目安程度に期限を決めている筈ですよ？それに、もともとラブライブで音楽活動するつもりだったんでしょ？」

確かにそれは凶星だった。話の切り出し方としては強引だったけれど、悪い案ではない。むしろ第三者からこうして定められた方が、曖昧にならない。

「私はそれでいいよ」

「星・・・まあそうね。一朝一夕で出来たもので私が納得するかって言われたら多分しないしね」

「なら、次に会うのはラブライブ決勝の日」

「場所はアキバドーム」

そこが次に私達が会う場所だ、とまるでお互いにラブライブ決勝に出場するかのように私達は拳を軽くぶつけ合い、健闘を祈った。聖良さんは満足そうにそれを見てお茶を啜っていた。まるで口を出さずぎたとでも言うように。

「あつっーい」

「まさか函館でこんなに汗だくになるなんてね」

着替えが終わった千歌先輩達が連れ立ってカウンターまで出てきた。

顔が少し赤らんだままだが、汗は一通り拭いて制汗スプレーでも掛けたのだろう。微かに柑橘系の良い香りがした。

「今日はありがとうございます」

「いいんだよ」

「今度は沼津に是非いらしてください。歓迎致しますわ」

ダイヤさんと聖良さんの視線が絡み領きあう。今回主体となつて動いた妹達の姉として、お互い共感する部分があるのだろう。それは二人にしか分からないことで、私には推し量れないことだ。

「必ず行くわ。だらけてたら承知しないからね」

「うん。ちゃんと頑張ルビイするから」

「何それ。面白いの？」

「真顔であしらうのは酷いよ理亞ちゃん!？」

見てくれは相変わらずのちんちくりんの二人。けれど、二人はきつとこの街で出会った数日前から遥かに成長している。だからこそ今、こうして相容れなかった二人は笑いあっている。

A q o u r s と S a i n t S n o w、水と雪の結晶。お互いのグループを象徴するそれらは本来、どちらかに寄るしか存在を支えられない。けれど0から1への揺らぎは水と氷が両立する唯一の温度域なのだ。

理亞ちゃんの流した熱い涙は一度雪の結晶を溶かした。けれど、ただ消えるしかないそれをA q o u r s が受け皿となり、交ざりあつたそれは今、再び形を取り戻した。

氷の結晶は一つとして同じ形はないけれど、一度溶けたって何度だって絆が繋ぎ会わせてくれるのだ。

「絶対に理亞と一緒に沼津に行きます」

「約束だからね」

ふふ、と理亞ちゃんとルビイちゃんが笑いあう。沼津と函館。遥かに遠いその距離はけれど、二人を阻む壁にはならないだろう。

ふと穹と目が合う。

私達の距離はA q o u r s と S a i n t S n o w からすれば近所みたいなものだ。けれど、その距離は未だ遠い。それはきつと穹も

そう思っているみたいで、私と穹はどちらともなくお互いに視線を逸らした。

「その時は今後のAqours・・・いえ、野暮なことは聴かないでおきます」

「いえ、折角の機会ですから、ここで少しだけ言っておこうよ」

今後のAqours、つまり、ラブライブ決勝が終わった後のAqoursのことだ。

「私はダイビングのインストラクターのライセンスを取りにオーストラリアに留学。深い海も良いけど、広い海もちゃんと知りたいんだ」
もちろん、それはまだ決めていないことで、だけど避けては通れない話題でもある。

だから、まずはその考える機会を作ろうと果南さんは切り出した。もしかしたらずっとその機会を伺っていたのかもしれない。

「私は東京の大学に進学が決まりました。一度地元を離れてどこまでやれるか、把握しませんとね」

「私はイタリアの大学に留学。みんな沼津を離れるなんてね」

「私達ったら、また相談もせずに勝手に決めちゃって」

「ホント懲りてないね」

なんて三年生の三人は言うけれど、それはもう、伝えなくても大丈夫だという思い込みではなく確信があったからこそなのだろう。

「そういう訳で私達、卒業したらそんなeasyにみんなとは会えないから」

お茶目にウインクをする鞠莉さんに穹が一言。

「ドタバタで飽きないね、このメンバーって」

空気を読んでか、読まなかったかはさておき、ホントそれ、とみんな穹の言葉に同意するのだった。

第百五十話

冬に恋、とはよく言ったもので、冬の函館はとてもロマンに溢れていた。会う機会の無かった聖良さんや余り絡みのなかつた理亞ちゃんとも交流できた。何よりいつか自分が実現しなければならぬ夢を Saint Aqours Snowのお陰で見ることができた。

美味しいものは勿論沢山あったけれど、それ以上に思い出でお腹一杯な気分ではみんなと共に羽田に帰ってきた。

帰りの便から見た函館の景色からは来る時とは違った印象を受けた。

来る時は未開の地に到着したと、そんな気持ちだったけれど、気持ちの上ではもうすっかり馴染みの街だ。本物の函館市民から怒られそうだけれど、それほど居心地が良かった。それは鹿角姉妹が良くしてくれたこともあるけれど、どこか沼津にも通じる空気感があつたからこそなのかもしれない。

うってかわって羽田空港は相変わらず慣れる気がしない。ここはどこか旅立ちの象徴でもあるような気持ちになる。

覚えきれないほどの路線があり、一歩間違えば隣に居た人もすぐに見失ってしまいそうな、そんな錯覚を覚えるのだ。

「楽しかったね、函館」
「はい。とても」

羽田に到着すると穹はライダースジャケットに着替えにトイレに行つたため、トイレ付近で待っている間に曜先輩か感慨深げに言った。

「やっぱり港町はいいよね」

「曜先輩は船が好きですもんね」

曜先輩は今時にしては珍しくパパっ子だ。非常に尊敬しており、いつか船長になろうと夢見ている。ふと、でもそれは何故なのだろうと私は思う。それはきつと私が去年の出来事を切っ掛けに父と確執があるからなのだと思う。父を尊敬するとはどんな気持ちなのだと。

「なんで曜先輩はそんなに船が好きなんですか？」

「何でかあ・・・何でだろう？ちっちゃい時から当たり前のように港に行ってたからね」

当たり前過ぎて分からない、というのであれば確かに私にも覚えがある。私にとっては楽器があって遊び道具にしていたからだ。よくもまあ飽きないものだとは思うけど。

「それに多分なんだけど、私って基本的に人が好きなんだと思うんだ。だから、沢山の人を運ぶ船が好きになったんだと思う」

その分析を聞いてなるほど、と思った。

よく曜先輩はスクールアイドルとしての自己紹介の際に「アイドルの海に飛び込んだら君に会えて幸せ」と口にしてている。その一言に曜先輩らしさの全てが集約されているのだから秀逸の一言だ。

「いつかみんなでもた旅をしたいね」

「それなら曜先輩が操縦する船で海外とか」

「それじゃあ私が遊べないじゃん。それに、そんな遠い先じゃなくてもいいでしょ」

「とりあえずラブライブ決勝が終わったらみんな落ち着くでしょ。星も私も」

黒いライダーズジャケットに身を包んだ穹が不敵に笑いながら曜先輩の言葉に続いた。

「それにマリーさんって車の免許持ってるらしいじゃん。どこでも行き放題でしょ」

「Of course! 今日帰りは私のバスよ!」

「そうなのですか!?!」

どうやらダイヤさん以外のメンバーは鞠莉さんのバスに乗ってきたらしいけれど、表情が曇っているのは何故だろうか？

「まあ、そういう訳だから。星」

「うん。ラブライブ決勝で会おう」

「なんだか私達がラブライブに出るみたいじゃん」

「出てたら決勝行ってたかな?」

「あんたのルックスがもう少しマシならあったかもね」

「穹の隣にいたら大半の人は見劣りするわ。それにこれでもかなり

盛ってるんだけど」

「分かってるよ。会う間隔が開いたからかな。会うたびに可愛くー」

「そうでしょ。可愛くなってるでしょ」

「可愛く盛れてるなあって」

「・・・まあいいけどさ」

「ほんとのホントに、こうしていつまでも喋っている訳にはいかないし、もう行くわ。クリスマスももう終わるしね」

「じゃ、と穹はさばさばとした様子で手を振ると回れ右をして立ち去ろうとする。

「穹ちゃん。待って。一つ忘れてる」

「梨子先輩が穹を呼び止めると、穹は背中を向けたまま顔だけ此方に向ける。けれど、その表情には心当たりなどまるでなさそうな様子だった。

「ラブライブ決勝、私達のことめちゃんと見てよね」

「果南さんが不敵にそう言うのと、穹も私も合点が言った。

「勿論楽しみにしています」

「そう言い残して、穹は今度こそ私達の前から姿を消した。

次に会うのは冬末、ラブライブ決勝の日。

「星もこれでもう後がないよ」

「何言ってるんですか、果南さん。A q o u r sだってそうでしょ」

「なら言い換えましょうよ。先しかないって」

「OK. それならポジティブね!」

「じゃあ私達も帰ろうか、沼津に」

「広大な羽田空港を迷う様子もなく進む鞠莉さんの背中を私達は追った。

「流星に全世界をまたにかける女といったところだろう。普段沼津で見る姿とはどこか違って頼もしさが垣間見られた。

「鞠莉さんはどうして車の免許を?」

「来年にはイタリア生活だし自分で何でも出来ないよね。海外の距離感には日本のそれとは違うのよ?」

「まさか鞠莉が運転する車に乗る日が来るなんてね」

「そうやって人は成長していくものですわ」

それは何て事のない日常会話。けれど、そう時の経過を感じる事を三年生が口にするとうとうしても考えざるを得ない。三年生卒業後の事を。

「三年生がいなくなった後、A q o u r sはどうするんですか？」

私は小声で千歌先輩に尋ねた。結論はまだでも何となく考えてはいるだろうと思っただからだ。

勿論、私がA q o u r sの活動に対しどうこう言う資格は無いし、言ってしまうえば活動的には関係ないのだ。けれど、千歌先輩から始まった今のA q o u r sのことをずっと見てきたのだ。気にならない筈がない。

「今は考えてない。ラブライブが終わるその時まで考えちゃいけない気がするんだ」

「それは考えた上での棚上げですか？」

「うん。だって、その時にならないとどうしたいのか、どうして欲しいのか分からないと思うし」

それは残る側の気持ち、去る側の気持ちを汲んだ上での保留だった。

「あ、あの車だよ」

曜先輩が指差した先にあるのはピンク色のワーゲンワゴン。なるほど、あれならばこの人数で乗り込むことも可能だろう。

「昔はちよつと遠出するだけでも親の目を盗んでたのにな」

「そう言えば、いつだったか流星群の日に三人で展望台まで行きましてたっけね」

「あれ親が凄く探してて、帰ったら拳骨貰ったんだよ」

「あの日は結局雨が降って、何も見えなかったんだよね」

車に全員乗り込むと鞠莉さんは危なげなく車を発進させた。駐車場から外に出ると、丁度鞠莉さんの言葉の再現かのように雨が降っていた。

「そこまでして流星群見たかったのは何故です？別に淡島からでも良

「かつたんじやないですか？」

私のふとした疑問に鞠莉さんは何も答えなかつたけれど、果南さんがいたずらっぽく笑って代わりに答えた。

「願いたい事、したかつたんだよね」

「ずっと一緒にいられますように、ですね」

それは本当に幼い願いだつた。

ずっとなんて事はそうそうない。小さな事ではあるけれど、誰にだつて覚えがある筈だ。

ずっと親友だと言つていた友人と疎遠になつたり、生涯少年誌を読み続けると思つていても新規連載を読まなくなつたり。

実際、鞠莉さん達は一度疎遠になつた。それは、その当時星に願いを掛けていたとしても避けては通れなかつたのだろう。

けれど、だからこそ今、こうして再結集した鞠莉さん達は心が通じ会えているように傍目からも見える。

「もう一度、星に願いを掛けに行つてみる？」

「ずっと一緒にいられますように？ 来年にはバラバラなの？」

「だからですわ」

「叶わないから願う、か」

「でも、雨が・・・」

運転している鞠莉さんの顔は私からは見ることは出来ない。だからその現実を口にする鞠莉さんがどんな事を思っているのか、それを推し量ることはできない。

「大丈夫だよ」

「千歌っち？」

「雨を止ませることはできないけど、雨が止むまで待つことはできる。

一人なら夜は長くても、九人ならあつという間だよ」

「・・・そうね。沼津につく頃にはきつとー」

私達は眠気がどこへ行つたのやら、夜通しで喋り続けた。運転出来るのが鞠莉さんだけだつたから、鞠莉さんが眠くならないように、所々で休憩も挟んで。

だからだろうか。長い時間を掛けて沼津に帰つた頃には、空も心も

晴れていた。

第百五十一話

私はいつから夢を見ているのだろうかと現実を疑うような出来事が最近多々ある。それは本当に信じられない出来事が起きているからなのか、それとも私が現実を見切っていたからなのか？

とにかく私はまた夢のような出来事の渦中にちいる。

「星・ぼさっとしてないで手を動かして」

「ごめんご、めんご」

生徒が企画・立案して開催されることとなった閉校祭。その準備に駆り出され、今まさに入場門の設営をしているのだ。

終わりをこんな風に前向きに迎えようとする気持ちは私では辿り着けなかった境地だ。そして、私自身、そうしたいと心から思えるようになっていたことに一番驚いている。

自分達の気持ち、近隣の人など今まで関わってきた人達の気持ちを込めて開催される1日限りの祭。心の底から楽しみに思う自分がいるのだ。

「オツケー。固定完了」

いつになく晴天のもと、季節に似合わず汗を掻きながらの力仕事はだが、誰一人として不平不満を漏らす人はいなかった。

「随分立派な門を作ったね」

「この学校でやり残しのないようにする。それが閉校祭のテーマだからね」

これは統廃合が決定し、Aqoursが停滞した時に学校の皆で話したことの実現の機会だ。

今回の閉校祭のプランはAqours主体ではないのもまた誇るべきことだと思う。

最近Aqoursの活動ばかりに目が惹かれがちだけれど、浦の星女学院を想っているのは彼女達だけではない。そういう気持ちに溢れた企画は正式な形として全生徒の意見を集約し、理事長である鞠莉さんに提出され、晴れてゴーサインを貰ったのだ。だから誰もが主役で、誰もが誰かの脇役。そんなお祭りにしようと呼び掛けている。

「星ちゃんは何かやるの?」

「ふえ?」

ふと掛けられた言葉に私はただ戸惑うことしか出来なかった。

私が浦の星女学院生徒としてしたいこと。それはなんなのだろう?
?

思えば私は音ノ木坂学院で穹としようとしていたことばかりに思いを馳せて今ここですること、したいことに目を向けていなかった。

「それで私に相談に来たって訳?」

「一番と言つていくらいにこの学校の事を考えてる鞠莉さんなら適任かなって」

私は理事長室の来客用ソファに座り、自分のデスクで書類に目を通している鞠莉さんを見上げた。

折角なら私も楽しみたいのだけれど、どうにもフィルターが掛かったように良い案が浮かばないのだ。

その点、鞠莉さんは自分のしたいことは即実行の人だ。良い案はともかくとして思考方法なんかでアドバイスが欲しい所だ。

「それは間違えてないけど、人に聞くことじゃないんじゃないかしら?」

「それはまあそうなんですけど・・・」

「それに、私がしたいことは今もしている。それは分かってるでしょ?」

はつきりと言葉として聞いたことはないけれど、鞠莉さんがこの学校を大切にする気持ちはダイヤさんや果南さんにあるということは分かる。そして、鞠莉さんが今みたいなお話を言ったということは特

に語るべきものは無いということなのだろう。

「分かりました。他を当たります」

私は諦めて理事長室を出ると、三年生のクラスに向かった。

道中、廊下のそこかしこに備品が転がっていたり、人が転がっていたりと、足元が油断ならないことになっていた。

皆、自分のしたいことのため、誰かのしたいことのために力を尽くす。全校生徒がそうなっている学校など、他のどこにもないだろうなと思う。だから夢を見ているみたいに思うのだ。

「ダイヤさん」

私は三年生の教室の入り口から中を覗き、クラスで一番髪の毛が綺麗なダイヤさんの後頭部を見つけ、早速声を掛けた。

「あら？星さん。どうされたのです？」

「ちよつと意見求むって感じなんですけど……ちなみにダイヤさんは閉校祭で何かされるのですか？」

「ええ。折角ですので生徒会長という御役職も忘れて一スクールアイドル好きとして催しものをするようかなと」

ダイヤさんは一年生の頃、そして今スクールアイドルとして活動しているけれど、一ファンとして気兼ねなく誰かと語ったりはしてこなかった。だからその反動なのだろう。というか、ルビィちゃんがダイヤさんと催しものをすると言っていたのを忘れていた。

「星さんは何をするのか決めてないのですか？」

「余り大きな声で言えないですが、何かをしたくて浦の星女学院に入学した訳ではなかったですからね」

「初めはそんなものですよ。閉校祭を企画してくださいだったこの学校の生徒の大半はきつと同じです。でも、きつと心のどこかにあったんです」

子供の頃は出来るとか、出来ないではなく好きか嫌いかで夢を見た。でも成長するに連れて色々なことでその夢を信じられなくなるのだ。自分には無理だとか、他人と違う趣向だからと人目を気にしたり、受験勉強があるからとか。

でも蓋をしても無くなる訳ではない。そして、形が変わったとして

も望み、願いは誰にしもあるのだとダイヤさんは言った。

「星さんにもきつとあると、私はそう思います」

そう言われると不思議とその通りなのかもしれないと思えてしまうのだから、我ながら単純なのかダイヤさんの説得力があるのか。

「ちよつと考えてみます」

私は最後に一言、感謝の意を込めてこう告げた。

「ありがとう。ダイヤちゃん」

呼び慣れないからか気恥ずかしさに私はそそくさと三年生の教室を後にした。

去り際に三年生の教室の中から「ダイヤさん顔が赤いけど、大丈夫？」と聞こえた。

私は少し考えを纏めようと勝手知つたる屋上に行こうと校内を歩く。

大雑把に工程を思い出すけれど学校全般の設営をした後にクラス単位、生徒単位での設営をすることになっている。一年生のクラスは割と個人単位での出し物が多く、クラスとしては出し物が無いためこうして手が空いているのだ。

勿論、誰かの手伝いをすることで自分の願望を成就させる人もいる。花丸ちゃんなんか良い例で、善子ちゃんの占いの館を手伝っている。私も手伝おうと思つたけれど、花丸ちゃんから「星ちゃんはもつと考えるから決めないと駄目すら」と断られてしまった。

はあ、とため息を吐き出すとふと視界の隅に丸っこいナニかが通りすぎた。見たことがあるような、ないようなそれが気になったため、私はそのナニかの後を追うと、普段は使われていない空き教室にナニかが入っていった。

あのドラえもんのように丸っこい、そして茶色いフォルムは我らが伊豆三津シーパラダイスのセイウチ型マスコットキャラクターのこと、「うちっちー？1号とか2号なんていたっけ？」

がらり、と教室の扉を開けると中には丁度その着ぐるみの頭を脱いだ果南さんと曜先輩がいた。

「あれ？どうしたの星？」

「それはこちらのセリフです。どうしたんです、それ？」

果南さんは苦笑いしながら説明してくれた。

「海を紹介したくてさ」

果南さんは実家がダイビングショップ。その関係からか自身もまたダイビング、いや、海そのものが好きなのだ。だから海の魅力を直接紹介したくてクラスメートとかをダイビングに誘ったりとしてきたけれど、中々ハードルが高いようで、余り潜りに来てくれる人は少なかったのだという。そこで、誰にでも気軽に足を運べる海を教室に作ることにしたのだという。尚、うちっちはその宣伝用だ。

「新旧うちっちーが見られるのは世界の海が広くてもここだけ、なんてね」

「曜先輩はどうしてまた？」

「三年生の三人が仲良すぎて忘れられがちだけど、果南ちゃんと私と千歌ちゃんは幼馴染なんだよ。それでね。私、千歌ちゃんと何かしたって思ってたのと同じように果南ちゃんとも何かしたかったんだよね」

けれど、実家の手伝いとかで中々その機会を得られなかったのだという。

「曜と千歌が梨子をダイビングに連れてきてくれた時とか、星が来てくれた時嬉しかったんだよ？」

「私も果南ちゃんと潜るの昔から好きだったし」

自分の好きなことを広める。昔から好きなことのために協力する。それは悩んでいた私の心の水面に小さな波を起こした。

「何か少し分かったかも」

「星？」

「ありがとうございます」

私はその思いつきに居ても立ってもいられず走り出した。

そうだ。私にはずっと昔から好きなことがあった。それは自分だけで満足出来ることではなかった。誰かと共有したいことだった。

例えそこに穹が居なかったとしても、それは私の中に確かに存在した。

「千歌先輩！」

私は真つ直ぐ二年生の教室に飛び込むと太陽見たいな髪色の素敵
な頼れる先輩を呼び掛けた。

「はえ？」

「閉校祭のテーマソング」

勢い余って言葉が続かなかったけれど、千歌先輩は驚いた顔をした
ものの、力強く、うんと頷いた。

第百五十二話

「夏休みのラブライブ予選の時に学校の皆でステージに立とうとしたの覚えてる?」

「覚えてますよ。ハッキリと」

Aquorsに感化された浦の星女学院の全校生徒が学校を救いたい、輝きたいと願い、それを予選に出場という形で叶えようとしたことがあった。けれど、レギュレーション的にメンバー登録されていなかったためそれは幻となったのだ。

「私ね、その時のことが頭からずっと離れなくて、それでいつか皆で同じ歌が歌えたらなって、こっそり曲を作ってたの。皆にも込めたいフレーズを書いてももらったりしてたんだけど、実はまだ纏まってなくて」

ほら、と見せられた千歌先輩のノートには沢山のメモ紙が未整理の状態で挟まっていた。

「勇気」、本音、希望、想い、信頼、旅立ち、
「諦めない」、夢、本気、強さ、覚醒、未来、
完全燃焼」、その他沢山の想いが各生徒の名前と共に綴られている。

統廃合が決定してAquorsが折れそうになった時に学校に集まった皆の顔が浮かんでくる。学校一背の高い子、高校で平穩を取り戻した子、バイトをするようになってお金の使い方を覚えた子。沢山居る皆の顔が分かる。いつの間にかちゃんと分かるようになっていた。

「メモデーターの方は?」

「主旋律だけなら梨子ちゃんが作ってくれたんだけど」

「まだ編曲出来てないんですね。じゃあ、作詞と編曲ですね」

「良いの? 完全オリジナルじゃなくて」

「むしろこの方が良いです」

私がもし、単なる引越として内浦に来てこの学校に入学していたなら、きっと普通に学校の友人と音楽を共有していただろう。スクールアイドルとして活動していたかはさておき、きっとそうしてい

た筈だ。だつて音楽が好きで、誰かと奏でるのが好きで、誰かと分かち合うのが好きだから。自分達の思い出を自分達の音楽で彩ればそれはとても綺麗だと思うから。

「この短い間にできるかな？」

千歌先輩はどこか挑発的にそう私に問うけれど、答えなど一つしかない。

「千歌先輩がそれを言います？できませんよ」

できるかな？と問い掛けられたら答えなど“Hi”しかない。荒波だつてできると叫んで奇跡の波に変えてしまう千歌先輩と学校の皆の力ならできると信じてる。そもそももう基礎はあるのだから。

「じゃあ部室行こうか。パソコンにデータ入ってるから」

千歌先輩は自分のクラスメート達にクラスの出し物の手伝いを少し抜けるで行つて私と共に教室を出た。

「すみません。突然押し掛けちゃつて」

「いいんだよ。私はどちらかと言えば当日の方が仕事が多いから」

千歌先輩のクラスでは大正ロマン風の喫茶店をするらしい。なんでも梨子先輩が熱望したとかで、珍しく梨子先輩が陣頭に立つて張り切っているらしい。

「千歌先輩はクラス以外には？」

「私は今回は個人では何もやらないよ」

千歌先輩は私の問い掛けに首を振つて答えた。

「閉校祭をやるよつてなつて、私も何かやり残したことないかなつて考えたんだ。改めて考えるとね、μsと・・・スクールアイドルと出会つてから私やりたいことは全部やつてたんだ」

やりたいことは全部やつてた、なんて普通は言えないし、言っている人がいたとしても信用などできない。けれど、私は千歌先輩の歩みを知っている。その歩みは決して平坦では無かつたし、後悔だつてきつとあつただろう。けれど歩みは止めなかつた。それを知っているから、本当なら信じられないような言葉もすつと胸に入った。

「だから私は誰かのお手伝いが出来ればそれでいいかなつて」

「・・・なら、遠慮なくお手伝いしてもらいますね」

「良い曲にしようね」

「早く聴きたいですよ」

「そう？ならーなー」

千歌先輩はちよつと悪戯っぽく笑うとハミングで曲を奏ではじめた。

それはとても楽しそうに、純粹に音楽というものが好きで好きで堪らないとでもいうように。

そんな千歌先輩の隣を歩くのがとても不思議な気分だった。

はじめは千歌先輩とはそもそも道が交わることは無いと思っていた。A q o u r s が活動しだして音楽的な経験では私が先を行っていた。それもあつという間にA q o u r s が追い抜いて行った。とても速く、遠くまで。だからこうして足並みを揃えているのが不思議なのだ。

「だから僕らは がんばって挑戦だよね」

ワンフレーズだけ、千歌先輩は歌を乗せた。

それはすれ違ったり、廊下で準備をしている生徒はそのまま聞き流してしまう程度の音量しかなかったけれど、ただ一人、隣にいた私はそれをハッキリと聞き取った。

「皆から集めた歌詞を見ているとね、この言葉だけは外せないかなって」

照れたようにそう言う千歌先輩に私は頷いた。

「とても浦の星女学院らしいんじゃないかなって思いますよ」

「そう言えるってことはすつかり星ちゃんも浦女に染まったね」

「ーなーーそうですね」

凄く今更だし、特別な言葉でもない。でも、千歌先輩から浦の星女学院の生徒らしさがあるとと言われるのはどこか嬉しかった。それはきつと私に限った話ではないだろう。今の浦女生は皆ここの生徒であることを誇りに思っているからだ。

「到ちゃーくー」

千歌先輩は勝手知ったるスクールアイドル部部室の中に飛び込むと、くるりと反転してこちらを見つめる。

「お邪魔しー」

そして私がそう言おうとした口を人差し指でそつと押さえた。

「今日は同じ目標を持つてるんでしょ？」

ならその言葉はいらないよ、とそれだけで伝わってきた。

「・・・じゃあ、良い曲に仕上げましょうね」

「うん！」

そんなやりとりがあったからなのか、その日の部室は私がある時に覗きにきた時よりもちよつとだけ居心地が良く感じられた。

第百五十三話

思えば編曲、という作業を行うのはある意味で初めてだ。

穹と曲を作っていた時は文字通り作曲だったし、カバーアレンジは編曲と言えないこともないけれど、こうして曲に一つの完成を与えるための作業という意味では間違いなく初めてだった。

「テーマソング？」

「どれどれ……いいじゃない！」

A q o u r s の作曲担当 梨子先輩らしさを印象つけるピアノメインのイントロとアウトロ、A q o u r s らしさを、そして沼津の海から聴こえる波音のようなツリーチャイムのキラキラした細やかな音や木琴による水泡感のある音、なによりドラムとストリングスのリードによる浦の星女学院らしい力強さ。そのシンフォニックなメロディーに乗せられた皆の言葉や方向性との一体感は自画自賛するほどだ。

早速、何かと伝播力のある千歌先輩のクラスメートの四五六トリオに聴かせてみたところ好評で、直ぐに各生徒に曲を回してくれた。すると、

「このパートなんだけど……」

なんて廊下を移動中にアイデアをくれたりするようになって閉校祭前日まで微調整を重ねた結果より楽曲の持つ力強さが増した

流石に合唱練習する時間までは無いけれど、仮歌を入れているので多分皆覚えてくれるだろう。

閉校祭前日の放課後、ヤドカリみたいにスクールアイドル部室に居着いた私は千歌先輩とホッと一息お茶を啜っていると、千歌先輩が「あつ」と声を上げた。

「ねえ、星ちゃん。歌詞カードは？」

「……忘れてました」

校内の生徒ならメールなりで送れば済むけれど、当日は浦女OBや近隣の方々も来るのだ。その人達のためにも全員に周知出来る方法を考えなければならなかったのだが、編曲に夢中になるあまり忘れ

ていた。

もう時間ないじゃん、とどうしようか頭を働かせようとする千歌先輩が苦笑いして、

「なんだか逆だよね、こういうの。いつもなら私が前のめりになるところを星ちゃんが冷静につついてくれたりするでしょ？」

「私、自分が当事者になると視野が狭くなるんです」

「良いんじゃない。それって夢中ってことでしょ」

と言った。

そう。千歌先輩の言う通り、夢の中だ。

終りは見えているのに、いや、見えているからこそ私は私に正直になれた。去年の私がなれなかった私。それはきつと0から1に進み続け、そして1以上の存在になろうとするA q o u r sや浦の星女学院の皆がいたからだと思う。

「誰かが夢中になってるなら、別の誰かが見えない所を見てあげればそれでいいんじゃないかな」

「千歌先輩らしいですね」

「星ちゃんこそ。いつだって私達のこと見ててくれたでしょ」

千歌先輩は臆面もなくそういうことを言えてしまう人だ。それが嫌味に聴こえないのがズルいと思う。勿論良い意味でだ。

「な、なんでこんなところに!?!」

「ん?」

「どうしたんだろう?」

なにやら校内がざわついたと思い、廊下に出て騒がしい方に進んだところ、突き当たりの廊下で、白い布を被った何かが派手に足音を発して善子ちゃんに追いかけていた。

「何、あれ?」

「なんかヨハネトラブルの予感が・・・」

廊下を通りすぎていったと思ったら、ざわつきが更に増して、もう一度私達の前の廊下を通りすぎた。更に追いかける人が増えて、そこには何故か新旧うちっちーの着ぐるみも混ざっていた。

「あ、千歌。大変だよ! しいたけが」

「果南ちゃん？しいたけがどうしたの？」

旧うちつちーがこちらに気付いたのか、着ぐるみ越しに果南さんが声を掛けてきた。

因みに勿論のことだが、しいたけとは茸にあらず、千歌先輩の飼いだ。

「どうしてか、しいたけが迷い混んできて凄い混乱しちゃってるみたいなの」

「あの白いの被ってたのって、しいたけだったんだ」

「あ、外出ちやっただよー！」

騒ぎの移動を耳で追っていたところ、下へ下へと下りて行き、窓からその姿が確認できた。

そしてー

「あつ・・・ちやー」

派手に入場門にぶつかり、固定が甘かったのか見事に入場門は倒壊した。見たところ下敷きになった者はいない様子で、それだけは不幸中の幸いだった。

「しーいーたーけー！」

「あうっー！」

千歌先輩が窓から名前を呼んだところ、元気な返事が帰ってきたところを見るに、どうやらしいたけもまた無事の様でホッと一安心だ。

「どうする、これ今から直してたら確実に終バス無くなるよ？」

「でもやるしか・・・忘れてました」

私達は顔を見合わせて途方に暮れていたところ、小気味良いぴんぽんぱんぽーんというアナウンスが校内に流れ、誰もが予想していた通りの呼び出しがあった。

「高海千歌さん、高海千歌さん。直ちに理事長室に来なさい」

「ダイヤさん滅茶苦茶怒ってるよ。どうしよう」

「それと、近くに星さんも居るのは分かっていますわ。直ちに千歌さんを連れて此方に来るようにーいいですねー！」

そう言われては仕方ないと、私は果南さんと共に千歌先輩の両脇を確保した。

「え？何かこれ私が悪いみたいな流れじゃない？」

「千歌の犠牲は忘れないよ」

「先輩、すみません。ダイヤさんには逆らえませんが」

そんな、という悲鳴を他所に、私達はするずると千歌先輩を引き摺って理事長室へと出頭し、何故か全員まとめてダイヤさんからお説教を食らった。正直、果南さんは完全に貰い事故である。

こうして閉校祭準備は他の大勢の生徒を巻き込んでサドンデスの様相を見せることとなった。

幸い、終バスを逃した生徒は鞠莉さんが自宅まで送ってくれるということで、決着は付いたのだが。

「言わば前夜祭ですね」

「何良いこと言った風に纏めてますの」

何てダイヤさんに小突かれる私であった。

第百五十四話

人間欲望に忠実というか、なんというか。時間が出来たと知るやいなやみんな入場門の復旧のみならず各々の出し物の方にも追加修正をし出した。

その逞しい精神に流石のダイヤさんも笑っていた。というか、ダイヤさん自身も自分の衣装を調整しているのだからちやつかりしている。

そんな訳で、日が暮れる頃には入場門は無事に復旧し、今は与えられた夜の学校という時間を皆が皆満喫している状況だ。その上、

「美味しいぞら」

高海家からの差し入れでみかん鍋が振る舞われているのだからいたせりつくせりだ。

なんでもしいたけ乱心事件は、千歌先輩の真ん中のお姉さんがしいたけの散歩中にリードを離してしまつたらしく、それで学校に迷いこんできたとの顛末だったのだ。みかん鍋はそのお詫びだと振る舞つてくれたのだ。

家庭科室では花丸ちゃんを筆頭に皆美味しい鍋に舌鼓を打ち、私達は今という時間を楽しんでいた。

窓から校庭を見れば何処から持ち出したのか花火で戯れている生徒が数人いた。

流石に学校でこうも堂々と花火で遊んでいるのは蛮勇が過ぎると思つたけれど、打ち上げたりはしていないし、多目に見られているのだろう。

「何を見てるの?」

「ちよつと小さな花が見えましたので。曜先輩はもう準備は終わったんですか?」

「うん。あ、花つて花火のことだったんだね」

曜先輩もまた窓から校庭を見やると私同様に花火をしている様子に気付いたようだ。けれど、些かタイミングが遅かつたらしく、すぐに花火が尽きてしまったようだ。

「・・・なんか不思議だね。学校の中はこんなに賑やかなのにね」
慎と静かに戻った校庭を見て曜先輩はしみじみと言った。

「学校って一種の異界らしいですよ」

「何それ？」

「世間とは隔離された空間で独自のルールで動く場所だから」

「そっか。異界か・・・でも、だからこそ今みたいに出来ることがあつたんだらうね。だって、普通学校を救おうなんて真剣に考えたりしないもん」

「ですね」

「それにアイドルをしようなんて大それたこと考えられないし」

そんな大胆で無謀な事を考えられる場所、それが許される場所はこの学校という世界以外では絶滅したのではないかというほど限られる。

夢を追うこと、真剣に何かをすることは見下され、俗にいう社会的に認められた価値観が跋扈する世界。リアリストを気取って諦めを受け入れる理由にしたり、小狡く生きたりする現代でこの学校だけが異質だ。

もちろん、スクールカーストという言葉があるように学校によっては秘密警察の真似事が横行している学校もあるようだけれど、この浦の星女学院は聖域と言えるほど純情だ。

「私ね、この学校で良かったと思う。千歌ちゃんと果南ちゃんと同じ学校で、同じことを出来て・・・それって凄く私には大切なことだったんだ」

曜先輩はいつしか言っていた。千歌先輩と果南さんと同じことをしたかったと。でも、それはきつと言葉以上の思いがあるのだと思う。

「私って結構何でも出来ると思われやすくて・・・実際器用な方だとは思うけど、でもそんなことなくて。出来ないことは誤魔化して上手く立ち回ってるだけなんだ。果南ちゃんはそこら辺は割りきりが凄くて、出来ないこと、出来ることはきっぱりと分けてるの。逆に千歌ちゃんは出来ないことは多いけど諦めないんだ、絶対に。挫けること

もあるし、めげることもあるけど諦めないの。私はそんな二人みたいになりたいってずっと思ってたんだ」

幼馴染だからこそずっと昔から変わらない二人の軸。それは奇しくも曜先輩には無いものだった。だからこそそれに憧れた。人からはなんでも出来て追いかける対象だと思われている曜先輩は、その実追い掛けている人だったのだ。

私はその告白を聴けて嬉しさを覚えた。

だって、本当に曜先輩って器用で、多分一人でも生きていけるような、そんなタイプの人だと思っていたから。そんな人から理由は分からないけれど本音を語って貰えたから。

「だからスクールアイドルになれて、同じ目線で舞台上に立てた。それが本当に嬉しかったんだ。星ちゃんはこの学校で良かったって、そう思ってる?」

「最初はそれこそ呪ってましたよ。でも、それはきつとどこの学校でもそうだったと思います。音ノ木坂学院に入学できなかつた時点で、穹と離れ離れになったことで。でも今は良かったと、心の底から言えます。それを教えてくれたのはみんななんですからね」

そう言うのと照れた様子で曜先輩は私に向けていた視線を窓の外に逸らした。

「あ……」

「何かありました?」

「ちよつと行ってくるね」

そう言つて曜先輩はそれとない様子で家庭科室から抜け出した。

何を見つけたのかと思つて外を眺めていると程なくして曜先輩が入場門の近くまでやって来た。

そして、その脇に片付け忘れられていたであろう、放置されている段ボールの側まで行くと、片付けるのではなく、そこに乗っかって何やら呼び掛けている様子だった。

その景色に私は見覚えがある。その時は曜先輩はまだ、その小さな小さな舞台には上つておらず、そこには千歌先輩が立つのみで、曜先輩は傍らで手伝っていただけだった。

けれど、今、曜先輩は在りし日のようにそこにいる。それは曜先輩がさつき言っていた「同じ目線で舞台に立てた」ことを意味しているのだろうか。

「あれって曜ちゃん？」

絵画を眺めているような気分でいると、今度は梨子先輩がいつの間にか私の横に居た。

「何してるのかしら？」

「たぶん、夢を見ているんじゃないかと思います」

誰もやっていない、何をすれば良いのかも分からない。ただ輝きたい。そんな願いだけで始まった千歌先輩の挑戦。それに惹かれるように始めたスクールアイドル活動は、器用でそれなりのことが出来てしまう曜先輩ですらも思うように成果が出ず、だからこそ同じ立場でいられる場所となったんだと思う。だから曜先輩はずっと夢を見続けているんじゃないかと、そんな気がした。

「夢……そうね、夢のような毎日だった」

「過去形ですか？」

「ううん。ずっとだと思う」

「ずっと？学校が無くなるのに？」

「うん。だってこの毎日を忘れることなんて出来ないもの。その思いが私を、私達を動かす力になるのなら、それってずっと夢を見続けているようなものじゃないかしら？」

その台詞はどこか自分に言い聞かせるように、私に伝えるように、そして視線の先にいる曜先輩に言っているかのように思えた。

見れば曜先輩の呼び掛けに惹かれたのか、千歌先輩が曜先輩の側に寄り談笑し始めた。

「終わらない夢を見て、か……」

もしかしたら千歌先輩と曜先輩もまたそんなことを話しているのかもしれない。

いや、他にも同じようなことを語らってこの前夜祭のような時間を過ごしている人がいるかもしれない。

微かに耳に響く生徒達の声や活動音をBGMに私と梨子先輩は千

歌先輩達が戻ってくるまで心地よい無言の時間を楽しんだ。

第百五十五話

冬の空は湿気が少ない分景色が良く見える。だから小高い丘の上にある浦の星女学院から内浦の海越しに見える富士山は絶景の一言に尽きる。

富士山と燦々と輝く太陽に見守られる今日という日ほど、終わりを悔いなく笑顔で迎えるためのお祭りの日として相応しい日はないだろう。

今日は遂に來た閉校祭当日。私達は朝イチで教室から体育館に集まり、今か今かと始まりの時を待っていた。

「皆待ちきれないって感じね。それでは長い話は抜きにして、これより閉校祭を開幕します」

体育館に集まった百人に満たない全校生徒を前に鞠莉さんが理事長として宣言すると、私達は万雷の拍手でもって閉校祭を華々しくスタートさせた。

「さて、それじゃあゆつくりと回りますか」

出し物がある人は自分の仕事に、そして手の空いている人は最高に楽しもうと、意気揚々と体育館を出ていく。

私の場合は主催して、というのではなく便乗しているため基本的には手が空いている。

さて、どこから見て回ろうかと閉校祭の栞に目を通す。栞の末尾には無事に閉校祭のテーマソングの歌詞も掲載されているため大満足である。それに加え、閉校祭期間中は時々テーマソングが校内のBGMとして流れるため、今日浦の星女学院に居る人は自然とリズムを覚えられるだろう。

さて、今回は皆がやりたいことをやるというテーマから個人出展が多く、文化祭の定番とは少し趣が異なる。それが故に、それぞれ出展内容も栞には書かれているのだが、行ってみなければ想像しにくく、却って興味をそそられる。

取り敢えず上から攻めて、徐々に下つていけば昼時には中庭の出店で食事を摂れるだろうと、大雑把にルートを決めて、私は校内の階段

を上る。

校内は賑やかだ。生徒は言わずもがな、始まったばかりだというのに、近隣の人も既に来校している。

普段は掲示物よりもボードの面積の方が圧倒的に広い掲示板には所狭しと閉校祭関連のチラシが貼っているし、本当に学校が閉校になるなんて嘘ではないかと思ってしまう。

けれど、終わると言うことは案外そんなものなのかもしれない。引退を表明した歌手のCDが急に売れ出したり、生産をやめることとなった定番商品の買い占めが起きたりなんてのはワイドショーなんかでも良く見る光景だ。

そしてそれはきつと私自身も例外ではないだろう。今は当事者の一人としているからこそ学校が好きだと言えるけれど、もしこの学校が閉校になるなんて問題が起きていなかったら、それでも絶対に学校が好きだと言える自信はなかっただろう。本当に、私も皆も調子がいと思う。けれど、それでいいのだと思う。

そんな事を思いながら、私は歩調軽く階段を上っていると、一瞬だけ冷たい風が頬を撫でた。それはこれまでなんども感じたことのある風だ。階段の一番上、屋上の出入口が開いた時に舞い込む風だ。

屋上で出し物は確か無かったし、今日はA q o u r sの学校での屋上練習も無かった筈だ。

では誰がと思い、私は屋上へ行くと、そこには想像だにしない景色が広がっていた。

テント、テント、テント、といつの間持ってきたのやら所狭しと複数のテントが広げられていた。

「ゆるキャン△？いやいや、この数は全然ゆるくない」

取り敢えず誰か居るだろうか、手近なテントの中を覗いてみると、更に私は驚愕に落ちた。

「ガスボンベ？」

余りにも予想外過ぎてもう思考が停止しそうだった。

だって屋上に難民キャンプもかくやという数のテントがあつて、中には身長の中分くらいの大きさはある無骨な銀色のガスボンベが何

本もあるのだ。もう訳が分からない。いつからこの学校は統和機構の影響下になったのかと、けったいな妄想をしていると――

「見ーたーなー!」

「ひゃい!」
背後から肩を叩かれて変な声を上げてしまった。振り替えると、そこにいたのは四五六トリオ先輩だった。

「な、何してるんですか? テロですか? テロなんですか!」

「落ち着きなよ」

「これを作ってたの」

そう言っただけで見てきたのは色とりどりのゴム袋。まだ空気を入れていない風船だ。

「風船でアーチを作ろうって決めてたんだけど、直前じゃないと空気抜けちゃうでしょ?」

「それに、空気入れても固定するまでは飛んでかないようにしなきゃいけないから」

「ああ、だから△で飛ばないようにしてたんですね」

「ご明察」

「でもまさか今日という日に人が来るなんてね。サプライズにしようとしてただけけど、こっちが驚いたよ」

苦笑いしながら、けれど自慢げに設計図を見せてくる。

アイデアの元ネタは色々あるだろうけれど、私は映像で見たμs主催の通称スクールアイドルフェスティバルでの会場にあったバルーンアートのアーチを思い出した。流石に自信があるだけあってかなり手が込んでいるのが見てとれる。

「空気を入れるくらいなら手伝いますよ。三人じゃ時間掛っちゃうでしょうし」

「いいの?」

「だって今日は皆の願いが叶う日ですから」

そんなこんなで午前中はひたすら風船を膨らませることに専念したわけだけれど、その甲斐もありアーチは無事に昼には完成した。

「浦女ありがとう、ですか。なんでまた風船でアーチを?」

「んー・・・去年、皆でスカイランタン飛ばしたじゃん？」

「『夢で夜空を照らしたい』の時ですね」

「もう一度飛ばしたいなって思ったんだ。何度だって、やればどこにだって飛ばせるんだって」

それはどこか寂しそうで、でも挫けない芯の強さがあった。

「私達ってこんな前向きじゃなかったのにね」

浦の星女学院の屋上に半円を打ち立てた四五六トリオはどこか誇らしげに言っ、アーチを見上げていた。

手伝いを終えた私はその後、四五六トリオと別れて各出展を見て回った。

黒澤姉妹のスクールアイドルクイズ大会、果南さんの作る内浦の海の世界、鞠莉さんの創作料理『シャイ煮』、善子ちゃんの占いの館、千歌先輩のクラスの大正ロマン喫茶、その他にも、学校一背の高い人の出展である身体測定対決、いたずら好きな生徒の考えた使用不可になった机を活用した机への落書きコーナー、普段は入れない所にも入るチャンスがあるスタンプラリー、出店では焼きみかんなど、本当に多種多様で、キワモノもあつたけれど、楽しいお祭りだった。

顎が外れてしまうのではないかというくらい笑い通して、日が暮れると四五六トリオにより屋上のアーチは解放され、風船は夢のように空へと溶けていった。

そこから先は後夜祭だ。祭りの余韻は最後の最後まで覚めないのだ。

校庭の中央に大きなキャンプファイヤーを燃やして、私達は輪になつて踊つて歌つた。

『マймマйм』、『オクラホマミキサ』と言つた定番。果てはAqoursが考案した盆踊り『サンシャインぴっかぴか音頭』と何時までも続けられるのではないかと錯覚するほどに。揺れる炎の熱に負けないくらいに熱く、全力で。

誰一人として浦の星女学院が閉校になつて嬉しい人などいないだろう。けれど閉校になつて、それですら良かったねと言えるような日を作れたのではないかと、そう思えるような一日だった。

天高く燃えていたキャンプファイヤーも徐々に背が低くなっていく。それはお祭りの終わりをゆつくりと、だが、確実に終わるのだと宣言するようだった。

「これで浦の星女学院閉校祭を終わります。今日集まった人を見て、私は改めて思いました」

そのキャンプファイヤーを背に学校を代表して鞠莉さんが終わりの挨拶をする。

「この学校がどれだけ愛されていたか。どれだけこの町にとって、皆にとって大切なものだったか」

この日のために全力で準備した生徒の顔が、閉校祭に訪れた人達の顔が思い浮かぶ。その誰もが今日という日に自分の中にある感情を出し尽くして今ここにいる。それが、普段は余人に対して本音を見せない鞠莉さんの本音を表に出す。

「だから、この閉校祭は私にとって何よりも幸せで、私にとって何よりも温かくて……ごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさい。もう少し頑張れば、もう少し……」

こんな筈は無かった。無かったのに幸せになれてしまう皆の温かさに居たたまれなくなってしまうのだろう。鞠莉さんは頭を下げて謝罪した。私達に、いや、ここに居る人だけではないだろう。浦の星女学院を愛する全ての人に謝罪した。守れなくてごめんなさいと。けれど、それは受け入れられないのだ。

確かに楽園は失われるだろう。頑張りは報われなかっただろう。けれど、だからこそ今の私達があるのだ。失ったものと引き換えに、手にしたものが確かにあって、それは掛け替えのないものだ。

だから鞠莉さんの謝罪に対して皆からの答えはなかった。代わりに……

「アークーア……アークーア、アークーア」

巻き起こったのはAqoursコール。

浦の星女学院を背負って立つ最後の砦。

浦の星女学院の名を永遠のものにする可能性という名の希望。

皆のAqoursコールはそんな願いが込められているんじゃない

いかと思った。

「みんなー……ありがとう。じゃあ、ラストにみんなと一緒に歌おう。最高に明るく、最高に楽しく、最高に声を出して」

思わぬ感情の発露があったけれど、最後はみんな笑顔で一緒に歌えた。このみんなの願いが集い、それが私の願いと合わさってこの日のための音楽へと昇華した。

「……「君の胸に！」……」

それは問い掛け。まだ一步を踏み出せていない誰かへの。

それは語り掛け。自分の初めての軌跡を。それでも続ける今への軌跡を。

それは誘い。楽しさもあれば涙もある。迷いだって消えるわけではない。けれど、行こうと高らかに出発を謳う。

みんなの思いが紡いだ歌はそんな歌だ。

〃何度だって 追いかけてようよ 負けないで

失敗なんて 誰でもあるよ

夢は 消えない 夢は 消えない

何度だって 追いかけてようよ 負けないで

だって 今日で 今日で だって

目覚めたら 違う朝だよ〃

勝つ、ではない。負けないのだ。負けなければ夢はいつまでも続いていく。形は変わっても、願いが変わっても、その根本にある熱は変わらない。

〃やり残したことなどない そう言いたいね

いつの日にか

そこまではまだ遠いよ だから僕らは

頑張って挑戦だよね〃

それは永遠を手にする可能性だ。

その答えに辿り着けた浦の星女学院に感謝を込めて、私達はキャンプファイヤーが消えるまで全力で歌った。

第百五十六話

私が浦の星女学院に入学した時、やるべきこととやりたいことは決して一致していなかった。

意図的に目を逸らしていたし、諦めてもいた。

後悔と懺悔の日々。私には青春を華やかに送る資格など無い。そう自らの心に蓋をして。

それを引き上げてくれたのは間違いなく千歌先輩を筆頭とするAqoursのお陰だった。

何もAqoursのみんながずっと先にいた訳ではない。やりたいうことはあっても、みんなはやりたいうことが何か見えていたとは言えないし、迷わなかった訳でもない。でも、諦めなかったし目を背けなかった。

そんな姿に勇気を貰った。いや、私だけではないだろう。学校のみんなが勇気を貰ったはずだ。

その勇気が伝播して私は私の心に向き合えたとし、外にも目を向けることが出来た。

だから今、私はこうして素直に言葉を出せるのだ。

「私からAqoursに依頼があります」

沼津駅の程近く、プラザヴェルデの中にある練習スタジオにお邪魔した私は、Aqoursがライブ決勝に向けての練習していると知りながらもそう切り出した。

「どうしたの？改まって」

「曲を完成させたいんです」

「穹さんに聴かせる曲ね」

先が見えなくても踏み出すこと、自分の無力を見つめること、道は一つじゃないと探すこと、心に沸き上がる情動を知ること、多様性を認めること、過去を見つめ直すこと、輝きを探すこと、諦めないこと、夢を叶えること。Aqoursと共に過ごした全部、全部を経て私はようやく、一つの曲を紡いだ。けれど、それはどうしても私だけの曲である筈が無かった。当然だ。これだけ多くのことを共有したから。

それを踏まえたこの曲が私だけのものである筈がない。

「お願いしたいのは歌唱部分です」

私は自分の一番のパフォーマンスはハーモニカとタップダンスだ。当然、穹の前で私が直に披露するのはそれになるのだが、その都合上どうしても歌を一人では賄えないのだ。そして、この曲をにはどちらが欠けても足りない。

「ラブライブ決勝に向けて余計なことをしている時間は無いとは承知しています」

お願いします、と私は頭を下げた。

空気を読んでいないし、A q o u r sとしての活動からすれば邪魔になるのも分かっている。

「それでも……お願いします」

力を貸してください、と頼った。

これまで自分の力で何とかしようとしていた。一昨年の私が相方にすら相談しなかったように、引越してきてA q o u r sのみんなと出会ってから、こと音楽に関しては何だかんだで自分の領域から出ていかなかったと思う。だからいくら作曲しても腑に落ちない感覚が常に付きまとっていた。

でも私は漸く、仲間を頼れるようになった。

私の音楽は私だけのものじゃない。沢山の人の、沢山の音楽から影響を受けて形になっているのだ。閉校祭の時、みんなと「勇気はどこに？君の胸に」を歌って漸く気付いたのだ。

「星ちゃんはどうしたいの？」

千歌先輩からの問い掛けに私は本音で答える。

本気をぶつけ合わなければ手に入らないものがあるから。

「私の……みんなと作った音楽を届けたい、穹を驚かせたい」

「穹ちゃんがそれでも星ちゃんとは音楽を続けられないっていったら？」

重ねられる問い掛けに私もまた重ねて答える。

「それでも音楽から、穹から逃げません」

雨が降っていたって歌っていればいづれは晴れる。夢の後にはま

た別の夢があるように、穹との決着は終りであると同時に次への始まりなのだ。

私の答を聞いてみんなそれぞれどう感じたのかまでは分からないけれど、決してそれは悪いようには捉えられていないと思う。

「珍しく星ちゃんが頼ってくれてるし、やろうか」

「仕方ないですわね」

「我がリトルデーモンの頼みとあらば応えるのが主の役目、くくっ」

「この堕天使ときたら」

「善子ちゃんらしいすら」

「それで、どんな曲なの？」

「これです」

私が録音した仮歌に合わせて私は演奏する。床を傷付けては行けないのでタップシューズは履いていないけれど、リズムは刻めるのでタップダンスも込みだ。

「上手く言えないんだけど、星ちゃんっぽいね」

「何だか見ると私もタップしてみたくなる」

「結構難しそうだけどね」

今の私の全て。それを詰め込んだ曲はだけけれど、私にはやっぱり物足りなかった。今日の前にいるみんながいなければこの曲は完成しなかったし、完成しないのだ。

「改めて、宜しくお願いします」

「A q o u r sとして、確かに引き受けます」

私の依頼に自称「一応リーダー」の千歌先輩は居住いを直してA q o u r sを代表してそう言った。

そういう切り替えの真面目なところが頼れるし、一応なんて言葉は不要だとは思うけれど。

「そう言えばこの曲って何てタイトルなの？」

「これは—————」

曲名を聞くとみんな顔が綻んだ。何だか背中合わせみたいだね、と。

第百五十七話

どうせやるならば現時点での最高のクオリティを、と思うのは曲がりなりにもクリエイターならば誰でも思うことだろう。他でもない私がそうだ。

だから今日は仮歌のレコーディングのためにA q o u r sの面々を自宅に招待したのだが――

「凄いよね。この楽器の数！」

「イェーイ！」

「鞠莉ちゃん凄くギター決まってるよ」

「全然弾けないんだけどね」

ジャンクを二個一、三個一するなどして修理した楽器などがあるため、質は兎も楽器の種類は豊富でそれに目を輝かせるみんなは作業そっちのけで遊びだしたのだ。

「あら？このお琴全然調律が合ってますわ。というより絃が決定的にダメになってますわね」

「そうなんですか？道理で幾ら弄っても治らない訳だ。ってそうじゃなくて！」

「ピギツ!？」

「今日は私の曲に歌入れに来て貰ったこと、忘れてません？」

「そうよ。星ちゃんが困ってるじゃない」

「とか言って難しそうな顔しながらずっとキーボード弄ってるのは誰ですか？」

「こうしてみんなで星ちゃんの家に来るなんて早々ないからさ」

「いつもは千歌ん家に集まってるもんね」

「千歌ちゃんの家は学校からも近いし、居心地良いからね」

そう言われるとそうだ。

個別で誰かが家に来るというのは時たまあったけれど、全員集合というのはなるほど。確かに次にいつ機会があるのか分からないことだ。テンションが上がるのも頷ける。

「卒業前にこうやってみんなで星の家に来て良かったよ」

「卒業したら私達沼津から離れちゃうものね」
「……………」

果南さんや鞠莉さんがそう口にするのと、なんとなく気まずくなくなって思わず私含めみんな黙ってしまった。

やはり避けられない話題ではあるけれど、別れはもうすぐそばまで来ている。

今はラブライブ決勝に向けてや私の個人的事情に付き合っただけで一緒に過ごせているけれど、それが終わったらもうすぐに卒業式。その後は確か三年生の三人で卒業旅行に行くとかなんとか。いづれにせよ余り多くの時間は残されていないのは事実だ。だから私は聞きたい。

「三人にとってラブライブってなんですか？」

スクールアイドルになって良かったか、とか、ラブライブ優勝したとか、ではない。三人にとっての象徴的なものについてどう捉えているのかが気になるのだ。私には穹との間にそう言う一つの形のある象徴が無かった気がするから。

「随分唐突ですわね。てすがそうですね……」

ふむ、とダイヤさんは顎に手を当てて考え込む。いつも何かと自分をしていることに理由や意義を持っているダイヤさんにしては珍しい。

「ラブライブか。確かにそれありきで考えてる部分はあったかもね」

「三人でstartしたときでしょ。」

「そうそう。一気に知名度を上げて統廃合を阻止しようって」

「今思えば不純な動機ですね」

「あら？ダイヤは初めからスクールアイドル大好きだったじゃない」

「大好きでも動機がなかったらやってなかった？」

「さて。どうだったでしょうね？」

もしも、もしも、と過去を振り返るのは必ずしも後悔だけではない。現に今、ダイヤさんはふっつ、と楽しそうに笑っている。もしも三年生の三人でスクールアイドルをやらなかつたらSaint Snowのようにルビィちゃんやんと二人でユニットを組んでいたかもしれない。

いい、なんて考えているのかもしれない。

「スクールアイドルである以上、ラブライブに出るって決まってる訳でもないんだけどね」

「それでも惹かれるものはあった」

「先人達の活躍を目の当たりにしたら当然ですわ」

「ラブライブって不思議よね。甲子園、とかクリスマスボウル、みたい
に施設名とか開催時期とも関係ない大会名だしね」

「単に全国大会、じゃ味気ないのは分かるけど・・・ラブライブ、ライ
ブ大好き、みたいなの？」

「まあ好きなのは好きですけど、そうではない気がしますね」

「人生を愛する、じゃないかしら？」

「なら私達は十分過ぎるくらい愛してるんじゃないかな？」

「その名前の意味も分かってなかったの？」

「分かってなくてもそう思える日々が送れる。ラブライブってそうい
うものじゃないかな」

人生を愛する。どこか結論と言うにはフワツとした言い方だった
けれど、なんとなくしつくりもくる響きだ。

スクールアイドル活動を通じて手にしたものの、胸に抱いたものは多
くある。もちろん失ったものはあれど、得たものは誇れるものである
と胸を張って言える。少なくともこの一年彼女達の側にいた私がそ
うなのだから当事者がそうでないことはないだろう。

「人生を愛するためのラブライブ。なんか素敵じゃない？」

その言葉に私達みんな納得した。

「よし。それじゃあそろそろ歌おうか」

「一発録りで済むと思わないでくださいよ」

「分かってるよ」

各歌詞毎にパート分けは既に調整済み。

一人ずつのレコーディングとなるため、各メンバーとそれぞれ一対
一で部屋にいる事となる。

「星ちゃん。今日は呼んでくれてありがとう」

「依頼したのはごっちゃですよ？ありがとうございます私のセリフですって」

「でも今日こうやって集まってなかったら多分漠然としてたと思う。ラブライブ、人生を愛する。μ'sと、ラブライブと出会ってない頃の私は物足りないってずっと感じてたから」

「……………」

「だからスクールアイドルになって、ラブライブを目指して、輝きたいって思ってた！こんな楽しいことはないって、そう思ってる……………星ちゃん」

「はい」

「星ちゃんも」

「そのためにも、バッチリ魂を吹き込んでくださいね」

千歌先輩にそう言って私達はレコーディングを開始した。

驚くべきことに、というか案の定、各メンバーともレコーディングは一発でOKだった。

第百五十八話

ここに至るまで必然なんてものは何もなかった。個人的に好きな表現ではないが、所謂「運命」なんてちんけな確信は無かったし、涙だって流した。でも、だからこそ今の自分達がいる。

今日はラブライブ決勝の前日。私はAqoursと共に沼津を発ち、決勝の地である東京に、そして、スクールアイドルの聖地と化した秋葉原の一画、神田明神にお参りに来ていた。

澄んだ空の下、そびえる階段は以前ほどの高さを感じない。駆け抜ければあつという間に境内に辿り着いた。

私達は朱塗りされた御神殿の前に横一列に並び、ご挨拶と共に各々願いを口にする。

「会場の全員に想いが届きます様に」

「全力が出しきれます様に」

「緊張しませんように」

「ずらつていいませんように」

「すべてのリトルデモンに喜びを」

「浦の星のみんなの想いを」

「届けられる歌がうたえますように」

「明日のステージが最高のものになりますように」

「ラブライブで、優勝できますように」

その願いはラブライブ決勝に向けてのものであるものみんなバラバラだ。これから一致団結して優勝、という雰囲気とは違って見える。けれど、優勝したいと心の底では思っていると、そう思うのは私がAqoursに優勝して欲しいと願っているからそう錯覚しているのだろうか？

「最高の輝きを、みんなが感じられます様に」

「星ちゃん……」

だからその願いを叶えたい。その想いに突き動かされ私は口を開いたのだ。

それがあれば本気を出せる。勇気を奮い立たせて一步を踏み出せ

る。そんな力を引き出す輝きをA q o u r sが、私が、そして応援しているみんなが感じられる瞬間を作る。

表現は遠回りだけれど、それがA q o u r sが優勝することに繋がると思うし、私自身の目的も果たす願いも含まれる言い方だと思う。

「口が十揃えば『叶』ってね」

単なる言葉遊びだけれど、験を担ぐなんてのはそんなものだろう。

お参りも終えここでの目的の半分は済んだ。もう半分はS a i n t S n o wの二人とも待ち合わせているのだが、まだ来ていないよ。うなので私達はお参りもそこそこに境内を少し見学することにした。やるべきことは全てやった。ならばここからすることは心の整理だけだ。きつとそれはスクールアイドルの多くの人も同じなのだろう。境内に奉納された絵馬を見るとそこには沢山の夢が集っていた。中にはラブライブ決勝に出場するチームの名前もある。

「これって」

「—————」

言葉にならないアンニュイな気分がみんなから伝わってくる。

ラブライブに掛ける想い、費やした時間、手にした誇り。その全てに共感出来るからだ。

傲る訳ではないけれど自分達が勝つことで誰かの夢を終わらせる。順位の付く競技である以上、それは避けられないのだ。

私もまたそんな内心を想像することは出来ても、みんなに伝えるべき言葉は見つからなかった。

私はスクールアイドルではないのだ。みんなとは立ち位置が決定的に違う。

「こちらに居ましたか」

「聖良さん、理亜ちゃん」

ちよつと沈みそうになる空気を破ってくれたのは到着したS a i n t S n o wの二人だ。二人とも目敏く、私達の様子を見てこう口を開いた。

「改めて函館ではありがとうございました」

それは貰ったものを返すように、何を貰ったのか思い出させるよう

に聖良さんは柔らかく言った。

そして理亞ちゃんもまた、彼女なりに言葉を掛けた。ちよつとぶつきらぼうだけど、それこそ彼女らしい。一度見失いかけたスクールアイドル 鹿角 理亞としての姿がそこにはあった。

「ルビィ。忘れた訳じゃないでしょうね？」

「え？」

「がんばるって決めたら」

「絶対負けないんだ」

「いつしよにがんばってきた」

「絶対負けないんだ」

「覚えてるじゃない」

そう言つて理亞ちゃんはそっぽを向いてしまつたけれど、その言葉は私達に気付きをくれる。

そう、負けないんだ。

負けないとは続けること。続けるとは勝敗の先にある道のことだ。

μΣがスクールアイドルはどこまでも続いていくとその輪を広げたように、Aqoursが夢は終わらないとSaint Snowに示したように。

勝つことは奪うだけではない。新しい夢の切っ掛けにも成り得るのだ。

「遊びじゃない、なんて言葉はもう似合わない」

「理亞ちゃん」

“SELF CONTROL!!”で周囲に知らしめるように放つていた言葉、翻せば認めて欲しいと渴望するように歌つた言葉はAqoursには不要だと理亞ちゃんは言った。それは理亞ちゃんにとって最大の賛辞だろう。

「勝ちたいですか？ラブライブ」

そしてSaint Snowの鹿角 聖良としてAqoursのリーダーである高海千歌に問い掛ける。それはいつかの問答と完全に立場が逆になっていた。

「……………」

自分達が惹かれた耀き。トップスクールアイドルの持つ魅力の正体。それを得るために勝つしか道はないとしたSaint Snow。^w

耀きを見つけることで必然的に勝利を得るとしたAqours。けれど、どちらもそのアプローチだけでは限界があると身を持って体感した今、改めて向き合うことが必要だと聖良さんは言っているのだろう。そして千歌先輩はその答えをハッキリと口に出来ない。

ラブライブで優勝する。そう口にしたし、その為にも努力した。それはAqours全員が自信を持っていえるだろう。

けれど即答できない。

こうして多くのスクールアイドルの想いを前に揺らいでしまったからだ。それはラブライブに掛ける想いの大きさを知っているからこそだ。

「誰のためのラブライブですか？」

もしかしたら、そんな揺らぎを感じたからこそ聖良さんは問い掛けたのかもしれない。

「さて、私達はこれで」

「良い席を確保してるんだから。半端なパフォーマンスしてたら承知しないからね」

Saint Snowの二人は答えを聞くこともせず、ただただ私達の胸に問いだけを残して立ち去った。

「千歌先輩」

「大丈夫。何も考えてなかった訳じゃない。ただ、整理したいかな」

「なら、明日は各自自由行動して、秋葉ドーム付近で待合せでどうかな？」

曜先輩の提案に、みんなは目を見合わせて頷いた。各々やはり向き合う時間が必要と共通認識したようだ。

第百五十九話

昨日言ったことだって出来るとは限らないし、一度した決意も揺らぐことだってある。言ってることやってることが違えば当然反感を買ってしまうし、矛盾していると自分ですら反省するだろう。けれど人間誰しもが有言実行出来るとは限らないし、正しくあろうとしてもうまく出来ないのだ。

だから千歌先輩が、A q o u r s が、決勝を前に揺らぐのも納得できる。けれど、浦の星女学院の生徒が、内浦の人々が、S a i n t S n o w がやり方は違えど支えてくれる。そしてそんな支えのお陰でこうしてラブライブ当日を迎えることが出来たのだ。

「あれ？どうしたの星ちゃん？」

朝食後の時間は集合時間まで自由時間。各々自分自身を見詰める時間として使うこととなったのだけれど、それは私もまた例外ではない。だから私は各メンバーに一人づつ話したかったため、旅館を出る前にルビィちゃんに話し掛けたのだ。

「お礼を言いたくて」

「お礼？」

「うん。お礼。だって私のこと放っておかなかったでしょ？」

特段今まで言及することは無かったけれどA q o u r s が一年生三人の中で一番最初に私に声をかけてくれたのは実はルビィちゃんだ。

地元の中学からそのまま進級している人が多い浦の星女学院で、若干アウェーな気分だった私に、人見知りで超ド緊張していたルビィちゃんは勇気を振り絞って声を掛けてくれた。

「それにしてもまさか第一声が、『く、くく、くろまつさんは私の髪の毛、邪魔じゃないですか？』だなんて予想の斜め上過ぎて声だして笑っちゃったよ」

名前の順であるため、私はルビィちゃんの後ろの席だった。多分ルビィちゃんのツインのサイドテールが邪魔では無いかと気にしてたんだろうと思うけど、まさかそんなこと聞かれるなんて思わないし、

ましてや名前まで間違われるなんて予想外過ぎる。

「私もまさかその直後に髪の毛を引っ張られるなんて思わなかったよ」

「フリフリと揺れる髪の毛見てたらついね。まさかそれだけであれだけ絶叫されるとは私も思わなかったけどね」

「今までお姉ちゃん以外の人に髪の毛触られることなんてなかったから」

そんなこんなで結果的に初っ端から全開で人となりを見せたことで私達は話せるようになった。そしてルビィちゃんを通じて花丸ちゃん、そして花丸ちゃんを通じて善子ちゃんとも仲良くなった。

「今日まで燻ってた私をありがとう」

「どういたしまして」

私はルビィちゃんにお礼を述べて旅館を出た。

昨日に引き続き今日も快晴。沼津と違い建物に囲まれた空は狭いけれど、それでも気持ちのいいものだ。

「どこかにお出掛け?」

「果南さんは?」

「私は海にね」

旅館の玄関先でストレッチしていた果南さんのいつも通りのぶれない姿勢に思わず苦笑いしてしまう。けれど、同時に寂しさも感じる。果南さんは放っておくとどこまでも自由に飛んでいってしまうからだ。実際、卒業したら海外にダイビングのライセンスを取りに行ってしまうのだから。

「星はどっか?」

質問に質問で返した私に果南さんは再度問い掛けた。それは単に各自自由行動だから気になったに過ぎないのだろうけれど、自由に自分の好きを追い求める果南さんから問われると深い意味があるように感じてしまう。

私はどこを目指しているのか? 今日という決着の後、私が思い描く絵はどんなものなのか?

「……私は結局欲張りで、A q o u r s のみんなとも一緒に居

たいし、穹とも音楽をしたいと思っています。だから両方出来る所を目指してみようかなって」

「そっか。星も行きたい所、ちゃんと見えているんだね」

「ありがとうございます。そうやって気に掛けてくれて」

三年生間で問題を秘めていた中で、多分一番意固地になつていた果南さんと接することで私自身とも向き合う切っ掛けになった。

「これでも私、千歌と曜の姉貴分だったんだよ？御安いご用だよ」

じゃあね、と果南さんはラブライブ決勝目前だというのにランニングで海に向かった。

果南さんの背中を見送った後、さて私もと思った矢先に、今度は旅館から出てきた梨子先輩に話しかけられた。

「相変わらず元気一杯ね、果南ちゃんは」

「梨子先輩」

「果南ちゃんと何話してたの？随分深刻そうな顔してたけど」

「どこに向かうのかを話していました」

「人はどこから来て、どこに向かうのかってこと？聖書ないしゴーギャンみたいね」

「果南さんって、一見脳筋っぽいけど結構考えてますよね」

「酷い言いぐさね。でもリアリストだって私も思う」

まだ三年生の三人がAqoursをしていた頃、スクールアイドル活動をすることで鞠莉さんの可能性を奪うと思った果南ちゃんはその関係を終わらせることで鞠莉さんを旅立つ切っ掛けにした。夢見心地ではそんなこと決してできないだろう。

「でも夢も信じてる」

けれど、全力でぶつかれば叶うものもあると知っている。そうやって叶った願いは確かにあった。だから果南さんは行動するのだろう。

「リアリストで夢を追う人のことを何て言うか知ってる？」

「うーん・・・ロマンチスト、ですかね」

「正解」

「それ、本当の意味と違いますよね？」

「いいの。それに果南ちゃんにとっても似合ってると思わない？」

「同意です。でも、梨子先輩にも似合ってると思いますよ」

「ありがとうございます」

「それはこちらの台詞です。同じ外様でありながらどんどん沼津に馴染む姿に刺激を貰ってましたから。そこで梨子先輩には果南さんからされた質問をぶつけてみようと思います。梨子先輩はどちらに行かれるのですか?」

「私の答えはシンプルよ。音ノ木坂学院に行って、ラブライブ決勝に行って、沼津に帰るの」

「ありがとうございます」

「うん。じゃあ行ってきます」

梨子先輩は軽い足取りで、それこそ音符を奏でるように鼻歌を歌いながら出掛けていった。

第一百六十話

梨子先輩の答えには迷いがなかった。帰る場所は沼津にあると。それは東京を離れたこと、この一年弱のことを後悔していない証だ。そしてまた、私もその答えには同意だ。かの場所はもう、私にとつても特別になつてきているのだ。

「そう。リリイも運命の交差する地に向かったのね」

梨子先輩をリリイと呼称するのは善子ちゃんだ。由来は不明だけど、善子ちゃん独自の感性がそう言わせているようだからいちいち突っ込んだりしたことはないけれど、と言うかだー！

「運命って個人的には良い印象がないんだけど」

「人それぞれでしょ。さっきのロマンチスト問答と同じよ」

「盗み聞きはいただけいなあ」

「しようがないじゃない。地獄耳つてやつよ。墮天使だけに」

ギラン、とわざわざ口に出してポーズを決める善子ちゃんに呆れつつ、けれど、こんな軽妙なやり取りが好きであると再確認する。

「上手いこと言ったからつてどや顔はどうかと思うよ」

「やめなさいよ。恥ずかしい。それよりも星は見送り要員？こんなところでポケットとして」

「ポケットとしての訳じゃないけど、ちょうど一人一人用があつたから」

「私にも？」

「うん。お礼を言いたくて」

「お、お礼？どうしたの改まつて？」

「それ言うならみんなはラブライブ決勝前に改まつてるじゃん。私も同じ」

善子ちゃんの普段の発言は兎も角として、実際付き合ってみるとTPOに合わせた発言も出来るし、現実的なものの見方もしている。そして一番感心するのがその独自の世界観だ。身に振りかかる出来事に意味を見いだしそれと向き合う力。それはAqoursの誰よりもしつかりしているだろう。

そんな善子ちゃんの世界の捉え方、思考法は私には斬新だった。

「ふつ、星が私を崇める言葉を言うのならば私からも一つ呪いを掛けよう」

「崇めている訳ではないんだけど」

「いいこと？抗うことを止めないならば貴方はずっと私のリトルデーモンでいられるってこと、努々忘れないことね」

多分に善子ちゃん節、つまりヨハネ語が含まれているけれど、言わんとする意味は何となく通じた。善子ちゃんはなりに私に発破を掛けてくれているのだ。

「なら、そういられるように努力させてもらうよ。ありがとう」

「—————ならお礼ついでに美味しいスイーツのお店を教えなさい。必勝前の儀式をしなくちゃいけないから」

やはりそういうのに慣れていないのか、善子ちゃんは目を泳がせると照れ隠しに早口に言った。

「なら『穂むら』が良いかな。古き良き茶屋って感じで」

「和スイーツね。まあ良いわ。おすすめメニューは？」

「穂むらまんじゅう、まあ揚げまんじゅうのことね」

「詳しいのね」

「言わずと知れた店だから」

何を隠そうmのリーダーこと高坂穂乃果の実家だ。もつとも、そこまでいくと情報としてはややマイナーで、調べればすぐに情報は出てくるけれど単推しでないと調べない、そんな感じだ。

おおよその位置関係を秋葉原駅、万世橋を目印にして教えると善子ちゃんは少し浮かれた様子で出掛けていった。

「あら？一緒に出掛けないのですか？」

「ダイヤさんはもう帰ってきたのですか？」

「ええ。穂むらに行ってきたところですよ」

「……………その店名を言って通じるのは多分私くらいですよ」

気付いた頃には既に旅館を出ていたダイヤさんが善子ちゃんとして違いに帰ってきた。まさか行っていた場所まですれ違いになるとは思ってもいなかったけれど。

「聖地巡礼も済みましたし、あとはゆっくりとお茶してはいかがでしょうか」

「ダイヤさんもブレないですね」

「そんなことありませんわ。それに、ブレることは悪いことではないですから」

「中学生の頃の私なら絶対に同意しませんですよ、それ」

「今の星さんなら？」

「同意しますよ」

ブレることは思考を固定しないことだ。起きること、出会うことに心を揺さぶられ、感動し、それを受けて考えることは無駄ではないし、大切なことだと今なら言える。この一年弱で多くのことと出会い、迷い、奔走したからこそ得た価値観だ。

「やっぱり三年生ってそういうところ大人ですよね」

「あら？星さんにしてはイメージが先行した言い方ですね。大人なんて言葉で人を表すのはどちらかと言えば嫌いそうだと思ってましたけど」

「……ホントかなわらないなあ」

確かに漠然とした概念で人を枠に納めようとする言い方はわたしの好むところではない。けれど思わずそう思わせるくらいにダイヤさんは優秀だ。

「でも、だからこそ好きですよ」

「な、ななっ!？」

「ありがとうございます」

凄く先を見ていて、みんなを見ていて、それとなく支えてくれて。そんな頼りになるダイヤさんを自慢に思う気持ちは、ルビィちゃんじゃなくても抱く。ダイヤさんみたいな人とは今後出会えないのではないかと思うほど貴重な存在だ。

「行ってきます」

パーソナルカラーのように染まった顔をしたダイヤさんを尻目に私は旅館を後にした。別に宛があるわけでもない。ただ、漠然と足の赴くまま町を歩く。

樹立する雑居ビル群、海も山も見えない大通り、濁った川、大きなデパートにきらびやかな電器店、活気溢れる専門店の数々。かつての

私ならばそれを眺めては、有り得たかもしれない日々を夢想していただろう。けれど今は違う。これから作る明日を想像するのだ。

時々遊びに来て待合せする電気街口を、路地裏にあるラーメン屋を、スピーカーやイヤホンを見てまわる専門店を。

そこには私と穹と、時々A q o u r sの誰かや、もしかしたらS a i n t S n o wの二人も居るかもしれない。

そんな光景を妄想に終わらせない。その決意はもう十分だ。

「少し肩の力を抜くぞら」

「冷たっ!？」

秋葉原駅電気街口前の広場で不意に首筋に刺さる冷たい感触に現実には気持ちが戻される。

後ろを振り向くと花丸ちゃんがガリガリ君を差し出していつものアルカイツクスマイルを浮かべていた。

「花丸ちゃんも相変わらずだなあ」

「ぞら?」

「折角お祈りしたのにぞらって言ってる」

「ぞつーーー」

はっ、と思わず自分の口を塞ぐ花丸ちゃんを見て私は自然に笑顔になる。

「花丸ちゃんって本当に人の機微を読むのが上手いよね」

これは完全に憶測だけでも、花丸ちゃんは他意はなく自然に人を癒してくれる。それはいつそあざといと思うくらいに。

口癖の「ぞら」なんかはその最たるもので、正直本人は言うほど気にしていないだろうし、場合によっては言うことが正解であると思える。能的に察して、あえて道化のように振る舞っているようにも思える。でも、それで話の方向性を微調整されていたり、花丸ちゃんが居なければ円滑に話が進まなかったことなど多々あるのだ。

そして、花丸ちゃんと言えばグルメ家だ。

「今だって私にこうやってガリガリ君を突き出すあたりホント良く分かかってる」

「ガリガリ君の工場は埼玉にあるって聞いたことがあるぞら」

「それぞれ」

私は花丸ちゃんからガリガリ君ソーダ味を受け取り封を解いて齧る。最後に食べたのがいつなのか最早覚えていないけれど、無難に美味しい相変わらずな味だ。噂では同じ味の表示でも時代の経過とともに少しずつ味が微調整されているらしい。

「ありがとう」

「どういたしまして」

そうやって当たり障りなく、けれどしれっと人の力になってくれる花丸ちゃんに私は感謝を告げる。

独特な口癖、グルメ家、と花丸ちゃんの特徴を表現するとそうなるのだけれど、それはあまりにもわざとらしいと私は思う。その人の内面が全く見えないのだ。それは花丸ちゃんなりの処世術であるのだろうかと思う。

誰かにとつても（表面的には）分かりやすい存在であること、独特な口癖で言葉が柔らかい印象があることで花丸ちゃんは特に意識されることなく人をそれとなく良い方向に導いている。考えすぎかもしれないし本人に問うことはないけれど、私は花丸ちゃんとの付き合いを通してそう思い、そしてそんな花丸ちゃんに感謝しているのだ。

「花丸ちゃん」

「どうしたの？」

「ありがとう」

「ずら。また会場だね」

今日もまた花丸ちゃんは「ずら」と言う。その「誰もが知るいつもの花丸ちゃん」に私は安心感を覚えるのだ。

第百六十一話

花丸ちゃんもまたラブライブ決勝前。けれど、誰よりも達観している花丸ちゃんは恐らくはとつくのとうに自分の心の整理が付いていたのだろう。一人の時間を満喫するためか、私に別れを告げると駅に向かつていった。

私は貰ったガリガリ君を齧りながらぼんやりと空を見上げた。この電気街口前の広場は少しだけ開けているため空模様も少しだけ拝める。

今日は快晴、見える範囲は少ないながら雲一つ無い文句なしの快晴だ。

この空みたいに穹の心にも曇り無い状態で私と対峙してくれるのを願うばかりだ。ちよつとなげやりな願望だけど、自分でもうにも出来ないことなのだから、それくらいの力加減でいいのだろう。もしみんなと話をしていなかったら、今花丸ちゃんと会ってなかったら、また違う印象になっていただろう。それこそ曇ってでもいたなら、晴れろと念じているくらいに。

花丸ちゃんの言う通り、少し力みすぎていたと思う。けれど、こうやって一人一人に感謝を告げていくことで、私は自分を調律している。

「あら、花丸に先越されちゃったかしら」

「策士策に溺れる前に活躍の場そのものが奪われたって感じですね」

チャオ、とイタリア風に声をかけてくるのは駅の改札から現れた鞠莉さんだ。

思えば鞠莉さんの印象は当初余り良くなかった。人に対してアグレッシブに干渉しようとするのが鬱陶しく思っていた。けれど、そのお節介は悪いことだけではなかった。結果論かもしれないけれど、それに救われたことも事実なのだ。

「どちらに行つたのですか？」

「ちよつと卒業旅行の手配にね」

「いいですね旅行。どこ行くんですか？」

「私の先祖の生まれ故郷、イタリアよ」

「ゴージャスですね」

もともと世界を飛び回っている人とはいえ、高校生だけで海外旅行に行くとは、その行動力には舌を巻く。

「見たことのないものを見て、知らない言葉を聞いて、会ったことのない人と会う。世界を回るのって凄くexcitingなの……って言っても私はイタリアに何度も行ってるんだけどね」

「だからライブも好きなんですか？」

「そうかもね」

「私にもそういう側面があるのかもしれない」

知らない人に音楽を届けて、一緒に楽しんで、次の音楽を生み出す。そう捉えるなら私も鞠莉さんも似た者同士とも言えるだろう。

音楽的なことだけではない。鞠莉さんに悪い印象を持つておきながら、私も何だかんだで人に干渉してたりするのだ。そう考えるとその印象は同族嫌悪だったのかもしれない。

「今まで……」

「ごめんね、とは言わせませんよ。人を巻き込む分、沢山見てもらってたことは分かってますから。だから、ありがとうございます」

「……OK. なら私から言えるのは一言だけ。Thank you, FRIENDS!!」

自分達の大一番の直前だというのに、こうして私に気持ちを向けてくれるところは本当に相変わらずだと思う。

嵐のように見送ってくれる鞠莉さんに感謝の気持ちを込めて手を振り、私は広場を抜けて高層ビル“UTX”の歩道橋の階段前まで進むと、そこには曜先輩が待合せでもしているように手道無沙汰に佇んでいた。

「美少女がこんなところで佇んでいたらスカウトされちゃいますよ。

秋葉原はスクールアイドル激戦区ですからね」

「星ちゃん」

「どうしたんですか？」

「スクールアイドルになる切っ掛けになった思い出を辿ってね。こ

こなんだ、私達の始まりは。千歌ちゃんと私だけが知ってる、浦の星女学院スクールアイドルの始まりの場所」

高層ビルUTXはそのビジネスビル然とした見た目とは裏腹に高校となっている。そしてそこは初代ラブライブ王者「A—R—I—S—E」の出身校だ。

建物からしてもそうだが、数多くの先進的な試みで人気の高校で今でもスクールアイドルの強豪校だ。

そのプライドがあるからなのかUTXの街頭ビジョンには暇さえあれば歴代の優秀な成績を修めたスクールアイドルのPVが流されている。

千歌先輩はそこに映し出されたμ'sの映像を見てスクールアイドルを始めたという。その時に隣にいたのは曜先輩だけだった。それが今では九人になり、こうしてトップスクールアイドルを競う立場になったのだから感慨深いものがあるのだろう。

「曜先輩って、要所要所で大切なこと話してくれますよね」

「そうかな？」

「そうですよ。曜先輩の言葉で何となく考えが纏まったり、本音を出しやすくなったりしたんですから」

常日頃の付き合いとしてはわりとフラットだけれど、曜先輩は私のことも仲間として見てくれてるのが伝わるのはそういうところだ。それはきつとA q o u r sのメンバーにとっても同じことなのだろう。

「だから曜先輩と話をするのはとても好きなんですよ。ありがとうございます」

「なんか照れちゃうね。でも、私のやってることは千歌ちゃんや果南ちゃんの真似だよ。二人ならどうしてるかな？何て言ってくれるのかなって」

「でも、それが曜先輩の曜先輩らしきを作ってるってことでしょ？そんなに謙遜することないですよそれに、曜先輩だってみんなと一緒に歌ってたじゃないですか。真似じゃない——」

「オリジナルのHEART WAVE……そうだね」

「そうですよ」

沢山の言葉や思い出が今を作るのなら、曜先輩の中に根付いた果南さん像、千歌先輩像だって立派な曜先輩の一部だ。

「ありがとう、星ちゃん。お礼に良いものを見せてあげる」

そう言つて曜先輩が取り出したのはいつか見たことのあるA4用紙だ。

Aqoursが招待された東京のスクールアイドルイベント。その際の順位と得票数の結果が書かれたものだ。

「出場グループ30組中Aqoursは30位、最下位で、得票数0」
「とても悔しかった。でも、ある意味でもう一つのスタートになった」

その用紙はだから一種の象徴のようなものだ。宝物、というには重苦しく、呪いというには余りにも多くをくれた。

「因縁、ですね」

「うん。だから持ってきた。今日はこれを千歌ちゃんにもう一度見てもらおうと思つて」

「やっぱり曜先輩も千歌先輩が迷つてることに気付いてましたか」

「みんな気付いてるよ。だからこそもう一度ね。多分、これが最後だと思っけど」

千歌先輩が迷いを乗り越えた時こそ、この紙との因縁もまた越える時なのだろう。

だからこれが最後、と曜先輩は言ったのだ。

「星ちゃんも千歌ちゃんに話したいことあるんじゃないの？迷つてること、星ちゃん自身のこと」

「流石ですね」

「行つてきなよ。千歌ちゃんの所に」

「……………ではお言葉に甘えさせて貰いますね」

私は曜先輩に改めてお礼を述べて歩道橋を上がる。程なくして歩道橋を上がりきると、真っ直ぐ先に見える街頭ビジョンの下に見覚えのある姿を見付ける。

太陽のように暖かなミカン色の髪をした女子高生、高海千歌その人だ。

「千歌先輩」

「星ちゃん、どうしたの？」

「私も千歌先輩と同じですよ」

千歌先輩はラブライブ決勝、そして私は穹との決着。規模は違えど人生を懸けているのは同じだ。そして、それを目前に控えている今、私たちは東の間の対等な関係にあると言えるだろう。

「迷ってます？」

「正直に言えばね。でも、優勝する。その決意は間違っていないのも分かってるんだ。なんて言うのかな、こう、ね？」

千歌先輩との付き合いももう一年弱になる。それもかなり濃い付き合いをしてきたのだ。千歌先輩の人となりはそれなりに把握している。この人は一人では力を出せない人だ。だからスクールアイドル μs に憧れた。彼女達が九人だから、みんなだから輝けたグループだったから。

「ねえ、星ちゃんはどうやって迷いを乗り越えたの？」

「みんなが乗り越えさせてくれたんですよ。私一人じゃドン詰りだった」

きつと千歌先輩達と出会えなければずっと燻っていた。そして、千歌先輩達の誰か一人欠けてもそうだっただろう。みんなが居たからこそまで辿り着けた。それは千歌先輩と同じだ。

「みんなと話してみると良いですよ。そしたら迷いだって乗り越えられる。どこまでだって跳んでいける」

同じならば私も千歌先輩も乗り越え方も同じはずだ。

私一人では力が足りない。みんなでなければ足りない。だから私が出るアドバイスはこれだけ。酷薄に見えるかもしれないし、薄情にも思える。けれど、これは経験談だ。これ以上なく、頼りになるみんなから貰った宝物だ。

「・・・そうだね。Aqoursの“ours”は一人じゃないって意味だしね」

だから千歌先輩はたらい回しのような返答も受け入れてくれる。これがこの一年弱を過ごして得た私のベストアンサーだということ

を千歌先輩も分かっているから。そんな千歌先輩だから一緒に歩いてくれた。だから余計な言葉はいらない。

「千歌先輩」

「ん？」

「ありがとうございます」

「こちらこそ」

ただただ感謝の言葉を口にする。千歌先輩はお互い様だと、同等の言葉でもって返した。でも思うのだ。千歌にとって、A q o u r s にとって、私が居なかったとしても何とかなっただろうと。それでも、こうして対等に感謝を交わせたのであれば私という存在も無価値では決してなかったと、そう思う。

「次に会うときは――」

「私はステージから」

「私は客席から、会いましょう」

「うん。会場みんなの顔、ちゃんと見えてるから！絶対に星ちゃんのことも見付けるからね！」

「言葉取りましたからね」

「それじゃあ、また」

「はい。また」

私はするべきことを終え、そして千歌先輩はこれからするべきことをしに、それぞれこの場所を離れた。次に会う約束を交わして。

第百六十二話

秋葉原にある日本有数のドーム型球場、通称アキバドームは嘗てビッグエッグとも称されていたこともある。それは白く丸い形状が由来とも言われているけれど、他にも意味はあるのかもしれないと、そのただ中であってそう思った。

日本を代表するこのドームは野球の試合以外にも今日のようにライブ会場として使用されたりする。当然規模が大きい会場のため、一流と謳われる人達やイベントでなければ会場を埋められないけれど、その際には沢山の人の願いや夢がこの会場を埋めつくし、そして新たな夢を作っていくのだ。

そう。夢が生まれる場所、という意味として卵、というのは唸らせるネーミングだと、私はそう思うのだ。

今だってドームの中には総勢4万人以上とも言われる人達が私の眼下や周囲に居るのだ。

スクールアイドルをやっている人、スクールアイドルが好きな人、学校や友人や身内の応援に来た人、ただお祭り騒ぎが好きな人。みんなそれぞれだけれど、期待に輝く瞳とラブライブレードを持ってステージ上で繰り広げられる各スクールアイドルのパフォーマンスを楽しんでいる。

客席にいるスクールアイドルをしている人はいつか自分がそこに立つことを夢想し、応援に来た人はステージ上のスクールアイドルの更なる活躍を期待し、お祭り騒ぎが好きな人は際限無い娯楽を求める。

「次がAquoursの番だ・・・」

私はステージの正面、スタンド三階の最後尾席から様々なスクールアイドルのパフォーマンスを見ていた。

どのスクールアイドルも全国の各地域のトップだけあって凄いくオリティだ。

きらびやかな衣装、緩急の妙、メリハリのあるダンス、個性を活かした歌、ここまで勝ち上がってきたという自負が滲む力強さ。それら

が合わさったパフォーマンスは圧巻で、優劣をつけるほどの差は無いように思う。

もつとステージ近くから見たら多少印象の違うグループもあるのだろうけれど、私はこの席になって不満は無かった。これからAqoursが見せるのは彼女達だけのパフォーマンスではない。世界を作るのだ。それを見るには広い視野が必要だ。

それに千歌先輩は言った。どこにいてもみんなの顔は見えていると。

UTX前でやり取りして以降は千歌先輩達と会っていない。だからみんなの今のコンディションがどんなものなのか伺い知ることはできない。けれど想像は出来る。今が最高の状態であろうと。

全国のスクールアイドルがこの日のために研鑽したパフォーマンスでもってステージで歌い、舞う姿は見えているだけでも力をくれる。きっとAqoursのみんなも同じ筈だ。

「見ているよ、みんな」

グループ名 Aqoursと、そして披露する楽曲のタイトルがメインモニターに映し出される。そしてここに集っている最高に気持ちの良い人々は自ずとブレードの色を青に変えた。

Aqoursのイメージカラー、そして披露される楽曲 “WATER BLUE NEW WORLD” のから連想される色でもある。

“イマはイマで昨日と違うよ”

立ち込める霧、どこまでも広がる青い世界。航海の果てに辿り着いたAqoursは今、この奇跡のような舞台に来た。

全ての困難に打ち勝った訳ではない。楽な道のりでもなかったし、グループとして纏まるまで一筋縄でいかないこともあった。それを最初から知っている鞠莉さんの伸びやかなソロパートから始まるそれはとても説得力があった。

他のグループのことをとやかく言うつもりはないけれど、他のグループにないものがAqoursにはある。それは実現不可能な奇跡を本気で起こそうと戦って破れた経験だ。

他のグループにも挫折はあっただろう。けれどその多くは努力で

乗り越えられる挫折だった筈だ。だからこそ勝ち上がってきたし、自信にも繋がっているだろう。

Aqoursは違うのは努力ではどうにもならないことに立ち向かったこと。二度と同じ夢は見ることの出来ない故に新たな夢を手にしたことだ。

その痛みが新たな希望に変化して、それが歌に載せられている。これ程のリアルは他のグループは無いだろう。

“あきらめない”

単純明快に、けれど実績を持って真実を突くその言葉は心にすつと迫る。

“動け!”

Aqours全員が声を揃えている姿には自分もやらなければという気持ちにさせる力が宿っている。

“最高のトキメキを 胸に焼きつきたいから”

重ねられる詩はAqoursの歩みだ。そして、彼女達の原動力を、今日ここでライブ決勝を迎えるにあたっての心持ちは余すことなくこの一節に込められている。

時は過ぎ行くし、最高の状態がいつまでも続くことはあり得ない。なら、せめてそれを自分の中の永遠にする。その自分の中の永遠があればどこへだって羽ばたいて行ける。先の見えない海だって進み続けられる。

その言葉はまるで魔法のように鮮やかで、けれどどこまでも現実的な響きを伴って紡がれ、この青色に染まる卵の中を伝播する。それと共に花丸ちゃん、鞠莉さん、梨子ちゃんの下半身の衣装の外装は羽のようにみんなの手で飛ばされた。これは比喩表現だけれど、その瞬間私は確かに見たのだ。青い羽が舞い散る様を。

“次の輝きへと海を渡ろう”

そして夢のその先へと思いを馳せていく。Aqoursがその活動の在り方を変化させていったように、Saint Snowが終わりの先を描いたように。

夢に終わりは無い。どこまでも、水平線のその先までも続いていけ

るのだ。

“イマを重ね そして ミライへ向かおう!”

A q o u r s が指で形作った九つの “L” はそれぞれ別の方向を向いて天を差す。夢の在り方も、目指す先も自由でいて良いのだと肯定するように。そして、どんなに違う道でも、広大な夢という空はどこまでも受け入れると言うかのように。

気付けば私もまた、いや、他にも沢山の人が指で “L” を作り掲げていた。 “L o v e L i v e” を通して得たものに万感の思いを込めて。

「あっ……」

一瞬、ホントに勘違いかもしれないその刹那、曲が終わり空を仰いでいた顔を下ろす千歌先輩が此方を見た気がした。

ここからだと言った顔など輪郭しか分からない。けれど千歌先輩は噛み締めるようにここにいるみんなの顔を見ていると、見えていると、確かに感じた。

“みんな届いた?” とそう言っているかのように。

「届きましたよ」

みんなが見せてくれた A q o u r s の世界。なら、次は――

「私の番ですね」

私の世界を見せつける。A q o u r s の優勝への確信と共に私の決意は本当の意味で固まった。

第百六十三話

先までの喧騒が嘘のように卵のように真ん丸な会場の中は閑散としていた。宇宙のような暗さと輝きが同居していた空間は、今では味気ない照明により現実を浮き彫りにしていた。

数多のスクールアイドルが一瞬に夢を乗せて歌い踊っていたステージの上から私はそんな景色を眺めていた。

客席は撤収が進められ、ステージを解体する重機を搬入する準備が進められている。その僅かな時間の間だけ、こうしてステージに上がることを許可して貰えたのは本当に運が良かったとしか言えない。

会場の特性からステージの解体が始まるのには少し時間が掛かると判断したからこそ運営に交渉しに行ったのだが、そこで思わぬ再会があったのだ。

Aqoursが惨敗したスクールアイドルイベントの時にステージで話をしたナミキさんが居たのだ。

ナミキさんはこちらのことを覚えていたらしく、私の話を聞くと二つ返事で許可をくれた。というのも、どうにもナミキさんは舞台監督とのことでそれくらいの融通は利かせられるらしい。

「それにしてもこんなこと頼みに来る子はあるまいよ？それも撤収の工程を考えた上で来るのは多分君くらいだ」

なんて言ってナミキさんは呆れながらも笑っていた。尚、私がスクールアイドルではないからこそ許可した、とも言っていた。

曰く、スクールアイドルにとって一つの到達点であるこのステージに上げてしまうと、そのスクールアイドルの夢をここに縛ってしまいかねないとの懸念があるのだと。優勝してハイおしまいでは困るのだと。

思えばμ'sもライブ優勝をしてから、今のスクールアイドルに繋がるその後を切り開いたのだ。ナミキさんの言っていることもそれを踏まえての期待なのだろう。

「無観客試合なんてレギュレーション違反でもした？」

さつきまでは夢で輝いていた場所、そして今は無遠慮な照明でただ

明るいだけの場所に、穹は皮肉を口にしながら来てくれた。

「したよ。他の誰でもない、一番してはいけない人に」

「……………A q o u r s 凄かったね。輝いてた。ホント、魂が宿ってた」

穹は私の言葉に対する返答はしなかった。それはこれから聞かせてもらうとでも言うように。その代わりに私達を繋ぐ切っ掛けになったA q o u r s を称賛した。穹にそう言っただけだと自分のことのように嬉しかった。

「気のせいなんだけど、羽を受け取った。そんな気分になったんだ」

語彙力を失わせるほどのパフォーマンズだったというのがこれでもかと伝わるほどのべた褒め。しかし、それ以上に羽を受け取ったというワードに私は凄く共感出来た。

「そっか。穹にも見えたんだね」

「うん。青い羽が」

それはA q o u r s の魅せた輝き。そして、輝きたいと願う全ての人に贈られたメッセージだ。

そして受け取った私にはしなければならないことがある。

「でも、青いままじゃだめなんだ。それはA q o u r s の色だから。自分の色にしないとダメなんだ」

「これ以上ない舞台なんだ。全力で来な」

私はタップシューズの感触を整えると共にポケットからハーモニカを取り出して口元に構えた。

穹を騙していた時を、穹の居なかった時を、沼津での日々を想い、それを今、語ろう。

「Brand New My World」
「……ミュージックスタート」

仮歌の再生タイミングはナミキさんがやってくれるため、私は打ち合わせていた合図と共に演奏を開始した。

ハーモニカの単音のシンプルなソロパート。心電図がフラットラインになったような、虚しさ。そこに徐々にビブラートを効かせて息を吹き返す前奏。穹と離れてからの私のプロローグだ。

“流れ着いた海の底 深くて暗いその場所は 日が昇ったら色付いた”

私の綴った歌詞に最初に歌を乗せるのは三年生の三人だ。

癖のあるダイヤさんと果南さんの声を鞠莉さんが中和し、力強いハーモニーを奏でる。

きっと沼津に来なければ海無し県出身の私には海のモチーフなど想像できなかっただろう。それだけ海の存在は私には異質で、無感動で無気力になりかけていた私の心にすらスツと入り込む存在感があった。その存在感を背負えるのは頼りになる三年生が適任だと思ったから出だしを任せられた。

低音域の演奏が続く中、弱いながらもタツプを刻み、俄に世界が揺らぎだす。

“色とりどりの隣の誰かが仲間になろうと踊りに誘う けれど僕は臆病で 閉じた殻を開けない”

賑わいを感じさせる部分は何時だって一年生の担当だ。けれど、Aours 楽曲のように分かりやすい賑わいではない、賑わいの気配のみを匂わす歌詞はやっぱりは彼女達みたいには前向きではないのだなと思う。けれど確かに近付く賑わいの気配は私がタツプを段々と強くして引き継いでいく。

“黒い真珠を抱え込んで 明日を見ない僕にみんなは今にしかない虹を見せた”

同じ様に悩みを抱えて内浦に来た梨子先輩、少年のように素敵な“僕”を謡える曜先輩、そして突き刺さる声がサビへの牽引力となる千歌先輩ら二年生が楽曲をピークへと誘う。それに誘われるままハーモニカの演奏は高音へ、そしてタツプは早く刻まれていく。

“泣いてるばかりじゃない 前のめりなだけでもない
しつかり心に問い掛けて 跳ねる音に耳を澄ませば
きつと見えるよ Brand New My World”

みんなの声が私を支えてくれる。目を閉じれば音に舞う私の横に彼女達が一緒に歌って踊る息遣いを感じられる。

Aoursが“WATER BLUE NEW WORLD”

を見付けたように、私も私の見るべき所を再認した。だからこそその「Brand New My World」。真新しい私の見る世界であり、私の辿り着いた真新しい世界だ。

これが一年弱掛けて漸く描けた新曲。穹への言葉の代弁する歌だ。悩んで悩んで、色んなものを見て、聞いて、感じて作った楽曲だ。

これが穹に何一つ届かなかったら私と穹に交わる道は無いのだから。決して失敗出来ない最後のチャンス。けれど、不謹慎かもしれないけれど、私はこの時が凄く楽しかった。自分の全部を掛けてパフォーマンスをすることが、そう、生きていると思える瞬間が堪らなく心を躍らせた。

A q o u r s の未発表の楽曲「未来の僕らは知ってるよ」で綴られた「I live, I live Love Live days」という詩は正しくこの一年弱を、そしてこの時を物語っていた。

何様かと思われるかもしれないけれど、そんな日々に感謝気持ちを込めて私は曲の終りに手に「L」を作って天に掲げた。

終わった。一曲が終わるのは本当にあつという間だった。

暑い。止まるとどつと汗が出ているのに気付く。見ればステージの上にはよく転ばなかったなと思うほどの汗が飛び散っている。

体が思い出したように酸素を求めて肩から息をする。

膝に手をつけて下を向きそうになる上体をぐつと両腕で支えて顔だけは穹へと向けて見詰める。これが私の全力だ、全部出したぞ、と視線に乗せて。

穹はパフォーマンスの始めから終わりまで黙って腕組みして見ていた。きつと瞬き一つしていないんじゃないかと目に力を入れて。

穹は私の視線を受けて、組んでいた腕を解くと、私に近寄るでもなく、背を向けるでもなくその場に佇んだまま私のことを見つめていた。

数秒か、数分か、時間の感覚がなくなるような沈黙の後、穹はゆっくりと手を開いて両腕を力なく天に掲げた。まるで降参だともいうように。

私はそれを見て緊張の糸が切れたからか体から力が抜け、へなへな

と腰を下ろしてステージに寝転んだ。帆を幾つも繋げたような白い天井を見上げて目を細めると、無性に溢れてくる涙で滲む視界が白い照明でぼやけて見える。だからだろうか？私の元に真っ白な羽が、降ってきたように見えたのは。

「まだまだだなあ」

受け取った羽を自分の色に染めるには至っていない。けれど、スタートラインにはきつと立てたと、そう思った。

第百六十四話

夢のように輝いて、けれどどこまでも現実だったラブライブ決勝から数日、私達はその余韻に浸る間もなく閉校式（卒業式・終業式含む）の準備に追われることとなった。

穹からはようやく話をする許可を貰えたけれど、先ずは目先のことをやり遂げてからゆっくり話そうということとなり、私達はとんぼ返りで沼津へと戻ったのだ。

そして慌ただしい数日の後、今日、燦然と輝く太陽の下、無事に浦の星女学院は閉校式を迎えることとなった。

ここ数日の片付けで資材や備品が殆んど残されていない学校は、この一年ずつと通っていた筈なのにどこか寒々しく、こんなに広がったのかと妙に落ち着かない気分にした。

「落ち着かない?」

「ルビィちゃんは?」

「私も」

教室の机は片付けが面倒になるからと昨日の内に既に取っ払っているため、私達は教室に来ても地べたに座るしかなく、落ち着かないのはまあ自業自得なのかもしれないと自嘲した。

「それだけじゃないでしょ?」

「・・・そうだね」

花丸ちゃんのいう通りだ。

なんと表現すべきなのだろう。少しでもここに居たいという気持ちと、変わってしまったここにもう居たくないという背反する気持ちが混在するモヤモヤした感覚。それが少しばかり居心地を悪くしているようだ。

「リアルこそが正義」

「ぶれないね、善子ちゃんは」

「ヨハネー!」

起きることを自分なりに意味のあるものとして受け入れて先を見据えるのは善子ちゃんの人生観の一つだ。だから善子ちゃんのその

強さが今は頼もしかった。

「時間よ。準備しなさい」

「そうだね。こんなこと、一生に一度しかないもんね」

そう言って私達は連れ立って中庭へと移動した。

鞠莉さんから全校生徒に通達されたその案は最初物議を醸し出した。

学校そのものに寄書きするなんて失礼ではないかと。けれど、廃校になればいずれ校舎が取り壊される可能性が高いこと、範囲を中庭に限定し外観からは見えないようにすること、現生徒だけでなくOBも参加可能であることを条件に、すでに連絡の取れるOBの過半数からは賛同を頂いているとのことで、私達も遠慮なくという運びになったのだ。ライブ決勝直前の期間にこっそりそんな手配までしていたというのだから鞠莉さんには頭が上がらない。もともと、今日に向けて私達生徒側も別件で仕込みをしていたのでおあいこだ。

私達生徒一同は校庭の中庭に集まる。こうして生徒全員で集まるのは廃校が決定した後自然発生した集会以来だ。

あの日は初冬の夜中に集まって朝まで語り明かしたけれど、今はその時とは何もかも違う。

空はどこまでも高く澄み、草木は生き生きと緑に生い茂り、桜は祝福するように満開に咲いている。そして私達はあの日望んだ夢を掴んだ。

「さて、それじゃあ注意事項に気を付けて始めようか」

珍しく果南さんが音頭を取る。そういえば卒業証書授与式では果南さんが生徒代表を務めるらしいので、その延長なのだろう。

果南さんの一声で生徒は各々動き出す。

鞠莉さんが手配していたペンキとブラシを手に思い思いに中庭に面する校舎にペインティングし始めた。

感謝の言葉、自分の名前、オリジナルのロゴマークなど様々だ。

「ガンバルビー」

ルビイちゃんは大胆にも理事長室の窓に大きくそう書くと、中から鞠莉さんとダイヤさんが窓を開けて顔を出した。

「卒業式の前だというのに」

「私達らしくていいじゃない」

呆れたように言うもののダイヤさんは本気で言っている訳ではないようで、鞠莉さんの言葉に無言で同意していた。

「星は何か書くの？」

「私は――」

善子ちゃんに問われるまでも無く実は私は手が止まっていた。

書くべきことはこの学校みんなが書いてくれている。百人に満たない生徒しかいないけれど、みんなのことを知っている。もしも私が音ノ木坂学院に入学していたとしてもこれ程仲間だと思える人達とは巡り会えなかっただろう。

私が何を書くか悩んでいる内に、一人、また一人と書き終えた筆を置いていき、A q o u r s の九人もそれぞれのパーソナルカラーで九色の虹を描くと筆を置いた。

「――っ、う……」

「ルビイちゃん……」

それと同時に涙を流してしまったのはルビイちゃんだった。

最後は笑顔で、と誰が言うでもなく暗黙の了解のように決まっていたことだったけれど、それを守ることは難しい。何よりルビイちゃんにとってはそのうだろう。

単に涙もろいというものもあるけれど、自分の心の底にある感情を外に出すことの大切さをルビイちゃんが獲得したのはこの浦の星女学院に入ってからだ。だからルビイちゃんにとって悲しいという気持ちは閉じ込めてはいけないことなのだ。

笑顔でいたい。けれど涙も流したい。そんな二律背反した気持ちを前にルビイちゃんは自らの顔を両手で隠すしかなかった。

だから私達もそれをそつと手伝うしか出来なかった。

花丸ちゃんと善子ちゃんが両肩を支え、私がルビイちゃんの顔を隠すように頭を抱き締めた。その涙が枯れるまで。ルビイちゃんが笑顔になれるまで、私達は寄り添い続けた。

春の風が私達を慰めるように頬を撫でる。

暖かくて、海の匂いを乗せた風は落ちている桜の葉を舞い上げる。落ちて終わりではないのだと。だから今は安心してその涙を落とせばいいと励ましているかのようだった。

第百六十五話

中庭での寄書きで生徒の多くは体のどこかしらにペンキ汚れを付けて式への参加となった。結局、私は何も校舎に書くことはなかったのだが、気付けば肩にピンク色のペンキが付いていた。多分ルビイちゃんを宥めていた時に付いたのだろう。

普通の卒業式ならばこんなに制服を汚したら怒られるだろうし、自分自身失敗したと思うことだろう。けれど、今日は卒業式であるのと同時に閉校式でもある。だからこの汚れもまた浦の星女学院で刻まれた証なのだと思うと愛おしく思えた。

「卒業生代表 松浦果南」

「はい」

この学校は少なくともこの一年、生徒の自主性が尊重されてきた。

例えば、普通なら学校説明会などは教職員先生が主体となる流れを作り、生徒はそれに乗っかるような形を取るところだが、ここの先生がたは裏方に回った。今回もそうだ。主役は君たちだというかのようにそつと見守る立場にいる。だから卒業式の進行も生徒会長のダイヤさんが務めている。

ダイヤさんに呼ばれ、すつと背筋を伸ばした姿勢で果南さんが壇上にあがると、そこにいるのは理事長である鞠莉さんだ。

この三人がこうして同じ場に立っていることが改めて不思議な縁があつたのだと思う。

私が入学した時にはまだ鞠莉さんは表立っては理事長に就任していなかったし、果南さんも休学していた。オマケに関係がギクシヤクしていたのだから、本当に人生どうなるか分かったものではない。

私もまさかこの学校でこんなにも心を動かされる出来事に出会うなんて思ってもいなかった。

「—————」

壇上で鞠莉さんと果南さんが軽いやりとりをしているけれど、声はマイクには入らなかった。

いつもの三年生の様子に今日が卒業式で閉校式であるなんてことがまるで嘘なのではないかと思ってしまうけれど、その意識は次の瞬間にマイクを通して発せられた鞠莉理事長の「卒業おめでとう」の言葉ですぐに現実に戻された。

なぜ一瞬でもそんなことを考えてしまったのだろうか？こんなに大勢の来賓が居て、こんなに舞台を整えているのに何故？

初春の陽気とはいえ十分に暑いこの体育館の中で汗ひとつ掻かない果南さんは凜とした姿勢を崩さぬまま自分の席に戻る。そして他の卒業生の名前が一人、また一人と順に呼ばれていく。

そんな中であって親しい先輩が居た人の中にはその先輩の名前が呼ばれた瞬間泣き出す子も居たりして、私はそれを見てようやく三年生が卒業していくのだという実感が湧いてきた。

頭では分かっていたつもりだったけれど、心は多分向き合っていなかった。ラブライブ決勝だとか、穹との決着だとかにかこつけて。

そう自覚すると、この蒸し暑い体育館から急に温度が抜けていったような寒気を感じた。

こんな気持ちは思えば初めてだ。

頼りになる先輩。一緒に居ることが心地良い先輩。もっと沢山一緒に歩んでいきたい先輩。敵わないと思える先輩。そんな風に思える存在は中学時代には存在しなかった。

来月には私達は新しい学校で、新しい人と学舎を同じにする。けれどそこに三年生みんなは居ない。

「星ちゃん」

隣に座るルビィちゃんが驚いた表情でこちらを見て息を呑んでいる。その理由として思い当たる熱い滴が頬を伝っているけれど、私はそれらに気付かないフリをした。今日は笑顔でという暗黙の了解があるから。自覚しているのなら涙を拭かなければならないから。だから拭われない涙はゆっくりと頬を流れていく。三年生全員の名前が呼ばれ終わってもそれは乾くことはなかった。

最後に生徒会長であるダイヤさんが卒業生代表として壇上で語る。

「浦の星女学院はその長い歴史に幕を閉じることになりました」

私はその中のたった一年。けれど、とても大切な一年を過ごした。「でも、私達の心にこの学校の景色はずっと残って行きます」

忘れられる筈がない、その日々を。だからこそ寂しさが悲鳴を挙げて胸を締め付ける。ただ次の一言に私はハッとさせられた。

「それを胸に新たなる道を歩めることを、浦の星女学院の生徒であったことを誇りに思います」

掛け替えのないものを入れた場所。帰ってくるべき場所。そして一緒に歩めると認められる人達の集う場所。ダイヤさんにとつて浦の星女学院とはそんな場所であったことは想像に難くない。

ならば今、こうしてただ涙を流すだけの私は誇れるものの内に入るのか？そう思うと私は目の奥と拳にぐつと力を込めた。

「只今をもって浦の星女学院を閉校します」

そして奇しくも私の涙が止まったと同時にダイヤさんの閉校宣言はなされた。

「私達はやったんだ！」

その終幕を華々しく飾るのは赤を基調とした一振りの旗、ラブライブ優勝校に渡される優勝旗。鞠莉さんが高らかに掲げるそれはつい数日前までの日々を思い出させる。

Aqoursは浦の星女学院の名前をラブライブの歴史に残そうと、私は自分の過去と向き合おうと走り続けた日々。終わりのその先なんて考えられなかった日々だ。でも、今の私にはあの日々ほどに明日のことを真剣に考えられないでいた。

それではダメなんだと、私は溢れそうになる涙を堪える。こんな気持ちだって浦の星女学院に入学していなければ多分抱くことはなかったのだから。だから、それさえも大切なことなのだと言い聞かせようように。

第百六十六話

閉校式も終わり、各クラスでの最後のホームルームも終わるといよいよ浦の星女学院を閉める時が近付いてきた。

私達生徒にはその下校までの束の間の時間だけ、校舎を思い思いに巡る時間が与えられた。お別れの準備をするために。

私はA q o u r sの面々と共に屋上に訪れていた。

秘密基地の気分で一人、未練がましくハーモニカを奏でていた場所。幾度となく練習した場所。語り合った場所。みんなで音楽を響かせ、沢山踊った場所だ。

遮るもののない空はどこまでも広く、深い。ここで歌えば世界中に響き渡るのではないかと思えるくらいに。

「さて、そろそろ時間ですわよ」

でもそんなことは無いのだ。練習したのも、語ったのも、音楽をしたのも踊ったのも過去の話。これから先、ここから発信するものは何もない。それはもう叶わない。

「まだ誰も帰ろうとしてない」

「ほっといたら明日でも明後日でも残っていそう」

「完全に同情ずら」

それが寂しくて、あの頃を続けたくて、こうしてダイヤさんが声を出していなければ本当に何時までたってもこの場所から動けなかっただろう。

「したらまた学校続けてもいいって言われるかも」

「そんなことになったらみんなびっくりだよ」

「だね」

「ちゃんと終わらせよう」

その軽口は願望の残滓。折り合いをつけた憧れがつい溢れたにすぎない。本気でそうなるなんて考えてる訳ではない。だからみんなは一人、また一人と屋上を後にする。

私もそれに続いて屋上から階段室に戻るとそつと屋上の扉を閉めた。思い出を閉じ込める宝箱のように。

「じゃあ部室で」

私達は学年毎に一度解散する。それぞれの思い出を閉じに行くために。

私もまたみんなと一度解散し体育館に向かう。

校舎内にはまだ沢山人が残っていて、黒板にアート作品を残していたり、几帳面に掃除していたり、各々最後を迎える準備に余念がなかった。

校舎から繋がる横に吹抜けの渡り廊下を歩くと、さつきみんなで描いた寄書きが中庭に面する校舎内を彩っているのが見えた。

これまでなかった浦の星女学院のその姿に慣れるということは無いだろう。もうここに通うことは無いのだから。

私は一瞬止めそうになった足を進めて体育館に入った。

誰も居ないそこにはもう、閉校式で使った椅子も、紅白幕も、何もかも残っていない。

誰も居ないステージにはかの日の輝きはない。

千歌先輩、曜先輩、梨子先輩、三人のA q o u r sのファーストライブの日、彼女達がA q o u r sとして初めて立ったステージ。トラブルはあったけれど、なんとか乗り切った晴れ舞台。

ダンスもそれほどまだ上手くなかったけれど、がむしゃらで、楽しそうでもトラブルの時には涙が流れそうになって・・・人間が持つ全力をただただ見せ付けられた。

そのスクールアイドルに、音楽に、全力でぶつかる姿は私の閉じ込めていた衝動を引きずり出したのだ。

ステージ上の三人の姿は、穹と離れてから人前で演奏するなんて二度としない、してはいけないという私の戒めを解き、気付いたときにはハーモニカを取り出して演奏していた。だからこの場所は特別なのだ。私の見ないようにしていたものを突きつけた場所だから。

「よいしょっと」

あの日私が見ていたのはステージの下だった。そこからステージに上って回れ右をする。

視界に広がるだっ広い空間は閉校式で人が詰めかけていた時よ

りも遙かに広く感じた。

私は深呼吸して気持ちを落ち着かせ、誰も居ない、ありもしない客席に向かつて口を開いた。

「私達スクールアイドル A q o u r s と星です」

この行為に意味は無い。けれど、あの目引きずり出された衝動は今に繋がったのだ。だから確かめたかった。彼女達が見た景色を。もしかしたらどこかの可能性の世界ではあり得たかもしれない景色を。

「やっぱり凄いな、A q o u r s」

彼女達のファーストライブは当初、千歌先輩が開始時間を間違えたこともあり、準備を手伝ってくれた人を抜かせば十名にも満たない人しか見に来なかった。そして今、それに近い景色を見て思った。本気で音楽を届けようという心持ちで立ったステージでこの景色はあまりにも気持ち折る。がっかりするだろうし、音楽をすることに懐疑的にもなっただろう。

でも――

「キラリときめきが――」

千歌先輩は、A q o u r s は踏み出した。

そして今、私は誰も居ない場所である日の彼女達のように歌った。

誰かに向けての歌は、自分に向けての歌でもある。その一音一音が次に奏でる音楽を豊かにすると今ならそう思える。

一年を経てようやく、私はA q o u r sと同じラインに立ったのだ。

「ダイスキがあれば ダイジョウブさ」

過去とはもう向き合える。今という時間が全て無駄にならないことも体得している。

「ありがとうございました」

けれど未来とはどう向き合えば良いのか、それに自信が持てない。二年生の三人が私に過去と向き合わせるハジマリをくれた場所は、けれど未来との向き合いかたを見せてはくれなかった。

私は誰も居ない体育館に向かつて頭を下げると、ステージから下りて体育館に併設されるスクールアイドル部室に行った。

そこにはまだ誰も来ていなかったもので、壁に背を預けて目を閉じる。すると個性豊かな足音が聞こえてくるので数を数えた。

静かにあまり音を発てないようにしているダイヤさん、ランニングの癖なのか前に出した足を後ろに蹴る時に地面に着ける果南さん、陽気さが歩幅に出る鞠莉さんの三人だ。

「あら？ 私達が一番乗りだと思ってましたのに」

「先を越されたね」

「チャオ」

部室に来た三人を見て一つ目に留まるものがあつて私は上手くいったことを察した。

「ダイヤさん、果南さん、ありがとうございます」

鞠莉さんが手にしている卒業証書を入れる筒にはきつと生徒全員で準備した感謝状が入っている筈だ。生徒側の立場としてみんなで準備したサプライズプレゼントだったのだが、渡すこととそのタイミングは誰よりも親しい二人に託していたのだ。

「星もありがとうね」

「はい。三人はこれからどうするんです？」

「イタリアに卒業旅行だよ」

「そういえば前に言っていましたね」

「星さんも、春休みの予定ちゃんと決めているんですか？ 穹さんのこと、上手くいく目処が着いたのでしよう？」

「そうですね……まだ検討中です」

本当は余り先のことを考えられなくなってしまったとは言えない。他でもないこの三人には。

「ふーん……ま、そういうことにはしておきましょう」

「あ、みんなこれで揃ったね」

なんだか鞠莉さんには見透かされているような気もするけれど、Aoursの一年生組、二年生組と一緒に部室にやってきてその会話は続かなかつた。でもそれで良いのだ。少なくとも明日からもう三年生は居ない。自分で考えなければいけないのだ。

「最後は……」

みんなそれぞれの準備は出来たのだろう。みんなは数秒噛み締めるように部室を見て、饑別のように一言ずつ残していく。

「ここがあったから」

「みんなで頑張ったから」

「ここがあったから前を向けた」

「毎日の練習も」

「楽しい衣装作りも」

「腰が痛くても」

「難しいダンスも」

「不安や緊張も全部受け止めてくれた」

「帰って来られる場がここにあったから」

「だから私も心に浮かんだ感謝を言葉にした。」

「肩を貸してくれるみんながいつでももいたから」

「私達は千歌先輩を残して校門へと向かった。」

最後にここを閉じるのはスクールアイドル部部长でありスクールアイドルA q o u r sのリーダーである千歌先輩を置いて他に居ない。

「ありがとう」

体育館から出ると背中からそんな千歌先輩の声が聞こえた。けれど私達は振り返らずに歩く速度も緩めずに校門へ向かった。振り返ってしまったら、止まってしまったら動き出せなくなりそうだから。

音を失ったように静かな校舎を抜け、満開の桜が校門の両脇から私達を見守る中、私達は無言で校門を通り抜けた。

校門の前には今日学校に来たみんなが待っていた。その最後を見届けようと。

「千歌ちゃん」

それから間もなく、校舎に残っていた最後の生徒となった千歌先輩が校門に辿り着く。

敷地と外のその境界線を踏まないように飛び越えて千歌先輩は私達に合流した。

校舎の後ろで沈もうとする夕陽が私達の目を開けさせないように爛々と輝いているけれど、私達は目を背けても、閉じてもしけない。「みんな」

学校のためにフラッグシップとなっていたA q o u r sのみんながお互いにアイコンタクトを交わし頷きあうと、託された最後の仕事をやり遂げようと三年生が、一年生が三枚組のスライド門を一枚づつ閉じる。

「千歌ちゃん」

「千歌」

最後に残された一枚のスライド門はけれど今だ動き出さない。動き出させるには一人の力では足りなくて、千歌先輩は呼び掛けられるまで校門に近寄ることすらできなかった。

「うっー」

ようやく動き出した千歌先輩に引かれた校門は鈍い音と共にゆっくりと閉じよう動く。

その重さ、鈍さはなにも錆び付いているからだけではないだろう。そこに至るまでの時間の重さがそのまま千歌先輩の肩に掛かっているようですらあった。

「浦の星の思い出は、笑顔の思い出にするんだ。泣くもんか、泣いてたまるか」

自分に向けて言い聞かせる言葉はけれど、この場に居る多くの人がそれを守れそうになかった。

耐えれば耐えるほど、止めどなく溢れるものがあるのだ。だからせめてもの抵抗にと千歌先輩は顔だけは誰にも見せないようにしていた。

「千歌ちゃん」

「一緒に閉じよう」

曜先輩と梨子先輩がそれを支え、三人でスライド門を動かす。

逆光に写る彼女達の背中はラブライブ決勝で見たあの大きな背中ととても同一に思えないほど小さく見えた。

そして校舎の影に夕陽が落ちると同時に、校門は音を発して閉じ、

浦の星女学院の長い歴史に幕を下ろした。

第百六十七話

閉校式から数日、鞠莉さんら三年生は沼津を発ち私はなんとなく無気力な感覚が払拭出来ぬまま日々を過ごしていた。けれど今日はしつかりしなくてはいけない。

何を隠そう今日は穹が沼津に来るのだ。

私は自分に言い聞かせるようにそう意気込んで沼津駅前のロータリーに来ていた。

「おはよ、星」

「おはよう、穹」

今日は天気にも恵まれ電車に遅延などもなかったのだろう。重そうなギターケースを軽々と担いでいる出で立ちで現れた穹は予定時刻通りに到着した。

「今日は電車なんだね」

「それがラブライブ決勝の日以降エンジンが点かなくてさ。今メンテナンス中」

「寧ろ今までよく走ったんじゃない？」

穹の乗っていたバイク、パンペーラ250はトライアルバイクとしてのコンセプトで製作されたものだ。それをカスタマイズ、というか魔改造して長距離走行するという設計思想と真逆の使用をしていたのだからガタの一つも出るだろう。

「また復活させるよ。次はもっと獣のように走らせる」

「ホント好きだね」

「まあね」

とは言え私も穹の家で仮面ライダーダークウガのBDを夢中で見ていた口だ。そのマシンへ憧れる気持ちは充分すぎるほど分かっているつもりだ。

「取り敢えず少し歩きたいな。ずっと座ってて尻痛いよ」

「揉もうか？」

「尻子玉抜かれそうだから止めとく。それよりバカ言っていないでとつとと歩いた歩いた。散策がてら案内してよね」

「はいはい」

地方都市で必要なのはどこに行けば何があるか把握することだ。もちろんこの一年弱伊達にこっちに住んでいたわけではないのだ。今では歩いて沼津駅から浦の星女学院まで歩いて行ける程度には地理を把握している。

一先ずは駅前のアーケード街を歩くことにした。

屋根つきの商店街は歩けばついつい寄り道したくなる誘惑がそこかしこにあるけれど、今はまだ朝だ。個人経営の店などは流石に開いていないところが多い。

やば珈琲店は開いているけれど、座りすぎで尻が痛いという穹と入るのは間違いだろう。

私達はアーケードをだらだらと歩きながら話をする。

「いいところじゃん。私達の住んでたところより寧ろ都会じゃない？」

「栄えてるのはほぼ駅周辺だけなんどけどね」

「どう思ったの？ここに来たとき」

「あー・・・そうだなあ」

丁度善子ちゃんの家のマンションに近付いてきた頃に発した穹の言葉が切っ掛けだった。

「初めての土地。想像もしてないくらい遠いと感じた土地だったよ。最初に来たのは入学試験の時だったんだけどー」

少しずつ、私は穹に話始めた。穹が知らない私の話を。

親の転勤が決まり引越す羽目になったこと。反発して音ノ木坂学院に入学し一人暮らししようとして最後まで抵抗したこと。

「なるほどね。まあ高校生の一人娘を東京の高校に通わせるために一人暮らしさせるのはちよつと抵抗あるね」

「けど・・・認めたくなかった」

「だから 音ノ木坂学院を受験したんだ」

「うん」

気づけば私達はアーケードを抜け沼津港の大型水門びゅうおまで来ていた。

駅からは見えなかったけれど、ここまで来ると海ともご対面出来る。

海の香りにもはや慣れ親しんだものだ。

「何で私に話さなかったの？」

「なんで何も言ってくれないの、星っ！」

過去の穹の言葉が別の形になって私に向けられる、けれど、今の私はそれを突き付けられる刃だとは思わない。

「穹と離れたくなかったんだ。だから無理を通したくて、無茶して、見ない振りしてた。見ない振りして進んでたら引き返せなくなってた」
一緒に 音ノ木坂学院に入学して音楽を続けたという願いは本物だった。けれど私を取り巻く状況が余りにもその願いを現実のものから遠ざけた。遠ざかる岸を見なくても動き出した船は止まらないのに、ただ駄々をこねていたのだ。

「せめて引越す前に星の口からホントのこと話してよ」

「ごめん。怖かったんだ」

離れたくなかった人から嫌われてしまったては本末転倒だ。だから私は逃げたのだ。他に言い繕うことが出来ない程に。

「それで？」

びゆうおの展望スペースで埼玉では見られない水平線を一望しながら一息を入れ、私達は再び歩き出した。

「穹の事を傷付けたのは分かった。だけど合わせる顔もなくて……穹を傷付けたのに人前で音楽はやってはいけななくて」

沼津港を脇から眺め、狩野川を渡りひたすらに真っ直ぐ進む。

遮るものの無い温かな陽気とは裏腹に、私は背筋を凍らせながら穹と会話を続けた。

分かっていたつもりだったけれど、やはり自分の間違いと対峙することは心を締め付けるし、逃げ出したくなる。けど、穹が来てくれたから、こうして耳を貸してくれるから私も本音をぶつければならない。

「そうやってもやもやしながら過ぐしてただけど……」

「切っ掛けがあっただんだ？」

「うん。Aqoursに、いや、まだスクールアイドルに憧れる気持ちを持ったただの女の子達に出会ったんだ。浦の星女学院で」

出会いは、その時には大した意味をなさないことが多い。けれど、その関係が続いていくなれば変わることであるのだ。

「ただの憧れだけで走り出して、その道が険しくても障害があっても乗り越えようとする。そんな姿が思い出させたんだ」

「中学時代の楽しい時を」

「うん。穹と一緒にいたあの時間を」

足は気の向くまま暫く真っ直ぐ歩き、右折したらまたまたひたすら真っ直ぐ進む。もう考えて歩いていない感覚は無い。

「本当はこのままじゃダメだったのはきつと分かってたんだと思う。だけど意地張って、それでもAqoursのみんなの側が、音楽が心地良くて、それでー」

「ずっと一緒に居たんだね。花火大会の動画見たよ。私がAqoursのことを知ったのはそれが切っ掛け」

「見てくれてたんだ」

「花火大会のだけじゃないよ。ダイスキだったらダイジヨウブ、夢で夜空を照らしたい、その後にも公開してた曲全部、PVを見たよ。星が惹かれたスクールアイドルがどんな人達なのか知りたくて」

それから少し話は脱線してしまった。

各曲毎に好きなどころを言い合ったり、もし自分がアレンジするならどうだとか、ダンスについてやら語り合った。それは中学時代に下校しながら音楽談義に花を咲かせていたような、そんな気持ちにさせた。

J A南駿、ホームセンター Jambō Enchoを過ぎ、曲がりくねった住宅街を越えるまで話は尽きることはなかった。ただ楽しいことを追及していた日々のような会話の中、流れ行く景色だけが、やっぱり時間が経ったのだと感じられることだった。

「でもやっぱり一番センスがあると思うのは歌詞だね。あの詞には多分、Aqoursの辿った道のりが刻まれてる。経験の片鱗が見えて

くる」

「正解」

「お気に入りには『君のこころは輝いてるかい？』だね。あの曲の凄いのは聴く時々によってガラッと表情が変わるんだよ」

「……そうだね」

本当にそうだ。そのタイトルの問い掛けを前に今の私は何と答えられるのだろうか？

直近の別れに乱れた心はまだ先を見通せる程の視界を得ていない。

「Aqoursはね、私に私を見つめ直させてくれたんだ」

「うん。凄く分かる。歌詞のセンスが微妙なあんたの曲からですらそれが伝わってきたから。だから直に会ってみたいと思ったんだ」

トンネルを潜るといよいよ海沿いの道だ。

練習した砂浜、淡島とより親しんだ場所を巡ると中学時代の気分も徐々に今に戻ってくる。

「でも、もう三年生は……」

「卒業した？」

「うん」

「でも会えるよ」

「え？」

「星が会わせてよ、私に。星の中にあるみんなの思い出を通してさ」

なるほど、と舌を巻きながら私は誰の話からしたもんかと思ひ、やはりまずは卒業してしまった三年生達の話からした。

一人一人、最初の出会いから関わった案件、印象の変化など途中で駄菓子屋や喫茶店 松月などで水分補給をしながら喋り倒した。

「素敵だね。それがあの舞台、あの旗に繋がったんだね」

ほら、と穹は指差す。千歌先輩の自宅である十千万屋旅館の前の砂浜に刺さったラブライブ優勝旗を。その横には所在なさに紙飛行機を飛ばす千歌先輩の姿があった。

ちようどいいと思ひ、改めて穹に紹介しようとしたが、穹はなんとも理解し難い事態に出くわしたような顔をしていた。

「なんだろう？なんか、違う？」

その目は千歌先輩に釘付けになっているけれど、どこか訝しげだった。

第百六十八話

飛行機とは人が人でありながら不可能を可能にするという夢で編まれた構造物だ。そして紙飛行機とはその夢の始まる切っ掛けだ。飛ばせども落ちるしかない運命を持つからこそ次はもつと長く、もつと遠くへと願うのだ。

であるならば千歌先輩は今、何を思い紙飛行機を飛ばしているのだろうか？

飛ばしては落ち、また飛ばしては落ちを繰り返し、やがて千歌先輩は紙飛行機を拾うことを止め優勝旗の横でしゃがみこんでしまった。

私達はその姿を見ていられなくて浜辺まで駆け寄ると千歌先輩に声を掛けた。

「千歌先輩？」

「星ちゃん、それに穹ちゃん!」

「こんにちは」

千歌先輩はこちらに顔を向けると驚いたように立ち上がった。

「そっか……沼津に来たんだ」

それは心底良かったと胸を撫で下ろしているようで、どこか羨望に似たものもあった。

何でだろう。目の前に居るのは千歌先輩なのに、何で――

「あなた、本当にA q o u r sの千歌さん？」

それは穹も同意だったのか、穹は思わずそう呟いていた。

「何て言うか……オーラが、無い？」

穹が知っている千歌先輩の姿は限られる。たぶん特に印象に残っているのはラブライブ決勝の時の姿だろう。だからこそあの時の千歌先輩と今の千歌先輩の姿がどうしても一致しないのかもしれない。それくらい今の千歌先輩には覇気が無い。

ある意味で私の知らない千歌先輩の姿だ。

スクールアイドル活動に全力を注いでいた時のキラメキ、熱さ、それがまるでない。もしかしたらスクールアイドルになる前の千歌先輩とはこんな感じだったのかもしれない。

「そうかもね」

穹の言葉を千歌先輩はどこか寂しそうに受け入れた。

「アキバでスクールアイドルを、μ~~3~~を知って私もあんな風に輝きた
いって思った。とにかく前に進もうって、そうやってラブライブに優
勝した。あの時の私達はきつと輝いてたってそう思う。け
どー」

「手に入れた筈の輝きを今は感じない、ですか？」
「うん」

なんとなく私にも分かる気がした。

普通の毎日を特別なものに変えようと、無かったものを手に入れよ
うとした千歌先輩。失ったものを取り戻そうとした私。

違うものを追いかけて、けれど一緒に駆け抜けた今、求めるものは
同じな気がする。

「私も分かる気がします」

「星ちゃん？」

「穹ともう一度って、そう願ってたのにいざその時が来るとどうした
ら良いのかなって、これから私はどうしたいのかなって」

「未来をどうしようかなって？」

今、そしてそこから繋がる未来。私達はそれを見失ってしまったの
だろうか？

「なら、もう一度見付けましょうよ」

穹は背負っていたギターケースを下ろしてアコースティックギ
ターを取り出すと、聞き覚えのある旋律を奏でた。それはラブライブ
に優勝したAqoursが披露したアンコール曲「青空Jumpi
ng Heart」だ。

「見たことない夢の軌道 追いかけて」

弦の弾ける音が静まっていた心をざわつかせる。穹の歌声が私達
の音楽を引き出す呼び水になる。

私はポケットからハーモニカを取り出すと千歌先輩と目を合わせ
た。

「千歌先輩。私達が惹かれたものはたぶん、こうやって揺さぶられた

先にあつたのかもしれないね」

“ちよつと待ってなんてムリ 飛びだそう 僕たちのなかの 勇気がさわいでる”

いつでもおいで、と手を差し伸べるように穹はギターを掻き鳴らしながら歌い、踊り、笑っていた。人とはこんなに純粹に笑えるのかと思うような、そんな真つ直ぐな笑顔だった。

「歌おうか、星ちゃん」

「奏でましょうか、千歌先輩」

“どんなことがおこるのか わからないのも楽しみさ”

私が一番最初に夢中になった音楽がなんだったのか、それはもう忘れてしまったけれど何時だって音楽と共にあつた。楽しさを求める時も、悩んでる時も。

千歌先輩だってスクールアイドルになった切っ掛けは9人の女神の音楽からだ。なら答えはもしかしたらこの中にあるのかもしれない。

“Open Mind 伝えなきゃ伝わらない”

そうだ。誰かに元気になって欲しい時、私はいつだってこうやって音楽を奏でていた筈だ。今、穹がしてくれたように。

閉じていてはいけないのだ。最高だった時の思い出を、駆け抜けた日々の名残を、閉じ込めようと閉ざしてはいけないのかもしれない。

“光の向こうへ ほら、いっしょにね！”

段々と分かってきた気がする。そして沸々と心が叫び出したくなる。もつと奏でていたい。もつと踊りたいとー

“みんなとなら 説明はできないけどだいじょうぶさ まっしぐら”

みんなと、もう一度歌いたいと。

それは単純にして明快な衝動。けれど、最近沸いてこなかった衝動だった。

私達は顔を見合わせるとなんだか自然に笑いあつた。やっぱり単純に楽しい。好きなことをして時間を過ごす。

曲が終わってそうやって声を出して笑っていたら、気付けば千歌先

輩のご家族が浜辺に様子を見に来ていた。些か騒ぎすぎたのかもしれない。

「おい千歌ー、来たよー」

「新しい制服ー」

でも叱られるでもなくただ知らせにきただけのようだった。二人のお姉さんとお母さんまで揃い踏みなあたり、千歌先輩が元気が無かったことを気にして出てきたのかもしれない。

「こんにちは星ちゃん。そちらの子は初めましてよね？」

とても小柄な、ともすれば妹にすら見える千歌先輩の母親がフランクに声を掛けてきた。

「初めまして。明里穹です。星の繋がりで千歌さんとも仲良くして頂いてます」

「あらあら、ご丁寧にもね。最近千歌の様子も少し変だったからありがとうね」

「お母さんー」

千歌先輩が恥ずかしそうに抗議の声を上げるのはなかなか新鮮だ。

「千歌ったら昔から人の目をすぐ気にしてね。上手くないことがあって悔しくても誤魔化して、諦めたふりをしてた。今日みたいに紙飛行機を飛ばそうとしたことがあってね。でも上手くないなくて、二人がここに来る前の千歌みたいな顔してた」

そう言って千歌先輩のお母さんは砂浜に落ちている紙飛行機を拾うと千歌先輩に向けて投げた。

それはほんの僅かな時間ゆっくり空を揺蕩って千歌先輩の胸にぶつかって落ちた。

「ねえ・・・私、見付けたんだよね。私達だけの耀き、あそこにあったんだよね？」

凶星を付かれ千歌先輩は思わずそう問い掛けた。それはきつとラブライブを優勝し、三年生が卒業してから千歌先輩に付きまどっていた疑問。けれど答えは出なくて、ぐるぐると自分の心の内で煮詰まっていた疑問。それがようやく、吐露されたのだ。

それは口に出してしまえばあの時の耀きを否定してしまうのでは

ないかと閉ざしていた疑問だったのだろう。けれど、千歌先輩は見付けかけているのだ。耀きとは決して特定の時間、場所を指すことではないことに。

「本当にそう思ってる？」

「相変わらずバカ千歌だね」

「なんどでも飛ばせばいいのよ、千歌ちゃん」

「本気でぶつかって感じた気持ちの先に、答えはあつた筈だよ。諦めなかつた千歌には、きつと何かが待ってるよ」

千歌先輩の母親が、二人の姉がしたそれに対する答えは明確なものではない。けれど、ほんの少しのヒントは貰つたような気がする。

そう。いつか学校のみんなで歌つたではないか。何度だつて追いかけようと。

函館で見付けたではないか。夢の終わった後には次の夢が生まれると。

千歌先輩は心の中に灯つたのものを確かめるように紙飛行機を拾い上げると海に向かってそれを飛ばした。

ふらふらと、けれど少しでも前へと飛ぶそれはけれど少しすると鎌首をもたげ地面を向こうとした。

「行けっ！」

「「飛べー！ー！ー！」」

それを私達は否定する。

例えばいつか地面に着く時が来るとしても、私は、私達はもっと先を見たい。

私達の声に誘われるように舞い込んだ風は私達の背中を押し、紙飛行機を遥か空に舞い上げた。

それを見守るようにラブライブ優勝旗が誇り高く私達の側で舞い広がっていた。

第百六十九話

空高く舞い上がった紙飛行機。

紙飛行機とはそもそも自分で飛ぶ力は無く、誰かに飛ばされて、風に乗るしか揚力を得られないのだ。

その在り方はどこか私達に似ていると思った。

自分の力だけでは道を切り開けないけれど、誰かに背中を押ししてもらえば前に進める。そんな私達の姿を重ねて、舞い上がった紙飛行機を見上げた。

「どこまで飛ぶのかな？」

太陽の光を受け白く輝くその躯体を見ていると何処へでも連れていってくれそうな気がした。

「追いかけてようよ」

「うんー」

その行き先は何処へ？ちよつとした好奇心と、この偶然への期待と、よく分からないけれど何かが起きるといふ予感が私達の足を動かした。

「行ってらっしゃい」

私達は千歌先輩のご家族に見送られながら紙飛行機を追って海岸線を走った。この一年弱で幾度も通った道を。

無感動に通った日もあった。

友達と会話に花を咲かせていた時もあった。

笑ってる日も、涙を流す日もあった。

鼻歌混じりに踊っている日だってあった。

沢山ありすぎて全てを覚えていられないほど通った場所。けれど、もう通ることはないとも思っていた場所。

「千歌先輩」

「何？」

「私達いいんですよね、ここを通過して」

思い出の中に閉じ込めて、大切に大切にしようとしていた。けれどももしかしたらそれは私が欲しかったものとは違う形だったのかもし

いと思う。

選んで、出会って、そんな偶然を幾重にも重ねて、千歌先輩の飛ばした紙飛行機は丘を越え、浦の星女学院に吸い込まれていった。

急勾配の坂道に心臓の鼓動が早くなる。けれどその胸の高鳴りは単なる疲労によるものとは違う、期待が多分に含まれていた。

その先に見えてきたのはつい数日前まで通っていた母校、浦の星女学院。

「開いてる？」

みんなで閉じた校門は何故だか少し開いていて、私達は誘われるように校舎の中に入ることにした。

そんな私達を受け入れるように玄関口も当然のごとく鍵は掛けられていなくて、けれど校舎内には人の気配は無いし、下駄箱にも誰の靴も入っていない。

静寂に包まれながら耳に入るのはいつしかのざわめき。心の中にあるいくつかの風景が私達にそれを感じさせた。

「二年A組、高海千歌です」

「へー……ここが星達の学校」

「そうだよ。ここだねー……」

私と千歌先輩は唯一、浦の星女学院の思い出のない穹にここでの日々の出来事を語りながら閉じられた校舎を少しずつ開きながら巡った。

挨拶を交わした下駄箱、学校説明会の案内を貼った掲示板、各々の教室、各部活の音が心地よく聴こえる図書室、並んでパンを買った食堂、呼び出され無茶振りされた理事長室、そして……

「到ちャーく」

みんなで練習したり、私が演奏していた屋上。

私達が飛ばした紙飛行機はその屋上の真ん中で一先ず役目は終わったと言うように羽を休めていた。

「……はね……」

「うん」

「……は……」

つうつと涙が頬を伝い、言葉が続かない。

楽しかったこと、悩んだこと、この一年弱の多くがここにはあった。千歌先輩と一緒に穹に語って、思い出の箱を開けてその時の感情が私の中で色を取り戻した。

「ああ、駄目だ私」

浦の星女学院の思い出は笑顔で閉じる。そう意気込んだ約束は守れそうに無かった。

思い出も気持ちも、誰かと共有して、誰かに伝えて、そうやって耀きを増すのだ。過去を今と未来から切り離してはならない。繋がなければ今も未来も輝かない。少なくとも私はそう思うのだ。

閉じこめていては駄目だった。その失敗は中学時代に経験していた筈なのに、私はまた同じことを繰り返しそうになっていた。

「私は嘘つきだ」

そして千歌先輩もまた紙飛行機を手に空を見上げ、その細められた目から熱い雫が零れ落ちていた。

千歌先輩もまた同じ思いがあつた筈だ。もちろん全部が全部同じな訳はない。けれどこの一年弱、道は違っても共に走つたのだ。共有する感覚はきつとそこにはある。

だからこそ閉校式の日には見せなかつた千歌先輩の涙は、こうして人の目に触れることになった。

「……………」

嬉しいなら笑えばいい。

悲しければ我慢する必要なんてない。泣けばいい。

そしてそんな気持ちを誰かに届けたい。私の目指す音楽とは誰かのための音楽なのだから。

目を閉じれば甦る景色。みんなの顔、そして呼び掛ける声……………」

「……………」?

呼び掛ける声、が微かに風に乗って聴こえた気がした。

「千歌先輩……」

「聴こえた、よね？」

私と千歌先輩は顔を見合わせて頷き合うと、夢か現か、定かではない声に向かって走り出した。

運命なんて言葉は好きじゃない。だから私はこの出来事を偶然であるとそう信じる。

だって私がこうしているのも、穹がここにいるのも、千歌先輩と一緒に走っているのも、全部みんながそれぞれ自分で選んだことなのだから。

「遅いよ、千歌、星」

屋上を後にし、校舎を駆け、渡り廊下を抜け、体育館に入ると、ここには在りし日の再現のようにみんながいた。浦の星女学院のみんな。全校生徒100人にも満たない数のみんなが。

「みんなー！ーでもどうして・・・？」

「私達だけじゃないよ」

じゃーん、と四五六トリオの合図と共に幕の上がるステージ。

その幕の裏側から姿を表したのは千歌先輩を除くAqoursメンバーの八人だった。

「みんな！」

「夢じゃないよ千歌ちゃん」

みんなの選択の末に重なりあった偶然を何と呼ぶのか私は知っている。人はそれを「キセキ」と呼ぶのだ。

「千歌」

「もう一度歌おう」

「うん！」

「一緒に！」

とても驚くべき出来事の末に不思議な偶然を重ね、巡りあった素晴らしいキセキの物語。Aqoursの未発表の集大成の曲“WONDERFUL STORIES”

“全力で輝いた物語ストーリーさ！”

それはAqours、そして浦の星女学院のみんなと穹とで紡ぐ、みんなで奏でる物語。

“いつも いつも 追いかけていた 届きそうで 届かない ミ

ライを”

叶ったことも叶わなかったこともあった。

”特別な何か探す冒険　そしてここに来て　やっとみつけた!”
けれどそれらは全て無意味では無かった。

”夢を駆けてきた　僕たちの　物語　いつぱいの思い出からは
流れるメロデー　あたらしい夢が聞こえる　遠くへまた行こう
よDREAMING DAYS”

「分かった。私が探していた耀き。私達の耀き。足掻いて足掻いて足
掻きまくってやっと分かった。最初からあったんだ、初めて見たあの
時から。何もかも、一步一步、私達の過ごした時間のすべてが、それ
が耀きだったんだ。探していた私達の耀きだったんだ」

”青い鳥　探してた　見つけたんだ　でも　カゴにはね　入れな
いで　自由に飛ばそう　YES!”

幸せとは遠く彼方ではなく此方にこそある。けれど、それは永遠で
はない。だからこそまた見付けるために青い鳥には飛んでもらわな
ければならない。幸せはここにあったという思い出と未来の幸せも
きつとあるという架け橋になってもらうために。

”あたらしい夢が聞こえる　いつかまたはじまるんだよ　次の
DREAMING DAYS”

そして私は、私達は確信するのだ。

夢は終わらない。どこまでも、いつまでもと。

第七十話

輝かしい時間はあっという間に過ぎてゆき、次々に今が舞い込んできては過去が積み重なっていく。でもそれは悲しいことではなくて、大切なことだ。積み上げれば積み上げるほどに重みが増すし、積み上げるからこそ遠く先まで景色が広がる。

中学の頃、引越しのことを穹に黙っていたことも、沼津に来てもう一度やり直したいと思ったことも、全部があるから今がある。今があるから明日を夢見られる。

「とても素敵な学校だね、星」

歌唱はできずとも初見の曲を抜群のリズム感で踊った穹は、浦の星女学院全校生徒の拍手と喝采に包まれながらそう言った。それは私にとつて、いや、私達にとつて最大の賛辞だ。

「うん。今なら自信を持って言える。浦の星女学院に入学して良かったって。でも、ごめんね」

穹との約束を、音ノ木坂学院に入学するという約束を反故してしまった末に言う台詞ではないと自覚はある。だからこそその謝罪だ。

「あーあ、羨ましいいなー。私もこっち来たくなっちゃったじゃん」

「あんたがそれ言うとやりかねないから怖いわ」

廃校した筈の学校で、集まる筈のないみんなと共に歌って私達は満ち足りていた。きつと明日も輝けると。

「でもどうして?」

浦の星女学院生全員が集まるのも人数を考えれば不可能ではない。けれど、そこに沼津を発った筈の三年生の三人までここにいるのはどうしても疑問だった。

「あのね、伝えたいことがあるの。千歌と」

「みなさんに」

「私達三年生とA q o u r s の未来についてのお話です」

「未来ー」

繰り返すようだけどこれからとは、これまでがあつてこそ紡がれる。故に、この曲『僕らの走ってきた道は』はこう始まるのだ。これ

までを肯定する言葉「……」

「耀きたくて 始まりたくって 仲間に出会いながら 走ってきた道」

何度も振り返る。くどいくらいに。一見それは無意味に写るかもしれないけれど、これから飛び立つには助走がいるのだ。だから私達は、いや、この曲に倣って言えば僕らは必要な分だけ過去を見て、その辿った道を駆け抜けて明日に飛び立つのだ。

「さあ幕が上がったら ずっと歌っていたいね 終わらない夢見よう……」

虹の向こう側に想いを馳せるように。

「行っちゃったね」

何度でも幕は上がる。そう元氣付けてくれたみんなに感謝したのも束の間だった。分かってはいるけれどキセキはずっと続くものではない。すぐに現実が私達の目の前に飛び込んでくる。故にこうして私達は卒業旅行に行く三年生を沼津駅まで見送りに来たのだ。

三年生3人の背中が見えなくなるまで改札前で見送り、バス停前で次のバスを待っていると千歌先輩がちよっぴりの寂しさを滲ませて言った。

「うん。私たちも戻って練習しようか」

「そうね。6人で新しい学校に行ってもA q o u r sを続けていく」

「そうだね。それがみんなの答えなんだもん」

「やる気が出てきたすら」

「ぎらん」

「相変わらず空気が読めないすらね」

「喧しいわ」

大切なのはその向き合いかたなのだ。A q o u r sは三年生が抜けてもA q o u r sとして続けると方針を打ち立てた。帰ってきた

三年生と、残るみんなとで話し合われ、浦の星女学院のあの場所で発表されたのだ。

相変わらず凄い速さで進むAqoursを見て、私達も負けてはいられないと思った。

「そんじや、私達も便乗しようか。ライブ優勝したAqoursの練習がどんなものか、ちよつと気になるしね」

「穹は学校は？」

「テストは終わってるし、多少休んでも問題ないよ」

浦の星女学院は統廃合による準備期間のため早めの春休みだが、音ノ木坂学院は違う。まだ春休みには少し早いのだが、当の穹はそう軽く言うのだから、この女は本当に見た目詐欺だ。

黙って伏し目がちにしていれば深窓の令嬢のようなのに性格はGoing My Wayなのだ。

まあ私達2人がどうしていくかは練習しながら話し合うかと考えているとルビィちゃんが思い出したように小さく声を上げた。

「あつ」

「どうしたの？」

「練習、どこでするの？」

「どこでって、何時もの……あ、そっか、学校は使えないんだ」

「駅前の練習スペースは？」

「あそこはライブが終わるまでって約束で」

浦の星女学院が廃校になり、統廃合先の静真高等学校にはまだ入学していない今、私達は非常に宙ぶらりんな存在だ。

よくよく考えると現在の私達には居場所が無いのだ。

「そんなに練習場所困る？」

「私達は2人だったからね。多少周りが開けてればどこでも平気だったけど、9……6人だとそれなりに周りに気を使わないとね」

穹が疑問符を浮かべているのを苦笑いしながら私が答えた。

私と穹のダンスは余り横に大きく広がらない。動く範囲としては小さく纏まっている。それと違いAqoursのダンスの売りはフォーメーションダンスにある。6人で空間を広く使って魅せるた

め、それなりのスペースとフラットな地面であることが好ましいのだ。

「私がこっち居る間はともかく、今後の練習どうしよつか？」
「だよねえ」

埼玉県から東京都まで電車で約一時間。そして新幹線に乗らないルートでは東京都から沼津まで約三時間もの時間が掛かる。それを毎回穹に強いことはできない。それは穹のバイクが直つてからものだ。

「え、じゃあどうするずら？」

「鞠莉にでも聞いてみる？何処か宛はないかって」

善子ちゃんの発言に千歌先輩は逡巡しつつもこう告げた。

「自分で探そう。なんかね、頼つてたらダメな気がする。この6人でスタートなんだもん。この6人で何とかしなきゃ……でしよ」
「うん」

新しいAqoursは自らの力で道を拓く。それはとても力強い決意のように思えるのだが、何故だろう？少し今の彼女達は弱々しく映ってしまう。

「閃いた」

「はい。曜ちゃん」

「新しい学校に行つてみるつてのはどうかな？私達が春から行く」

「新しい、学校」

未だ行ったことすらない学校だけでも、これからは私達もその生徒になるのだ。学校に行くことに問題は無いだろう。

「今まで考えても無かったけど、部活動なら新学期前に統合先の子達に混じつてやつても良いかもしれませんね」

新学期始まってから合流するよりも早く一緒に練習した方がよりチームワークに磨きを掛ける時間が出る。浦の星女学院の生徒だつて部活動をする場所がなければ体が鈍るというものだ。

「どんな学校なんだろうね」

私達はちよつとした好奇心に背中を押され、行き先を静真高等学校に定めて間も無く来たバスに乗り込んだ。

「え!?電子マネー使えないの?」

「驚いた?」

「今時そんなのあるんだね」

「あるんだよ……って、穹ちゃん!両替はバスが止まってる時じゃないと駄目だよ」

「はい」

千歌先輩に注意され、「いけね」と顔に出した穹は座席に戻ると、そう言えばと付け足した。

「電車もさ、P A S M O使って来たんだけど、何故か改札通過出来なくてさ。分かんなくて窓口で精算してもらったんだよね」

「あー、それね。なんか区間が途中で切り替わっちゃうんだって。改札前に精算機あるからそれでも確か精算出来た筈だよ」

「へえー」

とは言え同じJ Rで全国で使える電子マネーがワンクッション置かないと使えない理由をイマイチ理解出来ていなかったりするのだが、それはまあこぼれ話だしいいだろう。

「やっぱり遠出は良いもんだね。こういう発見があるから楽しいよ」

「穹さんは旅行とか結構するんですか?」

花丸ちゃんの質問に穹は待ってましたと言わんばかりに口を開いた。

「バイク乗れるようになってからは結構走りに行ってるよ」

「かっこいいぞら」

「でしょ。今秋名の峠で最速は誰かって話になったらみんな私だって言うくらいに走らせているよ」

物知りな花丸ちゃんならすぐ気付くだろうが、今のは穹のどうでもいいジョークだ。

元ネタは言わずと知れた公道最速伝説の走り屋達の物語 // 頭文字D // だ。

秋名山はその作品の主人公のホームグラウンドなのだが、実在しない山だ。一応モデルとなったのが榛名山のだけれど、魔改造しているとはいえあのトライアルバイクでぶっ飛ばしてというのはイメー

ジが合わない。

「へえ。あの峠ならシューマツハにだって勝てるって噂の豆腐屋の親父さんよりも速いって?」

あ、善子ちゃん知ってるんだ。

「気になるなら今度私の後ろ乗る?」

「命の保証はしないわよ?」

挑発的に言うけれど、不運な善子ちゃんがそれを言うともマジで洒落にならない気がする。

「伊豆半島は走りがいがあると思うよ」

「だよ。くねくねしてるし、海も近いし、最高だよ。前回高速使って失敗したなって思ってたんだ」

躊躇いがちだったけれどルビイちゃんも会話に加わり、元々心配はしていなかったけれど穹がみんなと上手くやれそうな様子に少しだけホツとした。

そんな風に会話に花を咲かしていると、わりと早く静真高等学校前のバス停に到着した。到着したのだが――

「へ?」

「か、過去すら」

「曜!間違ったんじやないの?」

そこにあっただのは入り口にKEEP OUTとテープが貼られてもおかしくないレベルの廃屋だった。

木造二階建てのこじんまりとした校舎は噂に聞くマンモス校の静真高等学校とはイメージがかけ離れている。校舎として考えれば浦の星女学院の方が千倍は良いだろう。

「でも学校から送られてきたメールだよ」

善子ちゃんがここに案内した曜先輩に詰め寄るけれど、曜先輩が見せるスマホの画面には確かにここが指し示されていた。

「ああああ!見て!」

そして、それが間違いでないと裏付けるかのように新しい事実が見つかった。

「分校!」

施設名を示す古い木札に新しく書き加えられていた白い文字には
こう書いてあったのだ。『浦の星女学院 分校』と。

第七十一話

廃屋同然の校舎、そして分校と書かれた表札。何が起きているのか分からない私達は各生徒に片っ端から連絡をして、事情を知っていると云う四五六トリオと喫茶店 やば珈琲で落ち合うことになった。

「なにそれ？」

「何でも浦の星と一緒にするのが嫌だって声の一部であるらしくて」

「しばらく分校で様子を見ましようってことになったんだって」

「それで浦の星の生徒用に今は使っていない小学校を借りたらしくて、教室も今のところ一つだけ」

バスで再び沼津近くまで戻り、商店街の中にあるやば珈琲で四五六トリオから聞いた話はまさに寝耳に水だった。

浦の星女学院は生徒に人格者が多く、近年稀に見るほどに平和な高校だった。だから統合先に迷惑を掛けるような問題児もないし、当然ながらそんな事件も起こしていない。それなのに何故反対されなければならぬのだろうか。私達は首を傾げた。

「統廃合になって、廃校になった学校に移ったんじゃ意味無いぞら」

「それに、三年生卒業してもルビイ達全員一つの教室に入ったら……」

言うまでもなくすし詰めだろう。少ないとはいえそれでも六十人近くの人数が浦の星女学院には居るのだ。ただでさえサイズが一回り小さい小学校の教室ではオールスタンディングでなければ入れないだろう。

ルビイちゃんが冗談じゃないと顔をしかめていた。

「何それ、授業できないじゃーん」

「スクールアイドル活動もね」

「あ」

「でも、どうして一緒にしたくないなんて声が？」

私達には理由に心当たりがない。強いて言うならば自主性が強すぎる、ということか。それこそ統廃合阻止のために活動するくらいに。

自主性が強い、解釈によつては我が強いとも取れる性格は集団に新しい風を吹き込みやすい。それが良い作用なのか悪い作用なのかは分からないが。故にその変化を嫌い、我が強い人物を歓迎しない風潮も世の中にはあるのだ。

浦の星女学院生の最後の抵抗は統合先の静真高等学校の耳にも届いているだろうことを考えると、その可能性は0ではないと思った。

「星の居るところは賑やかだね」

「皮肉？」

「そうかもね。でも、どうにかするんでしょ？」

「どうにかって………するしかないんじゃない？みんなでき」

問題を抱えたまま統合先に編入する訳にはいかない。というか、これでは編入とすら言えないのではないかと思う。

どうするべきかはまずは正しく状況を掴まなければと思ったが、ふと、居る筈の人間が一人足りないことに気付いた。

「そう言えば曜ちゃんはどうしたずら？」

「さっきまでここに座つてて、確か電話が掛かってきてて……」

「う、嘘っ!？」

善子ちゃんが驚愕の声をあげると窓に駆け寄って食い入るように外を見詰めた。

私もその視線を追うと……

「へ?..」

曜先輩が往来の中、誰かと話をしている姿が見えた。多少距離があるため細部は分からないものの、その誰かがどうにも男っぽい。しかもイケメン系の。全体的に黒で統一された服を地味に見せることもなく着こなし、キャップを被っているところはなかなかのセンスと見えよう。

自分の色恋沙汰には興味は無いものの、私も人並みに年頃の乙女だ。人の色恋沙汰にはちよつと胸がときめくものがある。

曜先輩程の器量も見た目も良い女の子の隣に居るのがどんな人物なのか興味が湧かない訳がない。

「ずらあ?」

「あっ」

それは花丸ちゃんもルビイちゃんも同じようで、善子ちゃんと合わせて私達に四人はガラスにへばりつくように様子を見守っていた。

当然の帰結として私達の不自然な行動は他の面々の注意を引くことになり、

「何」

「うえ!？」

「な、な、な何でもないすら」

「リトルデーモンが少しだけざわついてるだけよ」

「ぴ、ぴぎいい!」

「落ち着いて」

「何を隠しているの?」

「そうだよ。何を見たの?」

「な、何でもない。何でもないの」

「見ないほうがいい」

「その通りすら」

「曜さんがナンパされてるんだよ。しかもイ・ケ・メ・ンに」

「穹あっ!？」

ニヤリと意地悪く笑みを浮かべた穹はしれつとテキトーな事を言って千歌先輩と梨子先輩を煽った。

「なんだ。またか」

「また!？」

「だつて曜ちゃんだよ」

千歌先輩の言葉は予想外なものだったけれど、最後の一言で凄く説得力が増すあたり曜先輩は流石だと思う。全方位型万能美少女 渡辺曜とでも今後は称するべきなのかもしれない。

「ま、あまりしつこいとめんどくさいだろうし、ちよつと様子見に行こうか」

千歌先輩は梨子先輩と連れだつて店を出ていく様子は本当に慣れっこだとも言うようで、やっぱり曜先輩の相方として長い付き合ひがあるなと思った。

ふと、私と穹はどうなのだろう？みんなからはどんな風に見えるの
だろうと思ひ、穹の様子を盗み見るが、当の本人はほぼ初対面となる
四五六トリオ先輩達と挨拶を交わしていた。

穹と私、ある意味で二人で完結していた世界は広がりを見せ、今後
はどうするべきなのだろう？

「私達も追うわよ」

「善子ちゃん待って」

「ずら」

千歌先輩達に続いて一年生組が外に出てしまい、私と穹もそれを追
う形で店を出る。

「ねえ穹」

「何？」

「……うん。何でもないや」

穹がこつちに來れたらいいのに、なんて思ったことは口に出せな
い。単に千歌先輩と曜先輩の関係を垣間見て一時的に感じた気の迷
いだ。

穹は「変なの」と特に深く追及することはなかった。

店を出て直ぐに私達は千歌先輩達と合流を果たし件のイケメンと
対峙することになったのだが――

「女の子？」

近くで顔を見るとイケメンはイケメンでも男子ではなかった。そ
れにしても顔の造形にどことなく見覚えのある感じがする。それは
私だけでなく他の面々も思っていたらしく、頭に疑問符が浮かんでい
るようだった。

「あ、そうか。紹介したことなかったっけ、私の従姉妹の月ちゃん」

「渡辺月です。よろしく」

月と名乗った少しだけ年上な雰囲気を持つ彼女はキャップを脱ぐ
と肩口で切り揃えられた綺麗な黒髪がハラリと垂れた。

キャップで少し陰っていた表情がより良く見えるようになって、そ
の快活そうな顔で敬礼しながら自己紹介をしてくれた。

「取り敢えずここでは何ですし、落ち着ける場所で話そうよ」

「話し?」

「そ。静真高等学校と浦の星女学院の話し」

月さんはイタズラっぽくウィンクしてそう言ったのだった。

第七十二話

往来のど真ん中で姦しく語るのも憚られるので私達は再びヤバ珈琲に入り、四五六トリオ含めて話をすることにした。

意味深なことを言った月さんの言葉から察するに何かしらの情報を持っていると思っていたが、どうやら当たりだったようだ。

「え？じゃあ、あの学校の生徒なの？」

なんでも月さんは件の静真高等学校の生徒であり、しかも生徒会長とのことだ。私達とは真逆の立場での情報はかなり確度の高い情報となるだろう。

「うん。入学前曜ちゃんにも一緒に通わないって誘ったんだけど、曜ちゃんは千歌ちゃんと一緒の学校が良いって」

けれど、そこは華の女子高生。話は本筋から容易に逸れてしまう。いや、多分本筋を話すことに幾らかの抵抗があるのかもしれない。もつとも、曜先輩を弄るあたり本心から人との会話が楽しいだけってことも十分に考えられる。

まだまだどんな人間なのかは分からないけれど、月さんも曜先輩と似て掴み所のない部分がありそうだ。

「そ、そうだったっけ？」

「照れることないじゃない」

「あ、君が梨子ちゃんだね」

「はい」

「いつも曜ちゃんが言ってるよ。尊敬してるって」

「あ、そんな」

「照れることないじゃない」

「千歌ちゃん、ルビイちゃん、花丸ちゃん、善子ちゃん。曜ちゃん本当にAqoursのことが好きみたいで会うたびにみんなのこと話してるんだよ。いつも思うんだ。もうAqoursは曜ちゃんの一部なんだなあって」

初対面なはずなのに一目見て相手が誰なのか分かってしまうあたり、曜先輩から話を聞いているというのは本当なのだろう。きっと初

めて会うのに初めてな気がしないのではなからうか。例えるなら頻繁にやりとりするTwitterの相互フォローしている人とリアルで会うような感じだろう。

「なんかそう言われるとホント恥ずかしいよ」

「あはは」

「さっすが曜ちゃんずらね。裏表が無いというか？」

「何で私のことみるのよ!？」

「それに星ちゃん。君のことも言ってたよ」

「それは気になりますね。因みに何と？」

「もー、これ以上いいでしょ。本題に入ろうよ」

照れる曜先輩は可愛い。照れなくても勿論可愛いけれど、普段飄々としていることが多いから、こんな風に弄られて照れる姿は新鮮だ。

それはきつと月さんも分かっているのだろう。だからそんな曜先輩の姿を見て満足げにカラカラと笑っている。

「どうして分校なんてことに？」

「誰よ浦の星がイヤなんて言ってるの」

「あー・・・うちの学校、昔から部活動が活発でね、幾つかの部活は全国大会に出るほどで」

月さんは遂にその話題が来たかと言いつらそうに前置きをして続けた。

「浦の星の生徒が入ってくると部がだらけた空気になったり、対立が起こるんじゃないかって一部の父兄が言っているらしくって」

「そんなー」

「なんでそう言う話になるのよ」

「だよね。僕たち生徒も、先生たちも心配ないって説得したんだけど、部活がダメになったらどうするんだとか、責任とれるのかとか」

月さんは本当にまいった、といった表情でそれを語った。多分、その話し合いがされた当時のことを思い出しているのだろう。

「そんなこと言い始めたなら何も出来ないと思うけど」

どうにも困ったことにモンスターペアレント、通称モンペはこの沼津にも存在しているらしい。

話を聞いていると沸々と怒りが沸き上がってくる。

文句を言っているバカ親は何様なのだろうか。そもそもテメエの為に子供が何かをしている訳ではない。誰のための部活なのか、何のための部活なのか、それを見失ってる耄碌したバカの言うことなど聞く必要などないではないか。

「星……」

ふざけるな、と頭が完全沸騰しそうになるのを私は抑えるので精一杯だった。

私達の自由を、意思を、夢を親の都合でねじ曲げられるのは我慢ならない。それは当事者となったからこそ人一倍強くそう思う。

「バカなことでも声を大きくして言うത്それっぽく聞こえるし、賛同する人が出るから不思議だよね」

私の内心を察してか穹が皮肉げに言ったことを誰も否定しなかった。

実際に社会的な問題でもあるのだ。

モンペのような自分の価値観の押し付け、声がかいだけのバカによる扇動、それに追従する蒙昧な輩。そんな連中が幅を効かせることでブラック企業などが跋扈する社会が出来上がったのではないかと嘘か真かはさておき言われる程なのだ。正直冗談じゃないと思う。

「それでね、どうしたらいいかって相談してたんだ」

「全面戦争」

「そんなわけないでしょ」

「その人たちが気にしてるのは浦の星の生徒が部活でも真面目にちゃんとやってけるかってところなんだと思う」

「だから、実績のある部活もあるよって証明できればいいんだよ」

外からの視点で真面目か否かの判断は実績以外には材料が無い。そして浦の星女学院にはそんな実績を残している部活は一つしかないのだ。

「部活」

「証明するって言っても」

「そんな部活……」

「あるでしょ」

「全国大会で優勝した部活が一つだけ」

「私達スクールアイドル部が新しい学校の他の部活にも負けなくらい真面目に本気で活動していて人を感動させてるんだって分かってもらえればいいんじゃない？」

「それ、それいい」

「でしょ」

「ライブでもやるつもり？」

「それもいいけど、実は来週、丁度いいイベントがあるんだ」

なんでも新入生向けに部活説明会があるとのこと、そこには新入生や保護者が出席することとなっているらしい。

そこに少しでも時間を使い、浦の星女学院の代表としてAqoursがパフォーマンスをすれば或いは、反対意見を覆すことが出来るのではないかということだった。

「千歌先輩ー」

結局また矢面に立たせることになるのに後ろめたさはあるけれど、絶好の機会であることには違いない。

小うるさい大人を黙らせてやりたい。その一心で私は声を挙げてしまった。

「うん。やろうー」

こうしてAqoursは再び学校のために活動することになり、私はどこか別の方向を向きながらAqoursのバックアップをすることとなった。

第七十三話

私達は来る部活説明会に向けて練習するべく取り合えず島郷海水浴場の砂浜に足を運んだ。

ここは千歌先輩達がまだ三人でAqoursをやっていた頃の練習場所の一つだ。長い海岸線はランニングにはもってこいだし、平日は人気も殆どないため周囲を気にしなくてもいい。

ここにくるまでそれなりに時間が経過したけれど私の腹の虫は中々収まらず、移動中はTwitterなどでこの件についてやりとりされていなか調べたりするほどだった。流星に簡単に検索に出るようなやりとりはされていなかった。

もし堂々と理不尽なやりとりがされていたなら身元特定して晒してやろうかとも思ったのだが、そんな迂闊なことはしていないらしい。

「何ムキになってんのよ」

「ズバリ言わないでよ」

みんな気を使ってか私に言葉を掛けて来なかったくらい露骨に態度に出ているからか、見かねて穹が指摘した。あっけらかんとそんなことが出来る穹にみんなが驚いていた。

「私達は大人の都合で人生を左右される筋合いはない」

「そう言えぱいっだったか話したね。生まれることこそが最大の理不尽だ、みたいなこと」

「そうだよ。例えこうあつて欲しいって望まれて生まれたとしてもそれを強制されるのは違う。只でさえ生まれることを強制されているのにそれ以上を強制されるのは奴隷と同じだよ」

「アンタまさかまだ父親と和解してないの？」

「する必要が無いからね」

穹は呆れたというか、悲しいというか、曰く言い難い表情を浮かべた。

引つ越し騒動が起きてから一年以上は既に経過している。それだけ時間がありながら和解出来ないとは考えて居なかったのだろう。

「勿論むやみに拒絶している訳ではないよ。でも、納得したり許したりは別の問題」

家族だから、血が繋がっているから分かり合えるなんてのは幻想だ。所詮家族なんて生活共同体の単位に過ぎないのだ。

今の環境を受け入れられたとは言え、別の未来を潰した父親を許すつもりはない。

「いい？今回の部活説明会はアンタの個人的な怒りを押しつける場じゃないんだからね」

「・・・分かってるよ」

とは言ったものの、穹とのやり取りがなければこの気持ちを落ち着けられたのか自信がない。

クールダウンしなければと私は穹に所持品を放り投げるように渡すと服を脱いで海に駆け出した。流石に下着は脱がなかったけど。

「星ちゃん!？」

私の奇行に驚きの声上がるけれどそれを無視して砂浜を全力で駆け抜け頭から海へとダイブする。一気に襲い掛かる冷たい圧力は私の頭を、体を冷やすには十分過ぎるほどだった。

埼玉にいた頃は泳ぎは好きでも嫌いでも無かった。今でもそれは変わらないけれど、この海は好きだ。ここは私達の町の海だから。

「ぶはあーあー気持ちー」

一泳ぎして砂浜に戻る頃には私の身も心も冷え冷えた。濡れた下着は着心地が悪く、いつそのこと脱いでしまいたい気分にもなったけれど流石にそれは自重した。

「服、服！」

みんなは慌てた様子でタオルを私に投げ付けてくる。流石に七分は多すぎると思うのだけれど、私はありがたくそれをキャッチした。

「どうせ誰も来ないよ。今日平日だし」

「だからって」

まだ海は冷たい。それこそ凍えてしまうような冷たさだ。けれど沸騰しそうだった頭を冷やすにはこれくらいが丁度良かったのだ。

実際、今はだいたいぶマシな気分になった。

「そう言えば梨子先輩、制服の下にスク水仕込んで飛び込んだことあるんですって?」

「何でそれを!?もしかして……千一歌ーちゃん」

「あれ?話したことあったっけかな?あははは」

そんな風に梨子先輩と千歌先輩をからかう程度には。

「はいはい。それより何しにここに来たんだっけ?」

「練習そろそろしないとだね」

「練習の前に部活説明会の曲はどうするぞら?」

6人の曲として『夢で夜空を照らしたい』があるけれど、あれはみんなが協力してくれてこそ素晴らしい作品になった由来がある。みんなの力を借りられない場ではその魅力を十全には引き出せないだろう。

個人的にはあの大きなリボンの付いた柔らかな生地感の衣装はとても好きなのだけれど。

「実は曲、考えてたんだ」

「梨子ちゃん、いつの間に?」

「少しずつ準備してたの」

梨子先輩は珍しくイタズラっぽく笑うけれど、それはどこか寂しげで何となくだけれど空元気なのではないかとも思えた。

来る別れに備えて新曲を準備するというのはどんな気持ちだったのだろうか?そしてその気持ちに整理はついているのだろうか?

「今回はタイトルも勝手ながら考えてたの」

「それで、タイトルは?」

「Next SPARKLING!!」

それにどんな願いが込められているのか言われずともみんなが察したのか、誰も反対の意見は出てこなかった。

こうして部活説明会に向けて、基礎練習、新曲の作詞、歌唱とダンスの練習と短い時間ながら進めていくことになった。

「Next SPARKLING」

私もまた見付けなければならない。そう思い穹と顔を見合せると、

無言で頷き合うのであった。

「私達も練習に付き合っているのかな？」

「穹ちゃんずっと此方にいるつもりなの？」

「春休みだからね」

「いや、アンタんとこまだ終業式まだでしょうに」

「テヘペロ、とあざとく舌を出す穹にげんなりしながら私は借りたタオルで体を拭く。」

「星ちゃんたちのパフォーマンス見る機会も遠からずあるのかな？」

「函館の時はカバー曲だったしね。今度はジェミニのアカリだけのパフォーマンスを見たいね」

「オリジナルはまだ早いかな。でも試運転がてらカバー曲でもみんなに披露しましょうか？」

「体も拭き終え、タオルを肩に掛けてそう申し出るけれど、みんな揃って私の提案を無視して一言。」

「服着ろ」

「相変わらず人気はないのだけれど、と思いつつもみんなからそう言われるといい加減羞恥心も湧くというものだ。」

「私はタオルを体に巻き、下着が乾くのを待ちながらみんなの練習を見学することとなった。」

第七百七十四話

初春の気温とは言え、日が落ちる前には流石に下着も乾き、途中からみんなの基礎練習に付き合った。

やはりA q o u r sが6人しかないことにどこか違和感を拭えない様子はあったけれど、積み上げたものは嘘を吐かない。みんながスクールアイドルを始めた頃に比べれば圧倒的に体力もあるし、歌唱力もある。

穹もそれにしっかり着いていけているあたり流石だ。

「そろそろ日も暮れるしここら辺にしようか」

「はあ、くたくた」

「今日のご飯は少し多めにしようかな」

千歌先輩が終了の合図をすると私達は言われずとも自然にストレッチをしながら雑談を始めた。

お腹もいい具合に減っているので今日は美味しくご飯を食べられるだろうと献立を考えていると千歌先輩が思わぬ提案をしてきた。

「そうだ星ちゃん」

「なんです?」

「今日穹ちゃんのこと借りてもいいかな?」

「一週間のご利用ですか?」

「貴方いつから蔦屋に改名したのよ」

善子ちゃんの突っ込みはさておき最終的に決めるのは私ではなく穹だ。

どうする?と穹を見ると、丁度穹と千歌先輩がお互いに見つめあっていた。それは数秒の短い時間だったけれど、何かしらのやりとりが成立したのか穹は千歌先輩の提案に乗ることにしたらしい。

「じゃあ今晚はお世話になりますね、千歌さん」

「しっかりおもてなしさせてもらうね」

「期待してますよ」

「なら私は曜先輩と梨子先輩をお借りしていいですか?」

「そこでそういう流れ!」

「というか私達じゃなくて千歌ちゃんにそれ聞く!？」

呆れてというか慌ててというか、そんな様子で声をあげる二人に私
はしれつと言つてのける。

「だって2人とも千歌先輩の相方でしょ」

「いや、まあ」

「間違いじゃないけど、ねえ」

曜先輩と梨子先輩はお互いに顔を見合わせて照れ笑いする。

幼少の頃から千歌先輩の親友である曜先輩。

千歌先輩がスクールアイドルを始めようと志した矢先に引越して
きた梨子先輩。

2人は千歌先輩を中心に出来た間柄で、ある意味で三角関係とも呼
べるだろう。

一時は曜先輩が千歌先輩と梨子先輩の関係に悶々とするこも
あったけれど、今では2人ともとても意気投合している姿がしばしば
見受けられる。全然タイプの違う2人がこうして繋がれたのは千歌
先輩がいたからだけでなくスクールアイドルという活動を通して過
ごした時間がやはり重要だったのだろう。

「今日は私の相方が取られて寂しいのでたまには両手に花を囲って愛
でるのも悪くないかなど。いや、むしろ良い」

「いや、良くないでしょ」

「私もなんにも準備してなかったしパスかな」

なんて、2人とも断るあたり本当に以心伝心だ。

そんな本気でも冗談でもあるやり取りを重ねながら私達は帰路に
付き、それぞれ一人、また一人と解散していった。

穹が泊まるだろうという想定は崩れたため晩御飯のメニューも考
え直した。

一人分の、それも自分のためだけの食事などわりと適当でいいかと
食材の残りを思い出す。

基本的に汎用性の高い米、じゃがいも、ニンジン、ネギは自宅に切
らさずに置いている。この食材があればカレー、肉じゃが、シチュー
などちよつと食材を買い足すだけで作れるメニューがそれなりにあ

るためかなり重宝している。もつとも、カレーやシチューは仕様上多めに出来てしまうためあまり好んで作ってはいない。

「チャーハンとジャガイモの味噌汁かな」

大筋のメニューを決める頃には自宅に到着する。中に入ればしつかりと玄関をダブルロックするのはもう無意識でもできる。

本当はチェーンも掛けたいところだが、チェーンは取り外されてしまったため掛けられない。

私は靴と靴下を脱いで洗面所に向かい、残りの服も脱いで洗濯かごに放り込んだ。

自宅では裸足、そして部屋着で過ごすことがポリシーなのだ。

自分の部屋に向かうついでに洗濯機の底から私のものではない生乾きの洗濯物を鷲掴みにすると、私の使っていない部屋、つまり父親の部屋に生乾きの洗濯物を投棄した。洗濯してやってるんだから干すのくらい自分でやれという話だ。

私の生活などつまるところこんなものだ。

自宅の生活を回す。けれどそこに父親の分は勘定に含まれていない。もちろん父親の分を除外するほうが労力が掛かるのならばさっきの洗濯物のようについてに処理することもある。けれど、ついでの範囲に収まらないのならば絶対にやらない。

家庭内別居とは何も夫婦間だけとは限らないのだ。

コミュニケーション？それは無意味だ。言葉は散々投げ掛けた。けれどその結果がこれなのだならばはや語る言葉は私には無い。もちろん必要最低限の情報伝達には返答する。完全に無視するのも存外エネルギーが必要だからだ。

いずれは経済的に自立してとつとこの家から出ていくつもりだ。幸い沼津でならそれなりに顔も広くなっている。就職先にはそれほど困ることはないだろう。勿論、大学には行きたいのでそこは奨学金を頼ることになるだろうが。

「次の週末か」

穹にはああ言われたけれど、やはり頭に過る想いはあって、思わず私は暗い笑みを一人浮かべていた。

第七百七十五話

なんかというか人間目的があると時間の経過が早くなる。特にAqoursの面々は色々忙しかったのは側で見てもよく分かった。

月さんの根回しで部活説明会にスクールアイドル部の紹介時間を設けて貰えることになるのにも時間が掛かったし、それ以降の打ち合わせも時間を要した。そして打ち合わせの経過もあまり芳しくはなかった。照明や音響などの演出効果を見込めないことなど条件は良くないのだ。それでも6人となったAqoursでやっていくため、浦の星女学院のみんなのため今日、私達は静真高等学校に集まった。この学校は沼津駅から見て北側に位置し、浦の星女学院よりも遥かに交通の便もいい。

デザイン性のある作りで校門の正面に構えている入口は大きな口を開くように高い柱で天井を支えているような意匠だった。

「本当に制服でパフォーマンスするんですか？一応、衣装も持ってきましたけど」

「うん。元浦の星女学院の代表として出るんだもん。一目でそれと分かるようにしないと」

「それにスクールアイドルは学生の部活の延長線にあるってちゃんと分かって貰いたいしね」

「普通の高校生が力を合わせるとこんなにも輝ける。そう感じさせてくれたPVも学校の制服で踊ってたしね」

いつしか背中を追うことのなくなった存在を千歌先輩は再び話題に出したことが少し意外だった。けれど、千歌先輩のスクールアイドルのそのはじまり方が今に繋がったのなら、新たなはじまりもそれを意識したものであってもどこかへ繋がっていくだろう。

「あーあ。勿体ないな。折角綺麗な衣装なのに」

「また着られるよ。スクールアイドルを続けていく限り」

「そのためにも、新しい学校でしっかり私達の居場所を作るすら」

「そうだね」

一步先は静真高等学校の敷地だ。そこにいるのは私達には馴染みの薄い薄い紺色のブレザーに身を包む新入生と保護者達。

その中の幾人かは浦の星女学院の制服を着る私達のことを不思議そうに見ている者もいた。

「あ、あれはー！」

「どうしたの善子ちゃん？」

「あ、あれは能力者！私の前世を知る者！」

校門の壁に隠れる善子ちゃんが戦慄くように言ったのは要は中学時代の知り合いが居た、という事なのだろう。隠れるあたり余程中学時代を黒歴史に感じているらしい。

「やっぱり帰る」

「待ちなさい。学校とみんなのためよ」

それを言われると弱い、と善子ちゃんは渋々ながら引けた腰をどうにか戻した。

けれど、腰が引けているのは善子ちゃんだけじゃない。

ルビイちゃんも梨子先輩も、千歌先輩だってそうだ。

「行きましょう。この学校はもう他校じゃないんですから」

「はじめましてのご挨拶。しっかり決めないとだね」

「いや、穹は他校の生徒だからね」

「分かってる。気分の問題よ、気分の」

だからこういうときにこそ部外者の力を貸すときなのだ。

私と穹は軽い歩調で一步を踏み出し静真高等学校の敷地に跨いだ。

「新しい場所だつて楽しいことは見付けられる」

「それ、この一年の教訓？」

「教訓」

但し、助けられる人達との出会いがあればだけれど。きっとそんな人だっている筈だ。月さんがそうであるように、反対する保護者達に反論してくれた他の生徒や教職員のよう。

その人達とはまだ足並みを揃えられていないけれど、それならば今は私と穹が力になるだけの話だ。

「そうだね。なんとかなる。はじめよう」

「きみこごずら」

「そうだね。ガンバルビー！」

千歌先輩はそうみんなを鼓舞して一步を踏み出すとみんなもまたそれに連れられるように敷地内へと入った。

「いらっしやいみんな」

「月ちゃん」

程なくして案内人である月さんが校門まで私たちを迎えに来た。

「今日はよろしくね」

「うん。ありがとう力を貸してくれて」

「ううん。寧ろこれくらいしか力を貸せなくてごめんね。みんなみたいに学校全体で一丸になるくらい出来たらよかったんだけど」

月さんはきつと曜先輩から聞いていたのだろう。浦の星女学院で生徒達がどんなことをしていたのか、どれほど本気だったのかを。だからこそこうして力を貸してくれているのだろう。今はそれだけでもありがたい。

「折角ですし、本気だつてことを認めさせるだけじゃなくて新入生がスクールアイドル部に入りたいて思えるようにアピールしてきてください」

「はい。私スクールアイドル部に入りたいです」

「あんたは 音ノ木坂学院の生徒でしょうが」

生徒の多くから寄せられる好奇の視線。保護者の一部から寄せられる偏見の眼差し。それらをどうかはねのけてAqoursらしきを見せて欲しい。そう願ひ、私達は月さんの後に続いて校舎内へと入った。

ただ一つ、ふと思ったことがあった。

Aqoursらしきとは、新しいAqoursとはなんだろうと。

その疑問はAqoursではない私だからこそ分かっていないだけなのか、それとも今日に照準を合わせて練習していたAqours自身もまたそうなのか私には判断できなかった。そして、本番目前に混乱させるような質問する蛮勇もまた私にはなかった。

第七百七十六話

部活説明会の行われている講堂は少なくとも300人程は収容できる規模の広さがあり、学校行事ということも相まって満員御礼だった。とは言えライブ決勝の会場となった秋葉ドームとは比べるまでもない広さだ。

ただ私は広さの違い以上に感じたのは空気感が違うということだ。「みんな大丈夫？」

その空気感に当てられて舞台袖で私は思わずそう聞いてしまった。少し考えれば当然なのだが、ライブ決勝の時に来ていた人たちは心の底からスクールアイドルを見に来ている人達だ。ここに部活説明会を見に来ている人たちは心持ちが違うのだから空気感が違うのも当然と言えよう。

「思ったより6人って」

「少ないのかも」

そして帰ってきた答えはルビィちゃんや花丸ちゃんの弱々しい言葉だった。

Aqoursは6人になっても続けていく。その結論に至ったものの、やはりどこか違和感を拭えないの。それはメンバーではない私ですらそうなのだから当事者からすればより大きなものなのだろう。それにだ。今日は制服のままパフォーマンスをするのだ。衣装に身を包むときのような概念を羽織ることが出来ないのだ。

「浦の星のみんなのために」

「そうね」

「大丈夫、できるよ」

それでも前に、と気丈に振る舞う新三年生の三人はそうみんなを鼓舞する。

「じゃあ客席から見えますから」

それがどうにも空々しく聞こえてしまうのはきつと新三年生の三人ですら6人が少ないと感じているからなのだろう。

ステージでのAqoursの爆発力を信じるしか私には出来ない。

せめて一人でも多くAqoursを応援する人がいられるようにと穹を連れて私は客席側に移動する。

私達が客席側に移動した頃にはステージでは弓道部が型を披露していた。スクールアイドル部の紹介は次だ。

「ねえ星」

「何？」

「Aqours、大丈夫なの？」

「分からない。けど、やるしかない」

「殆んど絡むこと無かったからあまり分からないけど、Aqoursの三年生ってそんなに凄い人達だったの？」

「そうだね………。凄いよ。叶わないって思うくらい」

ダイヤさん、果南さん、鞠莉さん。ステージでのパフォーマンス力もさることながらそれぞれ思慮深さがあり、良い意味で真似できないと思わせる人間性がある。

「へえ。それで全員揃ったら無敵のあのパフォーマンスだったって訳ね」

穹が思い描いているのはきつとラブライブ決勝の時の“WATE R BLUE NEW WORLD”のことだろう。

そう。みんなが全力で想いをぶつけたあの時、Aqoursは本当に無敵のように思えた。けれど今、ぶつける先を見据えられているのか？全力を注いでいるのか？

「それでは、これよりこの春から本校と統合になる浦の星女学院スクールアイドル部、Aqoursによるライブを行いたいと思います」

弓道部の説明が終わり、次いで紹介されるのは我らがスクールアイドル部だ。

司会進行のアナウンスで会場が少しぎわつく。

そして好奇の視線がステージのみんなに注がれる。

私はただ拍手でしか彼女達の力になれず、連れて拍手してくれる人も疎らだった。

分かりやすいくらいにアウェーだ。

けど、A q o u r sはいつだって逆境を乗り越えてきたのだ。だから今回も、と思いたいけれど、不安が胸を締め付ける。

みんなの顔を見ても緊張感がこちらに伝わるようなぎこちない笑顔。安心なんてさせてくれない。

「みんな……」

頑張つて、と祈りながら新曲「Next SPARKLING!!」のパフォーマンスを見守る。

どこか懐かしさを覚えるようなストリングスのサウンドそれに合わせて踊るみんなの動きは流石はラブライブ優勝しただけあり滑らかだ。だけど合っていない。連携が微妙にずれているのが直ぐに分かってしまった。

なにより致命的に思えたのは歌唱だ。

とても素敵な歌詞なのにそこに実感が伴っていない、とても言うのか、とにかく身が入っていない、というか響いてこないのだ。

私の感覚的なものだから言語化しづらいのだが、その違和感や他の客席の人達も同じようで、ライブ後の一瞬の静寂の後に起きた疎らな拍手がそれを物語っていた。

そしてA q o u r sみんなの表情もまた心の底からの笑顔にはとてもではないけれど見えなかった。

「技術はあるのは確かなんだけど、なんだろう？足りない……あの時みたいな羽が見えない？」

ライブが終わり、穹はぶつぶつと呟いている。

気持ちちは分かる。私も同じだ。言語化出来ない違和感の正体。それが分からないことには次も同じことが起こりかねない。

私と穹はそそくさと座席を立ちみんなのところに向かう。

道中ヒソヒソと聴こえる声には落胆の声があったけれど、ごく少数で作ってるんでしょう？「凄いな」とか「スクールアイドルの曲って自分たちの救いだっただけ？」

「とりあえず」

「うん。仕切り直しだね」

「星。私達の活動もだよ」

「分かってる」

今回の発端となった大人にどうこう言う前に先ずは自分達から、と私は頭に冷や水を浴びせられたような気分で講堂を後にするのだった。

第七十七話

みんなの顔を見ればパフォーマンスの出来がどうだったのかなど
敢えて聞かなくても分かる。

私達は口数少なく静真高等学校を後にし、あげつち商店街の一角で
来ないことの分かつている朗報を待つのだった。

「失敗しちゃったね」

反省はしている。それは口に出したルビイちゃんだけじゃない。

「まさかあんな初歩的なミスするなんて」

どんなミスをしたのかも分かっている。もちろん梨子先輩以外に
もみんな大なり小なりミスはしていた。

「気が緩んでたって訳じゃないと思うけど」

「なんか落ち着かないすら。六人だど」

「……お姉ちゃん」

けれどその原因が余りにも大きくて、それと直面することとなつ
た今、どうすればいいのか分からなくなってしまった。そう言うよう
に曜先輩や花丸ちゃん、ルビイちゃんが溢した。

なんとなく予感があった。けれどそれを見ないふりをしていた間
題が噴出した結果だ。

卒業した三人の不在。それが何よりもA q o u r sの輝き曇らせ
ている。

居ないものはどうしようもないじゃないかとも思う。スクールア
イドルなのだから。けれど、それを言う資格は私にはない。穹に固執
していた私には。

「あ、いた。千歌ー」

「むっちゃん」

「どうだった?」

私達を見掛けて四五六トリオ先輩が駆け寄ってくる。

本当にこの先輩方は頼りになる。鞠莉さんの居ない浦の星女学院
の窓口役を買って出てくれた三人は静真高等学校で今回の結果を聴
くまであちらの学校に残っていてくれたのだ。

「うん。やっぱり今のまま暫く分校の形にしたいって」
「だよね」

歯に衣着せぬフラットなトーンで告げられた結果は案の定、という内容だった。

Aqoursの良さは見ているこちらを突き動かす力。それが発揮されなかったのは見えてよく分かっていた。

浦の星女学院との統合を反対していた人達はどんな顔でそれを見ていたのだろうか？あの場所にも果たしていたのだろうか？そう考えると居ないだろうと思えて仕方がない。一生懸命やっている生徒のことを見ている人は余計な心配などしないだろうからだ。今回の問題は大方頭でっかちで実状すら録に確認していない者が騒いでいるだけとしか思えない。実際あくまでも聴こえた範囲だが、Aqoursのパフォーマンス後の会場では落胆の声はあつたけれど嘲笑は聴こえなかった。

「ごめんなさい私達がちゃんとやっていたら」

「ううん。千歌達が悪いんじゃない」

そう。悪いのはいい加減なことを言っただけに介入する大人だ。私達も、静真高等学校の生徒も悪くなんて無いのだ。

向かっ腹が立つてしかたないけれど、現状あまり力になれていない私にはその資格すらないのかもしれない。そんな思いは四五六トリオ先輩も同じようで、

「寧ろ悪いのは私達。廃校の時も今回も全部千歌達に頼りつきりです。実際、千歌達以上に誇れるような部活してきたところないし」

「それは人数が少なくてみんな兼部してたからだよ」

「水泳部だったそうだし」

「でも、だからこそ私達がちゃんとやらなきゃいけないかったんだよ」

水泳をやりたい人が居て、ハンドボールをやりたい人が居て、陸上をやりたい人が居て、でも誰かが一つに専念しては各部活が成り立たなくなつて、誰も何も出来なくて……そんなのが嫌だから、自分の好きと同じくらい誰かの好きが大切だったから、みんながみんなのために力を尽くして部活動を守っていたのだ。

みんながみんなのために力になってくれる。浦の星女学院はそんな素敵な学校だったのだ。それを卑下する必要なんて無い。

「私から見たらですけど、みんなちゃんとし過ぎなくらいですよ。こんな同級生とか先輩がうちの学校に果たしているのやら」

穹も私と同意なようで、やれやれ、と大袈裟な調子でフォローを入れた。

「穹ちゃんが知らないだけで、きっと素敵な人が居るんじゃないかな？」

「無知を恥じる必要はないわ。これから知ればよいのだから」

「そうだね。先ずは知らないとだよね」

「それに、こつちのことも知ってもらわないとずら」

そう。私達を知っているみんなの良いところを知ってもらわなければならぬ。それをせずして分かって貰うなんて都合が良すぎなのだろう。

「なら。どうするかまた考えないとね」

「……よーし」

考えが一旦前向きにシフトしたところで四五六トリオが一人、むっ先輩が和菓子屋に入ると、今川焼を人数分買ってくれた。

「はい」

「ありが、とう」

「浦の星のみんな、分かっているから」

「古い校舎も悪くないって」

「寧ろ、私達つぼくてちよつと良いかなー、なんて」

「ホントホント」

「私達らしいよね」

「なんて、冗談はさておいて。急がなくていいからさ、考えが纏まったら聞かせてね」

「今度はみんなで」

「浦の星女学院の良いところ、知ってもらおう」

そう強くエールを送ってくれた四五六トリオの顔は誰が見てもこう言うだろう。輝いていると。

この三人にはきつと自分達なりにあるのだろう。輝くために心に決めている。『これ』というものが。

こんな人達が浦の星女学院には沢山居て、きつと静真高等学校のみなんとも上手くやっていけるはずだ。だから何としても分校なんて取り下げて貰って、本当の意味で統合しなくては。そう思うと思わずクスリと笑ってしまった。

「星ちゃん、今の笑うところ？」

むつ先輩が呆れたようにそう言ったので私は慌てて弁解した。

「いや、そうじゃなくて・・・数ヶ月前までは廃校阻止って全力を出していたのに今は統合だーって、なんだか不思議だなあって」

「確かに、ホントだ」

「そう言われてみれば」

「あの時の気持ちが無くなった訳じゃないのにね」

梨子先輩も曜先輩も遠い昔のことを思い出したみたいになそう漏らした。

「あの時の気持ち、か・・・」

曜先輩の漏らした言葉を千歌先輩が考え込みながら反芻しているのがやけに記憶に残った。

第七十八話

暫く分校のまま、とのお達しを受けた後、その日は各々心を整理しようということとで解散の流れとなり、私は穹と共に食材を買い込んでから自宅へと帰宅した。

「どうするべきだと思う?」

「浦の星女学院はこれまでAquoursを旗頭に学校全体でステージを作ってきた。だからライブしかないでしょ」

「夢で夜空を照らしたい」ではスカイランタンを飛ばし、「MIRAI TICKET」ではみんなで10を叫び、「君のこころは輝いてるかい?」では学校の全員で部活説明会を盛り上げた。

浦の星女学院の良いところを見せるならまさにそんな姿だと思うし、ライブならばノウハウもある。きっと実現できる。

「でもそれだとライブの主役のAquoursのパフォーマンスだってかなり注目浴びるよ?あの様子じゃあ……」

穹の言うことも分かる。新しいAquours、6人のAquours、それを始められていないのが今の現状なのだろう。

「それと、学校のことともそうだと、折角なんだしライブやるなら私達も参加しちゃおう?」

「それまでずっとこっちに居るつもり?」

「いや、一回帰ろうかなって」

「……そっか」

冗談めかして言ってみたけれどやはりずっとは居られない。あまりまだ。いくら春休みとはいえ穹にだって自分の生活があるのだ。

ならば穹が帰る前に、今後のことについて話をしなければならぬ。ただどうすれば私達が一緒に活動していけるのか?その現実的な手段が私には未だ思い付かない。

「明日の夜には一度帰るよ」

「なら今日は一旦最後の晚餐だ。気合い入れなきや」

一人で自分の分だけの食事を作るのは只の作業だけれど誰かと一緒に誰かのために作る料理は楽しい。それが終わりを迎えるのは名

残惜しい。

何を作るかは帰宅前に穹と決めて食材は必要な分だけ買っただけある。きつとその時に言わなかったのは余計な負担を掛けたくなかったのだろう。だから今更豪華に、とはいかないのでせめて手抜きはしないようにしようと思いに決めてエプロンを付けた。

「星さあ」

「ん？」

キッチンに二人で入りとんとんと食材を並んで切り分けていると、何の気なしに穹が訊ねてきた。

「父親のこと、どうするの？」

そのワードを聞いた瞬間、私は胸の鼓動が大きく跳ねたのを感じた。けれど瞬間沸騰することだけは抑えて、努めて冷静に私は穹に返答する。

「どうするも何も、どうもしないよ」

「流石にここ数日の様子見て分かったけど、あからさまにおかしいよアンタ」

「何がおかしいかな？年頃の女子高生だったらこんなものじゃない？」

「アンタが父親に対してしてる道端の石ころみたいな扱い。流石に度を越えてる」

ああ、と私は感心した。穹は流石によく見ていると。

ここ数日、穹が家に泊まる関係上、どうしても父親との接触は避けられない状況だった。だけど、私が無視に近い態度をしようとも、冷たくあしらおうともそれは思春期の女子特有の、友人前だから気恥ずかしさがあったと流せるものと考えていた。

だけど穹は察した。部活説明会の件で父親と和解していないことが発覚してからアンテナを立てていたのだろう。

「アンタいいの？分かってもらえなくて」

「分かる気が向こうに無いからね」

議論は既に一年前に尽くした。そしてそれが却下された今、私は父親に対して諦めた。

言葉を交わすことに意味はない。気持ちをぶつけることに意味はないと。

「アンタだって分かってとうとする気がないでしょ」

穹は呆れたように更に言葉を続ける。

「そうやって自分が正しいと思うことを貫く。それは一見正しいけど、それが周囲の意見を聞かずにただ頑なになっているだけなのなら、それは分校騒ぎを起こしている連中と同じだよ」

あんな連中と同じにされるのはちよつと穹だからと言え私も我慢ならない。言葉に怒気が宿るのも仕方ない。

「だったら？」

「アンタが分校騒ぎで怒り心頭になったでしょ。それと同じ気分になるってものよ」

包丁捌きは穏やかだし口調も丁寧だけれど、そこに籠った気持ちは激しかった。けれど私だって冷静ではいられない。

分かっている。凶星だからだと言うことは。けれど、どうしてもだ。どうしても許せないことだ。どうしてある。

「私はそんな星とは組めない」

「……………」

思いがけないその言葉は私を呆然とさせた。

その後は穹とどんな会話をしたのかも分からない。料理は淡々と一緒に作ったし穹と食卓も囲った。でも料理がどんな味をしていたのかも分からない。ただ延々と穹の言葉が私の頭の中をぐるぐるぐるぐる回っていた。

私と穹との関係に何故家庭の事情を持ち出されなければならないのだろうか？

分からない。それがどのような意味を持つのか、どうして欲しいのか、私には全然分からない。

食後、私は夜風に当たりたいとハーモニカ片手にこっそり家を出たけれど、どこに行きたいのか定まらず玄関の前で暫くぼけっと突っ立ってしまった。

だからだろう。仕事が終わった父親と出くわしてしまったのも。

「ただいま星。なんでこんなところに？」

性懲りもなく私に声を掛ける父親を前に私は沸き上がる苛立ちを抑えられずに無言で家の中に戻った。

背中越しに父親のため息が聞こえてくるけれどため息を吐きたいのはこっちの方だ。

解消されない苛立ちを抱えていたからか私はこの夜はあまり眠れなかった。

第七十九話

翌朝はなんとも言えない気まずさを抱えながらも努めて普通に穹と接して朝食の時間を過ごした。なんとなく昨日の晩御飯同様に味気なく感じてしまうことに自己嫌悪を催しながら兎に角腹に物を入れた。

今日はまた東郷海水浴場でA q o u r sのみんなと集合して体を動かす予定なのだ。

「星」

「何?」

「すぐに答えを出せとは言わない」

「うん」

「でも考えることを、感じることを止めないで」

「答えを出すことは考えること、感じることの終点なんじゃないの?」

「あれ!?確かに」

なんとなく良いことを言おうとしていた穹の慌てふためく様子を見ると思わず私の口からため息が溢れた。

穹は頭が良い。けれどその頭にある答えを人に分かるように伝えるのは上手いとは決して言えない。

「確認するけど私と父親のことって穹に関係ある?」

「んー・・・正確に言うなら楽曲制作に関係するかな」

「は?」

「ほら、分かってない」

穹はそう勝ち逃げするように言ってバッグを豪快に肩から掛けると「ほら、行くよ」と急かすように玄関に駆け出していった。

一連のやりとりに穹からは気まずさを感じなかった。きつと穹からすればどの話も必要なことで、本当に私のためを思っているからこそなのだろう。

「意味が分からないよ、穹」

心意が全く分からず混乱する私を他所に、穹はとつと外へと飛び

出してしまう。

慌てて私もバッグを掴んで家から飛び出すと、まだ初春の朝だと言うのにもやっとした熱さが押し寄せる。ラブライブ決勝の頃はまだ朝は寒かったというのに嫌でも時の経過を感じさせる。

「遅い。時間は有限だよ。明日には私はもう埼玉なんだからね?」

「分かってる」

穹は相変わらず掴み所がない。

私は穹と並んでバス停まで歩きながら話を続ける。けれどそこには脈絡が無く、ただただ穹からの質問攻めに終始した。

浦の星女学院を受験しに来た時の感想、仲の良い同級生のこと、この一年弱の個人的音楽チャート、などなどまだまだ話したりないことは山ほどあるのだ。一年の空白を埋めるように話をしているとやっぱりお互いに知らないこともあったりして、改めて時間の経過を感じた。

そして移動の時間だけでは空白を埋めるには足りず気が付けば海水浴場まで辿り着いていた。

「どうも私達が一番は最後みたいね」

砂浜ではみんなが既に準備運動を始めていた。

広げられているビニールシートの上にバッグを放り投げ、挨拶もそこそこに私達もそれに加わる。

「揃ったね」

「実はまだなんだけど練習始めようか」

「まだ? どういうこと?」

「昨日、聖良さんに連絡したらこっちに来てくれるって言って」

「Saint Snowさん来るの!」

千歌先輩の発言に思いがけずみんな喜びの声をあげる。

ラブライブで共に競った好敵手。そしてスクールアイドルとして同じステージでパフォーマンスをした同志なのだ。歓迎しない訳がない。

「でも何でまた?」

「ただ会いたいから、ってだけじゃないでしょ?」

「うん。今の私達のパフォーマンスを見てもらいたくて」

曜先輩と梨子先輩の指摘に千歌先輩は少し申し訳なさそうにして答えた。勝手に話を進めてしまったことに後ろめたさがあるのだろう。

「練習はしてる。スクールアイドルを続ける気持ちもある。でも足りない」

「だからそれが何なのかを見つけないら？」

「第三者の、しかもこれ以上信頼感のある視点は他に思い付かないわね」

善子ちゃんの言うことは最もだ。私の視点ではもうAquoursに寄り過ぎているし、穹はパフォーマーとしてはともかくスクールアイドルという視点ではない。

「でもわざわざこっちに呼び出すなんて、理亞ちゃん怒ってないかな？」

「その心配には及びませんよ」

ルビイちゃんの心配を遮ったのはいつの間にも到着したのかSain t Snowの鹿角聖良さんだった。

到着時間を鑑みるにどうやら私達の次のバスだったらしい。Sain t Snowの二人がお正月以来、沼津の砂浜にやって来た。

そういえば聖良さんの卒業旅行で東京巡りしていたらしいことは知っていたけれど、随分早い到着だ。東京からなら始発レベルだ。

「理亞も凄く来たがってましたから」

「姉さま!?!」

「へえ」

相変わらず素直じゃないところがあるけれど、来たがっていたと思ってくれていたことがこちらとしては素直に嬉しい。

私達は思わずにやけてしまうのを理亞ちゃんは頬を膨らませて、けれど否定はせずに唸っていた。

「じゃあ早速ですけど見てもらえますか？今の私達のパフォーマンスを」

「はい。それと、折角来たんですしこれも何かの巡り合わせ」

「はい？」

「ジェミニのアカリのパフォーマンスも見せて貰えますか？」

聖良さんからの提案に私も穹も思わず顔を見合わせる。

そう言えば折角二人が揃っているのに一度もパフォーマンスを披露していないのだ。

穹はニヤリと不敵に笑って問い掛けてくる。

「だつてさ。どうする、星？」

私も連れて思わず笑みが溢れる。

「こんなにオーディエンスがいるんだし、やるしかないでしょ」

OK、と芝居がかった言い方で穹はギターケースを開け、私はポケットからハーモニカを取り出す。

「リクエストは何かありますか？」

「渾身の一曲を」

「ならー」

「うん。それでは聴いてくださいー」 Brand New My World」

それはライブ決勝の日、私が穹に伝えた渾身の一曲だ。前はAoursに力を借りて仮歌を入れてもらっていたけれど、今回は完全にジェミニのアカリ仕様。

私達はここ数日で慣れ親しんだ熱い砂の絨毯の上で雲のように軽く跳ね回った。

第百八十話

沼津まで来てくれたSaint Snowに向けて、私達ジエミニのアカリ、そしてAoursと続けてパフォーマンスをした。

聖良さんも、理亞ちゃんも真剣に見てくれたけれど、どこかその表情は固かった。

「なるほど」

「どうですか？」

「はつきり言いますよ。そのために私達を呼んだんでしようし」

聖良さんはそう物怖じせずに宣言する。

そこにあるのはスクールアイドル活動に対する真摯さ、そして有識者として任命されたことに対する返礼だった。

その口調は内容とは裏腹に穏やかな海のように、けれど確実に波打つ、そんな響きだった。

「まずはジエミニのアカリですが、二人ともかつてのパフォーマンスと同等と言えるでしょう」

「同等」

「けれどそれは裏を返せば先に進めていないことに他なりません。個々のパフォーマンスのレベルは上達しているでしょうが、それが活かせていないように感じました」

確かにそれは言えているかもしれない。

曲は確かに最新のものだ。けれど、まだまだ合わせてパフォーマンスを出来ているのはかつてのレベルに落とし込んでいるからだ。

事実、まだ穹は私と離れ離れになってから習得した技法、スラム奏法をパフォーマンスには取り入れていない。

「貴方達の強みは奇抜さとテクニクの融合。けれど、今のお二人は全開のパフォーマンスではないと、そう思いました」

完全に凶星だった。

聖良さんの前でパフォーマンスをしたのは一度きり。それ以外の情報は公開しているPVしかないけれど、しっかりとそれらも把握した上での評価だと分かる。

弱気になることは誰だってある。もともと気の弱い人ならば声にだって出してしまうことだってある。だけどルビィちゃんのその弱気な姿は理亞ちゃんには到底受け入れられなかったのだろう。

自分を元氣付けてくれたルビィちゃん。自分と同じくらいスクールアイドルが好きなのルビィちゃん。二つ年上の同じスクールアイドルをしていた姉を持つ気持ちが分かるルビィちゃん。そんなルビィちゃんが弱気になっていることに怒りさえ感じているかのような語気だった。

「理亞ちゃん……」

「姉さま達はもう……居ないの!」

そういつて理亞ちゃんは砂浜を走り去ってしまう。

「すみません」

「理亞ちゃん、新しいスクールアイドル始めたんですか?」

「そのつもりはあるみたいですけど、なかなか。新しく一緒に始めようって何人かは集まったみたいですが、あんまりうまくいつてないよ
うで」

「あの性格だもんね」

「人のこと言えるずらか?」

「うっさいわい!」

聖良さんの言葉で先ほどルビィちゃんに向けた言葉の意味、その語気の強さの意味が分かった。

あれは理亞ちゃん自信にも向かっている言葉なのだ。

ふわふわして定まっていなくて感じと理亞ちゃんは言っていた。全部自分でやらなきゃとも言っていた。その重みは本当に1人で抱えなければならぬのか?

「理亞ちゃん……」

少なくともそうではないと私は思う。

遠ざかる理亞ちゃんの背中を追いかける人が居る。

かつてはその遠かった背中も今では追い付いて一緒に並んで走れるくらいになった戦友が居るのだ。

「ねえ穹」

「なにになに?」

「どうしよつか、私達」

「んー……. そうだなあ」

穹に問い掛けたものの答えは轟音と暴風に遮られた。

ご都合主義の自然風ではない。人工的で人為的な、ヘリコプターの急な飛来によるものだ。

派手なピンク色の躯体には見覚えがある。

「ま、ま、ま、鞠莉ちゃんだ!」

「ずら!」

「鞠莉、じゃない?」

それは小原家の所有するヘリコプター。けれど、そこから顔を覗かせたのは鞠莉さんではなかった。

「my daughterがいつもお世話になっております、小原鞠莉の母、鞠莉's motherです」

派手だけど艶のあるロングの金髪は成る程、確かに鞠莉さんの母親らしい出で立ちだった。

「みなさんに、鞠莉についての大切な話があります」

「大切な?」

「話?」

「と言うわけで淡島まで来てくださーい」

「へ?」

そう言葉を残し飛び去ってしまった。

鞠莉さんの名前を出されては無視することもできず、私達は全会一致のもと淡島へと向かうことになる。

その際に、ふらりと練習を覗きにきた月さんと合流出たのは不幸中の幸いだった。

第百八十一話

唐突に過ぎる鞠莉☒s motherの来訪により私達は練習を中断し、Saint Snowの2人と月さんと連れ立ってあわしまマリンパークに併設されているホテル・オハラにやってきた。

来いと言っただけありホテル・オハラから送迎バスやフェリーの手配など全てされており、海岸から出て間もなく私達は時間も労力も掛けずにたどり着くことが出来た。流石はエリートなだけあり手回しはお手の物といったところなのだろう。

「何の話何だろう?」

「大切になって言ってたね」

「まさか、留学止めるとか!」

「それならきつと鞠莉ちゃんから直接連絡が来るすら」

なんて話ながらホテルの従業員に案内され、ホテル内にある音楽ホール「オデッセイ」に通された。

「はあ、素敵なホールね」

「一曲どうですか、梨子さん」

「A q o u r sの作曲を担うピアニストの腕、確かに興味あるかも」

高い丸天井はさそかし音の響きがよさそうだ。

太い柱に支えられたその衣装は古代ローマを彷彿とさせ、良い意味で雰囲気飲まれやすいように出来ている。

ステージのピアノを弾いたらどんな音が聴こえるのか興味は勿論ある。

試しに手をパンツ、と叩くと音が反響して返ってくるのが分かる。

「凄いね。ルビィちゃんもやってみれば?」

「星ちゃん、もしてして子供扱いしてー」

ルビィちゃんが言い終わる前にパンツと音がしたと思うとどうやら理亜ちゃんが手を叩いたらしい。

理亜ちゃんはルビィちゃんの言いかけたことばが耳に入っていたらしく耳を赤らめていた。

「ほ、ほら。全然子供じゃなくてもやるから」

「それフォローになつてないんじゃないかな？」

「あ・か・りい」

「馬鹿にしてないって！ほんと、ホントに」

なんてホールの雰囲気をぶち壊しなから通されるまま用意された椅子に座つて駄弁つていると、カツカツと甲高いヒールの音が響き、ド派手な真っ赤なトレンチコートが嫌味にならないセレブ美人である鞠莉さんの母親がホールのステージに姿を表した。

鞠莉ママさんは一礼するとピアノの前に腰かけ、滑らかな手付きで鍵盤を叩いた。

クラシックの知識は音楽の教科書で習つたにわか知識くらいしかないため、何の曲かは分からない。けれど、梨子先輩が羨望の目で見ているところを見るとそれなりに有名または難易度の高い楽曲を上手に弾いているのだろうことは分かる。

分からないのはこれがなんのパフォーマンスなのだろうか、ということだ。

鞠莉さんの母親だけあつて興が乗つたというだけの単なるパフォーマンスの可能性もあるし、そう見せかけて自分のペースに引き込む演出なのかもしれない。

ただ、弾き終わるまで聴いて演奏そのものはとても素敵なものだったというのは本音から言える。

「みなさんのことはマリーからよく聞かされてました。学校のこと、本当に、ありがとうございますーす」

拍手もそこそこに応じ、鞠莉ママさんは千歌先輩を特に見詰めて片言ながらそう言い頭を下げた。

「いえ、そんな」

「そんなみなさんにお願ひがあるのでーす」

「お願ひ？」

「実は卒業旅行に出た鞠莉達と連絡が取れないのでーす」
「連絡が取れない!？」

日常を離れた土地で音信不通とは穏やかではない。けれど、金持ちのしかもラブライブ優勝校の美少女が音信不通ならとつくにニュー

スで取り上げられてもおかしくないとと思うし、警察に捜索依頼を出すだろうとも思う。

「そうなのでーす。ですので」

「ですの？」

「貴方達ならきつと鞠莉達を見つけられる、はーずー」

異国の血故なのかいちいち反応が大袈裟な鞠莉ママさんがそう言っただけに両手を掲げると、あろうことか大量のコインが私達の頭上から降ってきた。それはもう、体が半分埋まるほどの量が、

「まさか、三人を見付けたらこのお金を!？」

「はあーむ。チョコずら」

「はい。渡航費用は出すというパフォーマンスでーす」

「ですよー」

「しかし、本当に見付けてくれたらそれ相応のお礼はいたしますので、是非」

どうにもキナ臭いことこの上ない。

なんとなく、そう、はじめて鞠莉さんとやり取りした時のように利用されているようなそんな気がする。

やっぱり家族なんだろうなと、見た目の印象以上に思った。

「ふ、任せて。この堕天使ヨハネのヨハネ・アイにかかれば三人を見付けることなど造作もないこと」

「お金に目が眩んだずらか？」

「何言ってるの。次のライブの資金に決まってるでしょ」

「ライブ！そうだよ。ルビィ達ライブがあるんだよ」

「でも行方不明なんだよね？心配は心配かも」

「どうする」

「うーん」

起きた事件にしては対応が余りにも楽観的過ぎる。だけど嘘を言っただけで私達に鞠莉さん達を探させようとする理由が分からない。

ならーーーーー

「行ってきた方がいいと思います。先ほどみなさんの練習を見て思ったんです。理由はどうあれ一度卒業する三人と話をした方が良いつ

て」

そう聖良さんの言うように行ってきた方が良いだろう。

利用されるにしても渡航費用を出してくれるのは大いに得だ。私達を鞠莉さん達と接触させることに狙いがあるとしても私達が見付けられなければ問題は無い。

目的はどうあれ狙いどころさえ抑えておけばただ利用されるだけにはならない。

「でも」

「自分達で新しい一步を踏み出す為に今までをきちんと振り返ることは悪いことでは無いと思いますよ」

まあ、利用される以前に、聖良さんの言う意味としても賛成だ。

先に進むにはもう一度Aqoursが9人揃わなければならないのだと思う。

「うん」

「千歌ちゃん」

「聖良さんの言う通りだと思う」

「ライブの練習はどこだって出来るし、これまでだってやってこれたじゃん」

「大丈夫。出来るよ」

「分かった。行こっか」

「星」

「分かっている。私達も行くよ」

そして私達のこれからを考える上でAqoursの見せる景色、出した結論はきつと参考になる。これまでそうだったのだから。

そして、そんなAqoursと一緒に居たいと思うし、穹に見せたいのだ。

「oh。ベリーベリーセンキューです」

「で、鞠莉ちゃん達三人はどこに卒業旅行に行ったんですか？」

私達は少し安易に考えていた。

千歌先輩の言葉でそう言えばどこだ、と思った。

「北の試練の地？南の秘境？」

「それが」

「それが？」

ぼんやりと温泉に入りたいな、なんて思ったのが馬鹿みたいだ。完全に意図を見逃していたのだ。鞠莉ママさんは「渡航」と言ったのだ。

ならばそれが意味することは当然ながら国内にあらず。

「三人が旅しているのは私達小原家の先祖が暮らした地」

「それって」

「もしかして」

「ここでーす」

「ええええええええ!?!」

どでかくプロジェクターで写し出された地図にはヨーロッパの海に面した国、イタリアが映し出されていたのだった。

第百八十二話

イタリア。それは日本から海を越え、山を越え、そのさらに先にある西欧諸国の一つ。目も眩む程に距離の離れた場所だ。

ヨーロッパの内海こと地中海に面する細長い国、と言われればなんと無く世界地図のどの辺りか思い浮かぶだろう。

けれど、知識では知っていたとしても当然ながら私も、穹も、現Aoursのみんなも行ったことは無い。そんな遥か彼方の世界。そこでの日常が私達の非日常となる反転世界だ。

「それにしても」

「うん。パスポート作って良かったね」

そんな異世界だから行く理由とは裏腹についつい浮かれてしまうのも致し方ないというものだろう。

まあ、鞠莉さん達と連絡が取れない、なんて眉唾な話だとなんとなくみんなも察しているのだろう。

「ラブライブに優勝したら海外に行けるかも、なんて千歌ちゃんと言ったときは何で？って思ったけど」

「結果オーライだったずら」

そして浮かれる理由は全員無事に渡航できる条件が揃っていたことだ。

通常、パスポートを発行すると早くても一週間は要する。生憎とそこまでの猶予はなく、パスポートを所持していなければお留守番確定という状況だったのだが、千歌先輩の勇み足が上手く状況と噛み合った。

「だって、私もスクールアイドルとして世界に出でパフォーマンスをしたかったんだもん」

きつと千歌先輩はμ'sという前例を考えていたのだろう。

μ'sはラブライブ優勝後、スクールアイドルのPRのためにアメリカに渡航してパフォーマンスをした。それはラブライブ運営からの依頼で、渡航費用は経費で落ちるという垂涎ものの待遇だった。

もちろん、スクールアイドルを流行らせるか廃らせるかの過渡期に

あつてのイメージ戦略のために大盤振る舞いをしたのであつて、以降はそんな待遇のスクールアイドルは存在しないのだが。

「遊びに行く訳じゃないのよ千歌ちゃん」

「分かってるよ。鞠莉ちゃんたちに先ずは会う」

「うゆ。それにしてもお姉ちゃん達、なんで音信不通になったんだらう?」

「案外あのお母さんと喧嘩してんのかもね」

「見ての通りお転婆娘って感じだもんね」

家庭内の話に巻き込まれるのは些か不愉快ではるけれど、まだそうと決まった訳でもない。私は余計なことは考えずに海外に思いを馳せた。

「じゃあ、穹は今日予定通り一度帰らないとね。何がなんでも」

「流石にパスポートは持ち歩いてないからね。荷物は全部持つてるし、このまま駅まで行くよ」

「そっか」

「何?寂しいの?函館と沼津に比べれば埼玉と沼津なんてご近所だしよ」

やはりバイクという足があると活動範囲が広がるみたいで思わず苦笑する。

「理亞ちゃん達もイタリア行く?」

折角なのだからと私は軽い調子でそう聞いてみた。勝手に言っているけれど鞠莉ママさんのあの様子なら頼めば手配してくれそうだし。

「私達は流石にパスポートを持っていないので」

「それに、忘れてないでしょうね?貴方たちは帰ってきたらライブあるんだからね。練習サボらないでよ」

なんてストイックな姿勢を見せるけれど、理亞ちゃんはこれからどうするのだろうか?

たった一人のスクールアイドル。それも引っ込み思案の理亞ちゃんは今後どうしていくのだろうか?

仲間が集まらないならいつそソロとしてやっていくのも手段の一

つだけけれど、それは理亞ちゃんが目指すスクールアイドル像とはきつと違う。

「理亞ちゃんはどうするの?」

「続けるよ、スクールアイドル。それでSaint Snowに負けないグループを作る」

相変わらず意識が高い。けれど、どうしてだろう?それだけではない、こう、頑なな印象を受けてしまうのは。まるでそうしなければいけないのだと言いかせるみたい、そんな印象を。

「星だつて一人で頑張つて今を掴んだんでしょ?なら私だつて」

「私は、いや、なんでもない」

一人ではなかった。今だから分かる。Aqoursのみんなが助けてくれたから、私は一人ではなかった。

けれどそれを今の理亞ちゃんに言つてどうする?函館に戻れば物理的に一人になってしまう理亞ちゃんに言つても嫌味にしか聞こえないのではないか?そう思うと言葉を続けることは出来なかった。

「みんな再スタートをきる前で立ち止まつてる。変な話、それに安心しちやつた自分が嫌になる」

「それで浜辺を駆け出しちやつた?」

「茶化さないで。あれはそういう年頃ろなのよ。ともかく、私はそんな自分を納得させるためにもスクールアイドルを続けなくちやいけないの」

「そっか。なら新しいグループが出来たら函館に行こうかな」

「良いわ。歓迎するから」

「とか言つて。実際の歓迎は聖良さんがしてくれそうな予感しかしないんだけどね」

「星!」

なんてみんなでじやれているとあつという間にバスは沼津駅に着いてしまった。

「じゃあ私達はこれで。イタリアで何かしらの発見があることを祈っています」

「はい。必ず、2人が驚くようなスクールアイドルとして帰つてきま

す」

「じゃ、私も一旦帰るね。次は成田空港で合流、かな？」

「それが効率的だね」

「言った通り、少しは家族のこと、考えなさいよ」

「・・・・・・」

「ったく」

やれやれ、と肩をくすめると穹は手をひらひらと振り、Saint Snowの2人と連れだって沼津駅の改札を潜っていった。

「それじゃあ、各員、イタリア行き準備をして明日ここに再集合。それじゃあ、解散」

みんな悩みを抱えて、もがいて、答えを探している。でもまさか海外までそれを探しに行くとは私も思わなかった。

第百八十三話

急遽決定したイタリア旅行の準備をしつつ私は穹から言われたことを想い、頭を悩ませていた。

父親との確執についてはもはや後には引けない。今更話などしようもないし、そもそもどんな顔して話せというのだ？

「分からないよ、穹……」

なったことのない親の気持ちなど、私には分からない。それこそ人の親になんてなりたいたすら思わないし、全く理解できない。

だから理論立てて考えるしかないのだけれど、私はある程度の分別はつくタイプだとは自負しているし、高校生でも独り暮らししている自信はあった。だから音ノ木坂学院に通うために独り暮らしというのも決して現実性が無い訳ではなかった筈だ。

だというのに父親の転勤に付き合わされたことを私は未だに根に持っている。合理的な理由がなければ納得なんて出来ない。

「ただいま」

悶々となりながらリビングの引き出しからパスポートやらなにやら旅行に必要なものを探していると、父親が帰宅した。

返事など絶対にしないのに相変わらず「ただいま」と言つて帰宅する父親に私は辟易した。

声を聞くだけでイライラしてくるのは私が父親の事を意識していることに他ならない。

何故意識するのか？道端の石ころのような存在であれば意識にも止まらない、そんな存在に追いやりたいのに、何故感情はこうも向いてしまうのか？

和解したいから？いや、有り得ない。

なら私が父親に対して残る感情はもう恨みしかない筈だ。

私は纏まらない考えに舌打ちして、そう言えばと父親に対して久しぶりに自分から話題を提供しようと口を開こうとして、やっぱりやめた。

その変わりメモに一筆入れてテーブルの上に伝言を残した。

「旅行行くので搜索願いとかが間違えて出さないように」

一応、親権がある以上、社会的な立ち位置として父親は父親。余計なことをされる可能性は潰しておかなければならない。

本当に、家族なんてものはめんどくさい。

私はそう思いながら旅行鞆の中にパスポートを放り投げて自室へと引き上げた。

廊下で父親とすれ違った際、あからさまに黙りを決め込む私に、父親は悲しそうな顔をするけれど、それが余計に私を苛つかせた。

先に人の感情を無視したのは向こうだ。それがどの面下げてあんな顔をするのだと憤りを覚える。

「ちっ……」

部屋に戻るとどさつと荷物を放り投げてベッドに横になる。

枕元にあるスマホを見ると着信履歴が残っていて、それは千歌先輩からだった。

思わず飛び起きて私は千歌先輩に折り返し電話をするとスリーコールで応答があった。

「星ちゃん？今大丈夫？」

「大丈夫です。千歌先輩も平気ですか？」

「うん。平気だよ」

電話に出てくれたことに私はホッと一息。だけど、一体どんな要件なのだろう？

「それでどうしたんです？私に電話なんて珍しい」

「うん。こないだ穹ちゃんを借りたでしょ。その時の話をしようかなって」

「はい」

「ずっと気になってた事があったんだ。星ちゃんはお父さんと仲直りしたのかなって」

「ああ」

それでか、と納得した。成り行きの発覚した部分もあるけれど、穹がやけに私の家庭の事情に釘を刺してきたこと。その発端はこんなところにあったのだ。

思えば私の事を話したとき、解決していない問題は2つあった。1つは穹に嘘を吐いたまま放置状態になっていること。もう1つは家族との、主に父親との確執だ。

私が穹のことを一番に考えていたからそれほど父親のことは気にされていなかったと思っていたのだけれど、流石は千歌先輩。よく人の事を見ている。

「仲直りは無理ですよ」

「どうして?」

「許せないから」

「そっか」

千歌先輩は以外とあっさりそう答えたので思わず面食らってしまった。

「千歌先輩は家族のこと、どう思ってるんです?旅館の娘なんて、家の手伝いやらされたりとか理不尽に生き方を縛られたりって思わないんですか?」

「んー………思ってたこともあったかな」

「過去形ですか?」

「うん。過去形。私の場合は、なんだけど聞く?」

「はい」

「特にこれといって夢中になることが無かった頃は、なんでこんなことしてるのかなあって。でもスクールアイドルを初めてから思ったの。これまでやらされてきたことを、ただやらされていたままにしちやいけないって。意味を与えないとって」

「割り切ったってことですか?」

「んー………それに近いのかな。それに思うんだ」

「何をです?」

「どんなお家に生まれたって何かに縛られる。それは避けられないことなんだって。だったら、それに意味を与えるか、もしくは「……」
「もしくは?」

「縛られている縄を解いて自由にするとかね。星ちゃんはどっちを選ぶの?」

「私は――」

「穹ちゃんとの距離があった時の星ちゃんは前者だったと思う。でもお父さんのことになると思うと星ちゃんは後者を選ぶようしてるんじゃないの？」

「それは、悪いことですか？」

「好きか嫌いかの問題かな。穹ちゃんに黙っていたこと、それを無意味なものにしないために向き合っていた時の星ちゃんは凄く格好いいって、私はそう思ってるから」

「.....」

「すぐにどうこうとは言わない。けど、考えることをやめないでね」

「はい.....おやすみなさい」

「おやすみ」

これ以上どう考えるというのか、それが分からない。

もういつそイタリアに行った鞠莉さんに相談してみるのが良いのかもしれない。恐らくは母親と確執のある鞠莉さんに。

私は遠い空の下にいる鞠莉さんに想いを馳せてカーテンの隙間から夜空を覗いた。

空には能天気になんかいられないとでも言っているかのようだった。

第百八十四話

実は私は海外に行くのが初めてだ。

母が海外で日本大使館の職員（大使や外交官ではない）として働いているので緊急時のためにパスポートは作っているけれど、渡航自体はしたことがない。そのため、今回のイタリア行きが人生初海外となる。

「まさかいきなりヨーロッパとはね」

「アジアあたりだと思ってた？」

「距離と時間とお金。それ考えたらね」

お陰でイタリア語などノータツチだし、イタリアの文化なんて知っているのは精々“ローマの休日”や“マリア様がみてる”、“ジョジョの奇妙な冒険”で描写された情報程度だ、

だから、私達はイタリア行きの飛行機の待ち時間を利用してイタリア語を勉強することになった。都合のいいことに月さんはイタリアで過ごしていた時期があったようでイタリア語はペラペラらしい。「ということ、入国に困らない程度のイタリア語を教えようと思うんだけど」

月さんは言葉を切るとじつと私達の顔を見回して頷いた。

「みんななら笑顔で、“チャオ”って言えばそれだけで大抵のことは何とかかなりそう」

「本当に？」

「ホントのホント」

それっきり、月さんは私達にイタリア語を教えることは無かった。

そんな嘘とも冗談ともとれないやりとりがあり、いざイタリアに着いてみればなるほど。イタリア語なくとも入国は出来た。けれども、

対して上手くもない英語を四苦八苦しながら使って漸くだった。

正直本当にテンパリそうだった。というかテンパってた。

「月さん、話し違うじゃないですか」

「え!? 星ちゃんダメだった?」

「私、普通に通れたよ?」

「ルビイも」

「ずら」

「……もういいよ」

これはあれかな。顔面偏差値の問題かな、とこの話題については考えるのを早々にやめた。自分が傷付くのが目に見えている。

私はしばらくそうしてむくれてみんなに着いていった。

どうやら千歌先輩が三年生にイタリヤに行く旨の連絡をしたらヴェネツィアの風景の写真だけ送られてきたらしく、その手掛かりを便りにそちらに向かっていているのだ。

幸いバスやら水上バスやらアクセスしやすいようになっていた。

誰でも名前くらい聴いたことのあるヴェネチアンガラスの技術が流出しないよう、かつては職人を囲っていたらしいけれど、今ではそんな封鎖性はない。あるのは日本では御目にかかれぬ街並みと水の都の名に相応しい水路が融合した異世界だ。

トラックに跳ねられなくても、過労死しなくても、自分のことを知らない、そして自分が知らない世界ってのはまだまだ沢山あるのだと私はその景色を見て思った。

「流石に疲れた」

「そう? 元氣そうにしている子も居るけど」

ヴェネチアの玄関口であるヴェネツィア・サンタ・ルチーア駅前に到着して背筋を延ばしながらそう呟くと、穹は善子ちゃんを指差してそう返した。

「ヨハネ、かの地に――墮天!」

いつも通りのテンション感で、天に両手を掲げる姿は流石のタフさだ、と思っただけにへばってしまったところを見ると単なる空元気のようだった。

「とりあえず写真の場所に行くしかないよね」

「ああ、アポのことだね」

「アポ？」

「そ。ちよつと正式名称に自信はないんだけど、確かカンポ S. S.

アポストリつて広場があつて、その近くの川だと思ふんだ」

月さんがイタリアで過ごしたことがあるというのは本当の様で、ローカルな話題にも詳しいのは非常に助かる。

どうやら現在地から徒歩25分くらいになるそうだけれど、街の散策もしたいし私達は満場一致で徒歩での移動を選択した。

「凄いわね。全部石造りなの街なんて」

「なんか迷路みたいだね」

非常に道幅は狭く、三人並んであるいたら壁に当たつてしまいな程だ。

そんな中でもお店を開いていたりと活気もあるし、衣服関係の店も多くお洒落でもある。素直に素敵な街だと、感心しっぱなしだ。

なんというか、新しいものと出逢えそうな、そんな期待に胸が膨らむのだ。

新しい環境とは入国の時のように不安もあるけれど、このように沢山の期待もあるのだと、見せ付けられて改めて自覚した。

鞠莉さん達は三人ともバラバラの進路を選択したけど、新しい環境に飛び込むことの意義をきつと知っているからこそ、その道を選べたのだろう。

なら、私は、穹は、A q o u r s は自分で道を選んだのだろうか？状況に流されているだけなのではないだろうか、と小さな疑問が湧く。

少なくとも穹と関係に戻すと、その選択をした自信は間違いなくある。けれど、今後どうしていくのか、どうしたいのか？それをまだ選べていないのは事実だ。

「アポだよ」

入り組んだ建物の隙間を通り抜け、水路を跨ぐ橋の上に到着すると、なるほど。確かに千歌先輩のスマホに送られてきた写真と同じ風

景がそこにはあった。

けれど、回りを見回しても鞠莉さん達の姿は見当たらない。ほかに手掛かりは無いものか、と視線を泳がせていると、ふと、鳴り続ける音に気がついた。

「ん？」

ジリリリリ、と鳴る音のところに目を向けると、広場の公衆電話が着信をお知らせしていた。

そんなのはダイ・ハードでしか見たことの無い光景だったけれど、月さんは臆せずとその受話器を上げ、何かを聞き取っていた。

「ボヴォロ」

「え？」

「コンタリーニ デル ボヴォロ」

どれだけ警戒しているのだと、突っ込みたくなかったけれど、どうやら次の目的地が決まったようだった。

第百八十五話

迷路のような細い路地裏を月さんは迷いなく進む。それに着いていく私達はさながら勇者のパーティーのようだ。

主人公勇者 月さん、アタツカー 千歌先輩、万能キャラ 曜先輩、サポーター 梨子先輩、サブメンバーの一年生組ってな感じだ。

私は何だろうな、とぼんやりと考えながら歩いていると、程なくして目的地に着いたようだった。

「あれだよ」

月さんの指差した先には外から丸見えの石造りの螺旋階段が高くそびえる灯台みたいな建物だった。

そして、その一番の望楼のような部分から下を見下ろしている人中に見覚えのある三人の姿があった。

「お姉ちゃんー！」

「鞠莉ちゃん！果南ちゃん！」

ルビイちゃんが歓喜の声をあげると共に駆け出して螺旋階段を駆け上がる。

私達も心を弾ませながらその後を追うように走った。

たったの2週間弱。会っていない時間はたったそれだけだ。だといつものに姿を見ただけで、顔を会わせられると思っただけでこの喜び様。それだけ私達にとって3年生三人の存在は身近で、生活の一部だったのだと改めて思った。

本当は会って色々相談したり、話をしたりと考えていたのに今はただ会いたいと、その気持ちばかりが先行してどんどんと足を進める。

みんなと一緒にした基礎トレーニングの甲斐もあり私達は一気に駆け上がると、三人は待つてましたと言わんばかりにこちらを注目して迎えてくれた。

「お姉ちゃあああん！」

「よくここまで来ましたわね、こんな遠くまで」

一番乗りしたルビイちゃんはダイヤさんの胸にすっぽりと収まっ

て喜びを分かち合っていた。

みんなが笑顔だった。私もまたそうだった。

そして気付かされる。私がどれだけ三人のことを頼っていたのかと。ただ会っただけでこの様。正直、今になってから急に恥ずかしくなってきた。

三人と会っていない間に私は、私達はただ迷って、悩んでばかりで見違えるような成長をしていないことに。

どうすれば良かったのか？これからどうするべきなのか？それを話さなければ、と思いつけられ、どうにも鞠莉さん達には鞠莉さん達の事情があるようで、

「良かった。三人一緒だったんだね」

「Of course. ずっと一緒だよ」

「どうして行方不明に？」

「ん？」

「行方？」

「不明？」

「え？」

やはりと言うべきか、三人は首を傾げている。

そして珍しく鞠莉さんが愚痴っているのが新鮮だった。

「やっぱり！そういうことになってるのねええ！」

「鞠莉のお母さんは千歌達になんて言ってたの？」

「特には」

「ただ、行方不明になって心配だからって」

「いや、千歌先輩。実は鞠莉さんのお母さんって行方不明とは一言も

言っていないです」

音信不通、とは言っていた。だから私達は音信不通⇨行方不明、と意識していたのだけれど、やはりそんなことは無かったらしい。

上手いこと出汁にされている気配がしてしようがない。もしかしたらこれは何かしらの罠なのではと思わず私は周囲を見回した。

ダイヤさんもその可能性を考慮してか、初めて会う月さんに警戒の色を見せているけれど、月さんが持ち前の人当たりの良さで曜先輩

の従姉妹だと告げるとすぐに打ち解けた様子だった。

「誘きだして捕まえようって魂胆ですわね」

そう言っただイヤさんが呆れたように出したビラには泣いている鞠莉さんの写真とデカでかと書かれたMISSINGの文字、そして今にもワシワシとしてきそうなダイヤさんと果南さんのコラ写真が掲載されていた。

まさか鞠莉さんの母親がこんなものまで作っていたとは予想の斜め上を行きすぎて笑うしかなかった。

どうにもそのビラはこの辺り一帯に貼り出されているらしく、立ち話をしている間にこのフロアにいる他の客達が私達を見てひそひそと会話する姿が徐々に増えていった。

「ここであまりLong stayは無理ですね」

鞠莉さんはそう言うや否や、バッグからボーター柄のポロシャツを取り出すと、一番観光客で賑わっている集団に向けてそれを放り投げた。

「何をーーーー？」

「制服ーーーー!!」

それは一瞬のことだった。

宙を舞う、ポロシャツ（後で知ったことだが、ヴェネチアでのゴンドラの船頭の制服らしい）、それに飛び付く曜先輩と月さん、慌てて避ける観光客の集団、このフロアの一堂の驚きの視線。それがスローモーションのようにも感じた不思議な一瞬だった。

その隙を突いて3年生の三人は階段を一気に駆け降りていた。

望楼から顔を出すと、三人はあつという間に姿が見えなくなってしまうただのだけれど、その姿を見て私は思った。

「何か、解き放たれてるって感じだね」

ふと思いつくのは何時しか戯れに見せてくれた三人で活動していた旧Aoursの時のPV。その楽曲『逃走迷走メビウスループ』では上手くいかない現状に頭を悩ませるようなセンチメンタルな歌詞を底無しに明るく歌っているのが印象的だった。

『ずっと自由に生きてたいって』

Oh y e a h 気がついたんだ急いで

逃げちやおうか？ そう逃げちやえ！

邪魔しないでよ Bye—bye”

三人の背中からはそんな風に歌っているような、そんな印象を受ける。三人には旅行が終わったらバラバラになるなんて、そんなことに微塵も不安に思っていないような、そんな達観と、何と云うか溢れ出るパッションがあった。

もう一度会ってちゃんと話をしたい。三人のあの姿を見て私達はそう深く感じた。

第百八十六話

鞠莉さん達が路地に入り込んだ時点で追跡は事実上の不可能となった。

やはりと言うべきか、鞠莉さんは母親から逃走中の身であるらしいことは分かった。

どうしてそんな事態になったのかは分からないけれど、家庭の事情だ。あまり深く関わるのもどうかとも思う。

「それにしても盛大な鬼ごっこね」

穹が呆れたように街並みを見下ろしながらそう呟いた。きっと果南さんならそれに対してこういうだろう。「これだから金持ちは」と。「でもどうする？手掛かりが失くなっちゃったよ」

「確かに」

「曜先輩。そのポロシャツの匂いとかで追えないですか？」

「流石にそれは無理かな。あの三人の誰が着たかってことは分かるんだけど」

「それでも大したものですよ」

とは言え、あの三人はそれぞれ特徴的な匂いがする。

果南さんは海の匂い。潮の香りだ。

ダイヤさんは畳の匂い。きつと日本屋敷の匂いが染み付いているのだろう。

鞠莉さんは仄かな香水の匂い。香水なんて私には縁がないためどんなブランドのものかは分からないけれど、私は勝手にシャネルのN.O.5だと思っている、鞠莉さんだけに。

「ん、あれ？」

ポロシャツを広げて匂いをくんくんしていると、ポロリと半分に分かれたメモがポロシャツの中から落ちてきた。

月さんはそれを拾うと、メモを広げてそこに書かれたイタリア語の文を読んだ。

「ヨハネが守護する地を見下ろす時、妖精の導きが行く先を示すであろう」

どうやら暗号文のようで、その意図を読み取らないと次の合流地点は分からないようになっていよう。私達に対してヨハネ、というワードを含めるあたり遊び心が入っているが。

「ヨハネ？」

「違うよ。ヨハネが守護聖人の地ってことだと思う」

「そ、そんな場所が」

ヨハネを自称する善子ちゃんにとってはヨハネが崇められていることに満更でもなさそうな顔をしている。

「あるよ。守護聖人ジヨバンニ、ヨハネの地」

「なら次はそこに行くってことで良いの？」

「それ以外手掛かり無いしね」

「でもその前に。この空気、このままにしちやいられないでしょ」

穹はそう言って見てよ、とでも言うように手をヒラヒラさせて周囲の好奇の視線があることをアピールする。

確かに随分と騒いってしまったし、これは謝罪、いや、お詫びをしなければこちらの気が済まないと言うものだ。

これは個人的な感覚なのだけれど、謝罪は言葉、お詫びは気持ち、という印象があり、イタリア語の分からない私には言葉を発しようが無いのだ。だから私はいつも通り、持っている技術で語り掛けるしかない。

「穹いい？」

「もちろん」

私はポケットからハーモニカを、穹は背負っていたケースからギターを取り出すと、周囲に居た観光客達はいよいよ驚いた顔をした。

「それでは聴いてください、『オトモダチフィルム』」

パップパッドユワツ、と穹が口ずさみ曲が始まる。

軽快なリズムが特徴のピュアなラブソング。オーマイゴシゴシ、ではなくオーイシマサヨシの初のダンスナンバーにして『多田くんは恋をしない』のタイアップ曲だ。

タイアップ曲として作品を読み込んだ上で作られたそれは言葉に出せない想いが綴られている。その純朴さは誰しもが大なり小なり

見に覚えのある想いだ。

そしてこの曲はギターリストとしてのイメージが強いオーイシマサヨシが踊る姿が映し出されたPVで話題となった。兎に角、一緒に踊っている少年が可愛いのだ。

〃オトモダチを通り越して

すれ違いの恋人未満も

それは騒々しい世界

気がつけば まるで虹のようさ〃

騒々しい世界、それはつまり色取り取りの個性の世界だ。それを虹、と例えるピユアさがたまらない。

私と穹が音楽を紡ぎ、A q o u r sと月さんがコールを入れ、煽る。リズムをしっかりと掴んだそれは周囲にいた観光客達をも巻き込み、この望楼は今、ライブ会場のようになっていた。

その光景を見て思う。音楽にはやっぱり国境は無く、音を楽しむ心があればそれだけで共有出来るものなのだ。

〃ベイバー 思い出というフィルムの中に

君が解けてしまうまえに 届けたい言葉があんだよ〃

楽曲としての楽しさ、コールを入れて一緒に奏でられる楽しさ。

きつとこの曲を作った人は音楽が楽しくて楽しくてしようがない人なんだなあと思う。

「それじゃ最後行くよ。せーのっ」

「二二」パッパッドユワツパッ！「二二」

音に身を任せ、自然と出てくる声はこの望楼を抜けイタリアの青く広い空に響いた。

やっぱり音楽は良い。こんなに素晴らしいものが無い生活なんて自分には想像出来ないし、これからもずっと音楽を求め続けていきたいと、そう思った。願わくばそれが穹と同じ道であって欲しいものだ。

「まさかイタリアにまで来てこんな風になるなんてね」

「とか言いつつ曜先輩ノリノリだったじゃないですか」

「うん。そうだね。それじゃあそのまま突っ走っちゃおうよ」

「そうですね。ならー！ー！ー！ー」

「鞠莉ちゃん達に向かって、全速前進！ー！ー！ー」

「「「「「ヨーソロー！ー！ー！ー」」」」」

私達は見えてくれていた人達の拍手の中、次なる目的地に向かうのだった。

第百八十七話

よくよく考えると鞠莉さんがあんなメッセージを残しているということは、私達が鞠莉さんの母親から囮にされていることに気付いていたのだろう。だからこそ私達だけに手掛かりを残していた。にしてもだ。

「なんだかダ・ヴィンチ・コードみたいだね」

「あの暗号文のこと？ そういえば結構ハマってたよね星は」

「うん。やっぱり実在の舞台だったので緻密な描写は物語に説得力があったし」

ダ・ヴィンチ・コードはダン・ブラウンの長編推理小説シリーズの一作だ。歴史上の人物、実在の場所、それらを題材に暗号的に謎をちりばめ、各地を巡って事件を解決する。その“ありそう感”が人気を博し、映画化されて世界的なヒットとなった。

けれど流行った理由はそれだけではないと私は思っている。あの作品にはなんとというか冒険感があるのだ。

平成以降、世界に未開の地は無いという風潮があり、あらゆるジャンルから一時期冒険活劇が減少した。

そこに現れたこの作品は、現実にある土地が舞台ながら、史跡などにより非日常の雰囲気を手く切り替えて描かれていた。そのためまるで自分達の知らない世界に入ったような、そんな感覚があったのだ。今まさに日常から離れている私達のように。

ヴェネチアから直通列車に乗り、私達は次なる目的地、ヨハネの守護する地というフィレンツェに向かっていった。普段沼津で生活している私達にすればあまりにも非日常だ。

私は流れる景色を見てそんな風に思ったのだ。

「鞠莉ちゃんどうしてお母さんから逃げてるんだろう？」

私の対面の席で、私と同じように景色を見ている千歌先輩がぼんやりとそう呟く。

「高校生にもなれば親との関係なんてある程度ドライなものだと思えますけど〜」

「それは星ちゃんの家でしょ？家は違うよ」

「家業で絡みが多いからですか？」

千歌先輩の家は旅館だ。それも由緒ある旅館で、かの太宰治が長期滞在して執筆していたとの逸話もある。

当然のように千歌先輩も旅館の手伝いをしているし、家族で話す機会が多く達成しなければならぬ共通の仕事があるならば良好な関係を築いているのも頷ける。

「それ言うなら鞠莉ちゃんだって家の仕事をいつかは継ぐんじゃないの？」

「確かにそうですね」

実際、浦の星女学院の理事長をしていたのだからって経営者 小原家の力を使つてのことだ。私情はあれども家業の力を使うことに躊躇いがないところを見るに、いづれは継ぐつもりがあるのだろう。

「そう言えば鞠莉さんの家ってお父さんが仕切ってますよね？」

「たぶんね。実際、統廃合の時とかに鞠莉ちゃんが頼み込んでいたのもお父さんだったみたいだし」

「なら、両親それぞれで方針が違うのかもしれないですね。それで鞠莉さんが父親側で母親側と対立している、とか？」

「なんにしても直接聴くしかないよね」

「そうですね」

「……ねえ、星ちゃん」

「なんです？」

「星ちゃんは どうしてお父さんと仲悪いの？」

ああ、と私は千歌先輩がその話をしたかったのかと納得し、それと同時に内心苦笑した。相変わらず千歌先輩はスツと心に近付いてくる。まるでそうするのが自然のように。いや、千歌先輩にとつてそれは自然なことなのだろう。そんなところが頭が上がないのだ。

「私が父親を許せないからです」

私の人生を大きく揺るがす出来事を作ったのだ。そんな簡単な話ではない。

「どうして許せないの？あ、別に許せって言っている訳じゃなくて、ど

うしてなのかなって」

「どうして？」

「だって、全部が全部悪かったの？」

「違います」

穹に黙っていたのは私だ。そしてあくまでも結果的にだけれどA
oursのみなどと出逢えた切っ掛けでもあるのだ。悪いことば
かりではなかったのは事実なのだ。

「分かっています。でも、許す必要もまた無いんじゃないですか？」

「そうかもしれない。でも、それは星ちゃんにとって壁なんじゃない
かな？」

「壁？」

「うん。だから星ちゃんは鞠莉ちゃんの件、よく見てなきやいけない
と思うんだ」

人のふり見て我がふり直せ、ということなのか？

千歌先輩はそれで話は終わり、と窓の外をまた眺め始めた。

私の隣にいる穹はずっと黙っていた。たぶん余計なことを言う必
要もないと思っただろう。

私も黙って流れる景色を見る。

穹も千歌先輩も私が父親と和解するのを望んでいる。でも私はそ
れを望んでいない。でもみんなの気持ちは無下にはしたくない。

「星ちゃんも色々、だね」

「月さん」

「悩みなよ沢山。悩んで悩んで、納得出来るまで悩むの」

「それってゴールにたどり着けるんですか？」

「さあねえ。でも、ゴールにたどり着くことと納得することは同義
じゃない。でもまあ、とりあえず当面の目的地には着いたみたい」

後ろの座席から顔を覗かせて声を掛けてきた月さんはそう言っ
て立ち上がった。

私も月さんに向けた視線を外に戻すと、沢山の線路が集束していく
様が見えた。十数車線くらいの線路があるようで、かなり大きな駅
だ。

フィレンツェ・サンタ・マリア・ノヴェツラ駅。ここから10分ほどでヨハネが守護する地たとやらかに到着するらしい。

「ふふ、ヨハネ、ヨハネ……くくっ」

善子ちゃんがぶつぶつと不気味に呟いているのを私を含めみんながスルーしているのはご愛嬌だ。

第百八十八話

流石に移動に継ぐ移動で疲れもあるしなにより空腹だ。ぺこりま
すご免なさいって感じた。

なので月さんが目的地までのルートに良いところがあると言つて
連れていってくれた。

開放的に広い三角屋根の天井が特徴的なフードコート。どうも
フィレンツェ中央市場と言うらしい。

随分と賑わっているだけあってフードコートのラインナップも選
り取り見取り。

ジェラート、ピザ、バーガー、ステーキなどなど、見ているだけで
涎が垂れてくる。

花丸ちゃんなんかルンルンと鼻唄が聞こえそうなほど上機嫌で
バーガーを頼んでいた。

「花丸ちゃんって太らないよね」

食事の度に花丸ちゃんはそれはとてもとても良い表情をする。た
だでさえ美少女然とした花丸ちゃんがニコニコと嬉しそうに食べる
姿はかわいいの一言だ。

ただ言わせて貰いたい。そんなに食べるのが好きなのになんで太
らないのだと。

パット見、花丸ちゃんの体質的には肉の付きやすそうな肉質をして
いる。身長は小さいながら付くところには付いているし。

「体質すら………」と言いたいところだけど、実際は食事のバラ
スすら」

「バランス？」

梨子先輩が興味深そうにしている。スクールアイドルを初めてか
ら動く機会が増えたものの食事量も増えたらしく、梨子先輩は体型維
持に四苦八苦しているらしい。

「1日に必要な食事量は調べればすぐに出るし、食べ物のカロリーと
か栄養もすぐに分かるから、後は食べたぶんを全部計算するだけず
ら」

「なんか、さらっとロジカルな事をしているのね」

「スマートフォン様々ずら」

「花丸ちゃん、スマートフォン持ってから完全に使いこなしてるよね」
ルビィちゃんが染々と言っている。

きつとお寺の娘だけあって昔はレトロな子供だったのだろう。

「意外？」

「んー、でも花丸ちゃんって結構順応性高いよね」

千歌先輩の言う通りだ。

花丸ちゃんは新しいものを見ると「未来ずらー」って目を輝かせるけれど、驚くだけでなく使うことに躊躇いが無いのだ。

「これはおらの持論なんだけど、新しいものはいつになっても使えるようにしなきゃいけないずら」

「なんで？」

「文明は常に進歩するずら。より便利に、より使いやすくなって。だから、新しいものを使えるようにしておかないと社会の保証を得られなくなるずら。古いものを大切にするのは当然だけど、より便利なものは受け入れる。そうやっていかないと歳をとってから新しい便利なものを作ろうって人の足を引っ張っちゃうずら」

「何か結構真面目な話になったわね」

「つまり、便利なシステムを使いこなせば体重の増価も体型維持も造作もないずら」

「ほえー」

太らない話から随分と話がそれてしまったけれど、結論は出た。出たけど、あまり参考にはならなさそうだった。

便利なものがあっても使うのは人間だ。花丸ちゃんはマメだからともかく梨子先輩はああ見えてズボラなところもある。

「そう言うのが難しい人なら何も考えずに動くのが一番お手軽だよ」
「それお手軽だと言えるのは曜ちゃんと果南ちゃんだけだよ」

さらっという曜先輩に千歌先輩がすかさずツツコムのに私達は激しく同意した。

「ダイヤさんなんかは完璧に食事とか運動のメニューを考えてそうだ

ね」

「それ分かる。なら鞠莉ちゃんは どうしてるんだらう?」

「確か鞠莉ちゃんってアフタヌーンティーとか楽しんでたし、それなりに食べてる印象はあるけど」

「Aqours以外のところで動いてる印象は無いね」

「なら次合流した時に聞いてみようか」

「千歌先輩。他に聞くことあるのでは……」

私達はそもそも今後の活動への不安をどうやって払拭するのか、その参考になればと相談しに来ているのだ。

「分かってるよもちろん」

「日本に帰ったらライブの準備しなくちゃだもんね」

「この気持ちにどうやって整理を付ければいいのか。それはもちろんずっと想い続けてる。それを言うなら星ちゃんと穹ちゃんも、ちゃんと考えを纏めないじゃない? 今後どうやって活動していくのかを」
「……そうですね」

Aqoursの今後、ジエミニのアカリの今後。私達の未来に頭を悩ませる今、私達は奇妙に立ち位置を同じくしている。

負けないよ、と視線を向ける千歌に負けじと私も視線を合わせた。

「そう言えば善子ちゃん来ないね」

「それなりに混んでは居るけど、注文してから出てくるまでそんなに時間掛からなかったよね」

「まさか……」

私達は一斉にスマートフォンを取り出すといつの間にか来ていた着信メッセージを見て辟易した。

そこには善子ちゃんからこんなメッセージが書かれていた。

「ヨハネの導きに従い先に行っている。心配ご無用」と。

「あの墮天使いい」

梨子先輩が「この悪ガキいい」というように言っているのには笑ってしまったけれど、わりと状況は笑えない。

海外素人が単独行動は危険だ。なるべく人目のあるところならば大丈夫だとは思うけれど油断は禁物だ。

私達は善子ちゃんを追うべく、まだ温かい各々の料理を無言でかつこむのだった。

第百八十九話

善子ちゃんの独断専行を追いかけ私達はフィレンツェ中央市場で注文してしまった食事を掻き込み、目的地であるサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂に向かって走った。

それはもう、ぐるぐるつと、ぐるぐるつと、胃の中が暴れてしまうのを無視して。

「あの堕天使勝手なことして」

梨子先輩が恨めしそうにお腹を抑えながら文句を言っているけれど、足を止めないあたり善子ちゃんのことを心配しているのが窺える。

「あんた達っていつもこんな感じ？」

穹は私に並走して笑いながら語りかけてきた。

こんなことになっているというのに私も思わず笑ってしまった。

「こんな感じ」

「いいね。飽きなくて刺激的で、本当に果てが見えない」

「そうだね。どこまでも駆け抜けて行けそうな気になるよね」

そう。そんな「気になる」のだ。けれど現実はそのような風に上手くは行かない。浦の星女学院の廃校は阻止できなかったことがそれを物語っている。

「でもね、そうじゃないんだ」

「そうじゃない？」

「錯覚だけじゃないんだ。私達は、いや、Aqoursはただ真っ直ぐな道を走ってきた訳じゃないんだ。曲がりくねって、それこそみえなくなりそんな道だっただけ、動くことだけは止めなかった」

だからただ力業で真っ直ぐな突き進むだけの「どこまでも駆け抜けていけそう」ではなく、どんなことがあっても諦めないからこそ「どこまでも駆け抜けていけそう」なのだ。

「そっか」

「うん」

「Aqoursかあ」

「どうしたの?」

「いや、星はA q o u r sに入らないんだねって思ってた」

「私は」

「いや、分かっている。ケジメ付くまでは誰とも組む気は無かったってことくらい。でも今はどうなの?」

穹との縁が再び繋がった今、かつて千歌先輩から受けた誘いを真剣に考えても良いのではないかと、穹の言葉で私の頭にはそんな考えが浮かんだ。

「星はA q o u r sに入らないの?」

穹はそれでもいいよ、と本心からの言葉のように自然とそう口にした。

直接そんな事を言われると、なんだかぐるぐるっとしてるのが胃の中だけではないような気がして思考停止してしまう。

「これからのA q o u r sのこと。これからの私達のこと。ここで見付かるといいね」

なんだか穹は答えを既に得ているかのようにそう言った。

「そうだね。見付かると良いねえ」

「月さん?」

「まあ、善子ちゃんああ見えて悪運だけは有りそうだし、普通に合流できると思うけどね」

私達の後ろを走っていた月さんから唐突に声を掛けられたことで驚いたけど、どうやら善子ちゃんの話話を話していたと勘違いしたらしい。

私は曖昧に笑って、天を仰いだ。この知り合い以外には全く私とのしがらみの無いこの場所なら答えが見付かるのかと。

でも飛び込んできた景色にそういう悩みとかは別の大きな印象に遮られてしまった。

「ふああーでっかー!」

千歌先輩もまた素直に驚きの声をあげるほどの存在感。ただひたすらに大きなゴシック建築と、丸い天蓋。目的地であるサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂である。いや、こう言った方が通りがい

いだろう。ドウオモ、と。

「こんな大きい建物が街中にあるなんて」

梨子先輩が感無量といった感じにそう漏らしているけれど、これだけの高い建築物となると近代建築しか馴染みがない私達には無言ながら激しく同意だった。

昔、それこそトラックもクレーンもない時代の人がこれだけの物を作るのにどれだけの苦勞をしたのか？いや、苦勞だけでは決して出来ないだろう。きっとこれを作るのに夢とか、願いとかが、そういう熱量が存在したのではないかと思う。

私達はしばらく呆然とドウオモを見上げていると通行人なら話し掛けられた。それも、珍しいことに日本語だ

「探し人ですか？」

「はいそうなんです」

「ルビイたちと同じくらいの年頃で」

「身長も同じくらいで」

「いつも騒がしくて」

「自称墮天使のイタイ女の子すら」

「なるほど。それはとても崇高な御方」

思わず流れで会話していたけれど、みんな同時に、ん？、と思い顔を向けると、そこには不敵に笑みを浮かべる善子ちゃんの姿があった。しかも、どこで手に入れたコスプレグッズなのか定かではないが背中には白い羽が付いていた。

「ウイング善子ゼロ（EW版）？」

「違うわいっ！」

「どうしたのそれ？」

「墮天使たる私はこの地に導かれたことで昇華したのです。故に『墮』の文字は今の私には不要。天使ヨハネよ！」

キラン、なんて言って顔の前に指三本翳してギャル擬きのポーズを取る善子ちゃんに思ったことはみんな同じだろう。

また始まったよ、と。

「取り敢えず無事に合流出来たことだし手掛かりを探さない？」

「そう言うと思って予め入場チケットを買っておきました」

「ありがとう」

「15ユーロください」

「………ありがとう」

天使の施しを期待したけれど、どうやらちゃんとチケット代は請求するらしい。

ともあれ、目的の地には無事に着いた。

私達は次の手掛かりを探すためサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂に入ったのだった。

第百九十話

結論から言うとサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂には鞠莉さんら3人の姿は無く、この場所そのものには手掛かりは何も無かった。

鞠莉さん達が残した謎なぞを解くには厳密な場所は必要なく、その条件が一致していれば事足りたのだ。

「まさか本当に合流できるなんてね」

その条件とはフィレンツェの景色を望める高さだ。

「ヨハネが守護する地を見下ろす時」というメッセージは文字通りの意味だった。続きの「妖精の導きが行く先を示すであろう」についてはドウオモから実際に景色を眺めて気付く仕掛けだった。

木々の生い茂る小高い丘の中から赤い光が輝いていた。ガイド役の月さんによるともともとドウオモから見える景色の中にそんな光は無いとのことで、その光こそが妖精の導きなのだろうと察しがついたわけだ。

結構大胆に存在感を出しているけれど、自分は動かさず人を動かして漁夫の利を狙うだけでは分からない仕掛けだ。

私達は尾行にだけ気を付けて移動し、赤い光が丘とでも言う所までやって来たのだ。

どうやら別荘地帯となっていてようで、その中の一軒、立派に門を構えた別荘に鞠莉さん達は潜伏していた。

どうやら鞠莉さん個人の知り合いの別荘らしく、小原家の伝手で捜索していたらまずバレない場所とのことだ。

日本の一般家庭からすれば想像もつかないような高い天井の大きな部屋に通された私達はようやく鞠莉さん達とゆっくり話す時間が出来た訳だ。

「今度はつけられなかった？」

「大丈夫。何度も道を変えたりしてここまで登ってきたから」

実際、通行量が少ない道に入るとなんとなくだけれど私達がつけられているのが分かった。付かず離れずの距離ですつとバイクの音

が響いていたからだ。だからある程度の場所で私達は一度分散して再集結し、ここにたどり着いたのだ。

全く、こんなスパイごっこするはめになるとは思ってもみなかった。

「ママからは何か連絡あったの?」

「ううん。特には」

「一体何があったの?お母さん」

「うん。ちよつとね」

「ここまで来たんだよ。教えてよ鞠莉ちゃん」

「確かに千歌さん達が可哀想ですわ。このまま隠しておくのは」
「でも」

言い淀む鞠莉さんの様子に果南さんは溜め息を吐くと、あつさりとその理由を暴露し出した。

「実はね。鞠莉が結婚するの」

それは理由を知らない私達からすれば聞き間違いじゃないかと疑うような内容だった。

思わず寸劇を挟みながら聞き返したほどだ。

「えー結婚!」

「いつの間に?」

「誰と誰と誰と誰が!」

「wait. しないよ」

怒濤の質問攻めに鞠莉さんは冷静に待ったを掛け、ほれ見たことか、と非難の視線を果南さんに送った。

「え?」

「果南。ふざけないで」

「でも、実際このままだったらそうなっちゃうんでしょ」

「だからそうならないようにしてるんでしょ」

「もう分かんないよ。どういふこと!」

「つまり縁談の話がある、ということですよ」

「しかも相手は一度もあったことのないような人」

「どうして?」

「鞠莉の自由を奪いたいから」

どこか怒りを孕んだ声で果南さんがそう言いきった。

私はその言葉に頭が真っ白になり、次第に黒い感情が沸き出してきた。

人の自由を奪うこと。それは私が最も忌諱し、軽蔑する行為だ。それをしようとする者がいたなら私は徹底的に交戦するだろう。

あの時のことをフラッシュバックしたように思い出す。まだ埼玉にいた頃、沼津への引越押しを押しきられた時のことを。

「鞠莉さんのお母様は昔から私達のことを良く思っていないのですわ」

「それまで素直に言うことを聞いていた鞠莉が私達と知り合ってからどんどん勝手に行動するようになって」

「高校も勝手に浦の星に戻って。理事長にまで就任して。スクールアイドルに対しても良い印象は無かったのかも」

「だからって」

公平な視点からかダイヤさんと果南さんがこうなってしまった理由らしいことを口にするけれど、だからといって今回のこれは行き過ぎだ。

いくら自分の子供だからといって道理に反さない限りその人間関係も、選択も、強制して良い理由などないのだ。

「じゃあ、もしかして卒業旅行も」

「そ。ママに分かって貰おうと思って書き置きしてきたの。私はもうあの時の私じゃないって。自由にさせてくれないなら戻らないって」

「計画的犯行じゃない」

「まさかここまで必死に追いかけてくるとは思わなかったけど」

三行半を突き付けたはいいものの、やはり一方的なものはトラブルの元ということだろう。

業腹ではあるものの、どこかしらで鞠莉さんは母親と直接対峙して負かしてやらなければならぬだろう。

「これからどうするか。千歌達も巻き込んだんだったんだからちゃんと考えないと」

「ですわね」

現在は時間稼ぎしている、といったところなのだろう。

もちろん私としては鞠莉の自由のために協力を惜しむつもりはない。

問題はどうかやってこちらの土俵で鞠莉さんの母親と対峙するのだが、と考えを巡らせようとした矢先のことだ。

「うえ!？」

「ま、ママ!？」

背丈を軽く越える大きな両開きの扉が勢いよく開かれた。それはもう、とても良い音を発して。

そして、そこに居たのは鞠莉さんの母親に他ならなかった。

「こんなところに隠れているとは、またハグウの入知恵ですか」

開口一番そう口にするところ、鞠莉さんの母親はハグウこと果南さんのことを目の敵にしていることが伺える。

「違うわ。私が考えたのママがしつこいから」

「しつこくしてこなかったから、こうなつたのです。小学校のころ、家から抜け出した時も、学校を救うためにこっちの高校をほつたからして浦の星に戻った時も、パパに言われてグツと堪えてきました。しかし、その結果がこれです」

「これって」

「分らないのですか？何一つ良いことは無かつたではないですか。学校は廃校になり、鞠莉は海外での卒業の資格を貰えなかつたのですよ」

もの凄い剣幕だけれど、しかし内容は確かに説得力があり感情的になつているだけではないことが分かる。けれど、だ。

「待って。でもスクールアイドルは全うした。みんなと一緒にラブライブは優勝したわ」

一番叶えなかつた望みは確かに叶わなかつた。でも、だからこそ誇れるものは手に入れた。

「それが？一体、スクールアイドルとかいうのをやって何の特があつたのです？くだらない」

それをこの人間は吐いて捨てた。

私の中でプツリ、と感情を縛る縄が切れた。

「くだらない？」

「お前……」

私と千歌先輩がその言葉に噛み付こうとしたところをダイヤさんが無言で制止した。

そこには有無を言わさぬ凄味があつたけれど、ダイヤさんの視線は鞠莉さんから動かなかつた。

それは私達が噛み付かなくても、鞠莉さんならばしつかりと母親と話をする度量があると信頼しているからなのだろう。

「こういう人なのです」

それを証明するように鞠莉さんは諦めたようにそう言葉を続けた。そこにちよつぴりの悲しみを滲ませて。

「だから私達が鞠莉を外の世界に連れ出したの」

「シャラップ！」

「とにかく鞠莉の行動は私が……」

「くだらなくなんかない！」

「鞠莉？」

無理矢理に、と鞠莉さんの腕を取った母親に鞠莉さんはハッキリとそう意思表示する。

その姿を見て、私は違う、と思った。

鞠莉さんは違うのだ。あの時、引越しを強制されて怒りに身を任せたままの私と決定的に。

だって鞠莉さんの瞳に映っているものは、怒りだけじゃなくて、こう、理知的な光があるのだ。

「スクールアイドルはくだらなくなんかない。もし、スクールアイドルがくだらなくなんかないって、凄く素晴らしいものだって証明できたら……私の好きにさせてくれる？ママの前でスクールアイドルが人を感動させることが出来るって証明出来たら私の今までを認めてくれる？」

「縁談なんかやめて」

「私達と自由に会うことを認めて頂けますか？」

負かすのではない。ただ、分かってもらおう。その手段を選択できる強さを、私は見た。

理論的に、実績を数字にしてマウントを取ることも出来ただろう。けれど、そうはしなかった。

だってスクールアイドルをして、ラブライブを優勝をして得たものはそんなものでは決して伝わらないのだから。

それをみんな分かっているから、みんなは無言で鞠莉さんの後ろに立った。

「いいでしょう」

「ママ」

「ただし！駄目だったら私の言うことを聞いてもらいます」

そう吐き捨てて鞠莉さんの母親はこの部屋から出ていく。

鞠莉さんの母親からすれば自分の思い通りになれば決着の付け方はどうでもいいのだろう。

「ありがとう、鞠莉さん」

「星？」

「私、少し話してみようと思います」

私はそんな鞠莉さんの母親の後を着いて屋敷を出た。

「何故着いてくるのです？」

「んー、表向きには監視です。貴方がちゃんとスクールアイドル 小原鞠莉のことを見るかどうか、チェックしないとフェアじゃないですから？」

「なら裏は？」

「親ってなんですかって、聴きたくて」

「………いいでしょう」

鞠莉さんの母親はそう言うと言うと屋敷の前に停めてあったバイクのシートの中からヘルメットを取り出して放り投げてきた。

私はそれを受け取ると、ヘルメットを被り、バイクに跨がった鞠莉さんの母親の後ろに座って、夜のツーリングと洒落込むこととなった。

第百九十一話

鞠莉さんの母親の背中にくっついてバイクに乗ったけれど、どんな道を行ったのか正直あまり覚えていない。ただ、穹の運転するバイクの後ろに乗るのは何となく感触が違うと、そう漠然と思った。

鞠莉さんの母親が拠点にしているイタリアでの自宅に到着したのはそれなりに夜も更けてからだだった。

晩御飯も食べていなかった私達は取り敢えず食事しようと言うことになったのだが、私も何も手伝わない訳にはいかないので奇妙なことにキッチンに二人ならんで料理をすることになったのだ。

「随分買い込んでますね」
「……………」

冷蔵庫に並ぶ食材の山に思わずそう呟いたけれど、鞠莉さんの母親は何も語らなかつた。けれど、ちよつと寂しそうな、残念そうな表情をしたことで何となく察しがついた。

これはきつと鞠莉さんと仲直りして一緒にご馳走を食べるつもりで買い込んだものなのだろう。

「鞠莉は浦の星女学院ではどんな理事長だったのですか？」

「そうですね……………」

流石に私が質問するだけでは向こうにメリットが無い。だから私は鞠莉さんの母親からの質問にちゃんと答えようと思った。

母親の目の届かない所の鞠莉さんの姿を、それなりに親しい者として、第3者として。

「鞠莉さんは……………」

食材をトントんと切ったり、グツグツと煮込んだり、或いは焼いたり、それをしながら食器をジャージャーと洗ったりする間に、私は私の知る限りの鞠莉さんを語った。

私の視点として第一印象が最悪だったこと、俯瞰的に物を見て人をステツプアップさせていったこと、当事者としてぶつかつたこと、責任の強いところ、頭が上がらないと思つたこと、難しい立場ながら浦の星女学院存続のために全力を出したこと。その全てを。

「そう。鞠莉は良くやったのね」

「そうですね。鞠莉さんを知っている人からすれば浦の星女学院の廃校のことで鞠莉さんを責める人は誰も居ませんよ」

「そうね。知っている人なら、でーすね」

鞠莉さんの母親は複雑そうな表情でそう口にした。

人の人生なんてものは一言では言い表せないものだ。だから事情を知られば同情だってしたくなるし、誉めたくもなる。けれど、世間はそうではないのだ。

「鞠莉さんだって分かってますよ。事情を知らない人が知った風な顔で平然と批判することだってある、いや、それこそが現代の普通なんだってことくらい分かってるんですよ」

「なら学歴を捨ててまでする必要があつたのですか？」

「海外の学歴なんてハーバードとかのレベルじゃないと日本じゃ知られてないですからね。精々が日本語以外の言語を扱える程度のものにしかありませんよ」

「だとしても片田舎の、それも廃校した学校よりは有利に働きます」

「鞠莉さんってゆくゆくは経営者になるんですよ？なら、学歴なんてさして重要じゃないですよ」

「別に学歴だけの問題ではありません。日本国内の教育は最低限のこととは中学卒業までで十分です。ですので、以降は海外での教育を受けることで別の価値観、多様性を身に付けて欲しいと思って留学してたのですよ」

「それは母親としての願いですよ。鞠莉さんはそう思ってたなかったかもしれないですよ？それに」

「それに？」

「鞠莉さんは必要だと感じたものを途中でほっぴりだす人じゃないですから。必要なものは全て習熟したと、そう感じたから浦の星女学院に戻ってきたんじゃないかと思えますよ」

「……………」

事実、必要だと思えることは渋々ながらも鞠莉さんはきつちりこなすのだ。状況も手伝ったからというのものもあるけれど、一度は海外留

学に踏み切ったのだって必要なことだと鞠莉さん自身が思っていたからだろう。

「その仮定で話すのなら、浦の星女学院に戻る必要性は？」

「統廃合の阻止。残念ながらあと一歩及ばなかったですがね。それと経営者側としての実務経験。こればかりは高校生の立場では世界のどこを見ても他に出来る場所はないですからね」

「……………」

「まあ、予想以上に青春が捗ったってところは鞠莉さんも意外だったんじゃないかな」

「良いでしょう。今回は最後まで口車に乗ってあげましょう」

鞠莉さんの母親は、はいっ、と鍋の蓋を開けると茶色いスープが煮えたぎって美味しそうな匂いがした。

「ズツパ・デイ・レグーミ。イタリアの料理です」

「ほあ、豆を煮込んでるんですね。さっきタッパーから出してたの下拵えしてたやつなんですね」

「野菜もベーコンも入ってるから栄養たっぷり、旨味もたっぷりの自信作です」

取手の取れるタイプの鍋だったため、それごと食卓に置くと、ようやく私達のダイナーの準備が出来た。

「お酒は？」

「私未成年ですよ」

「イタリアでは18歳から飲酒可能よ」

そう言つて苦笑いしながら鞠莉さんの母親は掴んだワインを戻した。

18歳ならば高校3年生ならば誕生日を迎えれば飲酒できる。つまりはそういうことなのだろう。

「話をしてみて思いましたが、小原家ならまだ大丈夫だと思いますよ」「なら、ね。貴方のところはどうかの？」「親ってなんですか」「って質問から察するに家族仲は悪そうだけど」

二人で作った料理に舌鼓を打ちながら素っ気なくそう言った。散々鞠莉さんの話を聴いたから、今度は貴方の聴きたいことを聴きな

さい、とでも言うように。

「親って何で勝手なんですか？望んでもいないのに産んで、拘束して、自分の都合を押し付けて」

「それはそうよ。夢だもの」

「夢？」

「こんな子になって欲しい、自分に出来なかったことを出来るようになって欲しい、自分を分かって欲しい。そんな夢。全部自分の都合」
「言い切りますね」

「まあね。でも、子供にも子供なりの悩みとか、願いがあって、つまりは人間同士の私の張り合いよ」

「なんでそんなことに!？」

「だって未熟だから」

「は？」

「大人って貴方たちが思ってる以上に子供なの。子供作るのも初めて、育てるのも手探り、間違いだってするし、嘘も吐く。完璧とは程遠い。だから子供を育てているその実、親もそだてられているのよ」
簡単に、あっけらかんと答える様に私は言葉を無くした。

なんだそれ？そんなことってあるのか、と。

「親が子供に夢を見るように、子供も親に理想を求める。どう？覚えてない？」

「それは――」

「貴方のとこの事情なんて知らないから、一人の親としての感覚を言ったただけだけど、参考になったかしら？」

「・・・・・・はい」

そして、自分のしていることはそのままブーメランのように私に返ってくることもだ。

私は日本に帰ったら話をしなければならぬだろう。忌み嫌う父親と。

「さ、お箸が止まっているデース。お話は止めてちゃんと完食しないと後片付けは全部やってもらいまーす」

話は終わり、と鞠莉さんの母親はわざとらしいルー語のような口調

に戻った。

私は鞠莉さんの母親に倣っていつの間にか止まっていた食事を再開した。

最後に完成したスープを口にすると少し冷めてしまっていたけれど、冷えきってしまったても失われぬものはあるのだと言うように旨味が広がった。

第百九十二話

翌日、私は鞠莉さんの母親の行動に帯同しようと思っていたのだが、鞠莉さん達の準備が整うまでずっと見ているつもりか？と苦笑いされ、「日時が決まったらまた家に来るのデース」と逆に気を使われてしまった。

確かにその通りだなと思ったので、みんなに合流したかったのだが、みんなは色々な場所を転々と移動していたため、移動すれども中々うまく合流できず、結局みんなに会えたのは夜になってからだった。

まさか一人でイタリア観光をすることになろうとは思っていなかった。もつともーローー

「それよりももつと驚いたよ。まさかライブをするつもりなんて」

「3人だったら流石にそこまででは考えてなかったよ」

「でも今はみんなが揃ってる」

「スクールアイドルの素晴らしさを簡単に分かってもらうなら、見てもらうのが一番ですわ」

そう。鞠莉さんの母親を納得させるための手段をライブに決めたことで、この日は即席のライブ会場を探していたらしく、それで各地を巡っていたのだ。コロッセオ、ピサの斜塔、真実の口、スペイン広場、テレビの泉などなど。

ライブの場所はどこにしよう、と食事をしながらみんなで議論している。

2年生が思い付きで話し、3年生が現実的な方向に誘導し、おおよその意見が集束する。そこに妙案を放り込むが1年生だと、これまでの傾向ならばそんな議論になるのだけれど、今日は違った。

花丸ちゃんと善子ちゃんが珍しく強めの口調で口を開いたのだ。

「ちよつと聞いて欲しいことがあるぞら」

「私達一年生でも話し合ってみたいんだけど？」

そして、意を決つしたようにルビィちゃんが立ち上がり、主張した。

「今回のライブの場所を、ルビィ達に決めさせて欲しい！」

「え?」

「これまでのルビイ達は千歌ちゃん達やお姉ちゃん達に頼ってばかりだったから、だから、このライブは任せて欲しいの」

9人のA q o u r sとして、今後このメンバーでパフォーマンスをする機会がいつあるのか分からない。だからこそ、今、なのだ。3年生が目を見張るような存在になること、そして、それをこちらも実感できる機会は今しかないのだ。

それが分かっているから花丸ちゃんが、善子ちゃんが背中を推し、ルビイちゃんが踏み出したのだ。

私が昨日、小さな小さな一歩を踏み出したように、ルビイちゃん達もまた前に進むもうとしている。それが私には心強かった。

「なら、カメラマンは私に任せて」

「月さん、それと合わせてなんだけど、ステージにする周辺に事前に根回しって出来ない?フラッシュモブで、とか理由にすれば善意で見逃してくれそうだけど」

「なるほどね。流石抜け目ないね」

「星とコンビ組んでると、無許可で色々やったから自然とね」

穹と月さんがそう言って苦笑いしたのは私的には不本意だったけど、穹の懸念は確かに分かる。海外でトラブルなんてごめんだからだ。

ルビイちゃん達が今日、各地を見聞して得た感想をプレゼンしている間に、私と穹、月さんの3人で裏方の方法を考える。

「音響は?」

「場所にもよるけど、お店とかあるならスピーカーとか一時的に借りるとか?」

「警察とかは?」

「みんなの歓声と笑顔があれば大丈夫」

「カメラは1カメラだけにする?」

「流石に人数が足りないしね」

「じゃあ、あとは・・・」

「ルビイちゃん達の方で場所の結論が出たら間に1日開けて実行して

貰おうよ。鞠莉さんの母親のスケジュールも確認しなきゃだし」

「そうだね。それで当日は私が迎えに行つて、同行して貰うつてことで良いよね？」

「そうしよう。ところで今思つたんだけど、カメラ必要ある？」

「勿論、私が見たいから…….じゃないよ、ホントホント。これは客観的にものが見えるようにと、証拠だよ」

なるほど、と私は月さんの考えに舌を巻いた。

ステージの様子だけでなく見てくれた人たちの反応も記録出来るし、鞠莉さんの母親が鞠莉さんを、スクールアイドルを認めるような発言があれば言質が取れる。最悪の場合、その場ではあまり盛り上がりなくてもネットに公開れば再生数で人気のほどは伺える。

「なるほどね。星ちゃんは浦の星女学院でこういうことをしていたんだね」

月さんは楽しそうに言う。

「正直、疑問だつたんだよ。スクールアイドルでもなければマネージャーでもない星ちゃんがどうして曜ちゃん達と二人三脚で活動しているんだろうって」

「私は後ろから着いていくのでやつとですけどね」

「そうかもしれないね。でも、実際にこうやってみんなと一緒に居て分かつたんだ。思つた以上に単純な理由だつた」

月さんは出会ってからそれほどこちらの行動に干渉はしてこなかった。寧ろこちらのことを鑑賞しているようであった。ただひたすらに影に徹して。

きつと月さんは好奇心も行動力も旺盛なのだろう。でなければ古巣とはいえイタリアまで同行なんてしないだろう。

「Aqoursのこと見てると自分もやらなきゃってそう思わされるんだよね」

その言葉に私は全面的に同意だつた。

常に前に進むとうとするAqoursの姿は見ていてハラハラすることもあるけれど、凄く応援したくなるし、なんだか力を貰えるのだ。もちろん、身内鼻負もあるけれど。

「星ちゃんはこの一年で前に進めた？」

「お陰さまで」

「そっか」

なら、私も頑張らないと、と小声で呟く月さんの姿が印象的だった。

第百九十三話

晩御飯をレストランで食べ終え、細かい話はホテルに戻って行おうと私達は外に出た。

ホテルはローマ市内に取っているもので、街としてはそれなりに栄えているけれど、日本の夜とはまるで景色が違う。

石造りの高さがおおよそ統一されているこちらは日本の都市部の雑多さや、ギラギラとしたネオンの光はない。最初は暗いとも思ってたけれど、沼津の住宅街の夜くらいと思うと不思議と暗く感じなくなつた。

「そう言えば聴きそびれてたけど、ママとは話出来たの？」

道中、鞠莉さんがなんてことなさそうに話題を振ってきた。

一見澄ました表情をしているものの、聴いてきた以上、気になつているのが分かる。

「お母さん、浦の星女学院での鞠莉さんのことを知りたがってましたよ。話してなかったんですか？」

「う、それは、忙しかったからですーす」

「そんな冷えきつた夫婦で行われそうな言い訳しないでくださいよ」

「だって、本当のことだし、時差だつてあつたし……」

「これは鞠莉さんにも多少の原因がありそうですね」

やれやれ、と隣で話を聴いていたダイヤさんが呆れたように肩を竦めた。

「身内だから分かつてくれる、なんてのは幻想ですよ」

「私はそこまで言いませんけれど、鞠莉さんも果南さんも、私も、すれ違つてしまった原因を忘れた訳ではないでしょう？」

「……分かつてる。でもスクールアイドルをバカにされて黙つてられなかったの。sell wordにbuy wordです」
「売り言葉ばに書き言葉ね」

まったく、と果南さんがどうでもいいと言いたげな補則をした。

そう言えば3年生の3人がすれ違つていた頃なんて随分と前のように感じるなあ、しみじみとしているとふと思ひ出したことを訊ね

る。

「そう言えば果南さんが休学してたのって」

「お父さんが怪我したから店の手伝いよね」

「そう、そうそれです。果南さんは親の都合に振り回されること、何とも思わなかったんですか？」

「んー、そうだね。多少は言い合ったりもしたけど、持ちつ持たれつだからね」

「持ちつ持たれつ、ですか」

「うん。生き物ってね、そういうものなんだよ。海に潜ればそれがよく分かるよ」

うん。私にはよく分からないけど、果南さんなりに妥協できるだけの理由があることは分かった。

やっぱり家族の在り方、考え方は人それぞれで正解なんてないみたいだ。だけど、一つ分かった。

やっぱり話を、言葉を交わさなければ歪みが生じるのだ。果南さんは言い合いをしたと言った。だからこそ妥協できるに至ったのだろう。

鞠莉さんはろくに話をしていなかったようだ。だから今みたいになっっているのだろう。

ようやく私は自分の家族関係を客観視出来る気がする。

「家はどうなんだろう？」

「話してみればいいじゃない？」

「随分と長いことまともに話してないんですよ」

「でも、お父様は星さんに声を掛けるのでしよう？」

「でも」

「遅い、なんてことはないと思うよ？」

このままではいけないという結論がすつと胸に入ってくる。けれど同時に思うのだ。怖いって。

今更どの面下げて話し合おうなどと言うのだと。

「あまりにも恥知らずじゃないですか？」

「恥はかき捨てですわ」

「正しいことなんてその時にならないと分からないんだもん。恥かいたっていいんじゃない?」

鞠莉さんの母親もそう言えば未熟者同士で我の張り合いをしている、というようなことを言っていた。

なら私がするべきところは明白だ。

「日本に帰ったら、話、してみます」

そんな話をしていると穹が微笑ましそうに優しい表情を浮かべていることに気付きなんとなく恥ずかしくなった。

「よかったね、星」

「シヤラップ!」

「私も果南ちゃん達に聞いてもらいたいことあるんだけど言いかな?」

私の話が終わった頃、ちょうどホテルの前に着いたのだが、私と入れ替わるように千歌先輩が果南さんにその声を掛けていた。

「千歌は何の話?」

「うん。新しいAqoursのことであつと」

千歌先輩と曜先輩、鞠莉さん、果南さんは私達が止まるホテルアストリアガーデンのロビーにある談話スペースに腰を下ろした。私もなんとなく他人事ではないような気がしてそれに同伴する。

「みんなちよつと悩んでいたんだよね。新しいAqoursって何だろうって」

「新しいAqoursか」

「自分達で見つけなきゃいけないってのは分かっているんだけどなかなか.....」

「そしたら聖良さんが一度あつて話してきた方がいいんじゃないかって」

「そうだったんだ」

まさかSaint Snowの聖良さんの名前が出るとは思っていなかったのか、鞠莉さんも果南さんも驚いた顔をしていた。離れた場所にいるSaint Snowに相談するくらい悩んでいたというのも伝わったみたいだ。

「果南ちゃんはどう思う？」

「千歌の言うとおりでと思うよ。千歌達が見付けるしかない」

「そうだね。私達の意見が入ったら意味無いもん」

「だよね」

「でも」

一度アドバイスを突っぱねたけれど、果南さんはすつと立ち上がり千歌先輩の胸の鼓動する部分に指を当てた。

「気持ちはずつとここにがあるよ。鞠莉の気持ち、ダイヤの気持ち、私の気持ちも、変わらずずつと」

「ずつと」

「そう。ずつと」

具体的にどうするか、とかそう言うものじゃない。もつと、ずつと、凄く大切な事を言ったのだと何となく分かった。

「さ、明日も早いからもう寝るよ」

「じゃ、お休み」

果南さんも言うべきこと、伝えるべきことは言ったとばかりに鞠莉さんと連れだつて談話スペースを後にした。

「なんかちよつとだけ見えた。見えた気がする」

嬉しそうにそう千歌先輩が言っていることに私も無言で同意するのだった。

第百九十四話

ライブ当日、文句なしの快晴できっとイタリアの景色は空や海の青さと建築物の屋根の燈色のコントラストが綺麗に映えるだろうと私は心を弾ませていた。いくら天気が良くてもそんな風に考えるなんて視点ともども浮かれていると我ながら思う。

イタリアでの小原宅に鞠莉さんの母親を迎えに行き、鞠莉さんの母親と私は並んでライブ会場となる場所まで歩いていった。

「根回しは出来たのですか？」

「そんな大それた根回しは出来ませんよ。ジェバンニじゃあるまいし」

「ジェバンニ？」

「……日本のコミックの話です。深く考えないで下さい」

ジャンプのサスペンス漫画『DEATH NOTE』の終盤、盤面をひっくり返す切っ掛けとなったくだりをジェバンニというキャラクターが作り出したことで、モブに近い彼が一気に有名になったのだ。今ここではどうでもいい話ではあるけれど。

鞠莉さんの母親はきつと所謂サクラを手配していたんじゃないの？と冗談めかして言っているにすぎないのだが、下準備としての意味であれば根回しという言い回しはあながち間違いではない。

「スクールアイドルだって夢見てるだけじゃない。現実的な問題を一つずつクリアして初めてライブが成り立つんです」

今回は全ての条件をクリア出来た訳ではない。けれど、出来る範囲で限りなくクリアには近付けた。

「そうですね。全力が出せるようならそれでいいです。あとで条件が悪かったなんて言い訳されても困りますから」

「ええ。楽しみにしてください」

私達は入り組んだ路地を抜け、オベリスクを頂きに冠する長くて広い、西洋ツツジに彩られた石階段のある広場にたどり着いた。

そこは各国に散在するスペイン広場という名の付けられた世界遺産。かの有名な映画『ローマの休日』でオードリー・ヘップバーンが

ジエラートを食べているシーンのお陰で世界で一番有名なスペイン広場だ。

私と鞠莉さんの母親はその階段の下、中央に陣取る。すると、スキップと小走りを混ぜ合わせたような軽い歩調で月さんが側まで寄ってきた。

「ごきげんよう、マドモアゼル」

「ごきげんよう、でとどめなさい。マドモアゼルは未婚の女性に使うとか使わないとかいざこざがあつて今では使わない方が好ましいのよ」

「では、ごきげんよう、マダム」

因みにあとから聴いた話ではマドモアゼルはイタリア語ではなくフランス語らしい。

「間も無く開始しますので視線は彼方に向けて下さいますようお願いします」

月さんは仰々しく階段の中腹付近を指し示すと、カメラを構えた。すると、どこからともなく軽快でポップなサウンドが広場に響き渡る。

何事かと観光客達の中に動揺が走る。その群衆の中から手提げやポーチといった9つのバッグ類が中に舞い、その直下、階段の中腹付近の観光客達は何が起きるのかと階段の端に寄った。それは下から見ているとまるでステージの幕が開くような、そんな風に見えた。

Non stop non stop the music

Non stop non stop the hopping heart

9人の少女たちが織り成すその歌声は広場に満遍なく響き渡る。

止められない衝動、歓喜、それを体現するようなAoursのパフォーマンスが始まった。誰一人としてAoursを知らないこのイタリアの地で。

冒頭の英語部分は簡単でこの場にいる観光客達にも意味は伝わるものだっただろう。けれど続く日本語の歌詞は全く意味不明なはずだ。

けれど、言語の問題なんてのは音楽において些細な問題だ。楽しさを追求する欲求は誰にもあつて、それを刺激して一緒に楽しめるのがこの楽曲“Hop? Stop? Nonstop!”の魅力なのだから。

“ワクワクしたくて させたくて 踊れば

ひとつになるよ世界中が

Come on! Come on! Come on! 熱くなあれ”

キャッチーなサウンドに次第にここに居合わせた観光客達の視線や気配が訝しげなものから楽しげなものに変化していくのが分かる。

コミカルなAqoursのダンスに手拍子したり手を振ったりして、Aqoursからレスが返されると嬉しそうに笑顔が広がる。そんな光景に鞠莉さんの母親は目を見開いている。

“みんながね ダイスキだ

みんながね ダイスキだ

コトバを歌にのせたときに 伝わってくこの想い
ずっと忘れない”

みんなのことが大好きであると同時に、みんなも自分達のことを愛してくれる。そんな相互関係が成り立つステージを無かったことになんて出来ない。鞠莉さんの伸びやかな独唱パートはそれをひしひしと伝えてくる。

“こんなステキなことやめられない (Huu) そうだよ!

Nonstop nonstop the music

Nonstop nonstop the hopping h

ear t”

最後にはAqoursだけではない。ここにいるみんなが手を上げて盛り上げ、万雷の喝采がAqoursに送られた。

私もまた身内であることを忘れて拍手していたが、スツと鞠莉さんの母親が黙って階段を上つていき、鞠莉さんの前に向かった。

私と月さんも黙ってそれに続き、結果を見守ることにした。

「鞠莉」

「ママ」

「私がここまでみんなと歩んできたことは全てもう、私の一部なの。私自身なの。ママやパパが私を育ててくれたように、A q o u r s やみんなが私を育てたの。何一つ、手離すことなんてできない。それが今の私なの」

鞠莉さんの口から歌うように自然と出てきた言葉を鞠莉さんの母親は力を抜いたようにふっと笑みを浮かべ、黙って立ち去っていく。「どうなったの?」

「さあ?でも、分かってくれたんだと思う」

鞠莉さんの母親が立ち去る姿は、一人立ちした娘に必要な言葉は無いと言っているかの様だった。

「ところでどうしてスペイン広場にしたの?」

取り敢えず一段落、と空気を入れ替えるように曜先輩がルビイちゃんに訊ねた。

「それは」

「なんとなく、沼津の海岸にある石階段に似てたからずら」

なんて花丸ちゃんが言ってみんな意外そうに笑うけれど、本当はもっと意味があるのだ。

イタリアの地でスペインの名を冠しながらも親しまれている様子。さらにオベリスクという古代エジプトの記念碑が融合したごった煮感に善子ちゃんの感性が反応したこと、花丸ちゃんの言うようにどことなく沼津を感じさせること、ルビイちゃんがスペイン広場にあるピンクと白の西洋ツツジに着目し、縁起が良いと決めたことだ。

ピンク色の西洋ツツジの花言葉は青春の喜び。そして白色の青春ツツジの花言葉はあなたに愛されて幸せ。これ以上にステージを彩る花は無いだろう

私達は西洋ツツジを揺らす風に気持ちよく身を任せる。

スペイン広場に舞うピンクと白の花弁はまるで私たちを祝福しているかのよだった。

第百九十五話

イタリアでのライブを終えた私達は慌ただしく帰国準備をして駆け込みで飛行機に乗るはめとなった。

ライブをやるとなつて場所を決めてから実行するまでに予想以上に準備に時間が掛かったことが原因だ。

何が予想外つてスペイン広場周辺のお店などに交渉したらやたら乗り気で店内のスピーカーを貸してくれたり、警察に顔が利く人がお目こぼしを貰えるように交渉してくれたりと、時間が掛かったなりに色々と良くしてくれたのだ。そのため、実は準備出来なかったのはライブ衣装くらいだったのだ。

衣装の調達もスクールアイドル活動の一環であるため、全てを見せつけるなら用意したかったところであるけれど、今回は結果オーライだった。

そんなこんなで私達はくたくたになりながら飛行機に乗り、泥のようにな眠っている間に無事に東京に着いた。

「私は一度家に帰るよ。バイクも回収しなきゃだし」

「そっか」

「星たちは沼津で次のライブ、するんでしょ？」

「そうだね」

なら、一息付いたらまた行くよ、と穹は言った。

春休みの残り期間は多くはない。

私達の時間を無駄なく使いきるために穹は動くことをやめないらしい。

「あ、そうだ。聖良さんと理亜ちゃんにも連絡しなきゃね」

「イタリア行き勧めてくれたもんね」

千歌先輩はそう言つて早速メッセージを送ってくれた。

「じゃあ、私達も帰ろうか」

日本を発つ時とは違い、今は3年生の3人も居る。

なんだか函館に行ったときを思い出す。あの時は鞠莉さんの運転するワーゲンワゴンで下道をのんびりと走行して沼津に帰つたのだ。

かなり時間を掛けてしまったけれど、あの時はそれが一番の正解だった。

なんてこと無い願掛けみたいな、そんな意味があった。

今回はもうみんなが乗るバスは無い。それが少しだけ残念に思えた。

「何、星？そんな残念な顔して」

「残念な顔って、それじゃただの悪口だよ」

「失礼、残念そうな顔して。イタリアに戻りたくなかった？」

「そうじゃないよ。ただ、ちよつと思っただけ」

「何を？」

「もうあの時とは違うんだなって」

「当たり前でしょ」

「うん。当たり前だね。でも、こういう風に感じる事が大切なんだよね」

ずっと気持ちはここにある、と果南さんは千歌先輩の胸を指差した時のことを思い出す。

大切なものは時が過ぎ去って目の前から失われてしまったとしても残るのだ。

だから感じることを拒絶してはいけないのだ。

その時思ったこと、感じたこと、考えたことは全て繋がって行くのだ。時にはそれが誰かと交わって、同じ想いを共有したりして、私はそれが好きなのだと思えるようになった。

「それ、誰かの受け売り？」

「うん。みんなの」

イタリアで千歌先輩に向けて語られた果南さんの言葉だけではない。沢山の人と関わって時間を過ごして、そんな中で少しずつ影響されてこうなったのだ。

「沼津のライブ、楽しみにしてる」

「Aqoursのライブ、だけどね」

私と穹は拳をお互いに当てて別れの挨拶とした。

颯爽と立ち去る姿勢の良い穹の後ろ姿を見て、今回はほんの少しの

短い別れになりそうだと思った。

「あ、聖良さんから返事来た」

「どれどれ………って、すごい長文!」

千歌先輩の横からスマホを覗いた曜先輩が驚愕の声を上げる。

あとで内容を見させてもらったけれど、イタリアで3年生が千歌先輩にどのような話をしていたのか?どんな風に千歌先輩が感じたのかが気になるらしい。

どうにも理亞ちゃんのスクールアイドル活動が上手くいっていないらしく、聖良さんも上手くアドバイスが出来ていないみたいなのだ。やる気はあるけど、それが上手くいっていないような、そんな感じらしい。

最近はそれで理亞ちゃんの笑顔に少し影があるようだ。

私達の練習を見に来てくれた時にもどこか焦りというか迷いというか、そんな気配はあったけれど、まだ解決出来ていないようだ。

「どうする?」

「あとで私達からも連絡してみますわ」

「同学年だしね。私達」

「だから千歌達は自分達のことをしてて。途中経過はちゃんと言うから」

「どうしてもって時は力を貸してください」

それについては3年生の3人が引き継ぎ、それっきりその日はS a i n t S n o w についての話題は出てこなかった。

けれど帰りの新幹線の中、ダイヤさんを中心に3年生の3人が頻繁にメッセージをやりとりしたり小声で相談したりしているのがやけに気になった。

第百九十六話

沼津に無事に戻った私達は一旦、3年生の3人と別れた。そして、残った私達はそれぞれ帰宅する前に静真高等学校 浦の星女学院分校と名付けられた廃屋に向かった。廃屋などとは失礼な言い方かもしれないけれど、立ち入り禁止レベルの建物なのだから過言では無いだろう。

何故分校に向かったのかと言うと、四五六トリオ先輩たちと合流するためだ。

どうやら千歌先輩が小まめに連絡を入れていたらしい。Aqoursがライブをやるということも相談していたようで、ライブ運営のために浦の星女学院生を纏めていつでも動き出しを掛けられるようにしたり、ステージデザインなどの素案はおおよそ固めてくれているらしく、今日は調整をしたいとのことだったのだ。

「ごめんね。私達のライブなのに任せちゃって」

「ううん、いいの。こういうのやっぱり楽しいし、学校みんなも乗り気だし」

分校の教室で三人とおちあつて、私達は浦の星女学院生の現状を聞く。

こういう催し物の準備は学校説明会や閉校祭を思い出す。それは私だけじゃないようで、みんな嬉々として協力してくれているらしい。

既に必要性のある機材や資材の手配はしてくれているらしい。本当に仕事が早いというか、もはや学生かどうか疑わしい手腕だ。

そして、改めてそれを実感したことで気付いた。この感じこそ本当の意味で浦の星女学院らしいんだってことに。

誰かのためにみんなが全力で力を貸せる。そんな他に類を見ない魅力が浦の星女学院の良さだ。

そう思い至ると少し肩が軽くなった。

きっと学校の統廃合問題はすんなり上手くいくだろうと本能的にそう思えるようになった。

「もうステージのイメージも出来ちゃってるんだ」

わざわざ見えないように布を被せてあつた黒板から3人はじゃーん、と口にしながら布を取り外した。

そこには本当に作れるのか疑わしい程に凝ったデザインのステージがカラフルに描かれていた。

Aqoursらしい青を基調とした海のようなステージ。そしてメンバーカラーをモチーフにした虹。

「凄い」

「でもこんな立派なステージ、とてもじゃないけど間に合わないんじゃないじゃ」

「私も言ったんだけどさ」

「何かみんなに言ったら、絶対Aqoursに相応しい凄いステージ作って浦の星だつてちゃんと出来ること証明してやるって」

「でも、ライブの音響のスタッフとか人手不足ではあるんだけどね」

やる気と活気という美点、けれども人手不足というのはやはり廃校になるだけの理由たりえる欠点だ。

「こんにちは」

「はじめまして」

人員の運用で人手不足をどうにか出来るかと思案していると教室に見慣れない女子生徒3人がおずおずと入ってきた。見慣れないのは当然で、その女子生徒達は静真高等学校の制服を身に付けていたからだ。

一体どうして？誰が？と思い、すぐに手配した人に思い至った。

「僕のところ相談しに来てくれたんだ、まだ一部の保護者の反対もあるけど協力したいって。でも、まだ少人数だけど」

月さんがそう言ってあくまでも自分が主体では無く自然発生した協力者であると言った。

驚いたことに月さんが煽動している訳ではないらしい。しかし、よくよく月さんの性質を考えると納得でもある。

月さんはどちらかと言えば主体的なタイプではなさそうだからだ。

部活説明会の件だつてもともと曜先輩が相談していなかったら枠

を設ける交渉などしていなかっただろうし、イタリアに帯同していても行動はあくまで補助に徹していた。

「ありがとう」

千歌感謝の言葉の通り、静真高等学校の生徒が協力してくれることにみんな喜びの声を上げていた。例え少しだろうとも自分達と上手くやっていきたいと思っっている人が居ることが素直に嬉しいのだ。

ふと、私は思う。人手不足の浦の星女学院が静真高等学校のように部活が盛んで人数の多い学校が合わさったら欠点が無くなるのではないかと。

なんて、単純計算の最強理論は脇に置いておく。

「もしかしてヨハネちゃん?」

「違います!」

ここに来た静真高等学校の生徒の内の一人が善子ちゃんを見てそう呟くと、善子ちゃんはいたたまれないような声を上げた。

「私、中学一緒だった」

「いつもネットで見てるよ」

「う、あう……」

「「ヨハネ、降臨」」

普段の自分とネットでの自分は別人格で通している人は少なくな。だからこそリアルで遭遇するとなんとも言い様のない気恥ずかしさを覚えるものだ。

見事にヨハネポーズを決める3人を前に善子ちゃんは逃亡を計ったけれど、梨子先輩と花丸ちゃんに捕獲され、挙げ句の果てには撮影会が行われた。

私達はそれを微笑ましい気持ちで見守った。

一時は堕天使キャラを止めると言った善子ちゃんのパーソナリティイがこうして受け入れられていることになんとなく安心した。

新しい学校でもやっていける。反対だって覆せる。そんな小さな希望がここにあるのだから。

「よーし、やるぞー」

千歌先輩も気合いたっぷりにそう声を出す。

「でもあのときと違って鞠莉ちゃん達は居ないすら」

なんて花丸ちゃんは言うけれど、その声音には一切、心配そうな色はなかった。

「できる。できるよ」

「ルビィちゃん！」

「私もできる」

「千歌ちゃんも！」

「うん」

千歌先輩やルビィちゃんだけじゃない。曜先輩も梨子先輩も、善子ちゃんも花丸ちゃんももう大丈夫と言うように笑った。

きつとみんな沼津を一時離れて得たものがそれぞれあって、イタリアに行く前からほんの少しだけ変わったのだろう。かくいう私もその一人だ。

「僕たちも頑張らないとね」

主体的ではない月さんの、そんな眩きが少しだけ新鮮に感じた。

どうやらイタリアに行つて変わったのは私達だけではないみたいだと、そう思った。

第百九十七話

第百九十七話

一週間。期間的に無茶ではあるけれども新年度が始まるまでもう期間がない。無茶を通すしか無いのだ。幸いステージ設営のノウハウは学校説明会の時の経験がある。あとは電源設備等の融通さえできればライブ自体は可能だろう。とにかく時間との戦いになることは間違いがない。

四五六トリオ先輩には待機して貰ってた手配をすぐに動き出しを掛けて貰い、千歌先輩、梨子先輩は作曲、花丸ちゃん、ルビィちゃんは衣装、善子ちゃん、曜先輩はダンスに注力を注いで貰うこととなった。

その日は役割分担と工期を明確化して解散となった。

私は帰宅してのんびりと旅行の荷物を整理していると気付いたときにはもうゴールデンタイムだった。イタリアに行っている間にこちらの時間感覚がずれてしまったらしい。それに、こないだまで冬だったと思ったのに随分と日も永くなった。このままではあつという間に新学期だ。

それまでに色々と決着をつけなければならぬのだ。学校のこと、穹とのこと、父親とのこと。

「ただいま」

一通り荷物の整理も終わったところで珍しく父親がこの時間に帰宅した。帰宅の挨拶を欠かさないところは私がイタリアに行く前から変わらない。

父親は私がリビングに居ることに目を見開き驚いた様子だったけれど、少しの緊張を持ちながらも表情を僅かばかり緩めて、改めて「ただいま」と言った。

私はどうしようかと思った。

イタリアに行っている時は帰ったら話そう、と決められた。だが、

何を話せばよいのか？ 久しく会話をしていない私にはその切り口が分からず結局黙りを決め込んだ。そして父は相変わらず少し残念そうに悲しげな目をするのだ。

私はどうにもいたたまれない気分になり足早に部屋に戻る。

今日はそう、確認だ。自分が父を前に冷静でいられるかの。事実、今日の私は怒りが瞬間沸騰することはなかったのだから、意味のある時間だった。

私はそう自分に言い聞かせていると机の上に置いたスマホが着信を知らせていることに気が付いた。

着信は果南さんからで直ぐに折り返した。

「もしもし、果南さん？」

「よかった。連絡ついて。ちよつと緊急で明日みんなで集合するんだけど、星は来られる？」

「行けますけど、どうしたんです？ 帰ってきて早々、緊急なんて」

「ちよつと聖良から連絡があった件でね。詳しくは明日集まってから話をするよ」

「そうですか」

沼津に帰ってくる際の長文のメール、そして今回の緊急の集会。

割りと大きな案件なのではないかと思考がそちらに向いたところで珍しく果南さんがちよつと踏み込んだ質問をしてきた。

「星はお父さんとちゃんと話できたの？」

「う、まだです」

「決めたんでしょ」

「どうして果南さんがそんなに気にするんですか？」

「……………まあ、ろくに意志疎通をせずに擦れ違った先輩、だからかな」

「それ言われたらなんも言えないですよ」

「うん。言わなくていいよ。言い負かされそうだし」

頭使うのは苦手だからね、と果南さんは言った。

でも私は全然そうは思えない。少なくとも自分の交遊関係に関しては頭を使っているのは端から見えていて分かる。

「どうやって話していたのか分からなくなっただんですよ」

「どう、か」

「はい。それに今更避けていた私が手のひらを返すのもなんか違うような気がするんです」

さつきは怒りに駆られることはなかったけれども、正面から向き合って話してしている内にまた感情が爆発しないとも限らないし、上手い手はないのだろうか？

「歌にすれば？」

「うーん、それも考えたんですけど、細かく話をしなきゃだし、情報量が膨大で、ロード13章くらいの長編になっちゃうのでやめたんですよ」

「もういつそのことロードで良いんじゃない？」

「なんでもないようなことが 幸せだったと思う」はかなり汎用性の高いフレーズだけれどもそれでは伝わらない。

「なら、手紙でも書いてみたら？」

「手紙、ですか？なんで急にまた、」

「ほら、確か京都のアニメ会社の作った……」

「ヴァイオレット・エヴァーガーデンですね」

「そうそれ」

「ヴァイオレット・エヴァーガーデン」は手紙代筆屋の仕事を通して人間性に触れ、成長する少女の物語だ。

時代背景的に一部想像でしか気持ちを計れないところはあるものの、とても人の気持ちを大切に表現された描写には心動かされるものがある、そんな作品だ。

「悪くないかもしれないですね」

「だね。でも、明日のこともあるし、もうしばらく星の手、借りるかもしれないから。ごめんね」

「忙しいのはこの一年で慣れましたよ。それに果南さんの手伝いできるのなんて、これからあんまり機会ないでしょうから」

「なら、遠慮は必要ないかな。それじゃおやすみ」

結局、明日のことはどんな内容なのかは分からなかったけれど、自

分のことでは思わぬアドバイスがあった。

けれど、果南さんがああ言っていた以上、目先の問題がたぶん優先度が高くなることになりそうだ。

私はすぐさま穹に電話を掛けて一つ、お願い、というか、可能性の話をした。

第百九十八話

次の日、早急にということだったため私達は開店と同時に喫茶店松月に集合した。

立地的な理由もあり店内のお客さんは私達だけ。そして、客席の数的にもほぼ満席だ。少しだけ申し訳ないけれども話し合いをするのにはもってこいだ。

「それで、Saint Snowがどうしたっていうの果南ちゃん？」

一通り注文も終わると開口一番に千歌先輩が問い質す。一体何があったのか気になるし、場合によっては力になりたい。そんな思いが伝わってくる。

「端的に言おうと、理亞ちゃんがAqoursに入るかもって話」

果南さんがざっくりと述べると、私達は数秒の沈黙の後に大声を出して驚いてしまった。だってそれが意味することは、

「転校してくるってこと!?!」

「Yes。」

「春に手続きすれば丁度みんなと一緒に新しい学校に通うことになるから、馴染みやすいだろうって」

「理亞ちゃんがそうしたいって言ってるの?」

「いいえ。まだ話してないみたい」

「ただ、聖良としてはそれが一番良いんじゃないかって」

「同じ卒業生としてどう思うかって私のところに連絡が来て」

「私たちが聖良さんと話しても良かったんですけど、やはり千歌さん達の気持ちも大切かと思ひまして」

矢継ぎ早な私たちの質問に三年生の三人はそれぞれの確に答えをくれた。

スクールアイドルは遊びじゃない。そう豪語する理亞ちゃんがスクールアイドル活動をより良いものとするために函館から遙々沼津に転校すると、そう自分で考えて決めたことならば、Aqoursに入る入らないは置いておいて私としては大歓迎だ。

けれども、どうやらこの話は聖良さんが考えたことらしい。

それはつまり今の理亞ちゃんの状態が芳しくないことに他なら
ない。

スクールアイドルは遊びじゃないと口にする理亞ちゃんはスト
イックで、だからこそSaint Snowたとしてスクールアイドル
でも上位に食い込む実力者となった。けれどコンビを組んでいた
姉が居ない今、彼女は一人。ソコのスクールアイドルが居ないわけ
はないけれど、グループ全盛期のこの環境では上位に食い込むのは難
しいし、そもそも理亞ちゃんがグループに拘ってもいる。だけど、誰
もストイックな理亞ちゃんに着いて来れる人が居ないようなのだ。

でもそれで沼津に来る、Aquorsに入るというのはなんか、こ
う、違うような気がしてならない。そう思うのは私だけなのだろうか
？

「理亞ちゃんがAquorsに入る？」

「ちよつと想像しただけでも……」

「何想像してるずら？」

善子ちゃんが何を想像したのか苦い顔をし、花丸ちゃんが呆れた様
子で突っ込んでいた。

大方ストイックな亞ちゃんに振り回されていることでも想像した
のだろう。

「どう思う？」

「そりゃ、全然嫌じゃないよ。前にみんな話したように、Aquor
sは何人って決まってる訳じゃないし」

「それに理亞ちゃんも同じラブライブで頑張った仲間だし」

「良いんじゃない？めんどくさそうだけど」

「善子ちゃんより教えてもらおうこと沢山ありそうずら」

「うん。ただ……」

一度はSaint Aquors Snowとして合体グループ
でパフォーマンスをしたほどの仲だ。気心も知れているし誰も嫌と
言うものは当然のようにならない。けれども、やっぱり釈然としない気
持ちはあるようで、それはルビィちゃんが人一倍そう感じているよう
だった。

「ダメだよ。理亞ちゃん、そんなこと絶対に望んでないと思う。Aqoursに入っても今の悩みは解決しないと思う」

「どうしてそう思うの？」

「だって、理亞ちゃんはSaint Snowを終わりにして新しいグループをはじめるとだよ？お姉ちゃんと続けたSaint Snowを大切にしたいから、新しいグループをはじめるとだよ。それってAqoursに入るってことじゃないと思う。ルビィ、向こうでお姉ちゃんと一緒に歌って分かったんだ。お姉ちゃんたちは居なくなるんじゃないって。同じステージに立っていなくても一緒に居るんだって」

ルビィちゃんは目を閉じてステージの上の自分を思い浮かべるように話をする。

「一緒に？」

「理亞ちゃんはそのことに気付いていないだけだと思う。居なくなっってしまった聖良さんの分をどうにかしなくちゃってSaint Snowと同じものをどうしても作らなきゃって。お姉ちゃんと果たせなかったラブライブ優勝を実際に果たさなきゃ聖良さんに申し訳ないって」

理想のアイドル、理想の自分、理想の仲間。ステージにはいつだってそれが居て、それを目標にしたり、気持ちを盛り上げたりするため意識していた筈だ。けれどもあまりにもそれが当たり前になってしまうと、見失ってしまうものもある。

ルビィちゃんはAqoursの中の誰よりも自分に自信が無いから、そのいつも側にいてくれる理想の大切さが分かるのだ。そして理亞ちゃんのように同じグループにいる理想の姉、けれども卒業してしまう姉がいるからこそ彼女の気持ち分かるのだ。

「たぶん理亞さんの気持ちはルビィが一番分かっていると思いますわ。姉が卒業した妹の立場として」

「ルビィちゃんの言う通りすら」

「同意」

「うん」

私も同じだ。みんなの意見に同意という意味ではない。私は理亜ちゃんと同じなのだ。

穹と一緒に居られない今後をどのようにしていくのか決められなかったのは、やっぱりどうしようもなく側に居られないからだ。

だから答えを探すことを先伸ばしにしていたのだ。

私はみんなから突き付けられる現実に胸を締め付けられながらも、その厳しい優しさに口に出さずに感謝した。

向き合う勇氣は一人で持てなくても、誰かが支えてくれるならばきっと大丈夫。

「だとしたらどうすれば？」

「そうだよ。教えて上げるのが一番だと思う」

「そう。一緒にいるって、ずっとそばにいるよって」

「理亜ちゃんの一番大きなDreamを一つ叶えて」
「夢」

「そっか、夢か」

「全員同じ意見みたいですわね」

「理亜ちゃんが叶えたくてどうしても叶えられなかった夢を」

「そうですね。叶えてあげましょう。みんなで」

「聖良さんにもすぐに伝えなきゃ」

千歌先輩が電話するのと同じ様に私は穹に電話をする。

彼女は10コールくらいしてようやく電話に応答した。

「やべ、寝過ぎした」

「あのさ、昨日話したお願い。可能性じゃなくなったんだけど、頼まれてくれる？」

「もともとそのつもりで昨日のうちにもう移動してる。今、青森のサービスエリアで仮眠してたんだけど、寝すぎたみたい」

「青森!？」

「家のV-MAX借りてね。夜中じゃなきゃかつ飛ばせないしね」

久し振り風になったよ、と穹はからからと笑った。

「お願い。Saint Snowが最高のパフォーマンスをできるよ
うに手伝って」

「了解。そっちは？」

「Aqoursの最高のステージを届けるよ」

「それから？」

「それが終わったら、沼津に来て。私達の今後のこと、話をしよう」

「……了解」

穹ははじめから分かっていたのか、少しだけ息を飲んでそう了承した。

第百九十九話

暦の上では春だけれどもまだまだ肌寒い。

しかしながら、私はライブに向けての準備を急がなければならなかった。もちろん、私自身のライブではない。A q o u r s と S a i n t S n o w の二組だけのラブライブだ。

私はその幻の対決の片棒を担ぎながらワクワクする気持ちが沸々と心の底から沸いていた。

気分まま鼻唄を歌いながら作業すれば寒さなどどこ吹く風だ。

この感覚はやはり良い。こうでなければ私、明里穹は星とコンビなんて組んでいなかっただろう。

星はしばしば「穹には振り回されている」とか、「穹は天才だ」なんて言っているけれど、本当は逆だ。いつだって星が面白そうなことを思い付く。けど、思い付いた本人はそれを出来ないことだって思い込んでいるものだからすぐに言ったことを忘れてしまうのだ。

私はただそんな星が思い付いたことを実現しているだけだ。天才、ということについてはまあ否定はしないけど。

だから星が私の前から居なくなった時は本当に驚いた。

また私の予想もしていなかったことを、今回は私に話すこともなく実行した星を恨んだ。そして段々と怒りが沸いた。相棒気取りで私は星のことを全然把握していなかったのだから。星の勝手さと共に自分の迂闊さに怒ったのだ。

けど怒りつてのはとてもエネルギーがいる。一週間、一ヶ月、三ヶ月と時が経つに連れ、疲れて別のことを考え出した。

私達は楽しいことを沢山したし、思考実験みたいな話も沢山した。けれど、素朴な悩みだとか、不安だとか、そう言ったことは話していなかったのではないかと。

楽しいこと、私の思い付かないことはいつも星が発案だ。だから星と一緒にいれば退屈しない。そんな風にどこか星のことを自分より上の存在のように思っていたのかもしれない。けど、本当は違ったんだと気付いた。そう思うと。ストーン、と小康状態の怒りから別の方向

に向けてエネルギーが湧き出した。

星と話そう、探そうと。そうして探さだして、けどまだ星は自分自身に折り合いがつけられていなかった。星は折り合いを付けることは無理かもしれない、なんて顔に書いてあったから私はそんな星に乗っかった。

いつたって星は発案で現実的にするのは私なのだから今回もそうしたので。

私の課題に応じて行くことで星は自分自身に折り合いが付けられてようやく今に至るのだ。楽しまなければ損である。

「よし、即席にしては上出来でしょ」

私はバイクのライトの前に取り付けた簡易映写装置をゆっくりと回す。映写装置は本当にちゃっちゃい。自撮り棒に中心を刺された円盤状のピニールシートに青と紫で雪の結晶の絵柄を描いたもののだが、バイクのライトから光を通すとうっすらとその色の模様が写し出される。円盤をゆっくりと回してやればまるでスクリーンセーバーのように模様が一定の流れを描く。

私は背景となる旧函館区公会堂に映る様子を見ながらバイクの位置を微調整して準備を終えた。

今回の急造ライブは都合によりスマホのカメラでの撮影になる。そのため見えるのは Saint Snow の二人を中心とした狭い背景のみだ。だから急造といってもちよつとした工夫さえすれば映る範囲くらいは演出のしようがある。

聖良さんには函館に到着前に楽曲を提供してもらい演出のタイミングは整えた。

あとは光度の高い懐中電灯を収束仕様で使えばスポットライト代わりに出来るだろう。これは出だしでやるだけだから手作業だ。

私はホッと一息吐いて束の間の休憩をする。

結局函館まで来ても突貫作業。理亜ちゃんにバレないように聖良さんと場所を打ち合わせ、場所を提供していただいた旧函館区公会堂さんとの交渉を行い、閉館までに細かい資材を買い、閉館後に準備をしたのだ。だが、そのお陰もあり間に合った。

Aqoursと聖良さんの取り決めた対決の時間である夜明けに間に合ったのだ。

なぜそんな時間を指定したのか伺ったところ、理亜ちゃんは毎朝ラウンジングをする時間であり、余計な人目を気にせずに話せるタイムラグだと言うこと。そして、このライブが理亜ちゃんにとって転機となるような、そんな願いを込めて夜明けにしたらしい。

「はあ、これでお終いか」

たぶんだけれど、星とこうやって何かを出来るのは春休み中ではこれが最後となる可能性が高い。そして、その後はしばらく私達は会えない。

どうしたって距離の問題、日常生活の問題があり、私達はコンビとして濃密な活動をするにはどう考えても不可能なのだ。

そんなこと最初かは分かっていた。

星が自分で出来ないと思っっていることを現実的にしてきた私だ。すぐに結論は出ていた。でも星はその結論を出そうとしなくて、だから私は待った。

「……………」

そんな風に物思いに耽っていると、間も無く聖良さんがやって来た。

彼女は青みの強い紺を基調とした高校の制服に身を包み、その手にライブ衣装とマイボトルを持っていた。

「お疲れ様です。それとありがとうございます。こんなに寒いのに」

聖良さんはそう言っつてマイボトルを渡してくれたので私はあるがたく中に入っていた熱々の玄米茶を啜った。

「良いってことですよ。この後は遠慮なく鹿角家に ご厄介になりますから」

今回の発端となった聖良さんはそれでも申し訳なさそうに首を振った。

「本当は姉妹のことなんて姉妹で解決することなんです。ですが、私はスクールアイドルとしてはそれなりに優秀でも一人の姉として、それほど優秀ではないみたいなんです」

聖良さんは懺悔するように語った。

理亞ちゃんが姉離れ出来ないこと、人に強くあたってしまうこと、本当は臆病なのに強がってしまうこと、それを分かっているながら欠点を克服させられなかったのだと言う。

「そうですか」

私はAqours面々ほどSaint Snowの二人とは交流が無い。だから聖良さんの言葉にどう返したものか分からない。分からないけれども一つ言えることはあった。

「欠点を克服させられなかったのかとしれないけど、長所は伸ばせたいでしょ？理亞ちゃんが望んでいた、スクールアイドルとしての理亞ちゃんという存在を一度はラブライブ決勝にまで到達出来るくらいに引き伸ばしたんでしょ？なら、何も出来なかった訳じゃないと思いますよ」

ここに来るまでにSaint Snowのライブ映像は全て目を通した。

そこには姉妹だからこそその全幅の信頼感があったし、楽曲には二人三脚で走ってきた説得力があった。

認められ頂点に立ちたい渴望、暗中模索の心碎かれるような葛藤、例え昨日までの自分から外れても歩みを止めない覚悟。それは二人の生き様だった。どうしようもなく姉妹のリアルそのものだった。

信頼のない、ダメな姉と問題を抱えるだけの妹が出来るものでは決してなかった。私はそう感じている。

「……………ありがとうございます」

聖良さんはふっと、力が抜けたように笑ってくれた。

それから間もなくして、遠くで誰かが叫んでいる声が聞こえた。その声は今にも裂けてしまいそうな悲しい響きがあった。聞き覚えのある声、理亞ちゃんだ。

おそらくはランニング前後に何かあったのか、その感情の爆発は文字通り走り出し、お誂え向きにも私の居るこの旧函館区公会堂前の前の通りまで彼女は来た。

理亞ちゃんのこととはランニングから帰ったらここまで来るように

仕掛けをしていたのだが、ちよつと予想していた展開とは違うけれども、理亞ちゃんが来たのだから後は実行あるのみだ。

「では行つてきます」

「武運を」

聖良さんはスマホで千歌さんと通話状態にして、息も絶え絶えな理亞ちゃんの元に向かった。

「姉様。その格好、どうして？」

聖良さんの登場とその格好に驚く理亞ちゃんに聖良さんはスマホのカメラを静かに向けるのだった。説明はこれで十分だとも言うように。

「それでは！これよりラブライブ決勝、延長戦を行います。」

「え？」

「決勝に残った二組を紹介しましょう。浦の星から現れた超新星！初の決勝進出ながらその実力はトップクラス。スクールアイドル A q o u r s !」

「おー」

「そして、もう一組は北の大地が生んだスーパースター S a i n t

S n o w !」

テレビ電話の声が私のところまで響いてくる。

実況しているのはどうやら月さんのようだ。

スクールアイドルイベントで人気の司会のお姉さんのようなノリだ。

「今から私達だけのラブライブ決勝を行います。もし決勝の舞台に立てたら、この衣装と、ダンスと曲だつて決めてましたね」

「姉様」

聖良さんから渡される衣装に戸惑いの表情を浮かべる理亞ちゃんにはぎゅつとその衣装を胸に抱いた。それを着たい。でもその資格が自分にあるのかと。

「もし、A q o u r s と競うことになったら、決勝のステージに立つことが出来たら、あなたに伝えようと思っていた」

「……………姉様」

「泣いてる場合じゃないですよ」

直接的に言わなくても伝わる。

戦う舞台が変わっても、今から立つステージはラブライブ決勝なのだ。

ならばやることは一つだと。

理亞ちゃんもそれが痛いくらいに、痛すぎるくらいに分かって涙する。

「一緒に進もう、理亞ちゃん。甘えてちゃダメだよ。理亞ちゃんや花丸ちゃん、善子ちゃんと出逢えたからルビイも頑張つてくれたんだよ。ラブライブは……遊びじゃない!」

見る人が見ればただの茶番。栄光も称号もないこの戦いは得られるものなんて何もない。誇りと夢を除いては。

「ふふ」

「歌いましょう、二人でこのステージで、Aqoursと全力で」

だから遊びじゃない。その誇りとそして夢を賭けて全力で二人はこの夜明けを彩るのだ。

「きつとひとりじゃない 夢の中へGo」

迷いながら Ready?Go!」

響く重低音、歓喜に彩られる力強い理亞ちゃんのラップが間も無く来る夜明けを告げる様に空に高鳴る。

「強さを求めたら 弱さも受け入れてみようよ」

その聖良さんの歌は彼女の答えだ。

ストイックさを突き詰め、それでも獲られなかった頂点の座。足掻いて、足掻いて、その先に向き合った自分達の弱さ。それを知ったからこそ新しい自分が見えた。

言葉の端々から見える。彼女のこれまでが。言うなればLove Live daysが。

「Believe again すべてを抱きしめながら

Believe again また始まるんだ Shout

my song!

本気だつて言わなくつて きつと伝わるよ

何度でも熱くなれ 自由になれ

Believe again また始まるんだ (Yeah) Yeah!
(Yeah!) Ah 冒険は終わらないよ Let's go

もう一度信じて!

それは自分自身に言い聞かせるように、そして目の前の大切な人に言い聞かせるように力強く木霊する。

突き出された拳と拳。それはもう一度羽ばたく誓いのように私には思えた。

私もまた心の中で拳を突き出しながら Saint Snowのパフォーマンスを彩る。

これは紛れもなくライブ決勝だった。そしてこの楽曲は優勝を賭けるに相応しい、紛れもなく渾身の一曲だった。

ならばそのパフォーマンスに相応しい、演出を私にするのだ。

決して派手な仕事ではない。けれども、私はこの演出を出来て誇らしかつた————

「今のこの瞬間は決して消えませんが、Saint Snowは、私と理亜のこの想いは、ずっと残っていく。ずっと理亜の心の中に残っている。どんなに変わっても、それは変わらず残っている。だから、追いかける必要なんてない。それが伝えられたこと」

間も無くパフォーマンスを終えた聖良さんが理亜さんに伝える想い。伝えたくてもその機会が失われてしまった想い。

それは確かに伝わったのだろう。ここに来たときの悲痛さの声はなく、涙に濡れた表情でもなく、笑顔と嬉し泣きの混じったとても素敵な表情を浮かべる理亜ちゃんを見ればそれが分かった。

それを見守りながら私は思った。
星の答えを聞いたとき、私はどんな表情をするのだろうか。
私は夜空に上っていく紫色の羽を見送りながらそう、思ったのだ。

第二百話

画面の向こう側に広がる景色はとても力が満ち満ちていてSaint Snowらしいステージだった。それは例えるならそう、夢のような景色だった。面白味の欠片もない言い回しになってしまいうけれどもそれ以外に例える言葉を私は知らない。

理亜ちゃんはAqoursのみならずと同じだ。卒業する頼れる姉（先輩）の後をどのようにしていくのか悩んでいた。もちろん方針は決めていただろうけれど、どこかこれまでと同じものを望んでしまっていた。

9人のAqours、2人のSaint Snow。それぞれ心の中にあるがゆえにそれと同じ形を望み、けれどどうしようもなく足りないことにぼつかりと心に穴が空いたような、そんな気持ちだったのだ。

端からAqoursを見ていた私ですらそうだったのだ。当事者はどれ程の気持ちだったのか察してあまりある。

だけど私達はイタリアで鞠莉さん達の姿を見て、言葉を交わして、一緒にパフォーマンスをして感じたのだ。姿は隣から無くなっても、あの時の私達は無くなったりはしないのだと、心の中に想い続ける限りあり続けるのだと。

みんなが居て今の自分が出来たと鞠莉さんが母親に話したように、私達もまた積み重ねたものがあるからこそ今があり、その積み重ねは消えないのだ。

それに気付くのにイタリアまで行くことになったけれど、Saint Snowは、理亜ちゃんはそういった切っ掛けがない。

自律しようと姉にもあまり頼っていなかったようで、孤立していたのだ。きつと堂々巡りして、頭の中が煮込んだスープのようぐるぐるっとしていたに違いない。

けれども、きつと今回のこのラブライブ決勝延長戦はきつと理亜ちゃんにとつての切っ掛けになった筈だ。

1スクールアイドルがラブライブ決勝延長戦、なんて言ってもお遊

びだと常の理亞ちゃんならば言うだろう。けれども自分が認めた、そしてラブライブ優勝を果たしたAqoursからの発案だからこそこれは遊びじゃないと伝わったのだ。今シーズン、唯一ラブライブ決勝延長戦を申し込める資格のある、Aqoursだからこそ。

この勝負には勝敗すらない。あるのはただ、起こり得なかつた可能性を精一杯楽しむ気持ち。そしてラブライブを優勝すること以外の未来を掴もうとする貪欲なる気持ちだ。

「はあ、やっぱり楽しいなあSchool idol」

「ですが、今度こそ、これが最後ですわよ」

「だから、最後に伝えよう。私達の想いを」

最後、という言葉はけれども言葉に似つかわしくない響きがあった。寂しさは似合わない、それに最後だけれど、距離が離れてもずっと続くものがある。それが分かっているから寂しさよりも楽しさが勝っているのだ。

だから多くは語らない。言葉は大切だけれども、今はそれよりも勝る表現の方法があるから。

今はユメを語るよりもユメは歌う方が適している。

“Ah どこへ行っても 忘れないよ Brightest Melody”

円陣を組んで向かい合っていたAqoursはその中心に舞い降りた羽を受け取るように手を水平に掲げ、そしてまたどこか遠くへと飛ばすように天に指を掲げた。どこか遠く、同じように夢を胸に抱いた誰かのために、羽を広げるように。

曲は既に歌詞に語られたように“Brightest Melody”。輝きに満ちたAqoursの集大成のひとつだ。

“いつまでもここにいたい”

“ずっと歌おうみんな”

この曲の特徴は掛け合いのパート分けだ。

卒業する3年生のパート、そして時代を担う1年生、2年生のパートとの掛け合いがまるでエールの送り合いのようで、けど、お互いに掛ける言葉も掛けられる言葉も言われずとも通じあっているような、

けど言葉にしたいという感傷。それがすぐく伝わってくるのだ。

“キラキラ ひかる夢が 僕らの胸のなかで輝いてた
熱く大きな“キラキラ” さあ明日に向けて

また始めたい とびっきりの何か？ 何かを！

それは なんだろうね 楽しみなんだ”

あの時、みんなが目にした景色、そして夢見た景色。それらはきつと輝いていた。いや、それをずっと胸に抱いていれば “キラキラ” 続けるのだ。

その共有する “キラキラ” があればこれから起こる何かだって心配なんかよりもずっと楽しめる。

そんな前向きな歌が日の出と共に歌われる。

礼装のようにパンツスタイルの3年生はA q o u r s カラーの青を身に纏い、1、2年生は新しいA q o u r sのこれからを担う決意を象徴するように日の出と共に青を脱ぎ、その身には純白が輝いていた。

“あたらしい夢 あたらしい歌 つながってくんだ”

それぞれ向かう方向は違っても大丈夫、繋がりは途絶えない。そう象徴するような振り付けでこの曲は締め括られる。

その強い信頼、メッセージを目の前で見て私は細やかながら勇気を貰った。

穹とのこと、父親とのこと、みんなとのこと、これからのこと。全部上手くいくなんてことは無いかもしれない。苦難だつてあるかもしれない。でも、これまでみんなから貰った沢山のもの。そして今受け取ったもの。それがきつと私に力を貸してくれる。

穹もこのラブライブ決勝延長戦を間近に感じてきつと思つたことが沢山あるだろう。だから次に会つた時には沢山語り明かして、それで今後のことも話そう。私はその決意が完全に固まつた。

第二百一話

あのライブ以降、理亞ちゃんから私達に連絡は一切なかった。語るべき言葉は歌として既に届けたとでも言うように。実に理亞ちゃんらしい。

でも実は私は知っている。理亞ちゃんは無事に元気を取り戻したらしく、一皮剥けたというか、開き直ったというか、とにかくスクールアイドル活動に前向きに取り組んでいると穹からこっそり連絡があったのだ。

穹はせっかく函館まで来たのだから今度こそ観光してから帰ることので、鹿角家を拠点にして数日間、函館を楽しむらしい。

私達はこれから自分達のライブの準備だ。

とは言え、去年浦の星女学院の学校説明会のために特設ステージを組んだからノウハウはあるし、手配する資材なども分かっているため非常に順調に準備が進んでいる。

四五六トリオ先輩が手配関係や人員の確保に奔走してくれたからこそだ。

浦の星女学院の良いところはやっぱりこういった総力を挙げて取り組めることだろう。そんな素敵な学校にもう通えないことに一抹の寂しさを感じながらも、これから通う静真高等学校の人にそゆな素敵なところを分かってもらい、共有できるようになれば良いなとちよつとした希望を感じている。

そう。小さいながらも今の私達には目標があるのだ。そして、そのための原動力になるものが何なのか、もうみんな分かっている。

週末に控えたAqoursのライブ。そして私と穹の今後についての話。昔ならそれを心配に思ったりしただろうけれども、今は少し楽しみに思えるようになった。

そして、私は自分に残った課題にようやく手をつけた。

私は父親と向き合おうと決めたのだ。

鞠莉さんが母親と向き合ったように。

Aqoursがこれからの自分達と、そしてこれまでの自分達と向

き合ったように。

S a i n t S n o wが過去の悔いと向き合ったように。

穹が私と向き合ったように。

私は私の問題に蓋をすることを止めた。

だけどやっぱり私は臆病で、面と向かつてはとても冷静に話せる気がしないからこうして今、私は手紙を書いている。

これまで交流を極力避けていたのだから寧ろこれくらいの方が距離感としては正しいのかもしれない。直感的に言ったにせよ果南さんのアドバイスの確だった訳だ。

もともと短くなる筈がないと分かっていたが、書き始めてみると筆が進むものだ。

事の始まり。穹との関係。描いた未来。実現を拒まれた悲しみ、怒り。穹との別れ。沼津での生活、浦の星女学院。A q u o r s、S a i n t S n o w。書けば書くほど私はこれまで伝えてなかった情報量の多さに驚かされた。これほどまでに私は父親と断絶していたのかと。

だからといって私のことを伝えないことには意思表示ができない。

私は次のライブの準備の傍らひたすら手紙を書き続けた。

「進んでるっ。」

「お陰さまで」

暫定的に宛がわれた静岡高等学校 浦の星女学院分校の校庭の片隅にある木陰で休憩がてら手紙を書いていると同じく休憩していた千歌先輩が顔を覗かせてきた。

よっ、と私の隣に腰を下ろす千歌先輩に私は手紙を書く手を一旦止めた。

「ごめんね。邪魔しちゃったかな」

「いえ。本来は家でやるべきことですから」

「間に合いそう？」

「手紙自体は。でも人の都合なんてそう易々と変えられませんか」

私は週末のライブにできれば父親に来て貰いたいと希望するつもりだ。それは私が関わった事柄を伝えるとのだから。

でも分かっている。社会人の、それもそれなりの立場がある人はそんな急に休みなど取れないことくらい。

だけど、私は私が大切にしているものに父親を招く。その行為は今の私にならなければできなかつたことだと思っっているから、例え無謀でも、来られなくても招くのだ。

「楽しそうだね」

「そうですか？」

「うん。初めて会ったときと目が全然違うもん」

「どんな目をしてたんです？」

「驚いてた」

「そりやいきなりスクールアイドルに誘われたらそうなりますよ」

「だよ。でも、単純な驚きだけじゃなくてすごく複雑そうだった。

怯え、とか？あと諦めとか。なんとなくね、スクールアイドルと、μsと出会う前の私に似ているなって思ったの」

「私が、千歌先輩と？」

「私は星ちゃんみたいに劇的なことは無かつたよ。でも、なんか色々よね、悩んでた時期があつたから。何か夢中になれるものはないかって、色んなことを試してみた。でも、なんかピンとこなくて……そんなことを繰り返してたら疲れちゃって、私ってなんもないのかなーって思ったりして」

千歌先輩は苦笑いしながらそう言った。

才能とか、そんなちんけなものとは根本的に違う。ただひたすらに夢中になれるものは何かを探す日々。慣れないことに常に身を置き、けれども続けられずにその時の仲間と距離を置くことを繰り返すのはどれ程の心労だったのだろうか？

けれども、その挑戦の日々は間違いなく今の千歌先輩を作り上げたのだろう。不意に不屈の精神の源を垣間見たようで私は少し呆気に取られた。

「…………千歌先輩ってホント人の事を考えてますよね」

「それ褒めてる？」

「どう受け止めるかはお任せしますよ。それよりも千歌先輩達の準備

はどうなんです?」

Aqoursは今回披露するセットリストも既に決まっているからなのか、練習にのみ注力するのではなくステージの設営なども手伝っている。

手伝ってくれるのはありがたいのだけれど、パフォーマンスの方は大丈夫なのか気になるところなのだ。

「準備は出来てる。きつと三年生が卒業してからずっと準備の時間だったんだと思う。だから、準備は出来てるよ。それに、ちよつとは肩の荷も下りたしね」

千歌さんは微笑ましそうに校庭でステージの仮設作業に取り組みみんなの姿を見る。その中にはAqoursの面々や浦の星女学院の生徒だけじゃない、静真高等学校の生徒もちらほらと見受けられた。

「週末のライブでのパフォーマンスどうこうって問題はたぶんもう無いと思うんだ。だから私達は、私達のこれまでと、そしてこれからのことを見せたいんだ」

ライブ決勝延長戦の日から日を追うごとに静真高等学校の生徒の協力者が増えていった。

どうやら月さんが無断であのライブの様子を投稿したらしく盛大にバズったのだ。

本気を、スクールアイドルは遊びじゃないと伝わったからこそ、きつと自然発生的に協力者が増えていったのだろうと思う。もっとも、無断投稿はかなりやらかした行為でSaint Snowは勿論らAqoursはそれぞれライブ運営から勝手なことをするなとお叱りを受けたのは余談である。

だから当初ライブをしようとしていた目的は既に達成されつつあるのだ。

「月ちゃん言ってたんだ。Saint SnowとAqoursのライブを見て自分達も気付かされたって。部活をする理由の根っこ部分は同じだったって」

「だからこれだけの人数が来てくれたんですね」

浦の星女学院も静真高等学校もそれぞれ生徒達の間にはもう壁は無い。今は身に付けているジャージや制服もバラバラだけど、向いている方向は同じだと、何も言わなくても伝わってくる。

「Aqoursとして何かを背負わずに純粹にライブをするのは初めてかもしれないね」

「そうかも。楽しみだね」

「はい。楽しみですね」

いつだってAqoursのライブは自分達だけの、自分達のためのライブでは無かった。

スクールアイドル活動を賭けるため。

廃校を阻止する大望のため。

何かの催し物を盛り上げるため。

浦の星女学院の名を残すため。

母親との確執を取り除くため。

今回はだからある意味でAqoursにとってのファーストライブ、いや、First Love Liveなのだろう。

「客席からみんなのこと見てますよ」

「うん……ねえ、星ちゃんはライブが終わったらどうするの?」

「続けますよ。私も……ライブを」

それはAqoursの活動とは違う形となるだろう。けれどもそれだってラブライブだ。

私の答えに満足したのか千歌先輩は休憩を終えて作業に戻った。

私もまた、父に宛てた手紙の続きに戻った。

第二百二話

そんな風に忙しく活動していたら気付けば明日はもうライブの日。

ステージの部品は全て完成し、明日は朝一で駅前の通りまで資材を運んで貰い、設営をする。

結局、もう浦の星女学院だとか静真高等学校だとか関係無く、様々な人が手伝ってくれるようになった。それは生徒だけじゃなく保護者も巻き込んだ。実際、今回準備のしたセットを運ぶのにトラックを出してくれるのは静真高等学校の生徒の身内の人だ。

私達のライブが決行される前にもう、浦の星女学院の良いところが伝わったのだ。

明日のライブは最早ちよつとしたお祭りだ。

当初の想定とは大分違った未来となってしまうたけれど、これも悪くないと、そう言える程度にはみんなこれまで歩みに自信があった。それはさつき、みんな最後の記念にと浦の星女学院の前に行つたときの言葉からよく伝わった。

目を閉じれば今でもその時の光景を思い出せる。

夕日に照らされた校舎。

ほんの少し開いていた校門。

Aqours 9人の背中。

それをちよつと後ろから見る私。

「何でここに来たの？」

問い掛ける千歌先輩の言葉はみんなで歌ったあの再会の日のこと。

「さあ？呼ばれたのかな学校に」

「でもちやんと会ってほつとしたずら」

色々な想いを共有して、偶然に偶然を重ねて、そして交わったキセキ。けれどもそのキセキは他力本願ではなく自分達で選び抜いたからこそ起こった偶然なのだ。

「あ、空いてる」

閉校式で閉じた校門。それをあの日、ほんの少しだけ開いてそのま

まになっていたようだ。

もしかしたら今日こそ学校に呼ばれたのかもしれない。そう思うと寂しさは無かった。

「大丈夫。失くならないよ」

もう閉じることを恐れない。閉校式の時、みんなで力を合わせなければ閉じられなかった扉を千歌先輩は優しく掴んだ。

「浦の星も、この校舎も、グラウンドも、図書室も、屋上も、部室も。海も、砂浜も、バス停も、太陽も、船も、空も、山も、町も。A q o u r s も」

閉校式の日が閉じることが終わりだとそう感じていた。でも今は違う。一度開いて、大切なものを再確認して気付けたんだ。

自分自身の心がそう思えたならそれは終わりではないのだ。

あの日々のことが繋がっているのであればそれは続き。終わりではないのだ。

「帰ろ」

千歌先輩は気負うこと無く校門を閉め、私達は走り出した。学校を振り返ることもなくだ。

振り返らなくても心に問い掛ければ学校の景色は直ぐに出てくる。みんなの顔も、思ったことも、感じたことも全部。

「全部全部全部ここに。ここに残っている。0には絶対ならないんだよ。私達の中に残ってずっと側にいる。ずっと一緒に歩いていく。全部私達の一部なんだよ」

スクールアイドル A q o u r s の発起人にしてリーダーの千歌先輩は思えば求道者だった。長いようで短かった旅の果てに、今、千歌先輩が語るのは彼女が体得した「イマ」の答えだ。

「だからー。ー。ーいつもはじまりは0だった」

「始まって、一歩一歩前に進んで、積み上げて」

「でも、気付くと0に戻っていて」

「それでも一つの一つ積み上げた」

「なんとかなるって、きつと、なんとかなるって信じて」

「それでも現実は厳しくて」

「一番叶えたい願いは叶えられず」

「また、0に戻ったような気もしたけれど」

「私達の中には色んな宝物が生まれていて」

「それは絶対消えないものだから」

「青い鳥がああ虹を越えて飛べたんだから私達にだってきつと出来るよ」

砂浜まで走った私達は夕日の沈む茜色の空と海、そして空に架かる虹を見た。

その景色はまるで私達を祝福するようで、それと同時にまだ途中であると突き付けているようだった。

それから私達は明日に備えて解散して、こうして私は自宅に戻ったのだが、私のすべきことは結局こんなにギリギリになってしまった。

一通の封筒。それを食卓に置いた。

それは私が父親に対して綴った手紙だ。

口では伝えられない、伝えきれない想いも手紙なら出来るのかもしれない。本当なら音楽で伝えたい気持ちもあるけれど、それはきつとまだ早い。するとするならばそう、穹と一緒にだ。

私はそう意気込んでリビングで茶を啜っていると、間も無く父親が帰ってきた。とは言ってももう夜もいい時間だけれど。

父親は私がリビングにいることに驚いたように目を見開いたけれど、相変わらずこう口にするのだ。

「ただいま」

「………おかえり」

そう返事をする、ますます驚いたようで口を半開きにしていた。

驚かせついでに畳み掛けてやろうと私はぶっきらぼうにテーブルの上の手紙を指差してこういつてやった。

「読んで欲しい。それで、読んでどう思ったのか、教えて欲しい」

それだけ言って私はそそくさとリビングを後にしようとし、部屋を出る直前に、本当にギリギリのところまで足にブレーキをかけられた。

「明日、沼津駅前の通りで学校のイベントやるから」

それだけついでに伝えて私は部屋に戻った。

物凄く独り善がりなだけで、気持ちがあふわふわとして、そしてよく分からない達成感があった。

何もかも戻るとも上手くいくとも思わないけれど、きつとこれまでよりかはほんの少しだけ良くなると、そう感じるのだ。

「次はどうしようかな？」

まずは父親からの感想を貰ってから。そう思えるようになってる程度には私は自分の中の怒りと折り合いがつけられたみたいだった。

第二百三話

その日は不思議な気持ちだった。

昨日との違いなんてそんな大きなものはないはずなのに、どこか違う気持ちだった。

ただ楽しみなだけじゃなく、こう、どこか浮わついたような、それでいてちゃんと地に足が着いたような、そんな夢見心地な気持ち。強いて近い表現をすればそんなものだ。

一言で言えば良い気分のまま設営やらなにやらしていたらあつという間に駅前はお祭り会場だった。

みんなで作ったA q o u r sのステージがあつて、屋台があつて、そこには浦の星女学院や静真高等学校の生徒だけじゃなくて大人も子供も居て、そして穹も来ていた。

「久方」

「そうだね。一週間そこいらだけ随分会つてなかった気がする」

「私達は会う度にそんな気分になってない？」

「そうかも」

私は穹の言葉に同意しながらも、心持ちに変化があったことに気づく。

「でもちよつとずつだけどき、そんな気分も変わってる」

「へえ?どんな風に？」

「最初は会うことが怖かったから長かった」

逃げたから。だから会わせる顔なんてなかったから、その時間は長かった。

「次に会った時は少しだけ会う決心をした。だから長かった」

思いがけない形での邂逅だったけれど、次に会うための準備をしていたから長かった。そして同時に短いとも感じた。矛盾するようだけれどそうとしか言えない時間だった。

「ラブライブ決勝の日に会った時はこれまでの日々を全て背負ってたから長かった」

自分の過ちも、それからの日々も全部背中に載せて、正面からぶつ

かろうと決意を固めてた。だからそれまでの積み重ねた長さがあつた。

「こないだ沼津に来た時は、ようやく対等に向き合えると思つて長かつた」

あの日ぶつけたこれまでと、それからを足した想いがあつたから。だから長かつた。

「じゃあ今回は?」

「もう全部、準備できたから。ただ楽しみで長かつた」

それを聞いて穹は満足そうに、それでいて少し寂しそうな笑顔で頷いた。

きつと穹も分かっているのだ。私が出した結論を。だけど、それを言うのはもう少し先だ。

「ごめん。二人とも音響リハ手伝つてくれない?」

「くれない?・・・紅?Xの?」

「いや、そういうのいいから」

設営、準備の陣頭指揮を執る四五六トリオ先輩から私達にお声が掛かる。全然そんな予定もそんなつもりも無かつたのだけれども穹はギターケースを担いでいるし、私もハーモニカを持ってきている。

「じゃあ、」

「お言葉に甘えますか」

どうせあの三人のことだ。最初からそのつもりだったのだろう。

同世代が浦の星女学院と静真高等学校の制服を身に纏っている中、穹だけは何故か着込んでいた 音ノ木坂学院の制服姿だ。

そんな私と穹の異色の組み合わせの2人が唐突にステージに上がると少し注目を集めたけれど、マイクテストする様子を見て、関心はすぐに霧散した。

「それじゃあ何する?」

「前座ですら無いけど何しようか?」

カバー、オリジナル、インスト、その気になればなんでもござれな私達だけど、こう唐突にこられるとそれはそれで困るのだ。

今日はA q o u r s が主役だから主役を立てる選曲。尚且つ、ラブ

ライブに縁のある選曲が良い。

「あ、ならー」

「そうだね。ここは私達のステージじゃないし」

「どうやら私と穹の意見は一致したらしい。」

穹はギターでキャッチーなメロディーを繰り返し鳴らす。それは本来4度目を迎えた時に動き出すのだが、穹は繰り返し続ける。

スクールアイドルを知るものならどこかしらで耳にしたことのあるイントロ。穏やかで、けれども情熱的な音楽。

「いつかまた、みんなの前で」

「その時は私達のステージで」

「私達の音楽で」

「楽しんで」

私達はステージに並び立って、お互いに前を向いたままそう言葉を交わした。

顔を合わせないのは分かっているからだ。私達の道が交わる時はもつと先のことだと。

「それじゃテスト演奏」

「聴いてください」

「僕らのLIVE 君とのLIFE」

かのμ'sが、高坂穂乃果からはじまったあのスクールアイドルが初めて9人揃って披露した楽曲。μ'sのはじまりの象徴。

ともすればチープに聴こえてしまうギターソロのリフレインは私達のタイトルコールで解放された。

跳び跳ねながらギターを弾く穹。

私も負けじとステップを刻みながらハーモニカを吹き鳴らす。

「確かな今よりも 新しい夢つかまえない」

かつて穹と過ごしていた頃に当たり前のように思っていたこと。けれど、自らの行いからそう思えなくなった。それをみんなが——μ'sに憧れてはじまり、自分達の輝きを追い、そして自分達の答えに辿り着いたみんなが居たからもう一度そう思えるようになった。

「まぶしい明日抱きしめにいこう 全部叶えよう」

明日とは未知のこと。不確定であやふやで、だからこそそれをまぶしいと定義出来るのは自分次第だ。その感覚を持てれば、少しの別れも怖くはない。

「答えなくていいだんわかるから 胸にえがく場所は同じ」

穹もそれを分かっている。言わなくても分かっている。けれどもやっぱりこの「リハーサル」を終えたら言うんだ。あの日出来なかつたこと。ちゃんとやるんだ。だから今は最高のリハーサルをしよう、穹。

「あこがれを語る君の ゆずらない瞳がダイスキ！」

音響テストローリーリハーサルだったのに、スクールアイドルが好きな子達がアウトロでコールをくれる。私達を飲み込まんばかりのコールに私達も負けじと演奏し、そして最後の音と共にポーズをピツタリと決めた。

今日はお祭り。無礼講の雰囲気は温かく、ステージの前にいるみんなは私達に拍手をくれる。

その拍手を貰うのはちよつと早いんだけど、いつかまた貰うその日を夢見ながら私は穹と向き合つた。

「穹」

「なに？ 星」

「私達はA q o u r sみたいに活動は出来ない」

「うん」

「だからー！ー！ーそう、修行！腕を磨こう。それで高校卒業したらまた一緒に」

私達はお互い分かっている。分かっていた。とつくのとうに。

物理的な距離はやっぱり私達には埋めがたくて、昔のように戻ることとは出来ないのだと。

けれども新しい道なら探せば幾らでもあるのだ。

私達がお互いの存在を感じて音楽を続けていけばどこかでその音は繋がるのだ。

「やつと言えたね」

「やつと言えた」

「星の口から、やつと切りの良い言葉が聞けた」

「ごめんね、待たせて」

「お見通しだったからさ。私じやなきや絶交もんよ？」

「分かってる。それより下りよ。もう十分楽しんだし。Aqoursにステージ譲らなきゃ」

私達はリハーサルの間、背中に背負っていた9色の虹の装飾の真ん中を抜けてバックヤードに戻った。

虹というのは光の屈折でしかなく、その麓には決してたどり着けないことから、不可能の象徴でもある。

けれど、こうして虹の下を潜れたのならばどんなことでも可能なのではないかと思った。

「Aqoursーーーーー!!」

「「「「サンシャイン!!」」」」

そしてバックヤードで円陣を組んだAqoursに私達は道を空ける。

ここは私達のステージじゃなかったけれど、いつか来る、本当の私達のステージを想像させてくれた。その事に無言の感謝と共に私達はAqoursを見送り急いで客席に向かうのだった。

第二百四話

特設ステージの前には多くの人が出た。見知った顔も、見知らぬ顔も、鞠莉さんのお母さんもだ。それに果南さん、ダイヤさん、鞠莉さんも。沢山、沢山いた。

「素敵なステージでしたわ」

満足そうに声を掛けてくれたのはダイヤさんだ。

スクールアイドル大好き星人のダイヤさんからお墨付きが貰えたのだから自信をもつていいかもしれないけれど、ひとつ訂正しなければならぬ。

「ステージじゃなくてテストですよ」

「そ。私達のステージは今、この時、この場所ではないので」

私に続けた穹がそう言うと言とダイヤさんは驚いたように目を見開いた。それはきつと不確定な未来を語る穹の言葉に誇張とか虚飾とかが無かったからだろう。

本気で私達はまたどこかでステージに立つと、そう信じて実現しようとしているのが伝わったのだろう。

「答えを出せたのですね、2人で」

「So happy! なら、2人のステージ楽しみにしてるね」

「ちゃんと連絡してよね。世界の何処にいても駆け付けるから」

「果南さんの場合、本当に走って、泳いで来そうで怖いですね」

3人はそれ以上のことは聴かなかった。

私達2人が決めたことなら心配はないと認めて貰っているようにそれが少し嬉しかった。

私はさりげなく周囲を見回すけれども見える範囲に父親の姿は無かった。しようがない。唐突に過ぎたのだから。

ふと、着信を知らせるスマホの震えに気付いて取り出して見ると、ちょうど父親からの連絡だった。

やはりというか、仕事だということなのだが、気になってテレビをつけていたらローカル放送にここの様子が映っていたらしい。

今度はちゃんと前もって予定を知らせなさいと小言が書かれてい

たけれど、その小言が今では少し嬉しかった。

「そろそろA q o u r sのステージにc o n c e n t r a t i o nしよ。MCも終わるみたいだし」

鞠莉さんの言うようにそれぞれのメンバー紹介と今回のライブ、いや、お祭りについての感謝と諸注意が終り、いよいよライブが始まるようだ。

ステージに立つ6人にはあの部活説明会の時のような不安そうな表情は無かった。

気負い過ぎたり、逆にリラックスし過ぎたりしない、ライブに望む際の自然体。それは9人でステージに立っていた頃と通じるものがあった。

「素敵な衣装だね」

「はい。きつと果南さん達にも似合ってると思います」

白地の中に仄かに各メンバーカラーの花が描かれており、それを見ているとみんながここにいて、そう言っているような気持ちになった。

レース生地のアしらわれた一繋ぎの衣装は柔らかな印象で、背負う片翼と相まって天使のような、そんな可憐さがあった。

ステージに立つみんながその翼に込めた想いを察するならば、今私達の横にいる3人が衣装を着たのなら両翼が生えているのだろうと、容易に想像出来る。それはきつと私だけじゃないだろう。

ステージの前に詰めかけた人の中にはすでに涙目になっている人もちらほらいて、たぶん同じように想像したのだろうと思う。

「それでは聴いてください」

響くのはどこか懐かしい昭和末期から平成初期の頃に流行ったギターサウンド。

とても耳馴染みが良くて、一步一步ゆつくりと進むような、そんな前向きなサウンドだ。

〴〵ひとつひとつの思い出たちが 大事なんだ

ずっとキレイな 僕らの宝物だよ

優しい歌声で想起するのは駆け抜けた日々の思い出。みんなそれ

それが持っている大切な日々の記憶。

“会いたくなったら 目を閉じて

みんなを呼んでみて そしたら聞こえるよ”

その日々の記憶や思い出は輝きに満ちていて、それに浸ることがとても心地よい。けれど、心地よいだけじゃ駄目なんだ。貰った大切なものを、次に飛ばさなければ、駄目なんだ。

“忘れない 忘れない 夢見ること

明日は今日より夢に近いはずだよ”

一言目は自分に向けて、そして二言目には外に向けて誓う言葉は優しい響きの中に力強さを生んだ。

ステージの下から見えていて思う。

ああ、A q o u r s はやっぱり9人なのだと。

この楽曲は再スタートでありつつも、これまでの続きなのだと。

かつて一緒に練習した姿を知っているからだろうか？見えるのだ。

9人のA q o u r s がステージで舞う姿が。

“ひとりひとりは違っていても 同じだったよ

いまこの時を 大切に刻んだのは”

きつとこの部分は鞠莉さんが似合うだろうな、とか。

“ぜったい消えないステキな物語”

3年生3人の仲を繋いだダイヤさんなら心の底からの響きを乗せられるだろうなあとか。

“みんなとだからできたことだね”

果南さんなら持ち前の明るさで達成感を全身で表現するだろうなあとか

“すごいね ありがとう”

やっぱり3人のハーモニーは纏まりがいいと思っただろう。

気付けば体を左右に揺らして私達はリズムを取り、心が音楽に溶けていくのが分かる。

“止まらない 止まらない 熱い鼓動が

君と僕らはこれからも つながってるんだよ

止まらない 止まらない 熱くなつて

あたらしい輝きへと手を伸ばそう”

目に浮かぶのは9人が背中合わせに円陣を組み手を取り合って歌い、そしてそれぞれの輝きに向けて手を伸ばす姿だった。

それは単なる私の妄想なのだろう。けれどもそのただの妄想を見せるのは他ならないAquorsのみなんだ。

みんなは歌に、パフォーマンスに自分達を表現しきっているのだ。その姿は輝きに満ちていて、そしてこれからもきつと輝き続けると、そう思わせるものだった。

「ねえ、星。この曲って、何て曲だったっけ？」

「この楽曲はねー」

「……Next SPARKLING!!」

それは輝きを追い続けた9人の少女達のストーリー。みんなで叶えた物語の結晶だった。

あとがき

これまで長い間お付き合い頂きありがとうございました。

音楽や躍りといったパフォーマンスを扱う作品を小説で、というのは私としては冒険的な取り組みでした。そのためライブパートは歌詞に依存する描写が殆どとなってしまった感は否めません。

けれどもラブライブ！の物語に寄り添う歌詞はこの作品の醍醐味だと思っておりますので後悔はありません。

また、ラブライブ！物の小説としては男性主人公の恋愛ものがトレンドであるとは理解していますが、例え流行らずとも自分の書きたいものを最後まで書いたことを嬉しく思っています。

個人的にラブライブは生き方を魅せる作品ですので、恋愛もまた人生の一部として描くことは間違いないではないでしょう。ただ単に私の経験不足と興味が惹かれなかったに過ぎません。

さて、皆様ラブライブは好きですか？

この作品でラブライブを知って原作を見るようになった、はまった、という方がいるならば一ファンとして、私の活動には意味があったと胸を張って言えます。

ですので、もし当方の作品でラブライブ！を知ったという方は是非一言感想をいただければと思います。

私の描くラブライブ！サンシャイン!!はこれにて終了となりますが、ラブライブ！シリーズはまだまだ続いていきます。彼女達の走るスピードは物凄く早いですよ？これまで後追いでいた方は心して追い掛けてください。なにより、ラブライブ！シリーズを追い掛けて得られたものを自分の人生を輝かせるための力にしてください。

私は好きが高じて小説を書くようになりましたが、下手なりに文を書くことで多少なりとも言葉を覚えられました。また、仕事で文を書くことにも活かせるようになりました。

そして働いて生きていくだけだった自分を変えようと転職だつてすることができ、生活水準を少しはマシに出来ました。

たかが作品、されども時にそれは人の心を、体を動かします。

皆様がそんな作品と出会えることを心から祈っています。あわよくばそれがラブライブ！シリーズならばこんな嬉しいことはないでしょう。

今後の予定ですが、未定です。

ラブライブ！シリーズをまた書くのか、はたまた別の作品を書くのかわかりません。しばらくは遠ざかっていましたが、他作品の二次創作を読みふけるのもいいかもしれませんね。

皆様と小説を通じて会うのか、リアルのライブ会場で会うのか定かではありませんが、いつかまたお会いしましょう。

最後になりましたが、ついでに、感想、評価をいただければ当方の小説を通じてラブライブ！シリーズの宣伝をしやすくなりますのでご協力いただければ幸いです。

当二次創作小説の番外編、特別編などにご興味があれば作者ページから確認くださいませますようお願いいたします。